

I S D O O

負け狐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『世界最強のIS研究者と世界最強のIS操縦者による世界最強の我侪集団』と称される私設IS組織『しののの』。

そんな組織に所属する見習いISパイロット織斑一夏と篠ノ之箒。

一人前になる為に、そしてその場のノリと勢いで、彼等は今日も今日とて感化された仲間達と共に無茶をやる。

※一夏と箒が周りを巻き込んで世界最強の馬鹿二人を目指す話

目次

N000	「作り直してもらったんだ」	1
N001	「幼馴染だし」	13
N002	「大丈夫大丈夫」	26
N003	「俺と、勝負だ!」	45
N004	「ただの勘だ」	59
N005	「良くやったな」	79
N006	「強くなつたんだもん」	95
N007	「弱くなんかない」	112
N008	「当たり前じゃない」	129
N009	「……違わない」	146
N010	「お手並み拝見といこうかな」	163
N011	「犯人の癖に、さ」	179
N012	「転校生を紹介します!」	199
N013	「友達だからね」	215
N014	「お前が嫌いだ」	230
N015	「認めない」	247
N016	「そう簡単にはいきませんわ」	260
N017	「ラウラだ」	272
N018	「俺と組んでくれ!」	288
N019	「楽しんでいこうよ」	304
N020	「嘗めるんじゃない!」	319
N021	「何ムキになつてるんだろ」	334
N022	「怨んでいるだろうな」	349
N023	「やれるだけやってみますか」	363

N 0 2 4	「諦め悪い女なのよ！」	378
N 0 2 5	「し過ぎるくらいが丁度いい」	393
N 0 2 6	「待て」	408
N 0 2 7	「当たり前だよな」	422
N 0 2 8	「友達になれ！」	437
N 0 2 9	「クロエ・クロニクルだ」	452
N 0 3 0	「気安く呼ばないでくれるかな？」	467
N 0 3 1	「手元が狂った」	481
N 0 3 2	「ヒョッコなのさ」	497
N 0 3 3	「誰が情けないって!?!」	511
N 0 3 4	「やめます」	526
N 0 3 5	「操り人形になるのは、誰？」	537
N 0 3 6	「決まっているではないですか」	547
N 0 3 7	「そうだね」	560
N 0 3 8	「やりたいなら、やればいい」	575
N 0 3 9	「改めて、自己紹介をしようか」	587
N 0 4 0	「さようなら、デゼール」	602

NOOO 「作り直してもらったんだ」

彼女は少し変わっていただけで、紛れも無く普通の少女だった。日常に起きる出来事を喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。そんなことが出来る少女であった。

それは、彼女が他人よりも優れた能力を持っていると分かってからも変わらなかった。妹と、親友と、親友の弟。彼女の大切な人達と共に過ごし続けた。ただ、その頃からその能力——人並み外れた頭脳を目当てに寄ってくる人間が増えてきたことで、彼女の心は少しだけヒビが入った。

やがて思春期に突入した彼女は、自身の頭脳を自分の思うままに使用するために動き始めた。見詰める先は、空。果てしなく広がる蒼穹。無限に広がるその先に、彼女は自分の目的地を夢想した。

その後の彼女の行動は実に素早かった。幸いにして、欲の皮の突っ張った大人達に言われるままに発明した品物の特許を両親が自分名義で取得してくれていたおかげで、若干十三歳にして使い切れない資産は持ち合わせている。誰にも言われることなく、自分の好きな発明を行う余裕は充分にあった。義務教育の真つ最中ではあったが、彼女の『特別性』故に不登校でも文句は言われなかった。誰にも邪魔されること無く、彼女はただひたすらに空を目指した。妹と、親友と、幼馴染へとランクアップした親友の弟は、そんな彼女を喜んで支えた。

そして一年と少しの時を経て、彼女は一つの翼を作り上げる。眼前に広がる無限の蒼穹を自由に飛び回る、人の持つ可能性の翼。単体機能完結型宇宙探査用マルチフォームスーツ。インフィニット・ストラトス。シンプルな白いその装甲をそつと撫でてみると、背後から聞き覚えのある声が聞こえて、彼女はゆつくりと振り向いた。

「束、また『白騎士』を見ていたのか」

彼女——篠ノ之束がちーちゃんと呼んでいるその声の主、親友である織斑千冬はそう続けた。完成したその翼を、彼女はここ数日飽きることなく眺めていたのだ。自分が、自分の意思で、やりたいように作ったこの存在を、どうして見飽きるものがあるのか。そう目の前の

親友に熱く語る彼女を見て、千冬は苦笑を浮かべる。分かったから、少しは外に出ろ。そんな彼女の言葉を受けて、しようがないなとラボの電源を落とした。

「そういえば、いつくんと箒ちゃんは？」

親友の弟にして幼馴染、織斑一夏と自身の妹である篠ノ之箒の名前を呟く。千冬がここに来ているということは、あの二人もここに来ているのだろう。そんなことを予想して彼女は言葉を紡いでいた。千冬も彼女がそんな予想をしたことに気付いたのか、ああそうだ、という肯定の一言だけを告げた。

「もつとも、お前が昨日と同じ状態だったのを見た時点で道場へと行ってしまったがな」

「おおう、何て薄情な幼馴染と妹」

「東、そういうセリフはあの二人の呼び掛けにちゃんと答えてから言え」

「へ？」

「今日はともかく、ここ数日ほとんど無反応だっただろうが」

まだ若干七・八歳の子供にそんな行動を見せてしまえばそうなるのも仕方ない。そう言いたげな表情で千冬は肩を竦める。そんな彼女の指摘で視線を明後日の方向に向けながら、東は誤魔化すように咳払いを一つ。そして、ところで、と半ば強引に話題を変えた。

「この天才東さんの作った世紀の大発明、インフィニット・ストラトス略してISは一体どのタイミングで発表するべきだろうね？」

「さあな」

「ちよ!? 反応冷たいよちーちゃん！」

「自分自身を天才と呼ぶ痛い親友に何か言葉を掛けろと？」

「……あ、はい、何か調子乗ってました、すいません」

「分かればいい」

まあ、お前が天才なのはとつくの昔に分かりきっていることだな。そんな言葉は口に出さずに飲み込んだ。自分自身が恥ずかしいのと、目の前のこの親友が調子付くのが少し気に入らない。そんな思春期の少女らしい子供っぽい理由であった。

そのまま暫く雑談をしながら千冬自身も通っている篠ノ之の剣術道場へと足を踏み入れる。そこにはまだ幼いながらもしつかりとした姿勢で竹刀を振る二人の少年少女がいた。一夏、と千冬は少年に声を掛け。箒ちゃん、と東は少女に声を掛ける。その言葉に素振りを止めた二人は、先程とは打って変わって年相応の笑顔で彼女達の元へと駆け寄った。

「おかえり、千冬姉。東さんはこんにちは」

「おかえりなさい千冬さん。姉さんはこんにちは」

「ああ、ただいま二人共」

「あれ？ 東さんの扱い軽くない？」

口ではそう言いつつも、東の表情は満面の笑みである。そこには、天才などという肩書きの関係ない年相応の少女の姿があった。いくら優れていても、彼女は結局まだ思春期の子供なのだ。そして彼女の親友もまた、子供なのだ。

『準備はいい？ ちーちゃん』

千冬の脳内に直接響くようなその通信に、彼女は問題ないと返した。時刻はそろそろ正午、場所は某国のロケット発射場、そして千冬は全身が白い装甲に覆われたISを纏っていた。『白騎士』の全身装甲のおかげで外から表情を窺うことは出来ないが、声の調子からすると若干の緊張があるのだろう。東の通信の際のやり取りで感じ取り、少し沈んだ声でごめんねと呟いた。

『本当なら私が『白騎士』に乗ってるべきなのに』

「気にするな、私が望んだことだ。第一、これは私の、織斑千冬専用のISなんだろう？ だったら私が行かない理由はない」

『ちーちゃん……』

ありがとう、と。謝罪ではなく感謝の言葉を呟いた。千冬は東のその言葉にもう一度気にするなど返すと、真っ直ぐに前を見る。遠目で分かる聳え立つ鉄塔、ロケット。それを打ち出すカタパルトに視線を

合わせると、ゆっくりと息を吸い、吐いた。

「行くぞ、東」

『うん、行っちゃえ、ちーちゃん!』

その言葉と同時に『白騎士』は空を駆ける。背後の翼が生み出すエネルギーにより、通常の人型大の装置では考えられないスピードでロケット発射場へ近付いていく。警備の人間がその異常な光景に一瞬あっけにと取られていたが、そんなことは気にせんとばかりに『白騎士』は飛ぶ。我に返った警備員が取り押さえようと向かってくるが、宇宙の様々な害意を突き進む為に造られたISに生身の人間など相手になるはずもなく。やがて武装した者達が鎮圧の為に現れたが、同じように振り払った。必要以上に痛めつけることはしない。彼女等の目的は人を傷付けることではないからだ。

「着いたぞ、東」

『オツケーちーちゃん! んじゃ早速行ってみようか』

「ああ」

カタパルトに足を掛ける。ロケット発射用にあつらえられているそれは、どう考えても人間大である『白騎士』には大き過ぎる滑走路であったが、しかしそんなことは歯牙にも掛けずに着々と準備を進めていく。

『ちーちゃん』

「何だ東。発射準備完了までならもうすぐだ」

『そうじゃなくて。……本当に、いいの?』

それは、普段の彼女からは考えられない声。不安に押し潰されそうになっている声。今から行うそれが、本当に成功するか心配で仕方ない。そんな声であった。

東の発明したインフィニット・ストラトス。今までの汚い大人達の意志の介入しないそれは、清々しいくらいに受け入れられなかった。どれだけ天才でも、どれだけ資産を持っていても、彼女はまだ子供。世迷い事のようなそんな話を聞いているほど、暇ではない。そんな風に一蹴されてしまったのだ。ならばと両親の協力をこぎつけたが、結果は変わらなかった。欲の皮の突っ張っている、汚い大人。それらが

持つ社会的地位という説得力には、彼女の両親では足りなかった。大人の汚い面をまた見せ付けられた気がして、彼女の心はまた少しヒビが入った。

そんなヒビ割れた心を持った彼女の選択した答えが、現在の状況だ。認めてくれないのならば、無理矢理認めさせればいい。百聞は一見にしかず、ISで宇宙に飛び出せば汚い大人達も納得するはずだ。そんな子供染みた発想で起こした行動だった。勢いで進めた作戦だった。

だから、いざという時になって、無性に不安になってしまったのだ。「何を言ってるんだお前は」

だが、そんな束の不安を千冬は斬って捨てる。最初から不安などないとはばかりに言葉を続ける。

何せ、今自分が纏っているこの鎧は天才の作った世紀の大発明なのだから。

『ぶっ、何さそれ』

「ははっ、お前のセリフだ」

そうして二人で笑い合う。その笑いが収まったのと同時に、準備を終えた『白騎士』はブースターを吹かした。全力で飛び、目の前に無限に広がる蒼穹を越える。そうすることで、この翼が飾りでないことを証明出来る。

「行くぞ、東！」

『行けえ！　ちーちゃん！』

純白の騎士の姿をした可能性の翼は、その日、新たな世界を形作つた。

『白騎士』が宇宙へ飛び出し、千冬が肉眼で地球の青さを再確認したその日から、世界の話題はIS一色になった。各国の権力者はこぞつてその技術を身に付けようと東とコンタクトを取り、そこに付け加えられる製法を模索していく。それこそ正に彼女が望んだ光景であつ

た。自分自身の作ったこの翼を自分とその仲間とで認めさせた。そのことが、彼女はこれ以上なく誇らしかった。

ある人間の一言を聞くまでは。

「……え？ それは、どういう……？」

東はその人物の発言の意味を理解することが出来なかった。正確には、それを理解することを拒んだ。それほどまでに、その言葉は彼女の心を抉ったのだ。

こんな素晴らしい兵器を作り出してくれて感謝します。ある国の権力者の使いの者は、実ににこやかな笑顔でそうのたまった。人間一人の単体装備としては破格の力を持つパワードスーツ、それが今まで技術提供を求めてきた者達の認識だったのだ。だから、各国の研究は宇宙に飛び出すことなど二の次で、いかにして強力な武器を装備するか、いかにして相手を殺傷する力を身に付けるか、そんなことに注力していたのだ。

自分が認められたと思い込んでいた彼女は舞い上がっており、提供した技術がどうなっているかなど調べもしなかった。あるいは、ヒビ割れていた彼女の心が傷付かないように無意識に避けていたのかも知れない。どちらにせよ、もう遅い。彼女は知ってしまったのだ、自分の作り上げた翼は、決して認められてないなかつたことに。

「は、はははは……何だ、全部、私の空回り、か……」

逃げるようにラボへと駆け込み扉に鍵を掛ける。周りに人の気配がないことを確認した東は、床にへたり込むと虚ろな表情で乾いた笑いを浮かべた。もう誰も信じたくなかった。もう人など見たくなくなつた。

彼女の心は、ここで壊れた。

それからの彼女は酷いものであつた。生気の抜けた顔で、無表情のまま淡々と事務的な受け答えを続ける毎日。ISに必要なコアの製造技術も何もかもあっさり提供し、もはや自暴自棄になっているとさえ思われた。幸いにして、各国の大企業が総力を挙げて彼女を作つたISコアに届くものは作れず、擬似ISコアと呼ぶべき代物が限界ではあつたが、しかしそれでもISとしての機能を果たせる代物

は爆発的に普及していった。各国の軍備にISが用いられるのも時間の問題、そんなことまで囁かれるようになっていった。

そんな情勢を、間接的とはいえ引き起こした張本人である束は興味なさげに眺めていた。こんな世界がどうなろうと関係ない、そう言いたげな瞳は光を映していない。最近では人間の区別をつけるのも面倒になってきた彼女は、人を人と認識することを諦めた。有象無象の集まりが何かを言っている。束にとって今の世界はそんなものではない。だから、最終的に人前で何かをすることすらなくなった。電話か、パソコンによるやり取り。そうすることで誰とも顔を合わせることもないように彼女は過ごした。

そのまま彼女が外界に出なくなつて半年ほど経つた頃。彼女の世界で認識している人間は自分一人だけになった頃。気紛れでラボを出て月明かりが照らす庭を目的もなく歩いてた時である。ふと、何かがぶつかるような音を聞いた。それだけならば別段興味を持つことも無かつたが、それが断続的に響いていたことが彼女は少しだけ気になった。こんな時間に、こんな場所で何をやっているのだろうか。響く音は戦闘を想像させる激しいもので、そのまま音の発生源に行けば何かしら巻き込まれることは想像に難くない。いつそ巻き込まれて死んでしまおうか、そんなことまで思い浮かべながら、彼女は月明かりの道を歩く。

やがてその音の主を発見した時、思わず彼女は声を挙げた。能面のような顔に、驚愕の表情が浮かんだ。それは、実に半年振りに彼女が人間らしい姿を見せたものであった。

束にそうさせた張本人である音の主は、そんなことは露知らず上空で一体の影と相對する。影はIS、純正ではない擬似ISコアを使つた量産機のようなものであったが、しかしその能力は普通の人間ではとても太刀打ち出来るものではない。それでも音の主は真つ直ぐにそのISを睨む。上空で相對しているということは当然音の主もISを纏っている者であり、そういう意味では条件は五分に見えた。

だが、それは間違いである。音の主の纏っているISは傍から見てもボロボロの状態であり、ちゃんとしたメンテナンスを受けていない

ことは明白であった。全身を覆っているべき装甲は所々剥がれ、本来頭部全てを覆っていると思われるそこは四分の一ほどが消失して搭乗者の顔が剥き出しになっている。そして手にしているのは近接用のブレードが一本。対する相手のISは部分装甲であるものの万全の状態であり、そして多数の武装を持っていた。この戦いの天秤はどちらに傾くか、など問うまでもないであろうと思われるほどの、歴然とした差であった。

しかし、束の反応した部分はそのではない。ISの状況ではなく、そのISそのものに彼女は反応したのだ。

『白騎士』。満身創痕の状態で近接ブレード一本を構えて敵ISに突っ込んでいくそのISは、紛れも無く束が最初に作った可能性の翼。そして、壊れた頭部装甲から見えるその顔は、いつの間にか自分の世界から弾いていたかつての親友。

「ちー……ちやん？」

ほつりと、束はその名前を呟く。そういえばそんな親友がいた。いつの間にか自分が世界から外れていったことで忘れ去っていた、大切な仲間。それが、何故こんな場所で、ボロボロの『白騎士』を纏って戦闘を行っているのか。何故、宇宙へ飛ぶための翼を戦闘に使っているのか。結局お前も、他の人間と同じなのか。そんなことが頭をグルグルと回っていたが、それは空から聞こえてくる言葉で掻き消された。

「束には、指一本触れさせん！」

「え？」

それはどうということなのか。千冬が戦っていることと、自分と、一体何の関係があるというのか。目を凝らすように『白騎士』を見ると、決意の表情でブレードを振り被っているのが見えた。その気迫に圧されるように敵ISは少しだけ後退するが、すぐに我に返ると右手の射撃武装を放つ。『白騎士』は回避行動を取るが、避け切れなかった弾が腕を掠め装甲版が少し弾け飛んだ。

「ちーちゃん……！」

だがその程度のダメージなど気にせんとばかりに距離を詰め、手に

しているブレードで敵ISの装甲を切り裂く。戦闘行為に支障はないとはいえ、決して小さくは無い傷が敵ISに刻まれた。パイロットは歯噛みすると、両手の射撃武装を一斉に放ち弾幕を作る。予測していたのか既に距離を取っていた『白騎士』はそれを避け、再び距離を詰めんと前傾姿勢を取った。

「千冬さんは、ああやってずっと姉さんを守ってるんです」

背後から聞こえてきた声に振り向くと、幼いながらにしっかりとしている妹の姿が目に入った。そういえば彼女のことと自分の世界から外していた、そんなことを思いながら束は彼女の名前を呼ぶ。箒ちゃん、と。

「あ、束さんこんなところにいた。探したんだぜ」

そして箒の後ろから現れるもう一人。自身の妹と同じ年で、親友の弟である幼馴染。そして二人と同様に忘れ去っていた少年。

「……いっくん。探してたって?」

「え? そりや束さんを狙ってくる悪い奴等がいるからそいつらから守る為——」

「一夏」

「あ、やべ」

「私を狙う、悪い奴?」

どういふことなのだろうか。箒が現れた時も千冬がずっと守っていたと言っていたが、その言葉にいまいちピンと来ない束は二人に尋ねた。自身も口を滑らせていたことを指摘された箒は一夏の視線を意図的に無視しつつ口を開く。まだ小学生である彼女が自分で分かっていることを、話す。

「悪い国が、姉さんを戦争の道具にしようとしてるんです」

「だから千冬姉が敵をやっつけて、俺達で束さんのボディガードをやってるんだ」

箒の言葉に付け足すようにそう告げた一夏は笑った。そんな短い言葉であったが、しかしそれは束の心を揺さぶるには充分で。

「……いつから? いつからこんなことを?」

「結構前です」

「アバウト!？」

小学生の感覚ではそんなものかもしれない、と結論付けた束は、もう一度戦っている『白騎士』を見る。一日二日ではああはならない。恐らく自分が世界から引き籠もったあの日から、彼女はずっとああやって剣を振るってくれたのだろう。自分に何も危害が加えられないように、ずっと。そう思うと、無性に嬉しくなった。そして、勝手に落ち込んで絶望していた自分が情けなくなった。

『白騎士』は宇宙に飛ぶ為のISだから、向こうみたいに戦闘用のISと戦うなんて無茶なのに……」

それでも、千冬は戦ったのだ。諦めずに、無茶を通したのだ。宇宙空間での作業用に用意されていたブレード一本で、戦闘用の機体を打ち破ってきたのだ。ボロボロになり続けて尚、親友の為に戦ったのだ。

「束は——」

背中のスラスターにエネルギーを圧縮、一気に打ち出すことで爆発的な速度を生み出す。千冬が自分で編み出した特殊な加速法、それを使い一瞬で距離を詰めた『白騎士』は、敵ISが反応するよりもずっと早くその刃を振り抜く。

「私を守るんだ!」

致命の一撃を食らった敵ISは戦闘続行どころかパイロットの意識も吹き飛ばし、そのままゆっくりと地面に落下していった。生体保護機能が備わっているはずなので死んではいないだろうが、多少の怪我くらいは免れまい。そんな光景を見ていた箒と一夏は慣れた手付きで携帯を操作するとどこかに電話を掛けていた。どうやら相手は警察のようで、先程の相手を連行してもらうつもりらしい。

「束」

気付くと、彼女の目の前に先程戦っていた『白騎士』が立っていた。傍らにはISを奪い縄で捕縛した先程の敵パイロットの姿も見える。

「何だ、引き籠もりは卒業か?」

「ちーちゃん……」

「酷い顔だな。そこそこ整った顔なのに台無しだぞ」

「ち、ちーちゃんこそ……傷だらけ、じゃない」

ISを解除した千冬の体は、目に見えるほどの傷で一杯だった。碌に修理もしていない、戦闘用でもない機体で戦い続けたのだ。その肉体に掛かる負担はどれほどか。

だがそれでも、千冬はそんなことかと言わんばかりに笑顔を見せた。大したことはないと笑ってみせた。

「お前が守れるなら、このくらい何てことはない」

「……何で？ 何でそんなこと言えるの？ こんな、親友も妹も忘れて引き籠もつてた人間を、どうしてそんな風に守れるの!?!」
「どうしてって……お前も今言ったじゃないか」

親友だからだ。迷い無くそう言い切った千冬を見て、束は視界が滲んでいくのを感じた。それは自分が泣いているからだど気付いたのは、千冬に抱き締められ頭を撫でられて、泣くな、と言われたからだ。そして自覚してしまえば、堰を切ったように涙が後から後から溢れ出し自分では止められない。叫ぶように声を挙げ、束はひたすら泣き続けた。そんな彼女に、千冬は気の済むまで胸を貸した。声が嗄れるまで、半年間の自分が全て流れ出るまで、彼女は泣き続けた。

その翌日、憑き物が落ちたように晴れ晴れとした顔で各国にチャンネルを繋いだ束は、しゃがれた声で熱弁を振るった。ISを戦争の道具として使うことを認めない、間接的にそれに手を貸した自分の責任も合わせ、その為に自身は全力を尽くす。ただの天才小娘から世界的な天災に生まれ変わった彼女は、はつきりとそう宣言した。

そして翌年、彼女はISによる直接的な戦争行為を禁止することを第一条とした『アラスカ条約』を締結。結果として各国のIS開発による冷戦を促すに等しいものではあったものの、これにより全面戦争が行われることは避けられることとなった。混迷を極めたこの二年間に、ようやく終止符が打たれたのだ。

ここからISは戦闘兵器としての側面を大きく持ちつつも、別の分野でも活躍する文字通りのマルチフォームスーツとして進化していくこととなる。

後に私設IS組織『しののの』を作ることとなる女性、篠ノ之束はこの時の話を思い出してこう語る。

「生まれ変わった？ 違うよ、私は大事な大事な人に、作り直してもらったんだ」

No.01 「幼馴染だし」

「織斑一夏です。よろしくお願ひします」

それだけ言つて彼は席に着く。着こうとする。だが、クラスの視線を一身に受けていることに気付いた一夏は下げかけていた腰を再び上げた。良く見ると、クラスメイトだけでなく教壇に立っている教師二人も同じ視線を向けているのに気付く。どうやら孤立無援らしい。

とはいえ、一体何を言つていいのやら。そんなことを思いながらキヨロキヨロと一夏は視線を巡らす。左を見ても右を見ても、前を見ても後ろを見ても。そこに見えるのは女性の顔ばかり。自分がここにいる唯一の男子であるということがこの状況を作り出している要因なのだと改めて確認すると、彼はやれやれと溜息を吐いた。ここを受験したその時の状況を鑑みてもこういう状況になることは予想していたものの、ならば慣れるかといえれば答えは否。

「……えーつと、俺はここ、IS学園唯一の男子パイロットということになります」

IS学園。十年前に篠ノ之束博士が作り上げたマルチフォームスーツ、インフィニット・ストラトスに關係する技術者——主にパイロットの育成を中心とした教育を行っているこの学園は、当然の如く生徒も教師も女性で構成されていた。ISを動かせるのは女性だけという世間一般の常識が蔓延している以上、それも当然だと言える。

だが、それを打ち破る存在が今ここで自己紹介をしている少年、織斑一夏その人なわけだ。だからこそ皆、彼を特別な目で見ているのだ。例外は、教壇に立っている教師の片方と窓際にいるポニーテールの女生徒くらいだろうか。どちらも彼の關係者なので当然だが。

「皆さんと同じように、俺も受験を受けて、合格して……合格、したんだよな？」で、こうして入学してきたわけなんで、えーつと、その「ともあれ、自分でも何を言っているのか分からなくなってきた感のある一夏はとりあえず締め言葉の言葉を述べようと必死で頭を巡らせた。

「出来れば、特別視しないでくれると助かります」

頭を下げ、そして今度こそ席に座った。そんなことは無理だろうと

というのは自身に突き刺さる視線が全く変わっていないことで理解したが、それでも言うと言わないのでは天と地の開きがあるだろう。とりあえず一夏はそういうことにした。

「さて、では改めて自己紹介をしよう。私がこの一年一組担任、織斑千冬だ。担当科目はISの基本動作を含んだ操縦全般。通常科目では一応日本史だが、あまり一年生には関わりのない部分だな」

そこまで述べると彼女は一旦言葉を止めた。自分を見ているクラスの生徒の視線は基本的に『羨望』で占められている。この様子ではちゃんと自分の言葉を聞いているのかも怪しい、そんなことを思いこつそりと溜息を吐いた。とはいえ、これはある意味恒例行事のようなものだから仕方ない。まだ教師を始めてそこまで経っていない年若い彼女ではあるが、今まで毎回この光景を見続けていれば流石にそんな感想を抱いてしまう。

それでも、これだけは言っておかなくてはならない。聞いていなくてもいい先程の紹介とは違う、聞いてもらわなくてはいけないことを言わなくてはならない。

「……お前達は、ISとは何だと思う？」

問い掛けるようなその言葉に、クラスの雰囲気ガラリと変わる。憧れの人物の言葉をただ聞いているだけから、問いについて頭を働かせるようになる。

「世間に出回った当初は、兵器扱いだった。その認識を開発者は全力を持って修正したが、しかしそれでも一度染み付いたものは中々拭えない」

現在でも、ISの主な目的は戦闘用なのだから。そう千冬は続けた。クラスにざわめきはほとんどない。それだけ、彼女の言葉を真剣に聞いているのだろう。

「私は、ISが元々何の為に開発されたのかを知っている。当然だな、開発者の手伝いをしていただけだから」

だから、今の状況を良く思っていない。きっとそういう風が続ける

のだろう。何となくそう予想していたクラスの生徒達は、しかし彼女の次の言葉に思わず目を見開いた。

だが私は、今の状況は別に悪くないと思っている。彼女は、開発者の一番近いところにいたはずの織斑千冬はそう続けたのだから。

「勘違いしてもらっては困るのは、ISを兵器として使うことを肯定しているわけではないということだ。これは戦争なんぞに使っていない代物じゃない」

じゃあ何故。そんな疑問が皆の頭をもたげる中、千冬は薄く笑いながら言葉を紡ぐ。様々な目的に向かって進化するのは、決して悪いことではないからだ、と。

「遠回りしてしまった感はあるが、今ISは災害救助や秘境探索などの用途にも研究開発が進んでいる。今の状況を否定するということは、これらも否定することに他ならない。だから私は、今のこの状況を否定しない」

そして、戦闘用に研鑽されているISについても否定しない。え、と誰かが声を漏らすのを聞いてしてやったりといった笑みを浮かべた千冬は、話は最後まで聞けとばかりに視線をクラスの端から端へと一周させた。

「例えば柔道、例えば剣道。これらは柔術、剣術を祖とした武道であり、そしてそれらは人殺しの技だ。だが同時に、己を鍛える為の大切な術でもある。ISもそれと同じだ。己を鍛え、そして同じように鍛えた相手に打ち勝つ。戦闘行為と言ってしまえばそれまでかもしれないが、少なくとも私は操縦技術をそういう風に見ているし、出来れば皆にもそう思えるようになって欲しい」

長くなってしまったが、これで終わりだ。そう彼女は締めると、教壇を降りて副担任の教師へと交代した。それでは、と副担任の女性は自己紹介を始めたが、クラスのほとんどは先程の千冬の言葉を噛み締めているようで聞き流していた。それでも彼女はめげない。昔からこんなことになるのが自身の中でお約束と化しているからだ。

山田真耶、学生時代より千冬の後輩として過ごしてきた功績を買われて彼女が受け持つクラスの副担任を務めることになった苦労人で

ある。

千冬の自己紹介の際の言葉が響いたのか、最初の授業は驚くほどスムーズに進行した。もともと、この学園を受験する者ならば予め学習してきてしかるべきものであったのである程度は至極当たり前ともいえる。

そしてそれは当然ながら、一応曲がりなりにも正規の手順を踏んで合格したこの少年にも当てはまるわけで。

「入学初日からいきなり授業って、流石は進学校ってやつか」

余談だが、入学式は本当に入学式のみで終わってしまっている為彼の中ではゼロ日目扱いらしい。

ともあれ、そんなことを眩きながら机に突っ伏す一夏だったが、見下ろすように立ち塞がったポニーテールの少女の姿を視界に入れると、よつこらせなどと年寄り臭い言葉を発しながら体を起こした。一夏の目に映る少女の顔はやれやれと言わんばかりのものであったが、その実内情は別段彼と変わりが無かったりもする。

「だらしないぞ一夏。初っ端からそんなことどうする」

「いや、そうは言われても。つていうかお前だって内心似たようなこと思ってるだろ？」

「それを表に出すことがだらしないと言っているのだ。そもそも、それらを全て了承済みでここを受けたのではなかったのか？」

「いや、そりやそうなんだけどさ」

座学より体を動かす方が自分には性に合っているんだよ。そう続けながら一夏は首を鳴らした。硬くなった体をほぐすように伸びをすると、そのまま何とは無しに辺りを見渡す。どうやら注目されていたようで、彼が顔を向けると周りの女生徒があからさまに視線を逸らすのが見えた。見てないで話し掛けてくれればいいのに、そんなことを思いながら再び視線を目の前の幼馴染へと戻す。そして、なあ箒、と彼女の名を呼んだ。

「動物園のパンダって、こんな気持ちなんだろうか」

「パンダに聞け、私に聞くな」

「バツサリだなおい」

そんなことを言った辺りで休み時間終了を告げるチャイムである。箒はではまたなと自分の席に戻り、一夏は盛大に溜息を吐きながらも授業の準備を始めた。次は通常科目なので、普通の高校生とほぼ同じことをやることになる。IS学園だからといって授業はISのみではない、という至極当たり前の事実を突きつけられた彼は、もう一度溜息を吐くのだった。

そのまま授業も滞りなく終わり、昼休み。朝と同じように一夏を見ている生徒はいるものの、やはり昼食を優先したのか一人また一人と学園内にある食堂へと向かっていく。そんな彼女等の視線の先であつた彼はというと、食堂にも行かず自分の鞆から弁当箱を取り出していた。入学して暫くの間学食は混むであろうという予想を立て、教室で昼食を取れるように準備をしてきたらしい。その隣には席を借りた箒が同じく弁当箱を持って座っている。中身を見る限り、どうやら弁当の製作者は同一人物のようだ。

それを目ざとく見付けたクラスに残っていた弁当組は、今がチャンスとばかりに二人へと近づく。私達もお弁当なんだけど、良かったら一緒にどうか。そんなことを言うと、一夏も箒も二つ返事で了承した。

「あ、やっぱり男の子なんだね。凄いボリューム」

声を掛けた弁当組三人のうち一人が一夏の弁当箱を覗いてそんな感想を述べた。対する一夏は自分の弁当箱を見て、そして隣の弁当箱に視線を移す。自分と同じ量が詰められているそれを眺めながら、成程、と呟いた。

「箒。お前、おと——」

「切り捨てられたいか?」

「なんでもありません。いやあ、箒さんは女性らしい体付きをさされて素晴らしいなあ」

「真つ昼間からセクハラとは、相当頭を潰されたいらしいな」

右手で弁当をパクつきながら、左手で一夏の頭を鷲掴みにする箒嬢。メシメシという音が聞こえてきそうなほどに強く握り締められたその頭の持ち主は、おおよそ人間が発する言語ではない言葉を叫びながら殺虫剤を掛けられた害虫のようにもがいた。その動きがあまりにも食事の風景にそぐわなかった為、箒は溜息を吐きながら左手を開く。自由になった頭を左右に振りながら、酷い目に合ったと一夏は呑気にのたまった。

傍から見ている三人としては割とドン引きの光景だが、二人の態度からすると日常茶飯事なのだろうと納得することにした。深く考えではないけないと結論付けたらしい。

「というかだな、俺としてはむしろそれだけで晩飯まで持つのかよって感じなんだけど」

そんな三人の心情は露知らず、何事も無かったかのように彼は会話を元に戻し、三人の弁当箱を眺めながらそう返した。確かに一夏や箒の弁当に比べると量はおおよそ半分ほどであるが、思春期の少女としてはこのくらいに抑えないといけないという謎の強迫観念がある以上仕方ない。それを分かっているのか、箒は別に女子の普通はそんなものだろうと答えていた。

「でも箒、お前は倍食ってるよな？」

「何が言いたい？」

「……………」

「何故黙る」

「…………お、怒らないなら、言うけど」

「言うだけ言ってみろ」

「やっぱりおと——」

「さらば一夏」

「——こんなかじやないですよね！ ほら、その立派な二つの膨らみが盛大に自己主張をしていますね！」

「なあ一夏、私はな、天井を許すほど寛大ではないんだ」

アイアンクローリターズ。情け容赦なく全力で潰しにかかったそれは、もがく暇を与えずに彼を沈黙させた。だが、それも当然と言

える。何故なら、彼女はその普通よりも大きな自分の胸を気にしているのだから。とはいえ、遠慮なく実力行使をしてしまうのはその発言をした人物が一夏であるからであろう。

「あ、あの。篠ノ之さん」

「ん？ どうした？」

「篠ノ之さんと織斑君って、仲、良いの？」

流石に二度も同じ光景を見せられてスルーしようと思えるはずもなく。我慢の限界に達した少女は最初から浮かんでいた疑問を箒にぶつけた。ちなみに本当は一夏に振ることで会話を弾ませようと思っていたらしいが、その本人が弁当箱に顔面を突っ伏してピクリとも動かないので諦めたようだ。

「良いのか、と聞かれればそうだろうな。幼馴染だし」

「幼馴染!?!」

「ああ、私と一夏の姉同士が親友でな。その関係で子供の頃からの付き合いなんだ」

「へー、お姉さんが親友同士——」

そこで三人はピタリと動きを止めた。篠ノ之箒と織斑一夏の姉で、二人は親友。篠ノ之と織斑は親友同士。そのキーワードに引っ掛かるものがあつたのだ。そしてその答えを瞬時に弾き出したのは、三人の中でも一番のほほんとしていそうな袖の余った制服を着た少女だった。

「ひよっとして、二人のお姉さんって、織斑先生と篠ノ之博士？」

「ん？ ああ、そうだぞ。別に隠してもいないがな」

大発見、とばかりに身振り手振りを大きくしながら述べた彼女の言葉に、何てことないと箒は返した。食べ終わった弁当に蓋をして、水筒からお茶を注いで飲んでいいる。その姿は平静を装っているなどというものではなく、完全に素の行動であつた。

「ああ、ちなみに。私はISの理論とかは一般生徒と同じくらいしか分からん。そこの一夏も同様だ。だから、勉強を教えると言われても無理だぞ」

そろそろ起きると一夏の頭を叩きながらそう続けた。いくらあの

二人の身内だからといって、あの二人と同じではない。言外に、そういう意味を匂わせていた。

だが、周りの人間がそう思ってしまうのも当然だと言える。篠ノ之箒の姉である篠ノ之束はISを作り上げ、そして今現在のISの在り方へ向かわせた世界最強のIS研究者。そして織斑一夏の姉である織斑千冬はそんな彼女と共に歩んできた親友にして、現在二回行われているIS操縦者世界一を決める国際大会『モンド・グロツソ』二連覇を達成した世界最強のIS操縦者。そんな二人の身内ならば、と考えてしまうのも当然であろう。

そして何より、その二人と関係があるということは。

「あ、でも。それじゃあひよつとして二人共」

「ん？ ああ、ひよつとしてこれか？」

動かなかったものの一応話は聞いていたらしい一夏は、復活したと同時に彼女等の言いたいことを察したのか、自分の制服に付いていたピンズを見せる。組織の所属を示す徽章らしいそれは『N』を四つ重ねたようなマークが描かれていた。同様に箒も制服に付いているその徽章を三人に見せる。

「やっぱり！ それって『しののの』の所属を表すピンズだよな？」

私設IS組織『しののの』。名前の通り、篠ノ之束が自身の私財を使って作ったどの国にも属さないと自称する私設組織である。モットーは『世界最強のIS研究者と世界最強のIS操縦者による世界最強の我俣集団』という子供の主張並みにはた迷惑なものであったが、しかしそれが世界各国の抑止力の一つになっていることは暗黙の了解であった。

しかし一人歩きする名声とは裏腹に、組織の構成員はほとんど事務方であるとされ、今のところ実働するのは織斑千冬ただ一人しか確認されていない。噂では事務方すらいないのではないかとも言われるほどだ。

そんな知名度はあるが実態が謎の組織に所属している者が、目の前に二人。女子がこういうことに食いつかないはずがない。

「ということ。織斑君って、世界最強のIS操縦者の弟で、世界初の

男性IS操縦者で、そして謎に包まれた『しののの』のエージェント
!?! 凄い、色々詰め込み過ぎ!」

「自分で言っただけだよ」

「その手伝いも、まだ幼い私達では精々部品を運んだりするくらい
だったしな」

思わず見せてしまったが、本当はおおっぴらにするほどのものでも
ない。二人はそう締めくくった。箒はお茶を、一夏は弁当の残りを口
に入れつつ、それに、と続ける。

「俺は俺だ。自分で取ったわけでもない肩書きなんざ関係ねえよ」

「色眼鏡で過大評価をされるのは心外だからな」

そう言っただけで笑いかう姿を見ると、これ以上何かを言うのは
無粋だろう。そう判断した三人は、了解と同じように微笑んだ。

弁当も食べ終わった五人は、その後取り留めの無い雑談を続ける。
三人の名前を覚えていなかった一夏にそれぞれ、布仏本音、谷本癒子、
鏡ナギと自己紹介したり。今日の授業はどうだったのかなどと感想
を言い合ったり。その流れで、自然と一夏の入試に話はシフトして
いった。

「そういえば、受験会場に男の人が紛れてるって噂があつたけど」

「ああ、それ俺。ちゃんと受験票持ってたのに中々信用してくれなく
てさ、まいったよ」

「……自己紹介の時もそんなこと言っただけで、ホントにちゃんと受
験したの?」

「いや、むしろそれ以外にどうやって入学するんだよ」

キョトンとした顔でそう返す一夏を見て、癒子とナギは深い溜息
を、本音は一人面白そうに笑っていた。箒は慣れているのかノーリア
クションである。

「お、織斑君は世界初の男性IS操縦者なんだから、やろうと思えば無
条件で入れるんじゃない、かな?」

「いや、そんなズルは駄目だ」

「そこ意地張っちゃうの!？」

「ま、まあでも、織斑君は最初からISに関わってきたんだし、一般受験でも余裕だったんだよ、ね?」

「一夏の試験結果はギリギリだったぞ」

「お前もギリギリだったじゃねえかよ箒」

「何で二人共そんな成績!？」

既に本音は笑い過ぎて呼吸困難に陥っている。いつそ自分も彼女と同じように痙攣するほど笑えたら、と思いながら二人は疲れたように溜息を吐いた。

「ちよつと、よろしくて?」

そんな五人へと掛けられる声の一つ。その方向へ振り向くと、金髪碧眼の女生徒がそこに立っていた。所謂縦ロールと呼ばれる髪型が、彼女のかもし出す雰囲気によく似合っていた。確か同じクラスだったはずだ、と判断した一夏だったが、しかし一体何の用なのかまでは心当たりが無い。仕方ないのでとりあえずこの状況から導き出される答えとしてそれらしいものを選んでおくことにした。

「あー、つと。ごめん、うるさかったか?」

「え? ……ああ、いえ、苦情を言いに来たわけではありませんわ」

一夏の謝罪に一瞬だけキョトンとした顔を見せたものの、女生徒はすぐにその意味を察しそう返した。その顔に苦笑が浮かんでいるところを見ると、どうやら彼の返答は予想外の反応であったらしい。

「セシリア・オルコット。入試の成績トップで入学式では一年の代表を務めた才女が、私達のような落ち零れに何の用だ?」

そして彼女に反応したもう一人、篠ノ之箒嬢はどことなく喧嘩腰でそう言う。実際は別段喧嘩を売っているわけでもなければ普通に疑問を述べただけなのだが、彼女の口調と目付きの鋭さがなせる業であろう。

だが、喧嘩を売られている(ように見える)セシリア嬢は何処吹く風、逆に薄く微笑みながらご謙遜を、と箒に返した。その言葉に彼女

の眉が少しだけ上がる。

「入試の実技試験で教師を倒した者はわたくしを含めて四人。残りの三人の内一人は日本の代表候補生、そして残り二人は——」

笑みを浮かべたまま、セシリアは箒を見詰める。そして同じような視線を一夏にも向けた。その視線の意味が分からない野次馬状態の残り三人ではない。が、それでもちゃんと言葉で聞きたいと彼女が口を開くの待った。

「篠ノ之箒さん、そして、織斑一夏さん。あなた達お二人ですね？」

「否定はしない」

「ああ、まあ、一応」

箒は淡々と、一夏は少し気まずそうに肯定をした。やっぱり、と癒子とナギは思わず零し、本音はじつと二人を見詰める。そしてセシリアはその言葉を聞いて満足したように微笑んだ。

「用というのは、その確認ですわ。談笑のお邪魔をして申し訳ありませんでした。では、ごきげんよう」

スカートの手端を軽く摘み優雅ともいえる挨拶を行うと、彼女はそのまま自分の席へと戻っていつてしまった。どうやら本当に確認をしたかっただけらしい。一体全体何でそんなことを、そうは思ったが、しかしいくら考えたところで答えは出ない。一夏も箒も早々に考えることを打ち切って雑談の続きでもしようと思意識を目の前にいる三人へと向けた。

向けたのはいいが、では雑談の話題は何になるかと言えば、当然のごとく今の会話についてになるわけで。

「二人共、実技試験で先生に勝っちゃったの!？」

「すっごーい! あ、ってことは操縦技術の高さがずば抜けてたから合格したってこと?」

癒子とナギは詰め寄るように二人に問い掛ける。本音はそんな彼女達を見ながら笑みを浮かべているだけだったが、しかし聞きたいことは大体同様らしいのが雰囲気であった。

そんな三人の剣幕に圧されるように一夏は頬を掻き、箒はやれやれと肩を竦める。あまりこういうことを話すと色々噂が大きくなるか

らしたくないけれど、という前置きをしながら、三人に向かって口を開いた。

「勝ったって言っても、あれはあくまで試験だから向こうも当然手加減している状態だったのは忘れないでくれよ」

「機体も試験用に調整されていた量産機だったからな。試合終了となる判定が大分下げられていたようだし」

だから、少し向こうに攻撃するだけで勝利となったのだ。そう二人は締めくくった。だが、その『少し向こうに攻撃する』というのがどれだけ難しいかは一年生一クラス三十人が八クラスで計二百四十人中成功者たった四人という数字が物語っている。

「二人共。そうやって自分を過小評価し過ぎると嫌味に聞こえちゃうよ。他の人達が出来なかったことをやってのけたんだから、そこは素直に誇っちゃってもいいと思うな」

そう考えれば、そんなことを言われるのも尤もなのだが。しかし、言った人物が人物なので一夏と箒だけでなく癒子とナギですら発言者の顔をマジマジと見詰めてしまった。先程まで何も考えてなさそうに大笑いをしていた少女、布仏本音嬢を。

一瞬だけ、ほんの一瞬だけ真剣な表情を浮かべた彼女は、次の瞬間にはいつも通りののほほん顔に戻っていた。四人に見詰められているのに気付いて、困ったように頭を掻く姿は先程の発言をした人物だとはとても思えない。

「……確かに、少し言い方が悪かったかもしれないな。済まない布仏、嫌味つたらしくなっちゃった」

「見栄張って調子乗った発言しちやっただよな。大体箒はともかく俺イッパイイッパイだったし」

「何を言う。私もギリギリだったぞ」

「……織斑君と篠ノ之さんってさ、意外と考えなしで喋ってるよね」

「まあ、基本ノリかな。思い付いたことを思い付くままやってる感じ」

「……私が言えることではないかもしれないが。一夏、最近姉さんに似てきていないか？」

「え？ 東さんに？ マジで？」

「何故今自分の胸を見た」

「いや、束さんに似てきたって言われたから」

「貴様の姉さんのイメージは胸だけか！」

アイアンクローおかわり。反論の隙を与えることなく一夏を黙らせた箒は、何故か何かをやり遂げたようなとてもいい笑顔を浮かべた。ひよつとしてネタ合わせか何かだったのだろうか、などというどうでもいい疑問が癒子とナギの脳裏を通り過ぎる。幼馴染ってこんなだっけ、とついでに首を傾げた。

疑問の答えは出ないままだが、しかしそろそろ昼休みも終わりである。食堂に行っていた生徒も戻ってきているので、いい加減机を占拠しているのも悪いだろうと一夏以外の四人は席を立った。午後の授業は何だったのだろうか、という雑談をしつつもそれぞれの席へと戻っていく。戻ろうとする。

その途中で、本音は思い出したかのように一夏と箒の名前を呼んだ。

「そういえば聞き忘れてたんだけど。二人の実技試験の相手の先生って誰だったの〜？」

流石に受験生全員を一人の教師で試験するわけではないので、当然ある程度試験の相手はばらつきがある。実際、癒子とナギも相手となった教師は別人であった。ただ、一夏と箒の試験監督であった教師は同一人物だったらしく、そのことを聞いて少しだけ驚いた様子を浮かべた。

そして、彼らはセシリアが何故自分達に確認をしに来たのかを何となく理解した。何故なら二人の実技試験の相手は――

「ああ、俺と」

「私の試験の相手だった先生の名前は」

『織斑千冬』

おおよそ知られている中で、世界最強の試験官だったのだから。

N002 「大丈夫大丈夫」

教室に山田真耶教諭の声が響く。

昼休みも終わり、午後の授業も大詰めの六時限目。ISについての基礎知識として大まかな説明の講義を行っている最中である。

「一般的にISはコアタイプによって二種類に分けることが出来ません」

現在、世界には多数のISが存在しているが、そのほとんどは開発者である篠ノ之束が自棄になっていた時期に提供された資料から各国が作り出した擬似ISコアを使った代物だ。流石に字面が悪いということでもIS『Fコア』と呼ばれているそれは、束の作った純正ISコアと働きそのものは同等であるが、それでも決して敵わない部分を持っていた。

「そして、世界に四百六十七個だけ存在している純正ISコアしか持ち得ない機能が、『自己進化』です」

Fコアはあくまで動力源としての役割しか果たせず、稼動データや操縦者との相性合わせなどはISに組み込まれたプログラム等で賄っているのに対し、純正ISコアはコアそのものが経験を蓄積、最適化を自ら行っていくという特徴を持っていた。その為、機体を取り替えてもコアと操縦者が同じならばコアの蓄積データによって容易に適応可能であったり、相性が良ければ本来のスペック以上の能力を発現したりもする。そのような理由から、純正ISコアは主に専用機や試験機に優先的に使用されており、国家代表や代表候補生と共に成長を続けているのだ。

「そんな純正ISコアの最大の特徴が『ワンオフ・アビリティー』ですね。ISコア自身の自己進化と操縦者の相性、その二つが合わさった時に発現する特別な能力。IS操縦者の辿り着く目標の一つと言えるでしょう」

そんな説明をしながら彼女はちらりと現在空席になっている一年一組担任の机を見る。『ワンオフ・アビリティー』と聞いて最初に思い浮かべるのはその席の主である織斑千冬のIS『暮桜』の持つ『零落

白夜』。自身のエネルギーを刃に変換し、相手の防御を無視した斬撃を繰り出す必殺の能力。未だ分からない部分の多い『ワンオフ・アビリティー』の中で最も資料が多く最も有名なそれは当然他の生徒も周知であり、山田教諭と同じように視線を主のいない席へと思わず向けていた。

勿論、身内である二人も例外ではなく同じように視線を向けていた。違うのは、二人の頭に浮かべているのが『零落白夜』だけではないという点だろうか。

そんなこんなで最後の授業も終わり、ある意味話題の中心人物であった千冬がホームルームの為に戻ってくる。簡単な連絡事項とIS操縦の為に使用出来るアリーナの開放時間などを伝えると、これで今日の全行程は終わりだと号令をかけた。これから放課後、生徒達にとっては貴重な自由時間である。とはいえ、IS学園は全寮制。普通の学校と比べるといささか行動が制限されてしまうのは致し方あるまい。

そんなことは関係ないとばかりに席を立つのはこの学園唯一の男性IS操縦者織斑一夏その人である。全寮制とはいえ、彼は男子で寮は女子寮、しかも基本相部屋と来ている。なので、彼の部屋の用意が済むまでの間は自宅からの通学となっているわけだ。

「あ、織斑君」

「はー。」

「これ、織斑君のお部屋の鍵です」

だから、山田教諭にそれを渡された時、一夏は暫く反応が出来なかった。自身の手に置かれた鍵は部屋番号が振ってあることから考えて間違いなく寮部屋の鍵であろう。まだ一人部屋の準備は出来ていないはずなので、この鍵の持ち主は彼以外にもう一人いるのも間違いないであろう。

「先生」

「はい、どうしました？」

「……俺、まだ警察の厄介になりたくないんですけど」

「突然何を!？」

女子と相部屋。このキーワードだけで捕まる自信がある、と一夏は判断した。年若い少年としては妥当であり冷静な判断であるのだが、いかんせんそれを脳内で済ませているのでは何にもならない。事実、目の前の真耶は彼が何を言っているのか分かっておらず首を傾げるのみである。

「織斑、言葉が足りなさ過ぎだ」

「あ、千冬ね——先生。というと？」

「脳内の判断を口に出せと言っているんだ。山田先生に分かるようにな」

言外に自分は分かっているということだが、それは流石に姉弟の付き合いの長さゆえであろう。一夏もそれを分かっているのか特に何も言わず、山田教諭へと向き直り改めて一から説明開始。成程、と頷いてくれたところで再びさっきの結論を述べた。

「まあ、でも。大丈夫ですよ」

「物凄く根拠の無い断言しましたよね今」

「そ、そんなことないですって。ほら、織斑君が相部屋の女子に何かするなんてないでしょうから」

「……例えば、ここで俺が部屋に行ったら相部屋の人がシャワー浴びてた、とかだったらどうします？」

「私は織斑君が更生してくれるって信じてますから」

「信じるところそこじゃないでしょ!? っていうか信じてないじゃないですか!」

どうやら不可抗力であろうとなかろうと一夏の述べたような結果が待っているのは確定らしい。女の園の唯一の男子の扱いなどこんなものである。

当然一夏もここで素直に寮の部屋に行くほどチャレンジャーではない。じゃあ俺は家に帰りますと手を挙げて挨拶をした後踵を返す。そしてとつと逃げ出そうと足を踏み出したところで肩に指を食い込ませられた。

「あだだだだだっ! 痛い! 超痛い!」

「なら止まれ」

「嫌だ！ 俺は家に帰るんだ！」

「お前の家は今日から暫くこの寮だ」

「ドキドキハプニングが豚箱行きに直結している家なんぞ願ひ下げだ
！」

「……その辺りは心配するな」

「だからその根拠の無い言葉は——」

「お前と同室の女子は、篠ノ之だ」

そこでピタリと一夏は動きを止めた。篠ノ之、と言うからには間違
いなく彼の幼馴染である筈だろう。物心付いた時から一緒に行動し
ている彼女ならば確かに同室でも多少融通が利くかもしれない。少
なくとも先程までの状況が起きる可能性は減るだろう。

だが、しかし、と一夏は思う。確かに警察の厄介になる可能性は下
がるのだが、しかしだ。

「……警察に捕まると頭碎かれるのはどっちがマシなんだろうか」

「社会的に死ぬか物理的に死ぬかの違いか。難しいところだが、私は
物理的死の方がマシだと思っぞ」

「体よく寮生活勧めてやがりますね織斑先生」

「当然だ」

悪びれる素振りも無くそのたまう自身の姉を見て、一夏は抵抗を
諦めた。行こうとしていた方向とは逆に足を向けると、それでは先生
さようならと述べてトボトボと歩みを進めていく。その背中には哀
愁が漂っていた。

「織斑君、大丈夫なんでしょようか」

「同室が篠ノ之である限り、山田先生が想像している事件は起きませ
んよ」

「……信頼、されてるんですね」

「付き合いは長いですから」

ただ、と千冬は口に出さずに続ける。そうでない事件は起こしてく
れるのだろうか。と。それも早ければ今日中に。

ここに来る途中で聞かれた質問を思い出しながら、彼女は薄く笑み
を浮かべた。

千冬の予想通りか、はたまた予想を上回る速度だったのか。ともあれ、そうでない事件とやらは起きていた。具体的には一夏が寮の自分の部屋に入った直後である。

部屋に備え付けられている二つのベッド。入り口側と窓側、その二つのどちらを使うか。それが今現在男女が両手で掴み掛かり額をぶつけん勢いで押し合っている理由であった。勿論男女とは織斑一夏と篠ノ之箒である。

「俺は窓側がいいんだよ！」

「私も同様だ。これを譲るわけにはいかん」

「俺だって譲れねえよ。朝日を浴びて目覚める快感を手にするんだ」

「一夏の実家の部屋のベッドは朝日など当たってなかっただろう？」

「当たってないから欲しいんだよ」

「そうか、奇遇だな。私もだ」

双方が両手に力を込める。男女の違いを感じさせないほど力強い箒に若干押され気味になる一夏だったが、色々なプライドと負けず嫌いな性格により押し戻した。そして再びそのぶつかり合いは均衡を保つ。

「なあ箒」

「何だ？」

「このままじゃ埒が明かない」

「そうだな。じゃあ私に譲れ」

「嫌だっつってんだろ」

「さっき乙女の柔肌を見たな」

「悲鳴代わりにボディブロー食らわせた挙句倒れた俺にサッカーボールキック叩き込んでどの口がほざいてんだ」

「この口だ。乙女の唇だ」

「うるせえ乙女。いいから話の続きを聞けつての」

一瞬箒の唇に視線を向けてしまったのを誤魔化すように一夏は叫

ぶと、掴み合っていた手を離した。そして部屋の入り口を指して、表へ出る、と述べる。どう見ても喧嘩を売っている発言だが、元々似たようなことをしていた以上何か変わるわけでもない。まあ、つまりはそういうわけである。

「アリーナの使用時間はまだ残っているな」

「余裕余裕」

「いいだろう。こんな場所で取っ組み合いをしているよりよほど効率的だ」

そう言うと二人揃って部屋を出た。そのまま寮から出て、再び学園へと戻る。もう一度時刻を確認した後、受付に向かうと今現在空いているアリーナの確認を行った。どうやら第三アリーナは数人の三年生が使っているくらいで、他に人はいないらしい。これなら丁度いいとその使用許可証を受け取ると足早に更衣室へと歩みを進めた。

IS用のインナースーツへと着替えた一夏がアリーナへと足を踏み入れると、ISでの戦闘を行った際生まれる独特の臭いが鼻を突いた。嗅ぎ慣れている臭いに彼が薄く笑みを浮かべていると、反対側の入り口から同じようにISスーツを纏った箒がこちらへと歩いてくるのが見えた。同じように笑みを浮かべているところを見ると、どうやら彼女も彼と同じような感覚を抱いているようである。

「待たせたな」

「いいや、俺も今来たところだ」

「ふふっ。では始めるとしようか」

「おう。手加減無し of 全力一本勝負。勝った方が窓側ベッドだ」

一夏は右手に付いているガントレットとも思える腕輪を眼前に構え、箒も同じように腕に巻かれている一対の鈴が付いた赤い紐を掲げる。言葉こそ軽口であったが、その目は真剣であり、お互いが本気で戦うことを意味していた。

が、そんな空気はある乱入者によって霧散させられる。同じ第三アリーナで訓練をしていたと思われる三年生が、二人に気付いてやってきたのだ。ねえ、君達が噂になっている一年生でしょ。そんな言葉を投げ掛けられた二人は、お互いに顔を見合わせるとやれやれと溜息を

吐いた。

「すいません、噂ってどんなやつですか？」

一夏がそう尋ねると、やってきた三年生三人の内一人がそれは勿論、と口を開く。半ば予想していたことであつたが、その口が語ったのは入試の実技試験の話であつた。織斑千冬を倒した新入生。色々と巡り巡っているうちにそんな肩書きへと変化していたらしい。既に一夏が世界初の男性操縦者だとか、箒がIS開発者の妹だとか、それらは瑣末なこととなっている。

そんなことを語っている三年生の女生徒達の視線から、どうにも敵意のようなものが含まれているのに箒は気付いた。彼女達にとって織斑千冬とは憧れであり、目標である。身近ではあるが、雲の上の存在。そんな侵してはならない聖域のような女性を倒した新入生などというものを、はいそうですかと受け入れられるはずもない。今更誤解だと説明したところで聞く耳を持ってくれないだろうし、そもそも肝心な部分は誤解ですらない。そこまで箒は考えると、これは覚悟を決める必要があるなと心の中で嘆息した。ちらりと横目で一夏を見ると、同じようにどうしたものかと頬を掻いている姿が目映る。とはいえ、あくまで彼が抱いているのは見知らぬ女生徒が話し掛けてきたことについての戸惑い程度だろうと箒はあたりを付けた。どうも鈍感なきらいがあるのだ、彼女の幼馴染は。

それじゃあお願いがあるのだけれど、と女生徒の一人は二人に述べた。一夏は特に考えなしで頷き、箒は意図を察して頷く。結果としては二人共に肯定を示したので、待つていましたとばかりに三人はそれぞれのISを起動させた。

そこでどうやら一夏は気付いたらしい。ひよつとして、これは戦う流れなのではないか、と。

「なあ箒」

「よほど千冬さんに一撃当てたのが腹に据えかねたようだな」

「マジかよ。あの程度でこんなことされちゃ堪ったもんじゃないんだが」

「一夏」

「ん？ ……あ」

目の前の三人の目付きが鋭くなっているのが鈍感な一夏でも分かった。「あの程度？」と呟いていることから理由は明白、そして自爆したのも明白であった。これで戦闘は避けられない、元々不可避であったがより固まったと言える。そしてその原因を作ったのは自分である以上、誰かを責めることも出来ず彼はがくりと頭を垂れる。アリーナの中心部へと向かっていく三人の背中が、何とも恨めしく思えた。

「大丈夫ですか？」

その背中を目で追っていた二人の背後から声が掛かる。振り返ると、三つ編みに眼鏡という出で立ちの女生徒がこちらを心配そうに見詰めていた。ISスーツではなく制服を着ているその女生徒は、リボンをタイからすると先程喧嘩を売ってきた者達と同じ三年生であるようだ。

一夏はそんな女生徒が自分達に声を掛けてきた意図が掴めず、どういうことですかと首を傾げる。隣では箒が同じように突然話し掛けてきた彼女を怪訝な目で見ていた。

「いえ、何やらトラブルに巻き込まれているようでしたので」

「あー……ええつと、まあ、大丈夫です。身から出た錆みたいなものだし」

「ですが、明らかにあれは向こうが一方的に因縁を付けていたでしょう？」

「まあ、こいつが、一夏が言ったように自業自得でもありますから」

さっきの三人組と同じグループ、ないしは同じ考えを持っている者かと思っていた二人だったが、どうやらただ見ている心配になっただけらしい。そんな彼女のお人好しをどこことなく微笑ましくなった二人は、警戒を解いて不敵に笑った。これは余計に負けられないな、どちらともなくそう呟いた。

「そんな楽観的でいいんですか？ あの三人は資産家の子女で、あの若さで個人のISを持ち合わせている特別な生徒達です。あのISも、彼女達用にカスタムした特別機なんですよ」

「専用カスタム、ですか」

「はい、Fコアでフレームこそ量産機のそれを使っていますが、パイロットの能力を引き出せるように改造されたそれは通常の量産機を優に上回る性能を持っています」

「へー、ってことはあの人達結構強いのか」

彼女はそんな一夏達を諫めるように言葉が続けたが、対する彼等は呑気にそんな言葉を返すのみ。それどころか、だったら相手にとって不足無しなどと笑みを浮かべるほどである。負けられない理由がもう一つ増えた、そんなことを続けた。

「ですから！」

「大丈夫大丈夫。心配してくれてありがとな、先輩」

「お心遣い、感謝します」

いい加減向こうを待たせても悪い、と二人はそこでISを展開している三年生へと歩みを進めた。どうやらもう止めても無駄らしい、と判断した彼女は溜息を吐く。今年の一年生は去年以上に頭の痛い存在になりそうだ。そんなことを頭に浮かべた。

「大丈夫大丈夫」

「本音……貴女までそんなこと」

二人のいなくなつたタイミングを見計らつたのか、いつの間にか隣にいた袖の余つた制服を着た一年生、自身の妹である布仏本音を見た彼女はもう一度溜息を吐いた。クラスメイトが危ない目に遭つているのにそんなことでいいのか。そう述べても、本音は変わらず大丈夫だと言いつける。

「それに、ちょうどいいんじゃないかな？ 『しののの』のエージェントさんの実力、直接見られるし」

「……お嬢様みたいなこと言わないの」

「えへへ」

わざわざ厄介事を起こす必要は無いのに、とぼやきながら彼女は――
布仏虚は更に深い溜息を吐いた。

アリーナ中央部で待ち構えている三年生三人の下へと辿り着いた一夏と箒は、先程行っていたようにそれぞれガントレットと鈴の付いた紐——待機形態となっている自身のISに手を掛けた。瞬時に展開されたそれは、二人の体を戦闘用の姿へと変化させていく。

一夏のISは白を基調とした四肢とウイングスラスタの所々に青い模様が描かれ、胸部装甲はそれとは逆に青を基調としたカラーリングとなっている。その左手には実体盾、右手には銃が握られており、一見しただけでは特に何かに特化しているようには見受けられない。箒のISは彼とは裏腹に、四肢とスラスターには赤を基調とし黒い様相が施されている。どこことなく武者の甲冑をイメージさせる頭部の角飾りと左右の腰に付いている巨大な鞘を思わせるパーツが特徴的で、二刀を構えたその姿は近距離戦に特化しているのだろうということを相手に抱かせた。

そのどちらもが、通常の量産機とは一線を画す姿をしている。彼等の為にあつらえられた専用機、二人が纏っているものはつまりそういうものなのだ。加えるのならば、通常専用機というものは国家代表やその候補生というある程度の地位の者か企業のエースパイロットのような相応の実力を持った者に与えられるものである。特に何の肩書きも無い一般生徒が所持出来るような代物ではない。

「んじゃ、一応自己紹介といきますかね」

そんな専用機を纏った少年、一夏は隣にいる箒に目配せをしながら不敵に笑う。自分達のこの姿を見たことで敵意が更に膨れ上がった三人達に向かって、言葉を紡ぐ。

『しののの』見習いエージェント織斑一夏。IS『白式』汎用万能型改修機『雷轟』。行かせて貰うぜ」

『同じく』しののの』見習いエージェント篠ノ之箒。IS『紅椿』汎用対応格闘型改修機『先駆』。推して参る」

一夏が銃を、箒が刀を。それぞれを構えたのを見て、三年生三人もそれぞれの獲物を収納領域から呼び出した。一人が近接ブレード、一人がIS用アサルトライフル、一人がIS用のマシンガンを構えるその姿に隙は見受けられず、先程虚嬢が言っていた言葉が間違っていない

ないことを感じさせた。

先陣を切ったのは一夏。スラスタを吹かし間合いを詰めんと一直線に駆ける。当然そんな突進など迎撃は容易と遠距離武器を構えていた二人がその銃口を彼に向けたが、それに合わせるように一夏が持っていた右手の銃の引き金が引かれた。実弾ではなく、一筋の光が彼女達の脇をかすめる。それにより彼の射撃武器がビーム兵器だと判断した三人は即座に分散、近接ブレードを持った一人が左側から斬り掛かる。予想通りと言わんばかりにその斬撃を盾で受け止めた一夏は、そのままシールドを相手に叩き付け残り二人の射線上から離脱した。

「と、とととと」

「何だ、当たらんのか」

「お前はどつちの味方だよ！」

直前に一夏が立っていた場所に掃射されているのを眺めながら、まだ攻撃を行っていない筈が呟いた。そんな彼女の呟きを、追撃を行おうとしている三人から視線を外さずに彼は物申す。ついでにもう一言付け加えた。お前も戦え、と。

「無論、そのつもりだ」

言葉と同時に彼女は右手の刀を振り被る。マシンガンを構えている三年生の一人に目標を定めたそれは、本来届くはずも無い斬撃が衝撃波のように刀から打ち出され彼女を襲った。予想だにできなかったその光景に一瞬あっけに取られた彼女はガードが間に合わず直撃。ISの活動や勝敗判定に使われるシールドエネルギーが減少していく。彼女にとっては幸いかそれほどのダメージではなかったようで、すぐさま体勢を立て直すと二撃目を放とうとしている筈に向かってマシンガンを打ち込んだ。攻撃態勢を取っていた筈は強引に回避を行ったが、躲し切れなかった銃弾がシールドエネルギーを僅かに削る。

「やーい、当たってやんの」

「うるさいぞ一夏」

「先に言ったのはお前だろ？ 人を呪わば穴二つ……なんかいやらし

いな」

「二夏、お前は一度死んだ方がいい」

下らない事を抜かした二夏を突っ込んできている一人に向かって蹴り飛ばすと、箒は先程のマシンガンを持った三年生へと間合いを詰めた。的を絞らせないようなるべくランダムに軌道を変えつつ、牽制を込めて右手の刀から斬撃を飛ばす。しっかりと狙っていないのは百も承知であるものの、しかし回避を行わなければいけない程度には照準を合わせられている為、余計に距離を詰めてくる箒に対する弾幕が薄くなる。そのまま近接武器の間合いに入るかと思われた箒だが、別の方向からの銃撃により再び距離を開けられた。アサルトライフルを持っていた三人目が彼女と相対している三年生のフォローに回ったらしい。二対一の状況になった箒は舌打ちをすると、今度は左手の刀を振り被った。

「悪いが、先輩だからといって花を持たせはせん！」

右手の刀とは違い、刀の軌跡が扇状に広がる衝撃波となって二人を襲う。ほぼ彼女の前面全てに展開されたそれは、コンビネーションで追撃しようと銃を構えていた二人の虚を突く形となった。先程の箒のように舌打ちをした二人は、それぞれ逆方向へと回避する。

彼女から見て右、マシンガンを持っていた三年生の方へ視線を向けた箒は、右手の刀を一振り、二振り、三振り。連続で斬撃を飛ばすと、すぐさまスラスタを吹かして間合いを詰めた。その方向は左。斬撃を飛ばした方ではなく、何もなかった方向へである。既に相手はアサルトライフルを構えていたが、そんなものは関係無いとばかりに真っ直ぐに突っ込んだ。銃口から打ち出された弾丸は箒の眉間をしっかりと狙っていたが、わずかに首をずらしこめかみを軽く扶る程度でダメージを抑えた。抑えたとはいえ、危険部位へのダメージには違いがない為『絶対防御』は発動してしまい通常よりもシールドエネルギーが多く減少する。だがそれでも、まだ戦闘不能になるまでには至らない。

体を捻り、その勢いに体重を乗せて蹴りを放つ。刀で攻撃をすると思っていた三年生の彼女は、防御の隙間を縫われたその一撃で面白い

ように吹き飛ばされた。通常ISでの戦闘は空中で行うことが多い為、そういう体術を使う者はまずいない。地面を踏ん張る、という動作の出来ないISで人間時の動きを行ったところで、ダメージを相手に伝えることが難しいからだ。だから、通常は相手が体術を使用することなど想定していない。だからこそ、彼女は箒の一撃をクリーンヒットしてしまった。

予想だにしていなかった一撃で思わず我を失っていた彼女は、瞬時に己を立て直すと空中制御を行う。が、その前に背中に何かがあぶつかった。壁ではない、壁ならばもつと平面で、そして大きいはずだ。そしてなにより。

「おぶつ!？」

こんな間抜けな声を発することは無いはずだ。

慌てて彼女は振り返る。人間一人が激突した為かバランスを崩している一夏の姿が目に入った。今は自分も体勢が崩れているが、相手も条件は同じ。ならばこのチャンスに逃す理由は無い。そう判断した彼女は持っていたアサルトライフルを彼に向ける。そしてそのまま再び固まった。

彼女が放とうとしたアサルトライフル、その銃身が斜めに切断されていた。先程蹴り飛ばされたあの時に、箒は同時に斬撃も行っていたのだ。彼女自身にはなく、持っている得物へと。次に攻撃しようとした際、一瞬でもそこに意識が向くように。敵の目の前で、動きが止まるように。

「悪いな先輩、箒の作戦勝ちだ」

眉間に何かが押し付けられる感触で我に返った時にはもう遅い。彼女の視界には銃の引き金を引かんとしている一夏の姿が映っていた。背後には彼女の仲間である三年生が近接ブレードを構え突っ込んできているのが見えたが、その刃が届くより彼が引き金を引く方が早いだろう。そう判断した彼女は、短く溜息を吐くと瞳を閉じた。次は負けない、そう呟いたのと『絶対防御』によりエネルギーがゼロになるのが同時であった。

「これで『対二』」

そう叫びながら、一夏は振り向きつつ持っていた銃を突っ込んでいる三年生へと投げ付ける。ISを纏っている状態ならば当たったところでどうにかなるものではないそれは、しかし人の反射により思わず彼女は避けてしまう。その隙に彼女より先に間合いを詰めた一夏は、いつの間にか収納領域から呼び出していた近接ブレードを振り被っていた。持っていた銃と同じように刀身がビームで覆われたそれは、真っ直ぐ横に、彼女の上半身と下半身を泣き別れさせるように軌跡を描く。

先程までの一夏との戦闘でシールドエネルギーを削られていた彼女のISは、その一撃で完全に沈黙した。負けたのだ、ということを確認した時には既にゆっくりと機体は下に落ちていくところ。動かなくなったISを纏い、悔しさを隠そうともしない顔で彼女は剣を振りぬいた目の前の少年を睨んだが、彼の邪気の全く無い笑みとピースサインを見てどうでもよくなった。まあ、織斑先生への態度は不問にしておいてやるか。そんなことを考えた辺りで彼女の背中は地面に着いた。

残っているのはあと一人。振り向くことなくISに備わっているハイパーセンサーでそれを確認した箒は、少し焦り気味になっている三年生の女生徒のマシニングンを避けながら二刀を構えた。地面を蹴るように空中で加速すると、彼女は真っ直ぐに刀を突き出す。それを待っていたと女生徒はいつの間にか持っていたIS用手榴弾を目の前に放り投げたが、しかし。

「言っただろう。先輩だからといって花を持たせはせん、と」

刀の軌跡上にあつたはずのそれは、気付くと箒の左手に握られていた。眼前に突き出されたそれを見て一瞬あっけに取られた彼女は、箒がそれを自分の目の前に投げ返したことも、それを起爆させる為に後ろに下がりながら斬撃を放っていたことにも対処が遅れてしまった。無論、この状況でそれは致命的だ。

「私達の勝ちだな、先輩」

爆発音に紛れて聞こえたその言葉を聞きつつ、彼女の体は重力に引かれていった。

三人が撃墜されるのを見た虚は、やれやれと安堵の溜息を吐いた。どうやら実力は噂通りだったようだ。そんな感想を抱きながら隣で同じように観戦していた妹に視線を向ける。

「貴女は気に入らなかつたみたいね」

「ん〜。まあね〜」

普段の彼女の表情とは違い、どことなく難しい顔で勝利者である二人を睨んでいた。文句がありますと言わんばかりの顔をしている本音に、虚は一体何が不満なのかと訪ねる。顔を二人から自身の姉に向け直した彼女は、だって、と呟いた。

「お昼にさ、自分で取ったわけじゃない肩書きなんか関係ない〜とか、色眼鏡で過大評価されるのは心外だ〜とか言ってたのに、『しののの』見習いエージェントだってわざわざ宣言してたし」

「成程」

本音の言葉に頷きながらも、虚はそれは多分違うと続けた。確かにその言葉を聞けばそう考えてしまうのはもつともだとは彼女も思う。だが、しかし。それはあくまで表面上の話である。

「自分で取った肩書きにしたいのよ、きつと」

「へ?」

「自分自身で胸を張って『しののの』のエージェントだって名乗る為に、それが過大評価ではなく正当な評価となるように。そう思っているのじゃないかしら」

その為に、きつとあの二人は強くなろうとしているのだろう。自身の所属する組織の先輩でもありおそらく目標でもあろう女性、織斑千冬と肩を並べる為に、自信を持って同僚だと言つてのける為に。

そんな虚の言葉を聞いた本音は「そんなものなのかな」と首を傾げてはいたが、しかし納得出来ないわけではなかつたようで表情を普段のようなほほん顔に戻していた。だが、思い出したように再び表情が不満げになる。

「まだ何かあるの?」

「あるよ、ばつちりある! 二人より絶対かんちゃんの方が強いもん!」

「……そうね」

「何その顔?」

「唐突だな、と思っただけよ」

呆れるような虚に対し、本音はそんなことないと更に頬を膨らませる。二人の実力を確認するのが目的だったのだから、その結論を出すのは何もおかしくない。そう彼女はだぼだぼの袖を振り回しながら熱弁した。

成程一理ある。そう思いはしたが、あの一戦だけで判断をするにはまだ材料が足りないかと結論付けていた虚は、落ち着けと隣の妹をなだめた。これからまた彼等の戦闘を見る機会は訪れるはずだから、その際に改めて判断をすればいい。そう彼女は続けた。

「う。でもかんちゃんの方が強いもん。だって日本の代表候補生だし」

「そうね。簪さまは強いわ。お嬢様ですらそれは認めている。でも――」

さっきの一戦であの二人は全力を出していないような気がする。その眩きは隣にも届かずに風に消えていった。

「でも、何?」

「何でもないわ。……さて、お嬢様に報告をしないと」

そう言つてポケットから端末を取り出す。目的の人物を呼び出すと、一夏達が戦っていた一連の流れを口頭で説明した。端末の向こう側の人物は了解、と一言返すと、続けてどこか楽しげな声で言葉を紡ぐ。

『丁度、ネズミさんを見付けちゃった』

「……お嬢様?」

『大丈夫大丈夫、油断はしないわ。してたらこっちがやられそうだし』

その言葉で通信は途切れた。再び呼び出そうとしても、コール音が続くのみで繋がる気配は全く無い。そのことにどうしようもなく嫌

な予感がした彼女は、本音に一言だけ述べてアリーナから駆け出した。

どうか無事でいてください楯無さま。そんなことを呟きながら。

そんな虚嬢に心配されているとは露知らず、などということなく、薄々感じ取っているお嬢様——更識楯無は、目の前にいる妙齡の女性を呼び止めていた。綺麗な金髪をしたその女性は、楯無の言葉に足を止めて振り返る。一体何か御用かしら、そんなことを述べる表情に別段変化は見られない。

「いえ、少しお聞きしたことがあります」

「あら、そうだったの。何かしら？」

「はい、実は——ああ、その前に自己紹介をしていませんでしたね。私は更識楯無、この学園の生徒会長を務めています」

その言葉を聞いて女性の目が一瞬だけ細められたのを彼女は見逃さなかった。だが、表面上は何も気付いていない体を装い、そのまま会話を続ける。

先程アリーナから出て行くのが見えましたが、一体何の御用事でしょうか。そんな彼女の口から発せられたその言葉は、生徒会長という肩書きを持っているのならば別段おかしくない質問である。教師から言われて来たのかもしれないし、自身の判断でやってきたのかもしれない。どちらにせよ、何故そんな質問をするのか、という問い掛けをしたところで無意味だろう。女性はそう判断すると、少し所用があつて立ち寄らせてもらったのだと返答した。

「所用、ですか」

「ええ。詳しくはこちらの仕事に関わるから話せないのだけれど、ほら、この通りちゃんと学園の許可は貰っているわ」

そう言つて彼女は胸ポケットから許可証を取り出す。偽造かと思ひ楯無はそれを手に取らせてもらったが、特に怪しいところの見当たらない真つ当なものであった。返してもらつた許可証を受け取つた女性は、話が終わりならば失礼させてもらうと踵を返す。彼女はその

後姿を素直に見送った。

「いえ、まだ話は終わってません」

などというのではなく。去つていこうとする背中に向かって声を掛けた。まだ何か用があるのかと女性は振り向いたが、その眼前に突き付けられているのは、部分展開により呼び出されたIS用装備の槍であった。

「……何の真似かしら？」

「あら？ さつき言いませんでしたっけ？ 私、生徒会長なんです」

「ええ、言っていたわね。それとこの行動に何の関係が？」

「生徒会長って、生徒を守る者だと思っうんですよ」

「ええ、そうね。それで？」

あくまで女性は表情を崩さない。対する楯無も表情を変えない。淡々と、ただ淡々と会話を続ける。

「——その戦闘データ、返してもらえるかしら？」

その言葉に女性の眉がピクリと上がった。そして、やれやれと溜息を吐くとスーツのポケットから記録用媒体を取り出す。

「流石は生徒会長さん、つてどころかしら」

「フオローしてくれる仲間が凄いのよ」

その媒体を目の前の楯無に投げながら、女性は薄く笑った。その笑みに返すように楯無も微笑むと、受け取ったそれをポケットに仕舞い込み槍を持つ手に力を込める。

さて、これで無罪放免、といくわけがない。その瞳はそう物語っていた。

「あら、もう返却したのに厳しいのね」

「当然。不審者は事情聴取を受けなくちゃ」

「怖い怖い。でも、その誘いはお断りさせてもらうわ」

瞬間、彼女の前で何かが弾けた。強烈な閃光を発したそれは、目の前を真っ白に変え視力を奪う。思わず槍を突き出したが、その一撃は空を切った。

視界が戻る頃には、既に彼女の目の前に人影はなく。

「逃げられた、か」

部分展開していたISを仕舞い、懐から出した扇子を広げ、肩を落とす。『捕獲失敗』と書かれたその扇子で自身を扇ぎながら、悔しさを隠そうともせず眼前を睨み続けた。

そのまま暫くその体勢を維持していた彼女だったが、溜まっていたものを吐き出すように溜息を吐くと、先程取り返した記録媒体を取り出し眺めた。

「世界初の男性ISパイロットの戦闘記録……。確かに正式に記録として残るのは初だろうけど、そこまでの価値があるものなのかしらねえ」

手でもてあそびながらそんなことを呟いた楯無は、次の瞬間いいことを思い付いたとばかりにニヤリと笑った。携帯端末を取り出すと、お目当ての人物へと電話を掛ける。彼女のやりたいことを伝えると、特に問題なく許可が出た。それでこそだと笑みを強めた楯無は、続けてもう一人の人物へと連絡を取る。

『はいはい？ あ、たちちゃん、どうしたの？』

「いやね、ちよつといい特ダネのデータがあるんだけど、いらない？」

『特ダネ!? いるいる!』

「オツケー。じゃ、そっちに持っていくわね」

そう言つて通話を終了させた彼女は、電話の相手の下へと向かう前に、もう一度さっきの女性が消えた場所を見た。

そんなにこのデータが貴重なら、いつそ盛大にばら撒いてあげろわ。誰もいない空間に向かってそう告げると、楯無は今度こそ踵を返してその場を後にするのだった。

尚、途中で血相を変えた虚と出会いこつてりと絞られたのはここだけの話。

NO03 「俺と、勝負だ！」

号外号外、と数人の女生徒が紙の束を持ちながら走り回る。登校してくる生徒にそれらを一枚一枚配りながら、彼女達は声を張り上げた。配っているその紙に目を通した人々が食い入るように記事を眺め、また目を見開いて驚いているその表情を見ると、この行動に意味はあったと女生徒達は嬉しくなる。

昨日の放課後突然渡されたある戦闘記録。それを見た彼女達新聞部は寝る間も惜しんで記事を作り上げた。全ては、今この瞬間の為に。

「世界初の男性IS操縦者の初陣！ その結果がここに！」

徹夜明けでテンションがおかしくなっている部長を眺めながら、部員の少女達は手に持っている紙を配り歩く。誰彼構わず、とりあえず目に付いた人物に紙を渡す。

ふとそれを渡した女生徒の顔を見ると、持っている新聞に載っている人物と同じことに気が付いた。加えて言うならば、やられている方の、である。部員の少女は思わず後ずさりをして、どうやって逃げようかと周囲を見渡した。

ところが、彼女の予想と裏腹に、三年生の女生徒は苦笑を浮かべるとそれをカバンに仕舞うというその行動だけで立ち去ってしまった。怒っていないのだろうか、という疑問が頭をもたげたが、しかしそれをわざわざ聞きに行くほど彼女は無謀ではない。何も言われなかったのならばそれでいいと判断し、また別の人物に持っている新聞を手渡した。

受け取った女生徒は、リボンタイからすると一年生。地毛の金髪からすると留学生なのだろう。所謂縦ロールと呼ばれるその髪型が、不思議と彼女の雰囲気にもマッチしていた。

女生徒は渡された新聞記事へと視線を移す。そこには、自身のクラスメイト二人が見知らぬ相手と大立ち回りをしている写真が載っていた。記事によると、二人は三年生のカスタム機相手に余裕の大勝利を収めたいらしい。記事の書き方からすると眉唾ものではあるが、し

かし勝利したのは事実なのだろう。流石にそこを捻じ曲げるほど腐ってはいまい、そう判断した彼女は、手に持っているその記事を丁寧に折るとカバンの中に仕舞い込んだ。

「ふふっ……。やはり、わたくしの思った通りの実力を持っているようですわね」

自然と浮かんでくる笑みを隠そうともせず、女生徒——セシリア・オルコットは歩みを進める。自分の所属する一年一組の教室へ、この号外で一躍時の人へ変わった人物達のいる教室へと、歩みを進める。

思わず作った握り拳に力が入った。持っているカバンを握る力が強くなった。地を踏みしめる力が増した。闘争本能が、溢れ出した。「是非とも……お手合わせを願いたいものですわ」

そう呟いた彼女の笑顔は、その纏う雰囲気とはかけ離れているほどに凜猛なものであった。獲物を狙う猛獣、そう形容するのがしっくりくるような、そんな顔で。

いけないいけない、と軽く自分の頬を叩いたセシリアは、表情を元に戻すとゆつたりとした動作で教室の扉を開いた。

「だー！ もうほつといってくれよ！」

「何だ一夏、昨日は遠巻きに見ていられるくらいならどんどん話し掛けると言っていたくせに」

「限度があんだよ！ ついでにいうと朝からずっと同じ話題なんだぞ！ せめてもう少し違う話題をだな」

「あ、織斑君！ この記事のことなんだけど」

「うがああああ！」

一年一組の教室で、渦中の人物は吼えた。朝、寮を出て学園へと向かう道のりから今この瞬間まで同じ話題を延々続けられているのだ。そうなってしまうのも至極当然と言えるだろう。ただ、この状況を作った原因は何かと問われれば自分達が暴れたからだと言ってしまう訳で。

若干怯えてしまったクラスメイトに謝罪しつつ、一夏は今までしてきた話と同じものをもう一度口にするのだった。何だかんだで律儀な人物である。

「ていうかだな。何で俺ばっかなんだよ」

「勿論、お前が男だからだ」

「何という男女差別！ 女尊男卑はいけないと思います！」

「違うぞ一夏、お前がカッコいいから皆が注目しているんだ」

「え？ そ、そうなのか？」

「無論だ。私もそう思っているのだからな」

「マジで!? じゃあ告白したらオーケー貰える？」

「ごめんなさい」

「やっぱりかよちくしよう！」

そんな状況にもかかわらず、結局いつもの調子でこの二人は軽口を叩いていた。そんな光景を、初日である程度慣れた面々は生暖かい目で、運良く目撃していなかった生徒は一体何事だったのかとドン引きで眺めている。そして、前者の中でもトップクラスに位置する三人は生暖かいを通り越して笑っていた。

三人とは言わずもがな、布仏本音、谷本癒子、鏡ナギである。

「おはよ、二人共」

「おはよう、織斑君、篠ノ之さん」

「おはよう。朝から大変だったみたいだね」

加えると空気の読める三人はコント中の二人に向かって極々普通に声を掛けた。号外は三人とも貰ってはいるが、そのことについては話題に出さない。

それが何より嬉しかったのか、一夏は目を輝かせながら三人に向かって朝の挨拶を飛ばした。爽やかな笑みを浮かべるその姿は、先程の筈の軽口ではないが充分に異性を魅了するだけの力を持ち合わせているようであった。事実、一瞬見とれてしまった癒子とナギは誤魔化すように視線を逸らす。

「ん？ どうしたんだ二人共」

「んっふっふ。おりむーがかっこいいから二人は惚れてしまったの

だ〜」

「マジで!? じゃあ告白したらオーケー——ってこれ天井じゃねえか！」

「ちっ、気付かれたか」

隣で頭を潰そうとスタンバイしていた箒が残念そうに右手を下ろす。もう少しだったのにと呟いていることから、隙あらばアイアンクローを叩き込もうと画策していたらしい。

「それにしても、おりむー人気者だね〜」

「そうか? こんなのも、パンダからふれあい動物コーナーにランクが変わったようなもんだろ」

「そ、そんなことないと思うよ。こんなのはきっかけで、本当はみんな織斑君と話したかったんだよ」

「そうそう。今はこの記事の話だけかもしれないけど、その内色々なことで話し掛けてくるよ、きつと」

人気者である、という本音の言葉を否定するように一夏はぼやいたが、癒子とナギがそんなことはないと告げる。流石に二人揃って違うと言われれば、彼も自分の意見を変えようかと顎に手を当てた。箒はそんな一夏を見て薄く笑う。本人としては微笑んでいるつもりなのだろうが、どうにも目付きの悪さの所為で何かを企んでいるように見えてしまうのは致し方ない。

そのまま五人で雑談を行っている内に、朝のホームルーム開始を告げるチャイムが鳴り響いた。それじゃあまた、と各々の席に戻っているのを見ながら、一夏も自分自身の席へと着く。さて、今日の一時限目は一体何だったのだろうかと時間割を確認していた辺りで、千冬と真耶が教室へと入ってきた。ホームルームが開始され、朝の注意事項を二・三個述べると、千冬は思い出したかのように手を叩いた。

「そういうえば、クラス代表を決めなくてはいけなかったな」

クラス代表、という聞きなれない単語を耳にした一夏は首を傾げた。続けてされた説明を聞いて要は学級委員長のようなものかと納得した。つまりは面倒な仕事を押し付けられる役割なわけだ。そう結論付けた彼は、自分は絶対にならないでおこうと心に決める。

しかし、彼は失念していた。クラス代表の仕事の一つに代表同士によるクラス対抗戦という行事があるということ。そして、今朝自分は一体どんな理由でもみくちやにされていたのかということ。

「では、誰か立候補者はいないか？　いないなら推薦でも構わんぞ」

「はい！　織斑君がいいです！」

「はい！　それでいいと思います！」

「はい！　賛成です！」

「ちよつと待ったー！」

日頃等との掛け合いの賜物か、クラスメイト達が発言したその提案に即座に一夏は食って掛かる。一体全体何故どうして自分が推薦されなくてはいけないのか。言葉と同時に立ち上がった一夏は身振り手振りを交えて熱弁した。

大体、自分は成績も良くはないし、授業態度だって良いとは言いがたい。自分自身を思い切り低評価しながら、どうにかしてその意見を取り下げさせようと必死で語る姿は、みつともないを通り越して笑いを誘うほどであった。事実、箒は肩を震わせて一夏を見ないよう窓の外へと視線を向けている。

「織斑」

「な、何だよ——ですか、千冬ね——先生」

「ちよつと黙れ。鬱陶しい」

「バツサリ!？」

千冬に止めを刺された一夏はそのまま燃え尽き力無く椅子に座る。そんな彼には目もくれず、彼女は他にいないのならは無条件で当選だが構わないかと述べた。暫く教室を眺めて待つてみたが、別段不満がありそうな表情をしている生徒がいないことを確認すると、ではクラス委員は織斑一夏に決定すると告げた。告げようとした。

その直前、一人の女生徒が真つ直ぐに手を挙げるのを見て、彼女は言いかけた言葉を飲み込む。そして、その女生徒に、金髪縦ロールの少女に向かって声を掛けた。

「オルコット、お前も立候補するのか？」

「……いえ、わたくしとしてはクラス代表は彼で構わないと思ってい

ますわ」

だが、千冬の問いに対する返答は否。では一体どうして手を挙げたのかと続けて尋ねると、彼女はカバンから折りたたまれた一枚の紙を取り出し広げた。恐らくこの学園の生徒全員が持っているであろうそれは、朝新聞部が配っていた号外。織斑一夏と篠ノ之箒が大立ち回りをした、という記事である。

「ただ、皆さんが織斑さんを推薦した理由がこれであろうという推測をしたものですので」

「だろいな。許可を出した者として思った通りの結果になるのは好ましい」

「元凶あんたかよー」

復活した一夏の叫びは意図的に流された。千冬も、セシリアも、彼の言葉など聞こえていないかのように話を続ける。一夏の隣の席の少女が「ガンバ」とエールを送ってくれたのが唯一の救いであった。

「ですが、この記事だけでは信憑性が足りないと思うのです」

「……ほう」

セシリアの言葉に千冬が目が妖しく光る。彼女の言いたいことを察したのか、薄く微笑みながら視線だけで話の続きを促した。その態度で理解が得られたと感じたセシリアも薄く微笑み、視線を千冬から一夏へと移した。

「わたくしと織斑さんとで、勝負をするというは如何でしょう」

「クラスの皆の目の前で実力を示せ、とそういうわけか」

「はい。素晴らしいアイデアでしょう?」

「そうだな。良いアイデアだ」

視線を再び千冬に向けたセシリアと、向けられた千冬はお互いに笑う。その顔はどう見ても教師と淑女の笑みではなかったが、生憎そのことを指摘する者は誰もいなかった。クラスの生徒にとつて、そんなことは些細なことだったのだ。

織斑一夏の戦いを見られる。この記事に書いてあるような戦いを、実際に見ることが出来る。そう考えると、彼女達の心は湧いた。是非ともやって欲しい、その思いで満たされた。

本人の意思をそつちのけで、である。

「よし、では話は纏まった」

「肝心の本人の意見ガン無視じゃねえかよ！」

「……何だ織斑、戦いたくないのか？」

抗議の叫びを上げた一夏は、千冬のその言葉で動きを止めた。戦いたくないのか、そう問われた場合、彼としての意見はほぼ百パーセント決まっていた。決まっていたからこそ、答えに詰まったのだ。

戦いたいには決まっている。喉まで出掛かったその言葉を飲み込んだ。彼がそうしたのは、ここで思い通りにされてしまうのは何とも癪だと感じたのが理由の一つ。そしてもう一つは、どうせなら自分から勝負を挑みたいという子供のような意地である。その思いを抱えたまま一夏は暫し無言で天を仰ぐと、やがて覚悟を決めたように大きく息を吐いた。

目の前に立っている千冬を見て、そして振り返って自分よりも後ろの席にいる彼女を睨んだ。そんな一夏の表情を見たセシリアは待ってましたとばかりの笑みを浮かべる。淑女の仮面に隠された、獰猛な猛獣のような笑みを。

「セシリア・オルコット」

「はい、何でしょう織斑一夏さん」

「俺と、勝負だ！」

「ええ。喜んで」

真っ直ぐに突き付けられた拳を涼しげに受け流し、彼女は静かにそう答える。その態度が少し気に入らなかつたのか、一夏は眉を少し上げて言葉を続けた。そうやって余裕ぶっていられるのも今の内だけ、と。

「ふふっ、それはそれは。とても楽しみですわ」

しかし返ってきたのはやはり余裕を感じさせるそんな一言。それを聞いた一夏は尚も言い返そうと口を開きかけたが、千冬のホームルームは終わりだという言葉に口を閉じた。澁々と向きを戻し席に着いたが、彼の中ではまだ気持ちが燻っている。

セシリア・オルコットは、自分が負けるとは思っていない。それが、

先程までの会話で一夏が出した結論だった。流石にそこまでは言い過ぎかもしれないが、少なくとも勝てない可能性は全く考慮していないのは確実だった。彼女は彼のことを自分と同等、あるいは下に見ているのだ。実力を試す、というニュアンスの言葉を紡いでいたことからもそれが窺えた。

上等、と一夏は笑う。それだけの自信を持っているということは、裏打ちされるだけの強さも持っているということだ。だとすれば、相手にとって不足は無い。全力でぶつかって、そして勝つ。そうすることで、自分はまた一つ一人前に近付くことが出来るはずだ。

「よっしや燃えてきたー！」

思わず叫んだ。そして思い切り立ち上がった。

間髪入れずに出席簿が彼の脳天に飛んできた。おおよそ材質的にありえない音が教室中に響き渡る。

「授業が始まる。ちゃんと席に着いている」

淡々と告げた千冬の言葉は、力無く机に体を預けている一夏の耳には届いていなかった。ピクリとも動かないところを見ると、どうやら一撃で沈められたらしい。

やれやれと肩を竦めた千冬は、そのまま動かない一夏を放置して教室から出て行った。一時限目は通常科目、彼女の出番は暫く無い。だから、彼を起こす理由も無い。教師としてそれはどうなのだろうと思わないでもないが、姉と弟と考えるのならばそんなものなのかもしれない。

勿論一夏は一時限目を寝て過ごしたので箒にノートを借りる羽目になった。

朝の一撃がまだ痛むのか、一夏は頭部をさすりながら廊下を歩いていた。その隣では呆れたような顔をしている箒と、そして何故かセシリアが共に歩いている。三人が向かう先は、学食。現在の時間は勿論昼休みである。

入学してから暫くは弁当を用意する予定だった一夏だが、昨日の騒動でそのことをすっかり忘れていたのだ。騒動自体も色々重なっていたのが拍車を掛けているだろう。

「まさか弁当を作り忘れるとは、たるんでいるぞ、一夏」

「そう思うならお前が作ればいいじゃないかよ」

「その場合、お前の分は作らんぞ」

「薄情だなおい！」

「乙女の手作り弁当などという貴重品をそう容易く手に入れられると思うな」

「……たまに思うけど、箸って俺のこと嫌いだよな」

「何を言う。私は一夏にゾツコンラブだ」

「うさくせー」

もう単語からして胡散臭い。そんなことを言いながら一夏は溜息を吐く。勿論本心ではないのは分かっているのだが、こういうやり取りは微妙にテンションを下げられてしまう。これが男同士だったならばもう少し違ったのかもしれない、などと思いつながら彼は視線を横に向けた。箸の隣、二人のやり取りを面白そうに眺めているセシリア・オルコットに。

「なあオルコットさん」

「セシリアで構いませんわ織斑さん」

「あー、じゃあ俺も一夏でいいぞ。んで、何で俺達と一緒に歩いてんだ？」

「あら？ 学友と共に昼食を取るの何かおかしいのですか？」

「いや、別におかしくはないけど」

朝に勝負を持ちかけた身としては、こうやってフレンドリーに接されると戦いにくくなって困る。そんなことをぼやいて一夏は肩を竦めた。しかし、対するセシリアは何だそんなことと言わんばかりに笑みを浮かべる。そして、どこか挑発するように言葉を紡いだ。

「一夏さんは、そんなに甘い人間なのですか？」

「はっ。」

「勝負を持ちかけた人間と仲良く昼食を取ったくらいで戦えなくなる

ような甘い方なのでしょうか、と聞いたのですわ」

「……言ってくれるじゃねえか」

そう言われてはいさうですと答えられるような性格はしていない。たとえそれが挑発であったとしても、彼は流すことが出来ないのだ。単純馬鹿、とも言える。

いいだろう、と一夏はセシリアに向かって指を突き付けた。お前と仲良く昼飯を食って、そして勝負ではコテンパンにする。傍から聞いていると何とも情けない宣言であったが、彼の表情は真剣そのもの。だから、セシリアもその言葉を受けて不敵に微笑んだ。

「そういえば篠ノ之さん」

「箒でいいぞ。その代わり、私もセシリアと呼ばせてもらう」

「ええ、では箒さん。貴女は良かったのですか？」

「ん？ 何がだ？」

「クラス代表ですわ。あの記事には一夏さんと箒さんのお二人共の活躍が載っていました。あの流れならば当然貴女の方も推薦されるべきでは？」

「まあ、そうかもしれんが」

やはり男性IS操縦者というインパクトには勝てんだろう。そう言って箒は笑った。それに、と彼女は言葉を続ける。どの道推薦されても辞退していたよ、と笑みを崩さないままそう述べた。

「あら、それはまたどうして？」

「剣道部に入部する予定でな。部活とクラス代表の二足の草鞋は私には無理だ」

「成程。それならば仕方ないですわね」

クスクスとセシリアは笑う。その笑みは年相応の少女のようでもあり、綺麗に整えられた淑女のようでもあった。どちらにせよ、先程の際に浮かべていた笑みとは毛色が違う。

一体どちらが本当のセシリアの笑顔なのだろうか、と箒と話している彼女を見ながら一夏は思う。少女の微笑み、猛獣の笑み。そのどちらもが本当のようであり、そのどちらもが偽りのようでもある。答えの出ない問いに悩みながら、彼は辿り着いた食堂の扉を開いた。

食堂は思った通りの盛況ぶり、座ることの出来る場所は残っているのだろうかと思ってしまうほどの人口密度である。だが、良く周囲を見渡してみると、席が空くまで待っているという生徒はいないようであった。ならば、こう見えてもちゃんと座る席はあるのだろうか。そう結論付けて、三人はそれぞれ食事を注文して席を探す。

――が。

「……騙された!」

「ないな、席」

「困りましたわね」

空いている席が無い。正確には、相席以外の選択肢が無い、と言わなければならない。完全に開いているテーブルは見る限り何処にも無く、三人が三人だけで昼食を取るということは無理そうであった。どうやら先程席があるように見えたのは、他の生徒は相席でも気にせず座っている為だったらしい。もう少し良く観察しておくべきだったと肩を落としつつ、三人は仕方ないとどこか相席出来る場所を探して視線を彷徨させた。

ふと、テーブルに一人で座ってうどんを食べている女生徒が目に入った。内跳ねしているセミロングが特徴的な眼鏡を掛けたその女生徒の周りには誰か座っている様子も無く、三人分のスペースは空いている。これは行幸と一夏はその女生徒の座っている場所まで歩みを進めると、ちよつとすいませんと声を掛けた。

「……何?」

「いや、見ての通り学食満員なんで、ちよつと相席お願いしたいなーなんて」

一夏の言葉に女生徒は彼とその傍らに立っている二人を見渡した。三人共に知らない顔ではないが、出来れば昼食は静かに食べたいと思っていた彼女は少しだけ考える。しかし、ここで断るのも何だか薄情だろうと判断した彼女は、小さく溜息を吐くとどうぞと答えた。

「おお、さんきゅー! あ、俺織斑一夏、って知ってるか」

「随分自意識過剰だな」

「今日のあの惨状を考えれば別にそこまででもないだろ」

「確かに、今も一夏さんの顔をちらちらと見ている方々もいらっしやるようですからね」

二人の言葉通り、確かに彼女は彼のことを知っている。ただ、その理由は今話題に出ているように号外を見たからではない。見る前に、その話を親友から聞かされていたのだ。

絶対にかんちゃんの方が強いから、おりむーをコテンパンにするんだよ。最後にそう締めくくられたのを思い出して、彼女は思わず笑みを浮かべた。

「ん？ 俺の顔そんなに面白かったか？」

「大爆笑だぞ一夏」

「お前には聞いてねえよ」

尋ねた割にそっちのけでコントを始める二人を見て、今度こそ本当に彼女は彼等が原因で笑みを浮かべた。どうやらもう一人も同じように、二人のやり取りを見ながら微笑んでいる。

ふと、そんな彼女と目が合った。

「わたくしの顔に何かついていますか？」

「いや……そういうわけじゃ、ない」

「そうでしたか。それは申し訳ありませんでしたわ」

笑みを崩さないまま目の前の彼女、セシリア・オルコットはそう述べる。そして、ところで、と言葉を続けた。

「貴女は、クラス代表になったのですか？」

「……何故、そんなことを？」

「そうですね——貴女が日本の代表候補生だから、でしょうか」

その言葉を聞いた少女は一瞬目を見開き、しかしそれも当然かと思いついた。目の前の相手はイギリスの代表候補生、この学園に入学する際に同じ代表候補生の情報くらいは調べていてもおかしくはない。事実、自分がそうなのだから。

少しずれた眼鏡を指で直しながら、彼女はセシリアをじっと見詰める。余裕の表情を崩さないその態度は、自信を持ってない自分にはどことなく輝いて見えた。

「多分、私になると思う」

とりあえず質問には答えようと彼女は言葉を紡ぐ。セシリアは彼女の言葉にそれは良かったと返し、そのまま自分の食事に手を付け始めた。その様子を暫く眺めていた少女だったが、自分も昼食途中だったことを思い出し箸を付けた。

いつの間にか食事にシフトチェンジしていた一夏と箒も合わせ、暫し食事を取る音だけが彼等の周囲の空間を支配する。先に食べていたこともあり、少女が最初に食べ終わった。

「それじゃあ、私はここで」

「ああ、相席ありがとな」

「済まなかったな」

「ありがとうございます」

空になった容器のトレイを持つと、彼女はそのまま席を立つ。思わぬ出会いをしてしまった三人に一言だけ述べ、返却口まで歩みを進めた。

しかし、一体彼女は何故あんなことを聞いたのだろう。歩きながら少女は頭に浮かんだ疑問について考える。一体、自分がクラス代表になると何が良かったのだろうか。答えの出ないその問題に、彼女は思考を巡らせる。

ひよつとして、自分がクラス代表ならば楽勝に勝てると思っっているのだろうか。ふと、そんなことを思った少女は、それも当然かと肩を落とした。偉大な姉と比べて、自分は所詮劣等者。そう思われても仕方がない。ほんの疑問からどんどんネガティブな思考に陥ってしまった少女は、人知れず大きな溜息を吐いた。

「でも……」

それでも、そんな矮小な自分にだってプライドはある。そんな風に馬鹿にされたのだとしたら、全力を以ってその意見を覆してみせる。姉に守られずに、自分で自分を守る。それが、自分の出来る唯一の姉への反抗だから。

それに。

「本音に、応援もされてるしね……」

だぼだぼの袖を振り回しながら熱弁を振るっていた親友の姿を思

い出しながら、彼女は一人微笑んだ。

No04 「ただの勘だ」

放課後に行く予定であった一夏とセシリアの勝負は、アリーナの使用状況により翌日に延期となった。そのことを聞いたセシリアは余裕を崩すことなく頷いたが、対する一夏は不完全燃焼気味であることを隠そうともせずにつつきらぼうに返事を行う。そんな表情のまま、予定も潰れたんで帰りますと言いながら自身のカバンを掴んで足早に教室から出て行ってしまった。傍から見ていると完全に拗ねた子供のそれである。

「しかし織斑先生、放課後直前になってその報告と言うのもいささか遅いのではないですか？」

そんな拗ねた子供を目で追っていた箒は、視線を外から目の前の担任教師に戻すとそう問うた。アリーナの使用状況が原因ならばもう少し早く報告出来たはず、そう彼女は考えたのだが、それを読んでいるかのように千冬は首を左右に振った。

「昼まではそうでもなかったんだが、どうやら使用許可の書類がどこかで止まっていたらしくてな。先程もう一度確認したらこの様だ」

「それでも、こちらも朝に使用許可を出したんですよね？」

「ああ、出したとも。だが、止まっていた書類はそれ以前に出されたものだったそうだ」

号外を見た時点でアリーナに使用許可を求める書類が殺到していたらしい。朝のホームルームが終わった後では早さでそれらに敵うはずも無く、というわけである。成程と納得したように頷いた箒は、では私も帰りますと席を立った。特に目的地を述べていたわけではなかったが、向かった方向から大体予想は可能である。結局、彼女は拗ねた子供が気になるらしい。

そしてそんな彼女を見ていたクラスメイトも、それをきっかけにそれぞれ教室から姿を消していく。予定を変更して明日は絶対に放課後を空けなくては、などという会話が聞こえてくることから、一夏とセシリアの対決を見逃す者はいなさそうであった。

「それで、お前はここで何をやっているのだ？」

IS 学園学生寮の一室、織斑一夏と篠ノ之箒の部屋で、彼は布団に包まって不貞腐れていた。見て分からないか、と箒の顔を見ることなく答えている様子から、完全にへそを曲げているのが分かる。

やれやれ、と箒は溜息を吐いた。こんなことで本当に明日の勝負で勝てるのだろうかと思いつつ、彼女は一夏の包まっている布団を引っぱがす。

「何すんだよ箒」

「たるんでいる一夏に喝を入れている」

「たーるーんーでーまーせーん」

「……もう高校生なんだぞ、一夏」

「可哀相な者を見る目はやめて！」

しみじみと溜息付きで言われたのは堪えたのか、一夏は寝転んでいた布団から体を起こした。渋々ながらも、箒の方を向いて話の続きを促している。それで、どうやって俺に喝を入れるんだ？ そんなことを言いながら彼は彼女の次の言葉を持った。

だが、彼女が出したのは声ではなく、物。一枚の紙を読めと言わんばかりに一夏の前に突き出す。何だよこれ、などと言いながら彼はとりあえずその紙を受け取った。

そして、そこに書かれているものを見た途端に目を見開く。その顔に浮かんでいるのは、驚愕だ。

「何だよこれ」

先程と全く同じ言葉。しかし、そこに込められている意味は全く違うものであった。それを分かっているのか、箒も渡した紙を覗き込みながら言葉を紡ぐ。

「少しは一夏の刺激になるだろうと思って調べたんだが」

そこに書かれているのは、セシリア・オルコットの簡単なパーソナルデータ。インターネットで検索すればそう時間も掛からず閲覧することが可能な、大して重要ではない情報。だが、二人にとっては何より重い情報であった。

「セシリア・オルコットは、公式非公式を含めて記録に残っている限り、一度しか敗北していない」

「ってか、国内公式試合全戦全勝無敗じゃねえか。何だこの化け物」
二人が見詰めているのは、そのデータの戦績部分である。ある程度記録されている試合の結果を纏めたものがそこには載っているのだが、二百戦以上の試合の中で黒星が付いているものは唯一つのみ。非公式での立会いだったららしいそれは、対戦相手の欄に『織斑千冬』と書かれていた。

「セシリアに勝ったのは、千冬姉唯一人……」

「二応引き分けの試合もあるにはあるが、これはイギリスの国家代表相手のようだな」

「……何でまだ代表候補生やってんだよあいつ」

「まあ、記録に残っていない部分では負けていたりするんだろう、きつと」

そうは言ったものの、逆に考えれば記録に残るような試合ではほぼ確実に勝ちを上げているということにもなる。それだけの実力と、プレッシャーに負けないだけのメンタルを持ち合わせた人物、それがセシリア・オルコットという者なのだろう。そう考えると、彼女を相手にする人間には一体どれほどの実力が必要になるのか。箒はそんなことを思いながら隣の人物を眺めた。どんな表情をしているのかと確認した。

「は、ははははっ」

件の人物は、笑っていた。先程までの拗ねた表情など何処かに追いやり、一夏は心底楽しそうに笑っていた。誕生日に好きなものをプレゼントされた子供のように、嬉しそうな声を挙げた。

「成程な。これだけ強ければあの態度も納得だ」

常に余裕を崩さず、自分が上であるという自信に満ちた態度。それを取れるだけの背景がしっかりと存在しているのだ。妙に納得出来てしまった一夏は、そのまま暫く笑い続けた。

そうしてひとしきり笑った彼は、隣で自身の様子を眺めていた幼馴染の少女に声を掛ける。サンキュー箒。そうお礼を述べて一夏は勢

い良く立ち上がった。

「やる気になったか」

「ああ。この勝負、絶対に勝ってやる」

「その意気だ一夏」

「よし、そうと決まれば特訓だ！」

「それは良いが、アリーナは使えんぞ」

「ISに乗るだけが特訓じゃないさ。とりあえずグラウンド走っていく！」

言うが早いか部屋を飛び出していった一夏を見て、箒は仕方がないなど肩を竦めた。そして、部屋の机に立てかけてある竹刀二本を掴むと彼と同じように部屋から外に出る。

この際だ、とことん付き合ってやろう。そんなことを呟きながら、彼女も後を追うため駆け出すのだった。

翌日。無駄に広いIS学園のグラウンドを走り回った拳句箒と一晩中剣道場で打ち合っていた一夏は、ものの見事に昼休み直前まで爆睡していた。目が覚めて時計を見ると短針が十二を指していたのを見た彼の心境は如何程だったのか。それは彼にしか分からない。勿論箒は普通に起床し普通に学園に向かった。

慌てて教室に向かったのはいいが、運悪くその時間の担当教諭は担任である織斑千冬その人であり。とりあえず理由を聞く前に出席簿で頭部を殴打された一夏は、瞬時にして眠気を吹き飛ばされるに至ったわけである。ちなみに理由を聞いた千冬は盛大に溜息を吐きながら彼を席に促した。

そんなクラスメイトに爆笑されるような姿を晒しつつ、時間は過ぎていく。六時限目が終わり、いよいよ一年一組全員がお待ちかねの時間の到来だ。

「さて、双方準備はいいか？」

予約により貸し切られた第三アリーナにて、千冬の声が響く。それ

に答えるように、アリーナの左右のピットから二つの影が飛び出してきた。一つは白、そしてもう一つは青。そのどちらもが、お互いを真っ直ぐに見詰めていた。

「体力は回復いたしましたか？」

「ああ、バツチリだ。有り余ってるくらいさ」

「それは良かった。全力を出せずに負けてしまったとなれば、お互いに禍根が残るでしょうから」

「その点は大丈夫だ。後な——」

軽口を叩きながら、戦闘開始の合図が出るまでに距離を計る。一夏はセシリアを睨みながら『白式・雷轟』の実体盾と銃を取り出し、それを構えた。

「勝つのは、俺だ！」

その言葉と同時に、試合開始のブザーが鳴り響いた。既に銃を構えている一夏は引き金を引きさえすれば攻撃が出来る。対して、セシリアは無手のまま悠然と佇んでいる。状況はどう見ても彼女の方が有利。彼女が攻撃動作に入る前に、銃口からビームが放たれる。

「……っ!？」

そのはずであったが、一夏は言いようの無い悪寒を感じ、咄嗟に盾を前面に展開していた。それと同時に、左手に衝撃が走り、体が一瞬後ろに泳ぐ。コンソールからは盾の耐久度が減少したことを伝えてきた。

彼が自身の盾で塞がれてしまった視界を広げると、目の前には先程と同じように悠然と佇んでいるセシリアの姿がはつきりと確認出来た。ただし、その右手には機体と同じ青く塗装された一丁のライフルが握られている。恐らく先程の衝撃はあの銃から放たれたものであろうということ予想したが、しかし。

「お見事」

「……よく言うぜ。反応出来るように手加減しやがったな」

明らかに自分の方が早かったにも拘らず先制された。その状況で防御が間に合うということは、つまりそういうことである。彼女はわざと一夏が反応出来る程度に抑えて攻撃を行ったのだ。そのことを

理解した一夏は奥歯を噛み締めた。

「確かに少しだけ遅くしましたが、通常はあれくらいでも反応されないものですわ」

「そうかいそうかい。じゃあ、俺はとりあえず合格ってことか」

「ええ。では早速、わたくしと一曲、踊っていただきますわ」

言うと同時に持っていたライフルを左手に持ち替え、セシリアは連続で引き金を引く。正確に一夏の急所を狙ったその射撃は、しかしスラスターを吹かした彼の機動により躲かれた。そんなことは気にせんとばかりに彼女は尚も射撃を続ける。それを時には躲し、時には盾で受けながらも、一夏は反撃の糸口を探そうと同じく射撃で応戦をしていた。

しかし、彼の射撃はほとんど命中しない。単純に、射撃の量が違うのだ。一夏が一発撃つ間にセシリアは四発以上放つ。圧倒的に手数が足りない。

「まだ前奏ですわよ一夏さん。もう限界ですか？」

「はっ！ 嘗めんな！ まだまだ余裕だつての！」

沈みかけていた気分を打ち消すように叫ぶと、一夏はセシリアと距離を詰める為に前へとスラスターを吹かした。射撃戦では勝ち目が薄い。ならば、多少の被弾を覚悟してでも接近戦に持ち込むべきだ。そう判断したのだ。

無論、そんな彼の意図が分からないセシリアではない。先程より正確に予測射撃を行い、近付こうとするタイミングをことごとく潰していく。それでも、覚悟を決めた一夏の突進の方が僅かに勝った。ほんの一瞬ではあるが懐にもぐりこんだ彼は、持ち替えていたビームブレードを袈裟切りに薙ぐ。盛大な激突音が響き、二つの影は再び左右へと散っていった。

「近接攻撃を受けたのは久しぶりですわ」

「そうかい。なんならもう一回やってやるぜ」

ビームブレードを構え直した一夏が不敵に笑ったが、セシリアは「遠慮しておきますわ」とあくまで余裕の態度を崩さない。機体にはしっかりと先程の斬撃の痕が残っているのにも拘らず、である。彼は

そんな彼女の雰囲気緊張を高めた。

「ふふっ。申し訳ありません一夏さん。わたくし、少々貴方を見くびっていたようですわ」

「知ってるよ。とっくに知ってる」

「あら、それは失礼。……ではそのお詫びに」

セシリアのIS『ブルー・ティアーズ』の左右に浮かんでいた部分から、刃のような四つのパーツが飛び出してくる。それら一つ一つが意思を持つように縦横無尽に動き、そしてその先端に付いている銃口が一斉に一夏へと向けられた。

「本気で、やらせていただきますわ!」

それぞれの銃口からビームが放たれる。その射撃の早さは今までと比べれば幾分か劣るものであったものの、四方八方から放たれるその厄介さは比喩物にならない。上下に避ければ左右から、左右に避ければ上下から。一夏の回避に合わせてカウンターの射撃が飛んでくるのだ、反撃どころか回避すらままならない。

「ちい!」

避けきれない部分を盾で受け流して尚、その射撃は機体のシールドエネルギーを削り取っていく。それでもまだ動けるのは、致命の一撃だけは何とか避けていることと。

「セシリアっ!」

「どうかなさいましたか?」

「本気でって言った割に、ビットしか使わないってのはどういふつもりだ!」

現在のセシリアの攻撃が、全てBT兵器『ブルー・ティアーズ』のみでしか行われていないことにあった。本気で、と宣言しておいてその状況では、一夏でなくとも馬鹿にされると感じるだろう。

だが、そんな彼の叫びも彼女は涼しい顔で受け流す。クスクスと笑いながら、左手に持っていた銃を一夏に向けた。

「BT兵器は操縦系統がとてもデリケートなのです。ですから、そちらに意識を集中させないと縦横無尽に扱えないのですわ」

「……こいつを使ってる間は、自分からの射撃は出来ないってことか

よ」

「はい、その通りですわ」

笑みを崩さず、彼女は自分で自分の装備の欠点を述べる。そしてその通りならば、この状態での活路は一夏ならば容易に導き出せる。難しいことはなく、実行するのはとても簡単なその方法は、B T兵器に狙いを移せばいいという単純なものだ。本体からの射撃が無いのならば、それが一番手っ取り早い。

そうと決まれば話は早いと、一夏は即座に行動を起こした。四つあるうちの一つに狙いを絞り、先程のセシリアに肉薄したように最小限の回避をしながらB T兵器の一つに近付く。ブレードの間合いに入ったのと同時、彼はそれを振り下ろした。下ろそうとした。

「やっぱりな！」

「あら？」

自身の視界とは別に、ハイパーセンサーで常にセシリア本体を捉えていたのが功を奏した。こちらの攻撃タイミングで放たれたビームを、一夏は紙一重で回避したのだ。避けたことで無防備となったB T兵器を破壊しようと思ったが、向こうも回避された時点で自身の周囲へと戻っていた為に不発に終わってしまった。

「縦横無尽に使うには集中しなきゃいけない。つてことは、そうじゃなきゃ別に射撃出来るってことだろ？」

「……意外と頭の回転は速いのですね」

「さりげなく俺のこと馬鹿だと思ってたっていうカミングアウトだよなそれ」

「ええ」

「そこは少しでも否定しろよ！」

そんな軽口を言いつつ、視界は決してセシリアから外さない。彼女の一举一動を見逃すまいと、全神経を集中させて睨むように観察する。

そんな彼の視線を受け、セシリアは笑った。先程までの笑みではなく、獲物を見るように、舌なめずりをするように。

「さて、そろそろダンスを再開いたしましょう」

「生憎だが、ダンスなんかマイムマイムが限界だぞ」

「では、これから学んでいただきますわ。わたくしセシリア・オルコツトと、この『ブルー・ティアーズ』の奏でるワルツで！」

彼女の周囲を停滞していたBT兵器が一斉に一夏へと向かう。それぞれ彼の回避ルートを潰すように展開されているそれは、彼女が集中して操作している証拠だ。となれば、今度こそBT兵器を片付けるチャンスが生まれるかもしれない。回避を優先しつつ、彼は破壊すべきBT兵器を一つ絞る。

「——え？」

その瞬間、彼の顔面に一筋の光が突き刺さった。

「一夏っ！」

観客席で見ていた箒の叫びがアリーナに響く。周囲のクラスメイトも同じように悲鳴を上げていた。

その中で一人、表情を変えずに二人を見詰めていた生徒がいた。

「あら、布仏さんは知っていたみたいですね」

そこに気付いた山田教諭は、その生徒——布仏本音へと声を掛ける。振り返った彼女はえへへと気の抜けた笑みを浮かべながら、当然ですよと胸を張った。

「私のかんちゃんのアドバイザーですからね」

「かんちゃん……？ ああ、四組の更識簪さんですね」

日本の代表候補生にして、専用機『打鉄式』のパイロット。そのアドバイザーをしているのならば、確かに知っていてもおかしくは無い。果たして本当にアドバイザーなのかどうかは別として。そう判断した真耶は納得したように頷いた。

「布仏、今何が起きたのか知っているのか？」

そんな会話を聞いていたのだろう。箒が彼女の方へと振り返り尋ねた。知っていることを教えてくれ、と。

驚いたのは一瞬だけで、既にいつも通りの無愛想に戻っている彼女を見ながら、本音は少し考える素振りをする。ここで教えたら一夏の

肩を持つ形になり公平ではなくなってしまうのではないだろうか。後々自分の大事な親友に不利にならないだろうか。そんなことを頭をもたげたが、しかしすぐに振り払った。そのどちらも、別に問題は無い。そう判断したのだ。

「せつしーの本当の強さは、BT兵器なんかじゃないんだよ」

「本当の強さは、BT兵器ではない？」

一体どうということかと箒は首を傾げた。本気を出すと言ってあの装備を使ったのだから、本当の強さでなければ詐欺であろう。しかし、彼女が嘘を述べているようにも見えない。

答えの出ないループに陥っている箒を見かね、真耶は本音の言葉を補足するため篠ノ之さんと声を掛けた。その言葉に顔を上げた彼女に向かって、教師らしい表情で言葉を紡ぐ。

「今彼女が使用しているIS『ブルー・ティアーズ』は、最近受領されたBT兵器の試験運用機です。そして恐らく知っているでしょうが、彼女の国内公式戦無敗の記録を打ち立てた機体には装備されていませんでした」

「セシリアが勝ったのは、BT兵器の力ではない……？」

呟いた箒の言葉に、真耶はその通りです、と笑顔を向けた。

『クイツクドロウ』。それが彼女の真骨頂です」

セシリア・オルコットはたった一つの技能のみで無敗を打ち立て、そして代表候補生となった。誰よりも速く撃つ、ただそれのみで。

「彼女は、収納領域から呼び出すのと撃つのを同時に、しかも無意識下で行っているんです。だから普段は無手で構えているし、BT兵器の使用に集中していても銃撃が行える」

そのことを知らなかった一夏はまんまと彼女の策に嵌り、そして顔面に銃撃を受けてしまったというわけである。

「知っていれば織斑君ならば対処出来たかもしれませんが、初見では流石に厳しかったみたいですね」

視線を箒達から再びアリーナ内の二人に向けながらそう呟いた真耶だったが、しかし次の瞬間に目を見開いた。え、という呟きが思わず漏れる。

『絶対防御』の発動でシールドエネルギーが尽きているはずの『白式・雷轟』は、まだその場に佇んでいた。頭部から煙を発している以上そこに命中したのは現実のはずなのに、である。

そしてそんな真耶とは対照的に、箒はニヤリと笑みを浮かべた。心底嬉しそうに笑った。

「山田先生。あいつを、一夏を嘗めてはいけません」

視線を審判席にいる千冬に向ける。むしろ当然とばかりに平然としている姿が目に入った。

「あいつは勘だけで、入試の時千冬さんの攻撃を全て避けたんですから」

常に余裕を崩さなかったセシリアの表情が、一瞬だけ、ほんの一瞬だけ歪んだ。今のタイミングで回避されるとは思ってもみなかった。そんな感想を浮かべた彼女は、小さく息を吐くとざわつく心を一瞬にして沈める。

「お見事」

「……今度は、素直に褒められとくぜ」

ビームが掠った頬から煙を上げながら、一夏はニヤリと笑う。眉間に当たり『絶対防御』を発動させて試合終了、そんな予想を覆した彼は、頬を指でさすりながら体勢を立て直した。

命中自体はしているのでシールドエネルギーは減少している。だが、致命傷には至らなかつた為に『絶対防御』は発動していなかつた。だから、一夏はまだ戦える。戦うことが出来る。

「ですが、どうします？　回避が出来るだけでは、わたくしは倒せませんわ」

「分かってるよ」

右手の銃を再び収納領域に戻し、左手で持っていたライフルの銃口を向けながら、セシリアはそう述べた。避けるだけでは相手は倒せない。勿論当てはまらない場合もあるだろうが、今回はまさしくその通りであった。一夏が何かしら彼女にダメージを与えることが出来な

ければ、結局敗北するのは確定事項となってしまう。だが、今の状況では攻撃を掻い潜り肉薄することも出来なければ、射撃で勝ることも出来ない。

「一夏さん」

「何だよ」

「もしも何かを出し惜しみしていると言うのであれば。わたくしを馬鹿にしているものと判断いたしますわ」

「……言いたいことは分かるが、別に出し惜しみしてるわけじゃないぞ」

そんな都合の良い秘密兵器を持っているわけではない。そんなことを言いながら一夏はスラスターを吹かしセシリアから距離を取った。望みとあらば見せてやるけど、そんなことを言いながら一度アリーナの地面に降りる。

「ぶっちゃけ、俺は今の状態で戦うのが一番の本気なだけだな」

「ご謙遜を」

「本気だよ。未だに使いこなせないんだよこれ」

お前のBT兵器と一緒にしないでくれ。そう続けると、一夏は右手を前に突き出した。

次の瞬間、背中中のウイングスラスターは分解され、彼の前面に装甲のように再構成される。代わりに四角いスラスターが背中に装着され、左右の肩部には非固定武装としてミサイルポッドが出現。全体的に曲線を描いていた四肢のパーツは、無骨な四角い装甲へと姿を変えた。そして突き出した右手には、巨大なビームランチャーが一つ。

『『白式』遠距離砲戦用。パッケージ『真雪（さねゆき）』。……はっはっは、射撃じゃ勝てる気しねーっての』

「ならば何故それを？」

「お前が見せろって言ったんだろ。こんな装備俺に渡されても困るんだよー」

言いながらビームランチャーを両手に構えて発射する。先程の『白式・雷轟』の時に持っていたビームガンとは比べ物にならないほどの巨大な光がセシリアを襲うが、弾速そのものはそれほど速くは無い。

彼女は特に危なげなくその攻撃を回避した。とはいえ、流石に大経口のビームを前にして少しだけ笑みが曇る。

「こうなりや自棄だ！　どんどんやってやるぜ！」

肩口のミサイルポッドから全弾発射。それを目くらましに再びビームランチャーを放つ。通常の相手であれば何かしら命中するであろうその攻撃だが、生憎と相対しているのはセシリア・オルコットその人である。ミサイルの弾幕をBT兵器で打ち落とし、後から来るビームも弧を描くような機動で掠ることなく躲す。そのタイミングで無防備な一夏へと射撃を放った。一発、二発と銃口から放たれたビームは彼の機体へと命中するが、しかし。

『白式・真雪』はぐらつくことなくその場に佇み、第二撃を照射した。「くっ！」

虚を突かれた形になったセシリアは咄嗟に『ブルー・ティアーズ』のスラスターを吹かすことで直撃を避けたが、左足に大口径ビームが掠ってしまう。それだけで通常の射撃とは比べ物にならないほどシールドエネルギーが減るのを見て、彼女は思わず目を見開いた。

「威力はとんでもないですね」

「普通にやったら当たらないけどな。その為の前面シールドだ」

相手の攻撃を受け止め、そして射撃のカウンターをお見舞いする。それが『白式・真雪』のコンセプトである。高機動で被弾を減らす『雷轟』とは正反対であり、成程一夏が積極的に使用しなかった理由もおおよそ想像が付く。

「こうなりや自棄だ！　どんどんやってやるぜ！」

「先程も聞きましたわ」

「気にするな！」

叫びと共に、再び『白式』の形が変わる。前面装甲になっていたパーツは再び分解され、腰と脚部に装着されていく。鋭角なシルエツトを描いたそれは、見るものによっては武士の袴のようでもあった。肩口のみサイルポッドは収納され、今度はくの字に曲がった刃のようなパーツが現れる。無骨な四肢の装甲は薄く鋭いものへと変わっていった。『真雪』のものとは違うスラスターが背中と腰部へと組み込

まれ、一夏の手にはビームランチャーではなく一本のIS用に鍛えられた日本刀が。

『白式』近接格闘戦用パッケージ『飛泉（ひせん）』！ どうやって近付けてんだよこれ！」

「わたくしに言われましても」

自分で展開しておいて自分で文句を言いつつ、一夏は肩口に備えられていた刃状のパーツを手を取った。そのまま振り振り投擲すると、ただ投げただけではありえないスピードで一直線にセシリアへと向かう。とはいえ、やはりただ一直線に向かうだけの攻撃などに当たるはずも無く。体を少しずらすことでそれを躲すと、若干の呆れを含んだ目で彼を見ながら射撃を放つ。

「……っ!? あの形状!」

その瞬間に今飛来してきたものがどんな形であったかを思い出し、ハイパーセンサーを起動させた。彼女の予想通り、先程飛んでいったはずのそれは背後から斬撃を加えんと再び向かってきている。

ブーメラン。今一夏が投げ付けた武装の一般的な名称である。

「隙ありい!」

そして、その瞬間を待っていたとばかりに真っ直ぐにセシリアへと一夏は駆ける。現在彼女は背後に気を取られている。それならば、懐に飛び込んで斬ることが出来る。そう判断した彼の決死の行動であった。

それは勿論彼女も分かっている。分かっているが、前後からの攻撃を無傷で躲すには流石に時間的余裕が無い。ブーメランか、日本刀、どちらかは食らわなくてはいけない。

『ブルー・ティアーズ』!」

彼女の叫びと共に、腰部に装着されていた棒状のパーツが前面に展開する。真っ直ぐ一夏に向けられたそれは、砲身。『ブルー・ティアーズ』に装備された隠し技。

通常のビーム発射型の四機とは別の、二機の弾道型ミサイルピット。それが、斬りかかろうとしている一夏に向かって放たれた。着弾の瞬間、彼の顔が驚愕に染まっているのを確認したセシリアは、ブー

メランのダメージで顔をしかめつつもミサイルの爆風に巻き込まれないように素早く距離を取る。少しだけ肩で息をしながら、油断することなく真っ直ぐに前を見た。爆風で見えなくなっている彼を見た。「……そういう、使い方をなさる装備ですね」

「ちげえよ」

煙の引いたそこでは、『白式・真雪』の前面装甲でミサイルを防いでいる一夏の姿があった。流石に即座に反撃を行えるダメージではなかったのか、手に持っているビームランチャーは彼女に砲身を向けることなく垂れ下がっている。

目の前で放たれたミサイルの回避が不可能と判断した一夏は『飛泉』を『真雪』に換装し、防御力の高さで無理矢理に耐えることを実行したのだ。通常のISでは決して出来ない芸当であり、これこそが『白式』の特殊兵装の目玉でもある。

「通常、パッケージの換装を即座に行えることは出来ませんが……先程の行動から考えて、それが貴方の機体の特殊装備ですね」

「高速換装機構『金鳥(きんう)』。束さん曰く、状況判断が適切ならばどんな戦闘にも対応出来る万能装備って話だけど」

俺には無理だ。そう言っで一夏は肩を竦めた。だが、セシリアはそれを肯定することなく、真っ直ぐに彼を見る。ご冗談を、そう言っ彼女が笑った。

「本当に無理ならば今の一撃で勝負が決まっているはずですよ」

「今のは状況判断とかじゃないぞ。ただの勘だ」

「それが本当なら、尚更規格外ですよ」

左手のライフルを構える。同時に、BT兵器を自身の周囲に停滞させた。その銃口は真っ直ぐ一夏へと向いており、少しでも隙を見せれば蜂の巣にするという彼女の決意の表れでもあった。

それが分かっているのか、一夏も『白式』を『真雪』から『雷轟』に戻し、背中のウイングスラスターに力を込める。右手にビームブレード、左手にビームガンを構え、前傾姿勢を取ると睨み付けるように目を細めた。

否が応でも緊張感が高まっていく。一夏は元よりボロボロ、セシリ

アもそろそろ限界であろう。それが分かるからこそ、本人も、見ている者達も、一言も言葉を発しない。次の激突が決着だ。全ての者が、そう感じていた。

先に動いたのは、一夏。右にスラストを吹かし、セシリアの左側面を取ろうと空を駆ける。同時に『雷轟』を『飛泉』に換装した。

それを読んでこそいなかったものの即座に反応したセシリアは、BT兵器を二機一夏へと飛ばし、そして自身は左手のライフルを構える。向こうがどう反応しても対応出来るように、精神は極限まで集中させた。

セシリアのライフルの発射に合わせるようにブーメランを投擲した一夏は再び『雷轟』へと換装。ブーメランを追い越すように加速すると、真っ直ぐ彼女へと斬りかかった。

瞬間、彼女の右手がぶれる。銃が手に現れている時には既に発射された後。今度こそ完璧に彼の眉間を打ち抜いたと確信を持ったセシリアは、しかし次の瞬間驚愕で目を見開いた。

射線上に、左手のビームガンが投げられていたのだ。ビームはそのまま銃を打ち抜き爆散させるが、肝心の一夏の体には届かない。彼はその隙を縫って、極端に姿勢を低くしたままスラストを全開。持っていたビームブレードを真っ直ぐに突き出した。セシリア・オルコットの胴体へと、真っ直ぐに。

「ぐっ……まだっ！」

それでもまだ彼女は銃を一夏へと向け、BT兵器を操作し、後僅かのエネルギーを奪い取ろうと行動する。攻撃動作を終えた彼は無防備であり、何かしら攻撃を加えれば即座に倒れるであろうことは想像に難くない。

だが、一夏はそんな死に体の状態でも笑っていた。勝利を諦めずに、笑っていた。

「か、はっ……い！」

彼女が引き金を引こうとしたその瞬間、彼女の心臓部に一本の刃が突き刺さる。それは、先程一夏が投擲し、そして追い越したブーメラン。彼の斬撃を食らったことで彼女の意識の外に追いやられてし

まった、正真正銘最後の一手であった。

急所に叩き込まれたそれは『絶対防御』を発動させ、『ブルー・ティーズ』のシールドエネルギーは敗北判定値へと至る。力を無くしゆっくりと地上に落下していく機体を纏いながら、セシリアは最後に一つだけ、と一夏に尋ねた。

「……わたくしの最後の射撃を何故躲せたのですか？」

「何回も食らったからってのはあるけど、結局はあれさ」

彼女の落下に合わせながら地面へと降りていく彼は、子供のようになんげながら、こう続けた。

「ただの勘だ」

「本当に……規格外ですわね」

彼につられるように、彼女もそう言って微笑んだ。

アリーナでの勝負も終わり、皆それぞれ寮の部屋へと戻っていった中、一人だけ更衣室で佇む人影があった。シャワーも浴び終わり、既にIS用のインナースーツから制服に着替えてはいるが、しかし自室に戻る気力が湧かなかつたのだ。その人影の名は、セシリア・オルコット。

「負けて……しまいましたわ」

ぼつりと彼女は呟く。元々実力を測るものであるのだから、勝ち負けはそこまで重要ではない。何より、彼は強かった。敗北という結果で終わってもしょうがない。そういう思いは確かにあった。

だが、そんな理屈で感情を制御出来るほど、まだ彼女は大人ではない。それでも、彼女は平静を装う。大人であろうとする。

「お疲れ様です、お嬢様」

「チエルシー!？」

その仮面を、一人の乱入者が剥がそうとする。本来こんな場所にいるはずかない、彼女の実家に仕えるメイドにして親友でもある女性、チエルシーその人である。床を見詰めていたセシリアはその声に顔

を上げ、そして柔らかく微笑む彼女の姿を見て思わず視界がぼやけた。慌てて袖で目元を拭うと、一体何故こんなところに、と問う。「旦那様が仕事でミスをしたらしくて、私とその尻拭いで日本まで来ることになってしまいました」

淡々とチエルシーはそう答えるが、セシリアはどうせ嘘なのだろうと心の中で呟いた。確かに彼女は実家の仕事の手伝いもしているが、そこまでのポジションではない。何より、そんな重大な仕事があるのにわざわざIS学園までやってくる余裕などあるはずがない。

だからきつと、父親の差し金なのだろうとセシリアは思う。昼行灯を地で行くあの男は、普段娘に情けない姿を見せることしかしないくせに、自分がどうしようもなくなった時は誰よりも早く手を差し伸べてくれるのだ。それがどうしようもなく嬉しくて、そして憎らしかった。

だからセシリアは男が嫌いだ。情けない男が嫌いだ。強さにかこつけ威張り散らしている男が嫌いだ。

本当は強いのに弱く見せようとする男が嫌いだ。

「セシリア。今日は負けてしまいましたね」

「……ええ。でも、いい勝負でしたわ。」

チエルシーの言葉にそう返す。別に嘘は言っていない。いい勝負であった、というのは自分の中で紛れもない真実だからだ。ただ、それ以外の感情が追加されているだけだ。そのことを口にしないだけだ。

それだけで言葉を止めたセシリアを見たチエルシーは、おもむろに彼女を抱き締めた。今この場には私しかいません。そう言つて頭を撫でた。心の中に溜まっているものを出してもいい、と言外にそう述べていた。

「……同年代の方に、初めて負けてしまいました」

「はい」

「代表候補生でも何でも無い、肩書きの無い人に負けてしまいました」

「……」

「はい」

「男性に……男にっ！ 負けて、負けて……っ！」

そこで彼女は限界だった。言葉にならない嗚咽が口から溢れる。涸れることのない涙が溢れる。溢れて、止まらない。

悔しかった。結局彼女の感情の大部分を占めるのは、それだ。常勝を誇っていた自分が敗北した。自分の持っていたプライドがへし折られた。その事実が、どうしようもなく悔しかったのだ。

そんな彼女をチエルシーは優しく抱き留める。気の済むまで、落ちて着くまで。セシリアが自分から離れるまで、彼女は大事な親友を抱き締め続けた。

「……醜態を晒してしまいましたわ」

「大丈夫ですよセシリア。今更です」

赤くなつた目を擦りながらそう言つて笑うセシリアに、チエルシーはそんな軽口を返す。もう大丈夫のようですね、という彼女の言葉に、セシリアは力強く頷いた。

「さて、では私は戻ります」

「あら？ お父様の尻拭いをするのではなかったの？」

「はて、そんなことは存じませんね」

とぼけた返事を返し、チエルシーは更衣室から出ようと扉に手を掛ける。その途中で、一つ忘れ物をしていたとポケットからラッピングされた箱を取り出した。旦那様からのお届け物ですと言われ、怪訝な顔をしながらもセシリアはその箱を開ける。

「……ダイヤモンドのネックレス？」

「渡し忘れた入学祝、だそうです」

表情を変えることなくそう述べたチエルシーと自身の手の中にあるそれとへ交互に視線を移しながら、彼女は大きく溜息を吐いた。確かにオルコットは貴族の家系であり現在資産も潤沢にあるのだが、かといつて娘にポンと渡していいものではない。そんなことを思いながら箱に再び仕舞おうとして。

「石言葉は『不屈』ですね」

その言葉を聞いて動きを止めた。それはつまり、そういうことなのか。あの男は、それも見越して手を回していたということなのか。そ

う考えると、思わず頬が緩んだ。普段ペコペコと頭を下げている男性が勝ち誇ったように笑っている姿を想像すると、無性に笑いたくなかった。

「チエルシー、伝言を頼みますわ」

「はい」

『帰ったら一発ぶん殴りますわ』と伝えて頂戴」

「かしこまりました」

丁寧にお辞儀をすると、今度こそチエルシーは更衣室から去っていった。後に残されたのはセシリア一人。だが、先程までの気分など何処かに吹き飛んでいた。よし、と気合を入れると、彼女も同じように更衣室から外に出る。その首には先程貰ったネックレスが掛けられていた。

「一夏さん」

寮に向かいながら、彼女は一人の男性の名を呟く。自身を打ち倒した男の名を口にする。

そこに浮かぶのは、笑み。淑女のような笑みと、獲物を狙う猛獣の笑みが混ざり合った、真正正銘のセシリアの笑みだ。

「次は、負けませんわ!」

セシリア・オルコット。彼女は男が嫌いだ。だが同時に、本当の強さを持っている男を無意識に好むのだ。

№005 「良くやったな」

「さて、お前達のお待ちかね、IS実習だ」

グラウンドにて、動きやすい服装に着替えた千冬が生徒達の前で仁王立ちしながらそんなことを述べた。その後ろには訓練用に用意された量産機『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』が数体並べられている。

「とはいえ、ここに入学しているならば中学時代にISを纏ったことのある者がほとんどのはずだ」

一年一組と二組の合計六十名余りを見渡しながら、千冬はそう言つて不敵に笑う。動かしたことがあるのだから、基礎など楽勝。そんな風にこの授業を考えている連中の鼻っ柱を折つてやらないといけない。最初の実習はそういう意味も込めて彼女は行っていた。

「では、そうだな……相川」

「は、はいっ!」

自分の担任するクラスの生徒を一人指名し、千冬は問う。ISの基礎で重要なものはなんだ、と。

それを問われた女生徒は目を暫し瞬かせた後、視線を彷徨わせ、必死で頭を捻つて答えを出した。結局当たり障りの無い答えを出した。

「き、機動、でしょうか」

「ふむ、まあいいだろう」

腕組みをしたまま頷くと、千冬は続けて谷本、と別の生徒の名前を呼んだ。指名された癒子は姿勢を正して返事をし、彼女の次の言葉を待つ。

「機動、まあ人間で言うならば移動か。それで重要なのは何だと思う?」

「え!?! ……し、姿勢、ですか?」

「正解だ。中々やるな」

姿勢を正しく保つ、というのは存外難しいものだ。自身の首に巻かれているチョーカーを撫でながら千冬は続ける。主に空中戦を行うISでの機動は人間の移動とはまた違うが、だからこそ体の軸の強さ

を鍛えることが重要である、そんなことを述べた。

「まあ、簡単に言ってしまうえば『真っ直ぐ立つ』ということだ。それがどんな状態であろうとも、な」

言葉と同時に千冬は自身のISを展開する。IS世界大会『モンド・グロツソ』二連覇を果たした伝説の機体『暮桜』、それを目の当たりにした生徒達は途端に湧いた。やれやれ、と肩を竦めながらも、彼女は自身の言葉を体現するように何か一本芯が通っているかのごとく決して軸を崩さない。

「流石にいきなりこれをやれ、と言っても無理だろうが、それでも参考程度にはなるだろう」

収納領域から呼び出した近接ブレードを上には振り投げると、彼女はスラストアーを吹かしそれを追い越す。そしてその上に飛び乗った。右足で刀を回転させると、自身もそこにくつついているかのよう回転。天地逆の体勢になっていながらも、彼女の軸の乱れは欠片もない。

もう一本の近接ブレードを取り出し、それを刃を上にして地面に投げ突き刺すと、彼女は天地逆の体勢のまま地面へと加速した。途中で反転し、突き刺した刃の上に何でもない様子で降り立つと、最初に放り投げたブレードが落ちてくるのを右手の二本の指でピタリと止めた。

生徒達は声を発さない。歓声を上げることもしない。理由は至極簡単で、思考が追い付かなかったからだ。ISという巨大な装備を纏っている状態で、刃の上に立つという微細な機動を行えるという事実が理解出来なかったからだ。

「せんせー。それって正中線関係無くないですか?」

「ISにとっての正中線はこういうものだ。というかだな、お前は分かっているはずだろう織斑」

「いや、だって他の人達全員ポカーンとしてるから、誰か言わなきゃと思ってる」

「失敬な。私はちゃんと見ていたぞ」

「右に同じくですわ」

一夏の言葉に抗議の声を挙げる箒とセシリアを見つつ、『暮桜』を除いた彼女はパンパンと手を叩く。その音に我に返った他の生徒は、口々の今の千冬の機動について感嘆の声を挙げた。大歓声に少しだけ顔を歪めると、彼女は静かにしろと声を出す。全員が落ち着くのを待ってから、先程放心していなかった三人へと目を向けた。

「専用機持ちは前に出る」

その言葉に三人は並んでいる生徒達よりも前に、千冬の立っている場所の方へと移動する。千冬のお手本を見せてやれ、という言葉からすると、どうやら次は一夏達の番らしい。あんな変態染みたことは出来ないと言った抗議の声を上げる一夏だったが、彼女の一目で押し黙った。

「とりあえず、ISを展開しろ」

一夏は『白式・雷轟』を、箒は『紅椿・先駆』を、セシリアは『ブルー・ティアーズ』をそれぞれ展開。特に何もせず真っ直ぐに立っているだけであったが、他の生徒達にはそれだけで何となく理解した。先程千冬が見せた光景が目には焼き付いているからこそ、三人がどういうものかを理解した。

「三人とも、真っ直ぐだ……」

「専用機を持つてゐるってことは、そういうことなんだ……」

数人の生徒がそんなことを呟く。専用機持ちは、先程言われたことが出来ているからこそ専用機持ちなのだ、と。

それが聞こえた一夏は少し照れたように頬を掻いた。隣の箒は少し口元が上がっているが、その隣のセシリアは当然と言わんばかりの表情であった。三人が三人共にそう言われるだけの修練は積んできているのだが、それを賞賛されたかどうかはまた別の話である。

「さて、では機動の手本を見せてみる」

「だから俺はあんなの出来ないって」

「さっきのは参考だ。お前達がやるのは手本。違いは分かるな」

「他の生徒達が分かることを行え、ということですよわね」

「その通りだ」

「分かりました、では——」

お先に、と飛び立とうとした箒を千冬は呼び止めた。お前は最後だ、と告げると、セシリアに向かって声を掛ける。

まずはお前から飛んでみる。その言葉を聞いた彼女はコクリと頷き真上に向かって加速した。スラスタを吹かし天に向かって駆けるその姿に乱れはない。ある程度の高さまで行くと、そこで停止し下にいる千冬へと視線を向けた。

「よし。次は織斑、行け」

「はいはい、っと」

千冬 of 言葉を受けスラスタを吹かそうとした一夏だったが、待て、という言葉に思わずバランスを崩す。何だと抗議の目を向けた彼は、次の彼女の言葉に顔を歪めた。

『真雪』で飛べ」

「……マジですか？」

「お前は他の二人と比べると本能で戦っている部分が多い。あまり手本にはならんだろうからな」

「だったら『真雪』じゃ余計にマズインじゃ？」

「だから、お前だけは普通に特訓を兼ねるのさ」

ニヤリ、と邪悪な笑みを浮かべた担任兼姉を見た一夏は、諦めたかのように肩を落とすと『雷轟』から『真雪』へと換装した。機動はお世辞にも良いとは言えない形態のまま、彼はスラスタを吹かして上へと飛ぶ。セシリアの飛行と比べるとあまりにもなその姿は、彼の姉が肩を竦めるほどであった。

「それでも専用機持ちか、馬鹿者」

「防御重視形態で機動をさせるのが間違いだろ千冬姉！」

「学校では織斑先生と呼べ。それに、正中線がしっかりしていればもう少しまともな機動が出来るはずだぞ」

「へーへーどうせ俺はまだ未熟ですよ」

「授業中に拗ねるな馬鹿者」

「一夏……」

「千冬ね——先生はともかく、箒までその目は止めて！」

毎度お馴染み姉弟と幼馴染コントが繰り広げられつつ、残った一人

の出番である。

では早速、と箒は『紅椿・先駆』のスラスターを吹かし一気に上空へと飛んだ。先程の一夏の機動が頭に残っていた生徒達は、相対的にその姿を美しいと感じてしまう。二人のいるところまで上がった箒は、そこで急停止し弧を描くように回転、一夏達と同じように千冬がいる場所へと視線を向けた。

「いいだろう。……オルコット、織斑、お前達は降りて来い。着地の手本を見せてやれ」

その言葉にセシリアは頷き、一夏は頬を掻きながら下に向かって加速する。スピードでも勝っている『ブルー・ティアーズ』は地上スレスレで綺麗に停止、もたついていた『白式・真雪』はギリギリで回転するように速度を落とし着地した。

そんな二人を指差し「あれが良い見本と悪い見本だ」と言い切った千冬は、視線を再び上空へと向けた。篠ノ之、と声を掛けると、箒の返事を待って言葉を続ける。

「あれを、皆に見せてやれ」

「……いいんですか？」

「構わん。手本は今見せたからな」

そこまで言うのと千冬は生徒達へと視線を移す。これから行うのは参考程度にしておけ、決して真似をするんじゃない、と釘を刺すと、では始めると上空に声を掛けた。

「では……いきまーすー」

言葉と同時、『紅椿・先駆』のスラスターにエネルギーを圧縮、それを一気に放出することで爆発的な速度を生み出す。一瞬にして見えなくなるほどのスピードで一直線に空を駆けるその姿は、正に流星の如く。

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』？ でも何故これが真似をしてはいけないものに——」

その動きを見ていたセシリアがそう漏らしたが、しかし途中で言葉を止めた。一直線に進んでいたその姿が、曲線を描いたのだ。加速しているスピードはそのままに、軌道を変えた、それを見た彼女はあつ

けに取られた表情で目だけを動かす。

「通常は直線的な軌道しか描けない『瞬時加速』だが、篠ノ之は見ての通り、曲線機動が出来る」

「あ、ありえませんか……」

「そうだ。あの機動を行う為にやっていることも相当ありえん」

何せ、『瞬時加速』中にISを解除しているのだからな。そう言つて千冬は笑つた。

当然それを聞いたセシリアを含む他の生徒は笑い事じゃないと思わずツツコミを入れてしまう。何も言わないのは一夏と、千冬の周囲の奇行に慣れ切っている真耶くらいだ。

「解除といつても一部分だ。曲がる方向の部分解除を行うことによつてPIC（慣性制御システム）を切り、無理矢理慣性を復活させ曲がっている。解除と再展開のタイミングがずれるとあつという間に体はズタズタだ。だから、決して真似をしようと思ふな」

「誰もしませんわ……」

「いや、世界は広いからな。どつかにやる奴がいるかもしれん」

呆れたように呟くセシリアに、一夏はそう付け足した。

「ぶえつくよん！ ……風邪かな？ それとも、あたしのこと噂して
る奴がいたりなんかして」

丁度そのタイミングで何者かが盛大にクシヤミをしていたことを、一夏は知らない。

日付は進み、土曜日。IS学園最初の一週間も終わり、生徒達も高校生初の休みに体を伸ばす時である。

そんな日に、一夏は箒とセシリアを伴つてIS学園から外のショッ
ピングモールに買出しに来ていた。既に両手には多数の袋がぶら下
げられており、その中身は殆どがお菓子と飲み物である。

「しっかし、何で俺のクラス代表就任パーティーの買出しを俺がやつ

てんだよ」

「じゃんけんで負けたからだろう?」

「見事な全敗でしたわ、一夏さん」

「嬉しくない」

がつくりと肩を落としながら一夏は歩く。大体主賓なんだからそういう役割を除外してくれても、とブツブツ文句を言い続けているが、左右の二人は完全に流してお互いの会話に花を咲かせていた。

「そういえば箒さん、剣道部はもう入部されたのですか?」

「ああ。先輩達も皆良い人でな、これからあの人達と剣を交えるのが楽しみで仕方ない」

「ふふっ、それはそれは」

ガールズトークを行っている二人に弾かれた一夏は一人寂しく後ろを歩く。その姿は女性に荷物持ちをさせられている情けない男そのものであったが、彼は特にそのことに気付いていないようであった。

だから、ふと見かけた光景にも何の気なしにこう呟いた。あれは酷いな、と。

「ん? ……ああ、いかにもな高慢女だな」

「ISの発達の弊害、と言えるのかもしれないわね」

一夏の言葉に箒とセシリアも視線をそこに向けた。一人の女性が男性を伴って歩いている光景。それだけならまだ普通であったが、問題はその女性が男性を下僕か何かに見ていることだ。

現在様々な場所で活躍するISだが、その適正を持つ者はほぼ百パーセント女性であった。適正自体は男性にも存在したが、そのどれもが機体を動かすには至らないほど低いものばかり。実質女性専用の装備として認識されているのが現状である。

その為か、今までも増して女性の地位向上を謳う者が世界に溢れた。勿論大多数の人間は別段変わらない生活を行っていたが、それでも一部の人間はああしてIS適正の高さを笠に着て威張り散らしている。

箒もセシリアも、同じ女性として、高いIS適正を持つ者として、あ

あいう手合いは嫌悪しか抱かなかった。

「どうする？ 少し文句でも言いに行くか？」

「それもいいですわね」

「気持ちには分かるが落ち着け。特にセシリア、お前は代表候補生なんだからもう少し立場つてもんを考えてだな」

今にも飛び出しそうな箒とセシリアをなだめつつ、一夏は行こうぜと前を向く。すると丁度、一人の少年が何やら挙動不審に店頭においてある品物を眺めているのが見えた。自分を見ている者はいないかと辺りを窺い、そして。

「やめとけ」

その品物をカバンに入れようとしたのを彼は止めた。幸い未遂で済んでいるから、そのまま返せばお咎めなしだ。そう続けて、一夏はその少年に笑い掛けた。

少年はそんな一夏をあっけにとられた顔で見っていたが、我に変えるとその手を振りほどき慌てて逃げていく。品物は元に戻されていたのでまあいいかと後頭部を搔く一夏の背後から、何をやっているんだと声が掛かった。声の主は言わずもがな、箒とセシリアである。

「さっきお前は何て言った？」

「え？ 立場つてもんを考えて？」

「貴方は世界初の男性IS操縦者です、立場的には代表候補生よりずっとスキヤンダルの種ですわ」

「マジかよ。それじゃあ気軽に愛の告白も出来ないじゃないか」

「まず愛の告白を気軽にすることをお止めください」

「一夏、私ならいつでも受け付けるぞ。断るが」

「箒さんも乗らないでくださいまし！」

『えー』

「というか箒さんは何故そっちのポジションになられているのですか！」

「そこにセシリアがいるから、かな」

「登山家みたいなコメントをしても誤魔化されませんわ！」

「仕方ないだろう。一夏も私も本来はボケ体質だ」

「だからって、わたくしをお二人のコントに巻き込まないでください！」

肩で息をしながら叫ぶセシリアを見ながら、二人は仕方ないなと肩を竦めた。それじゃあ騒ぐのはこの辺にして、買い物続きをしようと歩き出す。一人だけ疲れたようなセシリアの背中が、少し煤けて見えた。

雑貨屋でパーティーグッズを数点見繕い、これで買出しは終了と帰路に着こうとしたその時、一夏は見覚えのある顔を見付けた。先程万引きをしようとしていたあの少年である。あの時と同じように挙動不審に辺りを窺いながら、人気の無い場所へと向かっているようだった。

「箒」

「ん？」

「ちよつとこれ持つてくれ」

両手に持つていたお菓子と飲み物の袋を箒に手渡すと、彼は少年が歩いていった方へと足を進めた。暫く進むとデパートの非常階段に続く扉が見える。少し開いているところからすると、どうやらここから外に向かったらしい。

「下、じゃねえよなあ。上か」

同じように非常階段の扉を開けた一夏は、階段の上と下を見比べ、響いている音から恐らくこっちであろうと空を見上げた。とりあえず追い付くまで行ってやろうと結論付けた彼はそのまま迷うことなく階段を上る。なるべく音を立てないように、と最初はゆっくり上っていたが、途中からどうでもよくなり普通に駆け上がった。

途中の非常階段の扉は全て閉まっていた為、少年の目的地は自ずと推測出来る。デパートの屋上、どうやらそこに向かっているようであった。

「おー、やっぱり非常階段んところは人数が少ないな」

上り切った一夏は屋上を眺めながらそんなことを呟く。駐車ス

ペースも兼ねている場所だが、非常階段周辺はいざという時の避難の
為か停める場所も無くポツカリとスペースが空いていた。人もあま
り通らず、こつそりと何かをするには丁度いい場所でもあった。

視線を暫し彷徨わせると、先程追い掛けた少年の姿が見えた。その
周囲には同じ位の年齢の少年達が立っており、口々に彼を責め立てて
いる。手は出していないが、明らかにいじめと呼ばれる行為であっ
た。

何を言っているのかは聞こえないが、恐らく自分が止めた万引きに
ついてだろうとあたりを付けた一夏は彼等の場所に行こうと足を踏
み出す。声を出したり駆け出したりしては向こうを刺激してしまう
かもしれないと考えた彼は、ゆつくりと歩みを進めた。

その途中、いじめられていた少年が屋上のフェンスを乗り越えさせ
られたのを見て、一夏は慌てて駆け出した。周りの連中は下品な笑い
声を上げて少年が屋上の縁へと移動するのを見ている。このままだ
とどうなるかは明らかであった。

一夏の視界に移っていた少年が、消える。屋上から下へと向かう残
像が見えた。

「うおおおー！」

叫ぶ。無意識の内に I S を装着していた一夏は、そのまま屋上の
フェンスを突き破つて外に出た。落下していく少年を見付けると、そ
のまま真下に急加速。地面に激突して赤い染みになる前に抱きかか
えると、少年に負担が掛からないようにデパートの壁を掴んで減速し
た。盛大に壁が削れるが、そんなことは構いはしないと一夏は思う。
建物と命なら、直せるのだから少し建物は我慢してもらおう。そんなこ
とを呟いた。

五階ほどの壁を削って止まった一夏は、腕の中で怯えている少年に
笑いかけると再び上へと向かった。先程フェンスを破壊した屋上へ
と戻ると、下品な笑みを浮かべていた連中があっけに取られた顔をし
ているのが見えた。いい気味だと思いつながら少年を地面に降ろすと、
一夏はそこにいる連中を睨む。

「おい、どういふつもりだお前等」

ISを解除し、怒りを隠そうともせず、一夏は真つ直ぐ彼等に近づく。その言葉に我に返った少年達は、関係ないだろと彼に叫んだ。

「いや、関係あるね。俺がこいつの万引き止めたんだからな」

言いながら一夏は更に一步近付く。

その雰囲気にも飲まれそうになった少年グループの内四人が後ずさるが、残りのリーダー格らしい一人は目の前の彼を馬鹿にするように笑った。何マジになってんの？ そんなことを言いながら肩を竦めた。

「人が一人死にそうになったんだ、マジになるに決まってるんだろ？」

一夏がそう返したが、リーダー格の少年は更に馬鹿にするように笑った。かつこわりい、そんなことを呟き、明らかに見下した目を向ける。

こんなものはただの遊びだろ、と彼は言う。そして、人の遊びにケチ付けるな、と続けた。その言葉に同調するように残りの四人もそうだそうだと口々に述べる。いつの間にか、攻め立てるように五人共が一夏の方へと踏み出していた。

「遊び、遊びか……人の命を奪うのが、遊びかよ」

そんな五人を見ていた一夏は、自分の中で何かが切れる音がした。人をいじめて、何の罪悪感も湧いていない連中を見て、心から浮かんでくるものがあつた。

一足飛びで少年グループへと肉薄すると、一夏は問答無用で一人を殴り飛ばした。綺麗に腰の入ったパンチで顔面を攻撃された少年は、首が盛大に捻られ、その勢いが体にも伝わり、そのままアクション映画のやられ役のように吹き飛ぶと地面に倒れ伏した。

何をする、という少年グループの声に、拳を振り切った姿勢のまま顔だけを向けて一夏は述べる。決まってるだろ、と激昂した表情を向けて彼は叫んだ。

「テメエら全員ボコボコにするんだよ！」

言葉と共に、一夏は手近にいるもう一人にハイキックを叩き込んだ。

「で、何か言うことは？」

「……すいません」

IS学園学生寮。その一角寮長室で一人の少年が正座をさせられていた。傍らにはばつの悪そうな顔で佇んでいる箒とセシリアの姿も見える。正座をしている少年、一夏を見下ろす千冬の傍らには、まあまあと彼女をなだめる真耶の姿もあった。

「お前は、曲がりなりにもIS学園の生徒であり、世界初の男性ISパイロットだ。何かをするにもある程度の責任が付きまとう」

「……分かってます」

一夏のその呟きを聞いた千冬は、だったらどうしてあんな真似をした、と問うた。口調こそ静かなものであったが、それは彼女が平静であるということにはならない。事実、目はいつも以上に鋭く細められている。

「我慢、出来なかったんだ」

「どういうことだ？」

「人が死に掛けたんだよ！俺が助けなきゃ確実に死んでた、なのに、笑いながら遊びだとか抜かしやがった！俺はそれが我慢出来なかった！」

「その結果が屋上で暴力沙汰か」

「う……」

「それだけではない。学園外でISを展開するには許可が要る。だといふのに、お前は勝手に『白式』を起動させた」

「千冬姉」

「織斑先生だ」

「暴力沙汰については悪いと思ってるし、謝る。けど、そっちの方は反省はしても絶対に悪いとは思わない」

「ほう」

真つ直ぐに千冬の目を見てそう述べた一夏を見て、彼女は少し目を見開いた。それはどうしてだ、そう尋ねると、そんなものは当然だと

言わんばかりに彼は言葉を紡いだ。

「人を、助けられた。だから俺は絶対にそこは譲らない。規則を優先して目の前の人を死なせるくらいなら、俺はそんな規則クソ食らえだ！」

「教師に向かって言うセリフではないな」

「それは、そうかもしれないけど……」

少しだけ言い淀んだ一夏だったが、しかしその瞳は変わらず真っ直ぐに千冬を見ている。どうしたものかと溜息を吐くと、織斑先生、と別の人物から声が掛かった。彼女はその発言をした方向に、一夏の後ろに立っていた筈とセシリアへと視線を向ける。

「私も、一夏と同意見です。人命を優先するのは、至極当然ではないですか？」

「ええ。人を死なせてしまうような規則は、それこそ規則として相応しくないですわ」

「篠ノ之、オルコット。お前等まで……」

やれやれ、と千冬は額を押さえた。そうは言われても、自分は教師、そこでお咎め無しにすることなど出来はしない。無論、本心では彼等と同意見だとしても、だ。

とりあえずどの辺りを落とし所にするかと視線を彷徨わせると、隣でポツリと真耶が呟いた。そういえば、最近学生寮の廊下が汚いんですよね、と。思わず視線を隣に向けると、ニコニコと微笑んでいる彼女の姿が見えた。どうやらこの場にいる者全員が同意見らしい。やれやれ、ともう一度千冬は溜息を吐くと、織斑、と目の前の生徒の名を呼んだ。

「これから三日間、罰として寮の廊下を掃除しろ」

「へ？」

「聞こえなかったのか？ 罰掃除だ。お前の処分はそう決めた」

「……停学とか、退学とか、そういうのは？」

「何だ、そっちがお好みか？」

「い、いや、そんなことない、です。分かりました織斑先生！」

一瞬あっけに取られた顔をしていた一夏は、その意味を理解すると

顔を輝かせて立ち上がった。それじゃあ、早速掃除してきます。そう言うが早いか寮長室から出て行こうと踵を返す。

そんな背中に、千冬は待て、と声を掛けた。

「何ですか、織斑先生」

「いや……良くやったな、一夏」

「っ!? ああ! ありがとう、千冬姉!」

そう叫び、今度こそ一夏は寮長室を出て行く。手伝うと箒とセシリアも追従し、掃除用具の場所を教えてきますねと真耶も出て行った。そんな嵐のような集団は、そのまま廊下を盛大に駆けていく。

後に残ったのは、やれやれと肩を竦める千冬一人。

「いっくん、成長したねえ」

そのはずであったが、彼女の声でない声が部屋に響いた。

千冬が振り返ると、エプロンドレスにウサギ耳といういささかエキセントリックな格好をしている一人の女性の姿が目に入る。彼女はそんな女性を見て呆れたように溜息を吐いた。

「束、何時からいた」

「ちーちゃんのお説教が始まった辺り」

それはつまり最初から、ということになる。いたのなら声くらい掛ける、と言いながら、千冬は束に椅子に座るように促した。冷蔵庫からジュースを取り出すと、座っている彼女に渡し自身も対面の椅子に座る。

「成長も何も、まだ入学して一週間ほどだ。大して変わってなどいな
いさ」

「あははっ、それはそうかも」

二人で笑いながらお互いにジュースで喉を潤す。一口二口飲むと、束はそれでも、と言葉を続けた。確実に大きくなっているよ、そう言っただけは笑った。

その言葉にそうかもな、と千冬は呟く。それは、弟の成長を喜んでるようでもあり。自分から離れていってしまうのを寂しがっているようでもあった。姉として、教師として、その両方からの思いが、せめぎあっていた。

「大丈夫だよ、ちーちゃん」

どれだけ大きくなっても、いっくんはいっくんだから。そう言つて束は笑う。姉のことが大好きな、生意気な弟のままだよ。そう言うと、再びジュースに口を付けた。

その言葉に暫し目を瞬かせていた千冬は、やがて盛大に笑い出した。お前にそんなこと言われるとは、私も駄目かもな。そんな軽口をついでに述べる。

「あー、ちーちゃん、この天災束さんを軽く見てるな」

「そんなわけあるか。お前は私の一番の親友だ」

「むう。そうストレートに言われるともう文句言えない」

ふくれっ面になる束を見て、千冬は更に大きな笑い声を上げた。

余談だが、この二人の会話はそのまま酒盛りへと進化し、大騒ぎが深夜まで続くこととなる。

週が明け、月曜日。一台の車がIS学園へと向かっていた。その中で一人の少女が不満そうな顔で座っている。持っている荷物からすると、どうやらこれから学園に入学するようであった。

「ったく。何で手続きで一週間も掛かるのよ」

ありえないし、と少女は自身の髪を指で弾く。ツインテールと俗称されるその髪形が、彼女の元気な雰囲気によく似合っていた。

勉強大分遅れてるから、取り戻すのが大変だ。げんなりした顔でそう呟くと、彼女はカバンから新聞を取り出した。スポーツ紙であろうその一面には、でかでかとした写真と文字が書かれている。

『お手柄男性ISパイロット、飛び降りた少年を見事キャッチ』そんな見出しで紹介されているそれは、一夏がああ少年を助けた場面がしっかりと載っていた。どうやらたまたま写真を撮った人物がいたらしく、それが新聞社に投稿されて記事になったようだ。

彼女は、その記事を見て満足そうに微笑む。うんうん、やっぱりアイツはこうでなくちゃ。そんな呟きが口から漏れた。

「さて、と。もうすぐ着くかな」

座りっぱなしで硬くなつた体をほぐしながら、少女は真つ直ぐに前を見る。遠めに見える巨大な建物を視界に映し、彼女は嬉しそうに口を歪めた。

「待つてなさいよ、一夏、箒」

口にした人物の名前は、そこに通っている二人の男女。少女にとつて、決して忘れられない、忘れてならない名前。

「あたしが、帰ってきたんだからね！」

車の中で、少女は思い切り拳を天に突き上げて、吼えた。

No.06 「強くなったんだもん」

「さて、学園の話題の人から地域の話題の人になった感想はどうだ？」
「死にたい」

「そうか。では介錯してやる」

「ちよ、ちよっと待った。それ黒檀の木刀だよな!? 当たったら洒落にならないよな!」

「最高級品だぞ」

「値段はどうでもいい!」

週明けの朝から毎度の調子で騒いでいる一夏と箒であったが、しかし彼の心境は軽口とは裏腹にどんよりと曇っていた。理由は至極簡単で、一年一組の外に多数の女生徒が群がっているからだ。

そしてそのほぼ全員が、ある記事の載ったスポーツ紙を握り締めているからだ。

「おはよー織斑君」

「おはよう、織斑君」

「ああ、俺の心のオアシス!」

極々普通に朝の挨拶をしただけでオアシス呼ばわりされた癒子とナギは若干引きつつ、しかし慣れたもので苦笑するだけに留めた。この間もそうであったが、理由が理由だけに思うところがあるのだ。それがたとえ彼が自分で起こした行動の結果であっても、である。

「でも一夏さん、別に今回は誇ればいいのでは?」

人の波を掻き分けて教室までやってきた所為か若干乱れた髪を櫛で整えながら、同じく朝の挨拶をしたセシリアがそう述べる。付随している事件はどうであれ、人命を救ったのは確かなのだ。ならば胸を張ればいい、そう彼女は続けた。

「そうは言われてもな……」

「何か不満があるの?」

それでもまだ渋い顔を続ける一夏に、癒子はそう問うた。当事者ではない為詳しい話は聞いていないが、それでも教室の外で檻に入ったティーレックスを見るがごとく押し寄せている連中よりは知っている

るつもりである。だから、彼が齒切れの悪い返事をする理由がいまいち分からなかった。

「誇れって言われても、どう誇ればいいんだ？」
「は？」

一瞬あつげに取られ、そして真面目に聞いた自分が馬鹿だったと彼女は思った。隣に視線を移すと、ナギも同じような表情で一夏を見ているのが確認出来た。自分だけがそう思ったのではないということに若干安堵しつつ、セシリアや箒の反応を窺う。どちらかと言うと思考が一夏寄りである二人はどうなのだろうか、と彼女達は言葉を待つ。

「え、えつと……え？ ほ、誇り方、ですか？」

「セシリア！ 今日から私達は親友だよ！」

「セシリア！ これからもっと仲良くしよう！」

「いきなりなんのですのお二人共!？」

良かった、この人は常識人だ。そんな結論を出した癒子とナギはセシリアに硬い握手を求めた。それが逆に彼女の中で二人が常識人枠から外れることになっているのは皮肉なものであるが。

ともあれ、ある程度落ち着いた一応常識枠である三人の視線は一人の少女に注がれた。篠ノ之箒。織斑一夏の幼馴染でコントの相棒である。

「とりあえず、高笑いを上げながら外の連中に『俺って凄いだろ！ さあ、跪け！』とか言ってきたらどうだ？」

「一気に小物臭漂う人物に成り下がるよなそれ」

「ん？ 一夏は小物じゃないのか？」

「不思議そうな顔して首傾げないで！」

流石だ、と三人は思った。ああやって返せる人物は恐らく彼女か彼の姉である織斑千冬以外にはおるまい、そう思うほどの流し方であった。対決の日から何かと紛れ込まされるセシリアですら、まだあの領域には立ち入れないだろうと思うほどだ。

そこまで考えて、別に立ち入る必要は無いことに気付いた。どうしても彼等に近付くと染まってしまうらしい。そのことを自覚した三

人は、少しだけ背筋が寒くなった。

「はーはっはっは！ 俺って凄いだろ！ さあ、跪け！」

「マジでやっちゃった!?!」

「ある意味凄いよ織斑君！」

「どうしようもない位の小物臭ですわね……」

「うむ。見てて痛々しい」

「お前がやれって言ったんじゃねえかよ！」

彼の希望はともかく、この奇行によりクラスを取り囲む生徒達は蜘蛛の子を散らすようになくなったのは言うまでもない。

そんな騒がしい朝の一幕も終え、ホームルームで千冬にアホな事をやっているんじゃないと怒られ、そして普段通りに授業が始まり。

朝の騒ぎが嘘のような平穏さで、昼休みまで時間は流れていった。今日はちゃんと弁当を持ってきた、と自分の机で広げて食べている一夏と、その隣に箒。そして最早お約束となった本音、癒子、ナギの三名が対面に座っていた。セシリアは購買で何かを買ってくるらしく、現在はいない。

「ちえく、見たかったなく、おりむーの奇行」

「見なくていいから」

「あ、私ムービー撮ったよ」

「今すぐ消してくれ！」

「ふ、携帯とは甘いな」

朝いなかかった本音に携帯電話で撮ったムービーを見せるナギであったが、箒はそんな一言と共にカバンからデジカメを取り出す。手馴れた手付きで操作を行うと、高画質で小物臭溢れる叫びを行う少年の姿が映し出された。

「おお〜」

「ちよつとそれ貸してくれ箒。踏み潰すから」

「断る」

デジカメを奪おうと手を伸ばした一夏は、そのまま手の甲に箸を突き立てられ声にならない悲鳴を上げた。その行動を行った少女——勿論箒——は涼しい顔で弁当をパクつく。

そのやり取りに一年一組生徒は何のリアクションもない。この一週間で慣れてしまったのだ。彼女達にとって、これは既に日常の光景なのだ。

「ところでさ、織斑君はクラス対抗戦の自信の程はどうなの？」

当然この三人にとっても日常の光景なので、右手を押さえてジタバタもがいている一夏に向かって平然と彼女等は話題を振る。「大丈夫？」の一言すらない。

そして一夏も慣れ切っているのか、何事も無かったかのように座り直すとそうだな、と顎に手を当てた。

クラス対抗戦、各クラスで選ばれた代表八人が戦うI S学園最初のイベント。一年生はまだ操縦技術の拙い者が多い中で行う為にそれほど見応えのあるものになることはない。というのが一般的な見解であるが、当の一年生達にとってはそんなことは些細なことである。自分達の代表者が優勝するよう応援やサポートをする、そうして得た一体感や連帯感を糧に、これからの一年を団結して過ごすのだ。

「まあでも、これだけ噂になっちゃってるし、このまま対抗戦も優勝じゃない？」

「織斑君は専用機持ちだし、あのセシリアにも勝っちゃったし。楽勝でしょ」

ナギのその言葉に、癒子も同意し二人で一夏を笑顔で見詰める。その顔は同意をしろと言わんばかりで、その気迫に思わず彼も目を瞬かせた。

「なあ箒。何でみんなこんな気合充分なんだ？」

「優勝クラスは学食のデザートパスがもらえるからだ」

「物欲かよ」

そう呟いたものの、しかし成程と一夏は納得した。そういう分かりやすいご褒美があった方が頑張る意欲が湧きやすいというのは彼自身も頷ける部分である。とはいえ、彼にとってはそのご褒美はそれほ

ど頑張る意欲を沸き立たせるものではなかった。ワイワイと騒いでいる女子達と違って、そこまでスイーツに情熱は傾けられないのだ。「ふっふっふ。甘いね、みんな」

そんないまいち煮え切らない一夏が聞いたのは、そんな声。布仏本音が箸にから揚げを突き刺しながら高らかに宣言をしていた。勝つのは一年四組だ、と。

彼女の様子からしても、とりあえず適当にクラスを言ってみたというわけでもなさそうで、その顔には自身が満ち溢れている。

「ちよつとちよつと。自分のクラス差し置いてそれはないんじゃないの?」

聞き捨てならない、と癒子は本音に物申したが、彼女はそんなことは知らんとばかりに胸を張る。隣ではナギも同じような抗議の視線を向けていたが、平然と弾き返した。

「だって、しょうがないよ。四組のクラス代表はかんちゃんなんだから! おりむーなんかギツタンギツタンだよ!」

「……何か盛大に目の敵にされてませんか俺?」

「男子は敷居を跨げば七人の敵がいるというからな。八クラスの対抗戦だ、丁度いいんじゃないか?」

「何が? ねえ何が?」

「それで、そのかんちゃんとやらは何者だ?」

「流された!」

一人叫んでいる元来当事者である一夏はほったらかしで、箒は本音に話の続きを促した。対する彼女も視線を箒の方へと向けて会話を続けている。どうやら彼はいい者として扱らしい。

「かんちゃんはかんちゃんだよ。一年四組クラス代表、更識簪」

「更識、簪? どこかで聞いたような……」

あだ名ではないその名前にどこか聞き覚えがあつたらしい。ナギが自身の記憶を掘り出す為に脳をフル稼働させていた。ちなみに癒子は早々に諦めた。

だが、喉まで出掛かっているそれが出てこない。何かきつかけさえあれば出てくるのに、と一人悶えるが、生憎とそのきつかけが一向に

現れない。

そう思った矢先、思いもよらない場所からそのきつかけはやってきた。購買でパンを買い終わったセシリアが五人に合流したのだ。そして彼女はそれまでの会話の概要を聞くと即座に答えを述べた。

「更識簪。日本の代表候補生で、専用機持ちですわ」

「そうそうそれそれ！ えっと確か『打鉄式』のパイロット！」

ようやく出てきた答えによって芋蔓式に記憶を取り出したナギがセシリアの言葉を継いだ。それを聞いた癒子もそういえばそうだったと手を叩き、そんな二人の態度に本音は若干ふくれっ面で忘れるなんて酷いと文句を付ける。

そして聞く専門であった箒と蚊帳の外に追いやられていた一夏が取り残された。

「あ、ちよつと待った」

別段会話に入らなくてもいいかと考えていた彼女とは違い、彼は何とかして混ざろうと必死に頭を巡らせていたが、その過程でふと思いついたことがあった。セシリア、と該当の人物を呼ぶと、一夏はその思い出したことを口にする。

「確か一番最初ん時言ってたよな。入試の実技試験で教師を倒したのは四人って」

「ええ、言いましたわ」

その四人中三人は、自分と箒とそしてセシリアで合ってたよな。そう一夏は言葉を続ける。その通りだと肯定された後、彼はその最後の一人について言葉を紡いだ。自分の記憶に残っている特徴を告げた。

「日本の代表候補生、そう言ってたよな？」

「その通りですわ」

そこで癒子も、ナギも、そして箒も彼の言いたいことが分かった。視線をセシリアと本音にそれぞれ向けると、三人の予想が合っているとはかりに首を縦に振る。つまり、そういうことである。

「その最後の一人が、更識簪……」

「話によると、完封だったらしいですわ」

「ふっふっふ。かんちゃんはおちよおちよおちよおちよ……強い

んだもんね〜！」

まるで自分のことのように嬉しそうに話す本音の姿は、どこことなく微笑ましい。とはいえ、一年一組所属の生徒にとっては敵を応援していることに他ならないわけで。どう反応していいものかと苦笑する癒子とナギであつたが、そこであることに気付いた。

彼女達の対面で弁当を食べている一人の少年が、探し物が見つかったかのような顔で笑っているのが見えた。とても楽しそうな顔で笑っているのが見えた。

「なあ、のほほんさん」

「何？ おりむー」

ちよつとその子に伝言があるんだけど、と一夏は述べた。表情で大体言いたいことを察した本音も同じく不敵な笑みを浮かべて続きを促す。当事者がいないのにも拘らず、何故だか火花が散っているようにも見えた。

「クラス対抗戦、俺が勝たせてもらうぜ」

「一応伝えるけど、きつと無駄だよ。おりむー負けるから」

面白い冗談だな、と一夏は笑った。真面目な話で笑うっておりむーは変人だね、と本音は笑った。お互いに笑ったまま、睨み合うように顔を突き合わせる。

「俺が、勝つー！」

「かんちゃんが勝つー！」

片方の当事者にとってはいい迷惑な意地の張り合いであった。

「それはそれとして、他のクラス代表はどうなんだ？」

本音と一夏が意地を張り合っているのを横目に、箒はそんなことを呟いた。その言葉を聞いたセシリアはカバンから端末を取り出し、該当のページを開く。一年生のクラス代表がそれぞれ記されているその中には、当然一夏と簪の名前もあった。

「これを見る限り、確かに布仏さんの言う通り一夏さんと更識さんの一騎打ちですわね」

「他のクラスもある程度の経験者をクラス代表にしてるみたいだけど、やっぱり専用機持ちとは格が違うだろうしねえ」

そんな言葉を聞きながら、箒はそれぞれのクラス代表の名前を確認していく。今は勝っていてこれから先ライバルになるかもしれない。そんなことを思いながら眺めていた彼女は、ある部分で動きを止めた。

隣のクラス、一年二組のクラス代表が空欄になっているのに気付いたのだ。セシリアにそのことを問うと、それは分からないとの返答を貰った。ならばと残り二人に尋ねてみたが、彼女達も同じように首を横に振る。

「二組の生徒さんの一人が一週間入学遅れたらしくて、その子が来てから決めるらしいよ」

その疑問に答えたのは意外にも本音であった。どうやら意地の張り合いは終わったらしく、一夏も残っている弁当を口に運んでいる。

成程、と彼女の説明に一同頷いたが、そこで一つ気付いたことがあった。一週間入学が遅れた、ということ。つまり、今日その生徒が入学してくるということである。

「ということは、今日中にこの枠は埋まりそうだね」

「そう、ですわね」

何の気無しに呟いたナギの言葉に同意するように返したセシリアであったが、どうにも歯切れが悪い。何か気になることでもあるのかと癒子が尋ねると、彼女は少し考える素振りをしてからこう述べた。「わざわざその方を待っているということは、クラス代表になるだけの力を持った人物なのでは、と思ったのですわ」

例えば、代表候補生だとか。

そこまでを口にしたセシリアに被せるように教室の入り口から声が飛ぶ。ピンポンピンポン大正解、と弾むような声がクラスに木霊した。

「……貴女は？」

「あたし？ だからさつき話してた二組の遅れてきた生徒ってやつよ。でもって、アンタの言ってたように代表候補生。名前は――」

そこまで彼女が口にしたところで、一夏が唐突に立ち上がり言葉を遮った。真つ直ぐに少女を見詰め、真剣な表情で口を開く。

「もつと素直になれ」

「へ？ い、いきなり何の話？」

「無理して日本に合わせなくていいんだ。お前はお前らしく、語尾に『アル』を付けて喋ってくれ」

何言ってるんだこいつは。それが箒を除く四人の感想であった。教室に乱入してきた二組の自称代表候補生に向かって、真剣な表情で述べた言葉がこれである。彼女達でなくともそう思うのは無理あるまい。そしてそれは当然、言われている方もそうであろう。

少なくとも、彼女達はそう思っていた。

「アイヤー！ ワタシが二組の遅れてきた生徒アルね。名前は凰鈴音アル。こう見えて中国の代表候補生やってるアルよ」

「乗ったかっ！？」

「色々酷い!？」

「おお〜」

「箒さん、ひよつとして……」

「まあ、見ていれば分かる」

この流れで何となく予想が出来てしまったセシリアは箒に問うたが、彼女はそれだけ述べると我関せずとお茶を飲んでいる。しかしその態度が、何よりも雄弁に物語っていた。

この目の前で怪しい中国人のテンプレートのような喋り方をしてる人物は、彼等の知り合いなのだ、と。

「おお、流石鈴だ。素晴らしいエセ中国人だな」

「いやあ、それほどでもないアルよ……ってアホかああああ!」

拳を握り、捻るように打ち出されたそれは見事に一夏のみぞおちに吸い込まれた。一瞬彼の体は宙に浮き、そして再び地面に足が着くのと同時に膝から崩れ落ちる。倒れ伏す彼の後頭部に、少女は躊躇無く踵落としを叩き込んだ。潰れたカエルのような格好で床に這いつくばったまま動かない一夏を見て、ようやく彼女は一息吐いた。

「相変わらずのノリツツコミだ」

「違う！　つてか箒！　ちゃんとコイツの手綱握つときなさいよ」

「そうは言ってもな。あまりにも唐突過ぎると流石に私も対処出来ん」

「嘘よね？」

「勿論だ」

悪びれることなく言い切る箒を見て、鈴音は大きな溜息を吐いた。だが、そんな態度とは裏腹に彼女の表情は笑顔である。まるで今までお預けを食らっていた犬のように、このやり取りを望んでいたかのよう。

否、ように、ではない。彼女は、こうしてこの二人と昔のように会話をするのを待ち望んでいたのだ。以前のように遠慮なく言い合うのを心待ちにしていたのだ。

「……久しぶりね、箒」

「ああ、久しいな、鈴」

お互いにそう言つて笑顔を見せた。数年会つていなかった溝は、その一言で全て埋まり切つた。ひよつとしたら、元々溝など無かつたのかもしれない、そう思うほどに。

そうしてひとしきり笑い合つた二人は、さてではどうしようかと床に倒れ伏して動かない一人の男子生徒を見詰めた。どうやらクリーンヒットしたらしく、未だに復活の兆しが見えない。一見するとそう思えた。

「おーい、いちかー。生きてる？」

「死んでるよ。見りや分かるだろ」

「あ、そうなの？　んじや火葬と土葬どっちがいい？　あたしのおススメは火葬かな。チリ一つ残さず焼却したげる」

「ごめんなさい、俺が悪かつたです」

「よろしい」

彼女の言葉に不穏なものを感じ取つた一夏は即座に起き上がり平謝り。そしてそんな彼の様子を見た鈴音は腰に手を当て満足げに微笑んだ。

その辺りでいい加減状況を飲み込みはしたがついていけない

四人が我に返った。口々に一体全体どういふことだと一夏と箒に問い掛ける。

「どういふも何も」

「昔馴染だ」

一言。二人揃って簡潔にそれだけを述べた。そしてそれ以上何かを語ろうともしなかった。どうやら彼等の中ではこの説明で充分だと思つたらしい。

だったら、と四人はもう一人の当事者である鈴音に視線を向ける。計八つの瞳に一齐に見詰められた彼女は一瞬眉を跳ね上げたが、すぐに表情を戻し肩を竦めた。

「小学校からの腐れ縁よ。中学二年の時に国に戻つちやつたから、コイツ等と会うのは随分と久しぶりになるんだけどね」

「その割には、いきなり織斑君のボケに乗つてたような……」

「そりゃ、慣れてるもの。あたしは一夏と箒がボケ倒すのを何年も見てきたんだから、別に普通よ」

「あ、あれを普通つて言つちやうんだ」

「大物だね」

彼女達の視線が関心と尊敬の入り混じつたものに変更したことで若干の居心地悪さを感じつつ、鈴音はとところで視線を一夏達に移す。この子達は誰？ 四人を見渡しながらそう続けた。

「俺の心のオアシスだ」

「干からびれば？」

一夏の答えにそう即答し、彼女は一夏の隣に再度尋ねた。一瞬何かを考える素振りを見せた箒は、しようがないから真面目に答えようと言わんばかりの顔で口を開く。最初から真面目に答えろ、という鈴音の視線がさりげなく突き刺さつた。

「私達のクラスメイトの中でも、親しい連中だ」

「私谷本癒子。よろしく凰さん」

「私は鏡ナギ。よろしくね」

「布仏本音だよ」

「セシリア・オルコットと申します。以後、お見知りおきを」

箒の言葉を皮切りに各々が自己紹介。それぞれの名前を確かめるように数回頷くと、鈴音はこちらこそよろしくと笑顔を向けた。

さて、そんなこんなでお互いの名前を確認し終わった一行は、話題を当初のものに軌道修正をするわけで。

「しかし鈴。お前、代表候補生なのか？」

「そうよ。凄いでしょ」

箒の言葉に鈴音は腰に手を当て胸を張る。その姿にどこか子供が背伸びしているようなイメージを重ねてしまったセシリアは、どことなく微笑ましい気持ちで彼女を見た。外野から眺めている気分でした。

「まあ、凄いつちや凄いが、もう既にここにいるからなあ、代表候補生」だから、いきなり話の矛先が自分に向いたのは思わず目を見開いた。彼女の心境など露知らず、一夏はセシリアがかなりの实力を持っているように、褒められた彼女は少し照れくさそうに頬を掻いた。

その一方で、聞かされた方の少女はあからさまに機嫌を損ねた表情でセシリアを睨んだ。

「ふ、ふーん。ま、まあそりや代表候補生に選ばれるくらいだし強いんでしようけど。でも、あたしの方が強いわよ、きつと」

「セシリア国内公式戦無敗だぞ」

「上等だ表出るコノヤロー！」

「え!? 何故わたくしいきなり喧嘩を売られますの!？」

「そういう性格だからな、鈴は」

「その一言で片付けないでくださいまし！」

「ごちやごちや言っただけで、受けるか受けないかどっち!？」

言葉とは裏腹に、その顔は絶対に受けろと言わんばかりであった。その表情を見たセシリアは観念するように溜息を吐き、そして鈴音を真っ直ぐに見る。元々彼女も売られた喧嘩は買う主義だ。急なことなので多少取り乱しはしたが、答えは始めから決まっている。

「では、今日の放課後に空いているアリーナで勝負をいたしましょう」

「……へえ、見た目より好戦的じゃない」

「良く言われますわ」

セシリアは余裕の表情でそう述べる。そこに浮かぶのは、笑顔。

数日前の一夏と戦う時に浮かべた、あの獲物を狙う笑みであった。

「そこまで！ 勝者、セシリア・オルコツト！」

「……あれ？」

箒のその声を、鈴音は地面に横たわった状態で耳にした。上半身を起こすと、視界に『ブルー・ティアーズ』を纏い佇んでいるセシリアの姿が見える。その機体にダメーヅらしきものは殆ど見当たらず、それはすなわち彼女が完敗したことを示していた。

「ちよ、ちよつと待った！ 今のはすこーし油断しただけよ！ もう一回勝負！」

「ええ、構いませんわ。箒さん、合図をお願いします」

そう言うのとセシリアは起き上がる鈴音と少し距離を取る。無手で悠然と立っているその光景は彼女の基本スタイルではあったが、見る人にとっては馬鹿にされていると感じかねないものであった。勿論鈴音はそれに該当する。

「始め！」

「嘗めんなコンニャロー！」

IS『甲龍(シエンロン)』を纏った鈴音はその手にIS用青龍刀『双天牙月』を構えて突進した。そのスピードは確かに代表候補生の名に恥じないものであったが、いかんせん真つ直ぐ過ぎた。愚直なほどに一直線に向かってくるその姿をしっかりと捉えたセシリアは、右手に取り出すと同時に放ったライフルのビームにより綺麗に彼女の眉間を打ち抜く。

見事なほどにカウンターを決められた鈴音は、そのままベクトルを逆に変えられ吹き飛んだ。ゴロゴロと転がり大の字に倒れるのと同じ時、箒が試合終了の宣言を下す。

「もう一回！」

即座に起き上がった彼女は再びそう叫ぶ。碁の開始の合図と共にセシリアに向かつていき、そしてカウンターを食らう。そんな行為を五回ほど繰り返した辺りで、見学していた一夏が彼女に声を掛けた。「もう今日はやめといたらどうだ？」

「はあ!? 何でよ! まだまだいけるわよ!」

「いや、そうは言うけど。お前、全然セシリアにダメージ与えてないだろ」

「気のせいよ! 次はしっかり決めてやるんだから!」

半ば意地になっているのか、彼の言葉にそう返すと再び彼女は武器を構える。対戦相手であるセシリアは別にそのことに不満はないように、鈴音が攻撃態勢に入ると同時に迎撃体制に入っていた。そして、再びカウンターを食らう光景が繰り返される。

「なあ、鈴」

「やれるって言うてんでしょうが!」

「意地張んなって。セシリアは強いんだから、しょうがないさ」

苦笑しながら述べたその一夏の言葉が、鈴音には無性に癪に障った。強いからしょうがない。それはつまり、自分は負けても当たり前だと彼が思っていることに他ならない。

彼が本当にそういう意図で発言したのかは分からない。だが、彼女はそう判断した。そう思ったから、無意識の内に叫んでいた。うるさい、と。

「何知ったような口聞いてんのよ! アンタにあたしの気持ち分かるっての!?!」

「お、おい鈴。俺は別にそんな——」

「もういい! そんなに嫌ならどっか行け! 勝手に帰るなり何なりしろ!」

拒絶するようなその言葉に、一夏は困ったように頭を掻く。そして、分かったと短く述べると踵を返した。アリーナを後にする際、「無茶はするなよ」と呟いたが、彼女は鼻を鳴らすだけでそれに答えることは無かった。

一夏が見えなくなるのを目で追っていた鈴音は、再び視線をセシリ

アに向ける。もう一回、と武器を構え、箒に開始の合図を頼んだ。

「鈴」

「何よ。アンタまで一夏みたいなことを言うわけ？」

「そうじゃない。ただ」

何を焦っているんだ？ 表情を変えることなく、箒はそう続けた。

その言葉に一瞬彼女の表情が苦虫を噛み潰したようなものになる。だが、すぐに元に戻すとそんなことないと突っぱねた。だが、そこに先程までの勢いはない。

箒の指摘が、彼女の心の奥底で凶星だと言っていたからだ。

「違う……あたしは焦ってなんかいない……だって、あたし、強くなっただももん」

「鈴？」

「あたしはもう！ あの時のあたしじゃない！ 一夏や箒に助けってもらった、一人で震えてるあたしじゃない！」

それは、箒に言った言葉なのか。それとも、自分自身に言い聞かせた言葉だったのか。彼女のその叫びは、事情を知らないセシリアでさえ悲痛なものだと感じるほどの、心からの絶叫であった。

「凰さん……」

「いくわよセシリア・オルコット！ 今度こそあたしが勝つ！」

真っ直ぐに、ひたすら真っ直ぐに。恐らく、それが凰鈴音という少女を表しているものなのだろう。性格も、そして戦い方も。それしかないと言わんばかりに、真っ直ぐに。

そのことを感じ取ったセシリアは、短く溜息を吐くと、自身の収納領域から一本の近接ブレードを取り出した。『インターセプター』、普段彼女が使うことは滅多にない、格闘用武装である。それを真っ直ぐに構えると、掛かって来いとばかりに剣先をくるりと一回転させた。

「上等！ あたしの土俵に立ったことを後悔させてやる！」

「ええ。後悔させてくださいな」

その言葉を合図にするように、鈴音は一気に距離を詰めた。あつという間にセシリアに肉薄すると、右手に持った『双天牙月』を袈裟切りに薙ぐ。だが、それは彼女のブレードで受け流され、カウンター気

味に回し蹴りを食らい後方に吹き飛ばされる。瞬時に体勢を立て直したが、セシリアは既に彼女の目前でブレードを振り被っていた。

「嘗、めんなああああ！」

左手にもう一本の『双天牙月』を呼び出す。振り下ろされたそれを弾くと、お返しとばかりに右手の刃をセシリアに突き立てた。左手で防がれてしまったが、その装甲は弾け飛び小さくないダメージを与えたことを彼女の目に示していた。

ようやく当てることの出来た一撃。だが、セシリアはその攻撃を受けてから表情が曇ったままである。否、正確には、彼女と近接戦闘を始めた時から表情が優れない。何かを考えるように、何か言いにくいことがあるかのように。

「何よ。言いたいことがあるならはつきり言いなさいよ」

それは対面している鈴音が一番よく分かる。そして彼女はそういう煮え切らない態度が嫌いだ。だから迷うことなくそう告げた。何かあるなら言え。齒に衣着せずにそう述べた。

セシリアはそんな彼女の態度に肩を竦めると、ではハッキリ言わせて貰いますと真っ直ぐに目を見る。

「猿真似でわたくしを倒せると思っっているのですか？」

「——っ!？」

彼女の告げたその一言に、鈴音の表情が目に見えるほどに動揺を示した。一体何を言っているのか、そう言いたくても、口から漏れるのは言葉にならない単語ばかり。

「今の攻撃、一夏さんの突進と箒さんの二刀の動きを真似ていますよね。鋭く、重い一撃でしたが、残念ながら模倣ではありません。自分自身の動きに昇華出来ていなければ、今まではともかく、これから先は通用しませんわ」

淡々とそう告げるセシリアを、鈴音は狼狽した顔で見詰める。反論したくとも、何も言葉が出てこない。実力で示したくとも、体が全く動かない。

認めているのだ。心の何処かで、彼女の言った言葉が真実だと肯定しているのだ。

凰鈴音は、織斑一夏と篠ノ之箒のデッドコピーである。他の誰でもない自分自身が、そう認めてしまっているのだ。

「だって……だって、仕方ないじゃない。あたしは、あたしの目指したのはアイツ等で、アイツ等の戦い方をずっと見ってきて……。アイツ等みたいになりたくて、一夏に、箒になりたくて……。だってあたし、あたし……」

壊れたテープレコーダーのように呟く彼女を、セシリアも、箒も、何も言えずに暫く見詰めることしか出来なかった。

NO07 「弱くなんかない」

凰鈴音は夢を見る。彼女が今の彼女になったきっかけの夢を見る。暗い、倉庫だった。一体何処にあるのかも分からない、そんな場所で、彼女は拘束され転がされていた。唯一動かせる目で辺りを見渡しても、自身を見下ろす下卑た視線の連中しか視界に映らない。自分を交渉材料としてしか見ていない視線しか感じない。それがたまらなく嫌で、どうしようもない怒りを感じた。

それでも、彼女はただ震えることしか出来なくて。助けを求めることしか出来なくて。自分で状況を打破することも何も出来なくて。それが悔しくて、情けなくて。

変わりたいと心の底から思った。強くなりたいと心底願った。

だから、この場所に飛び込んできた白と紅の流星は、彼女にとつて絶対のものとなった。変わるための指標になった。強くなるための目標になった。

彼女の中身を満たす心に、なったのだ。

「ハハハは……う？」

鈴音はぼんやりとした表情でそんなことを呟いた。視界に映る天井からすると、どうやらアリーナの更衣室に寝かされているらしい。そのことを確認した彼女は体を起こした。それに合わせるように、彼女の傍らで座っていた二人の少女が声を挙げる。

「目が、覚めましたか？」

「いきなり倒れたからな。心配したぞ」

二人の少女、セシリアと箒はそう言うのと鈴音にスポーツドリンクとタオルを差し出した。随分と汗を掻いていたから、その言葉に彼女は自分の額を拭う。べつとりと嫌な感觸の水分が付いたのを見て、思わず顔をしかめた。

受け取ったタオルで汗を拭き、スポーツドリンクで喉を潤し。多少

気持ちが悪く落ち着いた鈴音は見ていてくれた二人に頭を下げた。色々
と迷惑を掛けてしまった、そう言つて彼女は謝罪した。

そんな鈴音を見た二人は、苦笑しながら気にするなど返す。セシリアはむしろ倒れたのは自分の所為なのでこちらが謝らなくてはいけないと頭を下げる始末だ。

「違う。そうじゃない……そうじゃ、ない」

自分に言い聞かせるように呟くと、彼女は勢い良く立ち上がった。もう大丈夫だから、二人は心配せずに帰つてくれればいい。そんなことを言いながら彼女自身も更衣室を出ようと扉に向かう。

その姿を、箒は待てと呼び止めた。

「……何よ」

「鈴、お前は全然大丈夫じゃない」

「何でそんなこと分かるのよ」

「分かるさ、だって」

着替えてもいないのに帰ろうとしているだろう。彼女の服装を指差しながら箒はそう述べた。対する鈴音は、その言葉によつてようやく自分が未だにISスーツのままにしていることに気が付いた。成程確かに、彼女は大丈夫ではないようだ。少なくとも、心に余裕は全く無い。

そのことに自覚したのか、鈴音は体の力が抜けたようにへたり込むと、視線を床に向けたまま大きく溜息を吐いた。まるで良い所がないじゃない、そんな呟きが二人の耳に届く。

「鳳さん」

「……何？」

その姿を見ていたもう一人、セシリアは彼女に声を掛けた。疲れ切った顔を上に向けた鈴音に向かい、もしよろしければ、という前置きをする。そして、一拍置いて言葉を紡いだ。

「何か事情があるのでしたら、教えてくださいませんか？」

戦い方について少し指摘されただけで、心の余裕を無くしてしまふ。普通ならばあまり考えられないその事態には、何か理由があるのではと考えたのだ。恐らくアリーナでの対戦中に箒の言っていた

「焦っている」という部分も関係してくるのだろう。そこまでのあたりは付けられても、結局肝心な部分は分からない。ならばいつそ本人に聞いてしまえ、彼女の出した結論はこうだった。

「別に、聞いても面白いもんじゃないわよ」

「構いませんわ。面白い話を期待しているわけではありませんし。それに」

友人が何か困っているのであれば、力になりたい。そう言ってセシリアは微笑んだ。

鈴音はそんな彼女の笑顔をキョトンとした表情で見詰め、そして次の瞬間に吹き出した。肩を震わせ俯くように笑うその姿は、先程までの彼女ではなく、最初に一夏達と馬鹿なことをやっていた彼女に近く感じられて。

「……それで、何故わたくしは笑われたのでしょうか?」

「多分、鈴の中でセシリアは友人ではなかったんだろう」

「地味に心に来る一言をさらつと言いますわね」

「お前みたいに勝負を挑まれた相手とその日に仲良く昼食を食べに行くのが特別なのさ」

声を殺して笑う鈴音を尻目に、箒とセシリアはそんなことを話す。若干不満そうに唇を尖らせるセシリアに向かい、箒は薄く笑いながら大丈夫だ、と肩を叩いた。

今の一言で向こうはちゃんと友人だと認識しただろうからな。薄い笑いをしっかりとした笑みに変えた箒のその一言で、彼女も同じように微笑む。それならばいいのですわ、そんなことを言いながら髪をかき上げる姿は、妙に彼女に似合っていた。

「ねえ、オルコット」

「セシリアとお呼びくださいいな。友人、ですのよ」

「ぶふっ。んじゃ、あたしも鈴って呼んでよ。友達、だからね」

笑顔は二つから三つに。更衣室にいるもの全員が、笑顔になる。最初に漂っていた雰囲気は、綺麗さっぱり無くなっていった。

そのことで吹っ切れたのか、鈴音は改めて二人の名前を呼ぶ。そして、長くなるかもしれないから場所を変えようと提案した。

「着替えた後でね、お互い」

「そう……ですわね」

「……そういえば、お前もISスーツのままだったな」

審判役であった為に一人だけ制服姿の箒は、そう言って肩を竦めた。

「さて、ここならば話すのに支障はない」

「え、ええ。……そうでしょうか？」

「いや、うん……まあ、そう、なんだけど」

あまり人に聞かれたくない話だから。そんな鈴音の言葉に、箒が良い場所があると提案したのがここである。確かに条件は満たしているため、セシリアも鈴音も頷いてはいるのだが。

だが、しかし。

「……さ、箒と一夏の部屋だよね？」

「勿論だ」

「一夏さんが、いらっしやいますよね？」

「勿論だ」

一体何を言っているんだ。そんな顔で箒は二人に返した。別段わざとやっているわけではなく、表情からすると素のようであるので、余計に性質が悪い。そのことを理解した二人は、揃って溜息を吐いた。

「ねえ箒」

「ん？」

「一夏、ちよつとどっかやっててくれないかな？」

「物扱いだな俺」

というか別に最初から出て行く気だったし。そう呟いて一夏は頬を掻く。彼は彼なりにこの状況から空気を讀んだのだ。先程まで会話に加わらなかつたのもその為である。

そのまま彼は部屋のドアを開けた。終わったら呼んでくれと残して部屋から立ち去る。その前に、一言だけ言い忘れていた、と振り

返った。

「鈴、ごめんな」

「ふえ!？」

「お前に酷い事言っちゃったから。ありや怒るのも無理ないなってな」

「え？ あ、い、いや、べ、別に、気にしてなんかいいわよ!」

「そうか。それならいいんだ。俺は元気なお前が好きだから、落ち込んでる姿なんか見たくないしな」

「はうあいえ!？」

鈴音の言葉になっていない叫びを聞きながら、一夏は今度こそ部屋を出て行く。そして部屋には茹蛸のようになった少女とそんな少女を横目に溜息を吐く二人が残された。

どうやら茹蛸から人間に戻るには少し時間が掛かりそうで、その間に飲み物でも用意しようと箸は立ち上がる。そんな彼女の背中に、セシリアは聞きたいことがあると声を掛けた。

「鈴さんは、その、一夏さんのことを？」

「だとは、思うが……良く分からん」

「一目瞭然な気もしますけれど」

「そう見えるだろう？ だがな」

私と同じこと言っても同じ反応するぞ。そう言って箸は肩を竦めた。その背中は呆れているような、照れくさがっているような、そんなよく分からない雰囲気纏っていて。

「面倒臭い方々ですわね」

セシリアがそんな感想を持ってしまうのも仕方ないのかもしれない。

そんな会話をしている間にある程度落ち着いたらしい鈴音は、箸の用意したお茶で喉を潤し、とりあえずどこから話そうかと首を捻った。大体のことは箸は知っているので、そうでない部分を話せば彼女への説明は済む。だが、セシリアがいる以上それでは済まない。しようがない、と小さく溜息を吐くと、彼女は口を開いた。

「あたしき、誘拐されたんだ」

何でもないことのように述べた。述べたつもりだったが、その声は若干上ずっていた。彼女にとってこの話は、思い出したいくないものと忘れたくないものが同時に存在する面倒な記憶だ。平静を装おうとしても、どうしても装い切れない。

「誘拐、ですか？」

「……うん。身代金目的とか、そういう普通の誘拐とはちよつと違うやつね」

事の発端は彼女が中学一年生であった頃。仲良くなっていた筈と一夏の姉でありある程度交流もあった二人、東と千冬の組織した『しののの』が第二回モンド・グロッソに出場する時の話だ。

「最初の大会はあたしも良く知らなかったから、見てなかったの。でも、二回目のその時はもうI Sが一般人にも大分浸透して話題になってて。で、当然あたしもその例に漏れずI Sに興味津々でさ」

一夏達と仲が良いから、という理由で『しののの』の招待客にしてもらったんだ。そう鈴音は続けた。学校を休んで、開催国に飛行機で向かって。そうしてワクワクしながら会場に入った彼女は、実際に生で見る世界大会に興奮しっぱなしであった。そして、並み居る世界の代表選手をたかが一組織の代表がなぎ倒す姿に見惚れたりもしていた。

「舞い上がってたんだらうね、あたし。一人で行動すると危ないって言われてたのに、ふらふらとその辺彷徨っちゃってさ」

気付くと、視界を塞がれ気絶させられていた。目が覚めた時には、大会会場とは全く違う場所で拘束され転がされていた。複数人の犯人は彼女を下卑た目で見下し、交渉用の材料扱いをしていた。

誘拐犯にとって、身内でも何でもない違う国籍の少女が『しののの』の招待客として観戦に来ているという状況は、彼女を特別な存在に見せていたのだ。捕まえて交渉材料にする価値のあるもの、とみなされてしまったのだ。

「で、まあ正確には知らないんだけどさ。国の技術を上回る『しののの』の力を欲しがってたんだと思う。その為に人質取って、世界大会を棄権させることで権威を失くさせて、その力を吸収して。まあ確か

そんなことを束さんに向かって言ってた」

当然断られてたけどね、と彼女は笑う。事実、千冬は棄権などをすることなくそのまま勝ち進み優勝、二連覇の栄冠を得ることで『世界最強のＩＳ技術者と世界最強のＩＳ操縦者による世界最強の我侪軍団』である『しののの』の権威も一層強くなった。

「……それは、つまり……見捨てられたの、ですか？」

思わず隣にいる箒を睨んだ。もし、もし本当に彼女を見捨てていたのならば、そして箒もそのことを知っていたのならば。セシリアは返答次第でその横つ面をぶん殴ろうと拳に力を込めた。お前に鈴音の友人と名乗る資格はない、そう怒鳴るつもりだった。

「いや、違う違う。ちゃんとあの人は、ハッキリ言って何の価値も無い、他人のあたしを助けてくれた」

だが、鈴音の返答は否。見捨てられてなどいない、と答えた。それに安堵の溜息を吐いたセシリアは拳を開き、目の前のお茶を一口含む。ぬるめのお茶が、喉に丁度いい刺激を与えてくれた。

「まあ、実際に乗り込んできたのは二人だったけど」

そう言っただけか遠い目をする鈴音だったが、その顔は大切な思い出を語るように優しい表情をしていた。辛い記憶のほすのそれが、そんな表情が出来るものになる理由。そう考えれば答えはおのずと分かってくる。

「二夏さんと箒さんが、来たのですね」

「うん。あの頃の二人の機体って実験機も実験機で、欠陥品もいろいろだったんだけど。それでも二人はあたしを、あたしなんかを助けに来てくれた」

そう言っただけで彼女の顔は、まるでヒーローに出会った子供のように。

ああ、そうか。とセシリアは納得した。彼女がああなったのはそういうことなのか、と。

まるで、などではなく。彼女はヒーローに出会ったのだ。そして彼女は、そのヒーローになりたくて、その動きを真似た。結局彼女は、子供そのものだったのだ。

「……その事件がきっかけで、うちの両親がギスギスしちゃって、中二になる頃には離婚。あたしは母親に連れられて中国に行くことになって」

そこで彼女は、ISのパイロットの道を選択した。日本では出来なかつたことをやろうとした。ひたすら我武者羅に、彼等の動きを自分で試した。

「そしたらさ、いつのまにか代表候補生になつてた。笑っちゃうわよね、あたし、基礎の訓練も何も受けてないのよ。一夏の立ち回りとか、箒の機動とか、そういうのをただ見よう見まねでやってただけ。それだけで、他の連中をやっつけられた」

だからきつと、調子に乗っていたんだと思う。どこか自嘲するように彼女はそう言つて笑う。借り物の力で、自分自身を何も鍛えなくて。それだけで今の地位に上つた自分を、強くなつたと思ひ込んでいた自分を、今更になつて自覚したのだ。

椅子に体を預け、話したらスツキリした、と彼女は誰ともなしに呟いた。やっぱり所詮偽者は偽者か。そんなことを続けた。

「二組の人には悪いことしちゃつたかな。あたしなんかをクラス代表にしちゃつたから、きつと恥掻いちゃう」

「……それは、どうしてですか？」

「言つたでしょ？ あたし偽者なの。一夏と箒の偽者。それを取つ払っちゃつたらその辺の練習生にも劣るレベルしかないただのザコ。そんなんが代表じゃ恥ずかしいじゃない」

笑みを浮かべてはいるが、それはただ貼り付けているだけ。無表情と何も変わらない。そんな状態のまま自分を卑下し続けている姿を見たセシリアは、思わず顔をしかめた。

そしてそれは、隣にいる彼女も勿論同じで。

「鈴」

「何？」

「お前は弱くなんかない。私や一夏の真似をした程度で勝ち進むことが出来たなんていうのはお前の考え過ぎだ。お前がちゃんと実力を持っていたからこそ、勝てたんだ」

「ありがとう等。でも、別に慰めなくてもいいよ。ちゃんとあたしが自分で分かっているんだから。あたしの実力なんか、どこにもない」
「そんなことはありませんわ」

思わずセシリアも口を挟んだ。だが、それでも彼女はふるふると首を横に振るばかり。自分は弱い、自分は偽者。ことあるごとにそのフリーズを会話に組み込む。

土台が崩れている、と二人は思った。今まで自分を支えてきたもの、自分を満たしていたものが全て崩れ、流れ落ちてしまっている。今日の前にいる少女は鳳鈴音という名の抜け殻、そう形容してもいいくらいの代物だ。

そして、そうしてしまったのは誰か、と問われたならば。

「鈴」

昔と同じ気分で危うい彼女の心に立ち入ってしまった自分だ、と箒は思う。

「鈴さん」

出会って間もないくせに彼女の心を抉ってしまった自分だ、とセシリアは思う。

「大丈夫だから。あたしはもう、大丈夫」

だから、こんな虚ろな瞳で笑う少女を放っておくことなど、出来るものか。

二人は同じタイミングで立ち上がり、そして全く同じ動作で彼女を睨んだ。殺す勢いで睨み付けた。その迫力に、鈴音も思わず言葉を止めて背筋を正す。

「決めたぞ」

「決めましたわ」

ゆっくりと、二人揃って同じ言葉を紡いでいく。右手で目の前の彼女を指差し、はつきりと宣言する。

お前を、鍛え直してやる、と。

「……へ？」

「そうだ、偽者だなんてもう言わせん。お前を本物に仕立て上げる！」「ええ。弱いだなんて言わせませんわ。わたくしが貴女を強者に押し

上げます！」

「え？ ……え?!」

そうと決まれば話は早い。じゃあ早速始めようかと二人は彼女の襟首を掴む。まずはアリーナでもう一度おさらいだ、いやもう時間がない、ならば基礎体力からだ。そんな会話をしながら彼女を引きずり部屋の扉を開ける。そんな二人の目はもう完全に据わっていた。

「い、いや、ちよつと、ちよつと待つて！ あたし、同意してない！」

あたしやるつて言つてない！」

『うるさいー！』

「ひー！」

羅刹になった二人の少女に、鈴音が出来ることはただ流されるままにしていることだけであった。

そしてこの日、彼女の恐怖ランキングのトップが誘拐されたことから上書きされた。

翌日の放課後。使用許可を取った第二アリーナで、セシリアが仁王立ちして浮かんでいた。目の前にはげんなりした表情の鈴音がISを展開して立っている。

「特訓を始めますわ！」

「お、おー」

「声が小さい！」

「おー！」

半ばやけくそに彼女は叫ぶ。貸し切りではない為、周りには他の生徒もいるのだが、そんなことは気にせんとばかりにノリノリなセシリアを見て、誰もが二人から視線を逸らす。

「と、とところで、箒は？」

「ご安心ください。少し遅れています、じきに来ますわ」

にこやかにセシリアはそう述べるが、逆にそれが鈴音のテンションを下げしていく。むしろ来なくていい。その言葉は寸でるところで飲

み込んだ。

そんな彼女の表情を見たのだろう。セシリアは一体どうしたのだと彼女に問うた。当然答えなど決まっている。

「昨日の特訓の所為に決まってるでしょうが！」

「昨日、ですか。何かありましたか？」

「いきなりあの無駄に広いグラウンド五週させられて、その後箒と竹刀で打ち合いさせられて。仕舞いにや体動かなくなるまで筋トレさせられりやどうにかなるわ！」

「それをこなせる気合があるなら大丈夫ですわ」

「どういう理屈だ！」

というか、その話しぶりではあの特訓にそこまで意味が無かったように聞こえるのだが。そうは思ったが彼女は聞かなかつた。答えが返ってくるのを恐れたのだ。

「まあ、冗談はこの辺にして」

「何処から何処までが？ まさか昨日の特訓からって言わないわよね！？」

「ふふっ」

「笑って誤魔化すなあああ！」

冗談ですわ、とセシリアは笑うが、結局何が冗談なのか分からない。鈴音は若干人間不信に陥りながら彼女を睨んだ。

その視線を受け流しながら、彼女は表情を引き締めて真っ直ぐに前を見た。前に立つ人物を上から下まで見渡しながら、ふむ、と頷いた。

「鈴さん」

「な、何？」

「その『姿勢』も、お二人の真似事ですか？」

問われた鈴音は首を傾げる。姿勢と言われても、と自分の姿を眺めたが、別段何かをしているわけでもなければ一夏や箒の真似をしているわけでもない。今のこの状態は、彼女の自然体であった。

その答えを聞いたセシリアは、それは良かったと微笑んだ。

「自然に芯が『真っ直ぐ』である、というのは素晴らしい才能ですわ。箒さんの言う通り、貴女の実力は決して低くなんてありません」

IS機動の要である正中線を鍛えることなく持っている。それが
あるからこそ、ただの物真似で代表候補生まで進むことが出来たの
だ。そうセシリアは彼女に言う。言われた当の本人は暫く目をパチ
クリさせ、そして恥ずかしそうに視線を逸らした。

そしてそのことを告げた彼女は、ならば一気に特訓を進めても良さ
そうだと邪悪な笑みを浮かべる。

「基礎的な機動の特訓も勿論行いますが、まず鈴さんに必要なのは――」

言いながら自身の武器を取り出したセシリアは、それを鈴音の眼前
に突き付けて微笑んだ。

引き金に指は掛かっていないが、しかし目の前に銃口があるという
のはあまり気持ちのいいものではない。鈴音は何が必要なのよ、と右
手でそれを眼前からどかしながら問う。その瞬間、彼女の真横をビー
ムが通り過ぎる。耳元を光が掠る感覚がして、思わず冷や汗を流し
た。

「防御、ですわ」

「あ、ああああ、アンタねえ！ いきなりぶっ放すなんて何考えて！」
「戦闘中に今から撃ちますよ、と宣言する者はそうそういません。通
常はいきなり攻撃が来るものと考えるべきです」

「……そりゃ、そうかもしれないけど」

納得いかない。表情がそう述べていたが、セシリアは意図的に無視
をした。では早速講義を始めましょうと少しだけ距離を取り、銃を構
える。

この場合、貴女ならどうします？ そう彼女は鈴音に尋ねた。

「え？ ……真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばす」

「猪ですか貴女は」

「何ですよ！ 一夏や箒もそうやってたじゃない！」

「そうですわね。でも、あのお二人と貴女では決定的な違いがありま
すわ」

『防御を捨てる』のと『防御を知らない』ではどうしようもないほど
の差がある。銃を構えたままセシリアは淡々と述べる。選択肢を

持っていないければ、持っている者に対してどうしても遅れを取ってしまうのだ。

「えーっと……それ、どうすればいいの？」

「……今までどうやって戦ってらしたのですか？」

「真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばす」

「訂正します。猪ですわ貴女は」

「断定!？」

盛大に溜息を吐いた。これは色々大変だ、と少しだけ不安になった。

だが、とセシリアは思う。天性の姿勢制御と、自分自身の力に昇華出来ていないとはいえ戦闘に耐え得る模倣を行えるセンスを持っているのだから、ある程度教えればすぐにコツが掴めるはずだ。そう結論付けると、では早速と両肩部のBT兵器を起動させた。

「まず大事なのは、『視る』ことです」

「見ること? 別に目を瞑ったりとかしてないけど」

「そういうことではなく……相手の動きを読み取る、と言った方がいいのでしょうか」

相手がどう攻撃してくるか、何処を狙っているか。それらを感じ取り、そして反応する。それこそが『視る』ことだとセシリアは告げた。

とはいえ、そんな言葉で分かるようならば苦労はしない。

「よし、分かった!」

「……そういう小学生のような反応はお止めになった方が」

しない、のだが。鈴音は勢い良くそう返事をした。あまりにもあつさりと返事をしたので、指導しているセシリアは思わずそんなことを言ってしまうほどだ。しかし彼女は大丈夫とばかりに腕を振り上げた。

「要は相手の全体を見ろってことでしょ。楽勝楽勝」

「では早速」

四つのBT兵器を鈴音の周囲に配置し、まずは小手調べと一斉に掃射。発射の直前に反応した彼女は、素早くその場から離脱した。

では、と一つ一つを細かく操作し、それぞれの回避ルートを潰すよ

うにビームを放つ。右に避ければ右に、上に避ければ上に。避けた先にある追加の一撃を躲せるものなら躲してみろと矢継ぎ早に撃っていく。

だが。

「よっ、と、ととっ」

「——え？」

彼女は、鈴音はそのことごとくを躲し切ってみせた。そのありえない光景を見たセシリアは思わずBT兵器の操作を止めてしまい、急に攻撃の来なくなった鈴音は一体どうしたんだと彼女に向かって声を挙げた。

「……何故、躲せるのですか？」

「いや、何故も何も、アンタが言ったんでしょ？ 相手を見ろって」

何てことのないように彼女は言う。だが、セシリアにとつてそれは十分に驚愕に値することであった。一度、たった一度の説明だけで、今までまるで出来ていなかったものが出来るようになったのだ。これが異常でなくてなんだというのだ。

そこで彼女は気付くことがあった。ひよつとしたら、と思うことがあった。浮かんだ疑問を確信に変える為に、彼女は鈴音に向かって声を掛けた。

「貴女が一夏さんと箒さんの戦いを見たのは、いつ頃が初めなのか？」

「へ？ いつも何も、あたしを助けに来てくれた時に見たのが最初で最後」

それ以外は実験的に空飛んでたりとか武器のテストとかそういうのしか見られなかったし。そうやって彼女は笑ったが、対照的にセシリアの表情は強張った。

それはつまり、たった一度見ただけで、彼女は代表候補生になるほどの模倣を行っていたことになるわけで。

「済まない、遅くなったな」

「ほ、ほ、ほ、箒さん！」

「ん？ どうしたんだセシリア。顔が変だぞ」

「そこは顔色でしよう！ ではなくて！」

丁度その答えに辿り着いたタイミングでやってきた箒に、彼女は慌てて詰め寄る。状況を飲み込めていない箒は首を傾げたが、しかし彼女が話を始めると難しい顔をして顎に手を当てた。

「つまり鈴は天才なのか」

「あーもう！ 何でこうアレな人しかいないんですの！」

「いつの間にかあたしもアレ扱いだし」

「今この場で一番規格外は貴女ですわ！」

肩で息をしながら、セシリアはもう少し真面目に考えろと箒に詰め寄った。その迫力に思わず彼女もたじろぎ、首を慌てて縦に振る。その返答を聞いて満足げに微笑むと、では教えてくださいと答えを促した。

「つまり鈴はてんき——」

「貴女が自分でおっしゃってましたよね？ 天井は許さない、と」

「生身の人間に向かってビーム兵器はよせ。流星に死ぬ」

全面的に降伏を示すように両手を挙げた箒は、やれやれと肩を竦めた。そのまま視線をセシリアから鈴音に移すと、その目をじっと見詰める。

再び視線を戻すと、箒はやれやれともう一度肩を竦めた。

「セシリア、少し鈴と戦わせてくれ」

「それは構いませんが……」

距離を取ってI Sを解除したセシリアに代わり、箒がI Sを纏って鈴音の前に立つ。二刀を構え、真っ直ぐに目の前の彼女を見た。

行くぞ、という言葉と距離を詰めるのが同時。そして二人を見ていたセシリアが気付いたタイミングでは既に箒が刀を振り被っていた。完全な不意打ち、このまま首を刈り取って勝負あり、そう言えるほどの一撃。

それを、鈴音は体をずらして回避していた。刀が空を切る音を聞き、目の前の彼女の笑みを見て、箒は満足げに笑う。よく分かった、と言うと持っていた刀を仕舞いセシリアの方へ視線を向けた。

「鈴は、目が良い」

「その言い方もどうかと思いますが……まあ概ね同意ですわ」

箒とセシリアが辿り着いた答えはこれであった。彼女は天性の視界の広さを持っている。元々持っていたその素質はどうやら花開くのを今か今かと待ち構えていたようで、セシリアの言葉をきっかけに一斉に開花したようであった。

「ただ、わたくしのあの一言をきっかけにするくらいならば、もっと以前に開花していてもおかしくないと思うのですが」

そう言っただけで彼女は首を傾げるが、箒はそんなことはないと言った。友人が自分の特訓をしてきている、という状況での一言は充分大きなものだろう。そう続けた。

「後は、そうだな」

今までそれを自分と一夏の模倣に全て注いでいたからだろう。そう言っただけで彼女は苦笑した。あの時に見た光景を忘れない為に、視界を塞いでいた。つまりはそういうわけである。

その呪縛から逃れた今、鈴音はその力を全力で使うことが可能になったのだ。

「えーっと、何だか良く分からないんだけど。あたし、凄いの？」

「ああ、凄いぞ」

「ええ、代表候補生として恥じないだけの凄さですわ」

そんな二人揃っての賞賛の言葉に、彼女は思わず飛び上がる。正銘、自分自身の評価をされたのだ。嬉しくないはずがない。飛び上がったまま空中で三回転して目を回してしまうくらいに、彼女は舞い上がった。

これで、本当に二人と同じ場所に立てる。そのことが、彼女のテンションを最高に跳ね上げていた。今なら何でも出来るような気さえした。

「では、これからはしっかりと自分自身の力を磨かなくてはいけませんわ」

「そうだな、自分なりの戦い方を身に付けなくてはな」

「……へ？」

そんな状態であった為に、いつの間にかISを纏った二人が自分を

取り囲んでいることに気付くのが遅れた。それぞれ得物を構え、完全に叩きのめす気満々でいることに気付くのが遅れてしまった。

逃げ出すタイミングを、失ってしまった。

「それだけ視界が広いのでしたら、きつと二人同時でも何とかなるでしょう」

「遠距離と近距離、その二つを同時にどう捌くか。まずはそれぞれの攻撃を体に叩き込ませるところからだな」

「え？ え!?! ちよ、ちよつと、二人共目が据わってんだけど」

鈴音のそんな言葉を聞いてもそれがどうしたと二人は返す。安心しろ、と邪悪な笑みを浮かべてのたまった。

クラス対抗戦までは、間に合わせる。その言葉と、ビームと斬撃が放たれたのがほぼ同時であった。

「何を間に合わせるってのよおおお！」

悲痛な叫びとは裏腹に、今日この日、彼女は撃墜されることなく攻撃を耐え切るのだった。

No08 「当たり前じゃない」

「さて、ついにクラス対抗戦が明日に迫ったわけだが」

「ねえ」

「長かったようで、短い期間でしたわね」

「ねえ」

「一体どのクラスが優勝するんだろうな」

「ねえ」

「それはきつと、神のみぞ知る、と言ったところでしよう」

「無視すんなあ!」

その叫びに、ようやく遠い目をしていた二人は声の方へと振り向いた。そこには今日も今日とて体力の限界になるまで二人に攻撃され続けた、IS『甲龍』を纏った鈴音の姿がある。シールドエネルギーは既に底を突いており、辛うじて展開しておくのがやつとの状態であった。

そんな状態の彼女を見た二人、箒とセシリアは誤魔化すように高笑いを上げた。大丈夫だ、心配要らない。一体何を言っているのか分からないそんな言葉をただただ述べる。

「あのさ」

「大丈夫だ」

「あたしこの二週間くらい、二人からボコされた記憶しかないんだけどさ」

「心配要りませんわ」

「あたしの、自分なりの戦い方って結局どうすればいいわけ?」

「大丈夫だ」

「ぶつちやけ防御というか回避というか、そういう特訓しかしてくない?」

「心配要りませんわ」

「……ふとんがふつとんだ」

「大丈夫だ」

「心配要りませんわ」

駄目だこいつら。鈴音はそう結論付けた。

「んで、結局特訓の意味は無かったってことなのか？」

「別にそういうわけじゃないと思うんだけど」

RPGの村人Aのようになっていた二人を置き去りにアリーナから外に出た鈴音は、そこで別のアリーナで特訓していたらしい一夏と鉢合わせた。どうやら彼も帰る途中らしく、二人は揃って学生寮までの道を歩く。

「箒が、えーつと、何て言ってたかな。『観の目』だか何だかを鍛えることで、相手の動きを読んで先手を取るのがあたしには合ってる、とかなんとか」

「先手、ねえ……。出来るのか？」

「分かんない。そういう特訓してなかったしね」

後ろ手を組んで頭に回し、そのまま空を仰ぎながら彼女は笑う。こうなればぶつつけ本番でやってみるしかない。そんなことを呟いた。

不意に一夏が声を挙げる。だったら、今からやってみるか。そう言って鈴音へと笑いかけた。

「今から？ アリーナに戻るの？」

「いや、別にISを使う必要はないだろ」

そう言って彼が指差したのは、丁度目の前にあった剣道場であった。剣道部の部員達が後片付けをしているその中に、彼はちよつとすいませんと突っ込んでいく。幸いにして箒の繋がりである程度顔見知りになっていたので、許可自体はあっさりとした。施錠と清掃を忘れないように、という言葉に、分かりましたと一夏は返す。

では早速始めようか、と一夏は鈴音を剣道場へと押し込んだ。

「で、ここで何するわけ？」

「だから、さっき言っただろ？ 相手の動きを読んで先手を取る特訓だ」

「……………どうやって？」

「それは盲点だった」

「アンタ一回死んだ方がいいわよ」

呆れたようにそう述べると、鈴音はそれじゃあ帰ると踵を返す。こいつに期待した自分が馬鹿だった、そんな感想まで抱いた。

だが、そんな彼女を呼び止める声があつた。一夏ではない、女性の声である。

振り返ると、帰ったはずの剣道部員数名を伴ってスーツ姿の女性が仁王立ちしていた。手にスポーツチャンバラ用の刀を持って不敵な笑みを浮かべているその女性は、彼女も良く知っている人物で。

「千冬さん！」

「学校では織斑先生と呼べ」

そう言うと同時に間合いを詰め、持っていたスポーツチャンバラ用の刀を鈴音に向かって振り下ろす。一瞬反応をしたものの、その一撃はそのまま脳天へと叩き込まれた。当たっても痛くないはずのその刀から気持ちいいくらいの快音が響き、そして彼女は膝から崩れ落ちた。思わず条件反射で痛いと呼んでしまうほどの、それほど一撃であつた。

「成程」

そんな一撃を叩き込んだ張本人である千冬は、何か感心するように頷いた。そして、持っていたスポーツチャンバラの刀を一夏に渡すと、自分は二人から距離を取る。

状況が飲み込めないのは刀を渡された一夏と、そして脳天に一撃を叩き込まれた鈴音である。一体全体何がどうなっているのか、お互いに見詰め合い首を傾げた。

「凰、お前の特訓を特別に私が見てやろう」

「え!? 千冬さ——織斑先生が!？」

「と言っても直接教えるわけではないがな。あくまで外野から口を出すだけだ」

そこまで言うと、彼女は一夏に指示を出す。とりあえずそれで鈴音を殴れ、と。言われた方は一瞬あっけに取られたが、すぐに頷くと持っていたスポーツチャンバラの刀を正眼に構えた。

「確かにこれなら当たっても痛くないし、遠慮なくやれるな」

「いや、仮にもあたし女なんだし少しは躊躇しなさいよ」

そんな鈴音の言葉に一夏は薄い笑みを浮かべると、一足飛びで間合いを詰め真つ直ぐに振り下ろした。傍から見えていた剣道部員ですら思わず声を挙げてしまうほどのその踏み込みの速さから繰り出される一撃は、そのまま彼女の脳天へ吸い込まれ――

「つとおー！」

その直前、体を後ろに反らすことで眼前を通り過ぎるだけに留まらなかった。空を切った一夏の刀はそのまま剣道場の床を叩き、ポコンと間抜けな音を立てる。それと同時に、観客になっていた剣道部員の歓声が上がった。

「騒ぐな。……風、どうやらお前の受けた特訓は大分自分の身になっているようだな」

「え？　そ、そうなんですか？」

「恐らく、集中した今のお前に触れられるのは代表候補生クラスにならないといけないだろう。真つ直ぐ突っ込んで被弾ばかりしていた以前のお前とは段違いだ」

千冬のその言葉に鈴音は照れくさそうに頭を掻いた。

だが、と彼女は続ける。それだけでは勝つことは出来ない、そう言ってもう一本のスポーツチャンバラの刀を取り出した。それを鈴音に向かって放り投げる。

彼女がそれを受け取ったのを確認して、千冬は二人へと指示を飛ばした。戦え、と。

「え？」

「聞こえなかったのか？　お互いに得物はそのスポチャンの刀だ。ルールは……そうだな、急所に攻撃を叩き込まれた方が負けだ」

審判は自分と周りの剣道部員が行うから遠慮なくやるがいい。そこまで言うのと、彼女は距離を取り腕組みをしたまま静かに佇む。どうやらもう説明することは無いらしい。

暫くそんな千冬を見ていた二人だったが、お互いに視線を向けあうと、少し距離を取って刀を構えた。一夏は正眼に、鈴音は片手で。そ

の状態のまま、睨み合う。

「いくわよー！」

先に動いたのは鈴音。真っ直ぐ一夏へと突っ込んで持っていた刀を横に薙ぐ。その斬撃を刀で受け流すと、一夏は返す刀で縦一文字に彼女を切り裂いた。スパーン、と盛大に音が響き、鈴音はその場でバランスを崩してへたり込む。

「一本。織斑の勝ちだ」

淡々と千冬がそう告げる。その言葉を耳にしたことでようやく自分の方が負けたと認識した鈴音は、勢い良く立ち上がるともう一回と刀を構えた。勿論一夏は望むところと刀を構える。

「こんちくしよおおおー！」

「甘いー！」

始め、の合図と同時に一足飛びで真っ直ぐ突っ込んだ鈴音は、振り下ろした斬撃をあつさりを受け止められた。弾かれたことでがら空きになった胴体に向かって一夏は刀を叩き込む。心臓部を切り裂かれた彼女は、再び敗北と相成った。

「もう一回！」

「おう、何度でも来い！」

大きく息を吸い、そして真っ直ぐ突っ込む。一夏の喉を狙ったその突きは一直線に目標に吸い込まれ、しかし半身をずらされたことで空を切った。勢い余ってバランスを崩したところに再び一撃。彼女はそのまま床を盛大に転がった。

「何で当たらないのよー！」

先程までISでの特訓をしていたとは思えないほどの元気で跳ね起きた鈴音は、八つ当たり気味に一夏へと文句をのたまう。対する一夏はそんなこと言われても、と頭を搔いた。

「凰」

「……何ですか?」

「お前は『野猪（イエズウ）』か」

「わざわざ中国語で言われた!?!」

呆れたように溜息を吐いた千冬は言葉にショックを受けたように

固まる鈴音。奇しくもそれは特訓二日目にセシリアに言われたことと同じことであった。ふと視線を動かすと、一夏もうんうんと頷いているのが見えて、彼女は追加でショックを受ける。

「一応聞いておくぞ。お前の攻撃のコンセプトは？」

「えっと、真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばす」

「お前は何の為に修行してきたんだ」

「全否定!？」

そもそもこれは何の特訓だったのか思い出せ、そう言うと千冬はもう一度盛大な溜息を吐いた。

その言葉を聞いた鈴音は考える。この特訓を行ったそもそも理由、それは何だったのか。何故ここで一夏と剣を交えているのか。

「……相手の動きを読んで、先手を取る」

「その通りだ。ならば、やることは分かるな？」

こくりと頷き、彼女は再び刀を構えた。視線の先にいる一夏も同じように刀を構え、そして真っ直ぐに彼女を見ている。そんな彼を、同じように真っ直ぐ見詰めた。

始め、という合図が聞こえたが、鈴音は動かない。目の前の相手を見詰めて微動だにしない。心なしか、空気も緊張しているように思えた。

先に動いたのは一夏。一足飛びで間合いを詰め、しかし目前で止まると彼女の左側に向かって刀を薙いだ。鈴音は右手で構えている以上、左半身への攻撃は一瞬反応が遅れる。そう見越しての攻撃だった。

だが、鈴音はその時既に彼の左側へと移動していた。一步足を踏み出し、彼の斬撃が届くよりも早く、彼女は右手に持っていた刀を彼の後頭部へと叩き込む。軽く、乾いた音がして、一夏は前につんのめった。

「二本。勝者、凰鈴音」

千冬の淡々としたその一言が、彼女には限らない賞賛の言葉に聞こえた。

「お、おとおお」

「何唸ってんだ？」

「感動してんのよ！ 乙女心の分かんない奴ね」

「乙女はそんな地の底から響くような唸り声で感動しないと思うんだが」

「とうっ」

「おぶっ！」

顔面に向かってスポーツチャンバラの刀を振り抜いた。どれだけ柔らかくとも、流石に食らった場所が場所なので、一夏は顔を押しさえジタバタともがく。そんな彼を尻目に、鈴音はもう一度先程の感覚を思い出すように刀を振った。

相手を良く見る。それは箒やセシリアとの特訓で身に付けた彼女の新しい武器だ。これにより彼女は相手の動きを読み取り、そして反応することが出来る。だが、それだけでは足りない。反応したその先が必要なのだ。

そしてその先を掴むヒントは今の戦いで手に入れた。

「よし一夏、もう一回やるわよ」

「その前に何か言うことあるだろ」

「言って欲しかったらこのあたしに勝つことね」

「何キャラだよ」

テンションがうなぎのぼりな鈴音を見ながら、一夏はもう一度刀を構える。特訓とはいえ、手を抜いていたら何にもならない。そう考えた彼は、本気で行くぞと刀を握る手に力を込めた。

踏み込む。真っ直ぐではなく斜めに進んだそれは、彼女の死角へ入り込むように進み、そして不可避の一撃を放つ。

その手筈だったそれは、彼の一撃よりも早く飛んできた斬撃によって防がれた。正確には、彼はその為に攻撃から防御に動きを変えた。柔らかい刃がお互いの目前でぶつかり合う。

「あ、あれ？」

「はーっはっはっは。甘い小娘！ 俺がそう簡単に負けるとでも

思ってたのか」

「何キヤラよ」

ぶつかり合った刀を離し、もう一度間合いを広げる。お互いに刀を構えたまま、それぞれの出方を見るように睨み合った。どちらも動かず、ただじつと相手の出方を待つ。

そんな状態が一分ほど続いたであろう頃、痺れを切らした鈴音は一夏に向かって一步を踏み出した。相手の攻撃を誘う目的のそれは、しかし彼が全く反応しないことで不発に終わる。そのことが彼女のイライラを更に増させた。

「何で攻撃してこないのよー！」

「当たり前だろ」

カウンターを狙ってますと言わんばかりに構えている相手にわざわざ攻撃する馬鹿はいない。そう言つて一夏は肩を竦めた。

これが剣道の試合か何かであれば何らかのペナルティがあるであろう行為だが、生憎とこの勝負はルールは無いに等しい。攻撃せずただ待っているだけでも、何の問題もないのだ。

「はっはっは、たまたま上手く決まったからってそれに頼るだけじゃ三流だなあ」

「うわ、凄くムカつく」

どう考えても悪役の顔で高笑いを上げる一夏は、彼女のイライラを更に増やす。我慢の限界に達した彼女は、もう知らんとかばかりに自分から攻撃を打ち込みにいった。ただ怒りに任せたその一撃を彼が食らう道理もなく。あっさりと受け止められると返す刀で脳天に叩き込まれた。

一本、という千冬の声聞いて彼女は悔しそうに彼を睨む。そんなことは知らんとかばかりに腕組みをして仁王立ちする一夏は、さてじゃあ早速言ってもらおうかと鈴音に告げた。

「何をよ」

「俺の顔面にスポチャンの刀叩き込んだことについての謝罪だよ。ほれ、さあ謝れ！　こう、グツと来る感じで」

「死ね」

「酷い!？」

吐き捨てるようにそれだけを言った鈴音は、自分の今までの動きを思い出しながら思考を巡らせた。悔しいが、一夏の言ったようにただカウンターを狙うだけでは話にならない。それこそ、たまたま成功したからといってそれに頼るのは三流だ。とはいえ、自分から攻め込むとなると、ただの模倣でしかない攻撃ではある程度実力の伴った者相手には簡単に捌かれてしまう。

「八方塞じゃないのよ」

ヒントを手に入れたと思ったが、予想以上に答えは遠かつたらしい。がくりと肩を落とすと、彼女は大きな溜息を吐いた。打開するアイデアが見付からない以上、このままではどうしようもない。

「凰」

そんな彼女に千冬は声を掛ける。お前の攻撃のコンセプトをもう一度思い出せ。自分の方に鈴音が向いたのを確認してからそう続けた。

「コンセプト? って、言うとは……真っ直ぐ突っ込んで、ぶっ飛ばす?」

「そうだ。さつきは否定したが、『後の先』を一度体験したお前ならそのコンセプトを使ってまた違う答えが出せるはずだ」

「違う答え……?」

千冬の言葉に鈴音は先程とは違う思考へと移動する。先程体験したヒントと、自分の今までのコンセプトを組み合わせて違う答えを出す。『相手の動きを読んで、先手を取る』ことと、『真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばす』ことを組み合わせる。混ざらないように思えるこの二つを、混ぜる。

よし、と彼女は頷いた。一夏に向かって声を掛け、もう一度勝負だと刀を構えた。その声に望むところと笑みを浮かべ、彼も同じように刀を構える。

始め、の合図と共に、彼女は一直線に突っ込んだ。真っ直ぐに相手に向かって突っ込んだ。その行動に一瞬だけ虚を突かれた一夏であったが、そのまま彼女の攻撃にカウンターを合わせるように刀を振

り上げる。

その瞬間、猛烈に嫌な予感がして彼は横に飛んだ。半身スレスレを刀が通り過ぎるのを見て、彼は思わず冷や汗を垂らす。

「……何が起こったんだ？」

「決まってるでしょ」

あたしの必殺技よ。思わず呟いていた一夏の言葉にそう返し、鈴音は横に避けた彼に向かって追撃を放つ。刀で受けることはせず、彼はそれをバックステップすることで躲した。

「千冬姉！」

「織斑先生だ」

「いいから！ 刀もう一本！」

肩を竦めながら千冬は一夏にスポーツチャンバラ用の刀をもう一本投げ渡す。それを受け取った彼は、肉薄してきていた鈴音に向かって右手の刀を振り下ろした。ほぼ必中であるはずのその攻撃は空を切り、そして彼女の攻撃は彼の喉元へと迫っている。もう一本の刀でそれを受けると、空振りした右手を戻した二刀で押し戻した。

「何？ 箒の真似事？」

「嘗めんな。俺も同門なんだぞ、二刀くらい出来るっつもの」

二刀を構えてそう笑う一夏を見た鈴音は、「だったらあたしももう一本」と千冬から刀を受け取った。二刀対二刀、お互いに似たような構えで対峙しているその空気は、どうやら次の一撃で決着をつけようとお互い画策しているようであった。

先に動いたのはまたしても鈴音。前傾姿勢で低く相手の懐へと飛び込む。持っていた二刀を同時に前へと突き出した。それを更に低い姿勢で躲した一夏は、足元を掬うように左、右と弧を描くように横に薙ぐ。

だが、その時既に彼女は地面にはいかなかった。彼が思わず視線を上げると、空中で二刀を振り被っている鈴音の姿が。

「もら、ったああああ！」

「させるかああああ！」

振り切っていた体勢を強引に捻り、軌道を真上に変更させる。上か

ら下に向かう二刀と、下から上に向かう二刀がぶつかり合い、明らかにエアースフト製の刀ではありえない音が剣道場に響き渡った。

その音に思わず目を瞑った剣道部員が次に見た光景は、お互いにもつれ合って転がっている一夏と鈴音の姿。持っていたスポーツチャンバラの刀は四本全てがへし折れており使い物にならなくなっていた。最後の激突の威力の強さは推して知るべし。

そのへし折れた刀を見た千冬は、満足そうに笑う。まあこんなものか。そう呟くと絡み合っている二人へと声を掛けた。

「いつまでイチヤついているつもりだ」

「い、イチヤあ!？」

その言葉に鈴音は顔を真っ赤にする。対して一夏はいやいやと首を横に振った。

「こんな起伏の少ない奴とくつついてもあんまり恩恵が——」

「乙女を汚す奴は死ね!」

「ぶぶうっ!」

みぞおちに膝を叩き込んで一夏を黙らせると、彼女は千冬へと向き直った。屍となった少年は完全に無視して、ありがとうごさいますと頭を下げた。

何かを掴んだ。その手応えが彼女にはあった。箒とセシリアとの特訓、そして今回の一勝負。これらを通して、自分が自分になったような気がした。

「しかし千冬ね——先生、何でいきなり鈴の特訓見るとか言い出したんだ?」

いつの間にか復活していた一夏が問う。タイミング良く乱入してきたことといい、千冬の行動に不可解な点が多々あると彼は思ったのだ。それは鈴音も同じようで、そういえば確かにと頷いている。

そんな二人を見た千冬は苦笑しながら肩を竦めた。理由は簡単だ、と続けた。

「おせっかいな兔に頼まれたのさ。『箒ちゃんが先生だと教え方の詰めが甘いだろうから、ちーちゃんが仕上げをしてあげて』、とな」

「……あの人が?」

「まあ、お前は何だかんだであいつがちやんと名前を覚えている貴重な一人だからな。あいつにとつては一夏と箒の妹くらいの扱いなんだろう」

苦笑から微笑みに表情を変えた千冬は、そろそろ撤収するぞと指示を出した。その声を受けて二人は折れたスポーツチャンバラの刀を片付け、剣道場にモップを掛ける。

道場を施錠し、皆に挨拶をして再び二人になった鈴音と一夏は、暗くなり月明かりの照らす道を揃って歩いた。アリーナを出てすぐの時とは違い、お互いに特に会話は無い。だが、別に気まずいわけでもなく、二人で静かに帰路に着く。

「なあ、鈴」

そんな中で、一夏は隣を見ることなく呟いた。隣の鈴音もまた、横に視線を向けることなく「何？」と返した。

「クラス対抗戦、頑張れよ」

「当たり前じゃない」

これだけ皆に色々やってもらって頑張らないわけがない。そんなことを言いながら彼女は空を見上げた。自分達を照らしている月も、今日はまるでエールを送ってくれているように見えた。

「まあ、最初に俺と当たったら全力で叩きのめすけどな」

「こつちのセリフよ。首を洗って待ってなさい」

そんな軽口を述べながら、二人はゆっくりと道を歩く。

クラス対抗戦当日。学年毎で貸し切られたアリーナでは、それぞれの観客席で試合開始を今か今かと待っている生徒達の姿があった。その中の一角、一年一組の観客席の中で、箒とセシリアは心配そうにアリーナを見詰めている。

「まさか鈴が一回戦第一試合とはな」

「いきなりで緊張などはしていないでしょうか」

その姿は授業参観に来ている両親を思わせるものであったが、生憎

この場でそのことを指摘するような人間はいなかった。というより、クラスメイトはそうなる理由を知っている為、むしろ納得していたりする。

「だから心配いらないっての。俺と千冬姉で特訓したんだぜ」

そんな心配な表情の二人に答えるのは一夏。彼の一回戦は最後で余裕がある為、観客席までやってきていたのだ。クラス代表の選手であるにも拘らず、とくに緊張しているようには見えないその顔はクラスに妙な安心感を与えている。

だが、それとは別件で心配をしている二人にとっては、一夏のその姿はむしろ逆効果であり。

「千冬さんはともかく、一夏が特訓しているととなると……」

「織斑先生はともかく、一夏さんが特訓したと言われますと……」

「逆ベクトルの信頼感すげえな俺」

思い切り溜息を吐きながら二人にそう言われた一夏は一人がくりと肩を落とす。しかしすぐに持ち直すとまあ見ても試合場を指差した。そろそろ第一試合の始まる時間である。

審判の教師の合図と共に、アリーナのピットから二人の生徒がゆっくりと場内に入ってくる。双方共にISを纏っており、臨戦態勢を整えていた。後は合図があればいつでも戦いを始められる。

入ってきた二人の女生徒の所属クラスはそれを見て応援の声を張り上げる。片方の生徒は緊張しているのか特に反応を示さないが、もう片方はそれに手を挙げて応えていた。言わずもがな、二組代表の鈴音である。

「落ち着いているな」

「ええ。これなら大丈夫そうですわね」

「俺さつきそう言わなかったっけ？」

そして、クラスは違えども彼女を応援する二人は、その様子に安心したような表情を浮かべた。それとは別に約一名不満げな声を挙げていたが、彼女等が取り合うことは無かった。

開始の位置へと移動した選手二人は、試合開始のブザーと同時に武器を取り出す。鈴音は『双天牙月』を、相手の選手はIS用アサルト

ライフルを取り出し相手へと向けた。格闘武器と射撃武器、傍から見
る限りでは鈴音が不利である。観客も殆どがそう思っているらしく、
しかし代表候補生ということもあって、彼女がどうやって射撃を掻い
潜るかを期待しているようであった。詳細は違えども、箒とセシリア
も大雑把に言えばその分類に当てはまるだろう。

そう思っていないのは、このアリーナ内ではただ二人。昨日の特訓
に付き合っていた織斑姉弟のみ。

鈴音が真つ直ぐに突っ込み、相手の選手が牽制も兼ねてアサルトラ
イフルを放つ。普通ならばそのまま命中してダメージとなる光景で
あったそれは、まるで弾の位置が分かっていたかのような軌跡を描い
た彼女の動きにより全て躲された。向こうもただ撃っていたわけ
ではなく、当然近付けさせないように弾幕を張っていたにも拘らず、で
ある。

あつという間に肉薄した鈴音は、持っていた武器を振り上げて目の
前の相手に斬撃を叩き込む。強烈な音が響き、相手の体勢がぐらりと
崩れた。そこに追撃を与えんと『双天牙月』を横に薙こうとする彼女
の目の前に銃口が突き付けられる。向こうもクラス代表、纏っている
ISこそ量産機の『ラファール・リヴァイヴ』であるが、この日の為
に訓練を続けていた生徒である。体勢を崩して尚、勝利を掴む為に体
を動かした。

眼前の銃口からマズルフラッシュが光る。弾丸は一直線に鈴音の
顔面へと向かい、当たれば『絶対防御』を発動させてシールドエネル
ギーを大幅に削る。場合によってはそのまま勝利となる可能性だっ
てある。見ていた観客も、放った本人も、そう思っていた。

だが、彼女は気付くと視界が回転していた。それが鈴音に投げられ
たのだと理解したのは地面に叩き付けられた衝撃で我に返ったから
である。目の前で射撃を命中させたはずなのに、と疑問に思う暇も無
く、彼女の首筋に刃が添えられた。

「まだやる？」

自慢げな表情でそう告げた鈴音への返答代わりに、彼女は首筋の刃
を収納領域から取り出した近接ブレードで弾き飛ばした。即座に体

勢を整えると、逆手にブレードを持ち替えて彼女の首筋に向かって刃を薙ぐ。今度こそ命中した、そう少女は確信を持った。

その瞬間、鈴音の目が据わった。強引に首の位置をずらし、そしてそのまま回転するようにターン。右手の裏拳を振り切ったブレードに叩き付けた。刃の背を強打された為にブレードは弾き飛ばされ、そして少女の右手も一瞬弾かれる。

何時の間にか左手に呼び出されていたもう一本の『双天牙月』が、その隙を晒した少女の首元に叩き込まれた。自分がやろうとしていたことをカウンターで返された少女は、そのまま『絶対防御』が発動、最初のダメージと合わせて敗北判定値まで一気にシールドエネルギーが落ちる。

試合終了のブザーが鳴ると同時、アリーナは轟音のような歓声に包まれた。拍手は勝った鈴音にも、最後まで諦めずに戦った相手の少女にも送られた。

そして観客席で見ていたこの二人も、その歓声の一員になっていないはずもなく。

「鈴ー！ よくやったー！」

「流石はわたくしと箒さんの弟子ですわー！」

「俺との特訓のおかげだからな！ 俺との！」

各々の自分勝手な歓声を上げている三人を尻目に、鈴音は試合場で体全体を使ってガッツポーズを決めるのであった。

「やったな、鈴」

「やりましたわね、鈴さん」

「へへへ。まーね」

試合が終わった鈴音は控え室から観客席へと戻ってきた。二組でもみくちやにされた後に一組の箒達の下にやってきた彼女は、二人の賞賛の言葉に照れくさそうに頬を掻く。

それを見ていた一夏も、気合を入れるように自身の頬を叩いた。鈴音が勝ったのならば、次は自分の番だ。勝ち進んで決勝で彼女と戦う

為にも、まずはこの一回戦を負けるわけには行かない。

「俺も、さくつと一回戦突破といかせてもらおうぜ」

そう言いながら拳を振り上げた一夏だったが、しかし対照的に周りの反応は微妙であった。それは本気で言っているのか、そんな視線が突き刺さる。

一体全体どうしたのだ、と箒に尋ねると、盛大な溜息が返ってきた。

「お前は大会の表を見ていないのか？」

「いや、見たぞ。俺が一回戦ラストだ」

「対戦相手は、ご覧になったのですか？」

「え？」

そういえばそこを見るのを失念していた。そう言いながら一夏はもう一度確認しようとポケットから紙を取り出す。指で表の名前を確認していったが、彼の指がある一箇所でピタリと止まった。自分の対戦相手の欄で、である。

一年一組の対戦相手、そこには、一年四組と書かれていた。

「……あれ？」

「今気付かれたのですか」

「大物というよりも、馬鹿だな」

「やーい、ばーか」

三者三様の反応を聞きつつ、一夏はもう一度その欄を確認する。何度見ても、そこに書かれているクラスは四組。そして彼の記憶を探る限り、この間話題になっていたクラスも四組。

怪しい笑いが耳に入った。振り返ると、腰に手を当て仁王立ちしている本音の姿がある。残念ながら一組は初戦敗退だね。嬉しそうに自分のクラスの敗北を宣言する少女がそこにいた。

「のほほんさん」

「何？ おりむー」

だが、一夏はそんな彼女を見て笑う。箒を、セシリアを、鈴音を見て笑う。これはむしろ望むところだ、と嬉しそうな表情を浮かべた。遠足を待ちわびる子供のように、体全体で喜びを表した。

「相手にとって不足無し、むしろ充分過ぎる。楽しくなってきたぜ！」

「おりむーって本当にアレだよね〜」

「まあ、一夏はアレだな」

「アレですわね」

「アレよねえ」

「どれだよ！」

気合を入れた宣言を微妙に流されつつ、しかしその気合自体は無くなることはなく。彼の試合はこうして近付いていく。

一年一組クラス代表織斑一夏の対戦相手は一年四組のクラス代表にして日本の代表候補生。そして彼と同じく入試で教師を倒した特別な生徒。

その名は、更識簪。

N009 「……違わない」

空中で二つの影が激突する。一つは白、右手に持っているビームガンを牽制で放ちながら、距離を詰めようと肉薄する。一つは水色、背中に装備されている荷電粒子砲を腰にマウントし、突っ込んでくる白い影を吹き飛ばそうと引き金を引く。

そのどちらの攻撃も、未だクリーンヒットは無く。

「……きつついな、おい」

「それは……こっちのセリフ、だよ」

お互いにそう言って距離を取る。白い影、一夏の『白式・雷轟』はビームガンの銃口を前に向け。水色の影、簪の『打鉄式式』の荷電粒子砲の銃口もまた、目の前の相手に向けていた。

先に動いたのは一夏。ブースターを吹かし、一直線に突っ込む。奇襲ではあったが、瞬時にそれに対応した簪は二門ある荷電粒子砲『春雷』を左右交互に放ちながら旋回するように回避を行った。通常ならばこれで相手を吹き飛ばしつつ距離を取れるであろう行動である。

だが、しかし。彼女の目の前の相手は、国内戦無敗を打ち立てるだけの射撃力を持ったISパイロットを曲がりなりにも近距離戦の間合いに捉えることの出来た人物なのだ。普通や通常のセオリーでは、止めることなど出来はしない。

「……っー」

「もらっ……えてねえ!」

近接武装の距離へと近付いた一夏は、ビームガンからビームブレードに武装を変え、それを袈裟切りに振るう。相手は現在無手、腰にマウントされた射撃武装ではこの斬撃を止められない。そう確信していたはずのそれは、いつの間にか彼女の手に握られている近接武装によって受け止められていた。

一夏のビームブレードと簪のIS用薙刀の刃がぶつかり、甲高い音を立てる。暫くその音が響き続けていたが、一夏が簪を強引に蹴り飛ばすことで距離を取った。よしんば追撃出来れば、と彼は考えていたようであったが、彼女はすぐさま体勢を立て直す。加えて言うなら

ば、吹き飛んでいる間も視線は一夏へと向いていた。追撃の際などありはしない。

「予想以上だな」

「それは……褒めている、の？」

「あつたり前だろ。めちやくちや強い」

「そう。……ありがとう」

「それはこっちのセリフだよ。なんせ、今すげえ楽しいからな！」

笑いながら一夏はもう一度簪へと突っ込んでいった。それを迎撃する為、IS用薙刀『夢現』を右手に、左手は腰にマウントした『春雷』を構えて同じように前へとスラストを吹かす。再び双方の近接武装がぶつかり合う音が響いた。

試合開始から、そろそろ五分が経過しようとしていた。

一年一組観客席。そこには一人孤軍奮闘の応援を行う一人の女生徒がいた。

「いけ〜！ かんちゃん、おりむーなんかぶつとばせ〜！」

言わずもがな、布仏本音嬢である。普通ならば文句の一つでも言われるような光景であるのだが、既にクラスの全員が周知であることと彼女の人柄の相乗効果で、周りの生徒達は苦笑しながらも微笑ましくその姿を眺めていた。

そんな彼女に対抗するように声を挙げるのは、二組からの乱入者を合わせた三人である。

「行けー！ 一夏、そこだー！」

「一夏さん！ そこですわ！」

「やったれ一夏あー！」

箒、セシリア、鈴音は観客席から乗り出さんばかりの勢いで声を張り上げる。他の生徒達も応援をしているのだが、この三人の迫力には太刀打ち出来ていないようであった。

対戦中のそんな二人、一夏と簪の何度目かの激突に一喜一憂してい

た一行であったが、鈴音がふと思い付いたように声を挙げた。見ていて気になるんだけど、と述べた。

「アイツも真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばすタイプだと思うんだけど、何であんなに攻撃当たってないわけ？」

彼女の言葉通り、一夏のダメージは細かいものはあっても致命的なもの一つも無い。状態としては彼と対峙している簪嬢も同じなのではあるが、彼女とはその意味合いが違う。彼女は今までの経験と知識で状況を判断し、被弾を極力減らしている。

だが、一夏は明らかに状況判断で被弾を減らしているには見えなかった。

「一夏さんが被弾しない理由、ですか」

その話を振られて、セシリアも顎に手を当て暫し思案する。思い当たるのは自身が彼と戦った時の会話。『クイツクドロウ』を躲された時に彼が言った言葉である。

「——ただの勘、ではないでしょうか」

「は？ いや確かにそれは一夏がよく言うセリフだけども、でもまさかそんな」

言いながら鈴音は視線を戦っている一夏から一緒に応援している一人の女生徒へと移した。二人の会話も最初に彼女が呟いた疑問も聞いていたので、その視線を受けた箒は特に首を傾げることなく頷いた。首を縦に振った。

「一夏の最大の武器は、『白式』に備え付けられている高速換装機構『金鳥』やそれぞれのパッケージの武装でもない。あいつ自身が持っている勘だ」

まだ半人前な一夏が唯一世界最強から手放しで認められているもの、それが彼の持つ野生の勘であった。ISでの戦闘は言うに及ばず、日常生活においてもその勘の鋭さは非常に強力な武器へとなり得る。

「まあ、正直ああいう状態じゃないと殆ど発揮されない宝の持ち腐れの能力だな。日常で発揮された時は私の知る限り一回しかない」
「残念な人ですわね……」

「通りで普段の生活で一緒だったはずのあたしが知らないわけだわ……」

溜息を吐きながら二人は再び視線を戦闘している一夏に移す。お互いに膠着状態に陥っているのを打破しようと、距離を取って緊張を高めていた。お互い被弾が少ない、と言ってしまえばそれまでのこの状態は、重大な一文が抜けているのだ。

そのどちらも、まだ隠し玉を持っている。

「そろそろ動くぞ、お互いに」

箒のその言葉に、一年一組の生徒プラス一人は、二人の戦いに意識を集中させた。

先に動いたのは、一夏。広げた距離を『瞬時加速』で一気に詰める。まだ奥の手を出すかどうか迷っていた簪の目前に迫ると、その勢いのまま彼女の腕を掴んだ。そのまま一気にアリーナの端まで押し付けると、身動きの取れなくなったその胴へとブレードを突き立てる。

「やせ……ないっー」

その寸前に、腰にマウントしていたはずの『春雷』が一夏と簪の間へと滑り込む。強引に銃口を向けたそれは、しかし完全に攻撃モーションへと入っていた彼では迎撃は不可能に見えた。ブレードを突き立てるのが先か、荷電粒子砲が貫くのが先か。

閃光、そして爆音。思わず観客が目を瞑ってしまうほどのそれは、勿論当事者の二人にとってもかなりの衝撃であり。

射撃の勢いを利用してアリーナの端から対比した簪は、視線を逸らすことなく対戦相手がいるであろう煙の中を睨んでいる。手応えはあったが、しかし命中しているようには感じられない。矛盾したその感覚を信じて、彼女は彼の次の手を注意深く観察していた。

「っ!？」

刹那、煙の向こうから一筋の光が彼女を貫かんと飛来してきた。通常のビームと比べると明らかに巨大なそれは、直撃してしまえば大ダ

メージは免れない。慌てて回避すると共に、彼女は晴れた煙から見えるそのシルエットを確認した。

「ちっ、外したか」

前面を覆う装甲に巨大なビームキャノン。いつの間にか換装をしていた『白式・真雪』がそこにいた。巨大な銃口は簪に向けられており、彼女の一挙一動も見逃すまいと一夏は真っ直ぐ見詰めている。

その姿を確認したのと『春雷』を放つのが同時。しかし、彼は避けることもせずに両手で構えたビームキャノンの引き金を引いた。

「ぶっ飛ばせー！ 『雪羅』 あー！」

彼女の射撃は回避行動を取らない一夏に確かに命中した。だが、『白式・真雪』の前面装甲を貫くには足りなかった。微動だにしない一夏が放った射撃は、そのままカウンターとなって簪へと飛来する。

しかし、その射線上に彼女の姿は既に無かった。まるでそんなことは分かり切っているとやわんばかりに、彼女はその射撃を回避してみせたのだ。

「なっ!?」

命中したと思った一夏はその光景に思わず動きを止めてしまう。その隙を逃さず、簪は素早く肉薄し、『夢現』を振るった。射撃特化の形態を取っている以上、先程までのように近接戦闘を容易に行える状態ではない。別の形態に換装すれば対応出来るとはいえ、その暇を与えないように行動した彼女の手際であった。結果として一夏は背後を取られ、装甲で覆われていない部分にダメージを受けてしまう。苦し紛れにミサイルポッドを放ったが、左右に回避行動を取ることによって単に躲されてしまった。

そのままもう一撃を加えんと『夢現』を振り被ろうとした彼女だったが、一夏が『真雪』から『飛泉』に換装したのを見て距離を取る。近接武装を仕舞い、射撃武装を取り出した。

「……何か、対策取られてるっばい?」

『飛泉』のIS用大刀を構えながら、一夏はそんなことを呟いた。対する簪は、その言葉にコクリと首を縦に振る。

「映像データで……一度、見た……から」

「確認したからもう通じないってか。どんだけだよちくしょう」

ぼやきつつ、肩に装備されたブーメランを放った。それを最小限の動きで躲した彼女に向かい、一直線に突っ込む。背後からは戻ってきたブーメラン、前からは刀を構える一夏。相手の虚を突いていれば回避は困難であろうその攻撃だが、しかし。

「それも、知ってる」

空中制御を切り、重力に引かれるまま落下する。その体勢のまま『春雷』を構え、戻ってきたブーメランを掴んだ一夏へ向かい引き金を引いた。真下からの攻撃、虚を突いた攻撃の躲された拳句に逆に虚を突かれる形になった彼は、持っていた刀を盾代わりにして強引に直撃を防いだ。しかしそれでもある程度のダメージは受け、そして衝撃により吹き飛ばされる。

体勢を立て直した一夏は再び『白式・雷轟』へと装備を戻し、対峙する彼女を少し息の上があった顔で見た。再び自身と同じ位置へと浮かび上がっている彼女を見た。

「こりゃ、まずいな。八方塞いだ」

左手にビームガン、右手にビームブレードを構えた一夏はそう呟く。恐らくこの状態で対セシリアと同じように突進したとしても全て躲されるのが関の山であろう。以前使った奇襲は全て知られていると考えて行動しなければならぬ。それが一夏の中で焦りを生んでいた。

何せ、彼は普段考えるよりも先に体が動いてしまうタイプなのだから。

「……まあ、とりあえず。あの澄ました顔をどうにかしてびっくりさせるのが先だな」

ニヤリ、と。どう見ても悪役のような笑みを浮かべると、一夏は左手の銃口を真上に向けた。思わず観客はその方向に何かあるのかと見上げるが、そこには当然何も無い。

そのタイミングで、一夏は右手のビームブレードを放り投げた。一直線に簪へと向かって飛来するブレードだが、生憎視線を誘導されていなかった彼女には奇襲足り得なかった。少し体をずらすだ

けで回避すると、そのままお返しとばかりに『春雷』を放つ。

それをスラスターを吹かし避けた一夏は、左手のビームガンを連射した。今までの牽制合戦と同じ光景であったそれは、当然彼女に当たるはずもなく。最小限の機動で躲すと、動きの止まっている彼に向かって攻撃を加える。

「……きゃっ?」

その行動を取ろうとした直後、彼女は背後からの攻撃を受け体勢を崩した。コンソールではビームの連射に被弾したことを伝えてくるが、しかし対戦相手は目の前にいる。一体どうしたことだとハイパーセンサーを使い射撃の飛んできた方向を確認すると、そこには一本のビームブレードが浮遊していた。刀身のビーム部分は消え去り柄だけになっているそれは、先程一夏が投げたものに相違ない。どうやら、ビームブレードにビームガンの射撃を当てることで反射させたらしい。彼らしい、通常では考え付かない奇策であった。

その確認が彼女に隙を生んだ。いつの間にか『飛泉』に換装していた一夏は、簪の目前で刀を振り上げている。さっきのお返しだ、そんな言葉が彼から発せられた。

咄嗟に左に避けた。『夢現』も呼び出し、出来るだけダメージを最小限に抑える。しかしそれでも、小さくない傷が彼女の右半身に刻まれた。

「はっはー。やーっと、焦った顔をしてくれたな」

「……趣味、悪い」

「あ、はい、ごめんなさい」

思わず謝った一夏を眺めながら、彼女は『打鉄式』の状態を確認する。傷はそこそこの深さであるが、戦闘続行に支障はない。彼女の切り札に傷一つないのも幸いであった。

もう一度しっかりと目の前の少年を見る。対策を講じてきたつもりであったが、やはり一筋縄ではいかないようである。そのことを認識した彼女は、ゆっくりと背部に設置してあるそのセーフティを解除した。

彼女の雰囲気が変わったのを察した一夏もまた、『飛泉』を『雷轟』

に戻し、ビームガンと先程の激突で回収したブレードを構えながら様子を窺っている。二人の間に漂う空気が張り詰めていくのが、傍から見ている観客にも分かった。

「全力で……いく、よ」

「望むところだ」

その声と同時に、一夏のコンソールにロックオン警告が発せられる。目の前の簪は武器を構えていないにも拘らず、である。そしてその警告は、一つや二つではなかった。

「右手、左手、右脚、左脚、頭部、胸部」

簪のその言葉と共に増えたその警告は、計六箇所。そして、彼女のウイングスラスターが折りたたまれ、装甲がスライドする。見えたのは、銃口。彼女の言葉通り、六個の銃口が全て一夏へと向いていた。『マルチロックオンシステム』……起動。この、攻撃から……逃れられる?」

銃口から見えるのは、巨大なミサイル。それが全て、一夏に向かって放たれる。これこそが彼女の切り札、マルチロックオンシステムによる高性能誘導ミサイル。

その名も――

「……穿て! 『山嵐』!」

「洒落になってねえぞこれはああああ!」

六つのミサイルが一夏を誘導する。それだけならばまだ躲す余裕は持ち合わせていたが、その一つ一つが分解し八つの小型誘導ミサイルへと変化した時、彼は余裕を完全に失った。計四十八のミサイルが全て誘導し自身に向かってくるのである。

上手くミサイル同士を激突させようとしても、ロックオンシステムに加えて彼女自身の操作も加えているらしく、多数のミサイルが全てぶつかり合うことなく彼へと向かう。反撃どころか回避もままならない。目の前に広がる弾幕の前に成す術もなかった。

「……っ!?!」

だが、彼女もまた同様に焦りを生んでいた。逃げ道など全て塞いでいるはずのその弾幕を、彼が撃墜されることなく逃げ回り続けられているのだ。システムと彼女の反応、その二つをもつてしても僅かにある隙間、通常では感じ取れないその隙間を縫って一夏は回避を続けていた。

勿論、考えての行動などではない。何となくこの辺に逃げれば大丈夫じゃないか、などという思考で動いているに過ぎない。本能で、勘で動いているからこそ、彼は被弾していないと言えるだろう。

そしてそんなことを知らない簪は、その回避を見て焦りが募っていく。相手は逃げ回っているだけなのに、嫌な予感が増していく。

「ちいー」

舌打ちしながら一夏は尚も躲す。本人からしてみれば当たるのは時間の問題の極限状態である。そんな状態で相手の表情など見えない余裕は無い。

無い、が。それでも彼の勘の賜物と言うべきか、回避をしながら簪の方へと一夏は突っ込んだ。傍から見ればただの神風特攻であり、当然観客も駄目元でぶつかりにいったようにしか思っていないだろう。事実、箒と千冬もそう思った。一夏本人ですらそう思っていた。

唯一人そう思っていなかったのは、突っ込んでこられた張本人。

「え!? まさっ……!」

これだけのミサイルを回避視して見せた相手が、自分へと向かってくる。それはつまり、攻略法を見付けたのだということ。そう、彼女は誤解してしまった。ただ単純に突っ込んできているだけのこの行動には、何かの意味がある。そう邪推してしまったのだ。

彼女は冷静を装っているが、実際は小心者で心配性である。だから対戦の際は相手の予習は欠かさないし、何パターンも相手の行動予測を組み立てておく。情報がない場合でも、戦闘開始前の機体や人物から当てはまるパターンを構築し、出来る限り予想と外れないように戦う。それが彼女のスタイルだった。

だから、本能と勘で戦う一夏のような人間は、彼女のそのスタイル

を崩してしまう相手であり。

「何だか知らんが今がチャンス！」

「え!? え、あ、う!？」

パニックで思わず動きを止めてしまっていた。ミサイルはロックオンシステムで一夏を誘導し続けているものの、彼女からの操作が途絶えた為に精度が落ちた。その隙を狙い、一夏は眼前に佇む簪に向かってブレードを振るう。

当たった。彼も、そして受ける側の彼女もそう思っていた。やっぱり自分は駄目だ、結局こんな無様な姿を晒してしまった。そんなことが頭に浮かび、思わず彼女は目を閉じた。

「かんちゃんー！」

親友の声が耳に届いた。ごめんね本音、私、駄目な人だったよ。そんなことを思わず呟く。ごめんね、ごめんね、と心の中で反芻した。

一瞬がとてつもなく長く感じるような、そんな時間で、彼女はどれだけ謝ったのだろう。数えてなどいない、数え切れないほど謝ったその時、声が聞こえた。

「——簪ちゃん！」

目を開いた。声の主を探そうと、瞑っていたその瞳を開いた。

そこに映ったのは、今にも頭部をかち割ろうとする一本のブレード。ゆっくりと迫ってくるようなその感覚の中、彼女は『夢現』を無意識の内に取り出してそこに合わせた。必中だと思っていたそれを防がれた一夏は驚愕に目を見開き、そして逆にそこに隙を見出した簪は『夢現』を振るう。

体勢を崩された一夏は後ろに吹っ飛び、そしてそこに『山嵐』のミサイルが降り注いだ。着弾と同時に爆音が響き、彼は盛大な爆発に包まれる。

そんな彼を余所に、彼女は視線を辺りに彷徨させた。先程の声は彼女にとって馴染み深い、それでいて聞きたくないはずの声であった。ここにいるはずもない人物の声であった。

対象の人物を視界に捉えた彼女は、思わず間抜けな声を出した。本来教師が立っているはずの審判席、そこに一人の女生徒が立っていた

のだ。リボンの色は二年生、簪嬢とよく似た顔立ちをしたその少女は、苦笑している周囲の教師を余所に声を張り上げていた。

「いいぞ簪ちゃああああん！ さっすが私の自慢の妹！」

「……何、やってるの……お姉ちゃん」

生徒会長更識楯無。生徒の頂点に立つ人物とは思えないぶつ飛んだ行動を起こしているその姿を見た簪は、呆れたように呟き。

そして、ありがとう、と微笑んだ。

視線を審判席から再び爆煙に包まれている対戦相手へと移す。試合終了の合図は出ていない。ということは、あの煙の向こうではまだ彼は健在だということだ。そう判断した簪は、油断なく武器を構えた。

「……うへえ」

煙が晴れたそこに見える姿は、『白式・真雪』。しかし、自慢の前面装甲はボロボロになっており、どうやらこれ以上この試合で『真雪』を使用するのは不可能であろう、そう思える姿であった。事実、一夏は『真雪』を『飛泉』に換装、肩で息をしながら太刀を肩に担ぐように構えた。

「なあ、更識さん」

「……何？」

戦闘を再開する前に、と彼はある場所を指差す。審判席で声を張り上げていた生徒会長が、彼も以前見たことのあるお下げの三年生に引っ張られていく光景がそこにあった。

「あの人、知り合い？」

「うん……あんなのだけど、私の……自慢の、お姉ちゃん」

「そっか……そうかそうか」

その言葉を聞いた一夏は楽しそうに笑った。お互いこれは大変だな、そう言っただけだ。

何せ、俺にも自慢の姉がいるからな、と。

「んじゃ、とりあえず。千冬姉に恥じないように行きますかね、俺も」

「こつちこそ……。お姉ちゃんに、恥を……搔かせないんだから」

一夏は太刀を、簪は『夢現』を。お互いに構えて、そして一気にス

ラスターを吹かした。

アリーナの上空で二つの影がぶつかる。だが、簪の『打鉄式』と比べると、一夏の『白式・飛泉』のダメージは相当のものであった。これ以上の被弾を許さない状態なのは間違いなく、そういう意味でも彼がその形態を選んでいるのはもっともだと言えた。

『飛泉』は近接格闘用パッケージだが、同時に『白式』の中で最も防御力が低い。やられる前にやる、をコンセプトにしている為に彼はあまり長時間使わないのだが、今回ばかりは別だ。どうせどの形態でも当たったらお仕舞いならば、攻撃特化してしまえばいい。つまりはそういうことである。

そして何より、普段彼があまり使わないということは、向こうに情報があまり無いということでもある。

「こなくそおー」

ブーメランを投げる。目の前で投げられたにも拘らずそれを躲した簪は、返しの刃が来る前に止めを刺さんと『夢現』を突き出す。

太刀で真っ向からそれを受け止めた一夏は、そのまま逃がすまいと彼女を拘束にかかった。無論、ここで拘束されていては背後から飛来してくるブーメランに当たる。そのことが分かっているからこそ、簪は引き剥がす為に『春雷』を構えた。

ならば、と一夏は後ろへ吹き飛ばす。体を咄嗟に捻ることでブーメランの射線上から外れた彼女は、再び『山嵐』を起動させようとウイングスラスターを變形させた。

「させるかよー」

『瞬時加速』。戻ってくるブーメランを掴み、そのままその刃を『山嵐』のポッドへと突き立てた。マルチロックオンシステムがエラーを吐き、放たれたミサイルは彼に誘導することなく一直線に飛んでいった。

そのことを確認した簪は表情を曇らせる。だが、先程までと違い動揺することなく武装を構えた。

これで条件は五分五分だ。そう叫んだ一夏に向かって、『山嵐』を手持ちの武装に変形させて発射する。バズーカタイプになったそれは誘導こそしないものの、一発のミサイルが八発の小型ミサイルに分割される能力はそのままだ。

拡散したミサイルを全力でスラスタを吹かせた躲した一夏は、だったらこつちも奥の手だ、ともう一度ブーメランを投げた。

「……そんな、単純な攻撃じゃ」

「分かってるさ」

だからこれを使うんだよ。そう言って彼は腰にマウントされた装甲版を前に向けた。左側の装甲が開き、そこから勢い良く鎖が発射される。先端はアンカーになっており、相手を捕まえる用途であることが見受けられた。

ガシャリ、と『打鉄式』の右脚にアンカーが絡まる。それと同時に一夏は思い切り鎖を引っ張った。チェーンアンカーの引き寄せる力と彼の引っ張る力の相乗効果で、身動きの取れない簪は一気に彼の元へと引き寄せられていく。

太刀を構えていた一夏は、こちらへと突っ込むように引き寄せられた彼女の胴に向かって思い切り刃を振り抜いた。決まれば『絶対防御』は免れない、そんな一撃である。

「くっ……！」

それでも、彼女は受け止めた。衝撃で真つ二つになった『夢現』の柄の部分振り抜いた体勢の一夏へと放り投げ、そして残った刃を振り下ろす。あの体勢ではこの一撃は避けられない。カウンターからのカウンター。今度こそ決まったら彼女確信をし。

「えっ……!?!」

「奥の手って言ったろ」

振り抜いた太刀を持っていたのは逆の手、左手にもう一本の太刀を構えた一夏によって防がれた。右手と左手、その両方に太刀を構えたその姿が、彼の言う『奥の手』だったらしい。ニヤリと笑うと『夢現』の刃を押し戻す。

『飛泉』の武装は二刀流だ。箒の真似っばいからあんまり使いたくな

いけどな」

そう言つて追撃の斬撃を加えんと一夏は両手の刃を振り上げた。押し戻された彼女の右手では迎撃が間に合わない。だが、残っている左手はまだ自由が利く。『山嵐』のバズーカを取り出すと、多少の自身の被弾も覚悟して引き金を引く。

その直前、バズーカに何か突き刺さった。衝撃で思わず銃口が逸れ、ミサイルはあさつての方向へと飛んでいく。

一体何が、とそこに視線を向けた。向けてしまった。目の前に刀を振り被っている相手がいるにも拘らず、意識を違う場所に向けてしまった。

「し、まっ……」

「これで、終わりだああああ！」

十文字に切り裂かれた『打鉄式』は『絶対防御』が発動。敗北判定値に至った彼女は、そのままゆっくりと落下していくのだった。

その手に持ったバズーカには、一夏が最後の激突時に投げたブーメランが突き刺さっていた。

アリーナの廊下を簪はトボトボと歩く。負けた、負けてしまった。そのことを考えるたびに、彼女の気持ちは沈んでいった。

結局自分は姉のようにはなれなかった。最後の最後であんな醜態を晒してしまった。そんな言葉がグルグルと彼女の頭を回り続ける。

「よっ」

「っ!？」

だから、背後から人が近付いていることに気付かなかった。思わず飛び上がるようなりアクションをしてしまった彼女は、恐る恐る後ろを振り返る。

そこには、何ともバツの悪そうな顔をした一夏がいた。

「ごめん。驚かすつもりはなかったんだけど」

「あ、ううん。……大丈夫。ちよつと、考え事……してただけ、だから」

気にしないで、と彼女は言うが、それでも彼は納得しないのか、お詫びにジュースを奢るよと自販機を指差した。ここで断るのも違う気がしたので、彼女は素直に頷く。

近くのベンチでお互いにジュースを飲みながら、何とはなしに天井を見上げた。

「さっきの試合さ」

「……何？」

自分が落ち込んでいた原因であるそれを、彼は唐突に蒸し返した。一体何を言うつもりなのだろうと簪は身構える。姉と比べて、一体どれくらい弱いのか。そんな話でもするつもりだろうか。思わずそんなことを考えた。

「楽しかったよ」

「え？」

思わず彼の顔を見た。そこに浮かんでいるのは、子供のような笑顔。悪意の欠片もない、純粋な顔であった。

「更識さん強いよなあ。最後のあれ、俺もイッパイイッパイだったし」
ジュースを飲みながら一夏は続ける。簪の行動の一つ一つを褒めながら、自分自身も褒めながら。楽しそうに、試合を語る。

そんな彼が不思議で、思わず彼女は尋ねてしまった。どうして、と。

「へ？ どうしてって、それこそ何で？」

「だって、私……お姉ちゃんと比べて、全然弱いし」

姉はあんなに強いのに、妹は彼女の足元にも及ばない。それが周りの人間の彼女に対する評価。少なくとも彼女自身はそう思っていた。変えようと努力はしているつもりだったが、結局それは実を結んでいない。そう思い込んでいた。だからこそ、彼の自身に対する評価が不思議だったのだ。

「いや、そんなこと言ったら俺どうなるんだよ」

世界最強のIS操縦者の弟だぞ。そう言って彼は笑う。勝てる勝てないのレベルにまだ至ってないし。そう続けながらジュースの残りを勢い良く飲み干した。

「でもさ」

空き缶をゴミ箱に投げ入れながら、一夏は簪に視線を向ける。真つ直ぐに、真剣な表情で彼女を見詰める。

「いつかきつと、追い付いてみせる。誰が何と言おうと、俺はそう決める」

「あ……」

「更識さんは、違うのか？」

「……違わない。うん、私も……そう、思ってる」

同じなのだ。目の前の彼も、自分と同じ。偉大な姉を持つ者として、それに追い付こうと進んでいる。

でも、と彼女は思う。彼はそれが実を結んでいる、でも自分は。そう考えてしまった。

「だよなあ。そうじゃなきゃあれだけ強くなれないよな」

「え？」

「ん？ だから、更識さんが強いのは、それだけ頑張ってるからだよね、って」

目を瞬いた。そして、思わず視線を逸らした。

今までそんなことを真つ直ぐに言われたことなど彼女は無い。正確には、幼馴染を含めた身内以外に言われたことがない。だから、本当の評価は違うと思っていた。けれども、目の前のこの少年は、自分と全力でぶつかり合ったこの少年は、自分を認める評価をしてくれた。決してお世辞ではなく、本心から言ってくれた。

顔が火照っているのが分かった。口元が自然に上がっていくのが分かった。嬉しさと胸が一杯になっているのが、分かった。

「どうしたんだ？」

「な、なんでも、ない！」

急に顔を逸らした簪を不思議に思ったのか、一夏は彼女の顔を覗き込もうとしたが、強い口調でそう言われたので引き下がる。まあ、何でもないならいいんだけど。頬を掻きながら、そんなことを呟いた。

「じゃ、じゃあ私は……そろそろ、行くね」

「あ、ああ。また今度な」

「……うん。また、今度」

火照った顔を隠すように、彼女は一夏に挨拶をするとその場から立ち去った。どの道そろそろ自分のクラスに戻らなくてはいけない時間なので、問題ない。そう自分に言い聞かせて、不自然じゃないだろうと思ひ込んだ。

「織斑、一夏……」

走りながら、名前を呟く。彼女の顔の火照りは、当分取れそうに無かった。

No10 「お手並み拝見といこうかな」

ありがとうございます、と少女は目の前の女性に頭を下げた。渡されたそれ、ISの待機形態となっている四角い板をしっかりと握り締め、彼女は踵を返す。これで無様に負けなくて済む。クラスの皆に恥を掻かせなくて済む。そんなことを思いながら、少女は駆けだした。自身の目的地、クラス対抗戦の代表控え室へと。

そんな少女の背中を見ていた女性は、その姿が見えなくなるとポリポリと頭を掻いた。単純な餓鬼だ、などと凡そ女性らしくない口調の呟きが漏れる。

そんな彼女に声を掛ける人影が一つ。慌てて彼女は表情を取り繕い穏やかな口調で返事をしながら振り向いたが、しかしその人影が誰であったのかを認識すると表情を歪めた。何だテメエかよ、とやはり女性らしくない口調で目の前の人物に声を掛ける。

少年らしい服装をしてはいるが、その顔立ちが少女であるように思える。そんな中性的な雰囲気を感じているその人物は、彼女の言葉に苦笑しながら成果を尋ねた。例の物は渡せたの、と。

「倉持技研の最新型の試作機だっつたら、あっさり受け取ったぜ。おつむが単純だな、平和ボケした餓鬼ってのは」

そう言っただけで笑う女性に向かい、駄目だよそんなことを言っただけで、目の前の人物は諷めるように返した。だが、女性はその言葉を聞いても馬鹿にするように鼻を鳴らすのみである。

「餓鬼は餓鬼だろ。テメエだつてそうだ。デユノアの妻の子だからって理由でこうやってある程度の地位に就いてはいるが、結局ケツの青いヒョッコだ」

「そのヒョッコに補佐をされているのはどの誰なんだろうね？」
「それもデユノアのごり押しだろうが。スクールも何で許可を出したんだか」

吐き捨てるようにそう言うと、女性は目の前の相手に背を向けた。もうこれ以上話す気は無い。行動がこれ以上無いほどそう述べていた。それは向こうも分かっているのか、表情を変えることなくその行

動に文句を言うこともない。

そのまま去ろうとしていた女性だったが、ふと何かを思い出したかのように立ち止まった。だが決して振り向くことなく、デゼール、と恐らく背後の人物の名であるのだろうか一言を述べた。

「ちゃんと準備は整えたんだろうな？」

「勿論だよオータム。IS学園転入生の下見つてことで、色々とうろついても怪しまれなかったし。さっきの貴女のセリフじゃないけど、単純だよね」

デゼールはそう言つて肩を竦めた。オータムはその言葉に鼻を鳴らすことで返事代わりにすると、今度こそ話は終了とばかりにその場を後にする。そんな彼女を別段止めることをせず、その姿が見えなくなるまで一人その場で佇んだ。

「さて、と」

そう呟いて辺りを見渡す。現在位置の確認を済ませると、そのまま近くにあるアリーナの入り口へと歩みを進めた。一年生がクラス対抗戦を行っているそこへ入ろうとしたが、その直前で受付の事務員が声を掛ける。IS学園の生徒以外は立ち入り禁止です、そう告げた事務員の女性に対して、デゼールはそれは大丈夫と微笑んだ。

「僕、来月ここに転校してくるシャルル・デュノアです。今日はその下見も兼ねてクラス対抗戦の見学に来ました。ちゃんと許可証もありますよ」

事務員に見せたそれは偽造ではなく紛れもない本物。そのことを確認した女性はデゼールに——シャルル・デュノアに許可を出す。ペコリとお辞儀をすると、シャルルはアリーナの観客席へと歩いていった。

「さあ、お手並み拝見といこうかな。IS学園のクラス代表の力つてのを、ね」

そんなことを言いながら、『彼』はその口を三日月に歪めた。

「おい、お前達」

アリーナ管制室。そこで千冬は地に響くような声で目の前にいる人物達へと声を掛けた。

勿論その人物とは彼女の弟を含んだいつもの一味である。ツイントールの少女がいないのが若干の差異であるが、その少女は現在クラス対抗戦の為アリーナにて自身の出番を待っているのも当然ともいえる。どちらにせよ、まあその辺りは些細な問題だろうと彼女は判断した。少女がいようがいまいが、この場所に無闇に生徒が立ち入ってはいけないのになんら変わりがないのだから。

とりあえず言い訳を聞いてやろう、と千冬は続けた。

「生徒会長がフリーダムだったからです」

自信満々に答えた彼女の弟はそのままアイアンクロウで宙に浮かんだ。掴まれた頭を基点に振り子のように揺れているその姿を見た残りの面々は、互いに顔を見合わせるとそのままゆっくりと後ずさる。人間の手は二つある。すなわち、あと一人は餌食になる可能性がある。そう判断したのだ。

そして残っているのは二人。つまりは、そういうことである。

「セシリアが」

「箒さんが」

同時にお互いを指差して対面の人物の名前を述べる。どう考えてもなすり付ける気満々の言動であった。言っている本人が自覚しているのだから、当然聞いている千冬に分からないはずもなく。

そのままお互いが悪いと続けようとしていた二人に向かって、底冷えするような声で名前を呼んだ。篠ノ之、オルコット、ただそれだけの言葉で、二人はピタリと動きを止めてしまう。

「もう一度聞こう。何故ここに来た？」

短いその一言に、隠された言葉があった。正直に答えろ、さもなければ。発音されたわけではないが、確かに二人にはそれが聞こえた。

もう一度お互いに顔を見合わせる。そして同時に頷くと、視線を千冬へと移動させた。真っ直ぐに彼女を見ながら、二人は口を開く。正直に、答えを述べる。

織斑一夏に誘われました。口調は違うが、お互い言った言葉はそれであった。

「ほう」

彼女の右手から、何かが砕ける音がした。同時に短い、鶏を絞めたような悲鳴が上がる。

ゆっくりと右手を開くと、掴まれていた物体は床にドサリと落ちた。当然ピクリとも動かない。

「これで両手は開いたぞ」

「いや本当に一夏に誘われたんです！ 自分達も試合が良く見える審判席に行こうって」

「そうしたら、審判席で先生方に『お前達はどこではなく織斑先生のいる管制室に行ってくれ』と言われまして」

背中が壁に激突するほど盛大にバックダッシュした二人が必死で捲くし立てる。この状況でボケるほど命知らずでもないのは千冬も重々承知であるが、しかしその内容は少々信じるには無理があった。特に後半のセシリアの言っていた部分が、である。

視線を隣にいる真耶に向けると、言われるまでもなく既に審判席へと連絡を取っていた。一言二言会話を交わすと、では失礼しますと通話を打ち切る。視線を千冬へ向けると、神妙な顔で彼女は頷いた。

「後で他の先生方とは話をしないといかん……」

「お、お手柔らかにお願いしますね」

盛大に溜息を吐く。何かを諦めたように頭を振ると、余計な物を触らないようにと釘を刺した。出て行けとは言わなかった。そのことを理解した箒とセシリアは安堵の溜息を吐き、力が抜けたように壁に体を預け座り込んだ。

「んで、今アリーナはどうなってるんだ千冬ね、じゃなかった織斑先生」
「もう始まる。そのモニターで見るなり窓から直接見るなり、どちらでも好きな方を選べばいい」

復活した一夏に何かリアクションをすることもなく千冬はそう述べた。復活した本人含む周りの面々も分かっているのかそれに何か物申すことはせず、彼女の言ったように各々見たい方へと視線を向け

た。セシリアはモニターを、一夏と箒は窓を見る。

そこにはやる気満々の友人の姿が見えた。第一試合の落ち着きとは逆に、今はどうやらテンションが大幅に上がっているようである。そのことを確認した三人は若干の不安を覚えたが、油断をしているわけではないので問題はないだろうと判断した。鈴音の次の対戦相手は代表候補生でもない一般生徒だ。彼女が負ける要素はまず見当たらない。

そんな確信めいた予想を持っていた三人が目にしたのは、それをあつさりと覆ってしまう光景であった。

「……ん？」

「何だあれは？」

「IS…….なのですか？」

口々に疑問にもなっていない言葉が漏れる。それほどまでに彼等の前にいるそれは異様であった。鈴音と対峙する対戦相手は異様であった。

通常のISとは一線を画す巨体。長く伸びた腕は重装甲で巨大な拳を携えている。脚部も同様に重装甲で、そのあちこちに姿勢制御用のスラスタが設置されていた。

そして何より目立つのは、その灰色のボディである。搭乗者を覆い隠すように全身に装着されたそれは頭部と一体化しており、六つ目を思わせるセンサーアイが怪しく赤い光を放っていた。

どう見てもIS学園に用意されている量産機ではない。専用機か実験機に分類される、特定の者しか持ち合わせていない特別な機体。そう判断されるものであった。

しかし、そう結論付ければ納得するかというと、答えは否である。一夏はその姿から目を離さずに、織斑先生、と千冬に声を掛けた。聞きたいことがあるんですけど、と続けた。

「大体予想が付くが、言ってみろ」

「あれ、鈴の対戦相手ですよね？」

「……それは、間違いない。今確認したところ、確かに七組のクラス代表がああISを展開したそうだ」

「その生徒は、専用機持ちだったのですか？」

その言葉を聞いたセシリアが一夏の質問を受け継ぐように尋ねたが、千冬はゆつくりと首を横に振った。現在一年生の専用機持ちには、織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、更識簪の五名だけだ。淡々と、そう答えた。

「しかし、実際に七組の代表は量産機ではないISを使用しています」
「そうだな」

箒の言葉にそれだけを返し、千冬は管制室の通信機器へと手を伸ばした。IS用の『開放回線（オープンチャンネル）』を開くと、アリーナにいる鈴と対戦相手両方に通信を送る。

だが、しかし。

「……繋がっていない？」

「ぶっ壊れてる、つてわけでもなさそうだな」

計器の状態を見る限り、正常に稼働はしている。そのことを確認した一行は、逆に緊張を高めた。正常稼働しているのにも拘らず通信が繋がらないということは、何らかの外部要因が絡んでいるということに他ならないからだ。

念の為、と真耶は審判室へと連絡を取った、取ろうとした。だが、彼女の携帯から聞こえてくるのは無機質な音声ガイドのみである。電波が届いていないと言われているが、ディスプレイにはアンテナがこれでもかと三本立っていた。

「……異常事態、ですわね」

「いや、セシリア。流石にそんな突拍子も無い言葉はどうかと思う」

「そう言われましても、箒さん」

これを見てもそんなことが言えますか、とセシリアは管制室の扉を指差す。電子制御されているキーロックの部分の表示が出鱈目な羅列になっており、鍵が閉まつたり開いたりを繰り返していた。タイミングを合わせれば部屋から出られるかもしれないが、再び戻ってくるのは困難であろうことを窺わせる状態である。

連絡を取る手段を断たれ、直接向かうのもままならない。そんな状況を異常事態と言わずして何と云うのか。言葉にこそ出さなかった

が、彼女が言いたいことはそこに集約されていた。

「つつても、このまま黙って見てるわけにはいかないだろ」

「それはそうですけど」

一夏の言葉にセシリアは言葉を濁す。勿論彼女もここで手をこまねているつもりは毛頭無いが、だからといって自分に何か出来ることがあるかと言われれば答えは否。通信なり何なりで間接的に連絡を取る手段が無ければ、この状況で外に出ても迷惑を掛けるだけになりかねない。

一体どうすればいいのだろうかと頭を悩ませているその間に、アリーナに試合開始を告げるブザーが響き渡った。慌てて真耶が制御機器を操作するが、既にこちらが何をしようと試合中止の宣言を出すことは不可能な状態へと変えられていた。既に操作基盤はただの置物であり、実際の操作は別の誰か、あるいは制御プログラムに乗っ取られているらしい。

必死で操作を行う彼女を見ながら、千冬は短く舌打ちをした。非常事態への対策は学園側でも充分に取っている筈なのにこの体たらく。相手が上手なのか、こちらが杜撰だったのか。どちらにせよ、この事態を収束させたらもう少し非常対策を厳しくする必要があるので一人呟いた。

「千冬姉、そんな先のことより、今は鈴だ！」

一夏の言葉に「織斑先生と呼べ」と返そうとした千冬は言葉を止めた。いつになく彼の表情が真剣だったこともある。だが一番の理由は、IS学園の教師と生徒ではなく、『しののの』の同僚として話していることを察したからだ。分かっていると短く述べると、彼女はもう一度ISの通信回線を開いた。

ただし、今度は自身のチョーカーを握り締めて、である。

「織斑先生？ 一体何をなさって——」

「まあ見ているセシリア。私達は『しののの』だ。それを相手に教えてやるのさ」

そう言って不敵に笑う筈を見てみると、不思議とセシリアは何とかなってしまおうのではと思いはじめた。

「つつーか、これ明らかに異常事態よね」

試合開始のブザーは鳴り、相手は完全に臨戦体勢に入っている。だが、鈴音はその状態に違和感を覚えていた。それも当たり前であろう。いきなり自分の対戦相手として異形のI Sが現れて、何の説明も無いまま試合が開始されたのだ。普通ならば混乱してどうしていいか分からず狼狽する場面である。

幸いにして彼女はそういう異常事態に耐性を持っていたので、狼狽している間に目の前の敵に攻撃を受け取り返しの付かない事態になるということは避けられたが、しかし。良いにしろ悪いにしろ何か状況説明が欲しいのが実際の所であろう。

「まあ、無い物ねだりしてもしょうがない、かあ！」

スラスターを吹かし、敵I Sと距離を詰める。右手に持った『双天牙月』を振り下ろしたが、巨大な腕の装甲に阻まれあつけなく刃が弾かれた。その隙を狙い、異形のI Sは腕部に搭載されている大口径のビーム砲を鈴音へと向ける。とっさに体を捻って躲したが、その目前を掠め飛んでいくそれは、かなりの威力を肌で感じるものであった。『白式・真雪』のビームキャノン程ではないにしろ、当たれば充分に危険だ。

試合形式ならばともかく、この状況でシールドエネルギーを当てにするのは自殺行為だろう、そう考えている鈴音にとってそれははつきり『死』を連想させるものに相違ない。再び距離を取りながら、彼女は少しだけ体を震わせた。

「……まさか、学校行事で死の危険を感じるとは思わなかったわ」

呟いて、そして笑った。たまにあるちよつとはしゃいで痛い目に遭う遠足の延長線上だと考えればいい。そう思い直して、彼女は気持ち奮い立たせた。

「よっしや、相手が誰だか知らないけど、あたしの前に立った以上遠慮なくぶっ飛ば——」

『鳳、聞こえるか?』

そのままもう一度突っ込もうとした鈴音の耳に聞き覚えのある声
が飛び込んでくる。出足を挫かれた彼女はそのまま前にすっ転んだ。
が、素早く受身を取って立ち上がるとすぐにその声の主へと反応を返
した。いきなりなんですか千冬さん、と。

『織斑先生だ。まあいい、聞こえているな』

「そりゃ、ISの『開放回線』なんだから聞こえるに決まって……って
これ『個人間秘匿通信(プライベート・チャネル)』じゃないですか!?
何であたしの回線知って」

『わたくしと箒さんが知っていますから』

『悪いが、千冬さんに教えたぞ』

「あ、セシリアと箒。ってことはそこに一夏の馬鹿もいるわね」

『おまけ扱いありがとよ』

通信の向こう側の一行の別段普段と変わらない様子に少し気が紛
れた鈴音だが、しかし目の前の異形のことを思い出すと声を荒げた。
それで、一体何の用なんですか、と。

そんな彼女の焦りを受け流すように、通信の向こう側の千冬はまあ
慌てるなど返す。

『まず、今の状況を分かる限りお前に伝えておこうと思つてな』

「それは構いませんけど、長くなりますか? 向こうそろそろ攻撃し
てきそうですね」

『ふむ……なら、避けながら聞け』

「無茶言ってるよこの人!?!」

そう言いつつ、鈴音は目の前の相手を『見た』。どうやら今のところ
牽制程度のビーム砲を撃つだけで接近戦を挑む様子は見当たらない。
序盤の様子見、あるいは機体の動作確認を行っているように見受けら
れた。これならば多少会話をしつつも回避は可能だろう。そう判断
した彼女は続きを促す。

『結論から言うと相手の正体はまだ分からん』

「何で通信してきたんですか!」

『だから慌てるな。ISそのものの正体は分からんが、目の前の相手

の正体は分かっている。七組のクラス代表だ』

「は？」

『その異形のISのパイロットはお前のクラス対抗戦での対戦相手だ』

「え？　ってことは、これホントに試合？」

一瞬呆けた所為で回避がギリギリになってしまった。掠るか掠らないかの距離を飛んでいくビームを見て冷や汗を流しつつ、鈴音はもう一度敵を眺める。対戦相手を眺める。

『そんなわけあるか。正体不明のISに乗っている上に、今現在アリーナの制御装置が全てハッキングされている。こんな状態でまともな試合など出来ん』

「あ、やっぱり——って今凄く不穏な単語聞こえましたよ！」

『アリーナは何者かに乗っ取られている』

「二回言わなくてもいいです！　それ無茶苦茶ヤバイじゃないですか！」

『まあ、その辺りは現在専門家がハッキングの解除を試みている。そう遠くない内にこちらに制御は戻るだろう』

「……それで、あたしはどうすれば？」

そこまで聞いた鈴音は、一度大きく溜息を吐いた。そして、口調を落ち着けると千冬にそう問う。そこまで聞いて彼女は何となく気付いたのだ。これは、自分に何かをやって欲しいのだと。

予想通り、その言葉を聞いた千冬は通信越しに軽く笑ったらしく、息が漏れたのが鈴音に届いた。そして、よく言った、と続けた。

『やってもらおうことは単純だ。その目の前の相手を倒せ』

「軽く言っちゃってくださいませね」

『軽いだろう？　お前なら、な』

そう言われると彼女としては黙らざるを得ない。自分の信頼してくれる相手を裏切ることには彼女には出来ない。意地でもその信頼に応えることしか出来ない。

思い切り頬を叩いた。若干頬が赤くなるほどに気合を入れた鈴音は、改めて目の前の異形を睨んだ。そろそろ真面目に戦うとします

か、そう言つて両手に武器を構えた。

『鈴』

「何よ一夏」

『鈴』

「だから何よ箒」

『鈴さん』

「だから！ 何なのよセシリアー！」

そのタイミングで割り込んできた三人の通信。三人共に彼女の名前を呼ぶだけの通信。それを少し乱暴に返した鈴音の耳に届いたのは、三人が同時に放つた一言。

勝つてこい。ただそれだけの、短い一言。どうしようもないくらいに彼女を奮い立たせる、魔法の一言。

「当つたり前じゃない！」

そう叫んで、彼女は一気に突っ込んだ。

「で、状況はどうだ？」

通信を終えた千冬は、鈴音に伝えた『ハッキングの解除を試みている専門家』へと視線を向けた。向けられたその人物は、持ってきた端末を操作しつつ頭に乗っているウサ耳をピコピコと揺らす。そして、大丈夫だよーちゃんと呑気な声で答えた。

「鈴ちゃんがあの変なのを倒せば解除されるのが分かったからね。もう東さんがやることは何も無いよ」

「おい」

質問者にとっては何も大丈夫だと思えないような言葉をのたまいつつ、東は端末の片付けに移行し始めた。どうやら本当にもう何もしないらしい。千冬が止めようと声を掛けても大丈夫大丈夫と笑うのみである。

そして逆に問うた。ちーちゃんは、鈴ちゃんが負けると思ってるの、と。

「そんなわけないだろう」

「でしょ？ だったら、もう大丈夫」

「しかし方が一ということもあってだな」

「束さんは知ってるよ、鈴ちゃんは皆に鍛えられて強くなってるってこと。そして、その中にちーちゃんも含まれてること。まあ、ちーちゃんに頼んだのは私だけどね」

「何が言いたい」

机に頬杖をつき不敵に笑いながらそんなことを言い出した束に向かい、千冬は少し視線を鋭くした。勿論そんな視線など慣れつこの彼女の親友は、言わなきゃ分からないかな、などと挑発するように言葉を返す。

「そんなに心配しなくてもいいのに。まったくちーちゃんはツンデレだなあ」

「……兎の死体は生ごみでいいよな」

「落ち着いてください先輩！ 篠ノ之博士もこれ以上先輩を挑発しないでくださいー！」

「えー」

「えー、じゃありませんー！」

真耶は今にもウサ耳を頭ごと引き千切ろうとしている千冬を羽交い絞めにしながら悲痛な叫びを上げた。既に表情は涙目である。加えると、これが既に彼女の中では割とお馴染みになっていることである。そんなことだから副担任と書いて『いけにえ』と読む何かにされるんだよ、という目の前の女性の呟きは彼女には届かなかった。

「まあ、眼鏡おっぱい先生に免じてこのくらいにしてあげよう」

「何でお前が許す立場なんだお前が！」

「っていうか私未だに名前前で呼んでくれないんですね……」

そんな助っ人で呼んだ筈の人物に振り回される二人を見ながら、セシリアは溜息を吐いた。どうやら事態は好転しており解決に向かっているようではあるが、どうにも納得がいかないというか、手放して喜べないというか。そんなもどかしい気持ち胸の中で渦巻いていた。

決して助っ人がアレな人物であったことや啖呵を切った割に微妙な結末を見せている『しののの』の実力とやらに呆れているわけではない。だから、そんな彼女を見ながらオロオロしている筈の心配は取り越し苦労だ。

「いや、あの、これは、何というかな。姉さんは若干変人の気があつてだな」

「まあ確かに束さんは変人だが、それ以外でもフォロワーしようがないくらいのグダグダだ。諦めろ筈」

「あ、いえ。『しののの』の実力は存分に見せてもらいましたわ」

とりあえず彼女の心配の種を取っておく。実際、セシリアはアーリーナの異常事態をもものともせずここにやってきた挙句にあつという間に原因を特定、鈴音と通信まで可能にした束の手腕には舌を巻いていた。性格はアレであるが。

「わたくしが気になっているのは、別のことです」

別のこと？ と筈が聞き返す。それに頷いたセシリアは、アーリーナで鈴音が戦っているその相手、異形のISを指差した。あの正体が分かっていない、そう続けた。

「あー、そういや確かに」

「倒せば事態は解決するが、謎は謎のまま、ということか」

言われてみれば確かに、と一夏と筈も異形のISを見る。

その両腕から放たれる四本のビームを掻い潜り『双天牙月』をボディに叩き込む鈴音の姿が三人の目に映った。しかし相手はあまり堪えていないようで、全身に搭載されているスラスタを使い、巨体とは思えない素早い動きで彼女を翻弄している。しようとしている。

無論、『見る』ことに特化している鈴音にそんな動きは子供騙しではない。正確に位置を捉えて左右の刃を振るう。状況はそんな感じであり、確かに鈴音が勝つであろうことを感じさせた。

「こりゃ、ますますもって向こうの正体を探る必要があるな」

「鈴は勝つだろうから、別に心配はいらんだろうしな」

「信頼、というか……投げっぱなし、というか……」

先程篠ノ之束を『変人』と評した二人だったが、傍から見ていると

充分に彼等二人も変人である。薄々気づいてはいたが改めて再確認したセシリアは、一人アリーナで戦う鈴音にエールを送った。

そんな応援をしつつ、彼女は二人の会話に参加する。相手の正体とは一体なんなのか。何か心当たりは無いのか。記憶を探るように思考を巡らせた。

「ん？ あれの正体知りたいの？」

「知ってるんですか東さん」

そんな三人へと掛けられたのは何とも呑気な変人の声であった。悩んでいたのが馬鹿らしくなるくらい、あっさりとは彼女は正体を知っているとのたまう。思わず詰め寄った一夏の頭を撫でながら、東は三人へと微笑みかけた。

「さつきハッキング解除のついでに探ったんだけど。あれは『ゴーレム』だね」

「『ゴーレム』？」

「そ、『ゴーレム』。あれは有人タイプみたいだけど、本来は無人運用を想定して作られたISだよ」

「無人運用!?! ISは人が操縦しない限り動かないはずでは!?!」

東の言葉が信じられなかったセシリアは思わず叫び身乗り出す。そんな彼女をまるで言葉を覚えてたの幼稚園児を見るような目で見た東は、まあそれが常識だよ、と返した。

「でも、その常識が常に正しいとは限らないんだよ、えっと——」

「セシリア・オルコットです」

「——金髪縦ロールちゃん」

「わたくし今名乗りましたの!?!」

「すまんセシリア。姉さんは基本的に人の名前を覚えられないんだ」

頭を下げる筈を見てもうどうでもよくなつたセシリアはとりあえず続きを促した。このまま話が脱線しては埒が明かない。そうも思った。

「じゃあ話を戻すけど。その無人運用つてのもやっぱり色々問題があつてね、計画は白紙になった。その時に『ゴーレム』の生産も当然ストップしたはずなんだけど」

どうやらこつそりと計画を続けていた連中がいるようだね。そう束は締めくくった。

『ゴーレム』、ねえ……』

成程、確かに相手が無なのかは分かった。そんなことを心で呟きながら、一夏は未だ難しい顔を戻さない。まだ悩みが消えない。それは箒やセシリアも同じようで、答えは貰ったがまだ足りないような、そんな微妙な表情を浮かべていた。

否、何が足りないかはもう分かっている。それを聞くのを少しだけ躊躇っているだけなのだ。それを聞いたら、厄介なことに深く首を突っ込んでしまうような、そんな予感がしたのだ。

「いや、というかそれはむしろ望むところか」

一夏は一人ごちる。隣の箒を見ると、彼と同じような表情を浮かべていた。元々彼等は『しののの』の見習い。厄介事に首を突っ込むのが仕事のようなものだ。ならば、躊躇う必要など何処にもない。

ただ、と隣のもう一人を見る。彼女はそういうことに首を突っ込んででもいい人間ではない。国の代表候補生、いずれは表舞台に立つ可能性のある人物だ。ここで変な事件の当事者にしてはいけない。

「セシ——」

「篠ノ之博士。その秘密裏に計画を進めていた連中というのが何者か、教えてくださいませ」

「——リア!？」

そう思った矢先の出来事である。先陣を切ったのは、他でもないそのセシリアであった。二人揃って目を見開いているのを確認して、彼女は思わず笑ってしまった。

「一夏さん、箒さん。余計な心配は無用ですわ。というよりも、厄介事の一つや二つ片付けられないようでは代表候補生の名が、オルコットの名が泣きます」

堂々と宣言する彼女の姿は、実に自信に満ち溢れていて。ああ、そういうえば、と一夏も箒も思い出した。彼女は、セシリア・オルコットはそういう人物だった、と。淑女然としても、その中身は好戦的でこちら寄りだということを。

「んっふっふ。じゃあ、話の続きをしちやっつていいのかな？」

「篠ノ之博士！」

「どうしたの眼鏡おっぱい先生。まさかここまで来て話すなって言わないよね？」

せつかくのいい場面なのに水を差さないですよ。そんな文句を付け加えながら声を掛けた真耶の方へと振り向く東だったが、それを視界に入れた瞬間に表情を変えた。

千冬が立っている。そして、ある一点を睨んでいる。そこは管制室のIS通信の為の『開放回線』の受信機器。そこに、何者かから通信が来ているという表示が出ていたのだ。

当然、IS学園に關係する誰かからでもなければ『しののの』關係者でもない。全くの見知らぬ存在からの通信。このタイミングでそれをやるとするならば、相手は。

「二夏、箒、オルコット。束の話の続きは——」

通信のスイッチを入れる。何故かこちらの操作を受け付けたその基盤は、この部屋と相手の回線を繋いだ。繋いで、そして再び置物へと化した。

そんなことは気にせずに、千冬は振り向いて三人へと視線を向ける。短く鼻を鳴らして、言葉を続ける。

「当事者から聞くといい」

なあ、と姿の見えない相手に声を掛けた。通信の繋がった向こう側に向かつて声を掛けた。

「構わないだろう？ 『亡国機業（ファントム・タスク）』！」

No.1 「犯人の癖に、さ」

「ねえ、かんちゃん」

「どうしたの？」

アリーナの観客席。そこで試合を観戦していた本音が、半ば無理矢理隣に座らせた簪に向かってふと問うた。何だか様子がおかしくな
いか、と。

それは簪も分かっていたようで、肯定を示すように首を縦に振る。
そもそも、と現在の試合の対戦相手を指差した。

「あんな機体……見たこと、ない」

「IS学園の備品じゃないよね」

昔何処かで見たとような気もするけど、などと続けながら。彼女はそ
の機体を、『ゴレム』を眺めた。最初こそ拙かったその動きは、時が
経つにつれて段々と無駄を無くしている。まるで、中身が変わってい
くように。隣の簪も同じような感想を持ったのか、どことなく苦い顔
でそれを見詰めた。

「でも」

「ん〜？」

こんな状態なのに、何もアウンスが無い。簪はそのことが引つ掛
かっていた。同じように不思議に感じている生徒はいるようだが、そ
の所為で結局クラス対抗戦は続行されていると思っっているようであ
った。

「ひよつとして……大つぴらな事件にしたくない、のかな？」

「そうかも。観客席を守るシールドのレベルだけ上がったのもその
所為かな」

「こちらに被害を出さないように……？」

「そうそう。あ、でもひよつとしたら」

犯人が観客席で見ているからかもしれないよ。そう言っ
て本音は笑ったが、簪は笑えないよと一人肩を落とした。

『おーやおや、流石は『しののの』よーくご存知で』

どことなく嘲るような声で、通信の相手はそう返す。あからさまな挑発であるそれを、千冬は特に意に介さず無言を貫いた。いいから続ける、声にせずともそう述べているのが周囲にいる一行にも、そして通信の先の相手にも伝わった。

やれやれ、と向こう側から声が聞こえる。

『余裕の無い人間はこれだから困る。こつちがちよつと歩み寄ってやってんのに、まるで感謝する素振りもないときた。はっ！ 所詮はサル山のボス猿ってことか』
「うわウゼエ」

思わず一夏は感想が声に出た。彼なりに黙っているつもりであったが、無意識の行動だったらしい。一瞬しまったという表情を浮かべ周囲を見渡したが、特に咎めるような視線は見当たらない。なんだ皆同じ意見かと彼は胸を撫で下ろした。

そのついでに、と彼は通信の向こうに声を掛けた。お咎めなしで少し調子に乗ったようである。

「で、何だよその『亡国機業』ってのは」

『あ？ 知らないのかよお前。男の声ってことは例の『しののの』所属つっー野郎のパイロットだろ？ 組織が持つてて当然の情報すら知らない馬鹿なのか？』

「馬鹿で悪いか！」

『悪いに決まってるんだろ。はっは、何だ何だ、そうかいそうかい。こりやとんだ買い被りだ。世界最強の我俣集団ってのは、つまりただの駄々こねる餓鬼の集まりってことか』

通信の向こう側から、盛大に笑い声が聞こえてくる。馬鹿にするよ
うな、否、完全に馬鹿にしている笑いが響いてくる。見下している笑い声が響いてくる。

その原因となった一夏は。両手を強く握り締め、歯が噛み合わないほど強く食い縛り、そして相手が目の前にいないことで暴れることも出来ないもどかしさを必死で押さえ込んでいた。

「落ち着け馬鹿者」

そんな彼の頭を千冬は盛大に引つ叩く。よろけるを通り越して地面に叩き付けられた一夏はしばし床に突っ伏したまま悶えていたが、勢い良く立ち上がると「何するんだ千冬姉」と彼女に詰め寄った。そんな姿を見た千冬はそれでいいと笑う。あんな安い挑発に乗るんじゃない、ともう一度軽く頭を叩いた。

「……だって、俺だけじゃなくて千冬姉や東さんまで馬鹿にされたから」

「そう思っただんなら、もう少しいつくんはそういう情報も学ぶべきだね」

「まだまだ当分見習いな」

「ダブルで駄目出しされた!?!」

先程とは違う意味でショックを受けた一夏を余所に、千冬と東は意識を通信先の相手に向けた。そろそろ笑いは収まったかな、などと余裕を崩さない様子で彼女達は向こうへと声を掛けた。

「当事者から話を聞けばいいって言ったちーちゃんにも責任があるし、ここはこの東さんが説明してあげよう」

「ざらりと責任を私に押し付けるな」

「笑いが収まったのかとか聞いた割にこっちは無視かよ」

「うん、うるさいから静かになるように聞いただけ。正直君のことなんかどうでもいいし」

『言ってくれるじゃ——』

「分かったから黙ってよ。私の話が進まないじゃない」

そこまで言うと、東は一夏達へと振り向いた。その顔は笑顔。先程通信先の相手に話していたときの能面のような顔は何処にも無い。この空間内でその変わり様に唯一慣れていない人物——セシリア・オルコットは少しだけ背筋が寒くなった。

「さて、じゃあ『亡国機業』なんだけど」

一言で言うなら、悪の組織かな。そう言って彼女はウィンクをした。ウサ耳にエプロンドレスというエキセントリックな格好と相まって、その姿は実に様になっている。なっているのだが、その言葉

だけで彼等三人が納得するかという答えは否なわけで。

勿論、もう少し詳しくお願いしますという返事が来るわけである。ちなみにその言葉を発したのは彼女の妹であった。

「んー。でもまあ、ホントにぶつちやけそれだけなんだよね。国に属しているわけじゃないし、思想とか信仰とかそういうのも持つてるわけじゃないみたいだし。やりたいことをやってるだけ、って感じ?」

「その説明だけだと『しののの』と大して変わらないじゃないですか」「……それは箒ちゃんでも聞き捨てならないね。自分で発明して、自分で楽しいことをやって、自分で大切なものを守って、そんなことを主にやってる私達と。戦火の火事場泥棒で懐を暖めて、他人から奪った兵器で暴れまわって、大事なものを好んで破壊して回るような連中が同じ? 冗談じゃないよ」

「そう思うなら最初からその説明をしろアホ」

「あだっ! ちーちゃん痛い」

「誤解を招く説明をするからだ」

やれやれ、と肩を竦めると、千冬は視線を若干涙目の束からアリーナの様子を映しているモニターへと移動させた。そこに視線を固定させたまま、通信の相手に向かって何か間違っている部分はあるかと投げ掛けた。相手は答えない。だが、その沈黙が肯定を表しているのだろうと彼女は判断した。

「まあ、貴様達がどんな集団なのかというのは所詮見習いに教える為のおまけに過ぎん。私達にとって肝心な部分は、貴様達がこの事件の当事者であるという一点だけだ」

『……ほっっ』

「わざわざこちらに通信をしてきたんだ。何か伝えたいことでもあるんだろう?」

犯行声明でもするつもりか。そんなことを続けながら千冬は部屋に備え付けられていたポットからコーヒーを注ぎ喉を潤した。続くように束もコーヒーを注いでそこに置いてあった白い粉を入れる。

「ぶっ! これ塩だ!」

「……少しは真面目な空気を持続させてくれ」

「わざとじゃないからね？　東さん悪くないからね？　というわけで
いっくん、はい」

「どうしろと」

塩入りコーヒーを渡されて途方に暮れている自身の弟をあえて視
界に入れないようにしつつ、彼女はコホンと咳払いをする。表情をも
う一度真剣なものに戻すと、改めて相手へと言葉を紡いだ。

『一々言わねえと分かんってほど愚鈍じゃねえんだろ、おたくら』

「無論だ。だが、それではわざわざ通信してきた甲斐が無いというも
のだろうか？」

『はっは、そりゃ違いねえ』

何が面白かったのか、通信の向こうで相手は盛大に笑い声を上げ
た。先程のような嘲るようなものではなく、純粹に面白さから出る笑
い声だ。そのまま若干弾んだ声で相手は言葉を続ける。『伝えたいこ
と』とやらを話し始める。

『ちよつとした機動実験さ』

『ゴーレム』の新装備のテスト。その会場にこのクラス対抗戦を選
んだ。要約してしまえばそれだけの理由である。実に単純な、それで
いて迷惑な、そんな理由。やりたいことをやっているという束の言葉
に違わぬ一言。

だが、それを容認出来るかと言われれば。

「ふざけんなよ」

『はっ。無知な餓鬼が吼えんじゃねえよ』

「知識の有無は関係ない。勝手にこちらの領域に入ってきて好き勝手
されれば誰だってそう思う。私達のような子供なら、尚更だ」

「その通りですわ。第一、わたくし達を子供と馬鹿にするのならば、そ
ちらのやっていることはそれこそ『大人気ない』ではないですか？」

答えは否。一夏も、箒も、セシリアも。そして当然大人の三人も。
そんな理由で事件を起こしている者達のことなど容認出来ない。そ
の空気を通信機越しに感じ取ったのか、向こう側で再び軽い笑い声が
聞こえてきた。

『いいねえ、その正義の味方ごっこ。こりゃこつちも益々悪の組織ら

しく振舞いたくなるってもんだ』

「戯言を」

『いや、本気だぜ。その証拠に、『ゴーレム』に搭載された新装備の説明つてのをしてやるよ』

その言葉を聞いて、真耶はそれが何故悪の組織らしい振る舞いになるのか、と問う。逆に千冬と束は何かを悟ったのか、お互いにアイコンタクトを取ると先程仕舞った端末を再び展開させていた。

『まあ聞けよ。あれに搭載されているのは、搭乗者を戦闘マシーンに変えちまう特殊な洗脳装置だ』

「……え？」

『戦いを見てなかったのか？ 最初と比べて段々動きがマシンになってきてるだろ？ あれは洗脳が順調に進んでいる証拠だ』

その言葉を聞いて、一夏達三人と真耶はモニターに顔を向けた。そこには確かに、つい先程見たものとは別人のような動きで鈴音に攻撃を加えている『ゴーレム』の姿が見える。思わず目を見開いたが、しかしそれでもまだ彼女の方が勝っているらしく、余裕とはいかないが被弾を減らしながら攻撃と回避を繰り返していた。

『まだ試作段階だから時間は掛かってるが、完了すればそこの餓鬼じゃ太刀打ち出来ねえさ。あの小娘が倒されるのも時間の問題ってわけだ』

「洗脳を説く方法は？ 方法は無いんですか!？」

『教えるわけねえだろぶわあか！ ついでに言っちゃまうと、この場所を選んだのも理由があつてな、大したことない餓鬼を洗脳したらどのくらい強くなるかの実験つてわけよ。はっは！ どうだ、悪の組織らしいだろ?』

顔を青ざめよろける真耶に追い討ちを掛けるように相手は笑う。管制室に響き渡るその声は非常に耳障りで、呆然とする彼女以外の五名は不快感に顔をしかめた。

『本当は体に直接埋め込むのが一番手っ取り早いんだが、例のあれみたいになっちゃったら困るしな、はっはっは!』

「……それは、VTシステムの被験者の、あいつのことを言っているの

か？」

笑い声を上げながら更に話を続けていたその相手に反応したのは千冬であった。束と共に作業を行っていた手を止め、見えない相手を射殺さんばかりに睨み付けている。

周りの人間が竦みあがってしまうような底冷えした声であったが、通信の向こうの相手は気にした風もなく大正解などと呑気に返していた。相変わらず笑い声は続いている。

『そういえばお前さんはあれを普通の人間として直そうと努力したんだっけか？ おかげで日常生活くらいは送れるようになったのか、それともISパイロットとしても活動出来るまで進んだか。まあ、どっちにしる涙ぐましいじゃないか。そりや怒るのも無理ないわな。確か名前は何だったか？ あーそうだそうだ、ラウ——』

「黙れ。貴様があいつの名前を気安く呼ぶな」

『はっは！ 中々どうして、熱いじゃないの。さしもの『ブリュンヒルデ』も身内を馬鹿にされちゃ黙っていられませんってか？』

「馬鹿にされたからではない。貴様が、あいつを物と同じ認識で話しているのに腹が立つだけだ」

そうかいそうかい、と相手は返す。笑いを収めて、一度深呼吸をしたのがスピーカーから聞こえてきた。

『……さて、と。そろそろ時間だ』

「時間？ ……まさか!？」

時間、というキーワードを聞いて真耶と同じように顔色を変えるセシリアであったが、相手は違う違うと馬鹿にしたように笑った。そうだったら良かったんだがな、などと余計な一言も付け加えた。

『単純に話し過ぎたってことさ。社内電話の長時間使用はほどほどに、ってな』

その言葉を最後に、通信は途絶えた。耳障りな笑い声も、人を馬鹿にしたような口調も、もう管制室に響いてこない。そのことに安堵すると同時に、事態の深刻さを思い出し一夏達はどうすればいいのかと右往左往する。相変わらずアリーナはハッキングされたままであるし、『ゴーレム』の洗脳装置の解除の仕方も分からない。少なくとも唯

の学生である彼等に出来ることは何も無かった。

それが例えば代表候補生だとしても、『しののの』見習いパイロットだとしても、である。

「あるよ、いつくん達に出来ること」

そんな三人に掛けられた言葉はこれであった。視線を向けると、端末を操作しながら、東がこちらに向かってサムズアップをしているのが見えた。その光景が何とも間抜けで、思わず一夏達の顔に笑みが浮かぶ。

「姉さん。それで、私達に何が出来るんですか？」

「ふふん。簡単だよ」

鈴ちゃんを、応援してあげて。端末から三人に視線を移しそう言っ
て彼女は微笑むと、再び作業へ戻っていった。あと少しで洗脳装置の
解析も終わるから、大丈夫だよ。そう付け加えるのも忘れない。

そして、そんなことを言われた三人は。

「鈴を応援、ね」

「……成程な」

「重大な役割ですわね」

そう言うのと同時、彼らはモニターの戦っている鈴音の姿に向かって
て精一杯叫んだ。

頑張れ、と。

両手から打ち出されるビームを避ける。そのまま勢い良く半回転
し右手に持っていた『双天牙月』を叩き付けた。鈍い金属音が響き、そ
して彼女の右腕が弾かれる。その弾かれた勢いすら利用し、鈴音は左
手に持っていた刃を同じ所に叩き込んだ。今度は弾かれることなく、
装甲が少しだけ削れ破片が飛んだ。

だが、それだけである。戦闘続行に支障はなく、移動や攻撃を制限
されるほどのダメージでもない。ちよつとした傷、ただ、それだけな
のだ。

「硬い！」

反撃とばかりに拳を突き出してくるのを左右にステップすることで躲した鈴音は、そうぼやいて距離を取った。先程から小さなダメージを与え続けてはいるものの、向こう側のシールドエネルギーが減少している素振りが全く見えない。それが彼女の不安を煽っていた。

その不安とは当然、このままだと自分が倒されるという不安であり。そして、『絶対防御』が搭載されてない可能性を考慮し、相手を殺してしまうのではないかという不安であった。

「あーもう！ 何でこんなモヤモヤした気持ちで戦わなきゃいけないのよ！」

肩口にある『甲龍』の特殊兵装『龍咆』を我武者羅に放つ。不可視の弾幕が形成されるが、『ゴーレム』は意に介した様子も無い。それが彼女のイライラを一層強く募らせた。

どうにかして糸口を見付けられないといけない。そう考えてはいはいるのだが、しかしそのきっかけすら見えてこない。傍から見ている限りではそうではないが、本人にとつては八方塞の状態であった。倒したくても倒せない。信頼に応えたくても、応えられない。

『大変そうだね』

そんな彼女の耳元に届いたのは、全く聞き覚えのない声であった。ボイスチェンジャーでも使用しているのか、その声は男か女か分からない。ただ、話し方からすると若い人物であろうということは予想出来た。

そしてもう一つ。今彼女の耳元に届いている通信は『開放回線』であるということだ。現在アリーナはハッキングされておりこの建物内での通信は丸々遮断されているはずである。にも拘らず平然と通信をしていくということは、つまりそういうことであろう。

「……アンタ、犯人かその仲間ね」

『正解。頭の回転速いんだね』

そう言って通信の向こうの人物は薄く笑う。何だか馬鹿にされている感じがしたが、しかし不思議と彼女の中に怒りは湧いてこない。口調か、それとも見えない人柄か。どちらにせよ、別に今は関係ない

ことだとその思考を打ち切った。

今大事なのは、何故こちらに通信をしてきたか。それだけである。

『ちよつとアドバイスをしてあげようと思つてね』

「この事件の犯人の癖に？」

『そう、犯人の癖に、さ』

クスクスと笑いながら、通信の相手はどうする、と問う。アドバイスを聞くか否か。そんな質問に素直にハイと答える人物はそうそういないが、しかし。

今の彼女はそれこそ藁にも縋りたい思いであった。嘘だろうと何だろうと、何か状況を変えるきっかけが欲しい。そう思っていたのだ。

「いいわ、教えてちょうだい」

『オツケー。でもその前に』

敵の攻撃が来るよ。その言葉に慌てて意識を前に戻した鈴音は、迫り来る四本のビームを急上昇することで躲した。『ゴレム』を『見て』、その動きを読み取りながら通信の相手にとつとと話せとせつつ。先程千冬との会話でも行った芸当だ、もう一度くらいどうつてことはない。

『じゃあ単刀直入に言うよ。その機体のパイロットはもうすぐ廃人になる』

「は？」

思わず耳を疑った。そして、こんなことをする相手ならやりかねないと納得した。

その次に浮かんでくるのは、勿論怒りだ。ふぎけるな、と彼女は通信の相手に向かって叫んだ。

『そうだね、ぼ——私もふぎけていると思うよ。でもまあ、そういう装備だからね、仕方ないよ』

「随分と冷たいのね」

『そうかな？ 縁もゆかりもない人間がどうなるのかなんて、そこまですら興味を持ってないと思うんだけど』

そう返されて、確かにそれはそうだと彼女も思う。だが、それでも

目の前で人が廃人になるのを好き好んで見たくなどない。『龍咆』で牽制、『双天牙月』で吹き飛ばして距離を取り会話の余裕を作ると、鈴音はいいから続けてと促した。

『続き?』

「そう、アドバイスしに来たんでしょう?　つてことは、アンタはそうならない方法を教えてくれるのよね」

『……ふ、ふふふっ』

「何笑ってんのよ」

別におかしいことなど何も言っていないはずだ。若干膨れながらそう続けた彼女の耳に、更に大きな笑い声が聞こえてくる。ごめんごめん、という言葉も聞こえてくるが、どうやら笑いを抑える気はないようである。

『まさかそんなに信用してくれるなんてね。驚いたよ』

「信頼はしてないけどね」

『それでいいよ。じゃあアドバイスだけ』

機体の背後の腰部にある装置が洗脳装置だ。回りくどいことなど言わず、通信の相手はそれだけを告げた。それが何か、それをどうすればいいのかなどは一切言わなかった。言う必要がなかった。

「じゃあ、それを壊せばあたしの勝ちってわけね」

彼女はもうやることを決めたのだから。『双天牙月』を構え、真っ直ぐに相手を見る鈴音の目は、完全に覚悟を決めた人間のそれであった。

今までとは違う、明確に狙うべき箇所が分かっている。そのことが、折れ掛けていた彼女の心を再び奮い立たせた。

『嘘だって可能性もあるよ?』

「言ったでしょ。信頼はしてないけど、信用はしたって」

『ああ、そうだったね』

笑い声が鈴音の耳に聞こえてくる。それにつられたのか、彼女の顔にもいつの間にか笑みが浮かんでいた。

「あ、そうだ」

いざ突っ込む、とスラスタを吹かそうとしたその直前。ふと思

付いたことがあり彼女は動きを止めた。ちよつと聞きたいんだけど、と通信の相手へと声を掛ける。

「どうしてアドバイスなんかしてくれたの?」

『普通はそれを最初に聞くと思うけど』

良くも悪くも真つ直ぐなんだね君は、と褒められているのか貶されているのか分からない相手の評価を聞きながら、彼女は答えを待つ。反撃を開始する前に、それだけは聞いておく為に。

『そうだね……。二つあるけど、一つは予想以上に君が強かったから』
「あつたり前じゃない。で、もう一つは?」

『この計画の責任者が嫌いだから、かな』

「……それってつまり、失敗させたいってこと?」

『そういうこと。納得してもらえたかな』

短く「ええ」と彼女は答える。これで気になることは全て済ませた。

後はアドバイス通り腰部の洗脳装置を破壊するだけ。ただ、それだけだ。

「さあ、行くわよこんちくしょー!」

真正面から挑んでも背後を攻撃することはまず不可能である。これがセシリアの『ブルー・ティアーズ』であつたのなら話は別だろうが、生憎と機体は『甲龍』であり、パイロットは鈴音だ。結局、この組み合わせでやれることなど一つしかない。

「真つ直ぐ突っ込んで、ぶっ飛ばす!」

重ねて言うが、真正面から挑んでも背後を攻撃することはまず不可能である。それでも、彼女がやることはこれしかない。

『双天牙月』を真つ直ぐ突き出す。それを『ゴーレム』は左腕でガード、そのまま空いている右腕を振り上げる。その振り上げた右腕に向かって、彼女は『龍咆』を連射した。衝撃で押し戻されたその腕に、追加で『双天牙月』を叩き込んだ。二つの衝撃で右腕を跳ね上げている『ゴーレム』は致命的な隙を晒している。

「今だ!」

スラストターを吹かし、円を描くように一気に旋回。『ゴーレム』の背後に回った鈴音は言われた通りの箇所を攻撃せんと刃を振り上げる。だが、そのアクションを起こす前に、既に相手は彼女の方へと向き直っていた。通常の反応では考えられないその動きに、振り下ろそうとしていた刃の速度がほんの僅かに落ちる。

その隙間を縫って、『ゴーレム』は巨大な拳を鈴音のボディへと突き立てていた。一瞬視界がブラックアウトし、肺に溜まっていた空気が無理矢理に吐き出される。そのままゴムボールのように弾き飛ばされた彼女は、アリーナの壁に激突してようやく止まった。

「か、はっ……い！」

通常ならば『絶対防御』が発動してもおかしくないほどの一撃。だが、『甲龍』のコンソールに『絶対防御』発動のログは見当たらず、シールドエネルギーの減少を知らせる表示が流れるのみである。搭乗者の生命を守らなかつたおかげで、機体そのものはまだまだ余裕がありそうであった。

「まあ、それでも……生身で攻撃食らうよりは全然マシよね」

追撃に備え、彼女は痛む体を無理矢理動かしてその場から離脱する。一瞬遅れて、その場所にビームの雨が降り注いだ。

『鈴ちゃん、大丈夫？』

「あー……束さん、お久しぶりです」

『うん、久しぶり。それで、盛大に壁に激突してたけど、まだ動ける？』

再び通信。ただし、今度は彼女の聞き覚えのある声であった。回線も『個人間秘匿通信』であり、先程の千冬と同じものであるかと彼女は予測した。とりあえず大丈夫だと一言返すと、意識を通信から目の前の『ゴーレム』へと向ける。

『大丈夫ならこのまま話を続けるよ。今日の前にいる相手なんだけど——』

「もうすぐ廃人になっちゃうんでしょ。でもって腰のこの洗脳装置を早く壊さなきゃいけない。さっき聞きましたよ」

『え？ 誰から？』

「……えーっと、そーいや名前聞いてなかった」

犯人の一味であるという部分だけで納得していた為、その辺りを聞くのを彼女は失念していた。もつとも、聞いても答えてくれなかっただろうなと思ひ直す。

『まあいいや。分かってるなら話は早いよ。タイムリミットは後五分、それまでに腰の装置を破壊して』

「無茶言いますね」

『そう？　鈴ちゃんなら楽勝でしょ？』

そう言つて笑う束の言葉に冗談はない。彼女は本気でそう思っているのだ。

それを鈴音も分かっているのか、やれやれと肩を竦めて武器を構えた。千冬さんと束さんの両方に信頼されているなら、応えなくちゃね。そんなことを呟いて大きく深呼吸をする。ダメージを確認し、そして動けるように回復する為に。

「やっ、と」

思ったよりも傷は深い。五分間試行錯誤を行えるほどの余裕は彼女の中にはもう残っていないようであった。全力でぶつかれるのは精々後一回。それも、その後動けなくなるであろうというおまけ付きだ。絶対に失敗することは出来ない。

だが、それでいいと彼女は思う。何回も試すなどというのは自分のキャラではない。一回に全てを賭ける、その方が自分らしい。元々覚悟を決めている以上、今更なのだ。

「と、なると……やっぱあれよね」

先程の激突から考えて、既に向こうの動きは人間のそれを超え始めている。そうなっている以上、普通の攻撃では背後を取ることなど出来はしない。それこそ、非常識な攻撃でも行わない限りは。

飛来してくるビームを避けながら、鈴音は更に距離を取った。両の手に『双天牙月』をそれぞれ構え、前傾姿勢を取る。視線は真つ直ぐに前を向き、獲物を捕らえて離さない。

「猿真似では勝てませんわ、か……」

いつぞやのセシリアの言葉を思い出す。あの時は確かにその通りであった。真似しているだけでは手も足も出なかった。だから、皆の協

力で自分なりの戦い方というものを身に付けた。

それとは別に、彼女は一人で修練を積んでいたものがあつた。それはこの学園に来る前から練習していたものであり、そしてある人物の技術の模倣でもあつた。言つてしまえば猿真似だ。

だが、それでも。今この場で通用するのはそれしかない、そう彼女は判断したのだ。

息を吸い、吐く。スラスターにエネルギーを溜め込み、一気に放出した。『瞬時加速』、それで猛スピードで真つ直ぐに『ゴーレム』へと突っ込んでいく。

しかし、所詮は直線軌道。既に大部分を装置に乗っ取られている状態の『ゴーレム』の反応速度を持つてすれば、ただ真つ直ぐ突っ込んでくるだけの相手など容易く迎撃出来る。両手のビーム砲は狙いを違わず、一直線に進んできた鈴音を打ち抜かんと発射された。

「吼えろ！ 『龍咆』！」

その刹那、彼女の叫びと共に『龍咆』の片側が起動。彼女の背後に向かつて勢い良く衝撃が打ち出される。『瞬時加速』中に空中制御を切り、そして衝撃を自身の背後へと放つ。その行動の結果はどうなるかと問われれば。

「——見様見真似、あたし流」

鈴音は、『瞬時加速』で曲線軌道を行った。当然ビームは彼女を捉えることが出来ず、更に『ゴーレム』の視界から消えるように彼女は『瞬時加速』の速度を保ったまま円を描く。

装置の反応はそれでも鋭く、背後を取ろうとする鈴音の方へと体を動かす。が、彼女の速度は『ゴーレム』の反応を上回つた。体を動かしたそこに、彼女の姿はなかった。

気配は、彼女の叫びは、『ゴーレム』の背後から現れた。

「篠ノ之箒の『疾風迅雷』！」

体ごとぶつかるように叩き付けられた刃は、見事に『ゴーレム』の腰部を砕いていた。

鈴音の視界に映ったのはアリーナから見える空ではなく、医務室らしき部屋の天井であった。どうやらあの後力尽きて気絶してしまっただらしい。そんなことを思いながら体を起こすと、隣でリンゴを剥いている幼馴染の姿が視界に映った。

「よう、起きたか」

「い、一夏!?!」

思わず跳ね上がってしまい、その所為でバランスを崩しベッドから落ち掛ける。危ない、と一夏はそんな彼女を抱きかかえてベッドに戻した。

抱きかかえて、である。俗に言う、お姫様抱っこ、と形容されるあれである。

「体の調子はどうだ?」

「……え!? あ、ああ、うん、大丈夫よ。寝てる間に体力回復したみたい」

一瞬意識が飛んでいた鈴音は彼の言葉に反応が遅れた。どうやら向こうは何も感じていない、ということを確認した彼女は、溜息を一つ吐くと別に心配要らないと続ける。事実、もうベッドに寝ている理由は無いほどに彼女の体調は回復していた。

それを聞いた一夏は顔を綻ばせる。それはよかった、と安堵の溜息を吐いていた。

「箒とセシリアは飲み物買いに行ってるけど、もうすぐ戻ってくるはずだ」

「あー、そっか。二人にも心配掛けちゃったわね」

「おう、よくお礼言っとけよ」

そこで会話は一旦終わり、一夏が剥いたリンゴを彼女の前に差し出す。器用にウサギにされたリンゴを見て、鈴音は思わず笑ってしまった。相変わらずね、とその内一つを手で摘み、口に入れる。程よい酸味と歯ごたえが心地よかった。

そのままリンゴの二つ目に手を伸ばしながら、そういえば、と彼に尋ねた。

「結局、あれって何だったの?」

「そーいや鈴は向こうで戦ってたもんな」

そう言つて一夏は管制室で起きたことの顛末を話す。『亡国機業』と呼ばれる組織のことを話す。一夏達が通信で会話したという、人を馬鹿にしたような乱暴な口調の人物のことを話す。

それが鈴音と通信していた相手の言っていた『責任者』であることに何となく気付いた彼女は、思わず呟いていた。そういうことか、と頷いていた。

「成程ねえ」

「ん? どうかしたのか?」

「何でもないわよ」

確かにそれは計画を失敗させなくなる。あの通信の相手が嫌うのも無理はない。口に出さずにそう納得すると、彼女は思わず笑ってしまった。ざまあみろ、そんな言葉が口から漏れた。

「どうしたんだよ鈴」

「どうしたもこうしたも。散々馬鹿にしてた子供に計画失敗させられたんでしょそいつ。いい気味じゃない」

「……確かに、ざまあみろ、だな」

そう言つて一夏も笑った。そのまま二人でひとしきり笑い合ったタイミングで、医務室の扉が開く。箒とセシリアが、飲み物の入った袋を持ってそこに立っていた。鈴音が起き上がって笑っている姿を見付けると、表情を笑顔に変え小走りで駆け寄ってくる。

「鈴、目が覚めたのか」

「怪我の方は大丈夫ですか?」

「うん、心配掛けてごめんね。でもって、ありがとう」

普段通りの彼女の姿に胸を撫で下ろした二人もそのまま空いている椅子に座る。見舞いされる方一名、見舞いする方三名。計四人になった医務室は、そこで暫く談笑の場へと変化するのだった。

「あ、そうだ。あたしの対戦相手の子は?」

「大丈夫、ちゃんと意識もあるそうだ。念の為暫く入院するらしいがな」

「そっか、良かった。……って、あれ？ クラス対抗戦はどうなったの？」

「終わったぞ。一夏の優勝で」

「ちよ!? 何で!?!」

「鈴さんはあの戦いでダウンしてしまいましたからね。三組代表と一夏さんの試合が決勝扱いになってしまったのですわ」

「そんなあ……」

「まあ、そうやって対抗戦が続けられたのも鈴のおかげさ。だから、もっと胸張れって」

「うん、そりやそうだけど」

「あ、張るほど無いのか」

「死ね！」

アリーナから荷台が出る。そこに乗せられているのは、鈴音が撃破した『ゴーレム』だ。腰以外の部分の破損は比較的少ない為ラボへと持って行き調査を行う、というのがIS学園の出した結論であった。念の為に護衛の教師を一人付けているが、運んでいる大半の人間は樂觀的であった。襲撃など無いであろうと油断していた。

千冬と束がそれを聞いて呆れていたにも拘らず、である。

突如飛来してきた二つの影に、その場にいた全員が一瞬あつけに取られてしまった。そしてその狙いが『ゴーレム』であると分かった途端、護衛の教師は慌てて『ラファール・リヴアイヴ』を駆りその襲撃者を撃退せんと銃を構えた。

それはあまりにも遅い、遅過ぎる行動であった。ヘルムで顔が分からないようになっていいるISを纏った二つの影の内一つ、オレンジに塗装されたISはその時点で既に両手に銃を構えており、教師が引き金を引く前にその機体を蜂の巣にしてしまった。そしてもう一つ、紺碧に塗装されたISはその手に持ったブレードで『ゴーレム』を切り裂いた。原形を留めなくなるほどに切り刻まれたそれは完全に調査

不可能であり、つまりこの二体のISは証拠を消す為にやってきたことに他ならない。

残りの人物達が我に返る頃には、既に鉄くずとなった『ゴーレム』だったものが残っているばかり。

「スコール、任務完了したよ」

『了解。悪いわね、こんな後始末任せちゃって』

空を二つの影が舞う。オレンジと、紺碧。二つのISは並んで飛行しており、その片割れは何者かと通信しているようであった。

「私は元々彼女の補佐だからね。これくらいは当然さ」

『ふふっ、そう言ってくれると助かるわ』

それじゃあ、と通信を切ったオレンジのISのパイロット——デゼールはやれやれと肩を竦めた。八方美人も楽じゃないね、などとぼやいているところを見る限り、先程の会話は本心ではないようである。

「シャル、任務中だ。愚痴は自室で零せ」

そんな『彼』の言葉を咎めるように紺碧のISのパイロットは述べるが、デゼールはそれを笑いがなら受け流す。そして、エム、と相手に声を掛けた。

「任務中はちゃんとコードネームで呼んでね」

「……気のせいだ」

「ふふふっ、もう、マドカったら可愛いんだから」

「くつつくな、飛行の邪魔だ」

「いいじゃない、その程度で墜ちるようなマドカじゃないでしょ?」

「……任務中は、コードネームで——」

マドカのその言葉は、残念でした、というシャルルの言葉で遮られた。さっきの報告でなんて言ったか覚えてるかな、と彼女に尋ねた。

その意味を数瞬考えたマドカは、くつついている『彼』を振りほどくと猛スピードで空を駆ける。シャルルからは見えないが、その顔は真っ赤であった。

「もー、待ってよマドカー」

「うるさいー」

レーダーに映らないオレンジと紺碧の影が、追いかけてこでもするかのごとく空を舞う。

No12 「転校生を紹介します！」

来客を知らせるチャイムの音が響く。その音を聞いた住人の一人、長めな赤毛の髪をした少年は呑気な声を出しながら玄関先まで向かい、そしてその扉を開けた。

そこに立っていたのは一人の少年。赤毛の少年の知り合いだったらしい彼は、「よう、弾」などと言いながら笑顔を見せた。

「一夏あ!? 何でいきなり」

「いきなりとは失敬な。ちゃんと遊びに行くって伝えたぞ」

赤毛の少年の驚いたようなその言葉にさらりと答えた一夏は、二人の会話を聞いて玄関先までやってきた一人の少女を指差した。気合の入ったワンピースに黒いオーバーニーという兄からすればそうそうお眼に掛かれない服装をしていた彼の妹を指差した。そしてそれはもう満面の笑みで言葉が続けた。

「——蘭に」

「俺に言えよ!」

そんな叫びを上げたのは五反田弾、織斑一夏の中学時代からの悪友である。

「で、どうなんだよ」

玄関先で騒ぐのも何だし、という一夏の言葉に従い弾は自分の部屋へと招き入れた。どこかおかしい気もするが、彼等にとっては日常風景なので何の問題もない。

そんな二人が部屋で対戦ゲームをやり始めて暫く経った会話の始めがこれである。一体全体何がどうなのかさっぱり分からない一夏は、弾の言葉に何のこつちやと首を傾げた。

その一夏の行動を見た弾は、とぼけるなど彼を睨む。IS学園での生活の話に決まっているだろうと続けながらゲームで一夏のキャラにトドメを刺した。

「女の園だぞ女の園。絶対ラッキースケベ的な何かがあったに決まっ

てる」

「頭にウジ湧いてんのかお前？」

「湧いてんのはお前だろ！　何か？　まさかこの一ヶ月何も無かったとか言う気か？」

「箒の裸は見たぞ」

「おい」

思わず手を止めてしまった弾に隙ありと一夏はコントローラーを操作した。さっきのお返しとばかりに一夏のキャラが弾のキャラを蜂の巣にする。リザルト画面が映し出される中、画面に目もくれずに二人の少年が胸倉を掴み合っていた。別に剣呑な空気をももし出しているわけではないが、しかし光景としてはいささか物騒なものであるのには間違いない。

「お前篠ノ之と遂にそういう関係になったのかよ！」

「んなわけあるか。あいつと同室だったから、部屋に入ったら着替え中だったんだよ」

「待て」

聞き捨てならない言葉が聞こえた、と弾は一夏の言葉を遮る。彼の記憶が確かならば一夏の幼馴染である篠ノ之箒は女性だったはずだ。それも、中学の時点で素晴らしいプロポーションを誇る美人。そんな少女と同室。そのことを理解した弾は、奇声を発しながら一夏へと飛び掛った。

貴様は全俺を敵に回した。辛うじて理解出来る単語はそれだけであつた。

「落ち着け弾。俺は何もやましいことはしていない！」

「裸見てんだろ！　思い切りやましいわ！」

「事故だ事故！　その後ボディーパーロー食らって蹲った所に追撃のサツカーボールキック鳩尾にねじ込まれたし」

「そりやそうだろ。年頃の女性の裸見たんだ。万死に値する」

一夏が弁明しながら攻撃を回避している内に落ち着いてきたのか、弾はクツションに腰を下ろすとうんうんと頷きながらそう述べた。若干乱れた服を正しながらやれやれと肩を竦めつつ、一夏はそんな彼

に話を続けた。

「そんなアホな会話より、鈴だよ鈴。帰ってきたんだぜ」

「ああ、鈴か。どうなんだあいつ。変わってなかったのか？」

弾の言葉に一夏は暫し考える。言動、行動、そして感触。あの『事件』以来少し歪になつていた節もあつたが、結局のところ彼女は彼女のままであり、今はもう彼の記憶の中にある凰鈴音そのものである。そう結論付けた一夏は、彼の言葉に肯定の頷きを返した。

「そうか、あいつも相変わらずか。それがいいのか悪いのかは分からないが」

「まあ、いい部分もあるし悪い部分もあるって感じだろうな。ぺったんこのままだったし」

「……今、なんつった？」

「鈴の胸は成長してなかった」

「……何で知ってた？」

「え？ そんなもん見りや分かるって。後は……あいつと絡み合ったし」

「死ねええええ！ 一夏ああああ！」

「何でキレてんだよ！ ……あ、いや、違う！ そういう意味じゃない！」

盛大に誤解を招く発言をしてしまったことに気付いた一夏は慌てて修正するが、しかし既に修羅と化した弾を止めるには至らない。狭い部屋で逃げ場も無いこの状況で、彼は修羅の拳を上半身の動きだけで何とか躲す。一歩間違えると直撃コースの紙一重だが、それでも何とか説得を試みながら一夏は避けきつた。

「つまり、戦ってる最中にぶつかって絡まり合った、と」

「そう、そうなんだよ。分かってくれたか弾」

「うんまあお前死ねよ」

「酷え!？」

説得終了し修羅から弾に戻ったものの、結局一夏に掛けられる言葉は一緒であつた。誤解だろうが何だろうが、彼の評価は変わらないようである。がくりと肩を落としながらゲームを再開しようとコント

ローラーを持った彼に、弾は意地悪そうな笑みを浮かべてバンバンと背中を叩いた。

まあ、そんなうらやましい思いをしている一夏にはきつと天罰が下るな。物凄く嬉しそうな顔でそう語る弾の顔を見て、一夏はこいつ本当に俺の親友だろうかと割と本気で頭を悩ませた。

「お引越しです」

そんな弾との会話を、一夏は真耶の唐突な一言を聞いた時に思い出した。あまりにも唐突過ぎて一体何のことか思考が追いつかない。単語も会話の意味も両方分かるのだが、しかし、主語が無い所為で納得する答えが出ないのだ。

「山田先生、いきなり生徒に自身の引越しの手伝いを強要しに現れるのはどうかと」

「違いますよー」

そんな一夏とは裏腹に、同じくその単語の主語を考えていた筈がいち早く答えを導き出していた。が、返ってきた答えは否定。何だ違うのかと頬を掻く彼女を見ながら、一夏はもう一度考えを纏めた。

どうやら山田教諭の引越しではない。となると、この場にいる他の誰かの引越しだと考えるのが妥当であろう。つまり、自分である一夏と、ルームメイトである筈。そのどちらかが引っ越すのだ、という結論を彼は出した。

「いや、ここはあれか。俺と筈の部屋がここじゃない広い場所になる」

「おお、それはいいな。出来れば剣道場が内蔵されている部屋がいい」

「フローリングか。じゃあ先生、そこで」

「そんな場所ありません！　っていうか何でそんなぶつ飛んだ思考になるんですか！」

肩で息をする真耶を眺めつつ、だって先生会話の主語が無かったし、と彼等は平然と述べた。勿論、だからと言って好き勝手な答えを

出してもいいというわけでは無い。

どこか疲れたように溜息を吐いた彼女は、もう一度先程の言葉を発した。今度はちゃんと主語を付けて、である。篠ノ之さんのお引越しです。そう言っただけだとばかりに二人を見た。

「……どうですか?」

「え?」

ところが、そんな真耶の耳に届いたのは純粹な疑問の声であった。その質問を放った張本人、箒は真剣に理由が分からないようで首を傾げている。そんな彼女を見た真耶は、一体何が分からなかったのだろうかとこちらも首を傾げた。

そして一人一夏が取り残された。事情を察した少年だけが取り残された。

「そういや、確か男子生徒専用の部屋を用意するまでの繋ぎって話でしたっけ」

「そうだったのか!」

「何で素でビツクリしてんだお前」

「いや、私は何も聞いていなかったからな」

聞いていなくても、普通男女が一緒の部屋にいるのは駄目だろう。そう説明しようと思った一夏であったが、しかし。目の前の彼女と自分の関係ではこれは当てはまらないのではないかと思ひ直したものだかと首を傾げた。

首を傾げる人間が三人に増えた。

「いやいや。普通に考えて男女が同室っていうのはマズイですよ!」

「男女?」

「そこからなんですか!? 篠ノ之さんと織斑君ですよ!」

「私と一夏が一緒だと、男女が同室?」

「助けてください織斑くうううん!」

「おい箒、いい加減山田先生からかうのはよせ」

「む、そうか」

「わざと!? わざとだったんですか!」

「半分くらいは本気です」

「もういやこの人達！」

涙目になった真耶を見た二人はやり過ぎたと若干反省。ごめんなさいと頭を下げ、なだめ落ち着かせてから話の続きを促した。わざわざ一ヶ月ほど経ってから引越しをさせるのには何の意図があるのか、という疑問の答えもついでに求めた。

「え？」

「元々男子生徒用の部屋の用意をするって話だったんだし、こんなゴールデンウィーク真っ最中になるまでもたつくっていうのも変な話だな、と」

「確かに。部屋の空きを作るだけなら一週間もあれば出来るはずだ」

何より、その頃に遅れて一人入学してきているわけだし。そう続けた箒の言葉に、真耶は一瞬たじろぐ。が、即座に持ち直すとの何のことやらとあからさまに視線を逸らした。一夏から見ても箒から見ても、傍から見ても当然誤魔化せていない。

が、そこを追求していると話が一向に進まない気がしたので、とりあえず二人はもう一度話の続きを促した。

「こほん。というわけで、ここの部屋を男子生徒用の部屋にすることが決定しましたので、篠ノ之さんには別の部屋に移ってもらうことになります」

「……それは、どうしてもですか？」

「え？ はい、そうですね。今回はどうしても、ですね」

普段の彼女らしからぬその質問に一瞬言葉が詰まったが、しかしこればかりは譲れないと真耶は言い張った。それを聞いた箒は悩むように顎に手を当て、そしてチラチラと一夏を見る。その視線の意味に気付いているのかいないのか、向けられている彼は我関せずを貫いていた。

やがて痺れを切らしたのか、箒は一夏に向かって声を掛けた。何だ、と彼女の方を振り向いた彼は、何故かとても嬉しそうな顔をしていた。

「窓側のベッドを、使うのか？」

「当たり前前だろ！ 遂に俺は窓側ベッドを手に入れたぞ！ ひやつ

ほーい！」

一体何の話だろう、と真耶は首を傾げる。彼女が見る限り窓側のベッドは箒が使っているようで、会話を聞く限りでは彼女が引越すので一夏がそこを使うようになるらしい。それだけでここまでテンションが上がるのだろうか、と彼女はどうにも納得がいかなかった。

彼女は知らない。入学初日の号外になった事件の発端は、彼等のだちらかが窓側ベッドを使うかで揉めたからだ、と。

「乙女が一ヶ月使ったベッドを前にして狂喜乱舞するとは、変態だな一夏」

「ああそうさ、俺は変態だ！ 変態で結構だ！」

「そうか、じゃあ早速クラスの皆に伝えよう」

「待ってくださいごめんなさい俺が悪かったです」

「もう何なのこの夫婦漫才……」

何故簡単な連絡事項を伝えに来た筈なのにここまでグダグダになっているのだろう。自身の生贄属性を呪いながら、彼女は見えない空を仰いだ。

ちなみに、引越し自体はとてもスムーズに行われたことをここに記録しておく。

そんな連休も過ぎ、五月七日。再び学園が始まる日である。

一夏も箒もセシリアも、そして違うクラスではあるが鈴音も。それぞれが休みボケを矯正しながら教室に向かって歩いている時の話だ。やつほくとのおんびりした声に振り向くと、そこには簪を引っ張りながらこちらに走ってくる本音の姿が見えた。その後ろにはそんな二人を微笑ましく見守る癒子とナギの姿もある。

総勢八人となった登校風景は、連休中に何が起こったかなどというとりとめない話を交えながら賑やかに過ぎていく。少し変わったものを扱っているとはいえ、彼等彼女等は高校生、まだまだ青春真っ只中なのだ。

そんな会話の中、ふと思いついたように癒子が口を開いた。そういえば、転校生が来るんだって、と。

「転校生？」

「うん、何でもフランスからの留学生だった」

そう続けた癒子だったが、ナギはあれ、と首を傾げた。私が聞いた話だとドイツからの留学生だったけど。そう言うとなんか考えるように空を仰いだ。

「二人なのかな？」

「それは豪勢だな」

「ふーん。つっても、フランスにドイツねえ。セシリア、何か心当たりない？ 代表候補生で専用機持ち、とかでさ」

鈴音の質問にそうですわね、と少し考える素振りを見せた彼女であつたが、しかしゆつくりと首を横に振った。留学してくるような人物に心当たりは無い、そうはつきり言い切った。

「フランスの代表候補生はわたくし達より年齢が上ですし、ドイツの代表候補生は——年齢は問題ないですが、既に職に就いていますし」それ以外で思い付く人物は普通にその国の専門機関に通つてはるはずだ。そう締めくくると肩を竦めた。

「というか、鈴さんの方こそ何か心当たりはないのですか？ 一応専用機持ちの代表候補生ですわよね？」

「鈴に求めても無駄だと思うぞ」

「何でアンタが答えるのよ！ いや、まあ、そうなんだけどさ」

その手の知識はとんと疎い。それを自覚している鈴音はバツの悪そうに頬を掻く。

まあ考えても仕方ない、という結論に達した一行は、出会ってから考えようと教室までの道を歩くのであつた。

「んで、更識さん」

「ふえ!?! な、何!?!」

「いや、更識さんは心当たりないかな、ってな」

とはいえ、それで諦めないのがこの少年である。あまり会話に加わらなかつた代表候補生にして専用機持ちの一人、更識簪をロツクオン

するとそんなことを尋ねた。勿論急に話を振られた簪は若干パニツクに陥り挙動不審に視線を彷徨わせる。暫くそんな動きを続けていたが、やがて少し落ち着いたのか大きく息を吐くとゆっくりと首を振った。

「私も……知らない、かな」

「そつか。代表候補生が知らないってことは、普通に留学生ってことなのか」

「何が普通かは分からないけど……。あ、でも」

ドイツの方は気になる話を聞いた。そう呟くと一斉に視線が彼女の方へと向く。注目されたことで再び慌てて縮こまってしまった簪だったが、本音が皆の視線を散らしたので先程より早く落ち着くことが出来た。

それでも少し恥ずかしさで顔が赤い状態のまま、さつきオルコツトさんが言ってた人なんだけど、と述べた。

「学生を……やる、らしいよ」

「それでは、転校生を紹介します！」

そう言っただけ驚いたかと言わんばかりに胸を張る真耶であったが、一年一組の生徒は特に無反応であった。その光景が彼女は予想外だったのか、若干うろたえつつもそれでは入ってきてください、と教室の外にいる転校生を呼ぶ。

朝一夏達が話している情報はクラス中に広まり、既に転校生が来るという話は周知の事実であった。後はそのフランスの留学生とドイツの留学生とやらがどんな人物か、気になるのはそこだけなのである。だから山田教諭の最初の一言には特に反応を示さなかつたクラスの皆様も、ドアを開けて入ってくる人物には物凄い興味を示していた。

IS学園特有の白を基調とした制服、その服を纏った人物はゆつくりと教壇の隣に立つと、笑顔を浮かべたままゆつくりと会釈をした。

それに合わせて後ろで結んでいる長めの髪が揺れる。

「フランスから来た、シャルル・デュノアです。いきなりの転入で皆さん戸惑われるかもしれませんが、どうかよろしくお願いします」

そう述べた人物——シャルルの着ていた制服の下半身は、女子制服を改造したものとまた違ったタイプのズボン。IS学園の生徒の中でも唯一人だけ着ていた『男子生徒』の制服であった。

そのことに気付いたクラスの生徒達はゆっくりと、その意味を確かめるようにぼつりと呟く。「男子?」、と。

「はい。実はその関係で今回の転入に至ったわけで——」

その辺りで彼の言葉は掻き消された。クラスの女子生徒が発する大音量に、である。何を言っているのか分からない叫びから、何故か神に感謝を始める言葉まで多種多様で、だがそれはほぼ全てがシャルルを歓迎しているものであった。そのことを分かっているのか、彼はその大音量に顔をしかめることなく笑顔のまま佇んでいる。

が、その反応が気に食わない人物も当然いる。うるさい、鬱陶しい。凡そ教師としてどうなのかと思うような言葉でクラスの連中を黙らせると、千冬はシャルルに席に着くよう促した。

「さて、では新しいクラスの仲間も増えたところで——」

「あ、織斑先生質問」

ホームルームを終わる。そう続けようとした千冬の言葉を遮るように、騒いでいなかった男子生徒、一夏は挙げた手をヒラヒラと動かした。その動きを見てあからさまに嫌そうな顔をした千冬であったが、しかし今この場では教師である以上無視するわけにもいかない。何だ織斑、と彼に向かって言葉を返した。

「ドイツの留学生は別のクラスなんですか?」

「……それを聞いてどうする?」

「挨拶に行くに決まってるじゃないですか」

「では、ホームルームを終わる」

「流された!? っていうかそこまで俺に挨拶に行つて欲しくないのかよー!」

一夏の叫びに当たり前だと返した千冬は、どの道今日は無理だぞ、

と机に突っ伏した彼に続けた。向こうでトラブルがあったらしく、二・三日転入が遅れるらしい。それだけ言うと、彼女は今度こそ終わりだと話を打ち切った。

教室を出て行く千冬の姿を目で追いながら、一夏はどことなく腑に落ちない表情で息を吐く。何かを隠しているような、そんな怪しさを感じ取ったのだ。勿論根拠など無い。

「ま、考えてもしょうがないか」

とりあえずは目の前の授業を片付けるとしよう。そんなことを呟きながら彼は今日の一時限目の準備を始めるのであった。

さて、授業が終わって最初の休み時間である。

「君が織斑君、だよね。僕はシャルル・デュノア」

「知ってる。朝聞いたからな」

「あ、う、うん。そうだよね」

にこやかな笑みで話し掛けるシャルルに対して、一夏はぶつきらばうに返事を返す。その態度に少しだけ困ったように眉をひそめると、彼は右手を突き出した。これからよろしく、そう言っただけで再び微笑む。

そんな彼の手を握り返しながら、一夏は真っ直ぐに睨んだ。睨み付けた。明らかに敵意の籠ったその瞳を見たシャルルは、笑みを潜めて目を瞬かせる。何か悪いことをでもしたかな、そう尋ねるが、睨んだ本人は別に何でもないと取り付く島もない。

「一夏、何拗ねているんだ」

「拗ねてない」

「どう見ても拗ねる子供そのものですわ」

「拗ねてない!」

「あー、デュノア君おりむーよりかつこいいもんね」

「やかましいわ!」

言いにくいことをズバリと言っただけの本音に向かってそう叫ぶと、一夏はシャルルに向かって指を突き付けた。ちよつとくらい美形だからっていい気になるなよ、そんなとてつもなく小物なセリフを言

うと、彼は自身の机に突っ伏した。男は顔じゃない、男は顔じゃない、と呪詛のように呟く様はかなり醜い。

「えっと、どうすればいい、のかな？」

「ああ、放っておいていいよ」

「うん、織斑君のいつもの奇行だから」

「は？ え？ 奇行？」

図らずとも当事者となったシャルルは困ったように頬を掻いたが、そんな彼に返ってきた言葉は「気にするな」、であった。癒子とナギを筆頭に一年一組のクラスメイトは軽く流しており、そして煽った張本人である本音も既に何処吹く風で他の誰かと談笑をしている。

成程、これはこういう空気なんだ、と呟いたシャルルは、一夏を視界から外して箒とセシリアに向き直った。これからよろしく、と笑顔で握手を求めると、二人はこちらこそと笑顔で返した。

「誰かツツコミ入れろよ！」

「嫌だ」

「嫌ですわ」

そのタイミングで顔を上げた一夏が叫んだ。そして二人は即座に切り返した。箒はともかく、セシリアもこの一ヶ月で大分染まってきたようである。

不満げに二人を見る彼の顔は先程とは異なり、敵意を含んでいる様子は見られない。そのことに気付いたシャルルは、そういう意味かと手を叩いた。どうやらあの一連の行動は全て冗談だったのだ、と。

となると彼のやることは一つである。

「なんでやねん」

「ズレてる!? けど律儀だ！ デュノア、俺と友達になってくれ！」

どうやら正解だったらしく、一夏は目を輝かせながらシャルルに向かって握手を求めてくる。先程行った行為と同じものであるが、その意味は全く違うそれを彼は快く承諾し、こちらこそよろしくと笑顔を向けた。一夏も同じように笑顔を返す。

「けどよかった。僕嫌われてるかと思っちゃったよ」

「…………マジで？」

「うん」

「え？」

「こつちを見るな馬鹿者。当たり前だろ馬鹿者。もう少し初対面の人物とのノリを考えろ馬鹿者」

「……つまり、語尾が馬鹿者という新たなキャラ付けが秘訣か」

「どうっ」

「おうふ!」

突如始まった一夏と箒のドツキ漫才を見つつ、シャルルは視線を周囲に向けた。特に何の反応も見せていないところを見ると、これもいつもの光景らしい。それを認識した彼は成程、と顎に手を当て頷いた。

そんな彼を見たセシリアは少し意外そうにシャルルを見る。見た目からは考えられない順応性の高さに驚いたのだ。

彼は変わらず微笑を浮かべている。その光景に、彼女は少しだけ引っ掛かりを覚えた。それはほんの些細な違和感で、チャイムの音と同時にすぐに忘れてしまう程度のものであったが、しかし。

「まあ、考えていても仕方ありませんわね」

答えの出ない問題をいつまでも考えているほど好き者ではない。そう結論付けた彼女は席に戻り二時限目の教科書を取り出した。

三時限目は実習である。生徒はそれぞれISスーツに着替え専用のグラウンドに集合しなければならない。学園のほぼ全てを女子が占めている以上、そのための着替えは当然その場——すなわち教室内で行われる。

そしてそれは同時に、男子生徒が追い出されることを意味していた。

「まったく、理不尽だよな」

「いや、当然だと思うよ」

着替えの入ったバッグを担ぎながらぼやく一夏に向かい、シャルルが苦笑しながらそう返す。流石に男子生徒が女子と一緒に着替えた

ら問題だ。そう述べる彼の意見は至極もつともであった。

「そこは男女平等の精神でだな」

「……ひよつとして、織斑君ってスケベなの？」

「ド直球ですね」

そう言いながらも、男は基本皆スケベだと拳を振り上げて豪語する一夏を見て、シャルルは感心するように拍手をした。その建前をまるで用意しない姿勢は凄いい、拍手をしながらそう続けた。

「褒めてるのか貶してんのか分からん」

「褒めてるよ、一応」

「一応かよ」

そのまま取り留めの無い会話をしながら、二人は空いている更衣室までの道を歩く。とはいえ、授業開始まであまり時間は無いので少しだけ足を速めた。

途中物珍しそうに二人を見る女生徒がいたものの、一夏が傍らにいたおかげか包囲されて質問責めに遭うなどということは無かった。この一ヶ月で完全に珍獣扱いが定着した彼が、いい具合に隠れ蓑となつたのだ。

「うし、到ちゃ——って時間ヤバイな」

辿り着いた第二アリーナの更衣室の扉を開け中に入ると、一夏は携帯を見ながらそんな声を挙げた。確かに着替えてグラウンドに向かうとなると余裕はほとんど無い。

手近なロッカーの扉を開くと、彼は急いで制服の上着を脱ぎ捨てた。下着も脱ぎ上半身裸になるとバッグの中のISスーツを取り出して身に付ける。

その過程でふと横を見た彼一夏は、シャルルがまだ着替え始めていることに気付いた。どうした、着替えないのか。そう尋ねても、曖昧に頷くだけで服に手を掛けようとしなない。

「遅れるぞ」

「うん。……その、出来れば着替えを見ないで欲しいんだ」

その言葉にそんなこと当たり前だと一夏は返す。普通に考えて男が男の着替えをジロジロ見る理由はない。

無い、のだが。しかし改めてわざわざ言われるとどうにも気になつてしまうのが織斑一夏という人間である。早い話が捻くれ者である。変人とも言う。

勿論、それがいい方向に転がるとは限らない。

「ひよつとして……何か特別な事情があるのか？」

「うん、まあね……」

そう言うときシャルルは少しだけ迷う素振りを見せた後、自身の制服に手を掛けた。上着の下側を捲り上げると、そのまま腹部辺りが見える状態で動きを止める。これが理由だよ、と彼は肌を一夏に見せた。

「……っ!？」

白磁のようなシャルルの肌、その腹部に遠目でも分かるほどの巨大な傷跡が存在していた。下腹部から上に、胸部辺りまで伸びているそれは痛々しく、しかし古い傷跡であることを感じさせた。

「これが理由。だから僕、あまり人に肌を見られたくないんだ」

そう言つて苦笑したシャルルは、そのまま上着を脱いだ。どうやら捲り上げた服の一番下はISスーツであつたようで、彼の傷跡をすっぽり覆うデザインとなつているようである。そのままズボンを脱ぎ、同じように下に着ていたISスーツのズレを直すと、それじゃあ行こうかと一夏を促す。

ドアに手を掛けたシャルルの背中に、一夏は声を掛けた。ごめん、無神経だった。そう短く述べた一言は、彼の心からの言葉であつた。

「別にいいよ。理由を聞かれるのは慣れてるから」

「それでも、ごめん」

「……真つ直ぐだね、織斑君は」

振り向かずにそう続けたシャルルの声は今までとは違う声色で、しかし次の瞬間には今まで通りの口調と声色で言葉を紡いだ。じゃあ、お詫びというわけじゃないけど。やはり振り向かずにそう続けた。

「僕のことシャルルって呼んでよ」

「だったら、俺も一夏って呼んでくれ」

「分かったよ、一夏」

「おう、シャルル」

そろそろ時間がまづい、という一夏の言葉を皮切りに、二人はそのまま更衣室を出る。この場所から第二グラウンドまで、のんびり歩けば間に合わないが少し急げば充分間に合う。教師に怒られない程度に走りながら、ISスーツ姿の男子生徒二人は目的地まで急いだ。

これなら大丈夫だろう、そんなことを考えていた一夏は、隣に走っている人物の表情など気にしていない。同じように間に合う為に急いでいるのだから、同じような表情だろうと思いついでいる彼は、その顔を確認していない。

先程までの物腰柔らかな少年とは思えないほどに、口を三日月に歪めていたことを。

№13 「友達だからね」

とある建物のとある場所。そこにいた二人の女性の片方は、もう片方の女性に向かって声を掛けた。なあ、スコール、とその女性の名前と思われる名称を呼ぶ。

「どうしたのオータム？ 何か事件？」

「いや、大したことじゃないんだ。少し気になったことがあってな」

「あら、何かしら」

スコールのその返しに、オータムはああと頷いた。今学園に潜入している餓鬼のことなんだが、と続けながら、目の前の机に頬杖を突いた。

「何だつてまた、あんな偽装をしてんだ？」

勿論潜入工作なのだから偽名や偽の戸籍・経歴を用意するのは当然なのだが、しかしそうだとしてもその偽装にはいささか不可解な点が多かった。『彼』のことを快く思っていないオータムですらそう思うほどのだから、その奇妙さは推して知るべしである。

そんな彼女の疑問に、スコールは肩を竦める事で返答とした。口こそしていないが、つまりはそういうことである。

「デュノアの考えは分からないし、別に分かりたくもないのよね」

「違いねえや。大企業のトップだか何だか知らんが、まるで自分が『亡国機業』の実権を握ってるみたいいな態度取りやがるし」

「まるで、ではないわよ。あの男は本当に思ってるの。『亡国機業』の一番勢力の強い派閥は自分だつて、ね」

だから彼は人の忠告など聞く耳持たない。そう続けた彼女の言葉が正しいのは、この会話の発端となった奇妙な偽装を実行に移してしまう現状が如実に示していた。普通ならばまず取ることのない選択肢だが、一人で勝手に選んでいるならばその限りではない、ということだろう。

「……彼にとって不幸なのは、その間違った選択肢を実行出来てしまう実働部隊がいたことかしらね」

「何だスコール、やけにあいつを評価するんだな」

「ええ、まあね。ああいう子は好きなのよ。きつかけさえあればすぐにでも裏切りそうな、何も信じていないような、そんな目をしているから」

きつと素敵な死に方をしてくれるに違いないわ。そう続けたスコールは席を立ち、部屋に備え付けてあったティーポットから紅茶を二つ注いだ。一つをオータムに、そしてもう一つを開け放してある扉の外へと差し出した。

「ほんの冗談よ。だから、そんな殺気を撒き散らすのはやめなさい」

彼女が声を掛けたそこ、二人がいた部屋から壁を隔てた向こう側に立っていた黒髪の少女は短く舌打ちすると視線だけで彼女を睨み付けた。そして、その手に持っていた紅茶を一瞥すると鼻を鳴らす。

「貴様の淹れた紅茶なんぞ飲めん」

「あらそう、それは残念」

差し出していた手を引つ込めると、スコールは再びオータムの対面に座る。持っていた紅茶を一口飲むと、そんなに心配なら、と壁の向こう側に声を掛けた。

「様子を見に行けばいいんじゃない?」

「……別に、心配などしていない」

「あら、そう」

少女の言葉にとぼけたようにそう返したスコールは、そこで会話を打ち切った。そのまま暫しの沈黙が続いたが、彼女が紅茶を飲み終わる辺りで、壁の向こう側で人が移動する気配がする。あらエム、お出かけ? そんなわざとらしい彼女の問い掛けに、エムと呼ばれた少女は吐き捨てるように返した。

「偵察だ」

「そう、行ってらっしゃい」

走り去っていく彼女の気配を感じながら、素直じゃないわね、とスコールは呟いた。

授業も終わり、放課後。一夏の部屋の新たな住人となったシャルルの荷物を運び入れた二人は、ベッドに腰掛けると一息吐く。そこまで運ぶ物もなかった為に案外早く終わったそれは、二人にぼんやりとする空き時間を生み出していた。

「あ、お茶でも飲むか？」

一夏のその言葉にシャルルは頷く。よし任せろと彼は給湯所まで向かい、暫くして二つの湯飲みを持ってきた。中に入っているのは緑色の液体。紛うことなき日本茶である。

それをテーブルに置いてから彼はようやく気付いた。目の前の相手は今までのルームメイトの筈ではなく、日本人ですらないシャルルだということに。

「……紅茶、淹れようか？」

「え？ 別にいいよ、これで」

バツの悪そうに尋ねた一夏とは裏腹に、シャルルは何てことないように返すとそのまま躊躇いなく湯飲みに口を付けた。右手で湯飲みを持ち、左手を底に添えて飲む様は何故か堂に入っており、下手な日本人よりも日本人らしさを感じさせるほどであった。

そんな姿を見た一夏は思わず問う。日本茶を飲んだことがあるのか、と。

「ちよつとね。僕の親友が日本茶を飲んでたから」

「へー」

「だから箸も使えるよ。というか、そうじゃなきゃ日本に来れないし」「そりや凄え」

感心したように述べる一夏を見ながらシャルルは頬を掻く。別にそこまで驚かれることじゃないと思うんだけど、と呟いているが、目の前の彼はそんなことないと腕組みをしながら頷いていた。

「だってセシリア、日本茶飲めないんだぜ」

「……いや、それはただの好みじゃないかな」

「緑色の液体なんか飲めないとか言ってたけど、じゃあメロンソーダも飲めないのかよって話になるじゃねえか」

「一夏？」

「緑色のスープとか、グリーンカレーとか、その辺も食べねえのかよ」
「ねえ一夏？ 僕の話聞こえてる？ とうかそれもう日本関係ないよね？」

「よし決めた。今度セシリアには青汁飲ませてやる」

「それは普通に罰ゲームだよ」

「嫌がるセシリアにこう、青汁を飲ませてだな。涙目で咳き込んで口から溢れる緑の液体が……」

段々と言動が怪しくなってきた一夏をどうしたものかと顎に手を当てて考えるシャルルであつたが、とりあえず自分ではどうしようもないと結論付けた。出会って間もない人間がそう簡単に内面を理解することなど出来はしない。

そろそろ夕食の時間でもあるし、とりあえず彼の中で卑猥なことになつている当の本人にそのことを伝えておこう。そんなことを思いながら彼はゆっくりと部屋を出た。

それを目で追っていた一夏は大きく息を吐いた。念の為、と部屋のドアを開け誰かが来る心配がないことを確認すると、彼はカバンから一枚の紙を取り出す。書いてある内容は実に単純で、放課後にどここの場所で待っています、というもの。

「ラブレター……な、わけないよなあ」

出来ればそれが一番楽なのだけど、とぼやきながら、一夏は立ち上がる。時間の指定はされていないが、放課後というからには今の時間帯では少し遅いであろう。となれば、これからその場所に向かった場合、本当にラブレターだったならばまず相手は怒って帰っていることになる。

ここでその可能性だった時は誰かに慰めてもらおうなどと思いつながら、一夏はなるべく人目に付かないようにその場所まで急いだ。

「到着、つと」

キョロキョロと辺りを見渡すが、それらしき人は何処にもいない。

これはひよつとして低い方の可能性にぶち当たってしまったのか、などと一夏が頭を抱えかけたその時である。彼の背後で何か動く気配がした。それと同時に、遅かったじゃねえか、などという乱

暴な口調の女性の声が耳に届く。

その声には聞き覚えがあった。クラス対抗戦で散々聞いた、あの耳障りな声だ。『亡国機業』の構成員の声だ。

「まあ、とりあえずは。……ラブレターじゃなくてホツとした、ってか」

勢い良く後ろを振り向く。そこに立っていたのは、やはり彼の中で見覚えのある影が一つ。

鈴音が戦っていたIS『ゴーレム』がそこにいた。どうやら声はそのISから発せられているようであったが、しかし。搭乗者の通信とはまた違うように一夏は感じた。

「しかしまた唐突だな」

『はっは。まあそういきり立つなって。今回もただの実験なんだからよ』

その言葉で落ち着くのはお前だけだ。そんなことを言いながら、一夏は右手のガントレットに手を掛ける。いつでもISを展開出来るように身構える。

そんな一夏を見た相手は、嬉しそうな声で笑った。そういう態度を取ってくれるならば話は早い。そう続けながら笑った。

『こないだの戦闘データでAIが新型になったからな。お礼も兼ねて『しののの』の機体を強奪してやろうって腹積りさ。その後は学園で暴れてもいいかもな』

「はた迷惑にも程だな」

『白式』を展開、『雷轟』のビームガンとシールドを呼び出し、銃口を目の前の『ゴーレム』へと向けた。一夏がその行動を取っても尚、相手は通信の向こうで笑い続けている。

それが彼には気に入らない。躊躇うことなく頭部と胸部へビームガンを連射した。躲されることなく命中したそれだが、しかしそれで機能が停止するはずもなく、揺らぐことなく『ゴーレム』は佇んでいた。

『その程度の攻撃で『ゴーレム』が揺らぐとも思ってたのか?』『思ってたねえよ。こんなもんだだの牽制だ、っての!』

盾を仕舞い、左手にビームガンを持ち替えると、一夏はスラスタを吹かし一気に『ゴーレム』へと肉薄した。右手には既にビームブレードを構えており、それを見た限り装甲がそこまで厚くない部分、胴へと斬撃を叩き込む。

だが、しかし。確かに振り切ったはずのその手応えはとても重く、まるで木の棒でアスファルトを殴りつけたかのごとく彼の右手を痺れさせた。思わず顔をしかめ、相手のカウンターが来る前に左手のビームガンを打ちながら距離を取る。

『人の話を聞かない餓鬼だな。その程度の攻撃じゃ揺らがねえつつつてんだろ』

「ちっ……。硬いって言っても限度あんだろ」

向こうの見下したような笑いと共に発せられたその声へと小さくぼやきつつ、さてではどうしようかと思考を巡らせた。少なくとも『雷轟』の装備しているような基本装備では装甲を打ち抜けない。となると必然的に『真雪』か『飛泉』に換装して戦う必要がある。

この場合は砲撃で攻めた方がいいだろうと判断した一夏は『真雪』に換装、両手でビームランチャーを構えると目の前の相手に向かって引き金を引こうとした。

そのタイミングで、『ゴーレム』からの通信が響いた。そんな物騒なものをぶつ放してもいいのか、と。

「……どういう意味だ？」

『そのまんまの意味さ。ここはアリーナでも何でもないただ人気のない広い空間ってだけだぜ？ 辺りに被害がないかどうか確認してから撃つ方がいいんじゃないのか？』

その言葉に一夏は動きを止めた。勿論向こうの言葉が自身の動揺を誘う為のブラフである可能性も考えてはいる。いるのだが、それでも流れ弾がもし誰か人に当たってしまったとしたら。それが頭に浮かんだ為に、彼は射撃武装を使う気にはなれなかった。

この場に千冬か束がいたのならばこの葛藤もどうにかしてくれたのかもしれない。だが、生憎と今は一夏一人のみ。恐らく向こうもそのことを見越してわざわざ呼び出したのだろう。そんなことを思い

ながら、彼は『真雪』を『飛泉』に換装し直した。

『お、人の忠告を素直に受けたか。感心感心』

「うるせえ。いいからとつとケリを着けるぞ」

言葉と共に『ゴーレム』に両の手の太刀を振り下ろす。『雷轟』時のビームブレードでは防御もせずそのまま受けていたその斬撃をスラスターを吹かすことで躲した『ゴーレム』は、重装甲の右腕を太刀を振り切った体勢の一夏に向かって振り上げた。

体を少しずらすことで彼はそれを避けると、その勢いを利用して胴体部分へと突きを放った。手応えはそこまで感じなかったものの、それでも最初のように全く通じていないということはない。そんな確信を一夏は持った。

『チツ。思ったより鬱陶しい餓鬼だ』

「そりやどうも」

言いながら一夏は出来るだけ近距離を保とうと太刀を持っている手に力を込めた。彼の記憶が確かならば、『ゴーレム』は遠距離攻撃用の装備が主であり近距離での選択肢は拳で殴るくらいしか出来なかったはず。大振りの攻撃であれば躲すことは容易く、また射撃を放たれて周囲に被害を撒き散らされても困る。そう判断したが故の行動であった。

だが、それは『ゴーレム』の右掌が淡く光ったことにより打ち砕かれる。咄嗟に体を捻って躲したが、そこには確かにビームで構成された爪が現れていた。どうやら伸縮自在らしく、その攻撃は一夏に間合いを読ませない。元々防御力の低い『飛泉』であったことも相まって、肩口と右膝の装甲に爪痕が刻まれる。

小さく舌打ちすると、一夏は間合いを話す為にスラスターを逆噴射させた。それを読んでいたかのごとく、『ゴーレム』は右手の爪を仕舞い掌からビームを放つ。完全に虚を突かれたタイミングとなったが、半ば無意識の内に『飛泉』を『真雪』に換装していたおかげで致命傷は避けられた。

肩で息をする一夏に対し、相手は楽しそうに笑う。目の前の彼を嘲笑う。

『バーカ。これがあの時と同じ『ゴーレム』だと思ってるのか？ あの時の遠距離武装タイプのR型、こっちは近距離用の装備が搭載されたD型だ』

同じように戦ったら痛い目見るぜ。殆ど言っていることが聞き取れないほどに笑い声を混じらせたままそう述べると、『ゴーレム』は一夏に向かってスラストを吹かした。その右手には先程と同じようにビームクローが輝いている。

一夏は『真雪』のビームキャノンで迎撃しようと銃口を向けたが、しかし先程の会話が頭に浮かび引き金は引けない。悪態を吐きながらミサイルポッドで弾幕を形成しつつ相手のビームクローの軌跡を確認する。『真雪』の機動性能は高くない。だから、回避をするためには『雷轟』か『飛泉』のどちらかに換装をしなければいけない。だが、『雷轟』では反撃がままならない。彼らしくなく頭でそう判断して『飛泉』へと換装した一夏であったが、生憎とそれは悪手。右手のビームクローを機体の移動と太刀で防いだそこに、同じように左手に形成されたビームクローが襲い掛かった。

完全にカウンターとなったその斬撃は、『白式』の装甲を深く抉る。『飛泉』であったことも災いし、『絶対防御』が発動、そのまま地面に叩き付けられた一夏は短く呻いた。シールドエネルギーの残量が大幅に削られ、コンソールはこれ以上の攻撃を受けると危険であると警告を発してくる。試合ならばともかく、今の状況ではそうなった時が彼の人生の幕引きであろう。

そして、その幕は既に降りかけていた。

『意外とあつけなかつたなあ』

「ち、くしょ……」

既に両腕のビームクローは振り上げられている。体勢の崩れている一夏が何か行動を起こしたタイミングで、あるいは任意に、目の前の相手はその爪を彼の急所に突き立てる。詰み、チェックメイト、ゲームオーバー。そんな言葉が頭に浮かんだ。

『あばよ、唯一の男パイロット』

『ゴーレム』の攻撃タイミングと一夏の右腕を動かすタイミングは

ほぼ同時だった。勿論彼の一撃は敵を打倒するに至らない。振り下ろされる爪の勢いは殺がれない。

そんな確実に死に体となった彼と『ゴーレム』の真ん中。そこに、丸い、俗称をパイナップルと呼ばれる物体が割り込んだ。

爪が届くその前に、それは弾け、閃光と細かい粒子をばら撒く。それがセンサー類を妨害するものだ。一夏が気付いたのは、確実に命中していたはずの斬撃を躲せたからであった。コンソールからはハイパーセンサーが一時的に使用不可になっていることを彼に伝える。

『何だこりゃ? ……チャフか』

それは向こうも同じなのか、『ゴーレム』は目標を見失ったようにキョロキョロと辺りを見渡していた。AI制御であるが故に、ハイパーセンサーで視覚情報を全て賄っていたのだろう。

そんな相手の背後。そこに、一体のISを纏った影があった。オレンジに塗装されたそれは、機動性と加速性を高め、武装をふんだんに装備した『ラファール・リヴァイヴ』の専用カスタム機。通称、『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』。

チャフグレネードを投げ、右手にIS用アサルトライフルを構えたシャルル・デュノアの姿がそこにあつた。

「一夏、大丈夫?」

「シャルル!? 何で?」

突然の乱入者に心底驚いた表情の一夏と対照に、乱入したほうであるシャルルは涼しい顔で笑顔を浮かべた。捜したんだよ、などと呑気に続けるその姿に、彼は先程まで死に掛けていたことも忘れ頬を掻く。

『何だデメエ?』

「何だって言われても。そこの一夏のルームメイトだよ」

言いながら右手のアサルトライフルを連射する。有効的なダメージを与えられることは出来ていないようであったが、膝関節を集中的に狙ったことで僅かに『ゴーレム』がたたらを踏む。その隙にスラス

ターを吹かすと、シャルルは一夏の隣に並ぶように移動した。

「二夏の様子がおかしかったから、気になつて捜してたんだ」

そう言つて微笑むシャルルを見て、一夏は首を傾げた。確かに隠し事をしていたのは事実だが、出会つて一日も経つていない人物に見抜かれるほど挙動不審であつたのだろうか、と。

一瞬思考の海に浮かびそうだった頭を振った。そんなことは後で考えればいい。そう結論付けて一夏は残り少ないエネルギーを確認しつつ『飛泉』の太刀を構えた。

「悪い、シャルル。協力してくれるか？」

「当然。友達だからね」

顔を見合わせて笑い合うと、二人は両手に展開していたビームクローを右手のみに変更した『ゴーレム』を睨んだ。チャフの効果は薄れてきたようで、再び視線は彼等に向いている。先程の嘲笑うような声は鳴りを潜め、苛立ったような口調が響く。

先に動いたのは『ゴーレム』。爪を戻した左手からビームを放ち二人を分断させた。躲したことにより飛び去つていくビームの行方を一瞬気にした一夏に向かい、『ゴーレム』は肉薄する。隙を晒したことともそうであるが、まずは倒しやすい方から倒す。当然の選択を取つたと思われるそれは、側面からの衝撃により失敗に終わった。ハイパーセンサーでそこを確認すると、左右にIS用のショットガンを構えたシャルルが不敵な笑みを浮かべていた。

「二夏っ！ サポートは任せて！」

「サンキューー！ 助かる！」

言葉と同時にショットガンが火を噴く。相手を吹き飛ばすことを目的とされたそれが与える衝撃は、相手が『ゴーレム』であれ例外ではない。流石に吹き飛ばすことは適わないようであつたが、しかし確実に体勢は崩れる。その隙を逃さずに、一夏は両の手の太刀を十字に振るつた。

崩れた体勢のまま、『ゴーレム』はビームクローでその斬撃を受け止める。刃と刃がぶつかり合い、エネルギーの奔流は火花を生み出した。

「くなくそお！」

無理矢理にスラスターを吹かすと、一夏はビームクローを展開している『ゴーレム』の右手を蹴り上げる。通常時であればビクともしないであろうその一撃だが、攻撃をぶつけ合っている今なら話は別である。均衡を崩された『ゴーレム』の体は大きく泳ぎ、そこに大きく隙を晒す。蹴りを放った状態のまま体を捻ることで勢いを付けると、彼はもう一撃、と斬撃を繰り出した。これまで大したダメージを受けていなかった『ゴーレム』に傷跡が刻まれ、そして盛大に吹き飛ばされた。

更に追撃とばかりに一夏は『瞬時加速』で吹き飛んだ『ゴーレム』に迫る。だが、相手が人間であったならばそのまま攻撃を受けていたかもしれないが、生憎と相手は機械。明らかに人間ではありえない挙動で両手のビームクローを展開すると、人間ならば間接がへし折れるような動きで突っ込んでくる一夏の側頭部に爪を突き立てる。突き立てようとする。

もしこれが先程までの一対一であったのなら決まっていたであろう、そんな攻撃。だが、しかし。

「やらせない！」

いつの間にか間に割り込んでいたシャルルの『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』の左手の盾と近接ブレードにより防がれる。同時に右手に持っていたアサルトカノンゼロ距離で叩き込むと、後は任せたとばかりに横へと飛び退いた。射撃は正確に一夏が切り裂いた傷に命中しており、『ゴーレム』からは短く火花が飛ぶ。

信頼か、はたまた別の理由か。そうなることを予測していたかのようには、一夏は動きを止めることなくその手の刃を目の前の相手に振り抜いた。頑丈な装甲といえども、こう何度も攻撃を食らっているには流石に限界がやってくる。右腕が切り飛ばされ、ビームクローが展開された無骨なそれが宙を舞う。

だがそれでも、相手は痛みを感じない機械だ。動じることなく残った左腕を太刀を振り抜いている一夏に向かって振り下ろした。嫌な予感がしていた、と彼はすぐさま『雷轟』に換装すると盾でその一撃

を防ぐ。が、衝撃を完全に殺せず上半身が後ろに弾かれた。

『この糞餓鬼共が。手こずらせるんじゃない——』

『ゴーレム』からそんな言葉が響いてきたが、一夏は碌に聞いていなかった。言葉と同時に残った左腕のビームクローが収束されて一本の刃となり彼の額を貫こうとしていることなど、全く見ていなかった。死ぬ、という言葉が目の前から発せられていても、一夏は微塵も動揺していなかった。

何故ならば——

「狙いは？」

「——完璧！」

背後に回っていたシャルルが、必殺の一撃を『ゴーレム』の中心に叩き込んでいたのだから。

「派手にやっちゃったなあ」

「あはは。ちよつとやり過ぎたかな？」

二人の目の前には動かなくなった『ゴーレム』の残骸が横たわっている。右腕は千切れ飛び、その胴部分には巨大な穴が開いている。そんな回収して解析を行うにはいささか無理のある状態になっている。それを見ながら、二人はどうしたものかと頬を掻いた。

「まあ、仕方ないんじゃないかな？ 正当防衛だよ」

「いや、それはそうなんだけど」

済んでしまったことは仕方がない、というシャルルに対し、一夏は少しバツの悪そうな表情を浮かべる。前回の『ゴーレム』は回収時に襲撃を受け解析不能な状態にされたという話を聞いていたので、今回も同じ状態にしてしまったのは何だか悪いことのように思ってしまったのだ。

とはいえ、そんな事情をシャルルが知るはずもないかと思いついた彼は、同じように仕方がないと割り切ることにした。よし、と頬を叩くともう一度鉄屑となった『ゴーレム』を見下ろす。

「しっかし、凄いなシャルルのアレ」

『盾殺し（シールド・ピアース）』のこと？ まあね」

少し自慢げに微笑むと、シャルルは盾がはじけ飛びむき出しとなった左手の武器、パイルバンカーを眼前に掲げた。一度の射出で三発分の威力を叩き出すように調整されたその威力は『ゴーレム』の風穴が証明している。

ただ、その分反動も大きいから注意が必要なんだよ、とシャルルは続けた。確かに装甲がはじけ飛んだ左腕は攻撃を食らったわけでもないのにボロボロになっており、彼の機体である『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』の隠し玉であったことを予測させた。

そんな会話をしていた二人であったが、何か重大なことを思い出したかのようになんとも間抜けな音が一夏の腹から発せられた。時刻はそろそろ夕食の時間帯である。

「……飯、食いに行くか」

「あはは。そうだね」

二人はそれぞれISを解除、一夏はとりあえず千冬に簡単な連絡だけを済ませると、先程まで命の掛かった戦闘を行っていたとは思えない気軽さで歩みを進めるのであった。

一夏は気付かない。前に同じようなことを経験した彼ならばともかく、普通の留学生であるはずのシャルルが何故そんな態度が取れるのかを。

一夏は気付かない。何故、シャルルは解析出来ないほど念入りに『ゴーレム』を破壊したのかを。

一夏は気付かない。シャルルの笑みが、作戦を成功させたようなものであったことを。

上空で二人の様子を見ていた少女は、安心するように息を吐いた。どうやらシャルルに怪我をした様子はない。もう一人の男は死に掛けているが、彼女には別段関係ないことであった。

否、彼女にとってむしろあの男は死んだ方が清々するほどである。

姉共々、彼女にとって『織斑』という存在は決して良いものではなかった。例えば自分の名前がそうであっても、である。

とはいえ、現状何かをするつもりはない為、そのまま去っていく背中を見ただけで彼女は済ませた。隣で親友が作戦行動中であつたことも大きい。

そのまま踵を返そうとした彼女であつたが、通信が入つたことでその動きを止めた。

『そっちの様子はどうかしら？ エム』

「問題ない。デゼールも無事に織斑一夏の信頼を得たようだ」

『そう、それは良かったわ』

何せわざわざ倒される為に『ゴーレム』を派遣したのだから。そう言つて通信の向こうのスコールは笑う。それに混じつてオータムの不満げな声も聞こえてきたが、彼女はそれを意図的に無視した。

『それで、どうするの？』

「……どうする、とは？」

そのまま帰還しろ、と言われると思つていたエムは訝しげにそう返す。ここで自分に何か選択肢が与えられていることなどないはずだ。そう思い彼女は首を傾げた。

だが、そんな疑問は次の言葉で氷解する。そして、新たな疑問が頭を占めた。

『織斑一夏と、戦いたいのでしょう？』

「……」

『あら？ 違つたかしら？』

違う。そう答えたかつたが、何故かそれは口から出てこなかつた。今は何かをすることはないと結論付けていたものの、心の底では望んでいたのかと自身に問いかける。問いかけても、その答えは出なかつた。

そんな彼女の心情を知っているのか、通信の向こうではクスクスと笑い声が聞こえる。

『まあいいわ。それについてはどっちでもいいのよ。貴女がやりたくなつたらやってちょうだい』

「……了解した」

そこで通信は途切れる。再び静かになった空中で、エムは一人佇んでいた。

とりあえず、このモヤモヤをぶつける相手を用意しなくては。そんなことを自分に言い聞かせて、彼女は『個人間秘匿通信』を繋いだ。

「シヤル」

『あれ？ マドカ？ どうしたの？』

「……少し、愚痴に付き合え」

『いいよ。いくらでも付き合う。親友だからね』

No14 「お前が嫌いだ」

まだ一夏達が中学生であった頃。織斑千冬と篠ノ之束はドイツに暫しの間滞在していた。

第二回モンド・グロツソ。その最中に起きた誘拐事件の被害者が彼女達『しののの』関係者であり、そして本来行っではいけない無断IS展開をして大暴れをしたのも『しののの』関係者であった。結果としてその被害者である凰鈴音は無事に保護され誘拐犯も逮捕されたのであるが、いかんせんそれで違反が見逃されるはずもなく。

結局、それらは開催国であるドイツが許可を出していたと発表したことで事なきを得た。とはいえ、自由が売りである『しののの』としては、一国に借りが出来てしまったということは由々しき事態。そこでその借りをさっさと清算すべく、代表である二人はドイツの要請により足を運んだのだ。

「それで、私達の手を借りたい相手というのは？」

ドイツの軍人らしき人物に案内されながら、千冬はそう問うた。精々がドイツのISパイロット育成くらいに思っていた彼女達が受けた依頼が、「あるISパイロットの撃退」であったからだ。その胡散臭さは、千冬でなくとも聞きたくなくなるであろう。事実、隣の束もうんうんと頷いている。

対する案内者はその質問に振り向くことなく、詳しいことを聞かずにここまで来たのかと、口調こそ丁寧であるが非難するように返した。どうやら彼女達を案内している女性はあまりこちらにいい印象を持っていないようである。短い言葉のやり取りでそのことを察した千冬は、すまないと見えていないであろう相手に向かい頭を下げた。ここで無理に反論をして情報を聞けないのでは何にもならない。

「年齢は十三・四ほどの少女です」

向こうもそんな千冬の状態に噛み付いてもしょうがないと思ったのか、短く溜息を吐くとそう言葉を紡いだ。若い、というよりもまだ子供。その言葉を聞いてまず抱いた印象がそれであった。千冬の弟である一夏、束の妹である箒が年齢的に合致するが、そんな程度の少

女がどうしてそこまで脅威と見られているのか。そう首を傾げる千冬に、女性は振り向くことなく言葉を続けた。

VTシステムというものをご存知ですか、と。

「……知らんな。何だそれは？」

「正式名称、『ヴァルキリー・トレース・システム』。読んで字の如く、モンド・グロツソの部門受賞者、通称ヴァルキリーの動きを模倣するシステムです」

女性は淡々と言葉を紡ぐ。そこに感情らしきものは感じ取れず、事務的に機械的に言葉を続けている。

「ただそれだけならばシステムの説明としては極々ありふれたものですが、『彼女』に積まれているものは、文字通り次元が違う」

体の内部に、遺伝子にそれを組み込まれているのだから。そこまで言うと、女性は足を止めて振り向いた。その目は、自分の無力さに打ちひしがれているような、その相手のことを想っているような、そんな目をしていた。

『彼女』は、それを自分の技術として昇華し、それを振るう。ただ、それだけの戦闘マシーンに改造されています。相手を傷付け、壊し、殺す。それが『彼女』の全てで、生きている意味で……あんな、あんな年端も行かない少女が！」

語気を荒げた女性は、拳を壁に叩き付けた。施設が揺れるかと思うほどの轟音が響き、そして壁と拳から赤い液体がうっすらとにじむ。

それを見て、千冬は納得が行った。何故彼女が最初の質問に不機嫌であったのか、何故淡々と説明しようとしていたのか。

「すまない。私はどうやら相当無神経だったようだ」

「……理解していただけましたか」

「ああ。現在教職課程を取っているところだが、それに気付けたのが教員免許を取った後でなくて良かった」

「……学生……なのですか？」

『しののの』のおかげで大分サボり気味だがな」

面食らったような女性に向かって千冬は笑いかけた。そしてそのままさあ行こうと止まっていた足を動かす。それにつられるように

女性も再び歩みを進めた。

やがて一行は一つの扉に辿り着く。物々しい雰囲気を纏ったそれは、中のものを守るといふよりも、中のものを外に出さないように封印しているといった方が正しい気がした。この中です、という女性の言葉に納得したように頷くと、千冬はロックの外れる音がした扉の前に立つ。

開放されたそこに入る直前、そういえば、と千冬は隣の女性に目を向けた。貴女の名前を聞いてなかった。そう言って不敵に笑った。

「クラリツサ。クラリツサ・ハルフォーフです」

女性——クラリツサは短くそう述べると、ご武運を、と続けた。それを聞いた千冬はありがとうと返し、そんなやり取りを面白そうに見ていた束を伴って部屋へと足を踏み入れる。

ただっ広い空間に、ぽつりと。真っ赤に染まった鎧を——ISを纏った銀髪の少女の姿があった。その金色の瞳は千冬を捉えると細められ、その口には愉悅の笑みが浮かぶ。新しい獲物が来た、そんなことを思っているのは想像に難くない。事実、少女はゆつくりと体を起こし、その手にブレードを呼び出していた。

「やれやれ、挨拶もなしにいきなり戦闘か。最近の小娘はせっかちなな」

言いながら千冬は首のチョーカーを一撫でする。ISはまだ展開しない。隣に立つ束に目配せするのみだ。

少女が一步踏み出した。ブレードを振り上げ、そのまま斬撃を目の前の獲物にお見舞いするつもりなのだろう。その太刀筋は鋭く、一足目に閃き、二手目に断つ。千冬も良く知る『一閃二断』だ。

「……トレース、という言葉に騙されるところだったな。成程、これは中々」

倒し甲斐がある。『暮桜』を展開した千冬がそれを受け止めながら面白そうに笑った。それはまるで、目の前の彼女と同じようで、獲物を見付けた猛獣のようで。

数年後に弟がするような、プレゼントを貰った子供のよう。嬉しそうに笑った。

「行くぞ小娘。……いや、小娘じゃ味気ないか。私は織斑千冬、お前の名前は？」

「ふん。今から死ぬ相手に名乗る必要などあるのか？」

「大層な自信だ。ではこう返してやろう。墓に刻む名前は名無しでいいんだな？」

相手の負けるとは微塵も思っていないその態度に返答するように、彼女もまた負けると微塵も思っていない態度で返す。それを受けた少女は、どこかつまらなさそうに舌打ちをした。自信家など今まで何度も屠ってきた、どうせこれも同じような者だろう、と。

そう判断し、どこか投げやりに自身の名を名乗る。

「……ラウラ」

「そうか。よしラウラ、掛かって来い。お前が私の生徒第一号だ」

「生徒？」

「ああ、そうだ。私の教師生活の第一歩。私を……織斑先生と呼べ！」

「……馬鹿なのか？」

「あ、うん。ちーちゃんの本質は割とバカだよ」

「やかましい！」

千冬とラウラ、二人の剣が何も無い部屋の真ん中でぶつかり合った。

「それでは、転——」

「あ、先生。そういうのいいんで早く紹介してください」

言葉の途中でぼつさりと切られた真耶はガクリと膝を付く。だが、これもどうせいつものことだと気を取り直すと立ち上がって、教室の外にいる生徒に入るよう促した。蛇足だが、いつものことだと思ってしまう彼女のその姿がいたたまれなくて、千冬はそつと目を逸らした。

小柄な少女だった。輝くような銀髪は、ただ伸ばしているだけであるのにそれが正しい姿に思えてくるほどで。左目に着けている眼帯

が印象的な、赤い目をしたその少女は、姿勢を崩すことなく真つ直ぐ立ったまま口を開いた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

簡潔に、唯一言自身の名前を述べるのみ。それきり口を開く様子の無い少女——ラウラをクラスの面々は怪訝な顔で見詰め続ける。そんな視線を受けたまま立ち続けていた彼女は、視線を横に向けた。いきなり視線を向けられた対象である真耶は、教師の態度としていささか疑問になるほどおっかなびつくり尋ねる。どうかしましたか、と。「他に何か必要なのですか？」

「え？ ……えーっと、好きなもの、嫌いなもの、とか。そういうのを加えると、いいんじゃないでしょうかね」

「了解」

凡そ生徒と教師の会話らしくないそんなものを終えると、ラウラは再び真つ直ぐにクラスの面々を見詰める。好きなものと嫌いなものと小声で呟くと、改めて口を開いた。

「好きなもの、というのは特に思い付かない。嫌いなものは——」

言いながら、視線をクラス全員から一人の生徒に移動させた。最前列で自身の自己紹介を聞いている一人の男子生徒へと、である。

「織斑一夏だ」

「は？」

真つ直ぐに目を見ながら堂々と宣言されたその張本人は、思わず素っ頓狂な声を挙げた。それも無理はない。いきなり初対面の人間から嫌いなものとして自分の名前を挙げられればそうもなろう。

だが、彼女はどうかやらその声を聞こえていなかったと判断したらしい。やれやれ、と肩を竦めると、教壇横から一步踏み出し最前列の席のすぐ目の前に、一夏の目の前に移動した。そして、もう一度口を開く。

「聞こえていなかったならもう一度言うぞ。私は、お前が嫌いだ。織斑一夏」

「一回目で聞こえてるっつもの！ 二回言うな！ 傷付くだろう！」

「む、そうか。それはすまなかった」

それだけを告げると、ラウラは自分に割り当てられた席へと歩いていく。平然とした表情で席に座ると、何事も無かったかのように持っていたカバンを開け授業の準備をし始めた。

そして一人、何だか分からない状況のまま固まっている一夏が残された。

「よし、ではホームルームを終わる」

「よくねえよー！」

勿論、彼の抗議は無視された。

「ラウラ・ボーデヴィツヒいい！」

「別に叫ばずとも声は聞こえている」

昼休み。色々と我慢の限界に達した一夏は直接対決に躍り出た。カバンからバランス栄養食を取り出して齧っているラウラに向かい、クラスではお馴染みとなったテンションで叫ぶ。だが、目の前の少女は今日この学園に来たばかり。そんな態度は何処吹く風で流し、カバンから取り出したスポーツドリンクで喉を潤していた。

「すまんなボーデヴィツヒ。こいつは頭がアレだからな」

「申し訳ありませんわボーデヴィツヒさん。彼は少し頭がアレですの
で」

追い討ち、とばかりにやってきた箒とセシリアが続ける。加えるとその言葉に残っていたクラスメイト全員が頷いていた為、一夏はその場で体育座りをして床に『の』の字を書き始めた。勿論クラスメイトはスルーした。

「それで、ボーデヴィツヒ。せっかくだから、私達と一緒に昼食でもどうだ？」

「ええ。まずは飲食を共にすることが友人への第一歩ですわ」

二人からの誘い。それを聞いたラウラは数瞬だけ迷ったが、カバンへバランス栄養食を仕舞うとでは行こうと立ち上がった。そんな彼女に合わせるように、教室に残っていたクラスメイトが我も我もとそれに続く。

結局、殆どのクラスメイトが食堂へと向かうことになった。いないのは既に食堂や別の場所で昼食を取っている者くらい。後は体育座りで拗ねている男子生徒が一名。

「織斑一夏」

「ん？」

「お前は、来ないのか？」

さて行こうと皆が言う中、少し待ってくれと述べたラウラが取った行動がこれであった。自身で嫌いだと公言したはずの人物、織斑一夏を誘ったのだ。誘われた本人も目を丸くして彼女の顔を見詰めている。

「どうした？」

「いや、お前俺のこと嫌いなんじゃないのかよ」

「嫌いだぞ」

だが、それとクラスメイトとして交流しないのは別だ。迷うことなくそう言い切ったラウラの顔に嘘偽りは全くない。本気でそう思っているのだ、ということを理解した一夏は、立ち上がって食堂に向かう集団の中に加わった。その表情は何とも言えない複雑なものであったが。

「人として色々負けてるな一夏」

「言うな、凹むから」

箒のからかいにそう返す彼を、セシリアは大丈夫ですわと慰めた。彼女は元々学生ではなく、社会に出ていた人物なのだから。そう続けた。

「あー、そーいやそんなこと言ってたっけ」

「ええ。確か、軍に所属していたはずですわ」

「軍人？ 軍人というと——」

「あれか、語尾にサーを付けろとかさそういう」

「とりあえず一夏の知識が偏ってることは分かったよ」

見守っていたただけだったシャルルは、そろそろツツコミ役がないといけないだろうとここで会話に参加する。彼の登場で、セシリアが少し安堵したように見えた。

では続きを、とシャルルが目配せすると、彼女はコクリと頷いて話を続けた。ドイツのIS部隊『シュヴァルツエア・ハーゼ』の隊長。それが彼女の肩書きだった、と。

そこまで話したところで、箒がふと疑問の声を挙げた。軍隊にIS部隊というのは、アラスカ条約的におかしいのではないか、と。

「別に直接的な戦争行為に使われなければ違反はしないはずだよ」

そんな疑問に答えたのはシャルル。隣ではセシリアもうんうんと頷いている。実際に日本でもIS自衛隊というものがあるはずだ、と続けた。

半ば屁理屈なのだろうが、攻めないのならば問題ない、ということなのだろう。

「少し、訂正がある」

そんな四人の会話に口を挟んだのは、話題の張本人であるラウラだった。過去形ではなく、現在進行形だ。それだけを告げると、再びクラスメイトの質問攻めに戻っていった。

その言葉の意味を理解するのに若干時間が掛かった一夏であったが、成程、と納得したように頷いた。つまりは、まだ彼女は軍に所属『している』のだ。

「……何で学生やってんだ？」

「そう言うが、私達も明確に学生がやりたい理由などないからな。やりたいからやる。そんなもんだらう」

「そんなもんかね」

箒の言葉にそう返しながら、一夏はクラスメイトに囲まれている小柄な少女を眺めた。自分のことを嫌っていると公言した少女。自分よりどこか大人の雰囲気を感じているように思える少女。

そして、どこことなく、自身の姉に似ている気がする少女。その後姿を見ながら、どこか納得行かないような表情を彼は浮かべた。

「まあ、そうは言っても。それが本当の姿だとは限らないだらうけどね」

「シャルル？」

彼の思考を盗み見たように。唐突にシャルルはそんなことを言い

出した。今見せているその姿が本物ではないかもしれない。その姿が全てではないかもしれない。本当はもつと違う姿なのかもしれない。そんな言葉が一夏の胸を打つ。

だが、それを隣の少女はくだらんと一蹴した。ポニーテールにしたその長い黒髪を揺らしながら、そんなことを気にしていたらキリがない、と続けた。

「今見せている姿が本物であろうとなかろうと、それがボーデヴィツヒであることには違いないだろう。大体、隠すことなくあけつひろげにしている者の方が珍しいだろうに」

「ああ、箒みたいに」

「お・ま・え・だ！」

「いだだだ！ お、俺だって色々隠していることくらいあるぞ！」

「ふーん」

「あからさまに信じてない!？」

それはそうだ、とやり取りを見ていたセシリアは笑った。この少年が何か隠して生活しているようにはとても見えなかつたからだ。隣を見るとシャルルも同じように笑っているのが見える。

その笑顔を見て、彼女はふと、彼の転校初日に浮かんだ疑問が再び頭をもたげた。先程の彼の言葉を思い出し、思わずまじまじとその顔を見詰めてしまった。

「どうしたの？」

「……いえ、何でもありませんわ」

今こうして他人に見せている姿が本当の自分ではない。それはきつと、この物腰穏やかな少年にも言えるのだろう。先程の箒の弁ではないが、そんなことは当たり前だ。

そう自分で結論付けたセシリアは、シャルルの『本当』に触れることなく話題を変えた。

どうしてこうなった。鈴音は頭の中でそんな言葉を浮かべた。

時刻は放課後。場所はアリーナ。そこで、白と黒が対峙していた。白は一夏、そして黒はラウラである。双方やる気は充分なようで、一夏の『白式・雷轟』のビームブレードとラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』のプラズマ手刀がぶつかり合って火花を上げていた。

アリーナの観客は鈴音を含めて五人。騒動の発端の場所からすれば少ないが、人それぞれの事情がある以上仕方ない。身も蓋もない言い方をすれば、この五人は用事も何もない暇人だったというだけなのだ。

「で、あたしは食堂で合流した身だから良く分かんないんだけど」

一体全体どうしてこうなった。頭の中で浮かべた言葉を改めて口にした。だが、その疑問に答えられる人物はいないようで、残りの四人もさあと首を傾げている。

「少なくとも、食堂に行くまでの間ではこうなる素振りは一切なかった。多分」

「そうですね。ラウラさんも一夏さんに敵意を向けていることはなかったですし。多分」

「ご飯食べてる時のおりむーの会話に秘密がありそうだね。多分」

最初からいた一組の面々、箒、セシリア、本音のその言葉に簪はやれやれと溜息を吐いた。鈴音と同じく食堂で合流——彼女の場合は『させられた』のだが——した彼女は、やはり事情を上手く飲み込めないでいる。

とはいえ、残りの反応からすると結局事情を理解している者はいないようであった。

「でも、織斑君の会話、って……いうと」

この中で一番まともにカテゴライズされる簪は、それでも何とか答えを出そうと頭を捻った。今のヒントから何か導き出せないだろうか。そんなことを考えた。

考えたが、別段悩むほどでもなく、容易にそれは導き出される。

「ボーデヴィツヒさんが……織斑君を、嫌いな理由」

「やっぱし、そこなのかしらね」

どうやら同じ答えに至ったらしい鈴音が肩を竦めた。残りの三人も同じように頷いているところを見ると、その場面で間違いはなさそうである。分からないと抜かしていた連中の意見が当てになるかは別として。

昼食時、一夏が申し出た模擬戦の誘いを断ったラウラであったが、彼のある言葉をきっかけに意見を翻す。その結果がアリーナでのぶつかり合いだ。そして、その言葉というのが、先程簪嬢が述べたラウラが一夏を嫌いな理由について。

『何で俺を嫌ってるか分かんねーけど』、だっけ」

「多分……そこだと、思う」

「おりむーは嫌いな理由を知ってるに決まってる、って思ってたっばいよね〜」

本音の言葉に一同が頷く。だからこそその今までの態度であり、だからこそ違うと分かった時に気分を害した。そう考えるのが妥当なところなのだろう。そこまで考えた一行だったが、しかしそれが分かったところでどうしようもないことに気が付いた。

「結局やっていることは唯の模擬戦ですしね」

「死にはせんだろうからな」

真正面からレールカノンを食らって吹き飛んでいく一夏を見ながらセシリアと箒はそう述べた。どうやら盾でガードはしていたようで、思ったよりはダメージを受けていない彼はスラスターを吹かして再びラウラへと接近していく。その体が何かに掴まれたように急停止すると、追撃のレールカノンで再びアリーナの端まで吹き飛んでいった。

『A I C』、ですか」

「へ？ 何それ？」

セシリアの呟きに鈴音は首を傾げる。どうやら先程の攻防の際に使われた何かのようだが、彼女には聞き覚えのない単語であった。そんな言葉を受け、セシリアはやれやれと肩を竦める。一応代表候補生なのですから、もう少し知識を身に付けてください。そんな言葉を続けた。

「どーせあたしは馬鹿ですよ」

「大丈夫だ鈴。私も分からね」

「あ、私も」

「馬鹿トリニテイですわね」

「トリニテイ馬鹿の方が……語呂がいい、よ」

「二人して!？」

「馬鹿にされてるぞ鈴」

「そうだねくりんりんちゃん」

「アンタらも一緒に馬鹿にされてんの!」

いいから説明、と肩で息をしながら彼女は続ける。シャルルや癒子、ナギがいない上簪までもボケに回った以上この場でツツコミを取り仕切るのは鈴音唯一人。必然的に会話の進行役を務めるのも彼女の役目と相成るわけである。

では話を戻しましょう、とセシリアはコホンと咳払いを一つ。

『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー』、慣性停止能力、とでも呼ぶべきでしょうか。まあ、名前はどうでもいいですわね」

「うん、まあ、名前はどうでもいいけどさ。慣性停止? 『PIC』の逆みたいな感じってこと?」

「理屈の概ねはそんな感じですよ。俗称では『停止結界』などと呼ばれていたりもしますわね」

「成程。さっき一夏が急に止まったのはその為か」

文字通り『停止』させられたのだろう。そのことを理解した筈は視線を再びアリーナに向ける。地面と空間の両方を蹴り上げて的を絞らせないように動きながら射撃を行う一夏がそこに見えた。恐らく彼も『AIC』のことなど知らないはずだが、本能的に、彼特有の勘で何かを悟ったのだろう。ラウラの『停止結界』は的を絞れず空振りしていた。

暫くそれを続けた彼女は、『停止結界』で捕らえることをやめる。代わりにワイヤーブレードを展開し、回避を続ける一夏の逃げ道を潰していった。このまま包囲し、再びレールカノンを叩き込まんと右肩の砲身が唸りを上げる。

だが、その砲弾が発射される前に衝撃がラウラを襲った。『雷轟』のビームブレードが砲身に投擲されたのだ。短く舌打ちすると、彼女はレールカノンをパージする。それにより、発射寸前であったレールカノンはその唸りを潜めた。

「向こうの射撃武器はあれくらいっぽいし、これで一夏が大分有利になったのかな」

ワイヤーブレードとプラズマ手刀のコンビネーションに攻撃パターンを切り替えた『シユヴァルツェア・レーゲン』を見て、鈴音はそんな感想を漏らす。隣では本音もうんうんと頷いているのが見えた。だが、箒とセシリア、そして簪はそう上手くはいかないだろうと彼女に返した。

「まあ、あくまで模擬戦ですからそこまではしないのかもしれませんが、武装が本当にあれだけとは思えませんわ」

「よしんばあれだけだとしても、あんな牽制に使えない射撃武装を一つ失ったところで一夏に勝利の天秤が傾くとは思えん」

「軍人さんだし……このくらいの状況は、慣れてるんじゃない、かな」
三者三様にそう言われてしまえば、成程確かにと頷かざるを得ない。そうなるとやっぱりまた吹っ飛ぶのかな、などと思いつつ、鈴音はアリーナに意識を戻した。

『白式・雷轟』の足にワイヤーブレードが絡みつく。そのままラウラは力任せに引っ張ると、体勢が崩れた一夏に向かってプラズマ手刀を振り下ろした。レールカノンをしこたま食らっている以上、これを食らってしまうは恐らく勝負ありであろう。それを本人も分かっているのか、絡め取られたまま『雷轟』を『真雪』に換装しその刃を半ば強引に装甲で弾いた。そのまま近距離でビームカノンを叩き込む。自身にも影響は出るが、自前の装甲でどうとでもなると考えた大胆な行動であった。

閃光、そして爆炎。衝撃でお互いに吹き飛んだ二人は、体制を立て直しながら真っ直ぐに相手を見詰める。その顔には、始めた頃の不機嫌さは微塵もない、楽しそうな笑顔があった。

「拳を交えれば分かり合える、ってか……馬鹿ばっかよね」

「鈴、何故こちらを見ながら言った？」

「そうですね。訂正を要求します」

「うん……」

「りんりんもそのカテゴリーだと思うよ」

そんなことは分かっているとはかりに笑みを浮かべると、鈴音はそろそろ休憩を取らせるかと観客席を乗り出した。あくまで模擬戦、ここで死力を尽くすにはまだ早い。彼女はそう考えたのだ。

どうせ決着を着けるならばそれなりの舞台がいい。そう同じように考えた本音も鈴音に続く。幸いにして学年別トーナメントが近い内に開催されるのだ。続きはそこでも遅くはない。

どうやらそれは戦っている二人も同じようで、お互いどちらともなく構えを解いて座り込んでいた。とりあえずあの発言は保留にしておいてやろう。そんな言葉が一夏へと告げられていた。

「丁度いいみたいね。おーい、二人共」

ブンブンと手を振って叫んだ鈴音は、二人が自分の方を向いたのを確認して笑顔を浮かべた。が、すぐにその表情が怪訝なものに変わる。残りの四人も気付いているようで、視線を一夏達ではなく、その後方へと向けていた。

いつの間にか現れていた、ISを纏った二人組へと。

「やあ」

一夏がそれに気付いたのは、向こうで手を振る鈴音達の表情が変わったからだ。弾かれたように視線を彼女達が見ている場所に向けると、そこに立っている二人組が視界に映る。

少しくすんだオレンジに塗装されたISと、紺碧に塗装されたIS。頭部はヘルムで覆われており、どんな人物なのかは見取れない。

そんなオレンジのISのパイロットは、一夏が視線を向けると何とも気楽な挨拶を述べた。その声は、装置で変声されているらしく少しい。トーンがおかしい。

「凄い戦いだったね。思わず見ていてワクワクしたよ」

見えている口の部分が笑みを形作る。それが本心からなのか、それともただの社交辞令なのかは分からないが、しかしそのフレンドリーさが突然現れたことも相まって不気味さをも少し出していった。

「誰だ、貴様等」

同じように乱入者に気付いたラウラがそう問う。問われた方は少し考える素振りを見せたが、やがてどう答えようかなどと隣に立っているもう一人に視線を向けた。口元しか見えないが、そこにはやはり変わらぬ笑みが浮かんでいた。

「……どうやらまともに答える気は無いようだな」

「そういうわけじゃないんだけどね」

少し苛立ち混じりのラウラの声に、オレンジのISパイロットは頬を掻く。仕方ないな、などと言いながら、二人に向かって一步踏み出した。

「私はデゼール。そしてこっちはエム」

その声に合わせて、動かなかったエムも一步踏み出す。その行動を尻目に、所属も答えておこうか、などとデゼールは続けた。

『「亡国機業」って言えば、分かってくれるよね」

「……またあの連中かよ」

「あはは。ごめんね。こっちも上司の命令だからさ」

苦虫を噛み潰したような顔をした一夏に向かって、彼女はそう言って笑いかけた。右手にアサルトライフルを取り出すと、その銃口を突きつける。隣では、エムが近接ブレードを構えていた。

「私達と、戦ってくれないかな？」

「嫌だ。理由がねえよ」

「加えるならばこちらは先程の戦いで疲弊している。戦うならば万全の状態が望ましい」

デゼールの提案を二人は一蹴する。だが、それを聞いても銃口を下げずに彼女は笑う。そっちには無くても自分にはある。そう言いながら尚も一步踏み出した。

「それに、そっちの君は軍人でしょ？ 万全じゃないと戦わないなん

て、そんな子供の言い訳みたいなきことを言っちゃっていいの?」

「わざわざ不利な戦いに身を置く必要は無い。戦うのならば万全を期し、そして打ち勝つ。そういうものだ」

「……挑発には乗らないか」

肩を竦めてはいるが、しかし依然として銃口は二人に向いている。隣ではエムが面白くなさそうな雰囲気をかもし出しているのが感じられた。

「そっちの方もやる気ないみたいだし、また今度つてことで」

「んー、そうだね。しょうがないか」

一夏が述べたその言葉に同意するように頷くと、彼女はそのまま向けていたアサルトライフルの引き金を躊躇無く引いた。虚を突かれた二人は回避する間もなくその銃弾の雨を浴びてしまう。そのまま込めている弾が無くなるまでデゼールは銃を撃ち続けた。

「戦ってくれないなら、そのまま始末すればいいだけだしね」

表情を変えることなく、笑顔のまま彼女は引き金を引き続ける。やがてその銃からカチカチと弾切れを示す空撃ちの音が聞こえると、それを収納しよう一丁の銃を取り出した。当然、銃口を二人に向けて引き金を引く。引こうとする。

だが、その動作は途中で止められた。隣のエムが彼女の手を押さえたのだ。

「どうしたの?」

「無駄撃ちをするな。——どうやら、やる気になったようだしな」

「あー……みたいだね」

視線の先では先程の銃弾を全て『停止結界』で受け止めているラウラの姿が見えた。その背後では『白式・雷轟』がビームガンを構えているのも見える。その表情は真っ直ぐにデゼールとエムを睨み付けていた。

「ラウラ、いけるか?」

「誰に物を言っている。そっちこそ、足を引っ張るなよ織斑一夏」

それと、どさくさに紛れて呼び捨てにするな。そう続けると、ラウラはプラズマ手刀を展開しスラスターを吹かした。それに合わせる

ように一夏も直進。迎え撃つようにエムは前に出、デゼールはそんな彼女の影から銃を構える。

「行くぜこのヤロオオオオオ！」

一夏の吼えるような叫びが、アリーナに響いた。

No15 「認めない」

衝撃。そして後ろに吹き飛ぶ自分の体。地面に横たわった自身を見下ろす一人の少女。

その光景は既に幾度と無く行われた事象の焼き増しであり、そしてそれは彼が同じ失敗を犯していることに他ならない。

「ちっ、くしょう……」

スラスターと自身の姿勢制御で体勢を立て直したが、彼——織斑一夏の表情はしかめられたままだ。ハイパーセンサーを使い名目上現在のパートナーである銀髪の少女の姿を視界に捉えたが、どうやら向こうも防戦一方であるようだ。そのことを確認した彼は更に表情を曇らせた。

「どうした織斑一夏。あの威勢は口だけか？」

目の前の紺碧のISを纏った少女はそう言っただけで鼻を鳴らす。事実、未だ一夏は彼女に一撃すら加える事が出来ていない。万全の状態ではないから仕方ない、そんな言い訳が頭をもたげ、そして即座に振り払った。それはただの負け惜しみだ。そのことが分かっているからこそ、一夏は無言でその顔を睨み返した。

大地を踏みしめ、そして一気に加速。『白式・雷轟』の速度を最大限に生かした突撃。だが、それは目の前の相手に容易く躲かれ、右手に持っていたブレードで顎をかち上げられた。放物線を描いて落下すると同時、一瞬だけ意識が黒く染まる。即座に切れかけたそれを繋げると、一夏は体を反転させて受身を取った。

「……下らんな」

「……そいつは悪かったな」

ぼそりと零した目の前の相手の言葉にそう返す。少なくとも無様に地面に倒れることはなくなったのだから、多少は進歩している。そんな情けない反論が浮かんで消えた。どちらにせよ、確かにそれは下らないのだから。

「織斑一夏！」

背後から聞こえる声。それを確認した一夏はスラスターを吹かし

て目の前の相手から距離を取った。声の主である少女、ラウラの隣に立った彼は、一体何だと問いかける。

だが、その言葉に返ってきたのは怒号であった。

「何をやっているのだ貴様は！ 近接特化の相手にわざわざ近接戦闘を挑んで何になる！」

「んだよ。そんなの俺の——」

勝手じゃないか。そう続けようとした一夏の胸倉をラウラは掴んだ。眼帯に塞がれていないその赤い片目は真っ直ぐに彼を睨んでおり、反論を許さない。

「いいか。今は意地を張って戦う場面ではない。私とお前が、協力して目の前の敵と戦う場面だ。双方共に余力が無い状態で意地を張るのは子供のすることだ」

「子供だよ俺は」

「分かっている。だからこうしてわざわざ伝えたのだ。下らん意地を張るのをやめろとな」

「……ラウラ」

「名前を呼び捨てにするなど言っただろう。それで、何だ？」

「俺、お前のこと嫌いだ」

「そうか。私もだ」

その言葉を皮切りに、一夏は再び紺碧のISへと突っ込んだ。その行動にラウラは一瞬目を丸くさせ、そして苦虫を噛み潰すような表情へと変わる。

あいつ、全く聞いていないではないか。そんなことを心の中で思いながら、彼女は突っ込む一夏を援護しようとしてスラストを吹かした。だが、その行動はもう一つの影によって遮られる。

「せっかくの相談も、無駄になっちゃったね」

「……そのようだな」

くすくすと笑うデゼールに視線を向けながら、ラウラは『シユヴァルツェア・レーゲン』のプラズマ手刀を展開するのだった。

「あのっ、馬鹿！」

ラウラの言葉を無視して突っ込んでいく一夏を見た鈴音は思わずそう叫ぶ。周りも同じような意見らしく、セシリアに至っては頭痛に耐えるかのように頭を押さえていた。

織斑一夏は男だ。それは、この場にいる全員の共通認識である。だが、男というものがどういうものなのか、一夏というものがどういうものなのかを知っている者は一体この場にどれほどいるのだろうか。「単純にも程があんでしようが……」

「りんりに言われたらお仕舞いだね〜」

茶化すような本音の言葉にうるさいと一言返しながらも、鈴音は視線を逸らさない。多少は受け入れたのか、射撃と斬撃を織り交ぜるようになってはいるものの、それでもまだがむしやらに突っ込んでいく姿勢を変えてはいない一夏の姿は、見ているものからすれば滑稽に感じられるほどだ。

「意地が……あるの、かな」

ぼつりと零したその言葉に、彼女達はどういうことだと返した。言葉を発した簪は一瞬だけびくりと肩を震わせながらも、さっきのやり取りの中で気になった一言を口にした。

「下らない意地、って……言ってたでしょ？」

「ええ。確かに言っていましたわね。……え？　まさかそれで？」

もしそうならば、誰かの言葉ではないが単純にも程があるではないか。頭痛が酷くなっていく錯覚さえしてきたセシリアは力なくアリーナの椅子に腰を下ろした。隣では本音も肩を竦めながら座るのが見えた。

このままでは彼等が敗北するのはそう遠くない。そして、その場合どうなるのか予想が付かない。一応通常戦闘の形式を取っているものの、エネルギーが尽きればそこで終了となる可能性はそう高くなかった。

その予想を立てた簪は観客席の出口へと足を向けた。卑怯と罵られても、手助けに行こう。好意を抱いている友人を守る為に出した結論がそれだった。

だが、その踏み出した彼女の腕を掴む人物が一人。長い黒髪を後ろで纏めているその少女は、黙って首を横に振った。

「どうして……!?!」

「あれは一夏の戦いだ。それに、ここで助っ人がいなければ負けてしまいうくらいならば、どのみちあいつに未来はない」

淡々とそう述べる少女、箒の顔を簪は思わず見詰め返す。それでもずっと一緒にいた幼馴染なのか。そんな言葉を出そうとした彼女は、続く言葉でそれを飲み込んだ。

「大体だ。一夏がああの程度で負けるはずないだろう」

疑うことのない真っ直ぐな一言。口元に笑顔を浮かべてそう述べた彼女は、正しく織斑一夏の『幼馴染』であった。ここにいる誰よりも彼のことを分かっている、そんな自信が見てとれた。

「んなこと分かってるわよ。でも、馬鹿は馬鹿でしょ」

そしてもう一人。付き合いこそ箒よりも短いものの、同じように彼を信頼する少女がいる。鈴音もまた、なんてことないようにそう述べると、違いないと返した箒と共に笑った。

簪は思わず視線を落とした。駄目だ、まだこの二人には敵わない。そう思ったが、ふと視線を隣に動かした。自分の幼馴染である、布仏本音へと。そして思う。成程、これは負けても仕方ない、と。

「私と……本音みたいなもの、か」

思わず呟いて、そして笑った。

そんな彼女の前方では、箒が声を張り上げている。どうやら激を入れているようだ。それがいい方向に転がったのは、満足げな表情をしていることで窺えた。

「一夏あー!」

唐突に自身に掛けられた声に、彼は思わず足を止めてその声の主に視線を移した。

そこには、彼の幼馴染が手すりから体を乗り出している姿が一つ。拡声器を何も使わずにあそこまでの大声を張り上げられるのは、彼女

の意地のなせる業か。

「男なら！ 意地を張ったんなら！ そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

落ちそうになるほど乗り出した体で、真っ直ぐに一夏を指差して。彼女はそう叫んだ。

その姿と、隣でそうだと同意しているツインテールの少女を視界に入れながら、彼はやれやれと肩を竦める。それと同時に周りが見えなくなっていた自分に気付いた。どうやら意地を張り過ぎたらしい。そのことに気付いた一夏は、ありがとうとこっさり呟いた。

「ラウラ！」

「……何だ？」

再び目の前の相手に視線を向けながら、一夏は背後にいるはずの彼女の名前を呼ぶ。どことなく不機嫌そうにそう返したラウラに向かって、一夏は済まないと謝った。

「ちよつとだけ、意地、張り過ぎてたみたいだ」

「ちよつとだけ、か……」

「ちよつとだけ、だ。そこは譲らんぞ」

彼女が苦笑するのが背後から感じられた一夏は、ビームガンを撃ちながら後退、そして再びラウラの隣に降り立った。大分ボロボロになっている一夏の『白式』と違い、ラウラの『シユヴァルツェア・レーゲン』の損傷はそれほどでもないように見えた。そしてそれは、これからどうすればいいのかを如実に示していた。

「どつちを仕留める？」

「デゼールとかいう奴の方だ。あのエムとかいう奴は殆どダメージを負っていないからな」

「……けっ」

そんな拗ねた言葉とは裏腹に、一夏は『雷轟』を『真雪』に素早く換装。ビームランチャーをデゼールへと放った。少し不意打ち気味とはいえ、その程度を躲せない彼女ではない。最小限の動きで避けると、持っていたアサルトライフルの銃口を向ける。

「遅い！」

それより早く、『シユヴァルツエア・レーゲン』のワイヤーブレードがデゼールを捉えた。持っていたアサルトライフルはワイヤーブレードにより貫かれ爆散する。その衝撃で彼女の体勢が少し崩れた。「もらったあー！」

そこに合わせられるのは『真雪』のビームランチャー第二射。先程までの戦いで若干油断していたデゼールにとってこれは拭えない失態だ。舌打ちしながらその衝撃に耐える為に歯を食いしばった。

その刹那、青い影が素早く割り込みその砲撃を受け止めた。完全に殺しきれなかったその一撃はエムの左手のシールドを吹き飛ばし、左腕部にダメージを与えている。だが、そんなことを気にせんとばかりに、表情を変えることなく淡々と彼女はデゼールに告げた。

「潮時だ」

「……まだ、向こうの方がダメージは大きいよ」

「だとしてもだ。これ以上やればこちらも多少のダメージでは済まなくなる」

それに、とエムは顎で一人の人物を指した。それを見たデゼールも納得したように頷く。そのまま二人で同じように距離を取った。

「おいちよつと待て。逃げるのかよー！」

一夏がそう叫ぶが、二人は全く意に介さない。そうだよ、などとあつさりと返した。

「ある程度目的は果たしたしね。何より——」

視線を向ける。一夏ではないもう一人。ラウラ・ボーデヴィツヒへと。彼女の顔の中で隠されている部分、左目へと。

『彼女』に本気を出されると、厄介だからね」

「……？ どういうことだ？」

意外にもその言葉に真つ先に反応したのは当の本人であるラウラだった。自分は手を抜いている覚えは無い。なのに、何故。そんな彼女の言葉を聞いたデゼールはわざとらしく首を傾げた。おかしいな、知らないの？ などとそんな言葉を続けている。

「じゃあ、君はひよつとして『自分の左目が隠されている理由』も知らないのかな？」

「……ISの適正を上げる技術、『ヴォーダン・オージェ』の適合失敗により、発動を抑える為に隠されている」

「ふーん。それ、信じてるの?」

「何?」

「だってそれ、絶対にどんなことがあっても外してはいけないって言われてるんでしょ? ISを使っている時でさえ。おかしいと思わない?」

その言葉にラウラは沈黙で答えた。それは『そういうもの』だと言われてきた自分にとって、そんな疑問は抱きすらしなかった。だから、彼女の中で一度浮かんだ疑問は次々と考えもしなかった疑問に繋がっていく。

どうして、自分の左目を晒せないのか。どうして、失敗しないはずの技術で失敗しているのか。

——どうして、その技術を受けた記憶も、受ける前の記憶も無いのか。

——どうして、一番古い記憶が数年前で、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』と名付けられたことなのか。

「わ、たしは……わたしは……」

「おい、おい! ラウラ! しっかりしろ!」

その声で彼女は我に返った。肩を掴んで揺さぶっていたらしい一夏の姿が視界に映る。大丈夫だ、ときこちない笑みを浮かべると、彼女はゆっくりと彼から離れた。

その姿を見たデゼールは満足そうに微笑むと、それじゃあね、と踵を返した。エムも無言でそれに続く。

彼等はその姿を追いかける気にはならなかった。

アリーナでの一件を誰かに話す気になれなかった一夏は、部屋に戻っていたシャルルにラウラとの模擬戦について聞かれたのを曖昧な言葉で濁し、一人逃げるように廊下を歩いていた。どうせ束がどこ

かで見ている千冬に報告しているだろう、などと適当な理由を付け報告すら避けた彼は、そのままモヤモヤとしたものを抱えながら歩みを進める。観客席にいた五人も気持ちは同じようで、言葉少なくアリーナから分かれたのは記憶に新しい。

そのまま寮を出て一人外を散歩していた一夏は、ふと誰かの話し声を耳にした。その声に聞き覚えのあった彼は、思わずその場所へと近付き聞き耳を立ててしまう。

「教官！」

そう叫んでいるのは今日の放課後に戦い、そして共闘した相手で。「大声を出すな馬鹿者」

そう返しているのは自分の良く知る肉親の声だった。

隠れている位置からでははつきりと見えないが、どうやらラウラが千冬に詰め寄っているようだ。声の調子からすると千冬が少し落ちて着きの無いように感じられ、普段学校で見せることのないその姿に一夏は若干の違和感を覚える。

「いきなりやって来たかと思ったら、「私は誰なのか」だと？ モラトリアムなら自分で解決させろ」

「ふざけないで下さい！」

「……お前は、ラウラ・ボーデヴィツヒだろう？ それ以外の何であるというんだ」

その言葉を発した後の千冬は口を開かず、ラウラの次の言葉を待つ。数分の沈黙の後、彼女はゆっくりと口を開いた。真っ直ぐに、千冬を見詰めて。

「私は、ラウラ・ボーデヴィツヒなのですか？」

「当たり前だ。もし自信がないのならば……そうだな。今からでも、ラウラ・ボーデヴィツヒになればいい。時間は山のようにあるんだ、いくらでも悩めば——」

少し安堵したように話を続けていた千冬は、その途中で言葉を止めた。どこか納得したような、何かに気付いたような、目の前の少女がそんな表情をしていたのに気付いたからだ。思わずその肩を掴もうと伸ばした腕は空を切る。無意識に、本当に無意識に彼女が千冬から

距離を取ったのだ。

「ありがとうございます、教官。よく分かりました」

それだけ告げると、ラウラは振り返らずに駆けていった。その背中に何か声を掛けようとしていた千冬は、しかし言葉を発することが出来ずに視線を地面に落とす。そのままの体勢で佇んでいた彼女であつたが、やがて顔を上げるとある方向に視線を向けた。

「盗み聞きか?」

「あ、いや、違つ……わないけど。聞き覚えのある声でしたんで来たら、出るに出来ない雰囲気です」

「……そうか」

慌てて出てきた一夏にそれだけを言うと、彼女はそのまま口を噤んだ。この状況で何か軽い話など出来るはずもない彼もまた、沈黙を続ける。

その沈黙を破つたのは、千冬だった。一夏、と自身の弟の名前を呼ぶ。

「ボーデヴィツヒのことを、どう思う?」

「は? ……気に入るか気に入らないかで言えば、気に入らない部類だけど」

でも、嫌いじゃない。そんな曖昧な言葉を返した。それを聞いた千冬はそうかと呟くと、お前に頼みがある、と続けた。

珍しい姉の頼み、それが何なのか予想は付いたものの、一夏はそのことを口に出さずに言葉を待つ。

「あいつの、友人になってやってくれ」

「別にそれはいいんだけどさ」

友達って、そう言われてなるものじゃないだろ。そう返されると千冬としてもその通りだと答えるしかない。無粋な頼みだった、そう思った彼女はそう続けて、そして彼の次の言葉で目を見開いた。

「つーか、俺はとっくに友達のもりだったんだけど。多分箒達もそうだと思う」

「……そうか。は、はははっ! そうかそうか!」

何がおかしいのか、千冬は肩を震わせて笑い出した。目の前の一夏

の肩をバンバンと叩くと、それならば安心だ、と笑顔を見せた。弟と、その周りの者がラウラの友人ならば、きつとこれからの問題も解決していける。半ば確信に近い予想を浮かべた彼女は、安心したように笑った。

「一夏」

「何だよ千冬姉」

「あいつらを、よろしく頼む」

そう言うとな彼女は踵を返した。あまり遅くまで外にいるなよ、という言葉を加えながら寮に戻っていく姉の姿を見ながら、一夏は一人取り残された。

「……………ん？ あいつ『ら』？」

人気の無いその場所に、彼女はいた。小柄なその姿に似合わないものを纏いながら、彼女は立っていた。

赤い、真つ赤なIS。血に染まったかのように染め上げられたその機体を纏った少女は、左手でクルクルと何かを回していた。

眼帯。病院の治療目的とはまた趣の違うそれを左手で弄びつつ、感覚を取り戻すようにISの右手を開いたり閉じたりを繰り返す。それも束の間、動きを止め拳を握りこんだ少女は、口元を三日月に歪ませた。その顔には、夜に浮かぶ月のような金色の瞳が輝いている。あの程度の長さに伸ばされた銀髪と相まって、その姿は一種幻想的すらあった。

ただ、その光景を一変させている要因が一つ。

「久しぶりだと、まあ、こんなものか」

彼女の周りに転がっている鉄屑。そのどれもが、無残に破壊されたISであった。刻まれた傷跡は、搭乗者の命など全く気にしていないことが窺える。もし、これが無人機でなかったならば、彼女は確実に人を殺していたであろう。

「肩慣らしには丁度良かったが……………何だこいつらっ？」

そう言うとな彼女は鉄屑になったISを踏み潰す。自分の知る限り、こんなものがその辺を歩いているような時代ではなかったはずだ。数年前も、そして今も。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』が知らないだけか。……それとも、わざわざ私にこれをけしかけた者がいるのか」

別にどちらでも構いはしない。既に屠ってしまったものに思考を巡らせても時間の無駄だ。そう考えた彼女は、ISを解除するとその場を後にした。一度も振り向くことなどせず。

手に持った眼帯を強く握り締める。そのまま捨ててやろうかと思ったが、しかし。そのたびに彼女の脳裏に一人の女性の姿が浮かび上がった。自分を打ち負かした唯一の存在であり、彼女が最も尊敬し、そして同時に憎んでいる存在。

「織斑先生と呼べ、か……」

分かっているのだ。自分がこの状況になったのは彼女の所為ではない、と。

だが、それでも。感情はそれに納得出来ない。出来やしない。

「あの、馬鹿教師……何が生徒第一号だ。私を、閉じ込めた癖に！ 助けてくれなかった癖に！」

眩きは叫びに変わっていく。理性は感情に塗り潰されていく。納得は怒りに押しやられていく。

「何が『ラウラ・ボーデヴィツヒ』だ！ 私は、私はそんな名前じゃない！」

ボーデヴィツヒ。偽りの姓と偽りの境遇。その境遇で育ったもう一人の『偽りの自分』。

そして、それを受け入れているこの世界。

「私は……私はラウラだ！ ただのラウラだ！」

壁を殴り付けた。右手からは血が滲み、その壁にヒビが入る。そんな自身の怪我など気にしないかのように、彼女は左拳もその壁に叩き付けた。

「認めない」

両手は既に真っ赤に染まっている。彼女のISと同じように、返り

血で真っ赤に濡れている。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』などという偽者を、私は認めるものか！』

その血に染まった両手を天に掲げ、少女は夜空に吼えた。

翌日。

「おはよーボーデヴィツヒさんってどうしたの!？」

「ん？ ああ、これか？」

教室に入ってきたラウラに声を掛けた癒子は、彼女の両手に巻かれた包帯を見て思わず叫んだ。対するラウラは特に気にすることなく、朝起きたら血塗れだったと返す。

「まあ、大したことではないさ」

「大惨事だよ！ 何で起きたら両手血塗れ!？」

その叫びに他のクラスメイトもどうしたどうしたと集まり、そしてその両手に巻かれた包帯を見て口々に声を挙げる。そんな渦中の人物であるラウラはどうしたものかと頬を掻いた。

「うーっすって何だこの人だかり？」

「おはようございます一夏さん。見てください、あのボーデヴィツヒさんの手を」

手？ と教室に入ってきた一夏も同じように彼女の包帯へと視線を移し、そしてその表情を歪めた。一体どうしたんだ、他のクラスメイトと同じように尋ね、そして同じような返答を彼も聞く。

ただ、少しだけ違ったのは、他の連中に聞こえないように声を潜めて追加の質問をしたことであつた。それは昨日のアーリーナの一件で出来たのか、と。

「いや、違う。本当に私も分からないのだ」

一夏の質問に首を横に振ったラウラは、そろそろホームルームが始まると皆に伝えて席へと向かった。確かにそろそろ千冬がやってくる時間である。このままできると何かしら説教が待っているであろうことは想像に難くない。それが分かっている一組の面々は、蜘蛛の子を散らすように各々の席へと向かつていった。

その途中、一人の人物がラウラの背中に声を掛けた。一夏ではない男子生徒、金髪の少年、シャルルだ。両手の包帯も気になるんだけど、という前置きをして、言葉を続けた。

「眼帯、どうしたの？」

「え？」

思わず一夏もラウラの顔に視線を移す。その左目には昨日と同じように眼帯がはめられていた。だが、確かにどこかが違う。そのことを彼も感じ取ったのか、同じように彼女に尋ねた。

「……何かおかしいか？」

「え？ ああ、なんつーか、そうだな」

どうやら本人は気付いていなかったようで、左目のそれに触れながら首を傾げる。一夏もその返答は予想外であつたらしく、どう返していいものか一瞬言葉に詰まる。シャルルも同じように言葉を選んでいくようであつた。

その横から口を出したのは、彼と一緒に歩いていた箒だ。二人の迷いなど知らんとばかりに、はつきりと言い放つた。

「上手くはまっていけないぞ」

「……そうなのか？ 自分では全く触った覚えは無いのだが」

そう言うと彼女はカバンから鏡を取り出しそれを直す。物が物であるが、それだけならば別段どうということのない会話である。

だが、どうも引つ掛かりを覚えた一夏はラウラに質問をしようとして。

「織斑、席に着け」

そのタイミングで教室に入ってきた千冬の言葉で遮られた。どうやらホームルームを告げるチャイムは既に鳴っていたらしい。しようがないと頬を掻きながら彼は席に戻つたが、それでも不安は拭えなかつた。後でもいい、聞かなくてはならない。そんな気がしたのだ。

あの眼帯を決して外してはいけない。そうあのISパイロットが述べていたのが彼の頭で何度も木霊していた。

彼の中で何か嫌な予感を増しながら、今日も一日が始まる。

No16 「そう簡単にはいきませんわ」

放課後である。一夏は朝から落ち着き無く視線を彷徨わせているし、ラウラは特に変わることなくクラスで過ごしている。そんな両極端な両者は、結局そのまま肝心な部分の会話することなく教室から出て行った。

「いかん、聞けなかった……」

今からでも聞いてこようか。そんな考えが頭をもたげたが、しかしそれを振って散らす。一日過ごして別段問題なかったのならは大丈夫だろう。正しいかどうかはともかく、彼はそう思うことにしたのだ。

もう部屋に帰って休もう、そう結論付けた一夏はそのまま寮へと足を運ぼうとしたのだが、しかし。ちよつと待て、と背後から声を掛けられた。聞き覚えのある声、そんな次元ではないほどの聞きなれた声が彼の耳に響く。

「何だよ箒」

「暇か？」

「……暇だ」

「付き合え」

「男女の意味で？」

「剣士の意味でだ」

短い会話の応酬。その二言三言で話がついたのか、しようがないな、と一夏は箒の隣へと移動する。それで、どこでやるんだ。そう述べた彼の方に視線を向けた箒は、決まってるだろうと答えた。

「剣道場だ」

「ああ、生身でやるのか」

「当たり前だ、部活だからな」

「え？ 何で俺呼ばれたの？」

「サンドバッグ役」

「全力で抵抗してやる！」

「望むところだ、刀の錆にしてくれる」

そこまで言うとお互いに不気味な笑い声を上げて我先にと剣道場まで向かっていってしまった。本人達からすれば日常の会話である。普段通りなのである。その証拠に、それを見ていた千冬は溜息を一つ吐くだけで済ませている。

勿論、それ以外の面々はついていけないと立ち尽くすのみである。それでも一年一組の生徒の復活が早いのは慣れがなせる業か。

そんな中に、一人驚きもせず呆れもせず、二人を見詰めていた人物が一人。

「あれ？ 一夏何処かに行くんだ」

じゃあ、丁度いいかな。その人物、シャルルはそう呟いて笑みを浮かべた。廊下を歩き、周りの生徒に挨拶を返しながら、一人、校舎の外へと歩みを進める。

「きょーうこそ！ あたしが！ 勝つ！」

アリーナの中心でそう叫んだのは鈴音。目の前の相手、セシリアに向かって指を突きつけていた。対するセシリアは何処吹く風、その叫びをさらりと躲す。

「気合充分ですわね」

「あつたり前じゃん。練習的なのはともかく、ちゃんと試合するとあたしセシリアに一度も勝ってないんだし」

「それだけを聞くと、今日勝つという言葉に説得力がありませんが」

「段々差は縮まってる！ ような気がするから、いけるはず」

「一夏さんじゃないのですから、脊髄反射で喋るのは止めるべきかと」

やれやれ、と肩を竦めながらセシリアは『ブルー・ティアーズ』を展開し真っ直ぐに立った。武器を展開せずに自然体で佇む。彼女独特の戦闘スタイルである。言い換えれば、手を抜かないということも意味していた。

それが分かっているので、鈴音も『甲龍』を展開、『双天牙月』を取り出すと姿勢を低く構えた。油断など決してしない、真っ直ぐに相手

を見る。

「行きますわよ」

「来なさいー!」

言葉と共に彼女の右手は射撃体勢に入っていた。ハイパーセンサーを起動していて尚見えないその高速射撃を、鈴音は体を少しずらすことで躲す。そのままの勢いを利用して前にスラスターを吹かし、一気に距離を詰めた。右手に持った『双天牙月』を振り上げる。逆袈裟の軌跡はセシリアの体を薙ぐ、そのはずであった。

「んなっ!」

彼女の左手。射撃を放ったそれとは反対のそこには、一本の近接ブレードが握られていた。振り上げられた刃にそのブレードを当てることで軌道をずらし、自身も後ろに下がることで完全に回避する。後は攻撃後の隙に射撃を叩き込めば終わりである。

「くなくそおー!」

左手に『双天牙月』をもう一本。体勢を崩して尚、鈴音はセシリアへとその刃を届かせる。『クイツクドロウ』ではない通常射撃であったことが幸いし、その刃は射撃とほぼ同時に相手へと叩き込まれる。射撃は額へ、刃は心臓へ。共に、当たれば致命傷だ。

「くっ」

「とおー!」

セシリアは左手の『インターセプター』を心臓部へ動かし迫る刃を受け止める。鈴音は振り上げていた『双天牙月』を叩き付けるように銃口へと振り抜き、弾道を逸らした。お互いにゼロ距離のまま息を吐くと、示し合わせたようにバックステップで距離を取る。

「馬鹿力ですわね」

『インターセプター』を仕舞った左手の痺れを取るようにひらひらとさせながら、セシリアはそんなことを述べた。挑発効果も狙って放ったその言葉だが、生憎と既に鈴音のテンションは最高潮である。今更一言二言何か言われたところで何も変わらない。完全に彼女の頭の中は「真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばす」ことで占められていた。それが分かったのか、首をゆっくり横に振りながらセシリアはもう一

度無手で真っ直ぐに立つ。

「あたしが馬鹿力つてんなら、そっちは馬鹿の一つ覚えね」

「その言葉、そっくりそのままお返し致しますわ」

ニヤリ、と二人で口端を上げる。先程と同じ体勢であるものの、その集中力は更に研ぎ澄まされ、まるで辺りになにも存在していないかのような静寂さが生まれる。アリーナは二人だけの世界、余計な邪魔も、観客も、何も無い。今ここにいるのは自分と目の前の相手だけ。ただ、それだけ。

「つて、ちよつと待った」

「どうされました?」

さあ後はぶつかり合うだけ、そんな状態まで緊張感を高めていたその時、鈴音が奇妙なことに気付いた。キョロキョロと周囲を探るように視線を向けると、やっぱりおかしいと呟く。一体どうしたのだ、そんなことをセシリアが聞くと、ほら見てよと手を広げた。

「誰もいないわよ」

「え? あら、本当ですわ」

集中していて気付かなかった。そんなことを呟きながら鈴音の言葉にセシリアは同意した。同じように周囲をキョロキョロと見渡す。

本来ならば放課後に開放されているアリーナは練習をする生徒や観客でゴった返すはずなのだが、驚くほどの静寂をこの場は生み出していた。「まるで」、「ような」ではなく、実際に今現在ここには鈴音とセシリアの二人しかないのだ。練習する生徒も、観客も、誰もいない。

ひよつとして今日このアリーナは使用出来なかったのだろうかと首を傾げながら端末で検索してみるものの、第三アリーナは「使用可」の表示が出ている。では一体何故。そんなことを考えつつ戦闘を中断して周囲を探索したが、結果はやはり無人であるということだけであつた。

「何か、あつたのでしょうか?」

「どうなんかなあ」

特に問題が無いのならばこのまま使用させてもらえばいいのだが。

首を傾げながらもそんなことを呟いたその時である。二人の I S のセンサーが機体の反応を確認した。アリーナの入り口、今正にこちらに向かつてこようとしている機影を捉えたのだ。二人は弾かれたようにそちらへと向き直った。ゆつくりと地を踏みしめる音と、金属音が人気の無いアリーナに響き渡る。

二人は言葉を発しない。センサーが捉えたその機影は、『アンノウン』。期待名も搭乗者もそのどちらも不明。学園に通っている生徒なしいし働いている教師の機体ならばそんなことは起こり得ない。

「……」

どちらかの息を呑む音が聞こえた。二人の想像は概ね一致しており、そしてその想像はこの状況が非常に危険であると示している。逃げるか、戦うか。どちらにせよ、相手は恐らく『亡国機業』。

「……え？」

そんな覚悟は、目視出来るようになったその機体を見て吹き飛んだ。正確には、搭乗者を見て、である。

伸ばした銀髪、日本人ではないその顔立ち。それは彼女達の見知った顔で。

「ボーデヴィツヒさん？ いや、でもその機体は……」

「……アンタ、眼帯は？ っていうかその目」

彼女達の見知らぬ金色の瞳が、左右に輝いていた。

「ここに居るのは貴様等だけか」

やって来た彼女は二人と同じように辺りを見渡していたが、他に人がいないと分かるとその声を掛けた。その言葉に二人が首を縦に振ると、ならば貴様等で構わん、と一步踏み出す。

「何がよ」

「知れたこと。この体を馴染ませる練習相手になってもらうぞ」

言うが早いのか、一気に肉薄すると彼女はその拳を鈴音に叩き込んだ。いきなりの攻撃、その為一瞬反応が遅れてしまったものの、『視て

いた』おかげで一撃を躲すことに成功する。いきなり何するんだ、と叫びながら反撃の蹴りを繰り出した。カウンターであったはずのそれは、しかし彼女に難なく避けられた。

「大体、まず質問に答えなさいよ。何で目が金色なのよ、眼帯何処にやったの、ていうか昨日までと乗ってた機体違うじゃない!」

怒涛の勢いで捲くし立て、さあ答えろと鈴音は指を突きつけた。突きつけられた彼女は、ふんと鼻を鳴らし、うるさい奴だ、と言い捨てる。

「まあいい、答えてやる。私の目は元々金色だ、そしてこの機体こそが私の本当の機体だ。……赤い目も、眼帯も、『シユヴァルツェア・レーゲン』も。あんなものは、偽物だ!」

「……偽物? ボーデヴィツヒさん、それは一体——」

「ボーデヴィツヒと呼ぶな! 私はラウラだ、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』などではない!」

セシリアの言葉に被せるように叫ぶと、ラウラはその血に塗れたような赤いISを纏った腕を掲げた。その手には、一本の近接ブレードがいつのまにか握られている。どこか日本刀に似たそれを、彼女は腰に構える。居合い、彼女が行うのはどこかちぐはぐに感じられるそれを、迷うことなく行った。

「来い、有象無象。私の肩慣らしの相手になつてもらおう」

「……何だか知らないけど、要はケンカ売ってるのよね」

じゃあ買ってやろうじゃない。セシリアの制止を聞かず、鈴音は『双天牙月』を両手に構え前傾姿勢を取った。相手の居合いがどんなものかは知らないが、それを上回る速度で肉薄すれば何も問題ない。

そう結論付け、『瞬時加速』で一気に突っ込む。相手との距離が一瞬でゼロになり、そして彼女の刃がその首を刈る。

「遅い」

その前に、ラウラの居合いは放たれていた。激突するはずだった両者は、すれ違うように交差し、そして力を失った鈴音が地面に倒れこむ。突っ伏した彼女はピクリとも動かず、勝負が一撃で着いたことを示していた。

「り、鈴さん！」

我に返ったセシリアが慌てて鈴音に駆け寄る。どうやら気を失うまでには至らなかつたようで、痛い、とうわ言の様に眩いている以外は概ね大丈夫そうであった。ただ、その言葉の原因となつたであろう居合いの傷跡は深く、少なくともこれ以上の戦闘は不可能であることを窺わせた。

「……っつー。何これ、何で二回斬られてんの？」

『甲龍』に刻まれている剣閃は二つ。攻撃手段を奪う為に肩を切り裂く一撃と、相手を打ち倒す為に胴体に叩き込まれた一撃。そのどちらもが重大なダメージを与えているようで、鈴音は動かせない体に舌打ちをした。

「頭に血が上り過ぎだ。単細胞は早死にするぞ」

「うっさいー！」

鈴音の方を見もせず、ラウラはそう言い放つ。まあそこそこ体を温めるのには役に立ったか、と続けた彼女は、もういいから帰つていいぞと手をヒラヒラと動かした。それはまるで野良猫か何かを追い払っているかのごとく。

「……まだ、わたくしと戦つてませんわ」

「ふん。別にそう大差ないだろう。やるだけ無駄だ」

ゆつくりと立ち上がったセシリアはそう呟き、ラウラはそれに鼻を鳴らして返す。完全に嘗めている態度であり、そして彼女はそれがとてつもなく気に入らなかつた。

無言で『クイツクドロウ』を行い、ラウラの頬ギリギリに銃弾を放つ。振り向きもしなかつた彼女は、そこでようやく顔を向けた。そこに映つたのは、目を完全に狩人のそれに変えた一人の少女の姿。

「弱い犬ほど噛み付きたがる」

「そう思うならば、試してみては？ それとも、噛まれた痛みで泣き出してしまふのが心配ですか？」

「抜かせ、雑魚がー！」

血に塗れたかのような赤い機体と、海の底のような青い機体。観客のいない静寂の世界で、その二体はお互いを打ち倒さんと疾駆した。

『ブルー・ティアーズ』!」

セシリアのBT兵器がラウラの周囲を舞う。四方を囲い、正面には狙撃役のセシリア。彼女の基本にして、王道の戦闘パターンだ。BTの射撃を掻い潜れなければ削り切られ、躲すのならば『クイツクドロウ』で仕留める。

それが通用する相手ならば、鈴音はあれほどあっさりとやられたりはしない。

「甘いな」

BT兵器から発射されるビームをわざと掠らせるように躲し、彼女の視線は一切動かない。反応が必要なのはセシリアの射撃のみで、周囲のビットなど気にするまでも無いということなのだろう。

ラウラはそのまま左手に取り出したビームガンでセシリアへと放った。特に何の変哲も無い射撃、そう思ったセシリアはそれを難なく避けたのだが、その瞬間に右肩に鋭い痛みが走った。意識を向けると、そこにはいつの間にか放たれた二射目のビームが突き刺さっている。自身の認識の外で起きたその光景に目を見開くセシリアを余所に、ラウラは銃を連射した。その射撃を躲すたびに、見えない二射目に打ち抜かれる。

「どうした? 威勢がいいのは口だけか?」

その言葉にセシリアは何も返さない。ただ真っ直ぐに前を睨むのみである。先程までの射撃での被弾箇所は三箇所。右肩、左脚、そして腰である。戦闘に支障があるほどではないものの、このまま射撃が躲せなければ当然被弾は続き、そしてまず間違いなく彼女の敗北で終わってしまう。簡単に予想出来るその結末を思い描いたセシリアは、それを振り切るように頭を左右に振った。まだ自分は終わっていない、こちらの反撃だつてある。そう自身に言い聞かせた。

「射撃が得意なのだろうか? 撃たないのか?」

それは奇しくも目の前の相手が放った挑発と重なるもので。無性に悔しくて、普段の彼女らしからぬ表情で叫んだ。そんなこと、言わ

れなくとも分かっている、と。

「今度はそつちが、目を見開く番ですわ!」

『クイツクドロウ』で取り出した『スターライトmkⅢ』からビームが発射される。完全に虚を突いたその一撃はラウラの額のあった場所へと正確に打ち込まれ、だが寸でのところで彼女の左腕に受け止められた。高出力のビームを受け止めたその掌は煙を上げており、それを見たラウラは一瞬苦い顔をして舌打ちをした。

「あら、予想外だという顔をしてらっしゃいますわね。わたくしとしては予想通りなのですけれど」

「……ふん。まさかそんなものを使えるとはな」

褒めてやろう。動きの鈍くなった左手を動かしながら、右手に先程鈴音を切り伏せたブレードを取り出した。思ったよりも防御した左手のダメージが大きいようで、結果として先程の射撃技能を封じることも成功したようだ。とはいえ、まだ右腕は無傷であるし、左手だって全く動かないわけではない。それを体現するかのように、先程鈴音を鎮めたのと同じ居合いの構えを取り、真つ直ぐにセシリアを睨んだ。この一撃で決めてやる。言外に、そう述べていた。

「そう簡単にはいきませんわ」

「どうだかな」

「抜き放つのは一度。しかし、放つのは二撃。一撃目で相手の得物を切り裂き、二撃目で相手を断ち切る」

「……」

「違いましたか?」

「それで、何だ? 分かっていたら避けられるとでも?」

瞬時にセシリアの懐に飛び込んだラウラは、居合いからの一撃を抜き放った。目の前の相手は無手。それで動揺を誘おうとしていたのならば、甘い。先程の『クイツクドロウ』で種は割れているのだ。

彼女のそれは早撃ちというよりもむしろ今ラウラが行っている居合いに近い。持っていないように見えて、既に得物は構えている。そう考えれば話は早く、武器を切り裂く一撃目はその右手に、そして二撃目は正中線に。それで決着は着く。そう考えた彼女の眼は、次の瞬

間に驚愕に見開かれた。

『スターライト』は、二丁ありましてよ！」

『クイックドロウ』で両手に取り出したライフル。それを重ねて構えることでラウラの予想を超える衝撃を与え、斬撃を逸らしたのだ。それと同時に、その銃口を相手に向ける。二丁の銃口が捉えている先は頭と心臓部、距離はゼロ。これで躲すことはほぼ不可能。後はセシリアが引き金を引けば勝負ありだ。

無論、それは引ければ、の話である。

「なっ……!?!」

ゼロ距離からの『瞬時加速』。密着し、激突した両者はそのままアリーナの壁へとぶつかつた。ラウラのクツション代わりにされたセシリアは壁に激突した衝撃で銃口が逸れ、その隙を狙つたラウラによりライフルを纏めて切り裂かれる。爆発し、吹き飛ぶライフルの衝撃に合わせ、ラウラが放つたのは回し蹴り。側頭部に叩き込まれたそれは、彼女の体をピンボールのように弾き飛ばした。

「ちよ、セシリア!?!」

動けない状態でその戦いを見ていた鈴音が思わず叫ぶ。バウンドし地面に倒れたセシリアは、先程の彼女のように動かない。

そんな彼女へ、ラウラはゆっくりと近付いていく。別に止めを刺すわけではないようで、右手の刀は下げられていた。

「鈍っていたとはいえ、私の『一閃二断』を防ぐとはな。褒めてやろう、貴様はそこそこ強かつた」

「……勝手に、終わらせないでくださいませ」

距離にして、凡そ五歩。ISならば一瞬で詰められるその長さまでラウラが近付いたところで、セシリアはゆっくりと立ち上がった。顔は汚れ、腰のミサイルタイプのBTは衝撃でへし折れている。何とか使えそうな射撃武装は背中のBT兵器四つのみ。明らかに死に体であるその状態で、彼女はそれでも立ち上がった。

胸のダイヤモンドが光に反射し、薄く輝く。それを見たセシリアは、汚れた顔も拭わずに笑った。

「そんな状態でどう戦うつもりだ？」

「勿論、こうですわ」

取り出したのは一本の近接ブレード。右手にそれを構えたその姿を見たラウラは怪訝な顔を浮かべ、そして呆れたように溜息を吐いた。足搔くのはいいが、見苦しい。そう言っただけで右手に持ったブレードを正眼に構えた。

一閃。ラウラの一撃をセシリアは受け流す。初撃が弾かれたことでラウラの表情が変わるが、しかしすぐに冷静さを取り戻し二撃、三撃と続けた。しかし、そのどれも彼女は受け流し、止めとなるはずのその斬撃を受け付けない。ボロボロであるにも拘らず、その姿にはどこか気品が漂っているように感じられて。

「…………ふん」

「どうされました？」

「それでどうやって勝つつもりだ？ 貴様のそれはあくまで防御用。攻撃に転じればすぐにボロが出る」

セシリアは答えない。ただ、静かに剣を構えるのみである。表情は変わらず、何かを諦めた様子も見当たらない。その代わり、自身の勝利を掴み取ろうとする闘志だけははつきりと伝わってきた。

何が狙いだ？ そう言っただけでラウラは少し距離を取った。同時に、正眼から上段に構えを変える。

「狙い、ですか……。そうですわね」

言いながら、ちらりと視線を横に向けた。そこには、動けない状態で二人の戦いを見詰めている鈴音の姿が。

視線を向けられた鈴音は、目をパチクリと瞬かせ、そして納得したように頷いた。『龍咆』を起動し、倒れていた体を無理矢理起こす。その体勢のまま、唯一動く左手を振り上げた。

「どっせえええい！」

「何？」

声の方へと視線を向けると、真っ直ぐ飛来してくる一つの刃。『甲龍』の『双天牙月』、二本を連結させることでブーメラン状になったそれが、目の前に迫っていた。とはいえ、避けられない状況などでは全く無い。叫ぶことで攻撃の初動作は視認出来た上に、飛来するものは

真っ直ぐ飛んでくるのみ。軽く上体を反らすことでそれを躲すと、呆れたように溜息を吐いた。

「何かと思えば、そんな不意打ちを行おうとしていたとは。興醒めだ。さっさとケリを——」

ラウラの言葉は途中で遮られた。視線を戻した先、そこで自分に振り下ろされている刃が視界に飛び込んできたからだ。放たれた斬撃をブレードで受けるが、肉厚なその大刀の一撃は、日本刀を思わせる彼女のそれでは完全に威力を殺しきれない。後ろに引き飛ばされたラウラは、体勢を瞬時に立て直し目の前の彼女を真っ直ぐに睨んだ。

『ブルー・ティアーズ』を纏ったセシリアが構えている一対の刃。それは、先程不意打ちだと思われていたその刃。本当の目的は、ラウラに攻撃することではなく、彼女に渡すこと。

「わたくしの狙いは、これですわ」

『双天牙月』を構えたセシリアが、そこにいた。

№017 「ラウラだ」

「……嘗めているのか？ それとも自棄になったか？ どちらにせよ、ふざけた格好だ」

目の前の相手を眺め、ラウラはそんな感想を漏らした。その顔には焦りなどは欠片もなく、変わらぬ表情のまま佇んでいる。

対するセシリアは『双天牙月』を二・三度確かめるように素振りをする。息を吐き、真つ直ぐに相手を睨んだ。そこに浮かぶのは諦めでも自暴自棄でもない。純然たる闘志である。

「生憎と、そのどちらでもありませんわ。わたくし、勝ちに来てますの」

「ほう。面白い冗談だ」

「……では、もつと笑っていただこうかしら」

言葉と同時に『双天牙月』を投擲する。フェイントも何も無い真つ直ぐなその軌道は、当然の如くラウラには通用しない。最小限の動きでそれを躲すと、つまらんと吐き捨て一気にセシリアに肉薄した。右手に持っていたブレードを横に薙ぐ。常人には捉え切れないそのスピードの一撃は、当たれば容易く胴を両断する威力を秘めていた。

すぐさま『インターセプター』を取り出し、その一閃を受け流した。そのことで一瞬だけラウラの眉が動いたが、しかしそれ以上の変化は無し。すぐさま手首を返し逆袈裟に切り上げる。その一撃も読んでいたかの如く、セシリアは右手の剣で弾き返した。

「ふん、結局やることは同じか。とんだ茶番だ」

「……ええ、茶番ですわ」

ラウラの言葉にそう返したセシリアは、笑った。こんな子供騙しが通用するなんて思いもよらなかつた、と笑った。

その言葉と同時に、ラウラの機体のハイパーセンサーが後方からの飛来物を捉えた。すぐさま反応した彼女はその飛来物に対処する為にブレードを後ろに構える。

そこへ、目の前の相手がブレードを突き立てた。

「っと、流石に決まりはしませんでしたか」

「当たり前だ。自分で言っただろう、子供騙しだ」と

ブーメランとして戻ってきた『双天牙月』はブレードで弾かれ、セシリアの突きは左手の掌底でポイントをずらされていた。結果としてダメージは殆ど通らず、未だラウラは健在のまま。だが、少し距離を取る為にバックステップをしたセシリアに追撃を行わないところを見ると、多少は警戒しているのかもしれない。

弾かれた『双天牙月』を回収し、彼女は再び分割、自身のブレードを仕舞い両手にそれぞれ二刀を持つ。半身に構え、左手を前に突き出す格好のまま視線は真つ直ぐ前を向いている。

「もう不意打ちは通用せんぞ」

「あら、わたくしとしては最初に通じてしまったのが驚きでしたけれど」

「減らず口を」

ラウラは再びブレードを正眼に構える。お互いに構えたまま動かず、しかしそのままでは埒が明かない。何より、硬直はそれだけでセシリアに不利な状況へと変わっていつてしまうのだ。涼しい顔をしているが、その実彼女は満身創痍である。本来遠距離射撃用の機体である『ブルー・ティアーズ』で格闘戦を挑んでいる理由の一つがそれで、他にもう手段が無いからなのだ。

とはいえ、彼女の中ではもう一つの理由の方が余程大きいのだが。

「まだやる気か？」

「当然ですわ。わたくしはまだ動けます」

「自慢の射撃が封じられて、よくそこまで口が回るものだな」

「……当然、ですわ。今のわたくしは、これを持っていますから」

『双天牙月』を掲げる。そして、姿勢を低く構えた。大地を蹴る力とスラストーとの相乗効果で一氣に加速し、ラウラの眼前まで迫る。そのまま左右の青龍刀を力任せに叩き付けた。日本刀をベースにしているラウラのブレードでは肉厚の大刀の衝撃は殺しきれない。舌打ちしながら自ら後ろに飛び、武器の破損を最小限に留めた。

「まだまだあー！」

スラストーを吹かす。再び肉薄したセシリアは、全体重を乗せた一

撃をラウラへと叩き込む。受け止めるのではなく受け流すことに重きを置いた回避によりその一撃をしのいだラウラだったが、しかし尚も止まらない彼女の攻撃に段々と後方に追い詰められていった。

常にならぬ見下ろしているような表情であったラウラに、一瞬焦りが生まれる。下がり続けているこの状況を良しとしないのは明白であった。傍から見限りでは、打つ手が無いように見えた。

攻撃の隙間を縫い、ラウラが突きを放つ。眉間へ繰り出されたそれは、とつさに首を捻ったセシリアの行動により突き刺さることは無かったが、回避を行ったことで攻撃の手が一瞬だけ緩んでしまう。そこを逃さず、ラウラはセシリアを土台にし蹴り飛んだ。一気に距離を離すと、大きく息を吐く。

「猪か、貴様は」

「ええ、今日のわたくしは、猪ですわ。『真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばす』、最強の猪です」

笑い、そして再び前傾姿勢を取った。真っ直ぐ相手を見て、真っ直ぐ突っ込み、そして真っ直ぐにぶちのめす。彼女の頭の中を回っているのはそれのみだ。

凰鈴音と共に、この勝利を掴む為に。

「……友の為か」

「下らないと一笑するならしなさい。貴女が惨めだという証左になるのですから」

真っ直ぐに突っ込む。『双天牙月』を振り上げ、そして叩き付ける。

普段の彼女からは考えられないほど強引で野蛮な一撃。相手を確実に倒す為の、全力の一撃。

それを真っ直ぐに見詰めていたラウラは、大きく息を吸い、吐いた。その二つの金の瞳が、揺れる。それを合図にしたかのように、背中で折りたたまれていたウィングバインダーがゆっくりと展開した。

「っ!？」

その一撃は確かに彼女の胴に叩き込まれた。だが、セシリアに伝わってくるのは空を切る感触のみ。一瞬の動揺が生まれたのと同じ時に、目の前に立っていたラウラの姿が掻き消えた。

「まさか格闘、射撃に加え機動まで使わせるとはな。——誇るがいい。貴様は私が倒した相手の中で最強だ」

声は背後から聞こえる。それを何故、と思う間もなく、背中に斬撃を食らいセシリアは吹き飛んだ。アリーナの壁まで飛ばされた彼女は、攻撃と激突のダメージとで悲鳴を上げることなく糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

鈴音の彼女を呼ぶ声がアリーナ全体に響く中、ラウラはゆっくりと踵を返した。そこに浮かぶのは、何か面白そうなものを見付けた子供のような表情。どうやら自分が眠っている内に、中々手応えのある奴等が出てきているようだ。そんなことを考えたラウラは思わず笑みを浮かべてしまう。これは、壊し甲斐がある。思わずそんなことを呟いた。

「セシリア、ねえ、大丈夫なの？ まさか死んじゃったりしないわよね！？」

「……大丈夫ですから、大声を出さないでくださいませ。頭に響きますわ」

場所は保健室。動けるまで回復した鈴音が動けなくなっていたセシリアを運び込んでから十数分。ようやく意識がはつきりしてきたセシリアを、鈴音は心配そうな顔で見詰めていた。

ISを装備していたので外傷自体はそこまで大したものではない。内部衝撃と疲労が彼女がベッドに横になっっている主な理由だ。対する鈴音はほぼ無傷であった。

「ごめん、あたしの所為で」

「あれは、わたくしが勝手にやったこと。気に病む必要なんかありませんわ」

むしろ謝るのはこちらの方だ、とセシリアは笑う。あれだけ大口を叩いておいて、結局倒されてしまったのだから。そう言うとな彼女は頭を下げた。

鈴音はそんな彼女にゆっくりと首を横に振る。セシリアはしつかりと見せてくれた。柔らかく笑いながら、そう続けた。

「あたしの目指す先が、また一つ増えちゃった」

「……大げさですわ」

そう言つてそっぽを向くが、その首筋は赤い。恐らく顔も真っ赤になつていようとする。予想した鈴音は、その笑顔を更に強くさせた。

そのタイミングで保健室の扉が開く。大丈夫か、と声を掛けながら入ってきたのは一夏と箒であった。騒ぎを聞きつけて慌てて来たらしく、二人共に剣道着のままである。

「あら、一夏さんと箒さん。情けない姿をお見せしてしまいましたわね」

「いや、そんな軽口はいいつつの。大丈夫なのか？」

「暫く横になつていれば問題ない程度のもですわ。明日の授業もちゃんと出席出来ますし」

「そうか、良かった。……機体の方はどうだ？」

「あたしもセシリアもズタボロ。つってもまあ、すぐ直るけどね。……明日は、ちよつと無理だけど」

せつかく合同の実習のにな、と鈴音はぼやく。そんな二人の姿を見たからか、一夏と箒は安堵の溜息を吐いた。それならちよつとジューズでも買つてくる、と一夏は保健室を飛び出す。

残つた箒は、表情を真剣なものに戻し、少し聞きたいことがあると二人に訊ねた。

「お前達二人を叩きのめすことが出来る輩に私は心当たりが無い。幸い一夏はまだ感付いていないが、まあ時間の問題だろう。……『亡国機業』なのか？」

彼女の懸念はそこであった。『亡国機業』の差し金であったならば、被害が拡大する可能性がある。そうならない為にも、早急に『しのの』として対策を練らなくては。そう考えたのだ。

だが、二人は揃つて首を横に振る。そうではない、と否定の言葉も紡いだ。

「……二人で戦つた結果そうなつた、のか？」

「違う違う。まあ、最初はあたし達二人で戦ってたんだけど、途中からあいつが」

「あいつ?」

一体誰だ、と箒は詰め寄る。セシリアはそんな彼女を見てどうしたものかと頭を悩ませた。伝えるのは簡単だが、しかし。

あれは本当に自分達の知っているラウラだったのかという疑問が、彼女の中で消えないのだ。

「ラウラよ」

「鈴さん!」

「え? 言っちゃまずかった?」

そんな彼女の疑問など露知らず、鈴音はあっさりとその人物の名を口に出していた。思わず叫んだが、しかし言つてまずいかと問われると首を捻つてしまう。言わなかった場合、何かの拍子に情報が伝わりと更に厄介な事態になりかねないからだ。

結局セシリアはここで全てを説明することにした。彼女の中で燻っている疑問も、全て。

「ボーデヴィツヒではない、ラウラだ、か……」

話を聞いた箒もどうやらセシリアと同じ結論に至ったようで、何かを考えるように腕組みをしたまま動かない。時折何やら呟いているが、その声は小さくセシリアには聞き取れなかった。

そんなことを暫く繰り返した箒は、一度大きく頷くと踵を返した。すまないが用事が出来た。そう言うと、保健室の扉へと歩いていく。

「箒さん」

「何だ?」

「確かめるのですか?」

「……百聞は一見にしかずだ」

そのまま箒は部屋を出る。残された二人は言つてはまずかったのかもかもしれない、とお互いに顔を見合わせた。だが、どのみち後の祭りだ。既に彼女は行動を起こしてしまったのだから。

「お待たせー、ジュース買って来たぜ。って箒は?」

「用事があるらしくて、帰られましたわ」

しれっとそう答えるセシリアのポーカーフェイスに、鈴音はこっそりと拍手を送った。

翌日。鈴音が言っていたように、合同実習の時間である。前回までの合同実習ではいなかった専用機持ちを眺めながら、千冬はさてどうしたものかと頭を悩ませた。万全ならば専用機持ちを先頭に少し進んだ機動訓練を行おうと思っていたのだが、しかし。

「まさか二人見学とはな」

「あははは……」

「面目ないですわ」

グラウンドの隅のベンチに座る二人を見る。事情はある程度聞いているので文句を言うわけにもいかず、予定を狂わされた彼女はしようがないと肩を竦めた。少し早いが実戦訓練でも行うとしよう。そう結論付け、千冬は隣に立っていた真耶にその旨を伝える。こくりと頷くと、彼女は用意の為にグラウンドから更衣室へと足を進めた。

「そういえば、もうすぐ学年別のタッグトーナメントの時期だな」

それを目で追っていた千冬は、ふと思いつき出し呟いた。丁度いい、と一組二組の面々を見渡し、お前達は今度のイベントのルールを知っているかと述べる。名前は聞いているが細かいことは知らない生徒が大半だったようで、彼女達は皆首を傾げていた。

「まあ、そんなものか。このイベントは、まあ名前の通りタッグで戦う学年別トーナメントだ。生徒はそれぞれ二つのブロックに分けられ、それぞれの優勝者が最終決勝を行うという形式になっている」

ここまでは恐らく知っている者もいるだろう、と続けると、千冬はそこで息を一つ。問題はここからだ、そう言うと、ニヤリと口角を持ち上げた。

「このタッグはコスト制でな。大雑把に分けると、一般機・カスタム機・専用機の順にコストが上がっていき、より高いコストの機体は敗北判定値が高めに設定される。タッグであることも考慮して、その組の総コストで上下するようになっていくわけだ」

専用機と一般機では性能に差が出てしまう為、ハンドレとしての措置なのだろう。この為に、同じ攻撃でも一般機ならば戦闘続行可能だが専用機ならば敗北に至る、という事態も考えられるわけである。

「考え無しで高コスト同士で組むと痛い目に遭うかも知れんぞ。なあ、織斑、篠ノ之」

「何で名指してこっち見やがるんですか織斑先生」

「お前達の機体がこの学年で一番高コスト機体と認定されているからだ。お前達二人が組むと、恐らく一般機同士が組んだ場合の六分の一下のシールドエネルギーになるぞ」

「はあ!? 何で!?!」

「……お前の機体の製作者の名前を言ってみろ」

「束さんだろ? それがどうした——あー、成程」

納得したように頷くと、一夏はがくりと頭を垂れた。めんどくせえ、と呟いているところを見ると、どうやら想定外の事態だったらしい。対する篤は、同じように溜息を吐いているものの、多少予想はしていたらしく彼ほど落ち込んではいない様子。

「とまあ、パートナー選択は重要だ。しっかり悩めよ若人」

そろそろ準備も出来た頃だな、と千冬は空を見た。それにつられるように他の生徒も空を見上げると、なにやら接近してくる飛行物体が一つ。そのスピードは尋常ではなく、『瞬時加速』もかくやという勢いである。

飛行物体は生徒達の上空で急停止、旋回すると、ゆっくりと地上に降りてきた。千冬の隣に立つように着地したそれは、IS。

普段の情けなさからは想像出来ないような雰囲気纏った、山田真耶女史の姿であった。

「よし、ではさっそく実戦の講義に入ろう」

そう言うと千冬は隣の真耶に視線を送る。こくりと頷くと、彼女は右手に収納領域から一丁のハンドガンを取り出した。その拍子にずれた眼鏡を左手でこっそりと直すその姿は、はやりいつもの彼女だということをおぼろげに思わせる。

そんな彼女を横目で見つつ、千冬は並んでいる生徒に向かって声を

張り上げた。今から山田先生と模擬戦を行い、勝った者は無条件で成績を一段階上げてやる、と。その言葉に沸き立つ生徒達。我先にと手を挙げ列から前に出て行く。

そんな状況の中、全く動かないで傍観している生徒が若干名。言わずもがな一夏と箒、転校生であるシャルルとラウラ、そして本音と癒子とナギである。人だかりになつてきたので少し離れた場所に移動した彼女達は、自然と見学している二人の場所へと向かつていた。「珍しいわね、一夏がこういうのに参加しないなんて」

そう言うのと鈴音は笑みを浮かべる。言葉こそ問い掛けるものだが、どうやら付き合いの長さで何となく察したらしい。だが、隣のセシリアは彼の行動が読めず首を傾げていた。否、理由になりそうなものは彼女も分かっているのだが、彼の普段の行動からすれば消極的なのが気になったのだ。

「だって千冬姉は俺が負けたら確実に膨大な課題出してくるぜ」

「あら、負ける前提で話を進めるとは珍しいですわね」

「分かつて言ってるだろセシリア」

「何のことでしょうか？」

彼の言葉で答えを見付けたらしい彼女は、惚けたように微笑む。反対側では、本音が成程成程と首をコクコク動かしていた。

一夏とは関係なく事情を察しているシャルルとラウラは我関せずと真耶と多数の生徒が戦闘準備を行うのを眺めているが、どっちつかずの位置にいる癒子とナギはどうしたものかと視線を彷徨わせていた。彼等と接していた頻度が高い彼女達は、何か嫌な予感がしたのだ。

「えーっと、誰か教えてくれないかなー、なんて」

「私達だけ置いてきぼりなんだよね」

結局この場の誰かに聞くという選択肢を彼女達は取った。おずおずと手を挙げながら述べたその言葉に反応したのはほぼ全員。その内セシリア、シャルル、ラウラの三人は知らないのかと目を見開き、そして向こうの光景に視線を移して納得していた。

「成程、だから平然と勝負を挑んでいるわけか」

「僕はてつきり皆で掛ければ何とかなるかもって思ってるんだと」

ラウラとシャルルはそう呟く。そしてセシリアは二人へと向き直ると、しようがないですわねと溜息を吐いた。そして、日本人はISといえは織斑千冬と思っているくらいがあるのでしようか、と一人ごちた。

『陽炎』という名に聞き覚えは？』

「え？ えっと、確か……日本の国家代表のIS、だっけ？」

ナギが自身の記憶を頼りに自信無さげではあったが答える。ちなみに癒子は考えるのを諦めていた。

セシリアはその言葉を聞き、正解と頷いた。そして、続ける。

「では、そのパイロットは？」

「え？ えっと、えっと……誰だっけ？」

機体は覚えている。驚異的な機動を誇り、ヴァルキリーの一人に選出されていたのも思い出している。だが、肝心の顔が出てこない。ナギも癒子も、何とか必死で記憶を探したが、答えは出そうに無かった。

「——山田真耶。それが、日本の国家代表で『陽炎』のパイロット、機動部門ヴァルキリーの名だ」

「ああそうだそうだ山田真耶！ ……え？」

「山田真耶？ あれ？ え？ 嘘？」

その光景を見ていた箒が代わりに答えを導き出す。それを聞いた二人はそうだそうだと湧き、そして驚愕に目を見開き慌ててグラウンドの中心部へと視線を移した。

そこには、戦闘を開始せんと空中に佇む真耶と、十人以上の生徒達。圧倒的多数の相手を見ても、全く余裕を崩していない姿がそこにあった。

「で、でも機体、あれ『ラファール・リヴァイヴ』だよ！」

「素人相手に『陽炎』はいじめでしかありませんわ」

「だがあの機体、山田先生用にカスタムしてあるな。ブーストリミッターが極限まで引き上げられている」

「普通は制御出来なくて墜落するのが関の山だね」

いつの間にか集まっていた本音が箒の言葉に補足するように被せ

た。その横ではやはりいつの間にか集まっていた一夏と鈴音がうんと頷いている。

始め、という千冬の声が聞こえた。生徒達は一斉に銃を構え目の前にいる真耶を打ち抜かんと引き金を引くが、その時には既に彼女の姿はそこになかった。まるで掻き消えるように、陽炎のように揺らめいてその姿を消した。

一人の悲鳴が聞こえた。別の一人が声の方に視線を向けると、そこには既に頭を打ちぬかれ『絶対防御』が発動し落下していく仲間の姿が。え、と声を出した時には、彼女も眉間にハンドガンを押し付けられていた。

「うわあ……」

「み、見えない……」

見学者一般人代表の癒子とナギは、目の前の光景が理解出来ない。高速で動く『何者か』が次々に生徒を撃墜していく。そうとしか捉えられない。時折聞こえる激しい銃声はがむしやらに生徒達が撃つ音で、対称的に短く静かな銃声は真耶のものだ。

時間にして二分経ったか経たないか。その頃には対戦相手であった生徒はことごとく撃墜され地に伏していた。空中で一人余裕で佇む真耶を見て、やる気満々であった残りの生徒達が波が引くように下がっていく。千冬が次の相手はもういないのか、と訊ねても、前に出るものは皆無であった。

その光景を満足そうに見ながら、彼女はパンパンと手を叩く。生徒を再び整列させると、さて、と声を挙げた。

「これから基礎の実戦演習に入るが、その前に一つ言っておくぞ。山田先生を嘗めてもらっては困る。これからはちゃんと敬意を持って接するように。というかだな、お前達は日本の国家代表の顔くらい覚えておけ」

やれやれ、という千冬の溜息は、撃墜された生徒や我先にと挑んだ者達に深く突き刺さった。

「ああ、知ってて挑まなかったへタレな織斑は後で説教だからな」「理不尽!?!」

「お疲れ様」

「お疲れさん」

「お疲れ様ですわ」

「お疲れさま」

「お疲れー」

「お疲れさま」

織斑千冬の理不尽なるありがたい説教を聴かされた一夏を労う一行は、そのまま昼食タイムへと突入していた。一夏は手だけでその労いに返答すると、自身の机に体を預ける。昼飯食う気力湧かねえ、とその体勢のままぼやいた。

そんな彼を見た箒は、そうかと一言呟きカバンから二つの弁当箱を取り出した。一つを自分の前に置き、もう一つを皆の前に掲げる。

「一夏の弁当いらぬそうだが、誰か食うか？」

「あ、あたしもうー！」

「食うよ！ よこせよ！ 箒の弁当楽しみにしてたんだから！」

「いらぬと言ったではないか」

「言つてねえ！ 大体昨日の勝負で勝った報酬なんだから、そこで誰かに渡すのはおかしいだろ！」

「キャリーオーバーというやつだ」

「宝くじみたいなこと言つてんじゃねえよ！」

吼え、そして箒の手から弁当をひったくった。包みを開き、蓋を開け、そして真つ先から揚げを掴むと頬張る。幸せそうな顔をした一夏は、そのまま白米を掻き込んだ。続いてほうれん草の胡麻和えを口に入れ、鮭の塩焼きに手を伸ばす。

「美味しそうに食べますわね」

「見てて分かるくらい幸せそうなものね」

セシリアとナギがそんな感想を漏らす。隣では癒子と本音がうんうんと頷いていた。箒はそんな一夏を満足そうに見詰め。

そして。

「うぎぢぎぢぎ」

「……鈴さんは何を唸っていらっしやるのでしょうか」

「……嫉妬、かな?」

「どっちに?」

ナギが言い終わるか終わらないかのタイミングで、鈴音は一夏の弁当に手を伸ばした。から揚げを素早く引っ掴むと、彼が反応するよりも早く口に入れる。一夏と同じように幸せそうにそれを食べると、大きく息を吐いた。

「何しやがる鈴! それ最後の一個だったんだぞ!」

「から揚げが囁いてたのよ。あたしに食べて欲しいってね」

「お前が食いたいだけだろ!」

「そうよ」

「うわ開き直りやがったよこいつ」

「ったく、器の小さい奴よね。……ほら、あたしの弁当少し分けてあげるから」

「……酢豚って弁当に入るもんなのか? まあいいや」

どうやら手打ちになっただけらしい。お互いに弁当を交換しながら食べるその光景は、傍から見ると邪推したくなる姿である。

結局ナギの質問の答えは出そうに無かった。

「それで、タッグトーナメントのパートナーはもう決めたの?」

騒がしい食事も終わり、自然と雑談が弾む中、癒子はそんなことを言い出した。先程の授業で言われたばかりの話ではあるが、決定とはいかなくとも候補くらいは用意しているのではないかと踏んだらしい。

それに真っ先に反応したのは、他の誰でもない布仏本音嬢である。

「はいはいはいはい! 私もう決めてある!」

「うん、知ってる」

「更識さんだろ?」

「もちろん!」

そう言っただけで彼女は胸を張る。半ば予想出来ていたものでそれに対する反応は皆いまいちであった。他に誰かいないのかな、という癒子の

声がそれを物語っている。

「あたしは、セシリアと組もうかなって思ってるんだけど」

次に口を開いたのは鈴音。隣に視線を送りながら、彼女らしくないおずおずといった感じの発言であった。対するセシリアは迷うことなく首を縦に振る。こちらこそ、よろしくお願いしますわ。そう言つて右手を差し出した。

「へ？ 自分で言つたいてなんだけど、いいの？ 専用機同士は大分耐久値下がるわよ？」

「承知の上ですわ。何より、わたくしも鈴さんとタッグを組もうと思つていましたから」

その言葉を聞いた鈴音は、満面の笑みでその手を握り返した。一気に優勝だ、という言葉に、セシリアも同意し拳を振り上げた。

そんな光景を見ていた男子一人は、あつけに取られた表情を浮かべている。

「え？ マジ？ 俺、鈴かセシリアがいいなって思つてたのに」

そう呟いているが、既に後の祭り。一体全体どうしたものかと一夏は真剣に悩み始めた。

それに首を傾げたのはナギである。そんなにパートナーに困るような人物だったであろうか、と。何より、一番パートナーとしてベストな彼の幼馴染がすぐ隣にいる。

そんな彼女と同じ疑問を持ったのか、癒子も首を傾げ、そして一夏に訊ねていた。

「んー。千冬姉の策略に引つ掛かるのもそれはそれでなんだかなあつて思うんだよな」

わざわざ授業中に名指しでタッグの例として説明を行ったのは、暗にその組み合わせをやるものならやってみろという示唆でもある。姉の掌で踊らされるのは彼としても面白くなかった。

「じゃあ、別のパートナーを探すの？」

「そうなるかな。あ、ちなみに谷本さん、鏡さん、どっちか俺と組む気ないか？」

「あー、うん。ちょっと、私は遠慮しておく、かな」

「うん、同じく。私じゃ織斑君についていけなさそうだし」

「ごめんね、と謝る二人に気にするなと返すと、一夏はいよいよ八方塞かと頭を抱えた。

数少ない男子生徒としての珍しきでどうにかなるかとも考えたが、お誘いが全く来ない以上どうにもならないのだろう。そう結論付けて肩を落とした。

「向こうはあんなに引っ張りだこだったのに」

視線を教室の入り口付近に移す。そこには数多くの女子に囲まれ困ったように笑うシャルルの姿があった。どうやら一夏の言う通り、パートナーになって欲しいというお誘いらしい。

「……俺とシャルルの何が違うんだろうか」

「顔だな」

「やかましい！ 言にくいことをズバツと言うんじゃねえよ！」

「あ、あたしは一夏の顔、す、好きよ」

「ああうん、ありがとう鈴。俺もお前のそういうところ好きだぜ」

「好うつ!？」

「落ち着いてください鈴さん。はい、お茶」

多分そういう変人部分じゃないかな。そう思ったが声には出さない癒子とナギである。

結局話はそのまま纏まらず、一夏のパートナーは未だ候補無し。昼休みもそろそろ終わる。

「ここまでできてしまえばしょうがない、と一夏は箒へと向き直った。千冬姉に負けたみたいで嫌だが、と続けた。

「箒、俺と組んでくれ」

当然答えはイエス。そう誰もが思っていた。ここで彼女は断らない。そんな確信を持っていたのだ。

「ああ、すまない一夏。実は私はもう組む相手を決めているのだ」

「……………え？ マジ?？」

だから、箒からその言葉が出た時、一夏はそんな間抜けな返ししか出来なかった。他の面々もそれは同じで、信じられないものを見るような目で彼と彼女を交互に見やる。

そのまま、無常にも昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。慌てて席を立ち各々の場所へと皆が戻る。ただ、混乱状態からは抜け出せていない。

それでも、一夏は箒の背中に声を掛けた。一体、誰と組む気なんだ、と。自分ではない誰か、それが何者なのかが、混乱よりも上に来たのだ。

その質問で振り向いた箒は、特に何も変わることなく平然と述べる。なんてことないように述べる。

「私が組む相手は、ラウラだ」

№18 「俺と組んでくれ！」

「……何か用か？」

「別に」

「なら何故私を睨んでいる」

「別に」

「言いたいことがあるなら言え」

「別に」

「……織斑一夏、お前は——」

「申し訳ありませんボーデヴィツヒさん、今連れて帰りますわ。はいはい、いい子ですからこちらに来ましようね」

「子供か俺は！ 離せー！」

「……何なんだ？」

「お気になさらず」

ズルズルとセシリアに引きずられていく一夏を見ながら、ラウラは一人首を傾げた。状況が全く分からない、一体全体どういうことだ。そんな言葉が頭を巡る。

それに助け舟を出すように、いつの間にか隣に立っていた箒がセシリアと同じように気にするなど述べた。私とお前が組んだから拗ねているのだ、そう言っただけ彼女は笑った。

「子供か……」

「子供だ」

断言する箒を横目に、ああ確かにあの対応のされ方は子供そのものだったな、とラウラは思う。さしずめセシリアは母か姉かといったところであろうか。

そこまで考えた彼女は、一夏の本当の姉のことを思い出し苦い顔を浮かべた。どうした、と隣の箒が訊ねるが、何でもないと言った。彼女は答える。表情が何でもないわけがないことを物語っていたが、箒は敢えて何も聞かず「そうか」と続けた。

織斑千冬。織斑一夏の姉にして、ラウラの尊敬する『教官』だ。彼女の記憶のほとんどは千冬と共に過ごしたことで埋められている。

苦しい時も楽しい時も、思い出は常に彼女が傍にいた。

そんな尊敬する人物の弟、一夏の話を手ウラは聞いたことがある。どうしようもない弟だ、と笑いながら答えた彼女の『教官』は、その言葉とは裏腹にどこか誇らしげに見えた。だから、思わず訊ねてしまふ。自慢の弟なのですか、と。

「当たり前だ、馬鹿者、か……」

「ん？ どうした？」

「ああ、独り言だ。気にしなくていい」

思わず呟いていたらしいその言葉に反応した筈にそう答え、ラウラはもう一度一夏に視線を移した。セシリア、本音、癒子、ナギ、ついでにどこからかやって来た鈴音の五人に囲まれ説教を受けている男を見て、彼女は思わず溜息を吐く。あんな奴のどこが自慢なのだろうか、そんな疑問まで頭をもたげてくる。

ドイツで育てた他のISパイロットより、最も優秀な生徒であった自分より、あんな男の方が自慢なのか。そう思うと、彼女はどうしても一夏を敵視してしまう。どうしても友人とは呼べなくなってしまう。クラスの他の面々は胸を張ってそう呼べるのに、だ。

それが嫉妬だということは気付いている。ただのヤキモチ、馬鹿にしたあの男と同じ子供っぽい感情だということも分かっている。

分かっている、それを抑えられない。

「私も結局ただの子供か……」

自嘲気味にそう呟く。無意識の内に、彼女は左目の眼帯に手を触れていた。自分でも気付かない内に、別の誰かが操ったかのように。

触れた眼帯の奥にある瞳が、ジクジクと疼いている気がした。

「まずい、非常にまずい」

放課後である。既に授業を終えた生徒は各々の活動を始め、教室に残っている生徒は多くない。そんな場所で、一夏は頭を抱えて唸っていた。

彼の悩みは至極簡単で、遠くない内に行われる学年別タッグトーナメントのパートナーが見付かっていないことであつた。当てが無くなつた彼はクラスメイトに聞いて回つたのだが、結果は惨敗。組む相手が見付からなかつた場合同じような境遇の生徒同士ランダムで決められるらしいのだが、このままでは一夏はそのグループに入ることは確実であつた。

「つていうか、シャルルは引く手数多なのに俺は何でこんな状態なんだよ」

昼にも言つていたことをもう一度呟く。世の中理不尽だ、そんなことを続けながら、一夏は机に突つ伏す。

そんな一夏の背中に声が掛けられた。顔を上げ振り向くと、見覚えのあるクラスメイトがこちらを見て微笑んでいる。出席番号一番、相川清香。ハンドボール部で趣味はスポーツ観戦とジョギング。そんな凄くどうでもいい情報も確認をしつつ、彼は彼女にどうしたんだと返答した。

「いや、なんだか凄く落ち込んでるなあつて」

「そう思うならパートナーになつてくれよ」

「うーん、それはちよつと」

結局同じ反応しか返つてこないのを見て、一夏は再び大きく溜息を吐く。一体何が悪いんだ、そう漏らしながら再び机に突つ伏した。

「あはは。でも、それはしようがないと思うんだ」

「何でだよ」

「あの授業のとき、織斑先生が言つてたじゃない。高コストの機体と組むと耐久値が下がるつて」

「ああ、言つてたな。それがどうしたんだよ」

「織斑君の機体つて最高コストなんでしょ。一般機にしか乗れない普通の子は敬遠しちゃうんじゃないかな。他の子と比べて凄いハンドデになつちやうし」

清香のその言葉を聞いて、何となく納得が行つた一夏は突つ伏したまま更に落ち込んだ。ジーザス、と呟いているその姿は完全に負け犬のそれである。

彼女の言葉からすれば、つまり一夏のパートナー足りえるのは一般機以外を駆る人物だということになる。が、一年生で専用機持ちは既に全員がパートナーを決めているわけで。

「八方塞じゃねえかよ」

ランダム抽選で決められたパートナーでは、とてもじゃないが勝ち抜くことは出来ない。そう思っている彼にとって、それは死刑宣告に等しかった。清香はそんな彼を見て、頑張つてねと無責任にエールを送ると部活へと向かう。

そして再び彼は取り残された。

「あーもうどうすりゃいいんだよ。実は誰か専用機持つてましたとかそういうサブライズ転がってねえかな」

体は突っ伏したまま、顔だけを上げて教室を見渡す。当然のことながら、そんなことが起きるはずもない。一人また一人と教室を出て行く姿を見つつ、彼はガクリと肩を落とした。

そんな一夏の元に聞こえてくる大勢の声。起き上がりそちらを見ると、どうやらシャルルが廊下を歩いているようであった。声からすると、まだパートナーになってくれという要望が溢れているのだろう。そんなことを考えながら、一夏はぼんやりとその姿を見る。

「……待てよ」

要望が溢れているということは、まだ彼はパートナーを決めていないということだ。そして、彼の機体は専用カスタム機。

これしかない、と一夏は勢い良く席を立った。教室を飛び出し、女子に囲まれている一人の少年の下へと走り出す。囲んでいる女子が何事だと彼を見詰めるが、そんなことは気にせんとばかりにシャルルへと駆け寄り、そして叫んだ。

「シャルル、俺と組んでくれ！」

突然のお誘いに周りの声がピタリと止まる。その場にいた全員が一夏へと視線を向けていた。一体こいつは何を言っているんだ。そんなことを言いたげな瞳が彼を突き刺す。

だが、その言葉を聞いたシャルルは二・三度目をパチパチと瞬かせると、考え込むように顎に手を当てた。しばし視線を彷徨わせていた

彼は、やがて答えを決めたのか笑顔を浮かべて一夏を見た。

「いいよ、僕と組もう、一夏」

えええ、と周りにいた女子の不満の声が上がる。「織斑君は変人だよ」だの、「織斑君と関わると変人になるよ」だの、「織斑菌に掛かっちゃ駄目だよ」だの、割と言いたい放題でシャルルを止めようと説得を行っていた。

「織斑菌って……」

「だって、あの代表候補のオルコットさんがいつの間にかあんなになっちゃったし」

「俺とセシリアにトコトン失礼だぞ」

「長く接している篠ノ之さんと凰さんはもう手遅れだし」

「そういう言い方はないんじゃないのか？ 流石に俺もカチンと――」

「全部織斑君が関わってるからだよねえ、って」

「そこに至っちゃうの!? イジメ!? ねえこれイジメなの!？」

どうやら女子の中で一夏と関わる面々は被害者、元凶は彼という図式が出来上がっているらしい。彼女達は悪くない、悪いのは一夏だ。そう言わんばかりの言葉が地味に彼を傷付けた。

「あ、ごめん。でもそういうわけじゃなくて」

「どういうわけだよ」

「えっと、織斑君ってさ、あれなんだもん」

「どれだよ」

「あれよあれ。『残念なイケメン』」

「やかましいわ!」

止めを刺された一夏は吼える。その叫びにキヤイキヤイ言いながら女子達は蜘蛛の子を散らすように逃げていった。そのまましばらく去っていた女子達を目で追っていた彼は、力尽きるようにガクリと肩を落とす。

流石IS学園、男子の人権マジ低い。そんな呟きをしながら窓の外
の遠くの景色を眺めた。

「えっと、一夏?」

「あ、ああ悪いシャルル。ついちよつと現実逃避をだな」

「大丈夫だよ。彼女達も本気で一夏を嫌ってるわけじゃないだろうし」

「知ってるよ。知ってるけど、女子の群れの中のいじられキャラ的ポジションって地味にキツイんだぜ」

「あはは」

笑うシャルルに笑い事じゃないと一夏は溜息を吐きながら返した。そのまま暫く窓の外を眺めていた一夏だったが、表情を戻すと振り向き訊ねる。本当にいいのか、と。

「うん、僕としても願ったり叶ったりだよ」

「そうなのか？　こう言っちゃ何だけど、俺なんかより他の女子と組んだ方がよっぽどいいと思うぞ」

「それでもないよ。彼女達より、実戦慣れしている一夏の方がパートナーとしては信頼出来るからね」

「そんなもんか？」

清香に言われたこととはまた違う考えを述べられ、一夏は思わずそう呟いた。耐久値が著しく下がるハンデを負ってまで組む価値。成程、これが一般機を使う者と専用機を持っている者の違いか、と感心したように頷いた。

「よし、じゃあそういうことなら改めて。よろしく頼むぜ、パートナー」

「うん。こちらこそよろしく、パートナー」

笑顔を浮かべた二人は、廊下でがっちり握手を交わした。

時は進んで土曜日。晴れてパートナーを得た一夏は、早速とアリーナまでやってきていた。最近の平日は中間考査の勉強に時間を取られており、ISの訓練を行う時間がほとんど取れていない。その為、久しぶりのアリーナの空気に一夏のテンションはうなぎ上りになっていた。

「人が多いな」

「きつとみんな同じなんだろうね」

土曜日や休日・祝日のアリーナは全て開放されており、彼等と同じような者達で溢れかえっていた。視線を巡らせると、彼等の見知った顔もそこかしこに見られた。

とはいえ、そんなことを気にしてもしようがない。一夏は早く動きたくてうずうずしており、そんな彼を見てシャルルも思わず笑みを浮かべる。

「じゃあ特訓を開始しますか」

「おうよ」

一夏とシャルル、お互いに『白式・雷轟』と『ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ』を纏い、共に空へと駆け上がる。まずはお互いの武装の確認、とそれぞれの武器を使い簡単な模擬戦を繰り広げた。

一夏の『白式』の特殊換装機構『金鳥』により三タイプに変化する動きに合わせるように、シャルルも『ラファール・リヴァイブⅡ』の豊富な『拡張領域』を生かした戦法でそれに食らい付く。『真雪』には的を絞らせずに高速移動を絡めた格闘戦、『飛泉』には接近されないように射撃弾幕を張り相手の防御力の低さから飛び込むことを躊躇させ、『雷轟』は左手の盾を絡めたカウンターにより機動力を生かさせない。

とはいえ、それを甘んじて受ける一夏ではなく。高速換装機構の名前は伊達ではなく、相手の得意なフィールドに切り替わらないように細かく換装を行い対抗した。高速移動には『雷轟』の機動力で、弾幕には『真雪』の防御で、防御には『飛泉』の攻撃力で。双方が自身のフィールドに引き寄せようと空中で激しく激突した。

「ふう、こんなもんかな」

「あー、だな」

そう述べ、二人は地面に降り立つ。先程の模擬戦を思い出しながら、二人の戦い方の反省会を始めた。

「しかし、凄いな。話には聞いていたけど、本当に瞬時に換装するんだ」

「シャルルは生で見たこと無いんだっけか」

「あの時見たような気はする、くらいかな」

映像ではしつかり見たけどね、とシャルルは笑う。おかげで自分の戦い方が上手く出来なかつたよ、そう続けた。

彼の戦い方は豊富な武装を使った『砂漠の逃げ水』と呼ばれるものだ。押ししても引いても一定の距離と攻撃レベルを保ち、相手に自分の戦い方をさせないそれは、確かに名前の通りであるのだろう。

だが、逆に言えば、相手がその戦い方が出来るのならその真価はほとんど発揮出来ないということだ。相手の得意距離を乱すのが目的であるのに、それそのものが得意距離ならば意味が無いからだ。そして、一夏の『白式』は正にそれが機体コンセプトであった。

「俺の場合は機体任せなんだよな。シャルルみたいに技術でやってるわけじゃない」

「へえ。……あれ、そういうえば、『白式』って『後付武装（イコライザ）』がないの？」

戦闘データを眺めながらシャルルは問う。それに一夏はそうなんだよな、と頭を掻きながら答えた。何せ『拡張領域』が空いていないらしいから。自身の機体のステータス呼び出しながらそう続ける。

「まあ、パッケージを三つ収納しているんだし、しょうがないのかもね」

「それとは別に『金鳥』もあるしなあ」

「高速換装機構、だっけ。それが『白式』の第三世代兵装なんだっけ」

「ああ、そうだぜ。……正直、セシリアのBT兵器や鈴の『龍咆』と比べると地味なんだよなあ」

「そんなこと無いと思うけど」

むしろ充分派手だ。シャルルはそう続けた。なにしろ、戦闘中に別の機体が変わるのだ、インパクトは充分であろう。相手にとつては三体和戦うようなもので、他の第三世代兵装と比べて厄介さは上であると言える。

「とは言ってもなあ。同じ『しののの』製第三世代でも、箒の機体の特殊兵装なんかすげえんだぜ。東さん絶対妹贖してるって」

派手だし、と言いなながら視線を移動させる。そこには赤と黒が舞っている姿があった。赤は『紅椿』、黒は『シユヴァルツェア・レーゲン』。箒とラウラのコンビが特訓をしているのが彼等の位置から見えたのだ。

「篠ノ之さんの武装？　そういえば、学園の記録にも載ってないね」
「ああ、まだあいつ一回もここで使ってないし」

派手に暴れたのは入学してすぐの時くらいで、他はあまり積極的に戦闘をしていないのも拍車を掛けていた。おかげで『紅椿』のデータはIS学園にほとんどなく、他の生徒も彼女が一番の要注意人物だと特訓しているその姿を注視している。

ならば、とシャルルは問う。そのデータを知っている一夏ならば対処も出来るのではないかと。
「……んー」

「あ、やっぱり幼馴染の秘密を教えるのは嫌なのかな？」

「いや、そうじゃなくてな。説明し辛いんだよ」

あればかりは実際に見てもらった方がいい。そう言うで一夏は肩を竦めた。ただ、絶対にあいつから注意を逸らさないこと。真剣な表情になってそう続けた。

「さて、特訓再開しようぜ」

「こういう相談も特訓のうちなんだけどね」

「体動かさないと特訓って感じしないんだよ俺は」

「あはは」

一夏達とは別のアリーナ。そこで特訓をしている二人の少女の姿があった。一人は慣れない射撃武装を四苦八苦しながら扱い、もう一人もあまり得意ではない格闘武装を使って接近戦を挑んでいる。

「やっぱりあたし射撃合わないわ」

「いきなり諦めないで下さいませー！」

そう言うのと射撃武装を使っていたツインテールの少女——鈴音は地面に降り立つ。文句を言いながらも彼女のパートナーであるセシ

リアも同じように地面へと着地した。

二人の機体は既に修復も終わり万全な状態である。だが、どうにも二人は浮かぬ顔をしていた。このままでは勝てないのではないか、そんな思いが頭をもたげたのである。

その為に、鈴音は射撃を、セシリアは格闘をとお互いの苦手分野を重点的に特訓しているのだが。結果はご覧の通り、芳しくなかった。「せっかくそれ用のパッケージを送ってもらって悪いとは思っただけど、ねえ」

「そう思うならもう少し頑張ってみればいいではないですか」

「そう言われてもさ、あたしの戦い方の基本ってやっぱり一夏と箒なわけじゃん。射撃の知識ほとんど無いのよ」

言われてみれば、とセシリアは顎に手を当てる。箒については良く知らないが、一夏は射撃武装を使っではいるがお世辞にも得意であるとは言えそうに無かった。あれを参考に行っているのならば、現在の鈴音の状況もあながち間違っではない。

いないが、だからといってそれを諦めるのは論外だ。

「ぐちぐち言っけていても始まりませんわ。大会までにある程度は物にしないと」

「はいはい」

テスト勉強もあるのになあ、とぼやきながら再び鈴音は空を舞い、手に持っているショットガンを構える。同時にセシリアも無骨なバスタードソードを構えた。

先に動いたのはセシリア。背中と腰のスラスターで一氣に加速し、その大剣を振るう。その斬撃を見た鈴音は少しだけ後ろに下がることでそれを躲し、手に持ったショットガンを連射する。銃声が響き、目の前の相手に弾が飛ぶ。だが、セシリアは振り切っていた両手、その片方の左手を即座に剣から離しその腕に装備されている盾を展開、弾を弾いてそのまま突っ込んだ。盾で鈴音をぶん殴り、彼女の体勢が崩れたところで右手の大剣を振り上げる。

「ま、だまだあー！」

『龍咆』が唸る。射撃と離脱を同時に行ったそれは、自身を後方に移

動させセシリアを吹き飛ばした。空中で体勢を立て直すセシリアであつたが、その隙を逃す彼女ではない。左手にバズーカを呼び出し、すかさず連射。おまけとばかりに腰に付いていたグレネードを放つた。爆発音が響き、爆煙があがる。

相手が見えなくなったその煙の中から、フィン状の物体が四つ飛び出してきた。やば、と目を見開く鈴音だが、遅い。BT兵器のビームにより彼女の動きがあつという間に制限される。隙間を縫って離脱しようとするスターを吹かしたその時には、既にセシリアがバスタードソードを振り被っていた。

「貰いましたわ!」

「貰われてないしー!」

右手のショットガンを捨て、『双天牙月』を呼び出しそれを防ぐ。二本の大剣がぶつかり合い、火花を散らした。

そのまましばらく鏢迫り合いを続けていた二人は、どこからともなく体を離れた。お互いに大きく息を吐くと、ちよつと休憩と地面に降りる。

「やれば出来るではないですか」

「いやまあそりゃセシリアが苦手な接近戦だったし。普通に射撃戦出来るとは思えないのよねえ」

「まあ、まだ改良の余地はあるでしょうけれど。これはタッグマッチ、二人で戦うのですから」

足りないところはお互いに補えばいい。そう言ってセシリアは笑う。鈴音もそんな彼女につられて笑った。

しかし疲れる、と一旦ISを解除しアリーナの端へと移動した。セシリアもそれに続き、二人でアリーナ隣接スペースの休憩用ベンチに座る。やっぱり慣れない戦いはするものじゃない、と笑いながら鈴音は自販機のジュースを買ってそれを飲んだ。

「あたしは格闘戦が合ってるのよ」

「さっきも聞きましたわ」

そう返しながらセシリアも同じようにジュースを購入、それに口を付けた。そして、自分自身も同じことを思っていると鈴音に笑い掛

けた。格闘を戦闘のメインに据えると、どうしても彼女の中では違和感がある。『クイツクドロウ』が使えないということも拍車を掛けていた。

しかし、だからといって止めるわけにはいかない。わざわざそれ用のパッケージを送ってもらったこともあるし、何より。

「わたくしは、不屈ですもの」

胸のダイヤモンドのペンダントを握り締め、彼女は微笑んだ。

「さ、休憩が終わったら続きですわよ」

「はいはい。あ、そうだセシリア」

「どうされました？」

「……後で、勉強教えて」

「……了解しましたわ」

中間考査も、もうすぐである。

「本音？」

「はいはい？」

またまた別のアリーナ。そこでは一体の専用機と一体の量産機が特訓を行っていた。専用機は『打鉄式』、更識簪その人である。現在は休憩中なのか、二人共ISを解除していたのであるが。

そんな簪はパートナーである本音を見ながら溜息を吐いた。やる気があるのだろうか、と思わず呟いてしまう。それほどまでに、目の前の幼馴染はボケつと突っ立っていた。

「大丈夫だよかんちゃん。私は今物凄くやる気に満ち溢れてるよ」

「うん……信用、出来ない」

「あらら」

機動も格闘も射撃も、本腰を入れてやっているように見えないのだ。彼女でなくともそう答えるであろう。だが、対する本音はそうでもなかったようで、唇を尖らせて抗議を行う。かんちゃんは私の本気を知らないんだから、と。

「知ってるよ。充分、知ってる」

「む〜」

「私は本音のことなら……一番、知ってる。虚さんより、姉さんより」
「おお、流石かんちゃん。言ってくれるね〜」

「……だから」

だから、今彼女が真面目に特訓していないことも知っている。そう続けた簪の言葉に、本音はバツの悪そうな顔で顔を背けた。あははは、と笑うが、どう考えても誤魔化せている様子はない。

やがて観念したように溜息を吐くと、頭を掻きながら再び視線を簪に戻した。

「武装変えたいなくって思ってたんだよ」

「……カスタムするの？」

「う〜ん、と、いうよりも」

家に置いてきたあつちを使いたい。そう言って彼女は笑った。

それに対し、簪は怪訝な顔をする。家に置いてきた？　と思わず鵞鷓返しで訊ねた。

「……あれ、持って来てない、の？」

「いや〜。持ってくるの忘れちゃったんだ」

「本音……」

何だか物凄く可哀相なものを見る目で簪は彼女を見る。その視線に耐えられなくなったのか、本音はわざとらしく泣き真似をしながらその場から走って逃げ出した。

その行動を遮るように彼女の前に人影が現れ、思わずその人影にぶつかってしまう。あいた、という可愛らしい声を挙げて彼女はそのままにしりもちを付いた。対する人影は、何をやっているの本音、と呆れたような顔でずれた眼鏡を直している。そして、その人物の後ろから、やつぽーと扇子を広げた少女が顔を出した。

『お姉ちゃん！』

簪と本音の声が重なる。その反応に片方は嬉しそう、片方は呆れるような表情で返すと、二人は彼女達へと近付いた。ちなみに扇子には『こんなこともあろうかと』と書かれている。

「やつぽー簪ちゃん、お姉ちゃんよ」

「うん。……見れば、分かるよ」

「違うそうじゃなくて。もつとこう、お姉ちゃんの胸に飛び込んでく
るような、そんな感じのサムシングが」

「……何しに来たの?」

「視線が、視線が痛い!」

何をやっているんだか。そんな表情で虚は二人のやり取りを見る。
とはいえ、あれでいて仲が悪いわけではないのを知っている彼女は特
にどうにかすることなく、自身の妹へと視線を向けていた。その鋭い
眼光に射竦められ、思わず本音はビクリと肩を震わせる。

そんな妹を見てやれやれと溜息を吐くと、彼女は持つて来ていた小
箱を差し出した。何これ、という言葉に、開ければ分かるわと返す。

「髪飾り? ……あ! ……これ!」

「貴女のISの待機状態よ。どうせ今回のイベントで使うだろうと
思ったから持つてきたわ」

「うんうん。ありがとくお姉ちゃん!」

「お礼は楯無さまに言いなさい。貴女が忘れていることとか今必要と
していることとかを言い出したのはあの人だから」

その言葉が聞こえていた簪の動きがピタリと止まった。どうした
の、という楯無の言葉に睨むだけで返すと、彼女は本音の方へと歩み
を進める。どうしたのかんちゃん、という呑気な言葉が、彼女の中の
イライラを更に増させた。

「本音」

「ど、どうしたのかんちゃん? 顔怖いよ?」

「特訓の続き……やろう」

「え? あ、うん、そうだね。おじようさまが持つてきてくれたし」

「……そうだね。お姉ちゃんが、持つて来てくれた、しね」

そう言うとな彼女は休憩所からアリーナへと歩き出す。それに続く
ように本音も休憩所から出て行った。

そして残される姉二人。片方はしまったと頬を掻き、もう片方は何
やらオロオロと視線を彷徨わせていた。その持っている扇子には『わ
けが分からないよ』という言葉と謎のマスコットが描かれている。

「え？ え？ 何で私今簪ちゃんに睨まれたの？」

「……タイミングでしようね」

「これ以上無いくらい完璧なタイミングだったじゃない！ これで簪ちゃんも本腰入れて特訓出来るって喜ぶところですよ！」

「そうだと良かったんですけどね」

「今、最後の区切りわざとやってたわよあの子！ しねって言いながら私見た！」

「……気の所為ですお嬢様」

何を言っても落ち込まれるような気がしていたが、それでも虚は惚けることにした。好き好んで止めを刺す必要はあるまい。そう考えたのだ。

簪ちゃああああん、という生徒会長の嘆きが空しくアリーナに木霊していた。

「篠ノ之箒」

「ん？ どうしたラウラ」

お互いに空中を飛びながらそんなやり取りをする。『紅椿』も『シユヴァルツエア・レーゲン』も機体の調子は万全で、そしてお互いの動きも洗練されていた。タッグとしてはかなりの完成度を誇っており、恐らく耐久値の低さなど問題ではないのだろうということをおぼろげに思った。

そんな二人だが、ラウラは少し浮かない顔で箒を見た。どうしたんだと訊ねた彼女に対し、本当に良かったのかと問い掛ける。

「一夏のことか？ ああ、構わないさ。あいつはあいつでちゃんとパートナーを見付けたみたいだしな」

「それならばいいが」

そう述べたものの、彼女の表情は未だ浮かないままである。まだ何かあるのか、と箒が問うても、なんでもないと返すばかりだ。

答えられないならばしようがない、と箒は聞きだすことを諦め、特訓の方に意識を集中させることにした。『紅椿』のスラスターを吹か

し、空中で複雑な機動を描きながら二刀を振るう。ラウラもそれは同じようで、『シユヴァルツエア・レーゲン』のスラストを吹かしワイヤーブレードとプラズマ手刀のコンビを放っていた。お互いに攻撃がぶつかり、そしてお互いの死角にその攻撃は振るわれる。それを避けようともせず、お互い寸止めするのが分かっていたかのように二人はそのまま交差した。

振り向き、ニヤリと笑い合う二人だったが、ラウラがふと思いついたように問い掛けた。その機体は、武装はそれだけなのか、と。

「そうだな、『収納領域』にあるのはこの二振りの刀だけだ」

「射撃戦も出来るとはいえ、それだけでは戦力に不安があると思うが」「そうでもないぞ。元々私は近接が主であるし、それに」

特殊兵装はしっかりと積んであるからな。そう言っただけは不敵に笑った。対してラウラは首を傾げたが、まあ大会が始まれば分かるさと彼女ははぐらかす。

パートナーの武装は全て知ってしかるべき、とラウラは思いそれを口に出そうとしたのだが、ふと何かに気付いたように視線を巡らせた。見られている。そのことを確認した彼女は、そういうことかと箒に向き直った。

「敵に手の内を明かすのは得策ではないな」

「そういうことだ。それに」

秘密が女を美しくさせるのだからな。そう言っただけで笑うと、続きを行おうと再び箒は二刀を構えた。

その『秘密』が一体何に掛かっているかを、ラウラが知る由は、無い。

No19 「楽しんでいこうよ」

中間考査の終わったIS学園はにわかに活気付いてくる。それもそのはず、一学期の最大イベントともいえる学年別トーナメントが開催されるからだ。生徒会は右へ左へとてんてこ舞いであるし、一般の生徒も準備に駆り出され、それこそ全校生徒全員に何かしらの役職が付いて回るほどだ。

そんな大わらわな準備期間も終わり。大会当日を迎えた生徒達は、皆気合充分の眼をしてそれぞれの機体を身に纏う。目指すは誰もが優勝、勝利を掴む為に今日まで特訓を重ねたのだから。

そんな生徒達に混じって、何故かテンションの物凄く低い少女が一人。普段はのほほんとした態度を崩さない彼女が、世界も終わりかといった勢いで落ち込んでいた。ちなみに随分と前からである。

「もう、世界滅ばないかな〜」

「物騒だなおい」

クラスごとに割り当てられている控え室の一角で、その少女、布仏本音はそう呟いた。思わず一夏はそうツツコミを入れるが、しかしそれに反応することなく彼女は溜息を吐き続けている。

それを見た一夏はどうしたもんかと頭を掻いた。もう一週間以上これである。大体中間考査が始まる直前辺りだったからそのくらいだったはず、と思い出しながらそんなことを思っていると、同じようにどうしたものかと考え込んでいるいつもの一行と、それを見守るクラスの面々の顔が見えた。何をやっても元に戻らない本音にどうやら皆お手上げのようで、後は任せたと言わんばかりに視線を向けている。任されても困ると思いなながらも、とりあえず一夏は隣を見た。

「どうしたもんかな」

「補習を受けるか、期末に気合を入れるかだな」

「俺の中間テストのことはどうでもいいんだよ！ いや、よくないけど」

「というよりもその答えで自分の中間考査のことだと思ってしまう一夏さんも一夏さんなのは……」

「何だ織斑一夏、お前は馬鹿だったのか」

「齒に衣着せろよドイツ人！」

ああこれはもう駄目だと癒子とナギは思った。恐らく本音をどうにかしようという考えは頭から抜け落ちてしているだろう、そう考えた二人はどうしようかと頭を悩ませ。

そして何も浮かばないことに絶望した。

「まあ、思い付く事全部やってるもんね」

「せめて理由が分かればなあ」

どうせ簪関係だろうけど。半ば確信を持つてそう断言している二人だが、生憎答え合わせをしてくれる人物があれなのでどうしようもない。これはいよいよもって駄目か、自分達も見守る組に入ろうかなどと考えていたその時である。

座ったまま項垂れていた本音が動いた。そろそろ出番だし、と羽織っていたパーカーをのろのろと脱ぎ捨てる。普段よりも倍以上掛かっていそうな動きでそれを行うと、幽鬼のような足取りで扉まで歩いていった。その姿は、このまま試合を始めさせてはいけないと誰もが思う姿で。

「……そんな調子じゃ、更識さんは一回戦負けだな」

その言葉に足を止めて振り返った。視線の先には、明らかに見下す目で一夏が仁王立ちをしている。そのまま大げさな動きで肩を竦めると、まああの娘の実力はそんなもんだろと続けた。

「——何？ かんちゃんを馬鹿にしているの？」

普段の彼女とは思えない底冷えした声。その目は鋭く、人懐っこさを覚えていたものとは真逆の様相を帯びていた。彼女を知っているならば思わず動きを止めてしまいそうなその変わり様に、しかし一夏は動じた様子もなく言葉を続けた。

「別に。本当のことだろ？ パートナーの連携も上手く出来なさそうな奴じゃ、一回戦で負けちゃうのが関の山だ」

「それ以上言うなら、おりむーでも怒るよ」

「ん？ 何だ気に障ったのか？ だらしない代表候補生のパートナーさん」

パアンと乾いた音が響いた。一夏の首は右に弾かれており、その目の前には右手を振り切った本音がある。その表情は憤怒で満ち溢れており、仲の良いクラスメイトを見るような目ではなく、嫌悪するべき敵を見るような目付きで睨んでいた。

「ふざけないで。かんちゃんを、私の親友を馬鹿にしないで！」
「……馬鹿にしたら、どうなるんだ？」

それでも一夏は態度を改めない。あくまで相手を馬鹿にした調子を崩さない。それが本音にはたまらなく癪に障り、思わずもう一度右手に力を込めた。

「……なら、見せてあげるよ」
「ん？」

「私が、かんちゃんが強いって、証明してあげるよ！」

真つ直ぐに彼の目を見て彼女はそう宣言した。一夏はその言葉を待っていたとばかりにニヤリと笑い、じゃあ期待してるぜと返す。ふん、と鼻を鳴らすと、本音はそのまま勢い良く扉を開いて飛び出していた。

そのまま自動で閉まるドアと立っている一夏を交互に見ていたクラスの間々は、どうしたものかと皆無言で佇む。

「ないわー、マジないわー」

「何だよその口調は」

「ん？ 気に入らなかったか」

「それを気に入ると思っっているお前にビックリだよ」

「そうか？ だっってお前」

あんな三流チンピラの芝居してたじゃないか。そう言うど等は口角を上げる。その言葉を聞いた他の面々は、薄々勘付いてはいたけどやっぱりそうだったかと安堵の息を漏らした。もしあれが本性だったらどうしようかと少しだけ心配していたのだ。

「気合を入れるにしても、もう少し何か方法あるだろうに」

「咄嗟に思い付かなかったんだよ。悪役を用意するのが一番手っ取り早いかなんて思ったんだよ」

「まあ、確かに効果は抜群だったな」

きつと普段であればすぐに見破りノリで返したであろう彼女が、本気でその挑発に乗ってしまった。恐らくあれならば一回戦で負けてしまうなどということはないだろう。それは確かに喜ばしいことかもしれないが、と箒は続ける。お前の好感度ダダ下がりだぞ。そう言うとうと肩を竦めた。

「……今更女子の一人や二人に嫌われたところで、関係ないし。関係ないし！」

「思い切り傷付いていますわね」

「矢張り馬鹿なんだな」

セシリアとラウラの呆れたような声が、彼の心には非常に痛かった。

更識箒は戸惑っていた。普段のほほんとしている幼馴染が、何故かこれ以上無いくらい好戦的だったからだ。とりあえず一回戦の相手を血祭りに上げるよ、と感情の見えない顔で言われ、彼女は思わず目を見開く。本当に彼女は自分の知っている本音なのだろうか。思わずそんなことまで頭に浮かべた。

「ほ、本音？」

「何？ かんちゃん」

「ど、どうした、の？」

箒の質問に、本音は何がと訊ね返した。それは言外に自分には何も無いと言っていて、そして聞いた側にはどう考えても何かあったらと思うわせる行動であった。勿論箒はそのことを理解し、しかしこれは聞いても無駄だと話を打ち切った。

恐らくクラスで何かあったのだろうということは予想出来る。だが、あのクラスでこんな風に彼女が怒ることが果たしてありえるのだろうか。そう考えると、どうにも答えが出てこない。

ただ、もしやるとしたら。

「織斑君、かな……」

「かんちゃん、あんな奴の名前なんか呼んじや駄目だよ」

あ、ドンピシャだ。言葉には出さなかったが、思わず彼女はそう呟いた。どうやらまた一夏が何かやらかしたらしい、ということを知った簪は、まあそういうことなら仕方ないかと諦めることにした。あの男のやることを一々気にしてはきりが無い。流星に箒達のようにそこまで達観は出来ていないが、それでも何となく彼の付き合い方を身に付けてきた彼女は、おおよそ似たようなことを考えていた。

何にせよ、本音が気合を入れてくれるのなら願ったり叶ったりだ。あの練習の時以来どうも彼女は落ち込んでいて上の空だったので心配であったが、これならばいける。そう結論付け簪は前を見た。

「……どつちみち、あの時は私が悪い、から」

隣の本音に聞こえないように呟く。幼馴染で親友で、そんな彼女のこととは一番分かっていると豪語した割に、彼女が自分のISで訓練しなかったことを気に掛けず、それを気にした姉に全部持っていかれた。結局はただ、それだけなのだ。自分が悪い、ただ、それだけ。姉はちよつとだけ悪いかもしれないが。

だというのに彼女はそれを自分の所為だと責めて、落ち込んで。それを見た自分は余計にへそを曲げてしまつて。結局その繰り返しで、今日まで来てしまつていた。

「よし、決めた」

この試合が終わったら、本音に謝ろう。そう決意して、簪は出撃用のカタパルトに足を掛けた。隣では本音も準備を整えている。普段の彼女らしくないその表情を見て、ちよつとだけやりすぎじゃないかと一夏を責めた。

「本音」

「何？」

「……どうせなら、楽しんでいこうよ」

そう言つて笑顔を見せた簪を見て、本音は思わず表情を歪めた。怒りが霧散していったように、吊り上げられていた眉尻が下がる。大きく溜息を吐くと、やれやれと言わんばかりに首を横に振つた。

「しようがないなく、かんちゃんは」

「うん、しようがないよ。……だから、ちゃんと私の、お目付け役でいてね」

「……うん！ まかされたよー！」

そんな会話をした辺りで、出撃ですというアナウンスが入った。いくよ、と隣の本音に伝えると、了解、と元気な声が返される。

ハッチが開き、アリーナが見えた。後は揃って飛び出すだけ。

「……更識簪。『打鉄式式』、行き、ます！」

「布仏本音。『打鉄改』、しゅっぱーっ！」

水色の機体と狐色の機体が、空を舞う。

「お、出てきたぞ」

生徒用観客席まで出てきた一夏は飛び出した二人を見てそんな声を挙げた。その隣には箒とラウラ、シャルルがいる。試合がまだの生徒達はここでのんびりと見ていることは少なく、実際癒子とナギは呑気に観戦していられる状態じゃないと断られ、セシリアと鈴音は試合が近いので機体の準備に行ってしまった。まだ試合をしていない四人がここにいるのは、余裕の表れか、それとも。

「いいの？ 一夏、機体のメンテナンスとか最終調整とかしておかなくて」

「ん？ まあ、大丈夫だろ。試合始まってみたらトラブルありました、とかそんなことそうそう無いって」

「だといいんだけど」

シャルルはそう言って苦笑したが、一夏は何処吹く風で現在戦闘を始めている簪と本音を応援している。まったく、単純だな。そう頭の中だけで呟くと、彼と同じように視線をアリーナへと向けた。

二人の対戦相手は一般機の『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』のコンビである。しっかりと連取をしてきたのだろう、その動きは危なげなく、未熟ながらも芯を一直線に保とうとしていた。相手の『打鉄』は近接ブレードを、『ラファール・リヴァイヴ』はハンドガンをそれぞれ

れ持ち、役目をきつちりと分けての連携に重視を置いている。

対する簪と本音は、特にそのことを決めていないのか、簪が『打鉄式式』の荷電粒子砲を構え、本音がハンドガンを構え横に並んでいた。相手に比べると何ともお粗末に見えるが、果たして。そんな感想を抱いたラウラは、隣の箒に視線を向ける。どうした、と言う言葉に、あれはどうなんだと訊ねた。

「何も考えていないようだな」

「大丈夫なのか？ あの二人、専用機とカスタム機の組み合わせだぞ。耐久値は相当落ちているはずだが」

「さて、それはまあ」

見てみないと分からないな。そう言っただけで笑う箒に、ラウラもそうだなと返した。

「行くよ……！」

「りよ〜かい！」

試合が始まる。先手必勝とばかりに射撃を放ってきた相手から離れるようにスラストを吹かした二人は、お返しだと射撃を放った。簪の荷電粒子砲『春雷』が空を裂き、相手にその牙を向ける。させない、と『打鉄』のシールドで防御した一人は、そのまま真っ直ぐに突っ込んできた。迎撃の為に『春雷』を放つが、『打鉄』の防御力とコスト制の恩恵を受けた耐久値をフルに使い強引に間合いを詰める。

しまった、そう思った時には既に相手は刀を振り被っており。

「え!？」

甲高い音が響いた。それは相手の近接ブレードが『打鉄式式』を切り裂いた音ではなく、巨大な何かに斬撃が阻まれた音。狐色に塗装されたそれは、ISの全長と同じかそれ以上の大きさを誇る盾であった。それが、簪の前の前に展開されたのだ。

「大丈夫？ かんちゃん」

「うん。……ありがとう、助かった」

「えへへ〜」

相手の女生徒は視線を簪の背後に向ける。攻撃を弾いたのは狐色に塗装された『打鉄改』、布仏本音の装備のようで、自慢げに胸を張っ

ているのが見えた。短く舌打ちし、しかし攻撃の手を休めずにもう一度ブレードを振るう。同時にパートナーに援護を要請していた。

「本音！」

「おまかせー！」

『打鉄改』が前に飛び出した。斬撃を放っている女生徒は無視し、一気に『ラファール・リヴァイヴ』へと突っ込んでいく。奇しくも先程自分の相方が行った行動を展開され、少しだけ反応が遅れた。だが、あくまで少しだ。『ラファール・リヴァイヴ』を纏った少女はハンドガンの他にアサルトカノンを取り出し連射する。『春雷』程とはいかなくとも、ダメージは免れない。そう確信していた彼女は、突っ込んでくる機体を見て目を見開いた。

簪の前に展開していたものと同じ、巨大な盾。それが彼女を覆うように展開されていたのだ。ハンドガンもアサルトカノンも、その盾に全て弾かれ届かない。

「ふっふっふ。これぞ布仏本音の専用装備、その名も——」

巨大な盾を構えたそれが、勢いを弱めることなく突っ込んでくる。思わず射撃を闇雲に放ったが、無駄。一直線に向かってくる狐色の、巨大な盾六つに覆われた塊を止められない。

「完全防衛兵装、『葛の葉』！」

衝撃が彼女の体全体に走った。何の小細工も無い突進、だがその威力は折り紙付きだ。射撃を全く通さない硬さを持ったものが突っ込んできたのだ、推して知るべし。その衝撃はアリーナの中心部で吹き飛び、壁にぶつかってようやく止まるほどだ。肺の空気が押し出され、視界が一瞬暗くなった。

何が完全防衛だ、思い切り攻撃しているじゃないか。そんな悪態を吐きつつ顔を上げた。そこにはハンドガンを構えた本音の姿が見える。どうやら止めを刺す気らしい。そうはいくかとスラストスターを吹かし、その場から回避。『打鉄式式』と斬り合っているパートナーの下へと飛んだ。

近接武装の薙刀『夢現』を振り被っている簪に射撃を放ち攻撃の邪魔をする、こちらに意識を誘導させる為に派手に弾をばら撒く。簪

が視線をこちらに向けたのを確認し、円を描くように位置をずらした。相手は自分に射撃武装を向けている。これならば、相手の一撃が届く。

そう確信していた彼女に向かい、簪は一直線に突っ込んでくる。背後は完全に無防備、それを分かっているのか『打鉄』の少女はそれに追い付き近接ブレードを振るった。背中から袈裟切りにするそれは、しかしまたしても甲高い音と共に弾かれた。

簪は後ろを振り返らない。それは、気付いていないのではなくそうする必要が無いと思っただから。自分のパートナーが、絶対に防いでくれると確信していたから。

『夢現』を振るった。相手の射撃武装を切り裂き、バランスを崩したところに二門の『春雷』を腰にマウントし、放つ。閃光が少女に撃ち込まれ、後方へと吹き飛んだ。だが、それでもまだシールドエネルギーは残っているようで、空中で体勢を立て直して別の射撃武装を取り出していた。簪はそれを見て、本音、と自身のパートナーを呼ぶ。

「はいはい」

「足止め、よろしく」

「おうともささ」

それだけで何をするのか分かったのか、本音はすぐに行動を開始した。全部で八枚ある『葛の葉』、その内二枚を簪の防御用に回していたが、それを全て自身に戻す。その光景を見てチャンスだと簪に向かう二人に狙いを定め、四枚ずつ『葛の葉』を射出した。二人の目の前に出現した四枚の巨大な盾は、文字通り全てを塞いでいる。視界も、進行ルートもだ。ぐるぐると二人の周囲を回る『葛の葉』を見て勝ち誇ったように本音は笑い、後は任せたよかんちゃんと後ろに下がった。

『打鉄式』のウイングバインダーが変形し、そこに隠されていた砲門が姿を現す。六つの砲門が相手をロックし、簪の眼鏡上のディスプレイに表示が浮かぶ。準備完了、後は放つだけ。

「本音、解除」

「りよっかい」

『葛の葉』が二人の周囲から消える。それと同時に、『打鉄式』の六つの砲門が火を噴いた。マルチロツクオンシステムによる四十八発のミサイル。クラス対抗戦で一夏を苦しめた八連装ミサイルポッド。彼女達を敗北に導くその名は。

「穿て、『山嵐』！」

爆音が響き渡り、試合終了のブザーが鳴り響いた。

なんじゃあれ、と一夏が呟いた。あれ、と一夏が差しているのは『山嵐』ではない。本音の使っていた『葛の葉』だ。完全防衛兵装の名は伊達ではないらしく、試合を見る限りほぼ全ての攻撃をシャットアウトしていた。

「反則だろあれ……」

「まあ確かに、あれを見る限りでは突破口は思い付かんな」

呟く一夏に筈はそう返したが、逆に彼に嘘を吐くなど睨まれた。お前はいつでも出来るじゃないか、というその叫びに、シャルルとラウラは首を傾げる。知っている限り、彼女にあれをどうこう出来るような要素は見当たらなかったのだが、と。

「そうでもないだろう。いくら『玉兎』でもあの盾を破壊するほどのパワーは」

「展開する前にぶっ飛ばせばいいだろうが。惚けんな！」

「おお、その手が」

「素かよー」

一夏と筈のやり取りの続きを聞いていたが、二人はやはり分からな。い。そもそも『玉兎』とは一体何なのか。そこまで考えたところで、シャルルは何か分かったように手を叩いた。成程、そういうことかと呟いている。

「ん？ どうしたシャルル」

「いや、ちよつとしたことだよ。『玉兎』ってというのが、篠ノ之さんの『紅椿』が持つ第三世代兵装だね」

その言葉に、ラウラも成程と合点が行ったように頷いた。筈はあ

あ、ばれたかと苦笑して一夏を睨む。お前の所為だぞ、と。

別に名前しか分からないだろうに、と一夏は反論したが、じゃあこれで終わりに出来るのかという彼女の言葉に口を噤んだ。確かにシャルルもラウラも明らかに話の続きを待っている。ここでじゃあこの話はお仕舞いだ、と言える雰囲気ではなかった。

「と、言ってもなあ」

「ああ、そういえば説明がしにくいとか言ってたっけ」

「そうそう。だから無理なんだよ、うんうん」

わざとらしくそう言った一夏に対し、シャルルはしようがないなど苦笑で返した。ラウラは若干不満そうであったが、箒はパートナーであり敵ではないからと思いつき、同じように仕方ないかと返した。

良かった、この二人で。ここにいない二人を頭に浮かべながら、一夏はそう心の中で呟いた。

「てかそうじゃなくて、問題はのほほんさんのあれだろあれ」

話を元に戻すように一夏が声を張り上げる。どうやったらあれを突破出来るのか、そういう話になるはずだったのだ。そんなようなことを言いながら三人を見た。

「見る限り、相当頑丈な盾みたいだね」

先程の戦いを思い出しながらシャルルは述べる。斬撃も射撃も通さないあの防御力は驚嘆に値する。頷きながらラウラもそう述べた。

それに対し、箒は違う感想を持ったらしく問題はそっちではないと述べた。どういうことだと一夏が聞くと、思い出せと、彼女は続けた。

「あれは相手にも放っていた。自身と味方の防御だけではなく、相手の拘束を行うことも出来るのだぞ」

「へ?」

分かっているのか首を傾げる一夏に対し、シャルルとラウラはそういうえば、と何かを考え込むような仕草を取った。一人取り残された彼は箒に視線だけで救援を求める。やれやれ、とこれまた視線だけで答えると、彼女はこほんと咳払いを一つした。

「勿論あれは自身の周囲に展開することで攻撃を防ぐのが本来の役割だろう。だが、それとは別に、敵の周囲に展開させることによって動

きを封じる用途にも使える」

「ああ、あの最後にやってたやつ？ あれってどういうことなんだ？」
「斬撃や射撃を防ぐ盾が目の前に、自分の意思ではなく展開されていたら。自分の攻撃はその盾が全て受け止めるとしたら、どうする？」
「どうするって、そりゃ、何も出来ない——」

言いかけて、成程そういうことかと手を叩いた。確かにそれは厄介だ、そう続けて表情をげんなりさせたものに変えた。やっぱり反則だろあれ、とブツブツ文句を言っている。

「まあ、通常の二対一の試合ではあまり役に立たないだろうがな」
「まあ、そうだろうね」

ラウラの言葉にシャルルが頷く。そして再びどうということだと一夏が問うた。そんな彼の態度に、お前は少し考えるところをしないのかとラウラが肩を竦める。どうせ俺は馬鹿ですよ、と拗ねたように顔を逸らした。

「子供だな」

「子供だ」

「ノーコメントで」

「やかましいわ！」

しょうがない、子供の織斑一夏の為に教えてやろうとラウラは彼を鼻で笑う。その態度が無性に気に入らなかつた一夏は一人拳を振るわせた。

ついでに箒に本当のことだろうと止めを刺された。

「防御と拘束、これでは勝てん」

「あ、そうか」

「負けはしないだろうけどね」

攻撃手段ではないこの武装は、相手に勝つことを目的としていない。答えは非常に単純であった。何故それに気付かないと思わず一夏が頭を抱えてしまうほどに。シャルルが苦笑するように入れる補足を聞きつつ、彼はぐったりと項垂れた。

「そんなことだから中間が赤点なのだ」

「テストは関係ねえだろテストは！ っていうか誰が赤点だ！」

「違うのか？」

「違う！ 多分半分ぐらいはやれてるといいなと思ってるっつー！」

「……」

「デュノア、思っていることはつきり言った方がいいと私は思うぞ」

「確かにそうだな。おい織斑一夏、お前は馬鹿だ」

「それさつきも聞いたっての！ 後お前は言いたいこといつもはつきり言ってるじゃねえかよー！」

観客席で騒ぐこの四人は、教員が止めに来るまで暫く続いたそう
な。

「更識さん達は順当に勝ちあがったようですね」

ピットのモニターを見ながら、セシリアはそう呟いた。横では鈴音がそうね、と言いながら自身の機体を眺めている。それを横目で見ながら、まだ不安なのですか、と彼女は訊ねた。

「あつたりまえじゃない。特訓はしたけど、いざ本番となったらどうしてもそう思っちゃうのよ」

「確かに、そうですね」

自身の機体、『ブルー・ティアーズ』を眺めながらセシリアもそう呟く。普段の彼女らしくないその声と同じように、彼女が見詰める機体もまた『らしく』ない。射撃武装らしい武装のないそれは、『ブルー・ティアーズ』の近接戦闘用パッケージを装備した姿だ。増設された背中のスラスタがある代わりに背部ユニットを撤廃、BT兵器は左手の盾に収納され、腰のミサイルタイプのBT兵器は取り外されている。申し訳程度に射撃能力のある主武装のバスタードソードが、機体の右腕に握り込まれていた。

「わたくしも、これでどれだけいけるか。不安ではないと言えば、嘘になりますわ」

「やっぱそうよねえ」

言いながら鈴音も自身の機体を見る。射撃戦用パッケージに換装

された『甲龍』は背部ユニットの衝撃砲がその形を変え取り回しの良い小型になっており、その代わりに腰や背部には射撃武装が多数マウントされていた。収納領域にあるものを合わせればその数は十を優に超える。『双天牙月』が残っているので格闘戦も出来るのだろうか、武装から考えれば明らかに射撃を主体に調整されていた。

「今からでも元に戻って遅いのよねえ」

「試合、もうすぐですわよ」

今行っているものが終われば次は彼女達の番である。今更機体を通常用に戻して、などと悠長なことをやっている余裕などは無い。このまま行く以外に選択肢は無いのだ。

まあ、覚悟を決めるしかないですわね、とセシリアは笑う。対照的に鈴音は肩を落とし溜息を吐いた。そう簡単に出来れば苦労しないっての。そう言いながら自分の相棒を軽く小突いた。

「ま、でもそうよね。こうなったら開き直るしかないか」

「そういうことですわ」

言いながら鈴音は笑った。セシリアもそれに同意して微笑んだ。

アリーナから歓声が聞こえる。どうやら試合が終わったようだ、とセシリアは呟き、自分の機体へと歩いていく。首をコキコキと鳴らしながら、鈴音も自分の機体へと近付いた。

それぞれ自分のISを纏い、その動きを確かめるように手足を動かす。コンソールのチェックも済ませ、何も異常が無いことを確認すると、お互いに目配せをしてカタパルトへと足を進めた。

場内のアナウンスが響く。次の試合の対戦相手の名と、そして自分達の名が呼ばれるのを聞きながら、二人は視線を前に向け意識をそこに集中させた。その表情は真剣で、どこまでも真っ直ぐで。

ハッチが開いた。アリーナの広大な空間が目に入る。カタパルトのシグナルが赤から青に変わる。発射の準備から、発射へと移行する。

試合が、始まる。

「セシリア・オルコット。『ブルー・ティアーズ』近接戦闘パッケージ『ブレード・ペンドラゴン』、参りますわ！」

「鳳鈴音。『甲龍』射撃戦パッケージ『フォシアン（火山）』、行くわよ！」

No20 「嘗めるんじゃない！」

対戦相手の少女二人は戸惑っていた。練習で確かに見てはいたが、実際に対峙するとまた違うことに気付いたのだ。

セシリアは遠距離、鈴音は近距離。それが一年の中での常識でもあった。高レベルのその二人を相手にするのならば、よしんば変則的に立場を変えているのだとしても、それなりの対策が必要である。そう思っていた。

「こんこんちんくしょー！」

両手に持ったバズーカから弾が発射される。それを躲すと、その隙を狙って大剣を振り上げる青い騎士の姿が現れる。

「つて、ちよつと鈴さん！ こつちにも来てますわよ！」

「あ、ごめん。でもしようがないじゃん！ 味方がいる状態での戦いやってないんだから！」

「そこなんですよね……」

言いながら、セシリアは相手の攻撃を盾で受け止めた。パリイでブレードを弾くと、右手の大剣を横に薙ぐ。決まるかと思われたそれは、割り込んできた向こうのパートナーのシールドで防がれてしまった。苦い顔をしながら彼女は後退。そこに向かって後方の鈴音がミサイルを放つ。

「だから、早いですわ！」

「え？ マジ？」

着弾、直撃。ただし、それは三人纏めて、であった。爆煙の中に消えてしまった己のパートナーがいた場所を見詰めながら、鈴音は思わず頭を抱える。これはひよつとして、セシリアも撃墜されてしまったのでは。そんなことが頭を過ぎった。

「あ、でもあたしが残ってるから勝ちか」

「マジ切れしますわよ」

「うお!? セシリア無事だったんだ」

「喧嘩を売ってるのですか貴女は！」

盾に焦げ跡の付いたセシリアが彼女の目の前に現れる。その顔は

どう見ても友好的なものではなく、明らかに怒っているのが分かった。まあそりやそうだとはいながらも、鈴音はごめんと頭を下げる。大きく溜息を吐かれたが、とりあえず説教は後回しですわと言言葉と共に前を向いたセシリアを見て、彼女は少しだけ安堵の溜息を漏らした。

どのみち説教されるのは変わらないのか。そんなどうでもいいことをついでに考えた。

「いいですか鈴さん。わたくし達は専用機と専用機のコンビ、耐久値は全チームの中でも最低値に近い。それはつまり、長期戦は不利だということに他なりません」

「短期決戦、か。普段ならまだしも、この状態でいけるんかなあ」

「いけるいけないではなく、やるしかないのですわよ」

そう言うとセシリアは再びバスタードソードを構える。その彼女を見てこくりと頷くと、鈴音も両手のバズーカを握り直した。相手は先程の爆発でもそれほどダメージを負った様子は無く、今度はこちらの番だと言わんばかりに接近しようとしている。恐らく先程までの激突で、鈴音が味方を巻き込まずに射撃が出来ないということに気付いたのだろう。接近してしまえば、セシリア一人を狙えばいい。分かりやすいほどに視線がそう物語っていた。

「鈴さん、馬鹿にされてますわよ」

「セシリアだって接近戦ならそんな強くないって思われてるじゃない」

「ええ、そうですわね。……非常に、腹立たしい」

目が据わった。隣にいる鈴音が思わず体を震わせるほどに、彼女の雰囲気の変化したのだ。目の前の相手はまだ気付いていないのか、それとも彼女が気付かれないようにしているのか。どちらにせよ作戦を変更せずに突っ込んでくるのが見える。

セシリアがバスタードソードを正眼に構えた。視線を動かさずに、フォローをお願いしますと短く隣に告げる。少々戸惑いつつ、鈴音は了解と返した。

ふと自分の持っているものを確認した彼女は、バズーカを仕舞う。

そして取り回しのしやすいハンドガンを取り出した。両手に一丁ずつ、二丁のハンドガンを構えた鈴音は、突っ込んでくる相手に向かって剣を振り上げるセシリアの背後につく。

「セシリア・オルコットを」

「鳳鈴音を」

『嘗めるんじゃない!』

二人の、そんな怒号がアリーナに響き渡った。

二人が戦っているアリーナの観客席の一角。生徒用スペースで土下座をしている男子生徒が一人いた。無論織斑一夏であり、そしてその目の前で仁王立ちしているのは布仏本音だ。

「私ね、ちよおちよお傷付いたんだ」

「分かっております」

「親友を馬鹿にされたんだもん、おりむーも分かるでしょ?」

「おっしゃる通りでございます」

「本音……その辺にしよう、ね?」

そろそろ止めなければ、という簪のフォローにより何だか分からないう土下座劇は幕を閉じ、顔を上げた一夏はアリーナの方へと視線を向ける。おーおーやってるやつてる、という何とも呑気な声を挙げつつ、しかし二人の装備を見て首を傾げた。

「ん? セシリアが接近戦で、鈴が射撃? 逆だろ普通」

「ああ、お前はさつきからずっと土下座していたので見ていなかったのか」

そういう方針らしいぞ。そう言いながら簪は肩を竦めた。普段とは目を見張るほどの酷さだがな。そう続けながら笑う。

確かに彼女の言う通り、二人の動きは普段と比べると明らかに精彩に欠けている。セシリアは『クイツクドロウ』がああ状態では使用出来ず、鈴音は真っ直ぐ突っ込むことも『視る』ことも出来ずに牽制をするくらいしかやっていない。

何より、連携が全く取れていないのだ。鈴音の射撃はセシリアを巻

き込み、そしてセシリアも彼女の射線上に無意識の内に飛び込んで
いつてしまっている。訓練をしていたはずなのに、まるで急造のコン
ビのような機動を行っていた。

「あ、ミサイルが……セシリア巻き込んだぞおい！」

「うわぁ」

「味方もろともか……中々冷酷な思考の持ち主だな、凰鈴音」

「多分……違うんじゃないかな」

「おう、マジ切れしてるね」

「何やっているのだあいつ等は」

このままでは優勝どころか、一回戦突破ですら怪しい。そんなこと
を見ている誰もが思い始めた。一夏達ですら、そう感じていた。

だが、その空気が変わったのにいち早く気付いたのもまた、一夏達
であった。呆れたような顔を一変させ、何やら緊張した面持ちで二人
が佇む姿を見やる。セシリアが剣を正眼に構え、そして鈴音がフォ
ローにつく。一見さつきまでと同じように思えたが、違う。

嘗めるな、という叫びが聞こえた。それと同時に、普段の彼女らしか
らぬ愚直な機動で突っ込んでくる相手を迎撃にかかる。セシリアの
バスタードソードと相手のブレードがぶつかり合い、甲高い音を立て
た。だが、それも一瞬。取り回しのしやすいように設計されている通
常の近接ブレードでは、彼女の大剣は止められない。あっさりと力負
けし、そのまま押し切られる。あわやブレードごと真つ二つかと思わ
れたそのタイミングで、相手のパートナーがフォローに入った。アサ
ルトライフルを撃ちながらセシリアとの間合いを離そうとスラス
ターを吹かす。それに気付いたセシリアは一瞬だけそちらに目を向
け、しかし気にせずにもう一度大剣を振り被った。

今なら攻撃が当たる。そう考えた相手のパートナーは照準を彼女
の頭部に合わせるが、その瞬間に視界がぶれた。何が起こったのか理
解出来たのは、正常になった視界が地面を見ていたタイミングでよう
やくであった。慌てて姿勢制御とセンサーを確認すると、ロックオン
警告と共にもう一度吹き飛ぶ。その方向に銃弾をばら撒いたが、既に
相手はその位置にはおらず。

「結局さ、射撃だろうが何だろうか、あたしのやることって変わらないわけよ」

声の方へと顔を向けると、『甲龍』『フォシアン』の砲門が全て彼女の方へと向いているのが見えた。両手のガトリング、肩の衝撃砲、そして腰と足に備え付けられたミサイルランチャー。それらが全て、目の前の相手を蹂躪せんが為に構えられていた。

「真っ直ぐ、ぶっ飛ばす！ 全弾発射だこんにやろおおお！」

連射、不可視の砲弾、そしてミサイル。性質の違うそれらが全て一体の敵に向かって放たれる。その弾幕は対策をとることなど不可能にも思えて。

一斉掃射を受けた少女はそのままバランスを崩して落下していく。それを確認した鈴音は視線をすぐさまもう一人へと向けた。パートナーであるセシリアと戦っているもう一人へと。

「セシリア……い！」

セシリアは思わず舌打ちをしていた。先程の乱入によって止めの一撃が躲され、そして相手は警戒をするようになってしまった。大剣の攻撃は重く威力のある代わりに遅い。回避に専念されてしまうと、まだ完璧とはいえない彼女の近接技術では捉え切れないのだ。

何故『ブレード・ペンドラゴン』は通常の近接ブレードではなく、こんなバスタードソードを用意しているのか。思わずそんな悪態を吐くが、それで何かが変わるわけでもない。どうにかしてこの大剣で相手の動きについていかななくてはしようもないのだ。

鈴音と特訓している際の模擬戦では、彼女が好戦的な性格ということもあって、このような状況に陥ったことがなかった。だからこそ、余計に彼女を焦らせた。

「くっ、この……い！」

横に薙ぐ。その勢いを利用して上から下に振り下ろした。だが、そのどちらも躲され、胴に一撃を食らってしまう。カウンターをしようとして突きを放ったが、既に相手は離脱していた。

横槍が入らないということは、つまり相手のパートナーは鈴音が抑えている、あるいは封殺しているということ。それが更に彼女の中で

焦りを生む。相方は出来ているのに、自分は出来ない。ほんの少し前まで素人だった少女には出来て、国内戦無敗と誇っていた自分は出来ない。

「はああああー！」

突進、そして大剣を振るう。まともに打ち合えばそのまま両断せんばかりの威力を秘めたそれは、相手の回避優先の機動によって空を切る。

「ちよこまかと……！」

そのまま剣を横に薙ぐ。しかしやはり当たらない。単調になっていくのだ。元々大剣という武器ではやれることは限られてくるが、彼女は焦りにより自分自身でその中でも更に選択肢を狭めてしまっている。横か縦に剣を振るう。その組み合わせしかしていない。

相手もそれが分かかってきたのか、攻撃の合間にカウンターを行うようになってきた。ダメージは軽微であるが、しかし大会ルールによって耐久値が極端に下がっているセシリアにはそれも無視出来ない傷となる。いつの間にか、コンソールに表示されるシールドエネルギーは赤く点滅していた。

まずい、そう思った時には既に遅い。一瞬集中が切れたタイミングを狙い、相手は今まで使わなかった射撃武器を取り出す。完全に虚を突かれたセシリアは、その射撃を回避する術が無い。当たってしまったら、そのまま敗北判定値に至るであろう。

「なーやってんのよー！」

叫びと共に高速で突っ込んできた鈴音が、目の前の相手を吹き飛ばした。技も何も無い体当たりを行った彼女はそのままバランスを崩して目の前を通り過ぎ、そしてそこで体勢を立て直しながらセシリアを睨む。そしてもう一度、何やってるんだと声を荒げた。

「あの時の、あたしの『双天牙月』使って戦ってた時の勢いはどうしちゃったのよ！ 専用装備の方が弱いなんて笑い話にもなりやしないわよー！」

「鈴さん……」

「アンタはあたしの目標で、パートナーでしょ！ しやきつとしなさ

い！」

数度目を瞬かせた。そして、堪えきれなくなつて笑い出した。何笑つてるのよ、という鈴音に謝罪の言葉を述べつつ、そうでしたわねと返す。大きく息を吸い、そして吐く。

まだ戦闘不能になつていなかった相手のパートナーの方へと飛んでいく鈴音を横目に、セシリアはもう一度真つ直ぐに相手を見て、そして剣を構えた。正眼ではなく、切っ先を後ろに向け腰元へ。そのまま前傾姿勢を取り、背中のスラスターを吹かす。

相手の懐に瞬時に飛び込んだ彼女は剣を振るう。慌てて回避をした相手に視線を向け、そしてその口角を上げた。ニヤリ、と笑った。

彼女の機体の足に増設されたスラスターが火を噴く。独楽のように回転しながら逃げた先へと刃を滑らせる。いきなりのその攻撃に相手は面食らい、そしてその一撃をまともに受けてしまう。体がくの字に曲がり、そして盛大に吹き飛んだ。

視界がグルグルと回る中、何とか姿勢を制御しようとスラスターを吹かした彼女は、しかしその途中で何かにぶつかり止る。コンソールにはそれが自分のパートナーだということを示しており、そして同時に目の前に二つの影が接近していることも知らせていた。

「ま、でもやっぱ真つ直ぐ突っ込んでぶつとばしたいわけよ」

「鈴さんらしいですわね。では、わたくしも」

『双天牙月』を振り被る鈴音と、バスタードソードを構えるセシリア。その二人の斬撃が、目の前に迫っていた。

「二刀！」

「両断！」

交差するように揃って切り裂かれ、二人は地面へと落下していった。

終わってみれば順当な結果であった。そんな感想を抱きながら、ラウラは席を立つ。そろそろ出番だ、と箒に伝えると、そうだなと彼女

も立ち上がる。

「ん？ もうBブロックか」

「まだ五試合ほど残っているが、生憎私達は初戦なのでな」

一夏の言葉に筈はそう返し、ではまた、と観客席から去っていく。それを見ていた一夏は、俺達ほどの辺だっけかとシャルルに尋ねた。中盤だからまだ大丈夫だよ、という彼の言葉にホツと胸を撫で下ろし、ならあの二人の試合が見れると椅子に体を預ける。その様子を見て、シャルルはもう一度一夏に尋ねた。

本当に機体の整備しなくてもいいの、と。

「大丈夫大丈夫。そもそも待機形態で腕についてんだぜ？ 異常があればすぐ分かるっての」

「……それなら、いいんだ」

そこで彼は言葉を止め、僕は念の為機体の調整をしておくよと席を立った。あいよ、という一夏の声を背中に受けながら、シャルルもまたアリーナの観客席を後にする。

やれやれ、と彼が肩を竦めていたが、一夏は特に気にしなかった。

「どうですかわたくしの剣捌きは！」

「あたしだって射撃やれるでしょ！」

そんな三人と入れ替わりにやって来たのは一回戦を済ませたセシリアと鈴音。どうだと言わんばかりに胸を張っているが、しかし。

最初酷かったじゃないか、という一夏の言葉に二人揃って肩を落とした。

「そうですね……どうせわたくしは井の中の蛙でしてよ……」

「やっぱりさ、あたしなんか代表候補生名乗っちゃいけないよね……」

「ダウナー入るの早過ぎだろおい！」

「テンションおかしいね〜みんな」

「うん本音……貴女が言っちゃいけないと、思う」

ケラケラ笑う本音に呆れながら簪はそう返し、落ち込んでいる二人に向かっておめでどうと言葉を投げ掛けた。顔を上げたセシリアと鈴音に向かって、彼女なりの精一杯の笑顔を見せる。

「かつこ、よかったよ……」

「ほ、本当ですよ!?!」

「マジ!?!」

こくり、と彼女が頷くのを見て、二人は拳を天に突き上げた。いえーいあたし達さいきよー、と何だか分からないテンションで叫んでいる。

まあ機嫌が直ったのならばいいか、と思った一夏は再びアリーナに視線を移す。試合をしている生徒を見ながら、そういえばとトーナメント表を開いた。先程シャルルに聞いた自分の出番を再確認しつつ、自分とは直接関係ないAブロックのトーナメントを見る。

先程勝ち抜けた簪と本音のペア、そして今勝ったセシリアと鈴音のペア。それらの進む先を目で追っていった一夏は、思わず声を挙げた。良く出来てるな、と呟いた。

「ん? どしたの一夏」

「これだよこれ。Aブロックのトーナメント」

「それがどうかなさいましたか?」

鈴音とセシリアの問いに、ほらこれ、と目で行ったことを指でやってみせる。それを見せられた二人は、成程、と笑って視線を動かした。

更識簪と布仏本音の二人へ。

「え? な、何?」

「どうしたの?」

首を傾げる二人に向かって、セシリアも鈴音も指を突き付ける。勝つのは自分達だ、と。

その言葉で何を言っているのか理解した二人は、同じく笑みを浮かべて勝つのはこちらだと返した。

「これでどっちか決勝いけなかったら爆笑もんだけどな」

そんなことを呟きながら、一夏はトーナメント表を再び仕舞う。まあ、まずそんなことは無いだろうけど、と続けてアリーナの試合に意識を向けた。

どうやらAブロックの試合はこれが最後のようで、終わり次第Bブロックの試合が始まるらしい。そのアナウンスを聞いた一夏は、四人

にそろそろ箒達の出番だぞ、と声を掛けた。

その声に騒いでいた四人は動きを止め、席に座ってアリーナを見やる。暫く試合を観戦していると、試合終了のブザーがなり四人がアリーナから去っていった。

「何だか観客席がざわざわしてるわね」

ではBブロックの試合を、というアナウンスと共に、来賓席からざわめきが聞こえ始めた。確かにそうだな、と首を傾げた一夏に向かい、セシリアは呆れたように声を掛ける。

「次は箒さんの出番ですから、注目されているのでしょうか」

「は？ 何で箒が？」

「いや、貴方もですわよ」

「俺も？」

首を傾げる一夏は本気で分かっていないようで、それを見たセシリアは大きく溜息を吐く。まったく、貴方達は何を考えているのですか。そんなことを言いながら彼に詰め寄った。

「いいですか？ 貴方も箒さんも、『しのの』のISパイロットなのですわよ」

「へ？ あ、ああ、そうだな」

「今まで織斑先生しかISパイロットが確認されてなかった『しのの』の全貌が明らかに！ みたいな感じなのかもね」

「……特別、なんだね」

「マジかよ」

気楽にやるつもりがとんだプレッシャーだぞそれ。そう言いながら一夏は肩を落とす。特に貴方は男性操縦者ですから二倍注目ですわ、というセシリアの追い討ちで力尽きたように椅子へ崩れ落ちた。

「って、野郎の操縦者ならシャルルもいるじゃんかよ」

『しのの』と男性操縦者で二倍ってことよ。頭使いなさい頭」

「……そうっすね」

もう逃げようかな、と思わず彼は漏らした。だが、しばらく無言で空を見上げると、よっしやあと勢い良く立ち上がる。こうなりやトントンやってやろうじゃないか。そう叫びながら拳を振り上げた。

「ちようどいい。ここでビシツと決めて、千冬姉と束さんに一人前だつて認めさせてやるぜ！」

「その意気ですわ」

「おう、頑張んなさい」

「おおいえ〜」

「頑張つて」

思い思いのエールを貰い気合を入れ直した一夏は、じゃあ俺も準備をしてくるかと出口に足を向けた。

試合、見ていかないの？ という問い掛けに、一夏は振り向くことなく心配いらないと返す。あいつが負けるわけないだろ、と言いつ残すと、そのままアリーナの観客席から去つていった。

残された四人は、思わず顔を見合わせる。鈴音は一人納得していた様子であつたが、残りの三人は少しだけ怪訝な表情を浮かべた。

「信頼し切っている感じでしたわね」

「うんうん」

「凄い……」

「ま、そりゃそうよ」

そうは言うものの、果たして本当にそうなのか。彼と同じリアクションをしている鈴音を除く三人は、どこかそんな引つ掛かりを覚えつつもアリーナに目を向ける。どうやら既に試合の準備は出来ているようで、後は試合開始のブザーが鳴るのを待つばかり。

「来たー！」

合図と共にピットから紅と黒が飛び出してくる。相手は『ラファール・リヴァイヴ』二体のペアのようで、豊富な武装で相手を翻弄しようという作戦らしい。確かにまだ実戦経験の薄い生徒達には有効な作戦であろう。

だが、生憎と相手が悪い。

「ラウラ、先に行かせてもらおうぞ」

「了解。援護は任せろ」

紅の流星が疾駆する。相手が銃弾を放つ前に間合いを詰め、その二刀を振り被つた。気持ち良いくらいの音を立て、相手の持っていた銃

が切り裂かれる。そのまま刀の柄で腹を殴り飛ばすと、もう一人の方へと斬撃を飛ばした。咄嗟のことで反応が遅れたもう一人はその斬撃をまともに食らい姿勢が崩れる。そこを狙い済ましたかのようにレールガンの砲撃が飛び、アリーナの端まで吹き飛んでいった。

体を捻る。パートナーが吹き飛んだことで動揺していた目の前の相手の首を、持っていた二刀で刈り取った。二連続で首を断たれた相手は『絶対防御』が発動、大量にあったシールドエネルギーは瞬時にゼロとなる。

試合終了のブザーが鳴り響いた。この間僅か十五秒。思わず見ていた者も言葉を忘れるほどの、ほればれとする秒殺劇であった。

「……なんとまあ」

セシリアの口からそんな言葉が漏れる。隣に視線を向けると、本音と簪も同じような顔をしているのが見えた。それほどまでに衝撃的な光景だったのだ。

少なくとも代表候補生と同等かそれ以上の操縦技術。加えて実戦慣れしたメンタル。今まで授業である程度分かっていたつもりであったが、実際に見せ付けられると溜息が出てしまう。反対側にいる鈴音が目を輝かせているのを見て、無理もないと肩を竦めた。

ただ、言わせてもらうのならば。

「あれくらい一秒殺劇は、わたくしでも可能ですわ」

「おお、せっしー対抗意識メラメラだ」

「私はちよつと無理、かな……」

「え、かんちゃんなら十秒でやれるって!」

「いや、私そういう戦い方じゃないし……」

無傷で勝利くらいは出来るだろうけど、という言葉聞いて、セシリアは思わず笑ってしまった。何だかんだ言っても、この少女も先程の光景を見て対抗意識を燃やしたのだ。当たり前だ、あんなものを見せられて、燃えないほうがどうかしている。

「鈴さん」

「ん?」

「わたくしはすぐに近接戦闘を身に付けてみせますわ」

そして、絶対に優勝してみせます。そう言うとセシリアは柔らかく笑った。だが、そこに秘められているのは寧猛な猛獣の笑み、あるいは、そんな猛獣を仕留める狩人の笑み。

それが分かっているのか、鈴音もつられるように微笑んだ。期待してるよ、あたしのお師匠。そう続けて彼女の肩を叩いた。

「箒は勝った、と。ま、当然だわな」

ピットまでやって来た一夏は試合結果を見てそう呟いた。既に試合は次々に進んでおり、自分の出番もそこまで遠くではなくなっている。キヨロキヨロと辺りを見渡し、シャルルの姿を見付けた彼はそこまで近付いた。

「あ、一夏、やっぱり確認しに来たの?」

「いや、違うけど……やっぱり確認、しとくか」

「そうしなよ」

シャルルが微笑みながらそう述べるのを聞き、一夏は自身の機体を纏わずに展開させる。調整の為のハンガーに置かれたそれを眺め、そして備え付けのコンソールを確認した。

そこで一夏は動きを止める。目を擦り、そしてもう一度確認。眉を顰め、目を擦り、改めて映っているステータスを見た。

「な……」

エラーの文字がでかかど表示されている。とはいえ、全てにその表示が出ているわけではない。出ているのは一箇所。それ以外は正常の表示が出ていた。

ただ、そのエラーとなっている箇所が問題であり。

『『金鳥』……使用不可!?!』

高速換装機構『金鳥』。その部分がエラーにより使用不可能になっていた。現在の『白式』は、『雷轟』も『飛泉』も『真雪』も使用出来ない、完全なるフラットな状態である。

その叫びにどうしたの、とシャルルが調整用のパネルを覗き込む。

そして同じように目を丸くさせると、これ、試合までにどうにかなるのと一夏に訊ねた。

「なるわけないだろ……これ東さん独特のシステムだぜ、俺じゃあ何でエラーなのかも分かんねえよ」

血の気の引いた顔でそう答えると、一夏は一体どうすればいいんだと頭を抱えた。今から別の機体を用意するわけにはいかないので、最悪この状態で試合に臨むしかないのだ。

フラフラとよろけながらも、彼は自身の姉に連絡を取った。事態を聞いた千冬は溜息を吐くと、間に合わんから何とかしろと返す。それが無理だから言っただろ、という一夏の言葉に、呆れたようにもう一度溜息を吐いた。

『おい一夏。私はお前をそんな軟弱者に育てた覚えは無いぞ』

「いや、でも千冬姉」

『くだい。それとも何か、お前はまだ姉に縋り付かないと生きていけないほど子供なのか？』

思わず言葉に詰まった。そうだ、自分はさつき何と宣言した。一人前だと認めさせてやる、そう叫んだではないか。そのことを思い出すと、彼は一度大きく息を吐いた。

「分かったよ千冬姉。見てろ、この程度の障害なんぞ軽く乗り越えてやる」

『ふん、言葉だけは一人前だな。……頑張れよ、一夏』

「ああ、任せとけ！」

気合充分に返事をし、通話を終了させた。よし、見てろよ。そう呟いて自身の機体を見る。重要な部分が使えなくなっている自分の剣を見る。

ねえ、一夏。と、そんな彼に声が掛けられた。どうしたシャルルと一夏が振り向くと、頬を掻きながら、一つ聞きたいことがあるんだと彼は問う。

「確か、一夏の『白式』って、『拡張領域』ゼロなんだよね？」

「ああ、そうだぞ。『金鳥』に全て使ってるからな」

「じゃあ、今の状態で使える装備って、何？」

その質問に一夏は一瞬シャルルから目を逸らした。宣言したものの、そこを突かれると困るんだよな。そんなことを眩きつつ、視線を元に戻した。

「無い」

「……は？」

「無いよ。『金鳥』が使えない『白式』には、装備は何も無い」

「それは、つまり？」

予想は付くけど出来れば当たらないで欲しいな。そう言いながらシャルルは一夏に訊ねる。対する一夏は吹っ切れたように笑うと、堂々と胸を張って宣言した。多分、その予想が大正解だ、と。

「今からの試合、『白式』は武器ゼロで戦うしかない」

それも、追加装甲やスラストターも無しにだ。そう続けて、一夏は『白式』の装甲をコツンと叩いた。

NO21 「何ムキになつてゐるんだろ」

「で、結局いつくんはフラットな『白式』で戦うってこと？」
「そうなるな」

アリーナの一角、基本的に教師のみが立ち入ることが出来る観察室と呼ばれる場所でモニターを見ながら二人はそんな会話を行っていた。片方はこの学園の教師である千冬だが、もう片方の最初に言葉を発した女性である篠ノ之束は全く学園に関係ない言うなれば部外者である。誰も文句を言わないのは、ここにいる教師が千冬ともう一人だけだからであろうか。

「しかし束、お前いくらなんでもあんな仕掛けをすることはないだろう」

「は？ いやいや、何で私の所為にしてるの？」

「違うのか？」

「どんだけ束さん信用ないの!？」

そもそも自分が犯人ならばわざわざ質問するはずがない。そう言つて眉を顰めた束を見て、そういえばそうだなと千冬は手を叩いた。どうやらからかっているわけでも何でもない素の行動だったようで、それが余計に束を脱力させた。あーもうやる気なくしちやつたなあと呟きながら、女性としていさかかどうなのかと思わないでもない体勢で椅子にもたれかかっている。そんな彼女を見て千冬は思わず笑みを浮かべた。

「お前は最初からやる気ないだろう」

「そこで止めを刺しに来るのがちーちゃんなんだよねえ。いや、まあ確かにそうなんだけどさ」

ここに居るのが何よりの証拠だ、と笑う千冬に、束もそうだねと笑い返す。『しののの』の創設者として来賓で招待されているはずの彼女がこんな場所で談笑をしているのは、つまりはそういうことなのだろう。

「だつてさ、名前も知らない有象無象と一緒に観戦とか嫌だし」

「まあ、分からんでもないな。私も堅苦しいお偉方といふのは疲れる」

そう言ってお互いに笑い合っていた二人だったが、それでどうなのという束の言葉で表情を戻した。何がだ、と聞き返すこともなく、千冬はさてどうだろうかと答える。まあ、威勢だけは良かったぞと続けると、束はいつくんらしいやと笑った。

「そういうお前はどうかんだ？ 妹は心配じゃないのか？」

「はっはっは、ちーちゃんとこのお馬鹿な弟と違ってうちの箒ちゃん超優秀だから。そんな心配は無用なんだよ」

「……束、今お前なんて言った？」

「いつくんは馬鹿」

「その通りだ。が、お前に言われると気に食わん」

そう言いながらゆらりと千冬は立ち上がる。いつの間にかその手には一本の木刀が握られていた。それに合わせるように束もまた立ち上がる。その手にはやはり一本の木刀が。

お互い笑いながら、その木刀を正眼に構えた。無論、目は笑っていない。

「まったく、普段ボロクソに言ってるくせに実はブラコンとか、人としてどうなのちーちゃん」

「年中無休で変人やっているお前に言われたくないな。お前だってシスコンだろうに」

「束さんの家族愛。ちーちゃんのは背徳的なエ・ロ・ス」

「ここで屍を晒せ束えええええ！」

「はーはっはっは。文武両道篠ノ之流跡取り嘗めんなー！」

割と洒落にならない木刀での戦闘を始める二人を見て、この場にいるもう一人の教師、山田真耶は被害に遭わないようゆっくりとその場から離れた。手に持っていたココアで喉を潤しながら、背後から聞こえる木刀がぶつかっているととは思えない激突音を耳にしつつ、疲れたように声を絞り出す。

「織斑君の試合見ましようよ……」

私は応援してますからね。と心の中で一夏にエールを送った。

さて、確認するよ。と一夏の隣でシャルルは告げる。武装も何も無い『白式』での戦闘ははつきり言って無謀、基本はサポート。ここまではないよね、と彼は続けた。

「うーむ」

「……何が気に食わないの？」

「俺も前線で戦いたい」

「寝言は寝てから言っつてね」

「酷え!？」

機動力攻撃力は通常量産機にも劣るレベルでしかない上に耐久値まで低いなんて機体で一体何をやる気だ。そう言われてしまうと一夏としても反論など出来はしない。唸りつつも渋々とシャルルの意見に従うと告げる。まあ今回はしようがないよ、とフォローを入れる彼を見て、一夏はそうだなと苦笑を浮かべた。

「さ、行くよ相棒」

「おう、行くぜ相棒」

ピットのカタパルトに足を掛ける。シグナルが点り、発信準備が完了する。お互いの名前が呼ばれ、アリーナへの道が開かれた。

「シャルル・デュノア。『ラファール・リヴアイヴ・カスタムII』行きます」

「織斑一夏。『白式』、行くぜ!」

叫びと共に空を舞う。シャルルは難なく、一夏は若干ぎこちなく。そのまま空中で静止すると、二人は対戦相手の顔を見た。普段見慣れている二人を見た。

二人と対峙している『打鉄』を纏った女生徒の名は、谷本癒子と鏡ナギ。一夏のクラスメートの中でも、特に仲のいい人物のうち二人だ。

「あれ? 織斑君機体変じゃない?」

「そうだね。……ひよっとしてハンデのつもり?」

だったらちよつと心外なんだけど。と癒子は眉を顰めてそう続けた。だが一夏は首を横に振る、そんなわけないだろうと。ただ機体が

エラー起こして使えないだけだ。胸を張って堂々と宣言する彼を見て、二人は思わず溜息を吐いた。

「そういうのって、言わない方が駆け引き的にいいんじゃないの？」

「うん、私もそう思う」

「あ」

やつちまったと頭を抱える一夏を見て、シャルルは思わず目を逸らした。パートナー間違えたかな、とこっさり呟いていたが、幸いにも誰にも聞こえていないようであった。

「ふ、無駄話はこのままで。行くぜ二人共、友達だからって遠慮しないからな！」

「誤魔化してるね」

「うん」

「流せよそこは！」

言いながら一夏は一直線に二人へと突っ込んでいく。その姿を見たシャルルはあっけにと取られ、そしてちよつと一夏と叫んだ。だが、既に動き出した一夏は止まらない。いつも通りにスラスターを吹き、いつも通りに収納領域から武器を取り出し、そしてそれを使用する。体に染み付いているその動きを行った。行ってしまった。

何も無い状態の『白式』で、である。

「遅い！」

「ノロノロだよ織斑君！」

癒子、ナギの両名が取り出したブレードが彼の鼻先を掠める。とっさに体を捻って躲したが、続けて繰り出される斬撃はそうもいかない。盾も何も無い状態で凌ぎ切るには、いかんせん機体の機動性が無さ過ぎた。

そんな彼の前に一つの影が割り込む。盾で二人のブレードを防いだシャルルは、お返しだと言わんばかりに右手のアサルトライフルを放った。危ない、と後方に離脱した二人を確認すると、彼は振り向くことなく一夏、と短く述べる。

「僕、言ったよね。その機体で前になるなって」

「あ、ああ」

「じゃあ今のは何？」

「か、体が勝手に動いたんだよ。こう、癖で」

「あ？」

「ごめんなさい！」

あまりにも彼の声が重低音だった為、思わず一夏は謝った。空中なので出来なかったが、地面ならば土下座も敢行していただろう。その言葉を聞いたシャルルは溜息を吐き、しっかりとしてよと声色を普段に戻してそう述べた。それにほっとした一夏は、もう一度ごめんと謝る。

「優勝するんでしょう？ ならもつとしっかりしなくちゃ」

「ああ、そうだな。しっかり、しなきゃな」

その言葉を聞いたシャルルは薄く笑う。そうそう、と呟くと、じゃあ行くよと銃を構えた。了解、と一夏はその少し後ろにつく。

先に動いたのはシャルル。スラスターを吹かし、銃を撃ちながら距離を詰めた。その後ろに潜むように一夏も前へと距離を詰める。あの程度近付くと彼はそこで前進を止め、その距離を保つように攻撃を始めた。

射撃で細かいダメージを与えられた癒子とナギは武装を切り替える。ブレードを仕舞い銃を取り出すと、射撃を行うシャルルに向かって引き金を引いた。

「残念」

その瞬間を狙って距離を詰めたシャルルは、いつの間にか構えていた近接ブレードを振り切る。虚を突かれた形になった癒子は、その斬撃をまともに食らってしまった。それでも瞬時に体勢を立て直し、持っていた銃をゼロ距離で放つ。躲されはしたものの、追撃を食らうことは避けられた。

「やっぱりデユノア君強いや」

「強敵だよ、デユノア君は」

「おい待て」

緊張感を高める二人に向かって一夏はそんな声を出す。二人に完全に無視をされているのが気に食わないらしい。シャルルより前に

出ると、俺を忘れてもらっちゃ困るぜと指を突きつけた。その突然の奇行にシャルルは目を丸くし、そして癒子とナギはこっそりと微笑む。

「あ、織斑君いたんだ」

「そういえばそうだったね」

「何でだよ!? 最初に話したじゃねえか!」

「一夏、落ち着いて、向こうの挑発だよ」

シャルルがそう言うが、どうやら彼の耳には届いていないようであった。デュノア君の影に隠れてすっかり忘れてただの、実質一対二だよねだの、次々と飛び出すあからさまな挑発にあっさり引掛かっていく。

「嘗めんな、と单身突っ込んでいくのと、かかった、と二人が笑うのが同時であった。癒子は近接、ナギは射撃と武装を分けると、向かってくる一夏に向かって攻撃を仕掛ける。いくら彼の勘が鋭くとも、全能力がダウンしている『白式』ではその攻撃を避けきれず。しまったと思つた時にはもう遅い、癒子のブレードの一撃を食らい後方へと吹き飛ばされていた。コンソールは致命的とは言わずともかなりのダメージを受けたことを示しており、これ以上の無茶は出来ないと言われたも同然であった。

「一夏!」

シャルルがフォローに向かおうとするが、その隙を突いて射撃武装へと持ち替えた二人が弾幕を放つ。短く舌打ちをすると、彼は素早くその場から離脱した。

「まずい、と彼は呟く。このままでは一夏が狙い撃ちをされ落とされるのも時間の問題だ。そうなるとシールドエネルギーにハンデのある自分一人では厳しい戦いになってしまう。『シャルル・デュノア』としては、かなりの劣勢なのだ。

回避行動を取りながら、どうしたものかと思考を巡らせた。何とかして、この状態から勝ちを拾わなくてはならない。

「……何ムキになってるんだろ」

そこまで考えて、ふと冷静になった。別に自分はパートナーになっ

た彼のようにこのイベントで優勝する気など毛頭無い。適当に参加して、そしてある程度の成績を残しておけばそれでよかった。よしんば一回戦負けだとしても、それはそれで構わなかった。

何せ彼は、元々ここで学生をやる為に転入してきたわけではないのだから。

「終わりだよ織斑君」

「私達が勝っちゃうもんね！」

大体にして、現在の一夏のトラブルもこちらで仕組んだことだ。同室であることを利用して『白式』にエラープログラムを送り込んだのは他でもない自分。データ収集と『しののの』の男性操縦者の価値を地に落とす副次効果を込めた『亡国機業』の策略だ。たまたまターゲットとパートナーになっただけで、本来ならば一回戦で叩きのめす役目は自分であつたかもしれない。そう考えれば、ここで負けても何の問題もない。

「そう、思ってるんだけどなあ」

癒子とナギの攻撃から一夏を庇いながら、シャルルは一人呟いた。意外と後ろの織斑菌とやりに毒されているのかもしれない。そんなことを思いつつ、二人を引き剥がす為に両手に銃を呼び出し弾幕を張る。肩で息をしている背後の一夏に向かい声を張り上げながら、彼は一本のブレードを放り投げた。

「お？、これは？」

「『ブレッド・スライサー』。僕の機体の自慢の一振りだよ」

一夏なら、その武器に文字通りの活躍をさせられるよね。振り向かずそう続けたシャルルに向かい、一夏は笑みを浮かべると任せとけと答えた。じゃあ、期待しているよと述べたシャルルは、そのまま一夏とは反対方向へスラストを吹かす。援護に徹しろ、と言っていた最初の自分の言葉を覆すその動きは、つまり。

「オーケーオーケー。任せとけ。織斑一夏を、とくと見ろ！」

半ば無理矢理背後にエネルギーを集め、爆発的に加速をしながら、一夏はそう吼えた。

癒子の目の前まで距離を詰めた一夏は、そのまま持っていたブレードを彼女に叩き付けた。甲高い音を立て彼女の体がぐらりと揺れる。もう一撃、と振り被ったところで相手からのブレードが眼前に迫った。

「うおっとお!？」

「あーもう。何で調子戻しちゃうかなあ」

せっかくなかい具合に頭に血が上ったのに。そうぼやきながら彼女は左手にブレードとは違う得物を取り出した。出し惜しみはせずに全力で行くからね、と宣言すると、それを一夏に向かって投擲する。体をずらすことでそれを躲した一夏だったが、それに合わせてブレードを構えて突っ込んでくる癒子に対応しきれず、持っていたブレードで何とか受け止めた。やるじゃないか、と笑う彼に向かい、彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「そりやそうよ。一般人の中で私達が一番織斑君達見てたんだから」

だから、こんなこともやれちゃうの。そう言つてブレードに込めていた力を少し抜く。その拍子にバランスを崩した一夏は、背後から何かが接近してくるのをセンサーで捉えた。先程彼女が投げた武器。手裏剣型をしていたが、あれは紛れも無くブーメランであり。

「自分の必殺技でやられちゃえ!」

「マジかよ!？」

対セシリア、そして簪。他にも幾度と無く使用してきた一夏の『飛泉』での挟撃。それを再現された彼は、思わず驚愕の声を挙げる。来ることは分かっているとはいえ、体勢を崩されているこの状態では回避がままならない。加えてこの耐久値では食らえば恐らく致命傷。何とかして避けようと体を動かすが、やはりフラットな『白式』では間に合わない。

視線を向かってくる手裏剣へと動かし、そして目を見開く。猛スピードで割り込んでくるオレンジの機体を見て、先程とはまた違う驚愕の声を挙げた。

「シャルル!？」

「間に、合った……」

『瞬時加速』で無理矢理突っ込んだシャルルは、手裏剣の一撃を自身の体で受け止めていた。幸いにして『絶対防御』が発動するほどではなかったものの、元々低い耐久値ではそう変わりがない。コンソールが示す表示はレッドゾーン、満身創痍なのは明らかであった。恐らくこちらに来る為に自身が相手をしていたナギの攻撃を食らうがままであったのだろう。

もはやほぼ死に体であるその状態で、彼は尚銃を構えて引き金を引いた。一瞬あつけに取られていた癒子の眉間に正確に叩き込まれたそれは『絶対防御』を発動させ大幅にエネルギーを削り取る。フォローに向かってきたナギにはハンドグレネードを放り投げ隙を作った。その間に一夏と共に距離を取る。

「大丈夫？」

「こっちのセリフだ。大丈夫かよ」

「ははは。あんまり大丈夫じゃないね」

お互い様だよ、と笑うシャルルを見て、一夏は申し訳ないと頭を下げた。あれだけ啖呵を切っておきながら結局は庇ってもらった。それが彼の中でこれ以上無いほど情けないと自身を責めたのだ。

そんな彼に、気にしないでいいよとシャルルは笑う。そう思うなら、今からでもいいところを見せてくれれば、それでいいから。そう続けて再び銃を構えた。

「来るよ、一夏」

「……おうー」

シャルルから借り受けたブレードを構える。『ブレット・スライサー』と名付けられているそれを正眼に構え、ゆっくりと前に歩を進めた。

相手のエネルギーはあと少し、ならば近付かせないのが得策。そう考えた癒子とナギは遠距離武装で弾幕を作る。このまま離れているのならばそれでよし、距離を詰めても少しの被弾でゲームオーバー。自分達の優位は動かない。

そんな彼女達の予想を裏切るかのように、一夏は真っ直ぐに突っ込

んできた。射撃の弾幕など気にせんとばかりに。そんなものに当たってたまるかとはかりに。

「織斑君、自分のシールドエネルギー分かってるの!? 当たったらお仕舞いだよ!」

「分かってるから、突っ込んでんだよ!」

思わず叫んだ癒子にそう返すと、一夏は飛んできた銃弾をブレードで切り裂く。自分に当たるものだけを選んで、最小限の動きで。無論、考えてやっているわけではない。彼の最大限に発揮された勘が、自分の脅威となるものだけを無意識に選び取っているのだ。

どれだけ連射しても当たらないそれに、彼女達は恐怖すら感じ始めていた。これが噂のただの勘か。そんなことを思いながら、しかしまだ負けないとナギが呼び出した手裏剣を投擲する。これならば避けられても二段攻撃が出来る。そう考えた一撃であったが、しかし彼女は失念していた。自分達が相手にしているのは何人なのかを。

「同じ手は食わないよ」

弾き、そして戻ってくる前に受け止めたシャルルが、不敵に笑っていた。そうだった、と思った時にはもう遅い。はい一夏、とその手裏剣を隣に渡すと、彼も一気に距離を詰めた。流石に一夏のように切り裂きながらというわけではなく、左手のシールドで被弾を減らしながらであったが。

盾で相手に見えなくした状態で銃撃を放つ。それにより攻撃の手が一瞬止まってしまったのを確認すると、シャルルは全力でスラストを吹かした。『瞬時加速』で距離をゼロにすると、驚愕で目を見開いているナギに向かってごめんね、と呟いた。

「ちよつと痛いかもしれないけど。まあ、これ、勝負だしね」

左手のシールドを振り被る。その動作と同時にパージされたそこから現れたのは、杭。リボルバー機構が備えられたそれは、第二世代でも最強と謳われた近接兵装であり、そして以前通常のISより数段堅牢なゴーレムに風穴を開けた武装でもある。

その名も。

「え、ちよ、いや——」

『盾殺し』！』

アリーナに盛大な音が響き渡る。同時にナギの体がくの字に曲がり、真上にベクトルを向けられた衝撃で天高く打ち上げられた。頂点まで達した体はゆっくりと落下を始め、そしてそのまま受身を取ることなく地面に落ちる。そのままピクリとも動かない彼女を見て、思わず戦っていた一夏と癒子は顔を見合わせた。

「……………え？ 私もああなるの？」

「あー、うん。そうだな」

このままシャルルが二撃目を使えたらな、と一夏は頬を搔く。視線を彼に向けると、苦笑を浮かべながら手を横にヒラヒラと振った。どうやら残りのエネルギーを注ぎ込んだ一撃だったらしく、後は任せたと地面に降りていく。

それを目で追っていた癒子は安堵の溜息を吐き、そして気合を入れ直すように頬を叩くと前を見た。視界の先では同じように一夏がブレードを構えている。

「織斑君の今の状態で、向こうみたいにいけると思わないでよね」

「百も承知だよ。俺は俺のやり方で、勝つ」

言葉と同時にナギから奪い取っていた手裏剣を投げ付けた。それを躲さずブレードで受け止めた癒子は、そんな見え見えの手に引っかけられるわけないでしょと叫ぶ。そりやどうも、と笑いながら、一夏はブレードを振り被った。同じくブレードでそれを受け止めた彼女は、自身も先程使っていた手裏剣を呼び出し投げ付ける。首を動かすことで躲した一夏は、ブレードを持つ手に力を込めた。

「いいの？ このままだと戻ってきた手裏剣に当たってお仕舞いだよね？」

「はっ、きつきのセリフをそのまま返すぞ谷本さん。そんな見え見えの手に引っかけられるかっての！」

言いながらスラストを上に吹かした。突然急上昇を行った一夏に思わず視線を向けてしまった癒子は、先程自分が述べた言葉を自分で体現する羽目になってしまう。危ない、と戻ってきた手裏剣を受け止めた彼女は、上空から落下してくる相手の対処に間に合わない。

「そつちが俺の真似なら、こつちは更識さんの真似、つてか！」

簪にやられた対処法。それを思い出しながら一夏は叫ぶ。左右からの挟撃ならば、上下の動きで躲してカウンターをすればいい。自分の身をもって体験したそれを、彼は自分の手で行った。持っていたブレードを振り被り、そのまま彼女を一刀両断にせんと振り下ろす。

全力で落下した勢いで地面まで辿り着いた一夏が上を見上げると、シールドエネルギーがゼロになった癒子の体がゆっくりと崩れ落ちるところであった。念の為とコンソールで自身のエネルギーを見ると、何とかギリギリの部分で踏ん張っていることが表示される。

「……ギリギリだったな」

そう漏らすと、彼はその場にへたり込んだ。

「傷物にされちゃったよ」

「誤解を招く表現はやめてくれませんかね！」

試合も終わり、アリーナから控え室に戻ろうとした一夏とシャルルは、丁度同じタイミングで戻ろうとしていた癒子とナギに遭遇した。そして出会って最初の一言がこれである。癒子はよよよと涙を吹く振りをしながら一夏へとしだれかかった。これは責任を取ってもらうしかないね、そう言いながら彼の腕を掴む。

「え？ 責任？ え？」

「うん、責任。私を傷物にした、責任」

そう言いながら彼女は薄く笑った。その笑顔を見た一夏は、ああ、これは駄目なパターンだと半ば諦めにも似た表情を浮かべる。どうやら俺はここで肉食系女子に食われるんだな、そんなことを思いながら彼は次の言葉を待った。

「というわけで、夕食奢ってね」

「軽いな責任！」

「んー？ 織斑君は何を想像してたのかなあ？」

えつちいことです。とは口が裂けても言えない一夏は、何も考えて

いましてと叫ぶのが関の山であった。ふーんと返しているが、癒子は分かっているようでニヤニヤと意地の悪い笑みを崩さない。篠ノ之さんに言いつけちゃおうかな、と鼻歌交じりで一夏へ問い掛けた。

「……なんでそこで箒の名前が？」

「え？ 本気で言ってる？」

「え？」

どうやら真面目に分かっていないらしい一夏を見て、癒子はおかしいなと首を傾げた。だって二人って付き合ってるんでしょ。そう続けると、一夏は目を丸くして彼女の顔を見詰めた。

「いやいやいや、何言っちゃってんの？ 俺と箒が？ んなバカな」

「……毎日お弁当作ってるんだよね、篠ノ之さんの分も、部屋が別々になっても」

「へ？ そりゃ、昔からそうだったし。俺が作らないとあいつ拗ねるし。そのくせ俺が箒の弁当食いたいって言うとか甘えるなどか言い出すんだぜ」

「……休みの日とか、篠ノ之さんとデートしたりしてるよね？ 服とか一緒に買ったんだよね？」

「荷物持ちに呼ばれてるだけだって。服とかはまあ買ったけど、そんなんいつものことだしなあ」

「……そもそも、一ヶ月ほど同じ部屋で過ごしてたんだよね？」

「小さい頃からよく箒の家に泊まってたし。中学受験の時も泊り込みで勉強とかしてたしなあ」

「うん、絶対付き合ってるよね」

「付き合っていないっての」

大体知ってるだろ、と一夏は続ける。俺が付き合ってくれって言うとかあいつ断るんだぞ。そう言いながら肩を竦めた。

確かにその光景は何度も目になっているが、彼氏彼女のちよつとしたじゃれ合い程度にしか認識していなかった癒子は何かを考え込むように額に手を当てた。これはどうやら本気で言っているらしい。ということとはつまり、あの二人は別に彼氏彼女の関係などではなく、ただ単に幼馴染なだけだということになる。

「そんなバカな」

思わず口に出た。あの距離感はどう考えても幼馴染のそれとは違う。少なくとも彼女はそう思っていたのだが、当人はどうやら違っていたらしい。

だがこれは逆に大ニユースだ。残念なイケメンとして名高い一夏であるが、それでも狙っている女子は結構な数がいる。しかし篠ノ之箒という本妻がいる為に彼女達は諦めていたのだ。もしそれが違つたと彼女達が知ったら。

「……ちよつと楽しくなってきた」

「谷本さん？ 何か凄え悪役面してるけど、どうしたんだ？」

「ん？ いやいや大丈夫。こつちの話だから」

さて差し当たって誰に流そうか。やっぱりここは新聞部だろうか。いやいやまずは近場の女生徒だ。本音は興味なさそうだから、ここはやはり簪だろうか、いやいやセシリアも捨てがたい。鈴音は知ってうだからパスとして。そんな次々と悪巧みが浮かんでくる彼女の頭の中は、現在最高にテンションが上がっていた。周りを気にせず小躍りをしてしまうほどに。

「何なんだ一体？」

「あー、うん。ごめんね織斑君、私から癒子に言っておくから」

首を傾げる一夏に、ナギはそんな言葉を投げ掛けていた。どうやらシャルルと同じような会話を済ませ、夕食の奢りを漕ぎ付けてこちらに来たらしい。済まないけどよろしく頼む、と彼女に返すと、彼も自身のパートナーを探して視線を巡らせる。しかしその姿が見えないことを確認すると、おかしいなと首を傾げた。

「デュノア君なら、用事があるって先に行っちゃったよ」

「あ、そうなのか」

それならしようがないな、と呑気に一夏は答えるとナギと若干おかしくなった癒子と共に控え室まで歩いていった。

そこでシャルルの姿が見えずに首を傾げるのは、そう遠くない話である。

「どうしたものかな」

シャルルは一人校舎裏で壁にもたれかかりながらそう呟いた。知らず知らずのうちに毒され始めていた自分を、何とかしなくては。そうは思ったのだが、どうすればいいのか考えが纏まらなかつたのだ。

彼はISの通信機能を呼び出す。『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』ではなく、デゼールの使用しているISのものを。

『シャルか。どうした？ 何か異常事態か？』

「あはは。んー、まあ、そうだね。マドカの声が聞きたくなつちやつて」

『……確かに異常事態だな。何か拾い食いもでしたのか？』

「拾い食い、か。うーん、そうだね」

確かにしたかもしれない。そう言うときシャルルは口角を上げる。碌でもないものを食べちゃつたのかもなあ。そう続けると、堪え切れなくなつたのか大声で笑い出した。

通信の向こうではそんなシャルルに呆れたように溜息を吐くのが聞こえた。そして、まあ元気でいるのならそれでもいい、と呟いた。

「ありがとう、マドカ」

『礼を言われるようなことを言った覚えは無い』

「言葉とかじゃなくてさ」

こんな自分と親友でいてくれてありがとう。そう言うと、シャルルはちよつと照れくさいねと頬を掻いた。聞いているこつちも照れくさい、とマドカも続けた。

「さて、じゃあ私はそろそろ控え室に戻るよ」

『ああ。気を付けろよ』

「うん、それじゃあまた」

通信を終えると、シャルルは体をグツと伸ばす。まあ、もうひとふんばりしますかね、と誰とも無しに呟くと、デゼール用のISを収納領域に仕舞いこみそこから立ち去つた。

その顔には先程のような迷いは無く、いつも通りのシャルル・デュノアの顔があつた。

NO22 「怨んでいるだろうか」

一回戦は無事終了し、生徒はそれぞれ試合の感想を話したり世間話をしたりしながら夕食を取る。その中には何だか分からないうちに奢る約束をしてしまった一夏の姿も当然あるわけで。学園の食堂で望みのものを頂きホクホクとした顔で歩いてく癒子に手を振りながら、さてでは自分はどうするかなと視線を巡らせた。別に彼女達と夕食を食べても良かったのだが、これ以上一緒にいると更なる奢りが待ち構えていそうで本能的に避けたのだ。とりあえず一人飯でもいいかなどと思いながらメニューを眺めていた一夏は、食堂の入り口の開く音とざわめきを聞いてそちらに顔を向けた。

「あれ？ 千冬姉、と……何だあれ？」

立っている者が自分の姉であるのは間違いない。だが、その姉が担いでいる何かが問題であった。簀巻きにされたそれは、なにやらウサギの耳のようなものが端でひよこひよこ揺れている。もがもがと声が聞こえることから、恐らく中身は人なのだろう。

そして彼の中でウサ耳を付けたあんな状態になりそうな人間など一人しか思い付かない。姉の親友にして、自分の幼馴染の姉である女性。世間一般では天災などと称されている変人研究者。

「おーい、東さん。生きてる？」

「ウサギはね、木刀で頭をしこたま殴られて簀巻きにされると死んじゃうんだ……」

「それ世間一般の生物は大抵死ぬから」
とりあえず無事なようなので一安心。もともと、彼の姉が自分の親友を撲殺するような人間であったのならばとつくに姉弟の縁を切っている。そういう意味ではこれは世間話の一種のようなものなのだろう。

で、一体どうしたんだこれ、と一夏は千冬に問い掛けた。ああこれか、と簀巻きになった束を床に放り投げると、ボコした、という簡潔な答えが返ってくる。床に激突した束が呻き声を上げていたが、彼女は完全に無視するようだ。

「入学した頃、暴力沙汰がどうかで俺説教されなかつたっけ？」

「赤の他人を殴り飛ばしたらまずいだろう」

「知り合いでも充分まずいっての！ 仮にも教師だろあんた！」

そんな一夏の叫びに、そうだそうだと簀巻きの束が同意の声を挙げた。まったく、と溜息を吐きながら彼はそのまま簀巻きを解き、自由になった彼女はありがとーと抱きつく。女性特有の豊満な肉体が一夏の体にダイレクトに接触し、思わず彼は体を強張らせた。

「ん？ どしたの？」

「あー、いや、そのですね束さん」

「うんうん」

「……素敵なお胸ですね」

瞬間、束は一夏から飛び退き、そして千冬の方へと振り向く。その表情は明らかに苦虫を噛み潰したような顔であり、ちゃんと弟の教育やってるのという言葉が全てを物語っていた。対する千冬は涼しい顔で、八割方お前の所為だぞ返していた。

「私はいつくんをこんな公共の面前でセクハラトークするような少年に育てた覚えは無いもん！」

「私も無いぞ」

「……じゃあいつくん最初から変態だったんじゃない？」

「そうなるな」

「ならねえよ！ っていうか公共の面前で弟をボロクソに言うのはいいかよー！」

元々自分がセクハラ染みた言葉を呟いてしまったのが原因なのだが、その辺りは完全に抜け落ちていらしい。案の定そこを二人に突っ込まれすいませんと床に崩れ落ちた。

まあそんなことはどうでもいいんだけど、といじけている一夏を横目に束は千冬に向き直った。ご飯食べようよ、と笑みを浮かべる彼女を見て、千冬もそうだなと笑みを返す。

ただ、その前に。そう言いながら千冬は周囲に視線を向けた。どうやらかなり目立っていたようで、食堂にいるほぼ全員が彼女達の方に意識を集中させていた。彼女達のやりとりにも勿論意識は向けられ

ていたが、それよりも大きく注目されていたのは、千冬の隣に立っている女性。ISを作り出した張本人であり、『世界最強のIS研究者』と称される人物であり、私設IS組織『しののの』の創設者である人物の方であった。

「やれやれ、と千冬は肩を竦める。まあ何か言わないと終わらんかと呟くと、東の方へと視線を戻した。

「東、何か言っておけ」

「へ？ 何かって、何を？」

「食堂の連中がお前を見てるからな。挨拶くらいはしておけ」

「えー、めんどい」

「見られ続ける方が面倒だぞ」

「はいはい。——私が天災の東さんだよ。よし、オツケー」

「それで良いと思えるお前は流石だな」

「いや、充分でしょ？ 大体さ」

ここに通つてて私のこと知らない人はまずいないんだから。そう言つて肩を竦めた東を見て、まあ確かにそうだなと納得するように千冬も頷いた。その反応に満足し、じゃあ夕食にしようとメニューに向かう東を追い掛けるように彼女も足を踏み出す。事実、やっぱり本物なんだという声が聞こえたりはしたが、先程までの意識の集中は若干薄れつつあった。

その代わりに、篠ノ之博士、と行動に出る女生徒が現れ始めてしまったのは若干予想外であったのかもしれない。

「あの、私ISの研究職に就きたくて、博士にお話を伺いたいんです！」

「……うん、熱意は立派だけど今東さん夕食中だからね。時と場合考えてね」

「あ、あの、私のIS見てもらえませんか！」

「別に見るのは一瞬だけど、東さん今プライベートだからね。そういうのは仕事で依頼してね」

言葉こそある程度選ばれているが、早い話が「鬱陶しい、寄るな」である。そのことが分かった千冬や一夏は彼女が爆発する前にやって

くる生徒達を追い払った。二人掛かりで止められては流石の女生徒達もこれ以上何かは出来んと自分達の席に戻っていく。それを見た二人は安堵の溜息を漏らし、そして束に頭を下げた。申し訳ないと謝罪した。

「あいつらも悪い奴じゃないんだ。有名人が来てはしゃいでしまったというかな」

「いやもういいから。どうでもいいからそんなこと。ご飯食べようよ」

「あ、ああ、そうだな。場所は、どうする？」

出来るならあまり人がいない場所がいいだろうか。そんなことを考えた千冬だったが、束は箒ちゃんのいる場所、という身も蓋も無い答えを出した。それは多分さっきのような連中がわらわらしている場所だぞ、と伝えても、別にそんなのどうでもいいと彼女は返す。どうなっても知らんからなと千冬は溜息を吐くと、箒が座っている場所の方へと足を進めた。

幸いにして彼女が座っていた席は端の方であり最悪の事態は避けられたが、それでも周りに生徒がいるのには変わりない。半ば諦めたように溜息を吐く千冬に向かい、お疲れ様と一夏は声を掛けていた。

「やつほー箒ちゃんって何か人多っ!？」

「あ、束さん。こんばんは」

「あら篠ノ之博士。またお会いしましたわね」

箒と共に食事をしていたのは、鈴音、セシリア、ラウラ、シャルル、簪、本音の六人である。その内の二人は束と顔見知りであったので平然と声を掛け、我関せずと食事を食べる二人がおり、一人慌てる人物がおり、それをなだめる人物が一人いた。おまけとしてよかった谷本さんいないと安堵の息を吐く一夏とその姉がいた。

総勢十人となったそのテーブルは、座っている人物の肩書きが肩書きなだけに一種異様な雰囲気醸し出し、まるでそこだけ別の空間であるような錯覚が生まれてしまう。他の生徒が声を掛けられなくなったのは不幸中の幸いであろう。

「まったく。こんな場所まで来て騒ぎを起こさないでください」

「いや、今回は東さん悪くないからね。どっちかというといつくんが元凶」

「いやいやいや！ 俺じゃなくて千冬姉だろ!？」

「一夏だ」

「即答!?! 少しは弟かばってくれよ!」

「何アンタ、やっぱりまた何かやらかしたの?」

「騒ぎの声自体は聞こえてましたが、やはりですか」

「やっぱりって何だよ！ お前等俺のことどういう目で見てんだよ!」

「馬鹿の元凶だろう」

「……うん、紅茶美味しい」

「ド直球かスルーって両極端過ぎるわ!」

「……が、頑張って」

「ふぁいと〜」

「うん応援してくれるは嬉しいけど、それフオローでも何でもないよね」

賑やかを通り越した喧騒の夕食は、こうして過ぎていく。

トーナメント二日目。この日は朝から生徒が活気付いていた。昨日とはまた違った理由で、である。何やら浮き足立った生徒が多数おり、どこか興奮した声色で集まって何かを話していた。

曰く、優勝すれば男子ペアが交際を申し込んでくるらしい。

「……どうしてこうなった」

「自業自得、じゃないかなあ」

一年生中に広まり、彼を狙う肉食獣という名の女生徒が目をギラつかせている中、その噂の発信元となった癒子は頭を抱えていた。そんなつもりはなかったのに、と呟いているところからすると、彼女の予想はもう少し違ったものであったようだ。

「ただ、織斑君は実はフリーなんだよって話しただけなのになあ」

「尾ひれ背びれが物凄く付いちゃったね」

ここまで来てしまえばもう止められない。もはや元凶である彼女の与り知らぬ場所へとすっ飛んでいってしまったのだ。そう結論付け、癒子は自分は関係ないとばかりに踵を返した。事実、一回戦で負けている彼女は噂が現実のものとなったところで何の恩恵も無い。

まあ皆がやる気になっていくからよしとしよう。そんな無責任は発言をしながら生徒用観客席へと歩みを進めた。

「さて、どうなるかなー」

「どうなる、って?」

「みんなやる気じゃん? ひよっとして意外と大番狂わせが——」

癒子の言葉は途中で止まった。目の前の光景により、強制的に止めさせられた。

アリーナの中心部、そこで呑気に自分のパートナーを応援する本音と、一人で相手二人を完封する簪の姿があった。勿論相手も噂を耳にしているので気合充分なのが傍から見ても伝わってきたが、簪の纏うそれは質が違った。圧倒的であった。

どんなに死角から攻撃を行おうが、彼女はまるでそこに目があるかのごとくひらりと躲す。そして、相手の回避に合わせるように的確に射撃を放つ。あつという間の秒殺劇と比べると派手さに欠けていたが、それがかえって見る者に言葉を失わせていた。

相手のシールドエネルギーはやがて底を付き、落ちる。対する簪は汚れ一つ付いておらず、余裕の表情で空に佇んでいた。

「……なにあれ?」

「昨日と比べ物にならないくらい凄い……」

一体全体どうしてあんなったのか。それを知らない二人はその姿に首を傾げていた。

その一方で、理由を知る者は流石と笑みを浮かべる。そちらに分類されるセシリアと鈴音は、そうでなくてはと不敵に笑っていた。

「無傷で勝利くらい、ですか」

「あの子の無傷と一般的な無傷にちよつとズレがあったみたいね」

埃一つすら触れさせずに勝利するとは思ってもみなかった。そう

言いながら鈴音は笑う。まあそのくらいやってくれなくては面白くありませんわ、とセシリアは彼女に返しながら笑みを強めた。

「さて、わたくし達がやることは分かっていますわね？」

「秒殺劇」

「正解ですわ」

では、参りましょう。その言葉と共にピットのハッチが開き、試合の開始のブザーが鳴り響く。『ブルー・ティアーズ』と『甲龍』がそれと同時に空を舞った。

対面で相手が武器を構える。その頃には既に鈴音は加速を済ませており、弾丸の如きスピードで疾駆していた。一直線に迫るそれに慌てて狙いを付けた対戦相手は、その軌道が曲線を描き射撃を回避したことで目を丸くする。

そして次の瞬間には『双天牙月』で背中から袈裟切りに断たれ、大量にあったシールドエネルギーを瞬時に皆無にさせられる。信じられないといった表情で落下していく中、既に隣にいたはずのパートナーが撃ち抜かれていることにそこでようやく気づいた。最初に鈴音が加速した時点で既に『クイツクドロウ』により急所に銃弾を叩き込まれていたのだ。始まった瞬間には既に倒されていたとも言える。

試合終了のブザーが鳴る。時間にして十秒、箒とラウラの記録を塗り替え、最速試合時間と相成った。

ちなみにこれを見ていた一般人代表谷本癒子嬢は、というと。

「……あかん、次元が違うわ」

「癒子、ショックで何だか良く分からないキャラになってるよ……」

更識簪、布仏本音、セシリア・オルコット、凰鈴音の四名は、二回戦を終えたその足で一夏達の見ている観客席までやってきていた。四人共どこか誇らしげで、やってやったと言わんばかりに胸を張っている。

「いや、のほほんさん何もしてないだろ」

「細かいことは気にしないのだ」

邪魔をしないというのも立派な行動だよ、と自信満々に続けられると、確かにそうかもしれないと思ってしまう。一夏はどこか釈然としないまま、しかし何故か納得したように頷いてしまった。

横では箒、ラウラ、シャルルが素直に祝福しており、三人は照れ臭そうに笑みを浮かべている。それを見てみると、自分も素直に祝福しようという気持ちも浮かび上がり。そして同時に、彼の中で対抗心が芽生えた。

「しかし、何で四人ともあんな派手な戦い方を？」

その次に浮かんだのは疑問。まるで全員が見せ付けるかのようにやってのけたそれは、何かのパフォーマンスのようにも感じられたのだ。それを素直に口にする、ああそういえばアンタいなかったつくと鈴音が眩く。

「箒の試合を見てさ、火が点いちやったのよ、みんな」

「そういうことすわ」

「……うん」

「めらめらだよ」

箒の試合、という言葉聞いて一夏も合点が行った。要は皆負けず嫌いなのだ。自分も含めそうだと理解した彼は、先程生まれ対抗心を更に膨らませた。じゃあ俺達も派手にやらないとな。そう言いながら隣のパートナーに視線を向ける。僕はそこまでは出来ないよと肩を竦める姿が目に入り、一夏は不満そうに唇を尖らせた。

「それより、『白式』はもう大丈夫なの？」

「おう、バッチリだ。東さんにバージョンアップもしてもらったしな」シャルルの質問にそう返しながらガントレットを軽く叩く。そして、何がどうバージョンアップしたのかは教えてもらっていないけどな、と続けた。それは大丈夫じゃないだろうというシャルルの言葉に気にするなど返し、試合の準備をしようと立ち上がった。

箒とラウラも同じように立ち上がり、ではそろそろ私達の出番だなと呟いている。

「ところで、一夏」

「ん？」

「お前が一年の優勝者と付き合うという噂が流れているが」

「超初耳なんですけど!？」

一夏の驚きとは裏腹に、残りの面々は別段動揺していなかった。どうやらその噂は耳にしていたらしく、しかしデマだろうと確信を持っていたようだ。彼の反応を聞いてああやっぱりと頷いている。勿論箒もそう確信していたらしく、笑いながら話を続けた。

「しかし、そうなるのであれば。一夏の彼女は私かラウラの二択になるぞ」

「……言いますわね、箒さん。残念ながら、一夏さんの彼女はわたくしか鈴さんかの二択ですわ」

「そうよ!。一夏の彼女はセシリアか、あたしの……あ、あたし!？」

「ちっちゃ。おりむーの彼女はかんちゃんか私の二択だよ」

「……ま、まだ彼氏彼女とか、早いと思う。そういうのは、もっと段階を踏んで……」

火花が散る。この場にいる誰もが優勝するのは自分だと声を挙げる。それだけの自信と、実力を備えているのだ。ちなみに本気で一夏の彼女になろうと思っている輩はほばいない。噂の話に乗っかっていただけである。

だから、何でそんなに熱くなっているんだろう、という彼の疑問はあながち間違っではない。

「織斑一夏」

「ん?」

「私はお前の彼女になる気は無い」

「いや分かってるから」

他の面々もノリで言っただけだろ。そう続けると、それならばいとラウラは続けた。変に勘違いされても困るからな、そう言いながら火花を散らしている箒に声を掛ける。彼女の声に返答した箒は、では行つてくると観客席から去っていった。

その背中を見ていた一夏は、俺達も行かなきゃと歩みを進める。そうだね、とシャルルもそれに続いた。

「まあ、俺達が優勝するからどっちみち話は無かったことになるよな」

「あはは。そうだね」

笑みを浮かべながらそう述べた一夏に、シャルルは盛大に笑いながら同意した。

今回は私が前衛でいこう、というラウラの言葉に頷くと、箒は斬撃を飛ばし弾幕を作る。通常の射撃とは違うその回避に苦勞している間に、間合いを詰めたラウラのプラズマ手刀がその喉元を搔つ切っていた。距離を離し射撃を行おうとしていたもう一人にはワイヤーブレードを射出し、回避ルートを潰していく。自身の正面に空間を作った彼女は、相手が網に掛かったのを見て笑みを浮かべた。

レールガンが真っ直ぐ突っ込んできた相手にカウンターで叩き込まれる。普通なら分かりそうなものだがな、と呟きつつ、彼女は背を向けた。まだ対戦相手のシールドエネルギーは二人共に残っている。大会ルールで跳ね上げられた耐久値のおかげで踏み止まったのだが、そんなことは分かっているはずのラウラは、敵に背を向けた。隙だらけだ、とそこに攻撃を加えようとした彼女達は、真横から高速接近してくる影に気付かない。気付いた時にはもう遅い。

斬、と二刀が残っていた二人のシールドエネルギーを刈り取った。刃に付いた血を弾くように一振りさせると、腰に付いている鞘へとそれを収める。同時に切り裂かれた二人は地面へと落下していった。

「相変わらず余裕だね」

「篠ノ之さんもボーデヴィツヒさんも、切り札を全く使っていないからね」

二人の試合をピットのモニターで見っていた一夏とシャルルはそんなことを呟く。こりゃ決勝は骨が折れそうだ、と笑った一夏を見つつ、シャルルはそうだねと同意した。

「ま、その為にはまずこの試合を勝たなきゃね」

「当然だろ。見てろ」

万全になった俺の実力を見せてやるぜ。そう高らかに宣言しながら

ら、一夏はカタパルトへと向かう。じゃあ期待するからね、と言いな
がらシャルルもカタパルトに向かった。

試合開始のブザーと共に『白式』と『ラファール・リヴァイヴ・カ
スタムⅡ』は空を舞う。一回戦と違い、今回の『白式』は『金鳥』が
正常稼働している為に『雷轟』を装備している。左手に盾、右手にビー
ムガンを構えた一夏は、行くぜという叫びと共にスラスターを吹かし
た。

「こっちはフラストレーション溜まってんだよ！」

ビームガンを連射しながら相手の眼前まで迫った一夏は『雷轟』を
『飛泉』に換装。大刀を振りかぶり十字に切り裂いた。その勢いのま
ますれ違い、そして『飛泉』を『真雪』に換装。ダメージを受けバラ
ンスを崩しているその背中に向かって近距離でビームランチャーを
放った。巨大なビームの波に飲まれ、少女は悲鳴を上げる間もなく撃
墜され落下していく。

次、ともう一人の方に視線を向けた一夏だったが、既にそこには別
の影が疾駆していた。

「……まあ、僕も派手に行きますか」

両手に持ったアサルトライフル二丁を連射しながら間合いを詰め
る。慌てて射撃で応戦しようとした相手の視界には、既に近接ブレ
ードを振りかぶっているシャルルの姿が映っていた。武器を切り裂き
体勢を崩させると、ブレードからショットガンへと変更していた彼は
その引き金を引く。シールドエネルギーが見る見る減っていき、それ
に焦った相手は近接ブレードを手に特攻を掛ける。

「うん、ごめんね」

それを瞬時にブレードに持ち替えていたシャルルがあっさりと受
け止めると、返す刀でその胴体を切り裂いた。『絶対防御』が発動、大
量にあったエネルギーはほんの僅かになってしまふ。既にその時点
で再び射撃武装に切り替えていた彼は、相手の側面に回りこみこめか
みに銃を突きつけながら薄く笑った。

引き金を引く。再び『絶対防御』が発動した相手のエネルギーは敗
北判定値に至る。昨日の苦戦が嘘のような、文句の付けようの無い完

勝であった。

「はっはっは、どんなもんだ！」

「よっぽど昨日の試合ストレス溜まってたんだね」

彼等の勝利を告げるアナウンスを聞きながらアリーナの真ん中で高笑いを上げる一夏を見ながら、シャルルは苦笑する。まあこの調子なら決勝までは難なくいけそうかな、そんなことを思いながら、左手を閉じたり開いたりを繰り返している一夏をつれてピットへと戻っていくのだった。

「調子に乗ってるな」

「乗ってるねえ」

観察室で今回も千冬と東は試合を観戦していた。これはどこかでミスをしそうだな、という千冬の言葉に同意するように東は頷き、しかしまあ大丈夫でしょうと続けた。

「どうやらあの程度の耐久値のハンデはハンデになってないみたいだし、一回戦みたいなのトラブルがなきゃいっくんなら余裕だよ」

「だといいがな」

そう言いつつも、心の中では彼女の言葉に同意していた。どうやら今年の専用機持ちのレベルは軒並み高く、今まで通りのハンデでは差が埋まりそうにない。自分の一存で変更出来るわけではないので恐らく今大会中は無理だろうが、しかし逆に決勝は例年よりも派手なものになるであろうという予感が生まれる。

Aブロックは更識簪と布仏本音組対セシリア・オルコットと凰鈴音組。Bブロックは篠ノ之箒とラウラ・ボーデヴィツヒ組対織斑一夏とシャルル・デュノア組。決勝はこの組み合わせになるのは覆しようがないだろう。

「どうしたのちーちゃん、浮かない顔して」

「ん？ ああ、少しな」

懸念があった。千冬の中ではどうしても捨て置けない不安があった。セシリアと鈴音が数日ISの修理をすることとなった原因。謎

の機体との戦闘という彼女達の話。

血に塗れたようなISを纏った、ボーデヴィツヒではない『ラウラ』。

「きつと、あいつは私を怨んでいるだろうな」

「ちーちゃん?」

千冬にとつて最初の生徒。VTシステムを組み込まれた殺戮兵器として生み出され、そして手に負えないからといって処分されることとなった少女。彼女が日の当たる場所に連れ出そうとした少女。

御しやすい人格として生み出された『ラウラ・ボーデヴィツヒ』により奥底に封印されてしまった、本来のラウラ。

「……なあ、束」

「ん?」

「大会の決勝なんだが、もし筈と一夏の試合で何かが起こったら、観客に被害の出ないように手回ししておいてくれないか?」

「何だか物騒だね。テロリストでも襲撃してくるの?」

「いや、何てことの無い話さ。……昔の生徒がお礼参りに来るかもしれない、それだけだ」

その言葉で束も何かを察したのか、それなら仕方ないねと肩を竦めた。とりあえず大会に支障の無いように仕立て上げておくよ。そう言くと千冬に向かってサムズアップを見せた。

「悪いな束。迷惑を掛ける」

「束さんとちーちゃんの仲だからね。その件は、私も関わってるし」

「いや、元凶は私さ。私がもう少ししっかりしていれば、あんなことにはならなかった」

そう言くと千冬は視線を落とし、何か考え込むように口を嚙む。そんな彼女を見た束は、らしくないなあと肩を叩いた。もつと傍若無人で馬鹿なのがちーちゃんなのに、そう続けると笑みを浮かべながら肩を叩いていた手を頭に動かした。

「……ふん」

「素直じゃない、も追加しようかな。ちーちゃんのツンデレ」

「やかまし」

そう述べたが、束が頭を撫でるのを振り払うことなく千冬は受け入れる。そのままされるがままになっていた彼女は、ありがとうと小さく呟いた。

どういたしまして、と笑みを強くさせた束は、じゃあ早速取り掛かろうかなと席を立つ。そんなに重労働なのか、という千冬の問いに、全然と彼女は返した。

「面倒事は先にやっておく性質なのだよ」

「ふっ」

「何か鼻で笑われた!?!」

「いや、お前からそんな言葉が出るとは思ってもみなくてな」

「さっきまでの真面目なムードぶっ飛ばす発言だよねそれ」

「しようがないだろう。それが私、織斑千冬だ。織斑一夏の姉だぞ」

「あー、うん。そうだね」

「納得されるとそれはそれでムカつくな」

「今自分で似たようなこと私にやっというてそれ!?!」

観察室に賑やかな声が響く。試合は二回戦が終了し、そろそろ三回戦に突入しようとしていた。

NO23 「やれるだけやってみますか」

「うーん、いまいちパツとしないのよねえ」

そんなことを呟きながら、新聞部副部長の少女は持っていたペンを置いた。彼女の机に置かれているのは次に発行する用にあつらえた新聞の原稿のようで、そこには現在行われている学年別トーナメントの決勝の組み合わせが記されている。三年生と二年生のそれを眺めながら、やつぱりインパクトが足りないと彼女はぼやいた。

「正直順当過ぎてあれなのよねえ。てか、二年なんかたつちやん一択だし」

椅子に体を預け前後に揺らしつつ、そうなるとやつぱり一年かなと呟いた。一年生も予想通りの面々が勝ち上がっているが、そこはやはり話題性が違う。

代表候補生と『しののの』のパイロット、そして男性操縦者。豪華なラインナップで送る決勝戦はきつと盛り上がるに違いない。

「ま、とりあえずまだ一年は決勝決まってるし、ホントにそうなるかは——」

呟きは部室の扉が開かれる音と部員の決まりましたよ副部长という声に掻き消された。振り向き部員の少女の持ってきた紙を受け取ると、彼女はその口元を歪める。これは予想通りの面白い展開になる。そんなことを考えつつ、再び机に向かうと原稿の書き直しに掛かり始めた。

表題はズバリ、一年生最強決定戦。

「……安直過ぎるか」

何かいいアイデアないかなあと視線を天井に向けると同時、そういえば面白い情報をついでに仕入れましたよと部員は彼女に述べた。視線を向けると笑いを堪えきれないようで、その少女は表情を取り繕いつつ一年生の優勝者は何でも特別な景品があるらしいんですよと続ける。

「景品？」

「はい。その景品っていうのが」

織斑一夏と交際出来る権利。そこまで言い切ると部員の少女は限界だったのか大声で笑い出した。一体全体なんでそんなことになっているのかさっぱり分からないですよと蹲り床をバシバシと叩いている。

そんな彼女とは対照的に、副部长——黛薰子は何かを考え込むように顎に手を当て視線を机に向けていた。どうしたんですか、という問い掛けにも答えず、微動だにしない。

ひよつとして自分も彼と付き合いたいとか思っていたり、と邪推し始めた矢先、来た来た来た奇声を発しながら原稿に向かい始める彼女の姿があった。これよこれ、やっぱり大衆はゴシップを求めているのよ。そんなことを言いながら一心不乱に原稿を作り上げていくその様はどこか狂気すら感じさせた。

「決まった！ 明日のIS学園新聞の見出しは——」

たまについていけなくなるなあ、と新聞部部員の少女は一人溜息を吐いた。

タッグトーナメントの中日である。一大イベントではあるが、流石に始まりから終わりまで延々とぶっ通しで試合を続けるわけには行かない為、それぞれ学年別に大会の開催期間はずらしてあったり間を空けたりしているのだ。決勝までの日程は終わり、現在はその間の期間である。久しぶりとも思える通常授業に若干げんなりしながらも、一夏は授業内容をノートに書き留めていた。

ちなみに中間考査の結果はここでも出る。

「一夏、夏休みはどのくらい減ったのだ？」

「聞き方おかしい！ 大体中間駄目でも期末で取り戻せるつつの」

箒の言葉にそう返しつつ、一夏は乱暴に折りたたまれた答案用紙をこれまた乱暴にカバンに詰め込む。ああこれは凶星なんだな、とその光景を見ていたセシリアはどこことなく達観した様子で眺めていた。

「大体だな、お前だって成績変わらんだろうが。人のこと笑ってる場合かよ」

「……」

「ふっ……。なあ箒、俺と一緒に夏休みを過ごそうぜ」

「……ああ、それもいいかもしれないな」

「恋人同士のアバンチュールみたいない言い回しですけど、それ結局補習ですわよね！」

「勿論だ」

「当然だな」

「……何故自慢げなんですの……」

我慢出来ずに会話に乱入し燃え尽きたセシリアを、傍観で済ませられた癒子とナギ、本音は苦笑しながら眺める。いつもいつもご苦労様だよね、という本音の言葉に、二人はうんうんと頷いた。

さて、とそのまま二人は時計を眺める。そろそろ鈴音が昼食の誘いに来る頃だ。そう思い一夏達に声を掛けようとしたが、それよりも早く彼女が扉を蹴破らん勢いで教室に進入してきた。割といつも通りとはいえ、流石に勢いがあり過ぎたので一体全体どうしたのだと彼女等は鈴音に訊ねる。それには答えず、無言で手に持っていた一枚の新聞を机に広げた。

『男性操縦者のハートは誰のもの!? 織斑一夏を巡る恋の決勝戦遂に開幕!』……は?」

声に出して読み上げた箒が素っ頓狂な声を挙げた。隣ではセシリアも同じような表情で記事の見出しを眺めている。そして一夏はそんな二人より更に絶句した表情で固まっていた。

「え? これって、え?」

「……まさか、ここまで大事になるとは」

「……ちよつと私用事が出来たからいくね」

ナギと癒子はある程度察しつつ対照的な反応を見せ、本音は少しだけ目を細めると教室から出て行った。

そんな一行の反応を見た鈴音は、顔を真っ赤にしてその新聞が置いてある机を叩く。おおよそ少女が出せる音ではないものが響き、その音で五人は我に返った。が、しかし状況は未だ混乱したままである。

「どうすんのよこれ」

搾り出すようにそう呟いた鈴音にしつかりとした答えを返せる人物は生憎一人もいなかった。どうするって言っても、と箒もいつになく困った様子で新聞の記事を読んでいる。

篠ノ之箒は本命であり、もし優勝すればこのまま即座に入籍も夢ではない。そんな一文を見て、視線を天井に向けると頭を掻いた。

「やはり私は織斑箒になるのか」

「帰ってきてくださいまし！」

「どうかその状況でも自分が優勝するって前提で話進められる篠ノ之さんは流石だなあ」

「織斑鈴音、か……」

「あ、こっちも似たようなベクトルになってる」

目の前に当事者がいるにも拘らずこの反応を見せている時点で無理だろうと遠目で眺めていたラウラは思ったが、あえて口には出さなかった。先程のセシリアを見ていた為、あそこに加われば余計な苦勞を背負い込むことになること必至だったからだ。

どうしたの、という一緒に昼食を食べているクラスメイトの質問に何でもないと答え、彼女は食事を再開した。

「しかし、見出しと余計な一言はアレですけど、それ以外は案外普通ですわね」

それぞれの機体とパイロットのステータス的な部分を読みながらセシリアはそう呟く。簡単な経歴もセットになっており、彼女の場合であれば記録に残る戦績は現在二敗のみとなっている。近接戦闘パッケージである『ブレード・ペンドラゴン』のことにも触れており、どうやらかなり取材を行っていることを窺わせた。

一体誰がこんな記事を。そう思った彼女の目の前に突き出されたのは一本のマイク。どうやらそれがボイスレコーダーであることが分かった彼女は、それを突き出して人物に視線を向けた。

「はいはい、新聞部ですよ。決勝進出者にインタビューしてます！」

はいこれ名刺、とセシリアだけでなく一夏や箒達にも渡していく。受け取ったそれに書かれている名前は、整備課二年・新聞部副部長・黛薫子。

「で、その副部長さんが何の用だ？」

少し警戒の色を見せつつ一夏がそう問い掛ける。対する薫子は今言ったはずなただけだと笑顔を崩さずにセシリアに向けていたボイスレコーダーを彼に向けた。

じゃあ決勝進出者としての意気込みをどうぞ。そう言つて瞳を輝かせるその姿は、とてもではないが上級生には見えないと彼は思う。思うが、しかしそこで答えなければいつまでもこのままだろうと判断した一夏は口を開く。意気込みって言われてもな、と言いながら、セシリアと鈴音と箒を眺めた。

「勝つのは俺だし、この付き合う権利とやらは無効になるんじゃないのか？」

おおお、と教室で歓声上がる。どうやらいつのまにかほぼクラス全員が聞き耳を立てていたらしい。その中心の薫子はいいいねいねと言いながらレコーダーを再びセシリアへ。

「はいじゃあオルコツトさん」

「優勝はわたくしですわ。まあ一夏さんなら彼氏にしてあげてもよろしくてよ」

歓声が更に大きくなる。薫子のテンションもどんどん上がる。じゃあ次は、と鈴音にレコーダーを向けた。

「いやセシリアが優勝つてことはあたしも一緒に優勝してるつてことだからね。そこんとこ忘れちゃ駄目だから」

「ああ、確かに」

「ま、あたし達の優勝は揺るがないわよ。……あたしは、一夏も箒も超えてみせる！」

先程とはまた違う歓声が上がった。成程ね、と微笑を浮かべた薫子は、ところで織斑君の彼女の権利はどうするのと問い掛けた。

拳を振り上げたまま鈴音の動きが止まる。錆びたロボットのようによつくりと上げていた拳を下ろすと、先程までの勢いはどうしたのだといわんばかりに歯切れの悪い返事を繰り返していた。

「い、一夏が、ど、どうしてもっていうなら、あたしが彼女になってあげても、い、いかな」

「鳳さんは織斑君にゾッコラブ、と」

あながち間違ってもいないが発言と全く違う事実をメモする新聞部副部長に鈴音は飛び掛かる。それを華麗に躲すと、じゃあ最後の一人だと箒にレコーダーを向けた。

向けられた彼女は、セシリアのように自信に満ち溢れるでもなく、鈴音のように純粋な反応をするでもなく。ただ淡々ところ述べた。

勝負は時の運だ、と。

「え？ それだけ？ もつところ、派手な勝利宣言とかしないの？」

「しません。仲間内のバカ話ならともかく、ちゃんとした取材のインタビューならばちゃんと答えるのが礼儀でしょうから」

「なんだかわたくし達が真面目に答えていないような物言いですけど」

「いや、真面目かって言われれば、真面目じゃないだろ」

「あー、確かに」

割とノリで答えていた気がする、と鈴音は納得したように頷いた。隣ではセシリアが頬を掻きながら視線を逸らしている。

そんな三人を尻目に、薫子はまあいいか、と箒との会話を打ち切っていた。ボイスレコーダーを仕舞い、協力ありがとうと頭を下げる。

そんな彼女に、先輩、と箒は声を掛けた。

「捏造は許しません」

「えー」

「当たり前です。この調子だと、この一夏争奪戦は私が最初に優勝したら付き合えと宣言したから始まったとか書かれかねませんし」

「う、鋭い」

苦虫を噛み潰したような顔で後ずさりをする彼女の退避ルートをさりげなく一夏が塞ぐ。前門の虎と後門の狼、逃げ場を無くした薫子は観念したように項垂れた。ちゃんと聞いた通りに記事にするから見逃して。そう言いながら箒に向かって手を合わせた。

はあ、と溜息を一つ吐くと、箒は分かりましたと一夏に目を向ける。こくりと頷いた彼は横に体をずらした。

それじゃ、と逃げるように教室から出ようとする彼女の背中に向か

い箒は待つてください先輩と声を掛ける。まだ何か、と振り向いた薫子へ彼女は笑みを浮かべた。

「どうしてもそれらしいコメントにしたいのならば、こう書いておいてください」

世界最強を受け継ぐのはこの私です、と。

大多数の生徒にとっては退屈な授業の日々が過ぎ、再びトーナメントが開催される。それぞれの学年、それぞれのブロックの決勝は今までの試合を勝ち抜いた精鋭による戦いであり、これが盛り上がりがないはずもなく。観客席は生徒来賓問わず満員であり、これから始まる試合を今か今と待っている。

特に、この一年生の決勝が行われるアリーナではそれが顕著であった。全一年生どころか、全校生徒が集まっている勢いですし詰りになっていく観客席の熱気は凄まじいの一言である。

そして、それに負けず劣らず、決勝に残った四組のタッグもまた凄まじい熱気を抱いていた。最初に試合を行う二組は既に準備を済ませピットで待機しているが、その顔には待ちきれないと書かれている。

「しかし」

そんな中の一人、鈴音は一枚の新聞を眺めながらポツリと言葉を漏らした。昨日のインタビューが纏められたそれは、今朝早く校門前で配られていたものだ。彼女が放った言葉もちゃんと載っている。だが、気になったのはそこではなく。

「もつとあの時言ってみたみたいな交際権を前面に押し出すと思ったんだけど、むしろ全然書いてないじゃない」

「そうですわね」

鈴音の言葉に同意しながら、しかしそれは仕方ないだろうとセシリアは肩を竦めた。全員が勝負そのものに比重を置いていたのだ、ここで煽ったところで三流のタブロイドにしかならない。そんなことを

言いながら彼女も同じように渡された新聞に目を向けた。

「後は、あの箒さんの一言でしよう」

「世界最強を継ぐのは私だってやつ?」

「ええ。あれで空気が一変しましたから」

それを感じ取ったのだろう。昨日のあの光景を思い出しセシリアは薄く笑った。空気を変えた一因は間違いなく自分だ。それが分かっているからこそその笑みなのだ。

そしてもう一人、自分達の次の試合で控えている男性操縦者。織斑一夏は明確に対抗心を燃やしていた。

「やっぱ一夏はあれなのかな。最強を継ぐのは自分だ、って思ってるのかな」

「それは、そうでしょうね」

普段の能天気な行動と言動から忘れがちだが、彼の I S の操縦技術は間違いなくそれが根底にある。だからこそ、箒の言葉に反応したのだ。

そんな話をしていた二人だが、鈴音がだったらセシリアはどうなの、と問い掛けた。あの言葉に反応していたってことは、やっぱ最強を継ぎたいと思っているのだろうか。そんな素朴な疑問を口にした。

「まさか。わたくしがそんなことを思っているはずありませんわ」

「へ? じゃあ何で箒の言葉に——」

「勘違いしてはいけません。わたくしが目指すのは継ぐのではなく、奪い取ること」

正解最強に認められるのではない、世界最強を打ち倒すのだ。迷い無くそう言い切ったセシリアを見て、鈴音は目を見開いた。そして、堪えきれないといった風に笑い出した。

だったら尚更ここは勝たなきゃいけないわね。笑いを収めることなくそう続けた彼女に、セシリアは当たり前ですわと返す。そっちこそ、ちゃんと集中してくださいねと述べると、当たり前だという返事が届いた。

「あたしの目標は一夏と箒を越えることなんだから」

「ええ、そのくらいでない。きつと向こうに対抗出来ないでしょうから」

向こう？ と聞き返す鈴音に視線だけで壁を、正確には壁の向こうを指すと、納得したように頷いた。

ここからでは見えないその先に立つのは、二人の対戦相手。

怖いくらいに集中している、と彼女の隣に立つ本音は思った。元々表情に乏しい部分もある簪であるが、いつにも増してその顔には表情が見られない。彼女がここまでの姿を見せるのは、幼馴染であるはずの本音ですら数えるほどでしか知らない。それほどまでに、これからの試合に意識を向けているのだ。

どう考えても交際権ではないだろう、と彼女は思う。確かに彼には少なからず好意を抱いているだろうが、それだけでこの状態にはなり得ない。付き合いの長さでそのことが分かっている本音は、同時にこの状態になる理由にも行き当たる。

「かんちゃんをほつたらかshにして世界最強を継ごうとか、ちゃんちやらおかしいよね〜」

その言葉に視線だけで返事を返した簪は、もう一度対戦相手のデータの復習を始めた。相手がどの装備を持つてきても対処出来るように、相手がデータに無い動きをしたとしても慌てないように。その一つ一つを頭に叩き込んでいく。冷静に、思考を集中させていく。

その思考とは裏腹に、心は熱く、これ以上無いほど燃え盛っている。自分がこんな状態になったのはどれだけ振りであろうか、そんなことが頭を過ぎって思わず笑ってしまった。

「かんちゃん？」

「……大丈夫。いつでも、いける」

「うん。私もいつでもおっつけだよ」

本音の笑みに笑みで返し、簪はピットの扉を睨んだ。ここからでは見えないその先にいる相手は、簡単に倒せるような相手ではない。それを再確認して、負けるものと拳を強く握り締めた。

アナウンスが流れた。そろそろ出番である、という旨の放送を聞き、二人は自分の機体を纏いカタパルトにその足に乗せる。ISのコソールで自身の装備や状態を調べ何の問題もないことを確認すると、ハッチが開くのをじつと待った。

向こう側の二人も、同じようにカタパルトへと足に乗せ、試合開始の合図を静かに待っている。四人が無言で集中する中、ブザーと共に彼女達の目の前の扉がゆっくりと開かれた。

「行くよ本音」

「りよ〜かい!」

静かで熱い少女は、盾の如き堅牢な心を持つ親友を伴い、空を舞う。

「行きますわよ鈴さん!」

「あいよー!」

誇り高い血統を持つ少女は、猪の如く真つ直ぐな少女を伴い、空を駆ける。

その四人の姿が見えた途端、アリーナの歓声が一際大きくなった。空中で各々の武器を構える少女達の顔は、真剣そのもの。そこに「手を抜く」・「ふざける」などというものは存在しない。

まず飛び出したのは意外にもセシリアであった。『ブルー・ティーズ』の近接戦闘パッケージ『ブレード・ペンドラゴン』に搭載されていたバスタードソードを横薙ぎに振るう。

させない、と本音の機体の武装である『葛の葉』の盾がその斬撃を弾き飛ばした。硬く重いそれにぶつかったセシリアの体勢は後ろに崩され、無防備な姿を敵の前で晒してしまう。彼女が苦い顔をしたのを見逃さず、簪は荷電粒子砲を腰にマウントしその引き金を引いた。

「そっ!おー!」

その動作に合わせるように、セシリアの背後からミサイルが飛来する。それを確認した簪は視線をセシリアからミサイルに変更し、そして冷静に銃口をそちらに向けた。自分に当たりそうなものだけを狙い、撃ち落とす。それも、なるべく相手の近くでだ。

とはいえその隙に彼女は二人から距離を取っており、尚且つシールドで防御体制を取っている為に爆風で被害を受けた様子は見当たらず

ない。まあそうだろうな、と短く息を吐くと、今度はこちらの番だとIS用薙刀『夢現』を構えた。

「本音！」

「ほいさ〜！」

彼女のパートナーである本音がハンドガンを取り出し連射する。明らかに目眩ましであるそれをシールドで防御しながら、セシリアも自身のパートナーの名を呼んだ。任せろ、と背後から飛び出した鈴音が『双天牙月』をプロペラのように回しながら真っ直ぐに突っ込んだ。ハンドガンの弾を弾きつつ『夢現』とかち合ったそれは、鈴音の裂帛の気合が僅かに勝つたらしく、先程のセシリアのように体勢を崩された簪の体が後ろに流れる。もらった、と振り上げた『双天牙月』をその脳天に叩き付けた。

「もらわれないよ。私がいる限り、かんちゃんには指一本触れさせない」

「……ちっ」

その刃はまたも本音の『葛の葉』に弾かれ届かない。舌打ちしながらセシリアの隣に並んだ鈴音は、あれどうにかしないと、とぼやくように問い掛けた。

「どうにか、ですか」

「え？ 何？ 当て何もないの？」

「そういう鈴さんはどうなのですか？」

「真っ直ぐ突っ込んでぶっ飛ばすあたしにそんなアイデア出るわけ無いじゃん」

「威張って言うことじゃありませんわ……」

やれやれ、と肩を竦めると、ではあの盾はわたくしが担当しましょうと大剣を構えた。その代わり、ちゃんと仕事をしてくださいね。そう言うとセシリアは笑顔を見せる。

任せとけ、と鈴音は再び簪へと突っ込んだ。予想していたのか別段焦ることもなく腰にマウントした『春雷』を放つ彼女とは裏腹に、鈴音の顔は晴れない。威勢良く返事をしたはいいものの、自分で述べたようにそれからどうするかのアイディアなど何も無いからだ。

だが、それが自分なのだからしょうがない。そう気持ち切り替えると、スラスターにエネルギーを込めながら彼女は吠えた。

「真っ直ぐ！ 突っ込んで！ ぶっ飛ばす！ それがあたしの——」

『瞬時加速』と『甲龍』の『龍咆』とを組み合わせた彼女流の高速移動攻撃。簪の目の前から消え失せ、そして次の瞬間には背後に斬撃を加えている。それに気付いた時には既にそこに姿はなく、また別方向から斬撃を放つ。

縦横無尽に飛び回りながら行うそれは、常人には決して捉えられない速さであり。

『疾風迅ら——えええええ!』

「……それは、もう、知ってる」

それをことごとく弾いてみせた簪は、常人の域は優に超えているということに他ならない。驚愕の表情を浮かべる鈴音とは裏腹に、彼女は淡々とそれを行っていた。自身の渾身の攻撃を防がれたことで動きが一瞬止まったのを見逃さず、簪はその胴に『夢現』を振じ込む。肺に溜まっていた空気が一瞬にして吐き出され、そしてそのまま威力を殺せずに鈴音は後方へと吹き飛んだ。

「鈴さん!？」

「隙だらけ」

思わずその姿を目で追ってしまったセシリアに向かって、簪は『春雷』を放った。二門の荷電粒子砲から放たれた銃弾が襲い掛かるが、素早く反応した彼女はシールドに装備されていたビットを展開させた。通常の盾より広範囲をカバー出来るようになったそれは、『春雷』の砲撃を物ともしない。

「……シールドビット?？」

「BT兵器を無理やり防御に回している試験的な装備ですわ。将来的にはちゃんとしたシールドビットも開発されるのでしようけど」

今はこれが精一杯。そう言いながら笑みを浮かべたセシリアは、驚きましたか、と続けて問い掛けた。

一瞬反応をするものの、簪は別に、と返す。ここで相手のペースに乗ってはいけない。そう判断したが故の行動であったが、どうやら彼

女にとってはそれで充分であったようだ。笑みを更に強くさせながら、ではもう少し驚いてもらいましょうと展開していたビットを戻す。

「一応言っておきますが、わたくしは別に騙したつもりはありませんわよ」

その言葉と同時に銃弾が簪の眉間を襲った。オートガードに設定していたらしい『葛の葉』の防御が間に合い防がれたが、そうでなければ完全に撃ち抜かれていたその攻撃を確認し、彼女は思わず目を見開く。この可能性も充分予測していたが、どうやら少し油断し過ぎていたようだ。そんなことを思いながら隣の本音に礼を述べた。

目の前にはバスタードソードを仕舞い、彼女のいつもの装備である『スターライトmkⅢ』を構えたセシリアの姿が。いつのまにか体勢を立て直した鈴音もその隣で『双天牙月』を構えている。

「両方の装備を詰め込んだ、まあ所謂決戦仕様というやつですわ」

だろうな、と簪は心中で呟いた。恐らくそれは向こうも分かっているのだろう、別段そこで何か余裕を見せることなく、再びライフルを仕舞いこちらを睨んでいる。ここで優位に立ったと油断してくれれば助かったのだけど、と彼女は思いつつ本音に声を掛けた。

「足止め、出来る？」

「かんちゃん無茶言うね。……ま、やれるだけやってみますか」

そう言うとは本音は簪の前に立つ。『葛の葉』を全展開、自身の周囲に六枚、簪の防御に二枚を回すと、真っ直ぐにセシリア達へと突っ込んだ。倒す必要はない、あくまで足止めを出来ればいい。そう考えた故での行動である。

鈴音が『龍咆』を連射する。不可視の砲弾が彼女に向かうが、見えようが見えまいが防いでしまえば何も変わらない。勢いを失うことなく、一気に彼女達へと肉薄した。

逆手に持った近接ブレードをセシリアの喉元に突き立てる。上半身を動かすだけでそれを躲したセシリアは、再び取り出したバスタードソードをお返しとばかりに振り下ろした。無論『葛の葉』に弾かれるが、どうやらそれが狙いだったらしく、同タイミングで背後から鈴

音が『双天牙月』を叩き込む。

だが、その攻撃もやはり『葛の葉』の巨大な盾に弾かれた。

「布仏はね、更識の付き人。更識を守るのが仕事」

普段の間延びした口調とは違う、静かな声。一回戦の日に一夏を引つ叩いた時とはまた違う、彼女らしいが彼女らしからぬ声。

何かを操作するように両手を動かした。それと同時に彼女の周囲を回っていた『葛の葉』が三枚ずつセシリアと鈴音の周囲に移動する。二人の行動を妨げるかのように眼前に展開されたそれを見ながら、本音はゆつくりと言葉を続けた。

「でもね、私はそんな仕事どうでもいいんだ。私は更識を守るんじゃない、かんちゃんを守りたいんだから」

だから、全力で期待に答えさせてもらうよ。そう言うと、彼女は機体を翻して後方へと下がった。本音の影で意図的に隠していたもう一人の姿が、そこで頭になる。

砲門を増やした『山嵐』を構える、簪の姿を。

「二人の攻撃はこつちには届かない。でも、かんちゃんの攻撃は筒抜け。足止めって言われたけど、半分ホントで半分嘘だったんだ。本当は、この状態にしたかったの」

「コンビネーション、って、やつだね」

幼馴染だから出来る芸当だ、と二人は揃って笑みを浮かべた。対するセシリアと鈴音は顔を顰めて目の前に広がる盾に攻撃を加える。これをどうにかしない限り、自分達は無防備である一撃を食らってしまう。それを避けるために、必死で動いていた。セシリアはセシリアで、鈴音は鈴音で。個々に、別々に。

そんな二人の行動を見ながら、簪はその引き金を引いた。一×一では、一十一には敵わない。そう呟いた。

「穿て！ 『山嵐』！」

その名の通り嵐のように降り注ぐそれは、回避出来ない二人を飲み込み大爆発を起こした。爆炎が鳴り響き、黒煙はアリーナの半分を覆うほど広がっていく。

セシリアも鈴音も、その黒煙に阻まれ姿は見えない。何か動く気

配も見当たらない。

Aブロック決勝戦、試合開始から約十五分が経過していた。

No24 「諦め悪い女なのよ！」

未だ消えないその爆煙を見ながら、簪は尚も集中を途切らせていなかった。試合終了のブザーは鳴っていない。ならば、あの二人は健在であるはずだ。そう彼女は判断したのだ。

そんな彼女の隣に並ぶ本音もまた、視線を爆煙の先から逸らさない。向こうが何か行動を起こせばすぐに対応出来るように、センサーと目視で前を見る。

と、そこで違和感を覚えた。いくらなんでも煙が濃過ぎるのだ。直撃し、相手にダメージを与えたからといって、いつまでも煙が晴れないのは不自然なのだ。そこに至った本音は隣に立つパートナーの名を呼んだ。こくりと頷くと、簪は腰の『春雷』をその煙の先に向かって放つ。

閃光と共に、煙は霧散していった。そして、その先にいた二人の姿がようやくやく颯になる。

その手に発煙筒らしきものを持った鈴音と、先程使用したシールドビットを展開していたセシリアの姿が、である。

「ち、こっちはまだ体勢立て直せてないってのに」

「あれだけの時間で立て直せないという時点で大分死に体ですわね」

攻撃に反応し全てを防ぐ『葛の葉』だが、そこには明確な弱点が存在する。一つは一回戦で彼女が使用した際に皆で考察していた「相手を倒す装備ではない」という点。そしてもう一つが、今のセシリアと鈴音の行動であった。

単純明快で、「攻撃に区別されていないものには反応しない」のだ。攻撃、反撃に転ずるための機動には反応しても、完全に守りに入った機動、ないしは全く関係のない行動には無力なのである。

「とはいっても、だから何だって話なのよねえ」

「反撃の糸口を見付けないことには、このまま黽られてお終いですわ」彼女の周りには『葛の葉』が未だ拘束を続けている。いくら抜け道があったからといって、それが勝利に繋がるかといえれば答えは否。むしろ、その行動しか出来ない事を逆手に取られる可能性すらあるの

だ。

「詰んでない？」

「あら？ 諦めるのですか？」

挑発するかのようなその物言いにまさか、と返した鈴音は、持っていた発煙筒を投げ付けた。『葛の葉』によつて弾かれ明後日の方向に飛んでいくそれに目もくれず、彼女は真っ直ぐに相手を睨む。

その視線を合図にしたかののように、簪と本音は左右に分かれた。お互いに射撃武装を構え、挟み込むようにそれを放つ。回避ではなく防御を選択したセシリアと鈴音は、その場から動くことなくその射撃をやり過ぎた。何かしら移動を行うことによつて『葛の葉』が反応することを危惧したのだ。

だが、無論そんなことは相手も分かっている。分かっているからこそその挟撃である。行動範囲を狭め、相手の選択肢を一つ一つ潰していく。出来るのが防御のみならば、その防御すら不可能なように。

今のところは二人が背中合わせになることで対応しているが、バラバラに動いていた先程の様子を見る限り、それもいつまで続くかわからない。そんな予測を立てていた。

「……」

「かんちゃん？」

その一方で、そうでない可能性も彼女の中ではしつかりと考慮されていた。個人プレーに走らず、チームワークを発揮して反撃の糸口を掴む。そんなことはありえない、などと簪は考えない。常に最悪の予想は立てておく、それが前回の一夏との戦闘で身に付けた彼女なりの集中法であつた。

本音はそんな簪を見て満足そうに笑う。これならば、負けない、負けるはずがない、と。そんな事を思いながら、笑う。

「八方塞がりじゃないのよ。あーもう！ どうしろつての!？」

鈴音は彼女の自信を裏付けるようにヤケクソ気味に叫び防御を固めつつも頭を抱えている。このままならば落ちるのは時間の問題であらう。

その一方で、同じく防御を固めながらもじつと静かに佇んでいるも

う一人の少女の姿は異彩を放っていた。ハイパーセンサーをフル稼働させ、周囲の状況を認識し、しかし動かずそこで盾を構える。その眼光だけは鋭く、忙しなく動いて何かを行なっていた。

先程まで叫んでいた鈴音もそれに気付いたのか、パートナーの名前を一言呼ぶと気持ちを落ち着けるように大きく息を吸い、吐く。

「行けるの？」

「行けなければどのみち負けですわ」

「ま、そりゃそうか」

笑いながら姿勢を低く構えた。防御からくるものではないその動作は、明らかに反撃を、簪と本音に攻撃を加えようとしていることを意味している。未だ『葛の葉』が彼女等を拘束しているのにも拘わらずだ。

一体何を考えているのだろうか。そんなことを本音が頭に浮かべたのと同じ、鈴音は『瞬時加速』により一直線に彼女に向かって突っ込んできた。速度こそとてつもないが、あからさまなその動作に当然『葛の葉』は反応する。目の前を塞ぐように立ち塞がる大盾、しかし望み通りと言わんばかりの表情を浮かべた鈴音はそれに迷いなく手を伸ばした。

斬撃や打撃を弾く盾は、しかし掴み掛かるといふ動作を弾くことはしない。武装の特徴として相手がそれを構えようが決して盾としての機能しないようになっていく上に、収納と展開は一つ一つ個別に行える。奪われようが、脅威足り得ない。そう判断されていたのだ。

無論本音もその考えに基づいて武装を操作している。一つを掴まれたからなんだというのだ。そんなことを思いながら鈴音にハンドガンの銃口を向けた。向けて、そして目を見開いた。

「——いらない?」

掴まれた盾と鈴音、その二つ共が彼女の視界から消えていた。一瞬の出来事で、意識を外した覚えもない。そんな状態で視界から消え去ることが出来るなど、ありえない。そんな感情が、彼女の判断を一瞬だけ遅らせた。

左側で激突音。意識をそこに向けると、先程の盾を持ったまま鈴音

が二つ目の盾に突進しているところであった。最初と同じように、その二つ目の盾も彼女は掴み上げ自身の手の中へと引き入れている。

何のつもりだ。そう考える間もなく、鈴音は再び彼女の視界から消えた。

「まさか、そういうこと!?!」

ここでようやく本音は鈴音の意図に気付いた。考え付きはしても、決して行わないような馬鹿げた作戦。それを彼女は実行しようとしたのだ。

すなわち、一つを掴むだけでは駄目ならば、全てを掴めばいい。

「馬鹿なの!?! あく、そうだ、りんりん馬鹿だった!」

「誰が馬鹿だ! 一夏よりマシよ!」

さりげなくこの場にはいない男子生徒を貶しつつ、鈴音は三つ目の『葛の葉』を掴みにかかった。攻撃に半自動的に反応する大盾の特性を逆に利用し、高速斬撃の機動で本音に迫ることで誘発させる。しっかりと考えて行ったわけではなかったが、思った以上の成果を出せていることに彼女は笑みを浮かべた。自分を拘束している『葛の葉』は四つ、それを全て奪ってしまえば、少なくとも反撃の糸口程度ならば見付かるはずだ。そう思いながら三つ目を掴み、そして『瞬時加速』と『龍咆』で複雑な高速機動を行いつつ四つ目の大盾に手を伸ばす。

「これで!」

「これで? どうなるの?」

鈴音の両手に持っていた盾が消える。そして再び本音の周囲にそれらが展開された。奪われたところで収納と展開を行えば何ら問題ない。一瞬焦ったがそう判断した本音は冷静にその操作を実行した。一度収納し、もう一度『葛の葉』を起動させる。

そう、自分の周囲に展開させたのだ。鈴音を拘束するのではなく、通常の防衛形態として起動させたのだ。

それを鈴音は確認せずに飛び出した。あるいは、最初からそうなるの見越していたのかもしれない。ともあれ、本音が述べた言葉に振り向くことなく彼女はこう返した。

「あたしが自由になったわよ!」

エネルギーの効率など完全に無視して高速機動を行う鈴音を横目で見つづ、セシリアは一人ほくそ笑んだ。束の間ではあるが、自身のパートナーは拘束から抜け出した。このチャンスを生かさなない手はない。

そんな思考を持っているだろうと予想した簪は、まさか同じ手で抜け出そうと思っているのと彼女を挑発する。確かに『ブルー・テイアーズ』は機動性の高さが売りの一つであるが、鈴音のそれとは違いあくまで機体性能でしかない。無茶な機動やストップ&ゴーを繰り返すようには出来ていないのだ。

無論セシリアもそんなことは分かっていると鼻を鳴らす。再びバスタードソードを取り出し構えながら、こちらはこちらで対処をするだけですわと口角を上げた。

「線では阻まれる。鈴さんは、点で突き破った。ならば」

シールドに組み込まれていたBT兵器を展開、周囲に停滞させるとその銃口を全て別々の方向へと向けた。当然その全てを防がんと『葛の葉』が反応し彼女への圧力を強めていく。

だが、それが望んでいたことだと言わんばかりに、彼女はそのまま射撃を行った。

「……何でそんな、無駄なことを」

「無駄かどうかは、これからですわー！」

全方位に射撃を続ける。当然それには膨大な集中力が必要であり、それ以外の行動を全てシャットアウトしてしまうと言っても過言ではない。事実、セシリアはその場から動かず、そしてその目は前を向いているものの目の前にいる簪を映してはいない。

それでも彼女は言葉を紡いだ。強がりとも取れる一言をのたまった。無駄ではない、と吠えたのだ。

「本音ー」

これが普通の相手であったのならば決まっていただろう。だが、相手は更識簪、日本の代表候補生であり、学園最強と謳われる姉を持つ

少女。即座とはいえずとも、しかし反応出来る程度には気付くことが出来た。

彼女のパートナーの名前を叫び、そして自分の周囲に回っている『葛の葉』の防御を向こうに返した。計六枚になった盾は、自由になった鈴音の攻撃を防御するのに回されていたものと合わさり余裕が出来る。

そこに、狙い澄ましたかのようにビームの射撃が突き刺さった。そんなことを行えるのは一人しかない。他のどの行動を取っていても、射撃だけは確実に無意識に使用出来る、などと言えるのは一人しかない。

忘れていた。本音も簪も、そのことは充分に知っていたはずなのに、この戦いの最中で失念していた。BT兵器やシールドビット、バスタードソード、そんな小手先のものや機体の機動力ではない彼女の真骨頂を。

「クイツクドロウ」……」

「正解ですわ！」

咄嗟に簪は体を捻った。数瞬前まで自身の眉間があった場所に飛来するビームを見て冷や汗を流す。本当の狙いは本音ではなく、自分。そう確信をしていなければ気付く前に風穴があいていたであろう。

この試合の中で、彼女は『クイツクドロウ』での射撃を今まで一度も見せていなかった。途中で射撃武装を見せた時もあくまでただの早撃ちでしかなかったのだ。一度、相手の意表を突く形でそれを行った為に、それを『クイツクドロウ』での射撃だと錯覚させたのだ。

だから、BT兵器で自身の『葛の葉』の引き付け、そして鈴音が本音の『葛の葉』を引き付けている内に『クイツクドロウ』で本音を撃ち抜く。それを見越して簪が本音のフォローに入るのならば、盾の無くなった簪を撃ち抜く。

なんとも個人個人の勝手な行動が組み合わさった、二人で一人なコンビネーションであった。

「……っ！」

無論セシリアもそこで防がれたからと攻撃をやめるような少女ではない。隙あらばその針の穴程の部分に正確に射撃を叩き込む。鈴音は再び拘束に移行させる隙なぞ与えんとばかりに本音をその場に縫い付ける。拘束と防御を行なっているはずの二人が、逆にジリジリと押されていく。

それでも、簪は焦ることなく機を窺っていた。集中しろ、と自分に言い聞かせていた。セシリアも鈴音も、無茶をしているだけだ。限界はそう遠くない内に現れる。それまで耐えれば何の問題もない。

「……けど」

それは、つまらない。相手の自滅を誘うなんて、そんな戦い方はつまらない。自分の力で相手に敗北を認めさせてこそ、勝利だ。

どのみち、あの二人のことだ。遠くない限界は遥か彼方だろうか。そう独りごち薄く笑みを浮かべると、簪はスラスターを吹かした。前に、セシリアへ向かって。

「その状態じゃ……射撃以外は出来ない、でしょ」

「それが、どうしたっていうんですか！」

『クイックドロウ』で簪を狙うが、着弾地点を予測されているのか紙一重で躲される。あるいは、彼女の集中力が少しづつ落ちていつているのかもしれない。ともあれ、セシリアは相手の接近を許してしまい、目前には『夢現』を振り被るその姿が映る。

貰った、という簪の言葉と、かかった、というセシリアの言葉が発せられたのが同時であった。

射撃を続けていたビットは、いつの間にか彼女の腰部へと移動していた。青いスカートのように連結されたそれは、『ブルー・ティアーズ』本来のスラスターとの相乗効果を生み出す推進力として働く。元々高起動の機体であるそれに、さらなる機動力を加えたそれは、『瞬時加速』もかくやというスピードでその場から離脱する。

結果として、簪の目にはセシリアが消えたように見えた。即座に高速移動だと看破したものの、その時には既に自身のすぐ後ろへと回りこまれており。

「この距離ならば、『葛の葉』も反応出来ませんわね！」

振り向く間もなく、バスタードソードを叩き付けられた。

「かんちゃんー！」

「人の心配してる場合じゃないでしょうが！」

本音の叫びを打ち消すように鈴音は吠える。『瞬時加速』と『龍咆』のコンビネーションで立体機動を描き彼女へと襲い掛かる。その攻撃はことごとく『葛の葉』に弾かれているが、しかし。

本音は動けない。何か行動を起こす間がないのだ。鈴音の嵐のような高速機動攻撃により、完全に足止めを余儀なくされていた。セシリアの拘束用の四枚はまだ向こうにあるが、距離をあそこまで詰められては殆ど役に立たない。

「せつしーが私の相手するって、言ってたのに！」

「んなもん馬鹿正直に守るわけじゃないでしょうが！」

というかそれは自己流『疾風迅雷』を破られた時点で変更されている。口には出さずにそう続けつつ、鈴音は尚も攻撃を続ける。自分のエネルギーが尽きるか、相手のエネルギーが尽きるか。いうなればこれは、我慢比べだ。

それに、と彼女は続ける。向こうが簪を倒せば、二体一だから、と。

「……無理だよ。かんちゃんは負けない」

「セシリアは強いわよ」

「知ってるよ。でも、負けない」

迷いなくそう言い切った本音は、『葛の葉』の展開の形を変えた。三枚ずつが重なるように彼女の左右に設置され、しかし防御力は健在で鈴音の斬撃を弾き返す。

その姿を見た鈴音も一旦攻撃を止め、少しだけ距離を取るように後ろに下がった。何のつもりだ、と口には出さずとも表情が物語っている。

「さく、どいてもらおうよりりん。私は早くかんちゃん助けに行かないから」

「……言ってくれるじゃない」

先に動いたのは本音。分厚くなったその盾を全面に押し出し真っ直ぐに突っ込んでくる。その姿は鈴音にも見覚えのある光景であった。一回戦で行った突進、恐らくそれのより攻撃に特化したものだろう。そう判断した彼女は、望むところだと迎撃態勢に入る。武器を構え、相手の挙動を見逃すまいと目とハイパーセンサーを同時に向ける。

「へ？」

それが誤りだと気付いたのは、本音に腕を掴まれた時だ。捻り上げられた左腕はミシミシと音を立てて曲がらない方向に曲げられる。この、と残った方の腕で繰り出した斬撃は三枚重ねの『葛の葉』によって弾かれた。

サブミッション。人体を破壊する関節技。ISも人の纏う装備な以上、人体の可動範囲を超えることはまずありえない。

すなわち。

「あがつ！ ちよ！ あああああ！」

「ふっふっふ。ポキッと、いこうか？」

ペロリと舌なめずりをする本音を見て、鈴音の背筋が思わず凍った。そして、彼女の真骨頂が何かを思い知った。

こいつ、壊し屋だ。防御用の兵装は、それを悟らせないためのカモフラージュと接近を用意に行う為の二重構造。その結論に至ったものの、ならばどうすればと言われれば何もアイデアなど出ないわけだ。

「関節技って『絶対防御』発動しないから、簡単に折れるよ？」

「平然と怖いこと言うな！」

「本気だよ。私はかんちゃんのためなら、骨の一本や二本平気で折れる」

平然とそう述べた本音に薄ら寒いものを感じつつ、しかし諦めずに鈴音は反撃のチャンスを探った。兎にも角にも、まずは左手を自由にしなければ何も出来ない。だが、完全に極められているこの状態では、自ら抜け出すには文字通り骨が折れる。

左腕を犠牲にして抜け出して、それからどうするか。片腕で再び足

止めが出来るかといえれば答えは否であるし、ましてや倒すことなど不可能に近い。これが他の、セシリア程の実力があればまた違ったかもしれないが、鈴音は所詮素人に毛が生えた程度の経験しか持っていない。少なくとも彼女自身はそう思っているのだ。

だから、彼女の出来ることは唯一つ。何らかの逆転出来るアイデアを思い付くこと。

「そんな簡単に思い付いたら苦労なんか——」

思わずぼやきを口に出したその時である。一つだけ、試してもいいかもしれないと思うことが頭に浮かんだ。上手く行けば五体満足で抜け出せるというアイデアがひらめいた。

「……？ 観念したの？」

「まさか。あたしは諦め悪い女なのよ！」

あくまで上手く行けば、である。失敗すれば極められている左腕は確実に壊される。それでも鈴音は、その方法に賭けた。

気合を込める。そして、折れても構わんとばかりに体を捻った。

「自分から折る気？ 私はその程度じゃ緩めないよ」

「あ、そう。そりゃ良かったわ」

言葉と共にISを解除した。極められていた左腕の装甲が綺麗サツパリと消え去り、生身の腕が露となる。同時にスラスタから何から何まで全て無くなった鈴音の小柄な体は重力に引かれて落下を始めた。当然本音の拘束など簡単にすり抜けてしまう。彼女が掴んでいたのはあくまで『甲龍』なのだから。

頭から落下していく最中、鈴音は視線を足元に向けた。青い空と、目を見開く本音の姿。それを見た彼女はニヤリと笑い、再び『甲龍』を展開させる。赤と黒に彩られたその機体のスラスタを吹かすと、姿勢を反転させ一気に間合いを詰めた。起動時のコンソールがエネルギーの限界を示していたが、関係ない。この一撃が決まればいい。

『双天牙月』を取り出そうとして、エラーが表示された。どうやら解除と展開を無理矢理行った所為で、ただでさえ負担を掛けていた機体に不具合が起きてしまったらしい。幸い『龍咆』は使用可能、元々機体に設置してあった実弾兵器も撃つことだけは出来るようであった。

足と肩のミサイルをばら撒きながら、鈴音はスラスターにエネルギーを込める。『瞬時加速』でそのミサイルを追い越すと、本音の眼前でくるりと反転した。飛び越すように彼女の背後を取ると、そのまましっかりと羽交い絞めにする。

何を、そう言おうとした本音は、再び鈴音がスラスターを吹かそうとしていることで言葉を止めた。

「自爆する気!?!」

「違うわよ。これは、勝つ為の一手」

本音を捕まえたまま『瞬時加速』。真つ直ぐに向かった先は先程自分では撒いたミサイルの雨。

こんなものは『葛の葉』で防げば。そう思った本音の思考は、装置がエラーを吐いていることで真つ白になった。何故、どうして。そんな疑問が数多を埋め尽くす中、背後で彼女と盾を纏めて捕まえている鈴音が勝ち誇ったように笑う。

「二つにしてくれて助かったわ。おかげで、簡単に掴めた」

「む、茶苦茶だよ……」

「そりゃそうよ。なんたってあたしは——」

織斑一夏と篠ノ之箒の昔馴染だからね。

ミサイルの雨と地面への激突。その両方を同時に食らった二名は揃ってシールドエネルギーが底を尽き、揃って大の字で寝転ぶことと相成った。

セシリアのバスタードソードは簪の『山嵐』の増設ポッドを切り裂いただけで終わってしまった。だが、それでも一撃を与えたことには違いない。このまま続けて二撃三撃と続ければいいのだ。そう前向きに考えつつ彼女は再び大剣を構える。

一方簪はあくまで表情を浮かべずにセシリアを眺めた。驚いた、と口では言っているが、ポーカーフェイスに隠されて真意は分からない。

「そんな小細工、するような人じゃ……なかつたよ、ね」

「小細工とは心外ですわね。新たな戦闘スタイルと言ってもらいましょう」

『ブルー・ティアーズ』のビットは先程から腰部に接続されており、増設されたスラスターによる爆発的加速力を生み出している。そこから繰り出される斬撃は、さながら彼女のパートナーのようであった。

「……織斑君の真似でしょ？」

「はて、何のことやら」

言いながら再び間合いを詰める。『葛の葉』の拘束は使用者である本音の余裕が無くなってきているのか先程から緩んでいる。高速機動で振り切れる程度の、少々邪魔なものでしかなくなっていた。

しかしそれでも相手の力を削ぐことには成功しているわけで。簪はセシリアの攻撃を受け止めながら間合いを取るために腰にマウントした『春雷』を放った。

『ブルー・ティアーズ』！

腰のビットが分離、再びシールドに接続され強固な盾となる。ダメージを受けた様子もなく再び剣を構えるセシリアを見ながら、簪は心のなかで毒づいた。

何が「両方の装備を詰め込んだ」だ。明らかに三つ目の武装があるじゃないか。口には出さず、しかし表情は隠せなかったようで、ポーカーフェイスが崩れたのを確認したセシリアが口角を上げる。それが癪に障り、彼女の眉間に深く皺が浮かんだ。

「嘘は言ってませんわよ。『ブルー・ティアーズ』のノーマル状態をベースに、送ってもらった二つのパッケージ『両方』を詰め込んだのですから」

「屁理屈」

「何とでも言ってください」

言いながら再びビットをシールドからブースターへと変更させる。そう何度も同じ手は食わない、と武装を構えた簪だったが、しかし。

閃光が走る。繰り出されたのは射撃。拘束を振り切り、簪の側面を

取った彼女が行ったのは、『スターライトmkⅢ』によるビームであった。知らず知らずのうちにペースを崩されていた簪はその射撃に被弾してしまい、致命的な隙を生んでしまう。

「もらったー！」

「……なく、そお！」

唐竹割りに振り下ろされたバスタードソードに、『夢現』を半ば無理矢理合わせた。二つの武装が火花を散らし、甲高い音を立てる。それにより体勢を立て直した簪は『夢現』を手から離し、断ち切られるそこに向かって『春雷』を連射した。

カウンター気味にそれを食らったセシリアは後方へと吹き飛ばす。咄嗟に大剣の腹でガードをしたらしく彼女自身のダメージはそれほどではないものの、しかし盾にしたそれは酷い有様であった。歪んでしまったバスタードソードを仕舞うと、彼女は無手で相手を睨む。

「これでお互い格闘武装は無くなった、ということですかね」

「……さあ、どうだろう」

そんな軽口を叩き合ったタイミングで、セシリアの周りにあつた『葛の葉』が消失した。それはすなわち本音が戦闘不能になったということを示している。あくまで視線を逸らさずにハイパーセンサーで場所を探ると、本音と鈴音が揃って大の字でアリーナの地面に倒れているのが確認出来た。

「どうやら引き分けたらしい、ということを確認した二人は、お互い目の前の相手に意識を集中させた。パートナーが共に戦闘不能であるということとは、すなわち。」

「自身の勝利が、そのままチームの勝利ですわね」

「そうだね。……私の勝利が、本音の勝利」

「ええ。わたくしの勝利が、鈴さんの勝利ですわ」

簪は『春雷』を、セシリアは『スターライトmkⅢ』をそれぞれ構え、放つ。同時に簪は真上にスラスターを吹かし離脱。セシリアはビットを腰部に接続し高速機動へと変更させた。

「高速機動と射撃……その状態の真骨頂。『ストライク・ガンナー』のブースターを嘗めてもらっては困りますわ！」

あつという間に追い付いたセシリアは簪に銃口を向ける。額と胸、それぞれの急所へ向けて引き金を引いた彼女は、しかしどこか余裕を持って避けられたことに怪訝な顔を浮かべた。

そつちこそ、嘗めてもらつては困る。そんなことを言いながら、破損している『山嵐』のポッドからバズーカを取り出した。

「……そんな、本来の戦い方ではないものに意表を突かれるほど……私は甘く、ない！」

バズーカタイプとなった『山嵐』から発射される弾は『マルチロツクオンシステム』こそ完全に発動していかないものの、ある程度の誘導性を持った小型ミサイルに分かれることは変わらず可能である。続けざまに連射されたそれはあつという間にミサイルの嵐へと変わり、一斉にセシリアへと飛来した。

着弾、そして爆発。試合の中盤の焼き増しのようなそれは、その爆煙の中から簪へと向かってくるフィン状の物体によりガラリとその容貌を変えた。四つの銃口、晴れない爆煙の向こうからこれ进行操作して彼女を狙い撃っているのは、紛れもなく。

「セシリアあー！」

簪は叫ぶ。自身の武装を全て開放し、無事な『山嵐』と手に持っているバズーカタイプの『山嵐』、そして腰にマウントした『春雷』。多数の砲門を爆煙の先にいる相手に向ける。

「簪さんー！」

セシリアも叫ぶ。爆煙から飛び出し、ビットを操作し、右手は無手、左手には『スターライトmkⅢ』を構え、その全てを目の前の相手へと向ける。

放つ。ミサイルを、バズーカを、荷電粒子砲を。

放つ。ビットを、ビームを、『クイックドロウ』を。

お互いのその攻撃に、防御や回避の二文字はない。ただただ、全力で、自分の攻撃を。自分の体に馴染んでいたことを繰り返す、ただそれだけ。

『打鉄式』のミサイルは『ブルー・ティアーズ』の装甲を弾き飛ばし、バズーカは頭部に着弾、荷電粒子砲はその胸部を焼き払った。

『ブルー・ティアーズ』のビットは『打鉄式』の四肢を貫き、ビームは心の臓を穿ち、そして『クイツクドロウ』により眉間を撃ち抜かれた。

どの攻撃も、双方に致命傷。当然、『絶対防御』が発動しないはずもなし。

「あ……」

「しまっ」

勢いで熱くなってしまった頭が冷静になった時にはもう遅い。コンソールが示しているエネルギーはゼロを乗り越してマイナス。敗北判定値など優に振り切ってしまった。

勢いを失って落ちていく二人は、しかしそれでもどこかやりきったような、晴れ晴れとした顔をしていた。受け身も取らず、なすがままに地面に落ちる。

そんな二人を大の字になったまま眺めていたパートナーも、しょうがないな、と苦笑を浮かべる。自分達もそうだったし、などと二人揃って呟いた。

こうしてアリーナの地面で大の字に転がり、満足そうに笑う四人の少女が出来上がるのであった。

Aブロック決勝戦。更識簪&布仏本音ペア対セシリア・オルコット&凰鈴音ペア。両者KOにより、引き分け。

№025 「し過ぎるくらいが丁度いい」

ラウラ、と隣にいる女性は少女の名前を呼んだ。何だ織斑千冬、と金の両目を持つ少女はぶつきらぼうに返した。

千冬の持っていた本の角が彼女の後頭部に激突した。視界に星が飛び、その痛みに思わずうずくまる。その光景を作り出した張本人は、織斑先生と呼べと言っているだろうがと気にした風もなくのたまう。無論ラウラは答ええない、答えられない。

まあそんなことはいい、と肩を竦めると、千冬は先程彼女の後頭部に叩き付けた本をほれ、と差し出した。片手で頭を押さえつつもう片方の手でそれを受け取ったラウラは、何の気なしにその表紙に目を向ける。

『三歳児から学ぶ楽しい道徳』。そう書かれていた。

「何のつもりだ織斑千冬」

「だから織斑先生だと言っているだろう。そして見ればわかるだろう。お前に足りないものを補う立派な教本だ」

「誰が三歳児だ誰が！」

「お前だお前。戦闘以外ほとんど幼稚園児だろうに」

「……一般常識くらいは知っている」

若干目を逸らしながらそう述べたラウラを、千冬は何か面白いものを見るような目で眺めた。知ってるかラウラ、普通の一般常識では出会う頭に顎に拳を叩き込むことはないんだぞ。そう続けると、うるさい、とラウラは顔を真っ赤にして叫んだ。

「まあ、あのハゲは私も気に入らなかったから、そこは褒めてやろう」

「……私が言うのも何だが、そっちも大概じゃないのか？」

「愚問だな。いいかラウラ、私とお前には大きな違いがある」

知っていて破るのと、知らないで破ってしまう。それが違いだ。そう言いながら千冬は止まっていた足を再び動かした。ラウラもそれに続き歩みを進める。

そのまま暫し無言で歩いて二人だが、千冬がなあラウラ、と顔を向けることなく声を掛けたことで沈黙を破った。

「さっきの違いはな、後者の方がずっと後悔する確率が高い。だから――」
だからお前は、ちゃんと知っているべきだ。そう言っただけで彼女は笑った。頑張れよ、とラウラの頭に手を乗せた。

ここでラウラ・ボーデヴィツヒは、これが夢だと確信した。否、正確に言うのならば、最初から現実ではありえないと感じていた。

何せ、こんな記憶は体験したことなどないのだから。こんな風に千冬と会話したことなど無いのだから。

彼女にとつて織斑千冬は『教官』であり、目標である。軽口を言い合ったり、ましてや呼び捨てにすることなど考えられない。

では、これは一体何だ。そう考えても答えは一向に出てこない。ひよつとして自分はこんな接し方をしたかったのだろうか。そんなことが頭をもたげ、そして消えていく。

彼女の思考を他所に、夢はどんどんと続いていく。千冬と『ラウラ』の軽口を叩きながら過ごしていく日々が流れていく。

ふと、唐突に場面が切り替わった。見慣れたそこは、自身が現在通っているIS学園の一年一組の教室だ。誰もいないその場所に、自分が一人だけ立っていた。

「覗き見とは趣味が悪いな、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

背後から声。振り返ると、自身と同じ顔をした少女が一人、真っ直ぐにこちらを見詰めている。違うのは、その少女には片目に眼帯をはめていないことと。

その双眸が、金色をしていること。

「……お前は、誰だ？」

「誰だ、だと？ お前がそれを聞くのか？ 他でもない、ラウラ・ボーデヴィツヒが」

何のことだ、とラウラは訝しげな視線を向けた。対する『ラウラ』はそんな彼女を嘲るように笑い、所詮上書きされたプログラムではそんなものかと呟いている。

「上書き？ プログラム？」

「ああ、流石にそれは言い過ぎたか？ ならばあのハゲ共の言葉を借

りて……妹、完成形……まあ、何でもいい。どうせ私にとってはただの偽物だ」

言いながら、一步ラウラに近付く。その手を伸ばし、彼女の胸ぐらを掴み上げる。その顔は特に感情が浮かんでおらず、極々当たり前にそうしていると言わんばかりであった。

「私は、ラウラだ。本物のラウラだ」

何を言っているんだ、と胸ぐらを掴まれたままの体勢でラウラは返した。その問いに答えることなく、『ラウラ』はその手に力を込める。いつの間にか、それは生身ではなくISを纏った腕に変わっていた。

無造作に掴んでいたラウラを放り投げる。周囲の机を巻き込んで吹き飛んだ彼女を見ながら、『ラウラ』はふんと鼻を鳴らす。そして、そのまま立ち上がらないラウラに背を向けた。

「所詮お前は『知らない』人間だ。精々そのまま過ごして、その時になつて後悔すればいいさ」

そう言つて去つていこうとする彼女を、ラウラは思わず呼び止めていた。振り向くことなく何だと問う彼女に向かつて、立ち上がったラウラは頼みがあると続けた。

「教えてくれ。私が何を知らないのか、そして、お前は何を知っているのか」

「それではい分かりましたと私が言うんでも?」

「思わん。だから、取引をしよう」

私が何か出来ることがあるのならば、可能な限り叶えてやる。そんなラウラの言葉を聞いた『ラウラ』は、首だけを後ろに向けるとニヤリと笑つた。

いいだろう、その約束忘れるな。そう彼女が返すと同時。ラウラの意識はゆつくりと白く染まっていった。遠くからベルの音が聞こえる。どうやらルームメイドの目覚ましが鳴っているらしく、つまりは起床時間になつてしまったということらしい。

「残念、時間切れだ」

「待て! 待つてくれ『ラウラ』!」

必死で手を伸ばそうとするが、既に目が覚めかけているのか、体は

全く動かない。ただただ、手をヒラヒラとさせながら再び踵を返した『ラウラ』を見ていることしか出来ない。

しょうがないな、と振り向かずに目の前の少女が肩を竦めた。一つだけ教えてやろう、とやはり振り向かずに彼女は続けた。

「——クロニクル。ラウラ・クロニクルの名を織斑千冬に出してみろ」
覚えていられたらの話だが。そう続けた彼女の言葉は、ラウラの耳にはもう届いていなかった。

どうした、という隣に立つ自身のパートナーの言葉に、何でもないとラウラは返した。今朝の夢の内容を今頃になって思い出した。そんなことを彼女に言ったところで何のことだかさっぱり分からないであろう。だから、ラウラは何も言わなかった。

ただ、その中で気になる単語があった彼女は、少し聞きたいことがあると隣の少女——篠ノ之箒に尋ねた。

「クロニクル、というファミリーネームに聞き覚えは？」

「……いや、無いな」

「そうか」

それがどうしたのか、という箒の問い掛けに少しなどだけ返し、ラウラは自身のピットへと歩みを進めた。今はそんなことに構っていない場合ではない。これから学年別タッグトーナメントの決勝戦なのだ。余計なことを考えていては、勝てる試合も勝てなくなる。そんなことを思いつつ、彼女は傍らに立つ『シユヴァルツエア・レーゲン』を眺めた。

そういえば、あの『ラウラ』が纏っていたのは血のように赤いISだった。そんなことをふと思いついて、いかんいかんと首を振って散らした。どうも集中しきれてないな、と自嘲気味に笑った。

そんなラウラを横目で見ながら、箒も自身の剣であるIS『紅椿』のチェックを行う。これから戦う相手は一夏とシャルル。片方は勝手知ったる相手とはいえ手を抜いて勝てるような男ではなく、シャルル

にいたっては未知数だ。これは否応がなく期待に胸が踊るというものの、そんなことを考えながら思わず笑みを浮かべた。

しかし、と彼女はもう一度機体のチェックをしているパートナーに視線を向ける。先程の質問は一体何だったのだろうか。首を傾げるが、その答えは出てこない。クロニクルという姓にも特に聞き覚えはなく、記憶を辿っても引き出しを開いてもそんなものは出てこない。「いや、待てよ」

そう思っていた矢先、タンスの中でクシャクシャになっていたメモ用紙を見付けたような程度の記憶を一つ、引っ張り出せた。あれは確か、自身の姉が千冬と共にドイツへと行っていた時の思い出を話半分に聞いていた時だ。

『くーちゃん』、だったか……？』

それが果たしてクロニクルから来ているのか、そんなことは分からない。聞き流していた話題の一つであるし、その呼び方の由来を束が語ることなかったからだ。ただ、ドイツでの知り合いであることだけは確かのはずだ。そんなことを考えつつ、しかしそれをラウラに言っただけのものかと頭を悩ませる。

「試合の後でも構わんだろう」

余計な話をして集中を乱すわけにもいくまい。そう結論付けた箒は、今頭に浮かべたそれを再び沈めた。後で姉に聞いてからでもいいだろう、そう付け加えて機体のチェックを再開させた。

システムに不備はなし。万全の状態で試合に望める。それを確認すると、満足そうに箒は笑みを浮かべた。後は試合開始を待つばかりで、隣のラウラもある程度吹っ切れたのか概ね彼女と同じ表情を浮かべていた。

一際大きい歓声上がる。モニターに視線を移すと、Aブロックの決勝戦がクライマックスを迎えるところであった。本音と鈴音が引き分け、そして簪とセシリアも防御を考えない攻撃をお互いに加える。派手な爆発と共に双方が倒れ伏し、そのまま試合終了のブザーが鳴り響いていた。

「引き分けか」

いつの間にか隣にいたラウラがそう呟く。そのようだな、と返した箒は、これで実質私達の試合が最終戦だと続けた。

「成程。それは、分かりやすくもいい」

「その通りだ」

お互いに笑い合う。そして、お互いに自身の機体へと歩みを進めた。

アナウンスによると、アリーナの整備が終わり次第Bブロックの決勝を始めるらしく、選手は定位置で待機するようにとのことらしい。出来ればすぐにでも始めたいが、その辺りは仕方あるまいと箒は息を吐く。そして、頭の中でおおよそ考えられる一夏の最初の言葉にどう返すかを模索し始めた。

「っと、時間か」

どうやら思った以上に没頭していたらしい。何を呆けているというラウラの言葉に済まないと返した箒は、カタパルトに足を乗せると表情を引き締めた。さあ、待ちに待った試合だ。真剣な顔の中に隠し切れない笑みを混ぜながら、彼女はそう呟いた。

無論、隣のパートナーもその心は同じ。この間の決着をつけてやると真っ直ぐにここからでは見えない向こう側を見詰めていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。『シュヴァルツェア・レーゲン』、出撃する！」

「篠ノ之箒、『紅椿』。推して参る！」

気合と共に、赤と黒が空を舞う。

「ここで会ったが百年目！ 叩きのめすぜ、二人纏めてな！」

指差しをしながらそう宣言する一夏を眺めたラウラと箒は、特に何の反応をすることなく視線を傍らのシャルルに移した。その目は、本当にいいのか、という確認を含めているようにも見える。

暫し逡巡したシャルルは、苦笑を浮かべながら首を縦に振った。お手柔らかに、という一言を付け加えるのも忘れない。

刹那、『シュヴァルツェア・レーゲン』のレールカノンが閃光を放つ

た。自身に向かつて飛んできたそれを最小限の動きで一夏は躲すと、その隙を狙い『瞬時加速』で間合いを詰める。詰めようとする。

その頃には既に眼前に箒が立っていた。両手に持った刀は既に斬撃の動作に入っており、確実に一夏の首を刈り取れることを予見させた。

「こなくそおー！」

叫びながら強引に体を捻り、必殺の斬撃を二撃とも躲す。更に左手の盾を箒の顔面に叩き付けるように押し出し、視界を奪うと同時に右手のビームガンの引き金を引いた。

放たれたビームは目標には当たらずとも、仕切り直しを行うことには成功したようで。間合いを少し離しつつ肩で息をする一夏は、いきなりやってくれるなどぼやいた。

「何を言う。二人纏めて来いと言ったのはお前だろう」

「そういう意味じゃねえよ！　っていうかシャルル、助けるよー！」

「パートナーの意志を尊重するのが正しいあり方かな、ってね」

「まさかの全員敵!？」

一人やかましく騒ぐ一夏を見て、ラウラも、箒も、シャルルも笑う。そうしてひとしきり笑った三人は、じゃあ気を取り直して、と表情を戻した。

ラウラは一気に一夏へと間合いを詰める。それに合わせるように一夏も『白式・雷轟』のビームブレードを構える。お互いの突き出された腕が交差するように相手へと叩きこまれ、しかし苦い顔を浮かべたのは一夏一人であった。

『停止結界』。『シュヴァルツエア・レーゲン』に仕込まれた第三世代兵装。それにより、一夏は動きを完全に止められてしまった。前回の模擬戦でラウラはこれに頼ることを良しとしないようにしていたが、奇襲で使うのならば問題ないと判断したのだろう。事実、目の前の相手は面白いように引っ掛かってくれた。

「私の予想通りに動いてくれて嬉しいぞ、織斑一夏」

「はっはっは、俺は嬉しくねえ」

「そうか。まあそれは仕方ないと諦めることにしよう。では——さよ

ならだ」

『シユヴァアルツエア・レーゲン』のレールカノンにエネルギーが充填されていく。この距離でそれを食らってしまえば、耐久値こそ決勝で通常の値に戻っているとはいえ一溜まりもない。だが、体は全く動かせない。

ただし、それはこれが対一であった場合の話である。一夏の背後から飛び出したシャルルが、その銃口をラウラへと向けていた。『停止結界』を解除、ないしはレールカノンの射角をずらす。どちらが確実か瞬時に判断し、彼は後者を選択した。右肩に装備されている巨大な砲身に向かってその引き金を引く。狙いは正確で、外れることなど無い。

ただし、それはこれが二対一であった場合の話である。

「私を忘れてもらっては困る」

放たれた射撃を切り裂きながら、箒はシャルルの射線上へと割り込んだ。振り切った体勢のまま体を捻り、シャルルの腹部に蹴りを放つ。ダメージを与えるというよりも相手を吹き飛ばすことを優先したそれは、彼女の目論見通り一夏のアシストを困難な位置まで追いやっていた。

そんな彼に向かい、箒は疾駆する。『停止結界』に阻まれている一夏は今のところ脅威足り得ない。ならば、現在未知数であるシャルルを狙うのが得策。そう判断しての行動である。

「……!?!」

だが、それはシャルルが焦る様子もなく迎撃態勢を取っていたことで動きを止めた。あくまで視線を逸らさず、ハイパーセンサーで背後の二人の様子を探る。

いつの間にか『真雪』に換装している一夏の姿がそこにあった。体勢こそ変わっていないものの、それが逆にゼロ距離で大口径ビームランチャーの銃口を向けることに繋がっている。

この状態でレールカノンを放てばどうなるか。あの見境のないバカのことだ、撃てなくとも砲身にビームをチャージすることで誘爆させるだろうということは想像に難くない。そう判断した箒はスラス

ターを吹かしラウラの方へと戻ろうとする。

だが、勿論そんなことを目の前の相手が許すはずもなく。

「ちっ。嵌められたのは私の方か」

「そういうこと。悪いけど、ちよつと付き合ってもらおうよ」

「申し出はありがたいが、お前は私の好みとは少しばかり合わないの
でな」

「うん、知ってる」

箒の『紅椿』の二刀と、シャルルの『ラファール・リヴァイヴ・カ
スタムⅡ』の近接ブレードがぶつかり合う。流石に格闘戦では箒の方
に分があり、二・三度打ち合うだけですぐに優劣が決定してしまった。
顔を苦いものに変えながらも、シャルルは斬撃を受け流しつつゆっく
りと後退していく。

じりじりと押されていく彼を見ながら、箒は表情を怪訝なものに変
えた。おかしい、確か射撃と格闘を組み合わせた万能な戦い方を得意
としていたのではなかったのか。そうは思いつつも、手を止めること
はない。よしんば罠だったとしても、それを踏まえて打ち碎けばいい
だけだ。そう結論付けた彼女は刀を振り被る。

「うん、その迷いが欲しかった」

瞬時に持っていたブレードを射撃武装に換えたシャルルは、箒のそ
の両手に向かって弾をばら撒いた。ほんの少しとはいえ、それにより
体勢を崩された箒は、しかし構わず刀を振り下ろす。その一撃を躲
し、シャルルは箒と体勢を入れ替えた。彼女の後ろに、隠れるように。
そのまま先程箒が行ったように背中を蹴り飛ばす。押し出された
形になった彼女は、その視界にあるものを捉えた。

「誘導されたか……い！」

恐らく仕切り直しにより自由の身になったらしい一夏。彼の持つ
ている大口径ビームランチャーが彼女に向けられ、今正に火を吹かん
としていた。その顔は悪戯が成功した時のような、意地の悪い笑みを
浮べている。

「搦め手つてのも、時には有効だぜ」

言いながら彼はそれを発射した。巨大なビームが箒へと迫り、そし

て着弾する。

その前に、彼女の姿は霞のように消えていた。ビームは空を切り、明後日の方向へと飛んでいってしまう。

「へ？」

何が起きたか、と首を傾げる一夏は、シャルルの左、という叫びに我に返った。慌てて『真雪』を『雷轟』に換装、ビームブレードでその一撃を受け止める。視界から消えた箒が、受け止められた刀に力を加えながらそこにいた。

「そうか、『玉兎』か」

「いいや、外れだ」

お前が先程言っただろう、と口角を上げた箒は一夏を起点にしてバックステップ。体勢を崩すのと間合いを離すのを同時に行った彼女は、そんな彼に向かって斬撃を飛ばした。

嘗めるな、とシールドでそれを受け止めた一夏は、崩れた体勢のまま強引に『瞬時加速』を行う。ビームガンで弾幕を形成し、そしてビームブレードで彼女を真一文字に切り裂こうと振り下ろした。

そして今度は箒が消えるからくりを見た。何かに引っ張られるように彼の視界から消えた彼女は、自身のパートナーの肩に着地するとそれを足場に一気に間合いを詰める。それと同時に、箒の足に巻き付いていたワイヤーが取り外され、再びラウラの『シユヴァルツエア・レーゲン』へと収納されていた。

「何じゃありやあ!？」

「だから、お前が先程言っただろう。搦め手だ」

一夏の側頭部に蹴りを叩きこむと同時に、箒はラウラへと合図を送る。任せろとエネルギーを充填していたレールカノンを放つと、同時にワイヤーブレードを射出し箒を回収した。

決まったか、というラウラの問い掛けに、まあ無理だろうなどと箒は返す。あの程度で終わるくらいなら、そもそもこの学園に入学すら出来ていないさ。そう続けると、視線を爆煙からシャルルへと移した。

「ラウラ。悪いが暫く一夏の相手を頼めるか」

「構わんが、どうした？」

「何にせよ、まずは厄介な不確定要素の排除だ」

「……そこまで警戒する相手なのか？」

「用心というのは、し過ぎるくらいが丁度いい」

そんなものか、というラウラの言葉にそんなものさと箒は返すと、スラストアーを吹かしシャルルへと疾駆していった。

状況はこちらに大分不利。そう判断したシャルルは、こちらに向かってくる箒を見ながら眉を顰めた。一夏はあの程度ではやられないだろうから問題ないとすると、今度は狙われている自分を心配しなくてはいけない。先程少しぶつかり合っただけで分かったことであるが、射撃と格闘を高い水準で備えているという程度では、彼女の前では脅威足り得ない。自分の持ち味を無理矢理力でねじ伏せられる感覚、それを今彼は身を持って味わっていた。

「はてさて、どうしたものかな」

自分が『シャルル・デュノア』である限り、篠ノ之箒には敵わない。それを確信したからこそその眩きであった。

射撃武装を構え、シャルルは弾幕を形成する。とりあえず相手の接近を遅らせるのが目的のそれは、しかし箒の二刀の放つ斬撃によりあっさりとは吹き飛ばされた。苦い顔を浮かべつつ、それでも射撃の手は止めない。ほんの少しでも効果があるのならば、ほんの少しでも自分の次の一手に繋がられるのなら。そんなことを思いつつ引き金に力を込める。

「甘い」

間合いに入られた。左手に装備している盾で防ぐのを少しでも遅らせる為に彼の右側に回り込んだ箒は、そのまま二刀を横に交差させた。咄嗟に右手に取り出した近接ブレードで防ぐが、甲高い音と共に右手ごと弾き飛ばされ、自身のボディがガラ空きとなる。貫った、とそこへ突きを繰り出す箒にしてやったりといった笑みを浮かべたシャルルは、左手に隠し持っていたショットガンの銃口を彼女の眉間

に突き付けた。

銃声。だが、それと同時に放たれたそれは目標に当たることなく空を切る。同時に、シャルルを貫くはずであった刃も空を切った。あの刹那で箒は『瞬時加速』を発動、無理矢理軌道を曲げると位置を入れ替えたのだ。現在の彼女の位置は、シャルルの背後。位置こそ箒が有利だが、体勢が明らかに崩れている為に先に動けるシャルルの方が有利とも言えた。

弾き飛ばされたそれとは違うダガータイプの近接ブレードを取り出したシャルルは、体を捻り逆手に持ったそれを背後にいる箒へと叩き付ける。ハイパーセンサーにより目視しなくともどのような体勢になっているかは分かっている。このままこめかみに突き刺せば『絶対防御』発動は免れない。一撃で勝負は決まらずとも、大幅に耐久値を減らせばこちらに天秤が傾いてくれるはずだ。そんなことを思いつつ、しかし至極冷静に彼はその行動を実行した。

対する箒は持っている二刀を振ることはとても出来ない状態である。一旦距離を離すなり一呼吸置くなりなんなりしなければ、目の前の相手に反撃することはままならない。精々が苦し紛れに蹴りを放つことくらいであろうか。

そう相手が思っているのならば、それは箒の思う壺であった。体勢が崩れたのは確かであるし、今の状況をわざと起こしたのではないのも確かである。だが、それでも、彼女には次の一手があった。この大会中一度も見せていない、パートナーにすら教えただけで見せていない一手が。

一夏がシャルルに告げた、見れば分かる、と言った一手が。

ゾクリと背中に悪寒が走った。既に行動を起こしているシャルルはその動きを止められない。自分が『シャルル・デュノア』である限りどうしようもない。そんな予感が彼を襲った。

箒はただ足を振り上げていただけだ。武器で攻撃しているわけでもなく、崩れた体勢で唯一出せる行動を取っているだけにしか見えな。だが、その足の振り上げがどうしようもない必殺の一撃に見えて。

「……………くっ！」

「何？」

トーンこそ違えど、お互いに発した声の質は一緒であった。すなわち驚愕、戸惑い。シャルルはその筈の繰り出したそれに、筈はそれが直撃しなかったことに。お互いにお互いを予想外のものを見る目で見詰めていた。

「まさか、躲されるとはな。大した観察眼だ」

「あ、ははは。そんな大したものじゃないよ。……ただの勘さ、誰かみたいだね」

「成程、それなら仕方ない」

言いながら、筈は体勢を整え『足から生み出していたビーム刃』を消し去った。空中で細切れになったダガーの欠片が舞う中、シャルルもまた体勢を立て直す為にスラスターを吹かし距離を取る。

「それが、篠ノ之さんの特殊兵装なんだ」

「多くは語らんが、間違っではないと言っておこう。これが私の『玉兎』だ」

とつきのことなのではつきりと見たわけではないが、シャルルはその瞬間に確かに見た。足の装甲が展開し、そこがまるで近接ブレードの如く変化したのを。そして今は再び装甲は変化し通常に戻っている。

成程、これがか。そんなことを彼は頭の中で呟いた。一夏が言っていたあの言葉を繰り返した。

絶対にあいつから注意を逸らさないこと。

「言われてなかったら真つ二つだったな……」

だが、これだからくりは分かった。恐らくであるが、彼女の機体の装甲が全てああなっているのだろう。つまり、体制が崩れていようが体全てが武器に成り得る。一夏が説明し辛いと言った理由も何となくそれで察した。

射撃武装を構える。今までもそうであったが、これからは尚更近付けるわけにはいかない。そう結論付けたシャルルは引き金を引く。先程のように接近を防ぐ弾幕ではなく、相手を縫い付ける射撃の嵐を

放つ。

箒はそれを斬撃で防ぎつつも回避を優先しているようであった。向こうの思惑に乗っているようなその動きに、シャルルの表情が曇る。向こうの遠距離武装は明らかに乏しい、ならばこれが最善の策であるはずなのに、何故こうも嫌な予感がするのだろうか。

そんな彼の思考を見透かすように、箒が知りたいか、と彼に問い掛けた。

「生憎、敵の言葉に耳を傾ける余裕はないからね」

「そうか、それは失敬した」

では行動で示すでしょう。そう言いながら『紅椿』の装甲が再び展開を始めた。隠す必要もなくなったことだし、思う存分使わせてもらうぞ。何処か楽しそうにそう述べた箒は、そのまま無造作に弾丸の嵐に突っ込んだ。

「撃ち抜け！ 『玉兎』！」

展開した装甲が光を放ち、そしてそこから無数のビームが照射された。彼女の動きとは全く別の意思を持っているかのようにビーム弾幕を形成するそれは、シャルルの手数を上回り。

そうか、装甲が武装を展開するということは、格闘武装だけでなく射撃武装にもなるということか。そう彼が理解した時には、既に箒が眼前で二刀を振りかぶっているところであった。装甲は再び元に戻っている。恐らく何らかの制限があるか、この距離で使う必要性を感じないから任意で解除したかのどちらかであろう。死神の鎌が目前で迫っているこの状況で、シャルルは至極冷静にそんなことを考えていた。

さて、どうしたものか。そんなことは考えるまでもない。彼は彼女ではなく、あくまで『シャルル・デュノア』であり『デゼール』ではない。だから、ここでやられてしまっても何の問題もない。実際、一回戦の時も同じ思考を浮かべていた。必要以上に目立つことなどない。勝つ必要もないし、頑張る必要もない。

そんな考えは、やはり一回戦の時に自ら否定してしまっていた。知らず知らずのうちに熱くなっている自分を抑えきれなくなっていた。

勝ちたい、と本気で思うようになっていた。

「むっ!？」

閃光が箒の眼前で生まれる。視界もハイパーセンサーも白一色に染め上げるそれは、当然のことながら箒の一撃を当ててべき目標を見失わせてしまう。勘を頼りに刃を振り下ろしたが、虚しくそれは空を切った。

「はああああー!」

後頭部に衝撃が走る。シャルルが体を捻って繰り出した蹴りが叩き込まれたのだ。グラリと前のめりになった箒に向かい、彼は両の手に持ったアサルトカノンを連射した。生まれる爆発、そして、爆煙。その中から飛び出した箒は、苦い顔をしてシャルルを睨んだ。

「まあ、流石にこれで終わらないよね」

「無論だ。お楽しみはこれからさ」

シャルルの軽口に表情を笑みに戻すと、箒は二刀をしっかりと握り直した。

N o 2 6 「待て」

「シャルル！」

「余所見をしている余裕があるのか？」

箒とシャルルの戦闘に思わず意識が向いてしまった一夏は、ラウラのその言葉と共にプラズマ手刀を叩き込まれた。シールドエネルギーが減少し、コンソールに警告メッセージが現れる。それを一瞥した一夏は邪魔だと吐き捨てそのメッセージを非表示にさせた。

ミスった。そんなことを思いながら彼は持っているビームブレードを構える。目の前の相手は他のことを気にしながら戦って勝てる相手ではない。目標とする人物、自分の辿り着く強さならば出来るのかもしれないが、生憎と今の自分は未熟者。それが分かっているからこそ、一夏は己の失態を恥じ、そして反省した。

悪かったなラウラ。そう言いながらスラストターを吹かす。別に気にしてはいないぞ、そんな返しをしながら彼女はプラズマ手刀を構えた。

「ぶった切る！」

「やれるものなら、やってみろ！」

ビームブレードとプラズマ手刀がぶつかり合う。甲高い音と火花を散らしながら数度打ち合うと、二人は距離を取り違う武装を構えた。一夏はビームガン、ラウラはワイヤーブレードをそれぞれ相手に向かって放つ。直線と曲線の軌道を描いたお互いのその攻撃は、回避を行ったことによりそのどちらとも空を切った。

ならば、とラウラはレールカノンを構える。通常の出力で放っては相手を捉え切れないと判断した彼女は威力より連射性を重視した攻撃で一夏に向かい弾幕を形成する。予想外のその射撃を見た彼は表情を変え、しかし瞬時に『真雪』に換装すると前面シールドでそれを受け止めた。

お返しだ、とばかりにビームカノンを放つが、威力重視のその射撃がこの距離で彼女に当たるはずもなく。最小限の動きでそれを躲すと、ラウラは再び接近戦に持ち込まんとスラストターを吹かした。

「だったら、こいつだ！」

『真雪』を『飛泉』に換装。取り出した大刀でラウラを迎え撃つ。先程の一撃よりも重いそれは勢いを付けて攻撃してきたはずのラウラを押し返すほどで。ち、と舌打ちすると近距離でワイヤーブレードを展開、動きを制限させる為に周囲に張り巡らせた。

そんなことは知らんとはかりに一夏は太刀を振り上げる。当然ワイヤーにぶつかり動きが止まるが、そこを狙ったラウラに向かって腰のアンカーを射出した。引っ掛かったな、そう言いながら彼は口角を上げる。

「引っ掛かった？ 何の話だ？」

アンカーが空中で何かに掴まれたように静止する。広げられた右手に縫い止められるように動かないアンカーを見た一夏は、しまったと叫んだ。ラウラは動きの止まったそれを掴み、引き寄せるように引っ張る。ワイヤーとの二段構えで身動きの取れなくなった一夏は為す術もなく彼女の眼前に引き寄せられ。

「織斑一夏、もう少し真面目にやれ」

思い切り顔面を殴り付けられた。

「あーもう！ 何やってんのよあいつ！」

着替えの終わった前試合の四人は、ボロボロの自分達の姿を特にどうにかすることなくそのまま観客席まで移動してきていた。そして思い切りぶん殴られる一夏を見た鈴音は手を振り上げながらそんなことを叫ぶ。他の三人も声には出さないものの、概ね同じような感想を持っているようであった。

「っていうか、あの時一回戦ってるんだからもう少しやりようあんでしょ、ったく」

情けない、と言わんばかりの表情でそう続けた鈴音に向かい、まあまあとセシリアは返す。あの時と今回は多少勝手が違うのだから、と彼女に述べた。

「むしろ今回の方が選択肢は狭まっていると言えますわ」

「え？ 何で？」

「考えても見て下さい。前回の戦いで使った攻撃は相手の知るところ、極端に言えば対策の取られている動きです。となると、当然そうではない行動をしなければいけない」

「あー、成程ね」

納得したように頷いた鈴音だが、ん、と何かを考えるように首を傾げた。いや、でもちよつと待った。そう言いながらセシリアの方へと顔を向ける。

「あいつの機体ほど選択肢の多いのはそうそう無いわよ。何で苦戦するのよ」

「……それはもう、一夏さんだからとしか」

「……あ、うん。ごめん、あたしが悪かったわ」

ボロクソ言われてるなあ、と隣で聞いていた本音は思ったが、決して口に出さない。何だかんだで彼女も同じ意見だったからだ。さて、どうなるのかなあと呑気に試合を見詰めている。

そんな彼女に声が掛かる。どうしたのかんちゃん、と本音はそちらに顔を向けたが、その声を主である簪は試合の方に視線を向けっぱなしであった。

「……篠ノ之さんの『玉兎』。あれで全部、なのかな？」

「装甲が斬撃と射撃になるので終わりかってこと？ ん、どうなんだろう」

あの様子だとまだ何かありそうだけど、と続ける本音に、やっぱりそうだよねと簪が返す。果たしてそれを使うか否か、どうやら彼女はそれが気になっているようであった。

そんな簪を見て、本音は笑みを浮かべる。どうしたの、とその視線に気付いた彼女は首を傾げたが、別に何でもないと隣の幼馴染ははぐらかした。

「……言いたいことがあるなら、言えばいい、のに」

「別にそんなに大したことじゃないからね。見たたのおりむーの方じゃないんだ、って」

「え？ そりゃ、だって、織斑君の機体はもう知ってる、し」

「……かんちゃんの手は遠いな」

「……何の話？」

まあ試合すぐだしこんなもんか。そう自分に言い聞かせ、本音は簪が見ていた方に視線を向ける。簪とシャルルのぶつかり合いは、大分天秤が簪側に傾いているようであった。シャルルも食い下がっているが、通常の格闘性能の高さに加え『玉兔』の変則的な攻撃が加わり自分の得意な戦法に持っていかけていない。

このままではやられてしまうのは時間の問題か。そんな風に思えてしまうほどであった。

「シャルルさんは大分不利のようですね」

「簪相手じゃ分が悪いなあ」

いつの間にか鈴音とセシリアも見ると相手を一夏からシャルルに変えたらしい。そんな呟きが聞こえてきた。バランスタイプの欠点とも言えるでしょうか、というセシリアの言葉に、「欠点？」と鈴音が聞き返す。

ええ、と彼女は頷くと、視線は試合から逸らさずに言葉が続けた。

「どんな状況でも対応出来る、というのは確かに強みですが、しかしそれは逆に言えばどの状況でも不利にならないところまで止まってしまうということですよ」

「そのどこが悪いの？ 不利になんないんですよ？」

「不利にならないというのは、有利になるというわけではないのですわ」

今のように相手が一点突破で来た場合、その他の部分では勝っていても肝心のその部分が圧倒的に負けてしまう。総合で見れば確かに不利ではないが、結局勝てる可能性はといえば。

「それって不利っていうんじゃないの？」

「あくまでデータ上の話ですわ。そして見ての通り、実際の状態がそんなもので計れるはずありません」

「ふーん」

消耗し始めたシャルルには使うまでもないと思ったのか、簪は『玉

兎』を絡めた攻撃を控え、通常の戦法に切り替えている。それならば対応出来るかと反撃に移ろうとするものの、シャルルの機体は思うように動かず戦況を覆すには至っていない。明らかに顔を顰めた彼の表情が、現在の心境を物語っていた。

射撃武装で多少距離を離れたところで有効打は与えられない。近接戦闘では歯が立たない。となれば、やれることは唯一つ。一か八かの一発逆転、それ以外には無い。

『盾殺し』、か」

「可能性としてはそれくらいでしょう。ただ」

そんなことなど向こうは先刻承知であるはずだ。そう続けたセリアにやっぱりそうよねと鈴音は返し、どうやって当てるんだろうとシャルルを見る。ヒットアンドアウェイを繰り返しの絞らせないようにしているようだが、あくまで箒が『玉兎』を発動させていないからどうにかなっている。そんな風に見えた。

いや、とセリアは思う。むしろそう見せるのが目的なのか、そんなことを考えながら、隣の鈴音ではなく簪に向かって声を掛けた。

「……どうしたの？ セリア」

「あのシャルルさんの動き、何を狙っていると思われませんか？」

「んー……私には、敢えて隙を晒してる、ように見える、かな」

「やはりそうですわよねえ」

「やるの、かな？」

「恐らくは」

うんうんとお互いに何か通じあっているのを横目で見ながら、本音は面白くなさそうに頬を膨らませた。それに気付いたのか、彼女の隣に移動した鈴音が何拗ねてるのよ、と笑う。

「別に、何でもないし」

「ふーん。……そういえば、更識さんいつの間にかセリアのこと名前呼び捨てにしているわよね」

「私はもつと前から呼び捨てだし」

「うんうん、そうよねえ。急に何だか別の相手と仲良くなっちゃってるけど自分が一番仲いいし、ってやつよねえ」

「……ふん！」

「あ、ごめんごめん。そんな怒らないですよ」

「ふん！」

「ごめんってばー！」

さて、どうするか。シャルルはそんなことを考えつつ、ハイパーセンサーで一夏の距離を測った。このまま一人で戦っているのはこちらが負ける。そうならない為には、何とかして二対一の状況に持っていくしか無い。そう判断したものの、向こう側では一夏がラウラ相手に苦戦しているのを見て表情を苦いものに変えた。

いや、と彼はその思考を切り替える。今この状況で苦戦しているということは、相手は分散させて各個撃破を得意戦法としていることに他ならない。ならば、数で押す戦法が尚更有利に働くはずだ。

そう考えた彼の行動は素早かった。射撃をばら撒きながら今まで以上に大きくアリーナを使い距離を取る。その機動に訝しげな表情を浮かべた箒であったが、しかし罨なら乗ってやろうと笑みを浮かべ距離を詰めんとスラストターを吹かした。

対するシャルルは相手が近付くとその分離れ、ボルトで固定したように相手との距離を一定に保つことに終始している。戦う気すら感じられないようなそれに、何を企んでいるのかと箒は首を傾げた。一発逆転の手段を狙っているのかと疑ったが、そうでもない、あれではまるで。

「そういうことかー！」

視線をシャルルから一夏に動かした。いつの間にか箒はアリーナの端に追いやられており、ラウラ達が戦っている位置とはまるで反対にまで離されている。しかもパートナーであるラウラもまた端に移動させられており、一夏とシャルルが挟撃体勢を取っていた。救援に行こうとしても、遠い上にどちらかに気付かれ阻まれる。完全に分断された形になっていたそれに、彼女は思わず歯噛みした。

「ナイス一夏！」

「そつちこそ！ 箒を引き離してくれて助かった」

拳をコツンとぶつけ合い、それを合図にしたようにラウラに向かって左右から迫る。嘗めるな、とワイヤーブレードを射出し相手の行動範囲を狭めたが、その合間を縫うように距離を詰める二人に思わず目を見開いた。

「そつちこそ嘗めんなよ！ 何回も食らえば流石に分かるっつもの！」

左から近付いた一夏のビームブレードがラウラの機体の装甲を薙ぐ。シールドエネルギーが減少するのがコンソールに表示され火花が散ったが、彼女は気にせず二撃目を放とうとしている一夏を『停止結界』で縫い止めた。そのまま射出していたワイヤーブレードを引き戻すようにして背後から切り刻むと、視線を素早く右に向ける。

「ちい！」

「遅い！」

狙いはレールカノン。そこにブレードを突き刺すと、残った方の手に持っていたアサルトライフルを弾が切れるまでトリガーを引き続けた。一発一発の威力は低くとも、近距離でひたすら連射されればそのダメージは馬鹿にならない。衝撃に顔を歪めたラウラはプラズマ手刀でシャルルを追い払うと距離を取るためにスラストターを吹かす。が、既に場所はアリーナの端。これ以上離せる距離はない。

ならば、とエラーを吐いているレールカノンをパージ。それを追撃を行おうとしていた一夏にぶつけると、そこにワイヤーブレードを叩き込んだ。爆散するレールカノンに紛れ一気に距離を詰めると、一夏の頭を鷲掴みにしてそこからプラズマ手刀を発生させようとする。

その背後から射撃を受け、ラウラは掴んでいた手を離れた。しつこい、とワイヤーブレードで背後の相手を引き離そうとするが、生憎とその相手、シャルルは元々接近などしていない。スナイパーライフルを構え、遠距離から彼女の背中を狙い撃ったのだ。

「悪いなラウラ。初っ端ならあしらえたかもしれないが、ある程度ダメージ食らってからだと割とキツイだろ。相手の消耗に付け込むってのが悪役臭いが、まあ、しょうがない」

これで終わりだ。そう言いながら『飛泉』に換装した一夏が大刀を振りかぶった。両手のプラズマ手刀で受け止めることは成功したものの、ラウラの背後には彼女の頭部を狙っている狙撃手が。

ギリリ、と奥歯を食いしばる音が聞こえた。これで負けるわけにはいかない、そう思うものの、着実に敗北の足音は聞こえてくる。優勢に進んでいたはずが、どうしてこうなったのか。それを思い返す時間もなく、彼女の頭部に銃弾が叩き込まれる。

『玉兎』、開放！

その直前、瞬時にシャルルの目の前に現れた箒がスナイパーライフルを切り裂いていた。『紅椿』の全身装甲が展開し、そこから機体色とはまた違う紅い粒子が溢れている。

いきなり出現した箒に驚いたものの、シャルルは瞬時に気を取り直しダガーを目の前に突き出した。が、目の前の姿は瞬時に掻き消える。

咄嗟に頭を下げた。一瞬前まで首のあった場所に二閃の斬撃が放たれる。後ろ、とそこに射撃を放つが、やはりその姿は即座に消え去る。ハイパーセンサーを全開にしても捉え切れないその動きは、明らかに既存の機体の速度を超えていた。

爆発音。視線をそこに向けると、一夏が箒の斬撃で体勢を崩され、ラウラの一撃を食らって吹き飛ぶところであった。スラスターを吹かす、だけでは間に合わない。そう判断したシャルルは『瞬時加速』で一気に距離を詰める。左手を振りかぶり、当たればそのまま一撃必殺をお見舞いしてやると突き出したそれは、未だ粒子を放っている『紅椿』に触れることなく空を切った。

三度目のそれを見たおかげで、彼にはようやくからくりが見えた。射撃、格闘、そしてもう一つ。

『玉兎』は、機動にも使えるってことか
「明察、だ」

装甲を元に戻した箒が言葉と共に二刀を振り下ろす。体を回転させるように捻りそれを躲すと、横にいたラウラを踏み台に更に反転、吹き飛んだ一夏へと目標を定めるとそちらにスラスターを吹かした。

大丈夫？ と訊ねるシャルルに大分マズイと軽く答えると、一夏はそつちこそ『玉兎』にやられたんじゃないのかと苦笑した。

「目を逸らすなも何も、見えないんだけど」

「ああ、そうだろうな。千冬姉ですらあれは見えないんだから」

「……それはまた」

「ま、でも欠点はしつかりあるぜ」

あれであいつの『玉兎』は打ち止めだ。そう言っで一夏は笑った。こつちもボロボロだけど、向こうも切り札無くなってるからそうそう不利じゃない。そう続けると、『雷轟』に換装し直した彼はビームブレードとシールドを構える。

「打ち止め？」

『玉兎』はべらぼうにエネルギーを食うのさ。特にあの機動形態なんぞ使つちまえばあつという間にスツカラカんだ」

「じゃあ、この試合中はもう」

「そういうことだ」

てわけで、シャルル。そう続けながら一夏は視線を箒に向ける。あれ、頼むぜ。そう言うとは彼はラウラに向かつて一気に空を駆けていった。

結局相手は僕がするのか。そんなことをぼやきつつ、シャルルは左腕を撫でる。まだこいつの残弾は残っている以上、切り札的な意味ではこちらが有利かもしれないな。そう結論付け、無理矢理に笑顔を作ると一夏と同じように箒へと突っ込んだ。

「ケリを着けるぜラウラあ！」

「ふん、そんなボロボロで何ができる」

「テメエだつてボロボロじゃねえか！」

ビームブレードとプラズマ手刀がぶつかり合う。鏢迫り合いを行うことなく、お互いに一撃ごとに距離を離し、そして再び刃を振るう。分かっているのだ、双方共に限界だということ。そして、射撃武装が今役に立たないことを。

決め手の一撃を欠いたまま、お互いにアリーナを飛び回る。縦横無尽に戦闘領域を広げるということは、逆に言えばパートナーをそこに巻き込むということだ。

「箒！」

「シャルル！」

お互いにパートナーの名を叫ぶ。箒は任せろと、シャルルは人使いが荒いと、そんな言葉を紡ぎながらお互いの相手へと武装を構えた。

このパートナーのアシストのタイミングは同時であり、そしてそのどちらもが正確に相手へと攻撃を放っていたが、唯一つ違う部分があった。シャルルは射撃、箒は斬撃。攻撃属性こそ違うが、共に遠距離攻撃。ならば何が違うかといえば。

「今更んなもんに当たるかよ！」

「……だろうな」

箒の攻撃など常日頃嫌というほど見ている為に一夏は慣れ切ってしまったということだ。彼女もそのことは重々承知であったが、このタイミングで彼の虚を突く一撃を咄嗟に放つには少々余裕が足りなかった。

ならばと追撃の為に箒は一夏へと迫る。流石に格闘戦に持ち込めば軽くさばけるなどということはあるまい。そう判断しての行動であったが、しかし。

「それは——読んでる！」

自身の目の前にシャルルが躍り出た。邪魔だ、どけ、と二刀を構えるが、彼は回避をすることなくその場で構える。左手を前に出し、そこに全神経を集中させる。

既に一夏はシャルルの背後にいない。彼が立ち塞がった隙に一気にラウラへと肉薄したのだ。ビームガンを放ちながら距離を詰め、そして右手のビームブレードを腰だめに構える。ラウラは左手にプラズマ手刀を出しつつ、右手で何かを掴むような仕草を取った。

「切り裂く！」

「撃ち抜く！」

「ぶった切る！」

「叩き潰すー！」

箒の二刀が。

シャルルの『盾殺し』が。

一夏のビームブレードが。

ラウラの『停止結界』が。

それぞれ、お互いの相手の攻撃とぶつかり合う。そのどれもが必殺の威力を秘めており、誰が勝っても、誰が倒されてもおかしくはない。ダメージも相応であるし、気迫も誰一人として劣っていない。

そんな四人のぶつかり合いは、同時に生まれた強烈な激突音で思わず観客が目をつぶってしまうほどのものであった。

そして、彼等彼女等が目を開けたその時、この戦いの決着は付いていた。

「紙一重、だ」

「は、ははは。あー、もう。くやしいなあ……」

箒の二刀の内一振り、それがシャルルの首を刈っていた。もう一振りは『盾殺し』によりへし折られており、『紅椿』の装甲も左半分がロボロになっている。ゆっくりと落下していくシャルルを見ながら、箒はそこできちんと呼吸をするのを思い出したように大きく息を吐いた。

そしてもう一方。ラウラと一夏は。

「最後の最後に、そんなんに頼っちゃまったお前の負けだ」

「……貴様の突拍子の無さが少しだけ上回っただけだ」

右手の『停止結界』で縫い止められているのは一枚のシールド。そして、彼が持っていたはずのビームブレード。

背中からゼロ距離で射撃を食らったラウラが、悔しそうに、しかしどこか満足そうにそうぼやいた。

居合の構えを取ったそのブレードを、あろうことか一夏は直前で投げたのだ。そして素早くシールドを取り出すとそれでラウラの顔をぶん殴る。『停止結界』を構えていた彼女が捕まえたのは結局その二つの武装のみで、視界を一瞬遮られた隙に背後へと回られたのである。

「別に考えてやったんじゃないけどな。勘だよ勘」

「つくづく規格外だな、貴様は」

「褒め言葉として受け取っておくぜ」

そう言って笑う一夏を見ながら、ラウラもゆつくりと下に落ちる。ああ、どうやらこれで私は負けのようだ。そんなことを思いながら、重力に身を任せ。

唐突に、あの夢を思い出した。

「さて箒。お互いボロボロだけど、やつとくか？」

「何を言う。お前はボロボロかもしれないが、私は余裕だ」

「左側！ 『盾殺し』食らって半壊してんじゃねえか！」

「目の錯覚だ」

頭上で行われている箒と一夏のやり取りがどこか遠くで聞こえているような感覚に陥る。確実に目の前で起きているのに、まるでテレビでも見ているような。

そう、自分の体が、自分以外に動かされているような。自分が自分でないような。

自分が本物ではなく、偽物であるような。そんな感覚が。

「待て」

自分の口から、自分が発したわけではない言葉が出る。どこか他人事のようにラウラはそう思いながら、ああ、そういえば左目の眼帯が外れているじゃないかななどと呑気なことを考えた。

「そんな状態で戦うのはいささか大変だろうが、まあ仕方ないと割り切ってもらおう」

丁度いい具合に役者が揃っているのだからな。そう言うと、地面に横たわっていたはずの『ラウラ』がゆつくりと立ち上がった。

金の両目を獰猛に歪め、その口を狂気に歪めながら。

『シユヴァルツェア・レーゲン』か。ふん、こんな機体など使えるか」纏っていたISを服でも脱ぐかのように弾き飛ばす。吹き飛んだ装甲に目もくれず、彼女はそこから現れた新たな装甲、血のように赤いそのISの感覚を確かめるように一瞥した。

赤い翼が背中から生まれる。剥き出しの骨と皮で出来ているよう

なそれは、瞬時に地面から二人の目の前に移動するほどの推力を持つており、それだけでも今の二人の機体の状態で戦えるような相手ではないことを伺わせた。

「なあ、箒」

「どうした一夏」

「逃げるって有りか？」

「無論、却下だ」

「だよなあ」

『雷轟』の武装を呼び出しながら、一夏は真っ直ぐに目の前の『ラウラ』を睨んだ。そして、戦いたいならやってやるけど、と述べる。

「誰だお前は？」

「見て分からののか？ 私はラウラだ」

「あー、そうかいそうかい。んじゃ俺なりに呼ばせてもらうぜ」

行くぜ闇ラウラ。そう言いながら真っ直ぐに一夏は突っ込む。その呼称に顔を歪めた『ラウラ』は、漫画の読み過ぎだ、と吐き捨て彼の突進を体を横にずらすことで躲した。

仕方がないな、とそのまま一夏の頭を掴むと箒の方に投げ飛ばす。空中で体勢を立て直して彼女の隣で静止した一夏は、何しやがると吠えた。

「織斑千冬の弟。お前が変な呼称で呼ぶからだろう」

「そういうテメエだっちゃん俺のこと呼んでねえじゃねえか！

俺は織斑一夏だ！」

「そうか。では改めて名乗ろう。私はラウラ」

ラウラ・クロニクルだ。そう言うと、彼女は右手に一振りの近接ブレードを構え、一夏と箒をそれぞれ見た。そこから放たれる威圧感には、先程までのラウラとは比べ物にならないほどで。

どこか、彼の姉を想起させた。

「行くぞ織斑千冬の弟と篠ノ之束の妹。織斑千冬に八つ当たりする為の生贄になつてもらおう」

「はっ！ やれるもんならやってみろ！ でもってちゃんと名前呼びやがれ！」

「……お前はもう少し緊張感を持って」

ヒートアップする一夏に不安を覚えつつ、箒は残っている刀を正眼に構えた。

学年別タッグトーナメント一年決勝戦、試合は終われども、戦いは終わらず。

№027 「当たり前前だよな」

アリーナの地面に横たわりながら、シャルルは一人肩を竦めた。これは中々大変だ、そんなことを眩きつつも、しかし何をするでもなくそこで寝転がり続ける。どうせ自分の出番はもう終わっているのだから。それが彼の出した結論であった。

「別に、関与しているわけではないしね」

『ラウラ』がああの状態になっているのはこちらで意図したことではない。確かに多少揺さぶりはしたが、それだけだ。トーナメント一回戦の『白式』のように直接的な細工は一切していない。あれはあくまで、彼女が彼女の意志で表に出てきた結果なのだ。

対峙している一夏と箒の機体は随分と消耗している。『シユヴァルツエア・レーゲン』とは違う血のように赤い機体とでは前提条件からして話にならないであろう。それでも尚戦意を失わずに武器を構えているのは意地か、はたまた。

「箒！」

「右だな！」

一夏の言葉に箒は素早く反応し、相手の攻撃を受け止める。反撃は叶わずとも、その一瞬の足止めによりダメージを最小限に抑えている。特に表情を変えることなく、『ラウラ』は箒の目の前から消え失せる。その機動に一瞬だけ目を見開いた彼女は、しかしすぐに我に返ると宙返りをするようにスラスターを吹かし、そして自身の視界外にいる幼馴染の名を呼んだ。

「一夏！」

「わあってるー！」

真正面から斬りかかってきた相手のブレードに自分のブレードを合わせた。甲高い音が響き、しかし次の瞬間そこにあっただはずの刃が消え失せる。押し返されていた力のベクトルが無くなったことでバランスを崩した一夏の脳天に刃が迫るが、そのままの体勢で真っ直ぐにスラスターを稼働させ、半ば無理矢理にその場から離脱した。

そこに、残っている一振りの刀を構えた箒が刺突を繰り返す。それ

を首をずらすことで躲した『ラウラ』は、振り下ろした刃を素早く切り返し振り上げた。

その刀身に一筋のビームが叩き込まれる。それにより軌跡を歪められた一閃は箒の体から外され空を切った。

「ナイス俺」

「出鱈目に撃ったのが当たっただけだろうに。もう少し精度の高いフオローをだな」

「ダメ出ししてる場合じゃねえだろ！」

「ドヤ顔している場合でもないぞ」

軽口を叩きながらも、視線は目の前の相手から外さない。不意打ちを行うような相手ではないのは分かっているが、それでも安易に視界から外してしまってもいいわけでもない。

『ラウラ』は一振りのブレードを持ったまま静かに佇んでいる。一夏と箒の会話が終わるのを待っているのか、向こうから攻めてくるのを待ち構えているのか。どちらにせよ、その佇まいには余裕があった。

「あの澄ました顔、腹立つな」

「仕方あるまい。単機であいつに勝つのは、今の私と一夏では至難の業だ」

「万全なら一人でもなんとかなる、つてか」

「無論だ。お前だって、そう思っているのだろう？」

「まあな。ついでに言うなら、この状態でも俺達二人ならば」

「どうとでもなる、だろう」

ニヤリと笑う箒に一夏は同じ笑みで返し、お互いに自身の得物を構えた。それを見た『ラウラ』も下げていたブレードを握り直し、真っ直ぐ突き付ける。話は終わったか？ そう二人に訊ねつつ、掛かって来いとばかりにブレードを持っていない左手を手招きするように動かした。

先に動いたのは一夏。『白式・雷轟』のスラスターを吹かし、相手へと一直線に突っ込む。突き付けていたブレードを居合に構え直しながら、『ラウラ』は彼を迎撃せんと睨み付けた。

一閃。居合から放たれた一撃は一夏のブレードを腕ごと切り落とす勢いで振り抜かれ、そしてそこに間髪入れず真一文字に切り裂かれた刃が煌めく。常人であれば、一閃で二つ切り裂かれたことを認識することなく絶命する、それほどの一撃。

唯一つ問題があるとすれば、そういう一撃であると分かっている相手であれば効果は半減してしまうということだろう。その使い手が世界最強のIS操縦者であるという追加効果により問題を普段は消し去っているものの、それでも完璧ではなく。

何より、食らっている相手が一番間近でそれを見ていた一夏であるということだ。目を瞑っても思い出せるほど記憶に残っているそれを、彼が躲せない理由はどこにもない。

「む」

「千冬姉の技で俺が殺れるわけねえだろうが！」

満身創痕の機体とは思えない動きでそれを避け切った一夏は、そのまま勢いを殺さずに構えたブレードを袈裟斬りに振るった。自身の持つているブレードでは防御が間に合わない判断した『ラウラ』は素早く旋回、その剣閃上から体を消すと、そのままの勢いで何も持っていない方の左手を彼の側頭部へと叩き込む。叩き込もうとする。

が、その背後から割り込んだ箒の追撃によりその左手をそのまま防御に回すことと相成った。ISの装甲と『紅椿』の刀がぶつかり合い火花を散らす。刃が装甲に食い込む前に腕を引くと、『ラウラ』は一夏を蹴り飛ばし間合いを取った。

左手を見る。傷跡の付いたその装甲を眺め、彼女は薄く笑った。成程、流石は織斑千冬の弟と篠ノ之東の妹だ。そんなことを言いつつ、無手であった左手に銃を呼び出した。

「元々この技は使用している本人ですらただの奇襲技だと抜かしていたからな。散々見ているお前達に効かないのも道理か」

「当たり前だろ。てか、さっきから気になってたんだけどな」

お前、千冬姉の知り合いなのか。そう訊ねた一夏に視線のみで返答をすると、『ラウラ』は箒へと目を向けた。その瞳は、お前ならば分かっているだろうと言わんばかりで。

ふう、と箒は溜息を一つ。そして、生憎だが私も知らんぞと述べた。
「そうか。まあ、それならそれで構わん」

「あの時の姉さんの土産話はだいぶ聞き流していたからな。だから私が言えるのはこれくらいだ」

お前がくーちゃんだな。そう言いながら口角を上げる箒を、『ラウラ』は少しだけ苦い表情で睨み返した。隣の一夏はその単語を聞いて吹き出している。どうやらツボに入ったらしく、暫くすると腹を抱えて笑い出した。

そんな戦闘の真っ只中で爆笑する野郎を揃って横目で見つっ、二人はお互いの得物を構えた。箒は刀を、『ラウラ』は銃を。

「そっちのブレードはもう使わんのか？」

「焦るな。まずは、こちらからだ」

言葉と同時に銃口から閃光が放たれる。箒に向かい真っ直ぐ飛ぶそれを彼女は最小限の動きで躲さんと体をずらしたが、しかしそことは別の箇所にはビームが突き刺さっていた。ただでさえシールドエネルギーが心許ないところに被弾、それは確実に敗北へと天秤が傾く事態だ。苦い顔を隠そうともせず、箒は相手の左手に向かい斬撃を飛ばす。だが、そんな牽制程度の射撃が当たるはずもなく、『ラウラ』は事も無げにそれらを躲すと再び射撃を撃ち放った。

今度こそ、と一射目を躲すが、やはり自身が認識していた部分と違う箇所から被弾を知らせるアラートが鳴り響く。舌打ちしながら距離を取り、相手の銃口に集中して身構えた。万全な状態ならともかく、この状況でからくりを解かずに攻めることは出来ない。そう思いつつも、どちらかといえば一夏と同じように感覚で動く箒ではその答えが見出だせない。

「終わりか？ 篠ノ之箒束の妹よ」

「……さて。どうかな」

引き金が引かれる。やはり、その射撃は箒に突き刺さる。致命傷を避けてはいるものの、このままでは墮ちるのは時間の問題。そんな考えが頭を過ぎり、彼女はそれを振って散らした。

そんな彼女に声が掛かる。先程まで空中で腹を抱えたまま大爆笑

していた幼馴染で同僚の男性操縦者が、笑いを収め真剣な表情で自身を見詰めていた。何だ一夏、と箒が返すと、何やってるんだよと呆れたような言葉が彼の口から紡がれる。

「だったらお前が避けてみる」

「いいのか？ 俺が避けれたらお前の負けだぞ」

「別に構わん。本当に避けられるのならばな」

「言ったな」

子供のように笑った一夏は、箒を守るように彼女の眼前に立つ。今度は俺が相手だ、そんなことを言いながら指を目の前の相手に突き付けた。

そんな彼の姿をみた『ラウラ』は少し呆れたように肩を竦める。完全にただの子供だななどと思いつつ、まあいいと左手の銃を一夏に向けた。

「さあ来いくーちゃん！」

「ふん……」

彼女がそんな安っぽい挑発に乗るはずもない。平静を欠くことなく引き金を引き、その閃光が一夏の頭部に飛来する。それだけならば何の変哲もない一撃、ただの射撃でしかない。

ニツ、と一夏は笑った。体を半回転させるようにそれを回避すると同時、自身の機体を『雷轟』から『真雪』へと換装させる。追加装甲で覆われたそこに、二発目の閃光が叩き込まれた。『真雪』の堅牢な装甲を貫くには能わず、一夏は勝ち誇ったように笑みを浮かべている。

「どうだ！ 回避してやったぜ」

「おい一夏」

「あん？」

「それは回避とは言わん。受け止めたただけだ」

「一緒だろ？」

「そんなわけあるか！」

それなら私でも出来る。そう言いながら詰め寄る箒に、一夏はまあまあと返す。とりあえず落ち着くように彼は彼女に述べると、視線を再び『ラウラ』へと向けた。

無論相手もそれで躲されたなどとは思っていない。それがどうしたと言わんばかりに佇んでいる。そのことを確認した一夏は、表情を少しだけ引き締めると『真雪』のビームランチャーを取り出し構えた。今度はこっちの番だ、そう言いながら銃口を彼女へと向ける。

「食らえー！」

「当たるか馬鹿者」

真正面から堂々と隙の多い大口径の射撃を放ったところで、安々と躲されるのが関の山である。当然『ラウラ』がそんなものに当たるとはならず、お返しだと言わんばかりに左手の銃からビームを放つ。

それを一夏は躲さず、敢えてその身で受け止めた。

「ふっふっふ」

「何だ、お前はマゾヒストか何かか織斑千冬の弟」

「何でだよ！ お前の射撃の秘密を暴いたっていう笑いだよこれは！」

「……ほう」

言ってみろ。そう述べた『ラウラ』に向かい、一夏は胸を張り勝ち誇ったように語り出す。その射撃には、秘密がある、と。清々しいくらい自慢気な表情を浮かべて、そう言い切った。

「さて、では次は私の番だな」

「俺の話まだ終わってないっての！ ちょっとは待てよ箒」

「射撃の秘密を暴いた、という前置きで語ったのが『その射撃には秘密がある』などという頭沸いたことを抜かす幼馴染の話など聞くだけ無駄だ」

「だから待ってれば、続き、そう続きあるから！」

「むしろこれで無い方が驚きだ」

やれやれ、と方を竦めて後ろに下がる箒から再び視線を『ラウラ』に移す。では改めて、と咳払いをした一夏は、ビシリと指を突き付けながら自身の見解を述べた。先程のように下らないことだったら張り倒そうと思っていた箒も、その話を聞いて思わず目を見開く。

それは、射撃部門ヴァルキリーの技術だ。その言葉を聞いた『ラウラ』は、少しだけ眉を動かした。

「知っていたのか？」

「だとしたら初っ端で言うつつの。気付いたんだよ、モンド・グロツソで見てた動きと同じだってな」

その言葉に、箒は確かにそうだと手を叩いた。あの射撃、一射二撃の攻撃は、第一回・二回大会共に射撃のヴァルキリーに選出されたI Sパイロットの技だ、と。

一夏に先を越されたのが若干不満だったのか少しだけ彼を睨むと、彼女はそれでどうということなのだと続きを促す。何故目の前の『ラウラ』がヴァルキリーの技術を扱えるのか。箒の疑問はそこなのだろう。

「……何か必死で身に付けたんじゃねえの？」

「一夏は一夏だな、うん」

「すつげえ生暖かい目で見られてる!? いやなんだよその姉が出来の悪い弟を見る目は！ そういうのは千冬姉だけで充分だっての！」

「そもそも千冬さんにそういう目で見られているのも問題だろう」

盛大な溜息を吐く箒に食って掛かる一夏だったが、それよりも、と彼女により押し返される。どこぞの芸人のように頭を押さええられてジタバタと手足をもがく姿は何とも情けないものであったが、そんなことは気にせんとばかりに彼女は目の前の相手を見詰める。

「タネは明かした。となれば、説明を求めても問題あるまい」

「……お前達は、織斑千冬と篠ノ之束の関係とは、まるで逆だな」

「ん？」

「いや、こつちの話だ。いいだろう。私のこの力は——」

『ヴァルキリー・トレース・システム』。それがあのラウラ・クロニクルの強さの秘密でしょう」

ざわめきの起こっているアリーナの観客席の中、平静を保っている面々の一人であるセシリアはそう皆に述べた。その言葉に聞き覚えのある箒は彼女の説明にいち早く反応したが、しかし。それはおかし

いのではないか、という反対意見であった。

「あれって、確か……あくまで初心者サポート、みたいなやつ、だよ」
「あー、そういや聞いたことある。千冬さんの動きっぽいのが出来るんだっけ」

「織斑先生だけじゃないけどね。確か他のヴァルキリーも出来たはずだよ」

あくまでそれらしい動きをすることで、まだ慣れていないパイロットのサポートを行う。所詮その程度のシステムであり、目の前で展開されているようなヴァルキリーの技を繰り出して相手を圧倒するような技術ではない。

それをセシリアも理解している。してはいるのだが、しかし。

「何かしら、恐らく同名ではあるものの規模が桁違いの何か。そんなものが存在しているのだとしたら」

「いや、どうしちゃったのよセシリア。何でそんな特撮ヒーローの司令官みたいなの」

「成程……。それはつまり、あの人に直接……。組み込まれている、ということ……?」

「ええ、恐らくそうでしょう」

「え? 何? 何でこの二人ノリノリなの!」

「あ、うん。かんちゃん特撮ヒーローとかそういうの好きなんだよね」
「じゃあ何か、これ全部妄想話なの!」

真面目に聞いたあたしがバカみたいじゃないか。そう叫ぶ鈴音であったが、アリーナから聞こえてくる言葉を聞いた途端動きが止まった。錆び付いた蝶番のようなぎこちない動きでセシリアと簪を見ると、その言葉を聞いて我が意を得たりと眩しいくらいに笑みを浮かべているのが見える。

隣を見ると、もう諦めた方がいいよと笑う本音の姿が見えた。

「んなこと言ったって、まさか、本当に」

ラウラ・クロニクルの秘密が『ヴァルキリー・トレース・システム』だったなんて。そう呟いて彼女は肩を落とした。

そしてそんな彼女と同じように、驚愕の表情を浮かべている人物が

ここにも一人。観察室で非常識人二人を相手にしていた半分常識人山田真耶女史その人である。どういうことですか、と千冬に食って掛かるが、言葉通りだと一言で切り返された。

とはいえ、それで止まるようなテンションでは無かったのだろう。未だ収まらない真耶を見て、千冬はやれやれと頭を振る。

「二年ほど前だったか。私はドイツであいつの退治を頼まれた。VTシステムを己と一体化させられ、戦闘マシーンに成り下がっているあいつをな。向こうはどうやら再起不能にして欲しかったようだが、冗談じゃないと私はあいつを真つ当な少女に育て上げようとしたんだ」
「ちーちゃんが真つ当な少女なんか育て上げられるはずないのにねえ」

ケラケラと笑う束に無言でアイアンクロウを繰り出すと、自身の胸の重みでゆらゆら揺れる兎に目もくれずに、千冬は続きを語り出す。
真耶はとりあえず見なかったことにした。

最初は世間の一般常識も失われていてな。そう言っただけ苦笑する千冬であったが、しかし裏腹にどこか楽しそうな口調であった。色々と教えて、大体中学一年生くらいの機微は出来るようになったと思っていた、とそこまで語ると、彼女は視線を地面に落とした。ついでに動かなくなっていた束も地面に落とした。

「人格の上書きを行われたのさ。IS技術で発達したものを応用したとかしなかったとか、まあ今となってはどうでもいい。ラウラ・クロニクルはある日ぶつりといなくなつて、そして私の目の前にはラウラ・ボーデヴィツヒが現れた」

私のことを慕っていたという記憶は残ったとか偉いハゲは言っていたが。どうでもいいことのようにそう続けた千冬は、どこか遠い目でモニターを眺めた。ラウラ・クロニクル、自身の一番初めの教え子。その彼女が、自分の弟と親友の妹に刃を向けている。他の誰でもない、自分が理由で。それが彼女にとって、どうしようもない感情を与えていた。

「ちーちゃんはさ、考え過ぎなんだよ」

そんな千冬に真耶が何も言えないでいると、いつの間にか復活した

束が微笑みながら彼女の肩を叩いていた。それに千冬は何も反応を示さなかったが、束は気にせず言葉紡ぐ。大丈夫だ、と。

「そりゃ、封印された時とか、再びくーちゃんの人格が浮上してきた時とか、そういう時はきつと荒れてただらうけどさ。あの娘だつてもういい年だよ、自分で自分を抑えることだって出来る。なんたって、ちーちゃんが一から教えたんだからね」

「束……」

さつき真つ当な少女に育て上げられるはずないとか言つてなかったつけ、という疑問を真耶は心の奥底に封印した。流石に彼女でも空気は読める。

そんな彼女の葛藤は露知らず、千冬と束は会話を続ける。安心していればいい、どのみちアリーナには被害が起きないよう改良してあるから。そう言つて束は子供のようにならう。

「それにさ、いっくんと箒ちゃんだよ。あの二人なら、きつと大丈夫」

「……あんなボロボロの二人を、信じてるのか」

「あつたりまえでしょ。逆に聞くけど、ちーちゃんは信じてないの？」
「信じているさ。当たり前だろう」

そう言つて、二人は笑みを浮かべた。吹っ切れた、とはいかないが、ある程度は割り切つたような千冬と、最初から心配などしていない束。その二人は、後は任せたとモニターの向こうの身内にエールを送る。

「で、勝てると思うか？」

「今のままだと無理かな。打開策何も無さそうだし」

まあ、その為に『白式』はアップグレードしておいたからね。そう言つと彼女は胸を張る。その拍子に、大変たわわに実つた二つの双丘がプルンと揺れた。

「ちい！ どうしろつてんだよー！」

「私に聞くな」

『真雪』の防御装甲といえども、流石に食らい続ければいつかは限界が来る。『ラウラ』の射撃の秘密が分かったところで、その打開策を見付けられなければ結局何も変わらない。一夏と箒はゆっくりと、しかし確実に追い詰められていた。

せめて回避だけでも出来れば。そんな呟きは既に何度も口にしていく。口にはしているだけでしかないのは、現状その方法も浮かばない為であろう。

「このままじゃ『真雪』が先にイカれる。そしたらゲームオーバーだ」「何とか攻撃を当てられないのか？」

「無茶言うなよ。『真雪』の機動力じゃ向こうを捉え切れねえよ」

現に何度もビームランチャーやミサイルで反撃を試みている。だが、その悉くを回避して見せた『ラウラ』を相手に、既に現状打つ手は無くなっていた。これが『雷轟』や『飛泉』であるならばまだ違った戦術が取れるであろうが、その場合あの射撃を避けられない。

ならば一夏を盾に箒が攻撃をする、という手も考えたが。やはり『真雪』の機動力の低さがネックとなりうまくいかない。そして何より、箒の『紅椿』には武装がほとんど残っていないかった。『玉兎』は打ち止め、刀も範囲攻撃を主とする『空裂』ではなく単体牽制用の『雨月』のみ。言い方は悪いが、戦力的にはほとんど足手まといに近い状態である。

それでも戦力としてどうにかしているのは、彼女の今までこの機体を駆って培ってきた戦闘経験と、パートナーが勝手知ったる一夏であることだろう。特に後半部分は、彼女にとって大きなウェイトを占めていた。

「一夏」

「なんだよ箒」

「あの射撃、どうにかしよう」

「は？　だからそれが出来れば苦労しな——」

だから、彼女は彼に全てを託すことが出来る。彼を信じて、無茶をすることが出来る。

後は頼んだぞ一夏、そう言って箒は一夏の背中を思い切り叩いて笑

うと、彼の背後から飛び出した。何をするつもりだ、と彼が口にする前に、彼女は『紅椿』に残っていた全てのエネルギーを一つの武装に回す。

刹那、彼女の半壊した機体の装甲が展開し、赤い粒子を振り撒いた。ハイパーセンサーでは捉え切れない速さで疾駆するそれは、いくらヴァルキリーの射撃技術を持ってしても当てることは叶わない。一射二撃はそのどちらもが明後日の方向へと飛んで行くだけだ。

「ちい」

『ラウラ』が舌打ちした時には、既に彼女は目前まで詰め寄っていた。その腕を振り上げ、射撃武装を持っている左手を碎かんと振り下ろす。最初の激突時には刀で効果的なダメージは与えられなかった以上、箒の取る手段は必然的にこれとなる。

無事である右手の装甲が更に展開、ビームブレードの刃が六本生み出された。『シユヴァルツェア・レーゲン』のプラズマ手刀よりも凶悪なそれは、確実に『ラウラ』のISの左手を刈り取る。

金属がぶつかる音などではなく、あっさりと切り裂かれる音がアリーナに木霊した。咄嗟に腕を引いたことで丸ごと切り落とされる事こそ無かったものの、射撃武装ごと大半の装甲は真つ二つにされてしまった。もはやほとんど用をなさない状態となった左腕には目もくれず、『ラウラ』は右手に再びブレードを取り出し追撃を加えようとしている箒に向かって逆袈裟を放つ。

装甲の粒子は既に無くなっており、唯一出ている右手のビーム刃も消えかけている。そんな状態でも尚彼女はそれを受け止めんと反応し。

「時間切れ、か……」

「……な」

その右腕の装甲ごと、ブレードの剣閃をその身に刻まれた。『紅椿』の装甲は容易く切り裂かれ、そしてその中にある箒の肉体に深々と刃が突き刺さる。ぐらりと揺れるその体は、彼女の機体とは違う赤、鮮血で染まっていた。

ゆつくりと箒は落ちていく。ISの保護機能の落下軽減など発動

しておらず、そのスピードは徐々に速さを増している。既に彼女は意識がないのか、その身はピクリとも動かない。地面に激突すれば、繋いでいたその生命の糸はプツリと切れるであろう、そんな状態であった。

「箒いいいー!」

恐らく体が勝手に反応したのだろう。一夏は『瞬時加速』で箒と地面の間に割り込むと、彼女をしつかりと抱き留めた。その体は肩口から腰にかけてバツサリと斬られており、一刻も早く手当をしなければ危ないであろうことを伺わせる。そんな彼女をゆつくりとアリーナの地面に横たわせると、一夏は『ラウラ』の方へと振り向いた。

その顔には多少の動揺が浮かんでいたが、それは相手を斬ったことではなく、生体保護用のシールドエネルギーですら攻撃に転化したという箒の行動についてのようで、血塗れで倒れている彼女そのものには特に目を向けることもない。

それが、一夏には無性に癪に障った。

「テメエ……! ふざけんよ、何でそんな平然としてやがんだ!」

「戦いで敵が死ぬのなど当たり前前の光景だろう」

「……ああ、そうかよ。そうだよな。敵が死ぬなんざ当たり前だよな」

『真雪』を『雷轟』に換装、ビームブレードを取り出すと、その刃を真っ直ぐに『ラウラ』へと突き付けた。殺気すら込めた瞳で、目の前の敵を睨み付けた。

許さねえ。そう呟くと、彼は一気に『ラウラ』に向かって加速する。

「ぶっ殺してやるぜラウラあ!」

「はっ、そんな怒りで我を忘れた状態では無理だ」

居合からの一閃二断。先程までは躲していたそれを容易く食らってしまった一夏はビームブレードを弾き飛ばされ、地面に叩き付けられる。二・三度バウンドした後体勢を立て直した彼は奥歯が欠けるほど強く噛み締め、そして落ちていたブレードをもう一度掴まんと視線を巡らせた。

「あ……」

そこで、彼はようやく気付いた。『紅椿』にケーブルが繋がれ、生体

保護機能が回復する程度にまでエネルギーを送っている一体のISとそれを纏った人物に。既に自分も限界であるにも拘わらず、その行動を行っているシャルルに。

「まずは人命第一。それが当たり前でしょ？」

「……ああ、そうだ。そうだよな。……死なせないのが、当たり前だよな」

ヘナヘナと力の抜けたようにその場に膝を着いた一夏は、呼吸が段々と安定していく筈を見て胸を撫で下ろした。良かった、本当に良かった。そんなことを呟くと、ありがとうとシャルルに深々と頭を下げる。

そんな彼を見て、シャルルは別にいいよと手をヒラヒラさせた。それよりも、と上空を指差す。一夏が視線を上げると、ブレードを構えたまま三人を見下ろしている『ラウラ』の姿があった。

「終わったか？」

「……んだよ、結局何だかんだ言っても人が死ぬのは見たくないってか」

「人命救助を潰しにかかるのはただの下衆だ。他に他意はない」

抜かしてろ。そう悪態を吐きながら、一夏はゆっくりと空へと浮かんだ。ビームブレードを再び構え、先程と同じように『ラウラ』に對峙する。

どうした、もう殺すとか言わんのか。そんな彼女の挑発染みた言葉を鼻で笑うと、一夏は真っ直ぐに彼女を見る。そういえば、筈が言っていたな。ふと先程の彼女の言葉を思い出した。

「後を、頼まれてやるよ筈。俺はこいつを、ぶっ飛ばす」

「出来るのか？ 未熟で満身創痍なお前に」

「出来るか出来ないかとかじゃねえよ。やるんだ」

正眼にブレードを構える。それに合わせるように『ラウラ』もブレードを上段に構えた。

力量差は歴然、機体の消耗も激しい。それは目の前の相手の言う通りである。そんな彼がもしどうにか出来るとしたのならば。

「……………」

『白式』のコンソールに謎のウィンドウが表れたのを見て、一夏は怪訝な表情を浮かべた。それはすぐに最大化され、彼に問い掛けるような文章を目前に映し出す。

——汝は、自らの変革を望むのか。より強い力を欲するのか、と。何だこりや、と目を見開いた彼は、しかしすぐに表情を元に戻すと、そんなの決まってるだろと口を開いた。

「当たり前だ！　自分で身に付けるってのが頭に付くけどな」

その言葉を受けたウィンドウは自動で閉じられ、代わりに一つのプログラムが自動で『白式』へと流れ込んだ。何だこれ、と思う間もなく、コンソールにはアップグレード終了の文字が表れる。

『白式・金鳥』起動します。そんなアナウンスと共に、『雷轟』であったはずの『白式』の姿が変貌していく。

「おい、織斑千冬の弟、それは一体」

「知らん！　が、とりあえず」

使えるもんなら使ってみろって言う挑戦だろ。そう言いながら、巨大なウイングスラスター、背後にマウントされたビームキャノン、そして一振りの大刀を携えた『白式』を纏った一夏が不敵に笑った。

N028 「友達になれ！」

大型化したウイングスラスターを吹かしながら、一夏は一気に『ラウラ』に肉薄する。すれ違うように持っていた大刀を横薙ぎに振り抜くと、その勢いを使って自身の体を回転し、再び『ラウラ』へと斬りかかった。

最初こそ面食らっていたものの、しかし『ラウラ』はその二撃目を受け止める。そのまま自身のブレードで目の前の相手を切り裂かんと振るうが、背中のウイングが前面にスライドし堅牢な装甲となったことでそれは阻まれた。甲高い音を立てて弾かれるそれを見た彼女は短く舌打ちすると、そのシールドを蹴りつけ距離を取る。

逃がさん、とそんな彼女に向かい、一夏は取り出したビームガンを連射していた。

「機体がいくら強力になろうと、お前自身の腕は変わっていないぞ織斑千冬の弟」

「そんなの当たaranの一言でいいんだよ！ 回りくどいわ！」

軽く回避を行った『ラウラ』の言葉に一夏が叫ぶ。そうしてお互いに一息吐いたところで、彼はもう一度大刀を取り出し突き付けた。

「卑怯だ、なんて言わねえよな。お前だって似たようなもんだし」

「無論だ。むしろ、弱い者いじめにならなくなってほっとしている」

「その弱いものに左手切り裂かれたのはどこのどいつだよ」

「挑発には乗らんど。それに、あの一撃は私も敬意を表する」

文字通り、自身の命を使って突破口を切り開かんとしたあの姿を思い出し、評価こそすれ文句が浮かぶことなどはない。そう言い切った『ラウラ』を見て、一夏は少しだけ拍子抜けしたような表情を浮かべた。

「極悪人とかの方がぶっ倒しやすいんだけどな。そんなことを呟きつつ、彼は突き付けた大刀を肩に担ぐような構えを取った。

「……心配するな。私は真正正銘の、極悪人だ」

「自分でそう言う奴は案外良い奴って相場が決まってるんだよ！」

スラスターを吹かす。再び一気に肉薄した一夏に合わせるように、

『ラウラ』は真っ直ぐ突きを放った。寸分変わらず眉間に吸い込まれていくそれは、しかし彼が首を少しずらしたことで躲される。

そのまま加速の勢いを使って彼女にぶつかってしまった一夏は、体勢を崩したところで一直線に刃を振り下ろした。この距離で躲すには時間が足りない、受け止めるには得物が心許ない、耐えるには威力が大き過ぎる。八方塞がり、決まった。そう彼が確信する一撃は、しかし。

「忘れたか織斑千冬の弟。私はラウラ・クロニクル、VTシステムを組み込まれた人間だ」

眼の前にあつたその姿が幻のように掻き消える。命中したと思つた攻撃が空を切つたことで一夏の表情に動揺が生まれ、そして同時にその背後から声と斬撃が飛んできた。無防備なその背中を晒した姿は、躲すことも受け止めることも能わず。

「そつちこそ忘れたのかよくーちゃん！今の俺は、何か知らんがパワーアップしてんだぞ！」

背中ofウイングスラスターが、まるで猛禽類が得物を狙うがごとく大きく展開する。同時にそこに溜まっていたエネルギーが放出され、一回り大きな翼のようなものを形作つた。真後ろにいた『ラウラ』はその放出に直撃してしまい、思わずその動きを止める。

その隙を逃さず、一夏は素早く反転し真正面に捉えた彼女に向かって拳を振り上げた。

「でもってだな！その動きはついでこないだ散々体に叩き込まれてんだよ！」

姉のありがたいお説教のついでにな。そう続けながら、彼は拳を真っ直ぐに突き出す。

「結果、オーライ、ってやつですか」

散々叩き込んだ元凶の一人、山田真耶教諭はモニターを見ながら独りごちた。隣では予想通りだと言わんばかりの顔で頷いているもう一人の元凶の姿も見える。

「いや、実際あいつと戦う事になる場合には必要だと思ったのは事実だ。そうなって欲しくないと思っっていたがな」

「……そうですか」

半分以上は面白がってやってなかったかな、と思わないでもなかったが、真耶は空気を読んで口には出さなかった。それよりも、と話題を変えるように『ラウラ』と対峙している一夏の『白式』を指差す。

「あれって、『二次移行（セカンド・シフト）』なんですか？」

「ああ、そうだな……どうなんだ？」

彼女の問い掛けに、千冬は少し考える素振りを見せつつ視線を床に落とした。そこに転がっている人物の答えを待つようなその仕草は、普段と変わらず何もおかしいところなどない。

その人物、篠ノ之束が簀巻きにされていなければ、である。

「さつき言ってたアップグレードの装備だから、正確には『二次移行』じゃないよ。そもそもあれ、三つのパッケージを纏めて装備しただけだし」

「言われてみれば、『雷轟』・『真雪』・『飛泉』の特徴がありますね」

「機動力の為のウィングスラスターは『雷轟』、変形装甲とビームランチャーは『真雪』、大刀とブーメランは『飛泉』からそれぞれ最適化されてるけどね」

「つまり、あれはあくまで『金烏』の効果だ、と」

「そゆこと。ま、いっくんが使えるかどうかは分かんないけどね」

そう言って笑った束は、ところで、と千冬を見た。そろそろこれ、解いてくれないかな。そう彼女に告げると、間髪入れずに駄目だという言葉が返ってきた。

大体何故そうなったのかは分かっているだろう、と肩を竦める千冬に対し、束は分かっているから言っているのだと反論する。

「ということは、解いたらまた『箒ちゃんのいない世界なんか滅ぼさう』とか言い出すわけだな」

「言わないよ！　っていうか箒ちゃん助かったんだから滅ぼす理由なくなつたよー！」

「そうか？　今度は『箒ちゃんが傷付くような世界はこうだ』とか言っ

て大量殺戮兵器を投入しかねんだろう」

「ちーちゃんの中の束さんただけだよ！　むしろそんな発想出来るちーちゃんに私ドン引きだよ」

「間違ってたか？」

「大間違いだ！」

おかしいな、と首を傾げる千冬を見て、真耶はそつと視線を逸らした。普段はそうでもないのに、親しい人物が関わると大分おかしくなるのが先輩の悪い癖だ。そんなことを思いつつ、ひよつとして血筋なのだろうか、などとどうでもいいことも考えてしまった。

とりあえず話を元に戻そう。そう結論付けた彼女は二人に声を掛ける。装備の正体は分かったが、一夏が使いこなせなければ勝てない、ということでもいいのだろうか。そう訊ねると、まあ概ねその通りという答えが返ってきた。

「でもまあ、ちーちゃんの剣技と眼鏡おっぱい先生の機動が体に叩き込まれてるなら、案外どうにかなっっちゃうかもね」

相変わらず簀巻きにされたまま、束がそう言つて笑みを浮かべた。

「……はふう」

「かんちゃん！　かんちゃん！　戻ってきて！」

そして一方観客席。箒が切り裂かれ驚愕の表情を浮かべ、一命を取り留め安堵の表情を浮かべた四人は、『白式』の変化とその動きに思わず目を奪われていた。

その中でも一際トリップしてしまったのが簀嬢である。眼の焦点が合っておらず、しかしその瞳はキラキラ輝いている姿は、幼馴染である本音が涙目で心配してしまうほどであった。

「まあ、確かにヒーロー物とかでありそうよね、戦闘中のパワーアップって」

鈴音が肩を竦めながらそう述べると、ああ成程とセシリアも合点がいったように手を叩く。その手の物語が好きなのがリアルな光景を見てしまえば、ああもなろう。うんうんと頷きながら、まあ害はない

だろうからいいかと結論付けた。

「よくない！ かんちゃん戻すの手伝ってよ〜！」

「はいはい。ほら更識さん、正気に戻りなさい」

「簪さん、ボーっとしていると見逃しますわよ」

「……………！ 私は何を……………？」

ペチペチ、と二人の頬を叩く衝撃でようやく我に返った簪は、本音の表情でどうなっていたのかを悟り思わず俯く。そんな彼女を苦笑しながら眺めていた鈴音とセシリアは、まあいいから向こうを見ないと視線をアリーナに戻した。

一夏の拳は『ラウラ』に叩き込まれたが、しかしそれで勝負が決まる一撃になるかといえどそんなはずもなく。カウンター気味に繰り出された蹴りで距離を離され、仕切り直しとなっていた。

ある程度距離が離れたことで、一夏がだったらこれだと背中にマウントしてあったビームキャノンを構える。高出力のビームが発射されるが、『真雪』とほぼ同じであるそれは当然のことながら隙も大きく、何の布石もなく当たるほどのものではない。『ラウラ』はそれを最小限の動きで躲すと、残像の見えるような動きで彼へと接近した。先程見せた機動部門ヴァルキリー山田真耶の使っていた移動技術、それを余すことなく駆使し、必殺の間合いに入り込む。

こなくそ、とビームキャノンから手を離れた一夏は大刀を眼前に構えた。そこに彼女のブレードがかち合い甲高い音を立てる。ぶつかり合いなら負けないと彼はその手に力を込めたが、目の前の姿が掻き消えたことで慌ててスラストを吹かした。一瞬前に一夏の首が合った場所に斬撃が振るわれる。

「厄介だな」

「こっちのセリフだバカヤロー！」

お互いに悪態を吐きながら再び各々の得物を振るう。二度三度とぶつかり合うそれは、本来ならば『ラウラ』のブレードが耐久力的にも不利であるはず。にも拘わらず激突が均衡を保っているのは、単純に技術の差なのであろう。機体の性能を除けば、一夏と『ラウラ』ではそれだけの差があるのだ。

彼の目標とする姉の技術が刷り込まれているが故に、である。

「……気に入らねえな」

「私が織斑千冬の剣技を使うことがか？　ならば力尽くでどうにかすればいい」

言いながら剣を振るう。その斬撃を受け止めることなく躲すと、一夏はそうじゃないと叫んだ。同時に肩に装備されていたブーメランを投擲、間髪入れずに大刀を構え突進する。

飛来してきたブーメランを躲し、突っ込んできた一夏と戻ってくるブーメランの挟撃も直撃する部分を読み切つて体をずらすことで回避した『ラウラ』は、なら何が気に入らんのだと返しながら振るわれた大刀を弾く。

崩された体勢を無理矢理戻しながら、決まってるだろと彼は彼女に指を突きつけた。

「顔だ！」

「何？」

「何でそんな仏頂面して戦つてんだよ。面白くなさそうに戦つてんだよ」

「……何を言っているんだお前は」

「テメエこそ何言つてんだ！　千冬姉の技術を身に付けて、山田先生の動きも使えて、誰か知らんが凄え射撃も使えて。そんだけの力をぶつけ合えるんだから、楽しくないわけないだろうが！」

呆氣にとられた表情を浮かべ、『ラウラ』は思わず動きを止めた。こいつは一体何を言っているのか。そんな表情を浮かべて一夏を見る。

そして一夏は一夏で、何で分からないんだと言わんばかりの表情を浮かべた。

「それとも何か、お前は今全力で戦つてないってか」

「馬鹿にするな。手を抜いているつもりなど毛頭ない」

「だったら尚更だ。全力でケンカして、その後お互い笑い合つて。そんな状況だぜ、楽しいじゃねえか」

「……何を言いたいのか分からん。はつきりと言え」

男女の違いなのか、それともこいつが特別馬鹿なのか。そんなこと

を思いつつそう述べた『ラウラ』の言葉に、一夏はやれやれと肩を竦めた。これだけ言っても分からないのかよ、と呟きながら、よく聞けよともう一度指を彼女に突き付けた。

「俺が勝つから、俺と友達になれ！」

「……………馬鹿なんだな」

「誰が馬鹿だ誰が！」

「お前に決まっているだろう、『織斑一夏』」

そう言いながら、彼女は笑った。笑いながら、先程よりも滑らかな動きで、ブレードを構えた。

「大馬鹿者だ」

「いや、分かるけど今は喋らない方がいいよ」

意識を取り戻した箒が盛大な溜息と同時にそう述べるのを聞いて、シャルルは思わず苦笑した。いくら一命を取り留めたとはいえ、未だその傷は塞がっていない。ISの生体保護機能でゆつくりと治療が行われている状態であるものの、出来ることならばちゃんとした医療機関に向かわなければならぬだろう。

そんな体で、箒は二人の戦いを見ながらゆつくりと体を起こした。

「……………寝てなきや駄目だよ」

「分かっている。やることをやったらすぐに横になるさ」

血が足りないのか若干青白い顔で笑みを浮かべた箒は、さてと、と呟きながら大きく息を吸い込む。その行動で何をするのかわかったシャルルは、手で顔を多いながら溜息を吐いた。

「一夏ああああ！」

袈裟斬りに切り裂かれていることなど微塵も感じさせないその声量は、戦っていた二人が思わず動きを止めてしまうほどで。何やってんだあのバカ、という一夏の声を耳にしながら、箒は笑みを崩さず、拳を突き上げた。

「勝て、一夏。そして私もそいつと友達にさせろ！」

「……………同レベルの馬鹿だよ」

思わず口にしてしまったシャルルは恐らく間違っていない。幸いにして叫びと同時に再び意識を飛ばしてしまった箒に聞こえてはいないようであるが、彼にとつてはもうどちらでもいいらしい。

倒れる箒を支えると、盛大に溜息を吐きながら彼女を抱える。これ以上ここに置いておくとまた無茶をしかねないから、とアリーナの端にあるベンチに横たわらせると、自分のその隣に腰を下ろした。

そんな二人を見ていた一夏は、やれやれと肩を竦めながら『ラウラ』に向き直る。待たせたな、と言いながら大刀を肩に担いだ。

「姉に似て、馬鹿だな、お前達は」

「その言い方からすると千冬姉もお前の中では馬鹿ってか。……うん、そうだな、間違つてない」

いいからとつとケリ付けようぜ。そんな彼の言葉にそうだなと『ラウラ』も武器を構えた。何だかんだで戦闘を始めて時間が経っており、少なくとも一夏の方は体力的に限界であった。だからこそその言葉であり、集中である。

そして『ラウラ』もまた、限界が迫っていた。VTシステムによりヴアルキリーの動きを自分のものとして昇華している彼女であるが、いかんせん肉体そのものは年若い少女である。まだ完全に肉体が出来る前処置を施された彼女では、その動きを長時間続けるには無理があつた。だからこそ技術はそれぞれ小出しにしていたのであり、全てを使うのはそれだけ限界が近付くということでもある。

機体や技術はさておき、肉体そのものは、お互い満身創痍であつた。「ああ、そうだ」

いぎ、激突。そんな状態になった折、ふと何かを思い出したように『ラウラ』が呟いた。一つ提案がある、そんなことを言いながら一夏と、そして眼下の箒を見た。

「私が勝つた場合のことを話していなかったな」

「いらん、俺が勝つから」

「まあ聞け。私が勝つたら、私は堂々とラウラ・クロニクルを名乗る。その代わり、ラウラ・ボーデヴィツヒの改名を行わせる」

なんだそりや、と顔を顰める一夏に向かい、彼女はそのまま言葉を

続ける。そしてもし私が負けたら、ラウラの名はあいつに受け渡す。そう言つて彼女は口角を上げた。

「……んじや、その時はついでに友達になつた俺達が新しい名前も考へてやるよ」

「そうか、それは楽しみだ」

そこで会話は終わり、お互いに再び武器を構え直し目の前の相手に集中する。次の激突が決着の時、そんな覚悟を持つて、双方スラストーに火を入れた。

先に動いたのは一夏。ブーメランを投げ、そして取り出したビームガンを連射する。箒が潰したおかげで『ラウラ』の射撃武装は無くなっていく。遠距離の牽制はこちらが有利、そう考えた故の行動であつたが、しかし同時に大して役に立たないであろうということも彼の中では確信めいていた。

『ラウラ』は射撃を悉く躲す。命中したと思つた姿は掻き消え、そして一気に気配が肉薄してくる。ビームキャノンなど撃つてられんと射撃武装を諦めた一夏は、肩に担いでいた大刀を目の前に叩き落とす。

「躲された!？」

目前にあつたその姿も掻き消える。ならばと無理矢理体勢を捻り背後に向かつて刃を振るつた一夏であつたが、しかしそれも空を切つたことで目を見開いた。

上だ、と思つた時にはもう遅い。既に相手は斬撃を放っており、振り抜いた彼の体勢では躲す手段は見当たらない。真一文字に切り裂かれ、そして敗北が決定する。

「まだだあー!」

スラストーを吹かすと同時に振り抜いた大刀から手を離れた。投げ付けるような形になつたそれは一夏と『ラウラ』の間に入り込み、必殺の一撃を遮る壁となる。構わんと大刀を切り裂いた彼女は、そのまま二撃目を放とうと手首を返した。これで奴の得物は無くなった。最早出来ることは悪足掻き程度。そんな確信をしながら真つ直ぐに一夏を見詰め。

そして、彼の持っているものを見て目を見開いた。

「その、刀は……っ！」

「驚いただろ。あの時渡されてたんだよ！」

篠ノ之箒の『紅椿』が装備していた刀『雨月』を振り被る一夏が、そこにいた。刃から生み出された斬撃のエネルギーがラウラに襲い掛かり、思わず動きが止まってしまう。至近距離でその状態になるということは、致命的な隙を晒してしまうということと同義であり。一夏が必殺の一撃を繰り出せる体勢を整えられてしまうということでもあった。

「これで、俺と、箒の、勝ちだああああ！」

しつかりと『雨月』を握り込み、真っ直ぐに突き出す。それは『ラウラ』の心臓部に突き刺さり、『絶対防御』の発動を促した。彼女の機体のエネルギーが急速に減り、コンソールにエラーが表示される。戦闘続行不可能、その文字が表れたことで、『ラウラ』はゆっくりと目を閉じた。

そして同時に、どこか、忘れていたような懐かしさを感じた自分がいることに気が付いた。

「ああ、そうか——」

織斑千冬と戦った時も、こんな感じだった。

どこか満足そうな顔で、彼女はゆっくりと地面に落ちる。

「……は……」

ラウラが目を覚ました時には、既に事が済んでいた。彼女は保健室に寝かされ、そして治療が施されていた。治療、といっても大したものではなく、全身疲労と無理な負荷の掛かった関節部分に包帯が巻かれている程度だ。

暫しぼうつとした表情で辺りを見渡していると、彼女の見知った顔が横に座っているのに気が付いた。尊敬する教官、織斑千冬は、いつにない優しい目で彼女を見ながら気が付いたようだなと声を掛ける。

「一体、何があつたんですか……？」

ラウラのその問い掛けに、千冬は少しだけ苦い顔をした。しかしすぐに表情を戻すと、試合のダメージと疲労で倒れた、という当り障りのない返答をする。

そうですか、と彼女は答えると、千冬から視線を逸らし俯いた。やはり教えてはくれないのですね。そんな眩きが口から溢れる。

暫しその状態で俯いていたラウラは、やがて意を決するように顔を上げると、教官、と千冬を呼んだ。

「ラウラ・クロニクルを知っていますか？」

「……知っているさ。私の最初の、自慢の教え子だ」

そこで一旦千冬は口を閉ざす。だが、ラウラの真っ直ぐな視線に負けたのか、ふう、と溜息を吐くと彼女を見詰め返した。お前には酷な話かもしれないぞ、そう前置きをして彼女は言葉を紡いだ。

ラウラ・クロニクルとの出会いと別れ、そしてラウラ・ボーデヴィツヒとの出会いを。

「では、試合中に意識が無くなったのは」

「そうだ、お前の中の『ラウラ・クロニクル』の意識が再び浮上したんだ。まあ、今は一夏との勝負に疲れて再び眠っているようだが」

苦笑しながらそう述べた千冬は、ただし、と表情を戻すところ続けた。

これからは、定期的に向こうの意識が目覚めることになる、と。

「元々人格の上書きは完璧ではなかった。お前のその左目は、あいつの意識を目覚めさせる鍵だったのさ。向こうのハゲはそれを恐れ、眼帯をさせて封印しようとした」

左目、と言われて、ラウラはようやく自分が眼帯をしていないことに気付いた。近くの手鏡を覗き見ると、あの時夢で見た『ラウラ』と同じ瞳が自身の左目についているのが分かる。

成程、それは向こうが怒るわけだ。そんなことを思い、彼女は思わず笑ってしまった。所詮お前は『知らない』人間だ、という言葉の意味が今になってよく分かる。

「教官」

「何だボーデヴィツヒ」

「私は、ラウラ・ボーデヴィツヒです」

「……ああ、知っている」

「だから、ラウラ・クロニクルとは別人で、偽物や本物ではなく、どちらも一つの個で」

自分は何を言いたいのだろう。そんなことが頭を過ぎりつつ、彼女はしどろもどろのまま言葉を紡ぐ。ラウラはラウラ、『ラウラ』は『ラウラ』。自分が言ってしまうのは陳腐かもしれないが、それでも必死でそう伝える。

「だから、だから私は……」

自分の中にいる『彼女』と友人に、なりたい。ようやくそれを言い終えたラウラは、恥ずかしくなったのか顔を真っ赤にしてベッドに倒れこんだ。疲れたので少し寝ます、そう言うと、半ば不貞寝に近い状態で睡眠へと移行してしまう。

言いたいことだけ言って逃げたか。やれやれと肩を竦めた千冬は、立ち上がり踵を返す。この調子ならば大丈夫だろう。そんなことを思いつつ、しかしそこで足を止め口を開いた。

「いきなり三人も友人が出来たな、ラウラ」

「……一方向的に宣言する連中ばかりだがな、織斑千冬」

振り向かない彼女の背中に掛かる声。その声はどこか呆れているようで、しかしどことなく嬉しそうでもあった。

そのまま千冬は言葉を発せず、そして『ラウラ』も何も語らない。そんな沈黙が保健室を支配した。

「すまなかった。私がもう少ししっかりしていれば、お前を」

「もういい。私はこうして再び表に出てこられた、口うるさそうな友人も出来た。だから、もういいんだ」

「……そうか」

千冬は決して振り向かない。振り向いたら、今『ラウラ』の顔を見たら、きつと表情を崩してしまうから。彼女に、お前らしくないと笑われてしまうから。

それを分かっているから、『ラウラ』も背中しか見せない千冬に何も

言わない。その代わりに、そうだ織斑千冬、と話題を変えるように声を掛けた。

「私の新しい名前を、お前の弟が付けてくれるそうだ」

「新しい名前？」

「どちらもラウラでは紛らわしいだろう。ラウラの名前は向こうに渡して、私は、新しく生まれ変わることにしたのさ」

差し当たってはこっちのラウラとの話し合いかな。そう言ってくつくと笑う彼女の声を聞いて、千冬はそうか、と短く答えた。

少しだけ、鼻をすする音が聞こえた。

ラウラが保健室で治療を受けている一方、重傷といってもいいダメージを受けた箒は学園近くの病院へと搬送されていた。篠ノ之東の名前によりVIP待遇となった彼女は、個室のベッドでその身を横たえていた。その横には一夏と、そして姉である束の姿が見える。

「いや、別にそこまでされるものではないのだが」

「バツサリ斬られててそこまでなわけあるかあ！」

言外に出て行け、というニュアンスを含ませながら述べたその言葉に、一夏は全力でツツコミを入れた。ここが個室だから出来る芸当である。

その隣ではうんうんと頷く束がおり、いいからちゃんと安静にしないと駄目だよと釘を刺す。この娘は目を離れた隙に屋上で素振りでもやりかねん、そんな不安を込めた一言であった。

「そうは言われても、そこまで傷は深くも」

「充分深いっつの。痕が残らなくてよかったよ、ったく」

女の肌に残るのはやつぱりマズイからな。そう言う少し恥ずかしかったのか一夏は頭を掻きながらそっぽを向いた。

そんな彼に向かい、束は大丈夫だよと声を掛ける。もしそうなら、いつくんにお嫁に貰ってもらうから。そう言って一夏の背中をバンバンと叩いた。意外と強かったのか、その衝撃で一夏はゲホゲホとむせる。

「妹の嫁ぎ先を勝手に決めるもんじゃないでしょうに」

「ん？ 箒ちゃんもまんざらでもないでしょ？」

「一夏がどうしてもと土下座するなら考えてやってもいいです」

「……土下座か」

「いや、話題提供した私が言うのもなんだけど、何でそこでいっくん迷っちゃうの？ ツツコミ入れる場面じゃないの？」

まあ冗談ですよ、と若干引き気味になっていた束に返すと、一夏は箒に向き直る。そして、右の拳を彼女の前へと突き出した。

それを見て笑みを浮かべた箒は、同じように拳を突き出し、一夏の拳とぶつけ合う。コツン、という音と共に、二人は大声で笑い出した。「あ、ところで、トーナメントどうなるんだ？」

「一応一夏が残ったのだから、一夏とデユノアが優勝じゃないのか？」

「んー、つつてもなあ。勝ったのは箒のおかげでもあるし」

「ならいっそ、引き分けてことにしちゃえば？」

束の言葉にそれもいいのかと二人は頷く。決勝戦は全て引き分け、四つのタッグは全員優勝。まあそんな美談のような茶番も悪くない。

そんなことを思いつつ、箒はベッドに横になった。やっぱり大丈夫じゃないじゃないか、という一夏の言葉を聞き流しつつ、とりあえず寝るので出て行けと返す。

「へいへい。早く治して、戻ってこいよ」

「無論だ」

じゃあな、と一夏は病室を出る。まだ束は中にいるが、あれは身内なので問題ないだろう。そんなことを思いつつ、病院の廊下を歩き、階段を降りる。

外に出ると、既に空は暗くなり、星と月が輝いていた。これは急がないとマズイな、と呟きながら、彼は学園へと帰路を急ぐ。走っている途中に少し足がふらついて、何だかんだで自分の疲労も溜まっていることを感じさせた。

寮へ戻ったらまず何をしようか。夕飯か、シャワーか、それとも疲労回復か、はたまた疲労を無視して遊ぶのか。

「まあ、何はともあれ」

名前を考えなきゃな。そう独りごちると、一夏は疲れた体に鞭を打って全力で駆け出した。

N029 「クロエ・クロニクルだ」

「やれやれ」

生徒指導室から出てきた箒がそんなことを呟きながら溜息を吐く。それを外で待っていた一夏が眺め、同じように呟くと肩を竦めた。

それで、どうだったんだ。そう彼が尋ねると、まあ大体予想通りだと彼女は返した。

「こつてり絞られた」

「当たり前だ」

来賓がいる前で流血沙汰である。やむを得ない事情があったとはいえ、流石に学園側としても何らかの対処をせざるを得ないのだ。他にもっといい方法はなかったのかだの、もう少し考えて行動しろだの、大体予想しうる説教を延々と箒は聞かされる羽目になっていたのだった。

「まったく。あれの何がいかんと言うのだ」

「少なくとも良くはないだろ。千冬姉の話だとあの時東さん目のハイライト消えてたらしいぞ」

「姉さんは心配症だからな」

「いや、お前のその返しはおかしい」

普通大事な妹が袈裟斬りにされたら誰だって取り乱す。そうは思うのだが、しかしよくよく考えると束は普通にカテゴライズしていいのかわからないので、一夏はそう述べたものの少し考えるように視線を落とした。

とりあえず教室に戻ろう。そんな箒の提案に頷き、二人は揃って廊下を歩く。私の入院している間に何があったのか、という彼女の質問に大体変わらず騒がしかったなどと答えながら、まあでも、と一夏は視線を隣に向けた。

「お前がいないと、やっぱり締まらなかつたかな」

「ん？ そうなのか？」

「まあな。こう、なんて言うんだろうな。他の面々だけだと締まりが悪いか」

「そこで何故唐突に下ネタなのだお前は」

「何でだよ！ 普通の会話だろうが！ 脳内淫乱ピンク色か！」

「失礼な。私のどこが淫乱だと言うんだ」

「テメエの胸に聞いてみる！」

「胸？」

視線を下に落とす。足元が見えないほどたわわに実ったそれは、彼女のコンプレックスでもあり、強烈な女性の象徴でもあった。しばし眺め再び視線を一夏に向けた箒は、目を細めると睨むように彼を見詰める。

「スケベ」

「理不尽にも程がある!？」

「揉みたい、とか驚掴みたい、とか想像しただろう」

「んなもん男なら大体は思うわ！ じゃなくて！」

大体そういう会話じゃないだろ、と溜息を吐きながら一夏は視線を明後日の方向に向けた。これ以上彼女と面と向かって話していると廊下でする会話のボーダーラインを超えかねない。そう判断しての行動である。

「何だ、揉まんのか？」

「揉ま………んぞ、うん」

「そこで迷うな。廊下だぞ。時と場合を考えろ」

まったく、と肩を竦める箒に思わず向き直った一夏は、どこか理不尽な思いを抱えながら再び溜息を吐いた。何で俺が悪者になってんだよ、という呟きは風に消えた。

そんな辺りで彼等の教室の入口が見えてくる。何だか久しぶりに見る気がするな、という箒の言葉にまあなと返し、彼は一足先に扉に手を掛けた。そのままガラリとドアを開き、連れて返ってきたぞと中にいる面々に声を掛ける。

「あら、ようやくお出ましですわね」

真っ先に返事をしたのはセシリア。微笑を浮かべながら、元気になってよかった、と続ける。まあ、病室でも十分アレでしたけど、という言葉は既のところまで飲み込んだ。

そんな彼女を皮切りに、クラスの皆が次々と声を掛けてくる。見舞いに行けなかった者は久々に見る彼女の顔に安堵し、見舞いに来たい者はようやくこの場所で顔を合わせたことを喜んだ。ナギと癒子は前者、本音は後者である。

そして。

「済まなかったな」

「ラウラ。そっちこそ、もう大丈夫なのか？」

「私は別段負傷したわけではないからな」

そこまで言うと、ラウラは笑みを浮かべた。そうか、と箒も同じように笑みを浮かべる。

その笑みを潜めると、ラウラはただ、と少し困ったような表情へとその顔を変えた。大体に予想がついたものの、箒は彼女の次の言葉を黙って待つ。

「もう一人の方が、少しな」

「上手く行っていないのか」

「あー、いや……そういうわけではないのだが」

どうしたものか、とラウラは頭を掻く。言っているいいものか悪いものか、そんな迷いが傍からでも見て取れた。普段彼女があまりそういう姿を見せないということも拍車をかけ、このまま話を聞いてもいいのかと少しだけ箒は迷う。

どうやら予想と少し違ったようだ。とりあえず自分の中でそう結論付け、彼女は話題を変えることにした。ところで、デュノアの姿が見えないが、と。

「今日明日は休みだ。デュノア社への定期報告だとか言っていたぞ」

「ああ、成程。お抱えのテストパイロットだったな」

思い出すように手を叩き、そしてふとタッグトーナメントの光景を思い出した箒は、少しだけ考え込むように視線を泳がせた。いや、しかしな、と呟く姿は先程のラウラを思い出させる。

先程とは逆の立場になったラウラがどうしたのかと問い掛けようとした矢先、ポンと肩に手が置かれた。視線を向けると何だか生暖かい目で箒を見る一夏の姿が。

「シャルルの機体盛大にぶっ壊したから文句言われなかつて悩んでるだけだぞあれ」

「……そうか」

それは、平和だな。思わずそんな言葉が頭に浮かんだが、本人は真剣に悩んでいるようなので彼女はそれを口に出すのをやめた。

箒が復帰したのは確かに生徒にとっては一大イベントだったかもしれないが、学園全体からすれば些細な出来事である。当然授業は普通に進むし、彼女に何か特別待遇があるわけでもなし。

休んでいた間のノートを借りて悪戦苦闘する姿は極々普通の高校生であり、そこに何か含むところは何も無い。放課後、カフェテリアスペースで集まりワイワイと騒ぐのはある意味女子高生らしく、そこに何も変わったことなど無いのだ。

「えー……」

「あー、うん。気持ちはよく分かるわ」

その極々普通の光景の一員である更識簪は、自分の目の前にあるオレンジジュースをストローで啜りながら世の無常を嘆いた。その隣では困ったような笑みを浮かべて頬を掻く鈴音の姿も見える。

目の前では喧々囂々と騒ぎながらノートが宙を舞うという光景が繰り広げられ、そのノートを奪い取らんと天高く跳び上がっているのは篠ノ之箒と織斑一夏の二人である。二人の眼下ではセシリアとラウラが我関せずとカフェオレを飲んでいた。

ちなみにノートは簪のものである。

「何で……私が……こんな目、に」

「うん……ごめん。あの二人の昔馴染みとして代わりに謝っておくわ」

というかあの二人止めろよ。そんなことを思いながら鈴音はギロリと傍観者を貫いている英国女子とドイツ軍人を睨んだが、二人揃って意味ありげな笑みを浮かべると、彼女に向かってサムズアップを向けた。まだ同級生になつて一年も経たない間柄であるが、しかしそれ

だけで大体分かってしまう程度の濃さの付き合いは行っている。だから、鈴音には二人の意図がよく分かる。

任せた。

「任せんなああああ！」

「ど、どうした、の!?!」

いきなり叫びだした鈴音にビクリと反応した簪であったが、視線を周囲に向けておおよそのことは理解した。そつと彼女の肩に手を置くと、うんうんと頷く。

二人が謎の友情を育んでいる間に隣の席へと移動していたセシリアとラウラは、視線を空へと向けながらそれでどうすると二人に問うた。その言葉に現実へと引き戻された鈴音と簪は、しかしどうするといわれてもと頬を掻く。

「大体、何でノートを写すだけの簡単な作業がああなるのよ」

「……全ては、一夏さんの頭が悪いのですわ」

「セシリア……その言い回しだと、織斑さんの頭が悪い、みたい……」

「いや、だからあいつの頭が悪いのが原因なのだ」

「……あ、そう、なんだ……」

言い方がどうという話ではなく、そのものズバリであったようだ。そのことを察した簪は何とも言えない表情で一夏を眺める。まあでも確かにそんな感じだと一人納得すると再びオレンジジュースに口を付けた。

今にもISを展開しそうな戦いを繰り広げている二人だが、要はどこまでも簪のノートが欲しいだけなのである。簪は休んでいた間の授業の為に、そして一夏は自身の成績の為に。

「何でだよ！ 俺だって見てもいいだろうが！」

「これは私が借りたものだ。お前に見せる理由などない！」

「どういう理屈だ！ このケチ！」

「ケチで結構。質素儉約は堅実に繋がる」

「はあ!? そんなおっぱいしてて何が質素だ、笑わせんな！」

「ノートの次は私の胸か。どこまでも欲望に忠実だな一夏」

「そんなこと一言も言っただろ。おっぱい揉むぞこんちくしょー」

！」

「天下の往来で痴漢宣言か。堕ちたな、一夏」

「そうさせたのは他の誰でもない、お前だ、箒」

最早語る口はない。全ては、相手を打ち倒すその刃で決める。そうお互いに示し合わせるかのようにゆつくりと地に降り立つ。ノートは未だ宙を舞っているが、すぐに机に落ちるだろう。

その時が、動く時。

「一夏ああああ！」

「箒いいいい！」

お互いに手刀を作り、それを居合のごとく相手の首筋へと打ち込むため全力で地を踏みしめる。速度、威力、共に互角。

勝負を決めるのは、思いの強さ。

「……え？ 何これ？」

「鈴さんがついていけないのにわたくし達が分かるはずではないですか」

「これが、日本の決闘、というやつか」

「……私の、ノート……」

尚、この三十秒後に現れた織斑千冬教諭の手により、二人はあっさり昏倒させられた。

「いっつー。コブ出来てんぞこれ」

シャルルが不在なため現在一人部屋同然となっている寮の部屋で、一夏は頭をさすりながらぼやいた。あんな暴力振るってたらお嫁にいけないだろう、と本人がいらないのをいいことに好き勝手言いつつ、彼はゴロリとベッドで横になる。

暇だ、と一夏は思った。同室に誰かがいるというのは良くも悪くも何かしらの出来事を生み出してくれる。それが無い今現在は自分から出来事を探しに行かなくてはいけない。

そんな大袈裟な思考回路に陥っているものの、要は話し相手がいな

くて退屈だというだけであつた。どこまでも子供である。

「いや、待てよ」

ガバリと起き上がる。一人でしかやれないようなこと、それを行うチャンスなのではないか。そう思い直したのだ。

そうと決まれば話は早い。クローゼットに入れっぱなしになつて
いる鞆を開けるとそこから一つの機械を取り出した。若者ならば大
抵は名称を答えることが出来るであろうそれは、ゲーム機であつた。
部屋にあるモニターに接続し、電源を入れると一緒に取り出していた
ソフトをセットする。

「インフィニット・フォーチュン……の男性向け版。買った方がいいが
まだやってなかったんだよなあ」

流石に人がいる前でこの手のゲームをやるほど勇者じゃないし。
そう呟いているものの、彼は既に千冬や箒と共に女性向け恋愛シミュ
レーションをプレイするという勇者を超越した行為を行っている。

ちなみにその時のゲームが現在彼が起動しているものの前作、『イ
ンフィニット・フォーチュン（女性向け）』である。

「あん時のやつが続編っぽい感じだったんでつい買ったんだが、まさ
かギャルゲーとはなあ」

男性向け恋愛シミュレーションゲームと銘打つてあるものを買つ
て何がまさかなのかは分からないが、ともあれ一夏はどうにもタイミ
ングが掴めず今までそれをプレイする事が出来なかつた。今日明日
は千載一遇のチャンスであり、今やらずしていつやるのか、と思わず
彼の中で闘志が滾るほどである。

「さて、と。まず主人公の名前は——まあ面倒だし『イチカ』でいいか」
ボタンをポチポチと押す度にテキストが進み、画面の向こう側の少
女たちが一喜一憂する。主人公の名前を読み上げてくれるシステム
のおかげで、フルボイスのヒロインが彼の名前を愛おしく読み上げ
た。

とりあえず一周クリアした一夏は、少しだけ気まずそうに頬を掻
く。ふう、と溜息を吐いてコントローラーを置くと、画面から天井へ
と視線を移した。

「あかん。やっぱり誰かとやるべきだった」

何だか妙に気恥ずかしい。主人公の名前を自分の名前と同じ発音にしたのも拍車を掛けているのだろう。

そしてなにより。

「……声、似てねえ？」

彼の回りにいる少女達の声と妙に重なる部分があったのだ。普段馬鹿騒ぎしている面々の声で愛を囁かれると、いくら一夏といえども気まずい状態になってしまう。

今日はもうこのまま寝てしまおうか。そんなことを思いながらゲーム機の電源に手を伸ばす。が、その途中で彼は動きを止めた。ここでやめたらそれは敗北を意味するのではないのか、そんなことを思ったのだ。

「負けるもんか。行くぞ俺、セシリア（仮）と鈴（仮）とラウラ（仮）と更識さん（仮）ともう一人これは俺の回りにいないな、のエンディングもちゃんと見てやるからな！」

夜のIS学園の学生寮で、下らない決意をした男子生徒の声が木霊した。彼の部屋の中だけで。

朝日が彼の顔に当たることまで目が覚めた。あれ、と寝ぼけ眼をこすると、時刻は既に起床し学園に向かう準備をしなければならない時間だ。

どうやらあの後全エンディングを見た時点で力尽きたらしい、と記憶を探りながら体を起こした一夏は、そこで奇妙な違和感に気付いた。

「ん？ 隣に誰か」

自分は一人で寝ていたはずなのに、何故かすぐ横で寝息が聞こえる。一体全体何者だ、と思いつつながら視線をそこに向けると、彼にしがみついて眠っているラウラ・ボーデヴィツヒの姿があった。全裸で。

「ヌードっ!?!」

思わず一夏は変な声を出してしまう。幸いにして眠っているラウラは起きなかったようで、規則正しい寝息を立てて一夏の服の裾をギョツと掴んで離さない。

ふう、と安堵の溜息を吐いた一夏は、しかしどうするべきかと頭を悩ませた。そもそも、何故ラウラが全裸で自分のベッドに潜り込んでいるのか、という部分からして彼にとっては謎であるのだ。もしこの状態で彼女が目を覚まし一夏を痴漢扱いしたら最後、確実に身の破滅である。

かといって、彼女を起こさずにベッドから抜け出すことも困難な状況であった。

「……まずは起こして。それから謝ろう。いや、謝ったら認めることになる。ならば俺は悪くないで通すか？ いやでもな」

ブツブツと何か呟きながら思考の海へと泳ぎ始めた一夏の横で、現在の彼のパニックの元凶はゆっくりと目を覚まそうとしていた。二度目を瞬かせると、隣が動き始めたことで思わず視線を向けてしまい固まった一夏に向かい笑みを浮かべる。

「おはよう、嫁よ」

「え？ あ、ああ、おはよう」

そのあまりにも自然な動作に、一夏は頭が真っ白になる。ひよつとして、これが日常だったのではないか。そんなことまで思ってしまうほどだ。嫁、と自分が呼ばれたことを完全に蚊帳の外において、である。

さて、では朝食に向かおう。そんなことを言いながらラウラはシーツを捲り立ち上がる。そうすることで、彼女の生まれたままの姿は完全に一夏に晒されることとなった。

「よし、行こうか嫁。……どうした？」

「……あ、後から追いつくんで先行つててくれ」

「そうか、分かった」

そう言ってラウラは何かを身に纏うことなく部屋を出て行く。だが、そのままマップで廊下を歩くことになるであろう彼女の心配をする余裕は今の一夏にはなく、とりあえず天井を向いて首筋をトントン

と叩くのが精一杯であった。

暫くその行動を続けていた彼は、ふう、と溜息を吐くとゆつくりと立ち上がる。

「なんじやこりやああああ！」

「落ち着け」

「へ？」

パニックで叫びだした一夏の背後から声。振り向くと、先程出て行ったはずのラウラが壁にもたれかかりながら呆れた目で彼を眺めていた。

何で、と口を開きかけた一夏は動きを止める。目の前のラウラは先程と違いちゃんと服を着ているし、眼帯をしていない。

そして何より、その双眸は金色であった。

「おお、クーちゃん」

「いい加減ちゃんと名前をつけろ。もう一週間だぞ」

「あー、悪い」

ボリボリと頭を搔くと、一夏は『ラウラ』に再度視線を向ける。それで、これは一体どういうことだ。そう問い掛けると、さてな、という返答が戻ってきた。

「知らないのかよ」

「知っている。が、教えん」

「何でだよ！」

「名前と呼べ。そうすれば気が変わるかもしれん」

そう言う『ラウラ』はプイと視線を逸らした。その光景は歳相応で、ついこないだあんな戦いをしていたなどはとても思えない。それがおかしくて、思わず一夏は笑ってしまった。

何が可笑しい、と睨まれた一夏は何でもないと返し、じゃあちよつと待ってると自身の制服の掛けてあるハンガーへと歩みを進める。そのポケットにある手帳を取り出すと、ペラペラと頁を捲っていった。

「アーデルハイド」

「アルプスの少女か」

「アンジェリーク」

「そこはかとなく女性向けだな」

「ベアトリクス」

「確かに眼帯はしていそうだが」

「文句ばっかじゃねえか」

「お前がそういう名前を出すからだろう、織斑千冬の弟」

もう少しシンプルなのはないのか。そう続けた『ラウラ』から視線を外すと、一夏は手帳を仕舞い端末を取り出した。シンプルねえ、と呟きながらそれらしき名前を検索していく。

「ビアンカ」

「もう片方とどちらを嫁にするかもめそうだ」

「……さつきから思ったんだけど、何でそんなサブカル詳しいんだ？」
「ああ、これはラウラ・ボーデヴィツヒの知識だ。あいつは意外とそういうのに詳しいんでな」

「へえ、意外だ」

思わぬところから知り合いの新たな一面を知った一夏は思わず笑みを浮かべ、じゃあどうしようかともう一度端末を眺めた。いつそドイツ系じゃない名前から選んでやろうか、と思いつながらズラズラと出てくる人名を目で追い。

「お」

「ん？」

「これはどうだ」

「言ってみろ」

「クロエ。クーちゃん呼びに丁度合うしな」

どうだ、と胸を張る一夏をしばし眺め、『ラウラ』は盛大に笑い出した。そんなところまで気にしていたのか、と言いつつながら、思わず腹まで抱えてしまう。

そんなに笑うことじゃないだろうと若干ふてくされた彼は、それでどうなんだと彼女に問う。そうだな、と少しだけ迷う素振りを見せた『ラウラ』は、先程の爆笑とは違う、柔らかな笑みを一夏に見せた。

「今この瞬間から、私はクロエ。クロエ・クロニクルだ」

「てことは」

「気に入った。感謝するぞ、織斑一夏」

「おう」

では改めて、とクロエは一夏に指を向ける。この状況の説明をしなくてはいけない。そう続けたが、言葉とは裏腹に彼女は部屋の扉へと足を向けた。

「ちよ、どこ行くんだよ」

「ここでもなくとも話は出来る。実際に見た方が分かりやすいからな」

そこまで言うとな彼女は扉を開けさつさと出て行ってしまった。何だそりゃ、とぼやきつつ、一夏は制服に着替えて後を追う。確かに時間は大分過ぎており、このままここで話しては遅刻してしまうので彼女の行動は正しいだろう。

異常事態でないのならば、の話であるが。

「実際に見た方が、って。何を見るんだ？」

朝食を終えた一夏はげんなりした表情で教室へと向かう道を歩いていた。その隣では涼しい顔でクロエがついてきている。

「なあクロエ」

「何だ」

「どういうことだ？」

「おおよそは先程体験した通りだ」

「つつても」

一夏は朝食での光景を思い出す。何故かやたらとベタベタひっついてくるセシリア、普段より恋する乙女度が高い鈴音、嫁嫁言いながら甘えてくるラウラ。

そして、何だか一夏によそよそしい筈。

「夢か？」

丁度昨日やっていたギャルゲーがこんな感じだった。そんなことを思いながらクロエに視線を向けると、まあ大体そんなところだと頷かれた。

「正確には、似たような電腦空間に囚われている、というのが正しい」
「大事じゃねえか!? え? 何? じゃあ俺今精神体か何か?」

「まあそんなところだ。私もこの体はラウラのものではなく、自分の精神体から構築したものだからな」

「……言われてみると、若干ぱつつんだな前髪」

「昔はこの髪型だったんだ」

説明を続けるぞ、というクロエの言葉にああと頷く。とりあえず今この空間が現実ではないというのは分かったが、問題なのはそこではない。これからどうすればいいのかなのだ。そんなことを思いながら、一夏は彼女の次の言葉を待つ。

「対象の精神に直接アクセスし、願望を見せることで外界と遮断、隔離するシステムだろう。ラウラの知識にも情報がある。名前は」

ワールド・パージ。世界から切り離すという名称そのままの能力を、今現在一夏は受けているということになる。

「まあ、それはいいんだけど。どうすりゃいいんだこれ?」

が、聞きたい肝心なことはそれではない。あくまで彼は欲するのは打破する方法だ。説明など後からでもいい。

そう彼女に告げると、分かったとどこからか端末を取り出した。差し出されたそれを受け取ると、画面には何やらステータスのようなものが見える。それに何か見覚えのあった一夏は、まさかと呟いた。

「誰かヒロインとエンディングを迎えろとか言うんじゃないだろうな」

「……脳内ピンク色だな、お前は」

「誤解だ誤解!」

「そもそもこれはお前の願望が形になったものだ。つまり」

「昨日その手のゲームやってたからそのせいだ! 俺は悪くない!」

いいから話の続きを、と一夏に促され、クロエはそうだなと頷いた。端末を指差すと、そこで中身があるかないかの判断が出来る。述べは、と首を傾げた一夏を気にせず、彼女はそのまま説明を続けた。

「無理矢理電腦空間に落とし込んだことを考えると、犯人もこの空間にいる可能性が高い。基本的にこの中にいる『本物』は一夏のみなの

だから、お前以外の『本物』を探しだせ」

「あー、成程な。何となく分かったぞ。……これをかぎせば、いいんだな」

試しに、とクロエを画面に写す。ピ、と短い電子音の後に、ステータス表示の空欄が埋まっていった。一番大きな表示部分に『NG』というアイコンが表れる。

「そこが『OK』ならばこの空間で作られた偽物だ。プログラムで動く人形だと思えば分かりやすいだろう」

「人形、ね」

端末をクロエから二人を通り過ぎた女生徒に向け直す。再び短い電子音の後に『OK』の文字が表示された。

一夏はもう一度朝の光景を思い出す。あの面々にこれをかぎして、『OK』だと出た場合、どうやって接すればいいのだろう。彼女達を模した人形だと理解して、どういう会話をすればいいのだろう。そんなことを考えつつ、とりあえず端末をポケットに仕舞いこんだ。

「気にするな。どうせ何をしようがプログラム外の行動はしない。だから私もこうして自由に動いている」

「RPGの村人Aみたいなものか」

そう考えれば少しは楽かもしれない。よし、と頬を軽く張ると、一夏は教室に向かって少し足を早めた。

「って、別に犯人見付けるんなら日常過ぎさなくてもいいか」
「あまりにもおかしな行動をすれば向こうに気付かれるぞ」

言外に、授業をサボるなどというお咎めの言葉をクロエからいただき、一夏はガクリと肩を落とす。分かりましたよ、と少しだけやさぐれたように述べると、止めていた足を再び動かした。

そんな彼の背中に、クロエは待て、と声を掛ける。どうしたんだよ、と振り向いた一夏に向かい、彼女は頬を掻きながらいいのか、と述べた。

「何がだよ」

「私を信用して、いいのか？ その端末は偽物で、私がプログラムされた人形かもしれんのだぞ。いや、そもそも説明は出鱈目で、別の事件

が起こっているかもしれない。そんな可能性を考えなくても——」
「いいんだよ、考えなくても」

友達が真剣に言うことを信用しないわけないだろう。そう言って、一点の曇もなく一夏は笑った。子供のようなその無邪気な笑顔を見て、思わずクロエは呆気に取られる。

じゃあ行くぜ、という一夏の言葉に短く返事をし、彼女はそのまま教室へと向かう彼の背中を眺め続けた。その姿が見えなくなると、何かから開放されたように大きな溜息を吐く。

「友達、か」

思わず呟く。数年ぶりに目覚めてから出来た友人は、どうやら随分と単純で難儀な性格をしているようだ。そんなことを思いつつ、やれやれとクロエは肩を竦めた。

「まあ、奴のワールド・パージに巻き込まれたのも何かの縁だ」

精々期待に応えてやるさ。そう続けて、彼女も後を追うように学園へと駆けていった。

No30 「気安く呼ばないでくれるかな？」

チャイムの音を合図に、授業終了の号令が掛かる。うし、終わった、と伸びをする一夏は、正直真面目に授業を受ける意味があるのかと頭の隅で考えた。今この空間は現実ではなく、いわば夢の様なものだ。やっている内容も復習であるし、これもある意味睡眠学習といえるのかもな、と思いながら、さてでは昼飯だと席を立つ。普段通りならば鈴音がここにやってきて、後はいつもの面々で学食なりなんなりに向かうのだが。さてどうなるかと辺りを見渡し、見知った金髪の少女がこちらにやってくるのを見てああやっぱりか、と一夏は安堵した。

「一夏さん」

「おう、行こうぜセシリア」

「——え？」

「あ、あれ？」

呆気に取られた表情を目の前の少女が浮かべたことで、彼は若干の困惑を見せた。てつきり昼食の誘いだと思ったのでそういう返事をしたが、ひよつとしたら違ったのだろうか。そんなことを思いつつ、一夏は彼女の名前をもう一度呼ぶ。

「は、はい！ 行きましょう、わたくしと二人で昼食に！」

「お、おう」

満面の笑みを見せてそう述べるセシリアに気圧されつつ、まあいいかと一夏は頬を掻く。彼の知る普段と違うが、これもまた電腦空間による差異なのだろうと結論付け、じゃあ行こうかと彼は彼女の手を取った。その行動に一瞬動きが止まったセシリアは、しかしすぐに再起動を果たすと、一夏の腕にしがみつくように寄り添う。恋人が腕を組んで歩くようなその姿に、彼の思考が一瞬止まった。

「せ、セシリア!？」

「何ですか？ 一夏さん」

嬉しそうにこちらを見上げるセシリアを見ると、一夏はそれ以上何も言えなくなってしまう、結局その体勢のまま食堂へと向かうことになるのだった。

道中で鈴音と遭遇、もう片方の腕も同じように組まれ、両手に花状態になった一夏は、三人で昼食へと相成る。朝である程度この世界の勝手を分かっている一夏は、なるべく彼女等の機嫌を損ねないように気を付けながら親子丼を口に入れた。

そのまま何事も無く食事を終えた彼は、さてではどうするかとお茶を啜る。調査をするのは当然なのだが、ここで二人を蔑ろにして行動をしてしまうと犯人に何かを悟られる可能性もある。なるべく秘密裏に動かなくてはいけない、そんなことを思うと、思わず一夏の口から溜息が漏れた。

そんな一夏に、どうしたのかと二人は問う。まあ大したことじゃないと返しながら、そうだと彼は彼女達に問い掛けた。

「何か最近、変わったことはないか？」

「変わったこと、ですか？」

「んー。変わったこと、ねえ」

何かを思案するような表情を浮かべた二人を見ながら、一夏はこつそりとクロエから貰った端末を起動させた。二人を枠の中に入れると、短い電子音の後に判断結果が表示される。

鈴音もセシリアも、浮かぶ表示は『OK』であった。つまり、この二人は犯人ではない。

「特には思い付きませんわね。……どうかされました？」

「ん？ ああ、いや、何でもないぞ、うん」

「そう？ いかにも何かありましたって顔してるけど」

本当に何でもないんだ、と一夏は続けると、ちよつと用事を思い出したと席を立つ。二人が制止するのも聞かずに、そのまま一目散に食堂から飛び出した。

「何とかなる、と朝は言ったが……うーむ」

友人を模したプログラム。改めてその事実を突き付けられると、どうもぎこちない反応になってしまったのだ。これは一刻も早く犯人を捜さなくてはいけない、そう決意しつつ、とりあえず朝別れたクロエと連絡を取るために中庭へと向かう。

その途中で、彼がこの学園で二番目に見知った顔で、現在最も会い

たかない少女と出くわしてしまった。

「ほ、箒……」

「何だ一夏、人の顔を見るなりその態度は」

口のへの字に曲げ機嫌の悪そうにする彼の幼馴染。普段見慣れているその顔が、何故か一夏にとってどうしようもないくらい恐ろしい物に見えた。

これが本物ならば、彼は何の躊躇もせず軽口を叩くだろう。犯人の変装ならば、安堵の溜息と共に攻撃を開始するだろう。何故ならそこにいるのは、中身のある人だからだ。

だが、もしこれが、中身の無いプログラムで組まれた人形なら。

「どうした一夏？ 顔色が悪いぞ」

「い、いや、何でもないぞ、うん」

「嘘を吐くな。これでもお前の幼馴染だぞ、それくらいのことは分かる」

「——っ!？」

心配するような彼女の声、そして、幼馴染という単語。それに耐え切れなくなった一夏は端末に箒をかざすとすぐさまその場から駆け出した。背後から箒の声が聞こえたが、彼はそれに一切耳を貸さず、無我夢中で外へと飛び出した。

人気の無い場所まできた一夏は、肩で息をしながら端末の画面を見た。篠ノ之箒のスクリーン結果がそこに表示されており、そしてそれを見た彼はあからさまに肩を落とす。

「マジ勘弁してくれよ」

「何をだ？」

「うおあ!？」

横に飛び退った。そしてそこにあつた木に盛大にぶつかると、豚のような嗚咽をあげて一夏はその場にうづくまる。どうやら相当クリティカルだったらしく、動けずブルブルと震えている。声を掛けた相手は無言でその背中を擦っていた。

「一体どうした？」

「お前が急に声を掛けるからだよ」

「ああ、そうか。それは悪かった」

そう言うのと銀髪に金の双眸の少女、クロエは苦笑する。人のいない場所にわざわざ移動していたからてつきり気付いているのだと思っていた。そう続けながら、彼女は背中を擦り続けた。

ようやく落ち着いた一夏は立ち上がると、それでどうしたんだとクロエに尋ねる。その言葉に怪訝な表情を浮かべた彼女は、お前が聞きたい事があったんじゃないのかと尋ね返した。その言葉にまああることはあるけど、と頬を搔いた一夏は、少しだけ表情を真剣なものにしながら言葉を紡いだ。

「犯人のヒントとか無いだろうか？」

「あつたらとつくに見付けている」

「だよなあ……」

はあ、と彼は溜息を吐く。そんな彼の様子を不思議に思ったのか、クロエは何かあったのかと一夏に尋ねた。そんな問掛けに一夏はまあ大したことじゃないんだけど、と前置きすると、やっぱり友人がプログラムだったのは堪えたと苦笑した。

そうか、と彼女は短く答える。ならば早急に犯人を見付けられないといけないな。そう続けると、クロエは真っ直ぐに一夏を見た。

「何か違和感はないだろうか」

「違和感？」

「ああ。ここは言ってしまうえばお前の妄想だ。そこにはお前の想像している部分しか存在し得ない。だから、お前の想像や記憶と食い違うものがあるならば」

「それが犯人の可能性が高い、か。よし、分かった。調べてみる」

気合を入れる一夏を見ながら、クロエは頑張れ、と笑みを浮かべた。そして、こちらはこちらでもう少し調べることがある、と踵を返すと、そのまま学園の外へと足を進める。

そんな彼女に、一夏はちよつと待ったと声を掛けた。

「女子がこう俺にベタベタしてくるのは充分違和感なんだが、これは」

「お前の願望か妄想だろう。開き直ってセクハラ三昧でもしてこい」

「しませんよ!?!」

教室へと戻る途中、彼は先程逃げ出した相手である箒に出くわした。一瞬だけ怯んだものの、クロエとの会話で少しだけ落ち着きを取り戻した彼は、おおよそ普段通りに接することが出来た。ふう、と安堵の溜息を吐きつつ、同時に最後に彼女が言った言葉が頭を過ぎる。
「箒」

「どうした？」

「頼みがあるんだ」

「な、何だ？　そ、そんな急に改まって」

真剣な表情で言葉を発する一夏に、箒は思わず顔を赤くし俯いてしまう。彼はそんな彼女の態度を見て、成程、これはいけるかもしれないと内心ガッツポーズを取った。

さて、ではどんなセクハラをしてやろうか。表情だけは真剣なまま、かなり頭の沸いたことを考える織斑一夏高校一年。吹っ切れて楽しむことにしたらしい青年に、もう怖いものは何もなかった。

「よし、箒」

「あ、ああ」

「胸を、揉ませてくれ！」

「……は？」

「俺とお前の仲だ、もう遠慮はいらないだろう？　さあ、その素敵な胸を、俺に、揉ませてくれ！」

「……………」

昼休み最初の授業を右頬に大きな紅葉を付けて行うことになった一夏は、熱を持ったそこに手を当てながら教室の様子を観察する。どうやら流石に普段の行動を無視した行いは通らないらしい、ということとを体を持って学んだ一夏は、そのことを踏まえ考察することにしたのだ。

教室のクラスメイトにおかしな部分は見当たらないが、それは見た目だけで中身は違うかもしれない。実際まだ会話をしていない面々が数名いるので、ひよつとしたらそれが犯人かもしれない、とノートの端に名前を書きつつ、彼は視線を前に向ける。授業を行っている教師はどうだろう、と暫し授業そつちのけで観察していたが、怪しい部分が見つからなかったので再び視線をノートに戻した。傍から見ていると授業を聞いて板書している真面目な生徒である。

もつと別の部分なのだろうか。そんなことを思いながら自分の思い付く自身の関係している場所を書き連ねている彼の耳に、ではこの問題を解いてもらいましょうという教師の声が聞こえた。自分が指名された時の為に顔を上げ問題を眺め、それが全く見覚えのない問題だと判断した一夏は分かりませんで通そうと心に決めた。そんな彼の耳に、ある生徒の名前が届く。

じゃあ、シャルロットさん、お願いします、と。

「はっ！」

思わず声を上げてしまった一夏は、教師がどうしたという目を見つけたのに気付いてすいません寝てましたと嘘をでっち上げ謝った。まったく、という教師の言葉を聞き流し、彼は視線を教卓から後ろに向ける。

見覚えのない金髪の少女が、そこにいた。セミロングのさらりとした髪をなびかせながら、少しタレ目気味の大きな目を真っ直ぐ前に向け、小さな口から問題の回答が発せられる。はい、ありがとうございます、という教師の言葉を聞き席に着いた少女を暫し眺めていた一夏は、何かに気付いたように端末を取り出した。

少女を枠に入れ、スキヤン。何故か今までより解析に時間が掛かっているのをもどかしく思いながら、もう完全に授業そつちのけで画面に集中する。短い電子音が鳴り、解析終了のメッセージと共にそれは表示された。

『NG』、それはつまり、あの少女はプログラムではない、ということ。

「ピンゴ……！」

机の下でガッツポーズを取りながら、しかし同時に何故もつと早く気付かなかったのかと一夏は首を傾げた。あからさまに自分の知らないクラスメイトが存在していたのならば、誰がどう見たって一発で分かる。なのに、実際彼は今の今まで気付かなかった。

記憶を辿る。確かに急な話で焦っていた部分はあるが、流石に朝から今までの出来事を思い出すことは出来る。その中に、彼女はいたのかどうか。

「——いや、いない。朝はあんな女生徒いなかった」

となると、昼休みから今までの間で急に現れたことになる。犯人だったとしたらあまりにも杜撰な潜入であり、鼻で笑うレベル。一夏がそんな評価を下すほどのだから、当然犯人がそんなことを分かっているはずもなく。

とりあえず、授業が終わったなら直接聞くしか無いか。そんな結論を出した一夏は、ひとまず彼女のことは頭から外し、授業を受けるために黒板へと目を向けた。が、やっている内容がどうにも頭に入らず、結局先程の思考へと戻ってしまう。いや違う、これは授業が悪いんだ、だって俺の知らない場所だから。そんな言い訳を心の中でして、彼は授業を聞き流した。

授業が終わるまで後少し。今か今かとその時を待ち続けていた一夏は、授業終了のチャイムが鳴ると同時に立ち上がる。首を後ろに向けると、先程の女生徒が教室を出て行くのが視界に映った。ちよつと待った、とその少女を追い掛けるように彼も教室を飛び出していく。

そんな一夏を、教師は騒がしいなと肩を竦めた。

「ちよつと、いいか？」

「え？」

少女に声を掛ける。振り向いた彼女は、一夏が肩で息をしながら自分を呼んでいることを知り首を傾げた。一体何かあったのだろうか、そんなことを思いながらどうしたの、と声を掛けると、少し話がしたいんだと彼は述べる。別に構わないと二つ返事で了承した少女は、近くのカフェテリアへと足を進めた。

「それで、私に何の話？」

「あ、ああ。実はだな」

一夏は言い淀む。お前が犯人か、と聞くのはあまりにも短絡的かつ危険な行為だ。犯人が何者かは知らないが、こんなことをする以上こちらを害するのに躊躇はしまい。そうになると、今ここでクロエと合流していない状態での追求は命取りになる。そこまで考え、彼は自身の思い立ったら即行動の精神を恨んだ。

「一夏？…どうしたの？」

「あ、いや、悪い。……ん？…一夏？」

彼は彼女の呼称に首を傾げた。彼を名前で呼ぶということは、ある程度の親しさがあるということだ。だが、一夏自身には彼女についての情報が一切ない。よしんば目の前の彼女が犯人だったとして、そんな態度を取る理由が分からない。答えの出ない状態のまま、彼は少し聞きたいことがあると少女に告げた。

「何？…そんなに改まって」

「いや、そのだな……俺と、えっとシャルロットさん、はそんなに親しい仲だったっけ？」

「え？…どうしたの一夏、いきなり。それにシャルロットさんだなんて、普段は僕を呼び捨てに——」

少女が固まった。何かに気付いたように目を見開くと、慌てて立ち上がる。いきなりの行動に面食らっている一夏を尻目に、素早く視線を左右へと動かした。短く舌打ちすると、そのままカフェテリアの出口へと走る。

待て、と一夏は慌てて後を追った。何がきつかけだったのかは分からないが、明らかに彼女は何かを知って動揺した。恐らくはこの電脳空間のからくりに関係することだ。そう判断した彼は見失うものかと全力で足を動かす。腐っても『しののの』見習いエージェント、生身でもある程度動けなければ千冬と同僚などやれはしない。

屋上まで駆け上がった少女は、一体どうということだと左手の腕輪に向かって叫んだ。ここはIS学園を模したテスト用の空間のはずだろう。そう続けた彼女の耳に、彼女の同僚の下卑た笑い声が飛んでくる。

『あーそうだけゼゼール。そこはIS学園を模した電腦空間だ。それは間違いない』

「……どういうこと?」

『おいおい何でそんな怖い声出しちゃうんだ? お前のその姿で学園に通うっていうシミュレーションを叶えるために色々やってやったのによお』

そんな要望を自分から出した覚えはなかったけどね、と低い声色で少女は、ゼゼールは続ける。そんなことよりあの一夏だ、そう続けると、回線の向こう側は先程より更に大きな笑い声を上げた。

何だお前、あいつに会っちゃったのかよ。そう言うと、堪え切れなれと言った風に笑い声だけが回線から届く。

「同じクラスなんだ、会わないはずがない。それは送り込んだそつちが一番良く分かっているだろう? オータム」

『まあな。しっかし何だ、お前あいつに惚れてたり?』

「馬鹿を言わないでくれよ。向こうは『しののの』、私は『亡国機業』、そんな感情が入る余地はないでしょ?」

そらそうだとオータムは笑う。先程からひたすら笑ってばかりの彼女の声を聞いたゼゼールは、不愉快さを隠そうともせず、回線の向こうへと声を掛けた。そんなことより、質問に答えろ、と。

はいはい、と笑いを抑えたオータムは、まあ簡単な事さと述べた。

『その織斑一夏は本物、ってことよ。プログラムじゃない、電腦空間に引きずり込んだな』

「……な、ん?」

『ワールド・ページであいつを閉じ込めたらちようどいい感じの空間が出来たからよ、お前のシミュレーションのフィールドに使ったのさ。どうだ、経済的だろう?』

ゼゼールは絶句した。そして、同時に理解した。そうか、これはつまり、自分も同時に始末しようとしているのだ、と。

元々気に食わない相手だったが、こうもあからさまに自分を引っ掛けに来るとは思わなかった。そんなことを考えつつ、彼女はオータムに向かって声を発する。よく分かった、覚えてろこの糞女、と。

『はっ！ 威勢がいいのは結構だが、間違えるなよ。今のお前が倒すべき相手は私じゃねえだろ』

「電脳空間に閉じ込めた織斑一夏の始末。でしょう？」
『分かってんなら話は早い』

さつさとやってしまえよ。そう言うのと向こうからの通信は切れた。沈黙してしまったそれを暫し眺めると、ふう、と彼女は溜息を吐く。

そして、振り向くことなく、どこから聞いていたのと問い掛けた。

「お前が、俺に惚れてるって部分、かな」

「上手く聞き取れなかったのなら、ちゃんと聞き取れた部分から聞いていたって答えた方がいいよ」

ふう、と溜息を吐いてデゼールは振り返った。そこには少しだけバツの悪そうな顔で頭を掻いている一夏が見える。どうやら向こうは向こうでこちらの事情を察したようで、どこことなく戦い辛そうに佇んでいた。

甘いな、と彼女は思う。こんな囚われの空間で、しかもその犯人の一味と出会っているのにも拘わらずその態度。これでは確かに『亡国機業』が御しやすい相手に選んでしまうのも無理は無い、そんなことを思いながら、彼女は一步踏み出した。

「な、なあ、ちよつと待ってくれよ、シャルロット」

「……気安く呼ばないでくれるかな？ 私は君のクラスメイトなんか

じゃない。私はデゼール、『亡国機業』の『砂漠（デゼール）』だ！」

言葉と同時に彼女はISを纏う。いつぞやのアーリーナでの戦闘で使用した橙色の機体、その右手にアサルトライフルを構え、銃口を一夏へと向けた。まだ引き金は引かない、彼が機体を展開するまで待っているのだ。それはつまり、ある程度正当な勝負をしようと持ちかけていることと同義でもあった。

それが分かってしまった一夏は、思わず笑みが溢れる。そういえば、最初の時も勝負をしてくれて言ってたっけな。そんなことを思い出しながら、一夏は自身のISに手をかざし、先程連絡を取っていた相手呼び出した。

「——悪い、クロエ、手は出さないでくれよ」

通信越しにそう呟くと、一夏も『白式』を展開させた。『雷轟』のビームガンを構え、同じように銃口を相手に向ける。

『好きにしろ、馬鹿者』

「サンキューー！」

呆れたようなクロエの声を聞きながら、一夏はスラスタを吹かしてデゼールへと突っ込んだ。

学園の空中で二つの影が激突する。片方は白、片方は橙。共に射撃を行いながら、円を描くように回り続けた。どちらの射撃もお互いを掠め、直撃には至っていない。

「どうしたどうした！ その程度じゃ当たんないぜ！」

「そりゃ、ね。一夏のただの勘を掻い潜るのは容易じゃない」

「褒めても何も出ないぜ。って、ん？」

思わず動きが止まった。目の前の相手は、一夏が射撃に当たらない理由を『ただの勘』だと断言したのだ。そのことを知っているのはクラスメイトとそれ以外ではある程度の親しい友人か身内くらい。『亡国機業』が独自に調べあげたという可能性もあったが、それにしてはまるで近くで見えていたような実感が籠っていた。

そんな疑問で彼が動きを止めたのを好機と見たデゼールは、そこだ、とアサルトライフルを連射する。慌てて我に返った一夏は、危ない、と左手のシールドでそれを防いだ。

「なあ、お前って俺のこと知ってるのか？」

それは、まだ彼女がデゼールだと知らなかった時にも感じた疑問。あの時間きそびれた質問。それを、再び彼は口にした。

そんな問掛けに、彼女は愚問だね、と一蹴する。あの時一度戦っているじゃないか、と答えると、お喋りはここまですでに弾の尽きた銃を捨て新たな一丁を取り出した。再び引き金を引き、弾幕が形成される。それをジグザグに機動し回避しながら、まあまともに答えてくれるわけないかと一夏はぼやいた。ある程度予想の範囲内、だから、驚くに値しない。

「とりあえず勝たないと話にならん、か」

コンソールに表示される情報を見ながら一夏は呟く。現在の『白式』には四つの形態に換装出来る能力が備わっているが、彼は勝負を手早く決めようとその中の四番目を選択した。ついこの間身に付けた、バージョンアップによる新たな力。

「行くぜ、『白式・金鳥』！」

万能対応の装備全部乗せ。その力で一気に攻めようとした一夏は、気合を入れて叫んだ後にコンソールにエラーと表紙されているのを見て間拔けな声を上げた。どうやら条件が必要らしく、今の段階ではそれを満たしていないので不可能とのがログに流れる。何だそりや、と叫ぶのと、彼に向かって射撃が飛んでくるのが同時であった。

「うおおっ?!」

「戦闘中によくそれだけ集中を途切れさせられるね。それとも……馬鹿にしているのかな?」

いつの間にか左手にマウントしている巨大なライフルがガシャリと音を立てて展開される。見るからに貫通力と威力に自身の有りそうなそれは、どこか見覚えのある武装を思い出させて。

閃光が奔った。慌てて回避した一夏だが、空気が焼ける感触がハイパーセンサー越しに伝わり、思わず冷や汗を垂らしてしまう。これは食らったただでは済まない。そんなことを思いながら、威力には威力だと『雷轟』を『真雪』へと換装させた。

「生憎、そういう装甲を突き破るための砲撃さ」

「知ってるよ。だから」

迎え撃つ。デゼールの第二射に合わせ、一夏はビームランチャーをぶっ放した。ビームとビームが互いにかち合い、盛大な炸裂音と強烈な光を放ちながら消滅する。思わずその光に目を瞑ってしまったデゼールに向かい、貫つた、と一夏は『真雪』を『雷轟』に換装し直してスラスターを吹かした。

「甘いー」

「うおおっ!」

懐で振り切ったビームブレードと彼女が素早く取り出した近接ブ

レードがかち合い火花を上げる。左手のライフルを素早く折り畳むと、デゼールはすぐさま射撃武装を取り出し引き金を引いた。ちい、と舌打ちをしながら盾でデゼールを殴り銃口を逸らさせると、返す刀で左手の銃を切り裂くためにブレードを薙ぐ。

が、瞬時に銃を収納、ナイフを取り出したデゼールにより、またもや攻撃を防がれる。流石にこれ以上は、と距離を取った一夏に向かい、いつのまにか右手のブレードをアサルトライフルに持ち替えたデゼールがそれを掃射した。

『瞬時加速』で射線上から離脱した一夏は、溜まっていた空気を絞り出すように大きく溜息を吐く。まずい、と相手に聞こえないように呟いた。

「あれって、『高速切替（ラピッド・スイッチ）』だよな。シャルルの得意技の。向こうはあんなもん使えるのかよ」

操縦技術はそこらの代表候補生を凌ぐのではないか。そんなことが頭を過ぎり、弱気になるなど頬を張った。思い出せ織斑一夏、と自身を鼓舞するために叫んだ。

素早い射撃ならもつと上がっている。強烈な近接ならば頂点を知っている。戦術の組み立てならあれ以上の緻密さを味わっている。一撃の強烈さなら幼馴染の方が怖い。

そこまで考え、思わず笑みが漏れた。俺は幸せだ、と左手にビームガンを取り出し右手にビームブレードを構えた。

「あんだだけ強烈な連中と戦ってんだ。今更怖気付くかよー！」
「……だろうね」

一夏の叫びにデゼールはそう呟く。分かっている、と、一夏の思い浮かべている相手のことは知っている、と。そんな思いを込めて彼女は呟いた。

一夏の連射を躲し、ビームブレードの斬撃を受け止める。やっぱり読まれてるか、という彼の独り言に、まあね、と彼女は返した。ついこの間までパートナーとして練習していたんだから、当然さ。口には出さずにそう続けると、取り出したスタングレネードを放り投げた。当然、自身は回避するために一夏を蹴り付け距離を取る。

「——え？」

「何でだろうな。お前ならそうするって、そんな気がした」

それを両手でしっかりと掴んだ一夏は、逃さないぜ、と不敵な笑みを浮かべた。驚愕で目を見開いているデゼールの目の前で、グレネードは爆発し。

閃光と爆音が、電腦空間のIS学園上空に響いた。

NO31 「手元が狂った」

彼女は歩く。IS学園の廊下をコツコツと。その表情は曇っていて、少なくとも機嫌が良いとはとても言えない。すれ違う女生徒はそんな彼女に気付かず、談笑をしながら通り過ぎる。

瞬間、その女生徒の姿が消えた。掻き消えるように、ではなく、何かの画像がブレるように、テレビの砂嵐の乱れのように。談笑をしたまま、笑顔のまま、ジグザグに歪んで消え去った。

彼女はそんな女生徒を見向きもしない。周囲の他の生徒達も、そんな出来事などなかったかのように明るく、穏やかな空気を醸し出している。

そのまま、皆消え去るとも知らずに。

「……」

賑やかだった廊下は、次第に静かになっていく。静寂を生み出す頃には、廊下だけでなく、教室からも一切の声も耳にしない。まるで、彼女一人だけになったような、そんな錯覚を覚えるほどで。

否、実際に一人なのだ。この空間のプログラムで動いていた女生徒は、ある都合により全て消え去った。正確には、消し去られた。もうここにいるのは、そうでない存在のみで。

彼女は短く舌打ちをした。自分の視界に一人の少女を見付けたからだ。前髪を切り揃えた銀髪をしたその少女は、自分に向かってゆっくりと歩いてくる。今までのプログラムとは違う一向に消え去る様子のないそれは、真っ直ぐに彼女を見詰めていた。

歩みを止めた。少女も彼女の目の前で立ち止まる。何か用か、そんな言葉でも交わそうかと一瞬だけ頭に浮かび、しかしすぐにそれを打ち消した。用が無いならば立ち止まるはずがない。そんな当たり前に気付いたからだ。

だが同時に、まだ問われていない向こうの質問への答えも同時に頭から追い出した。偽りのない事実だが、それを言ったところで果たして目の前の少女が信じるかと言えば、残念ながら答えは否だ。少なくとも彼女はそう判断した。

「モブを消したのは容量削減か何かか？」

だから、真つ先に問われたものがそれであったことに、彼女は少しだけ意表を突かれた。いきなり核心の質問をするのではなかったのか。そんなことを思いながら、多分、と短く答えた。やったのは自分ではない、オータムだ。そんな言葉が頭を過ぎる。

そうか、と少女は一言だけ述べ、では邪魔したなと踵を返す。その行動が理解し難く、彼女は思わず少女を呼び止めてしまった。何だ、と振り返る少女に向かい、自分への質問はそれだけなのかと逆に問い掛けてしまう。

「そうだが？」

なんてことないようにそう返された彼女は、一瞬だけ呆気にと取られた表情を浮かべた。しかしすぐに表情を元に戻すと、ふん、と鼻を鳴らし少女から視線を逸らす。その行動が何か少女の琴線に触れたのか、口を押さえて笑いを堪えるような仕草を取った。

何がおかしい、と再び視線を少女に戻し彼女は怒鳴る。しかし少女は笑みを収める気など無いようで、クスクスと笑いながらだって仕方がないだろうと彼女に述べた。

「その動きが、都合の悪い時の織斑千冬にそっくりだったから」

「……っ!？」

言葉に詰まった。ギリ、と歯を食いしばると、射殺さんばかりに目の前の少女を睨み付けた。だが少女は意に介した様子もなく、その目付きもそっくりだな、と呑気に返す。

毒気を抜かれたように溜息を吐くと、彼女はもう一度ふんと鼻を鳴らした。そっくりなのは当たり前だろう、と少女に述べた。

「私は、あの人の妹だ」

「……だろうな」

そんな少女、クロエの反応を見て。

彼女は——織斑マドカはもう一度面白く無さそうに鼻を鳴らした。

「さて、では、織斑千冬の妹」

「……エム、だ。『亡国機業』のエム、今の私はそれ以上でも以下でもない」

「そうか。ではエム」

今の状況を説明してもらえるか。そう述べたクロエに対し、エムはすると思うのか、と彼女を睨む。思わんよ、と笑うのを見て、彼女は短く舌打ちをすると付き合いきれんと踵を返した。

クロエはそれを追おうとしない。その背中を暫く眺めて、同じように踵を返し彼女を視界から外した。まあ、元々そんな質問はするつもりもなかったし、答えも期待していなかった。そんなことを考えつつ、校舎から外に出る為の階段を探す。一夏は現在敵と戦闘中、手を出すなど言われてはいるが、しかしその場に向かわない理由にはならない。

何より、女生徒のモブを消してまで何かを企んでいる相手がいるとなれば、尚更。

「……とは、言ったものの」

自身の掌を眺める。クロエのISは自身の生体に埋め込まれた『Vシステム』と連動している特殊機体だ。当然負担も大きく、何よりラウラ・ボーデヴィツヒという植え付けられた仮想人格であったものを一つの個として確立させた今の彼女の体では、本来の性能を発揮出来るのは持つて三分が限度。加えて、この電脳空間に無理矢理侵入している都合上、彼女の能力は更に制限されている。

元より、手出しを出来るほど彼女は動けないのだ。

「それでも、口出しくらいはさせてもらう」

外に出る。同時に、空中で閃光が破裂した。スタングレネードの光で何をしているのかをある程度把握したクロエは、通信を開いて一夏の名を呼んだ。どうやら向こうも彼女の姿を確認したらしく、心配ないから見ててくれ、という呑気な返事が返ってくる。

そのあまりにもな返事にやれやれと肩を竦めると、彼女はまったく、と呟いた。

『心配ないじゃないだろう』

ん、と隣を見た。先程別れたはずのエムが、同じようにクロエの方

を見て目を見開いている。どうやら向こうも相棒に通信をし、同じような返事が来たらしい。眩きが見事にハモってしまったことに、双方微妙な表情を浮かべた。

「いいのか？」

「そつちこそ」

クロエの問いに、エムの返し。どうやら今の状況は同じらしいということを確認した二人は、そんなことをしている場合ではないと視線を逸らした。

一夏が戦っている状況は概ね把握している。もう一人、ここを創りだした張本人がいるはずだ。それを探し出さんとISのセンサーのみを起動させ、クロエは周囲の状況を探った。

シャルロットの戦っている状況は概ね把握している。彼女を嵌めたこの場にはいないオータム。それを探し出さんとISのセンサーのみを起動させ、マドカは周囲の状況を探った。

見付けた、とクロエとエムは同時に叫び、そして同時に同じ方向へと駆け出す。お互い気が付いてはいるが、今はそこを追求しても仕方がない。そう判断し言葉を交わすことなくその場所まで走った。

ワールドパージを行った真犯人、『亡国機業』のオータムは、自分に向かってくる二人を見て怪訝な顔を浮かべる。両方共に自分に向かってくる理由は予測が付いたが、揃って来る理由は思い浮かばなかったからだ。

まあいい、どうせあの小娘も気に入らなかつたからな。そんなことを思いながら、彼女はニタリと下卑た笑みを浮かべた。

「オータム！」

「つたく、いきなり名前を叫ぶんじゃないよ。おかげでそのガキに自己紹介出来ねえじゃねえか」

「私は構わない。何なら先にこちらから名乗ろうか？」

いらん、とクロエの言葉を一蹴したオータムは、まあいいと彼女からエムに視線を変えた。で、何で仲良くしてんだお前。そう問い掛けると、何を言っていると即答された。

それこそ何を言っているんだ。そんなことを思いながら、オータム

は彼女を鼻で笑う。だったらまずはそいつを始末しておけよ。そう言い残すと、二人に背を向けた。

「私はまだやることがあんだよ。そいつの相手は任せませ」

「……ちっ」

明らかに不満気な顔で舌打ちをすると、エムはクロエへと向き直った。が、対するクロエは両手を上げると、何をするともなく降参だと述べる。あまりにもあっさりとしたその行動に一瞬呆気に取られたエムであったが、事情を察しそのまま無言で背を向けた。

「邪魔をするなよ」

「したくても出来ん」

あくまで不遜なその態度に、どこか自身の姉が透けて見えた気がして、エムは忌々しげに鼻を鳴らした。

やっと目が慣れてきた。白一色から色が戻った視界の中で、一夏は目の前で銃を構えるデゼールを確認する。うお、と慌ててスラスターを吹かすと、数瞬前まで自分のいた場所に弾丸が叩き込まれた。

「流石の狙い、ってか」

「避けられてたら意味ないけどね」

銃口を一夏に向け、引き金を引く。弾幕が一瞬にして形成され、まだ視覚が本調子でない一夏に高度な回避を要求させた。ハイパーセンサーも完全に復旧していないこの状況で被弾を防ぐ手段はほぼ無いに等しい。

が、それでも一夏は銃弾の嵐を掻い潜る。数発かするものの、直撃は決してさせない。

「と、つとと」

「まったたく……敵に回すところまで厄介だとはね、一夏の勘は」

思わずそんな言葉が漏れた。幸いにして一夏には聞かれていないが、デゼール自身もそんな失言をしてしまったことに気付かない。お互い、戦い方が分かっているからこそ戦いにくい、という状況で、余

裕を徐々に失っていた。

このまま均衡を保ち続ける。そう思われた矢先である。一夏の『白式』が急に失速した。何だ、と動揺した彼へと銃弾が叩き込まれ、あつけないくらい容易く撃墜され地面に落ちていく。デゼール自身も何が起きたのか分かっておらず、怪訝な表情を浮かべたまま落下した一夏に近付いていった。

「何だっつてんだ？ エネルギーが急に切れたぞ」

重たげに四肢を動かす一夏がそうぼやくの聞いて、彼女はああ成程と理解する。彼は分かっていたいなかっただ。電腦空間と現実との違いを。

織斑一夏、とデゼールは声を掛ける。何だよ、と緩慢にはあるが武器を構えた彼に向かい、彼女は苦笑しながら君の負けだ、と続けた。「ここは電腦空間、それも君は引きずり込まれた身だ。通常と同じようにISなんか使えないんだよ」

「……マジかよ」

「その現状が何よりの証拠さ。残念ながら私はそういう準備を整えてここにいるからね、通常と同じように使用出来る」

銃口を額へと向ける。これで引き金を引けば『絶対防衛』が発動、ISのシールドエネルギーがゼロを大幅に下回れば暴力から身を守る術は無くなり、彼の命もそこまでとなる。

無論一夏もそれは重々承知だ。だが、このままではどうにもならないことも同時に理解していた。足掻く手段も、この状況では見付からない。コンソールを眺めたところで、起死回生の手は表れない。

「人生を諦める準備は出来た？」

「出来ないに決まっつてんだろ」

だろうね、とデゼールは苦笑する。だが、銃口はしっかりと額に向いたまま。

ばん、とどこか悪戯でもするかのように彼女は眩き、引き金を引いた。きつちり三発銃弾は頭部に叩き込まれ、ISのエネルギーはマイナスの数値を表示させる。彼の纏っていた白い機体は光の粒子と共に消え去った。制服姿に戻った一夏はすぐさま足に力を込めるが、し

かしそれを使う機会を目の前の相手は与えてくれそうになかった。

『おいデゼール、何でとつとと始末しねえ!?!』

どこからか聞こえてくる声。一夏も聞き覚えのあるその声は、クラス代表戦で生徒にゴーレムを使用させ、無人機で彼を襲撃した相手。先程デゼールを嵌めた相手。

彼女が短く舌打ちするのを、一夏は見逃さなかった。

「もう死に体だよ。チェックメイトは済んでる。焦ることはないさ」

『はあ!? んなこと言つて、本当は逃がそうとか考えてんじゃねえのか?』

「まさか」

『生憎と、そのまさかを懸念してんだよ。だから——』

言葉と同時に上空から数体のISが降ってくる。一夏も見覚えのあるそれは、異形の無人機、ゴーレム。それぞれバリエーションを変えた武装を装備したそれは、デゼールごと一夏を取り囲むように銃口を向けた。

「何のつもり?」

『私が代わりに始末してやるってんだ。はっは、優しいだろ?』

あからさまな嫌悪の表情を浮かべ、デゼールはああそう、と吐き捨てるように述べた。構えていた銃を下ろすと、それを収納して一夏に背を向ける。やるなら好きにすればいい、そう続けると取り囲んでいるゴーレムを押し退けた。

『さて、どっかで見たような構図になったなあ、ガキ!』

楽しそうにオータムが笑う。そんな笑い声を聞いて、一夏は奥歯を噛み締めながら思い切り目の前のゴーレムを睨み付けた。だが、彼女にはそんな彼の行動も余計に笑いを誘うものでしかない。笑い声を更に大きくさせて、あまり笑わせるなど述べた。

「なら、もう少し笑わせてやろう」

一夏を取り囲んでいるゴーレムの一体が吹き飛んだ。何だ、と一夏がそこに視線を向けると、ISの左腕だけを展開させたクロエが、銃を構えてそこに立っていた。目が合うと彼女は薄く笑い、いいから早くそこから抜け出せ、と叫ぶ。

「部分展開でも限界なんだ。次はないぞ」

「っ、分かった！」

言うが早いのか、クロエの作り出した隙間へと一夏は駆ける。別のゴーレムが腕を振り上げたが、それが届く前にクロエの一射二撃で崩れ落ちた。

包围を抜ける。だが、ゴーレムはすぐさま反転し、未だ射程距離にいる一夏を消し飛ばさんとその銃口を向けた。放たれるビームは生身で躲すにはいささか太く早過ぎる。

ドン、と音がした。ゴーレムの頭部が爆散し、そのまま糸の切れた人形のように倒れ伏す。クロエの攻撃とは違うそれに一瞬だけ思考が脱線したが、すぐさま元に戻すと一夏は足に力を込めた。

そんな彼を守るように、橙の機体が横に立つ。

『デゼール……。テメエ！』

オータムの怒号が聞こえた。一夏は何となく現在の状況がどうなっているのかを理解したが、それを考えるのは後回しにした。今はクロエと合流するのが先決だ。

一夏が通り過ぎたのを確認したデゼールは、先程放った左手にマウントされている大口徑ライフルをゆっくりと別の方向へ向けながら笑う。楽しそうに、どこか自嘲するように。ごめんオータム、と彼女は笑う。

「手元が狂った」

ふざけるな、とオータムは叫ぶ。そんなあからさまな嘘で騙せると思っているのか、そんなことを続けながら、ゴーレムの標的を一夏から、デゼールと一夏の二人に変える。

『大体、エム！ テメエ何やってんだ！ そいつ始末しろって言ったよなあ！』

「……ああ、そうだな」

『そうだな、じゃねえ！ 何だお前ら、二人揃って裏切るってのか!?』
オータムの怒号に、エムはそんなはずないだろうと肩を竦めた。姿

を隠している彼女に向かい、どこか馬鹿にするような口調で言葉を続ける。

そもそも、織斑一夏と仲間の始末は、そっちの任務だろう、と。

「私達は電腦空間の行動テストでここにいる。あくまでボランティアのサポートなんだが？　そこまで顎で使われる謂れはない」

『ああ？　そんな言い分が通用するとしても』

「するさ。だってそうだろう？　私とデゼールがここにいるのは、『全くの偶然』だからな」

言葉に詰まる。本来のテスト空間を無理矢理ここへと変更したのは他でもないオータムだ。だから、もし『上』に責任を問われる場合、二人は免罪される可能性が高い。こちらがそんな事実はない、と主張したところで、恐らく真実を知っているであろう向こう相手では無意味だからだ。

ちっ、とオータムは舌打ちをする。だったらもう邪魔だ、どこかに隠れてろ。そう言い捨てると、倒れたゴーレムを消去、再展開し一夏へと向かわせた。少々予定は狂ったが、どのみち目の前の相手は既に死に体。こちらは電腦空間を作り出している機体の効果でゴーレムのデータをいくらかでも呼び出せる。勝ち揺るがない。

刹那、一体のゴーレムが真一文字に切り裂かれた。左右に別れ崩れ落ちる機体を見て、オータムは、は？　と間拔けな声を上げる。が、その犯人を認識したのと同じ、先程よりも強烈な怒りをその相手へとぶつけた。

蒼いISを展開し、右手にマウントされた大型近接ブレードを振り切っているエムへ。

『嘗めてんのかテメエ！　何だ？　お前も手元が狂ったとか言い出す気か!?』

「ああ、手元が狂った」

『……ああ、そうかよ。一緒に始末して欲しいんだな?』

静かな声でそう述べると、行け、とゴーレムをエムに向かわせた。一夏を狙っている機体は一体もいなくなり、隙だらけになった空間を彼は悠々と駆け抜ける。

クロエのいる場所まで辿り着いた一夏は、もう一体のゴーレムを真横に切り裂いたエムへと視線を向けた。悪い、助かった。素直にそう礼を言うと、ふん、と彼女に鼻で笑われる。

「未熟者は未熟者らしく、もう少し考えて行動するんだな」

「何だよ、人が素直に感謝したのに」

「私はお前の敵だぞ、そんな素直な発想すること自体が間違いだ」

まったく、とエムが肩を竦めるのと同じ、別のゴーレム一体が頭を撃ち抜かれて爆散した。何してるんだよ、と呆れ気味でゴーレムを撃ち抜いた人物、デゼールが彼女の隣に立つ。だが、その言葉と裏腹に表情は笑顔であった。

「ああ、織斑一夏。んー、そうだね。『別に君を助けたわけじゃないからね』」

「ツンデレか」

一夏のツツコミにデゼールはあははと笑う。まあ実際君を助けたのはついだよ、と笑いながらそう続けると、彼女は残っているゴーレムへと銃弾を叩き込んだ。あつという間にゴーレムは殲滅され、しかしまるでゲームの敵キャラのように次々と新しいものが生まれてくる。枯れることのないそのサイクルに、一夏は大丈夫なのかと声を上げた。

その言葉を鼻で笑うと、エムは誰に物を言っていると振り向いた。

「お前は、黙って私の強さを讃えていればいい」

「何だよそれ……って、ん？」

ふん、と不敵に笑うエムの顔を見て、一夏は目を見開いた。よく確認していなかったが、ヘルムを装備していない今は彼女の顔がよく見える。見覚えのある目付き、見覚えのある黒髪。そして、見覚えのあるあの表情。

「千冬姉？ あ、いや、にしては小さい」

「おい今どこ見て言ったか素直に答えろ」

ISを装備したままの腕で、一夏の頭を鷲掴んだ。そのまま一メートルほど掲げると、その手を離し地面に落とす。受け身の取れなかった一夏は背中を盛大に地面に打ち付け、声にならない悲鳴を上げなが

ら悶絶した。ちなみに彼はどこを見て言ったのか答えていない。

ふん、と鼻を鳴らすと、デゼール、と声を掛けた。どうしたの、と振り向いた彼女に向かい、やる気をなくしたと短く告げる。大体の事情を盗み聞いていたデゼールは、特に何か言うことなく頷いた。

それならしようがないね。そう言うと、一夏に向かつて何かを投げ付けた。

「……………これは？」

「あ、うっかり予備に持って来たエネルギーパックを投げちゃった。これをもし『白式』に使われたら、ISが再び展開出来ちゃうなあ」

あからさまな棒読みでそう言うと、じゃあ行こうかとエムに向き直った。そうだな、と同意したエムは、未だ残っているゴーレムを無視して踵を返す。二人共に武器を収納し、どうやら本気で戦闘を終了する気なのだということが見て取れた。

『逃すと思ってるのかよ』

「思ってるさ。オータム、お前はそこの馬鹿の始末が最優先だろうか
らな」

『……………今日はよく逆らうじゃねえか。やっぱりあれか？ 身内がいると張り切っちゃうのか？』

あからさまなその挑発を、エムは特に意に返すことなくまあ似たようなものだとして軽く流した。実際はそれよりもっと単純な理由だがな、とどこか煽るように言葉を続けた。

「今日の私は、好きに動いていいと言われているんだよ。『父さん』に息を呑む音が聞こえた。忌々しげに舌打ちをする音が聞こえた。暫く無言の状態が続いた。

ああ、そうかよ。吐き出すように紡がれたオータムの言葉を聞いて、エムは口角を上げた。理解してくれたようで何よりだ。そう言うと、デゼールと共にここから離脱するためにスラストアーを吹かす。

話についていけない一夏は、エネルギーパックで『白式』を回復させながらなんのこっちゃと首を傾げた。まあ、向こうの組織の内情か何かだろう。少しだけ悩んだ末に、そう結論付けて気にするのをやめた。

ちらりと隣を見る。クロエは先程からエムとデゼールを眺めたまま喋らない。どうしたんだ、と彼が尋ねると、少し気になることがあっただけだと返された。

「何かあんのか、あの二人に」

「……いや、何。そこで喚いている三流とは少し毛並みが違うな、と思っただけだ」

「違いねえや」

そう言つて一夏は笑う。聞こえていたのか、既に空に上がり始めていたエムとデゼールが吹き出すのが二人の視界に映った。

「よし、回復完了。行くぜ！」

二人の姿が見えなくなったのと同時、一夏は再び『白式』を展開させた。コンソールを確認し、先程デゼールに言われたことを反芻する。ここでは普段と同じようには動けない。それを頭に叩き込んで、よし、と『雷轟』のビームガンを構えた。

動きを細かく、一挙一動を正確に。そう頭の中で呟きながら、ゴレムへとスラストを吹かす。普段のように数でダメージを与えるのではなく、相手の中枢に狙いを絞り彼は右手の引き金を引いた。

「——んあ?」

天井が見える。ぼんやりとした視界でそれがどうやら学生寮の自分の部屋だと気付いた一夏は、ゆっくりとその体を起こした。服装は昨日眠った時のままであり、制服姿などではない。視線を動かすと片付けていないゲーム機が視界に入り、ああそういういえばそうだった、と何かを思い出すように頷く。

「夢? にしては、リアルだったような」

最後はどうなったかも既におぼろげで、ましてや途中の出来事などほとんど思い出せない。ただ、やけに疲れた、ということだけははっきりと覚えていた。

ベッドから出て、洗面所へと向かう。顔を洗い意識がはっきりして

きた一夏は、右頬がうつすらと赤くなっているのに気付いた。何かに叩かれたようなその跡を見て、寝相でも悪かったかと首を傾げる。特に記憶は無いものの、実際、背中とこめかみが少し痛むので無茶な体勢で寝て寝違えたのだろうか。と彼は結論付けた。

洗面所から戻ると、昨日から使われていないベッドが目に入る。そういうえばシャルルはいないんだっけか。そんなことを思いながら、とりあえず朝食だと部屋を出た。

食堂へと向かう途中、いつもの面々と顔を合わせ、大所帯で廊下を歩く。彼にとっては既にいつもの光景のはずなのだが、何故だか無性に嬉しかった。帰ってきたんだ、と無意識の内に呟いていた。

「ん？ 何アンタ昨日どっか抜け出したわけ？」

「そういうえば、昨日は一夏さんは一人部屋状態だったのでしたわね」

「……夜遊び、してたの？」

「お、おりむー不良」

女性陣の反応に一夏はいや違うと首を横に振る。昨日変な夢を見たから、多分そのせいだ。そう続けると、自分でもよく分からないとばかりに頬を掻いた。その姿に嘘偽りはなく、鈴音もセシリアも簪も本音もそうか、と話を流した。

流さなかったのは、先程言葉を発しなかった彼の幼馴染。

「変な夢とは、どんな夢だったのだ？」

「そこ聞くのかよ。いや、もう覚えてないんだよなあ」

確か学園で授業を受けていた気はするんだが。と話す一夏の言葉を聞いて、そのどこが変な夢なんだと一行は首を傾げた。だからよく覚えてないって言ってるだろう、と少し不満気に言い放つと、もういいから行こうぜと皆の歩みを進ませた。

「一人だからとゲームを夜中までやっているからそんなことになるのだ。まったく、不健康だぞ一夏」

「いや勝手に人の生活予想してダメ出しするのやめてくれませんかね。その通りだけど」

「駄目じゃん」

「駄目ですわね」

「駄目、だね……」

「駄目だなく」

「集中攻撃!？」

「加えて言わせてもらえば、やったゲームはギャルゲーだな？」

「エスパー!？」

「あー……」

「ぎゃ、ぎやるげえ!？」

「へえ……」

「男の子だもんね〜」

「やめて! ホントやめて!」

朝っぱらから見目麗しい女性陣の前でギャルゲーをプレイしたことを暴露する羽目になる男子高校生の凶。傍から見るとアホらしい光景ではあるが、当事者からすれば地獄絵図である。無論一夏も例外ではなく、まだ一日が始まったばかりだというのに、もう既に彼の心は大分磨り減っていた。

と、先程から会話に参加しない一人に気が付いた一夏は、どうしたんだと彼女に声を掛けた。掛けられた少女、ラウラは、ああいや何でもないと手を眼前でパタパタと振る。

「私も、少し夢見が悪く……いや、悪いわけではなかったか」

「どっちだよ」

「そう言われてもな……私もお前と同じで、よく覚えていないのだ」

ただ、どこかお前の見た夢と共通している部分があるような気がした。そう言いつつ、なぜそう思ったのか分からないと彼女は首を傾げる。まあ些細な事だろうと話を締め、とりあえず今は朝食だと先程の一夏と同じようなことを述べた。別段反対する理由もないので、一行はそのまま食堂への歩みを進める。

そうこうしている内に食堂に辿り着く。皆思い思いのメニューを選び、大きなテーブルに揃うといただきまますと手を合わせた。

「ああ、そうだ織斑一夏」

黒パンを齧りながらラウラが問い掛ける。どうした、と焼き鮭の皮をご飯に乗せていた一夏が返すと、気になっていたことがあったと彼

女は続けた。

「もう一人の名前、クロエというのは、いつ決めたのだ？」

「へ？ えーっと確かあれは……」

昨日の、夢の中だ。そう言いかけて彼は口を噤んだ。おかしい、と首を傾げ、しかし心当たりはそこしかないのですますます混乱してしまう。そんな一夏の様子を見て、一体どうしたと他の面々も彼に視線を向けた。

「いや、だから、そのだな」

「何？ 言えない理由でもあんの？」

鈴音が味噌汁を飲み干しながらそう尋ねると、一夏は別にそんなことではない、と返す。返すが、しかしでは言うのかといええば。

怪しい、と本音はトーストを口に啜えながら彼を見た。まあ確かに、とホットミルクに口を付けつつ簪も同意する。

「別に怪しくないっての。ただ、ちよつと、そのだな」

「……成程。皆まで言うな一夏、そうか、そういうことか」

「わ、分かったんですの簪さん？」

焼き鮭をご飯に乗せ鮭茶漬けにした簪が何かを納得したように頷き、スクランブルエッグをつついていたセシリアがそれに乗っかる。ああ、と少しもつたいぶつた簪は、つまりはこういうことだと一夏に指を突き付けた。

「貴様、昨日夜中にもう一人のラウラ——じゃない、クロエか、と同衾していたな？」

「さ、昨夜はお楽しみでしたの!？」

「ちよ!？」

事実無根な濡れ衣を着せられた少年はあまりの出来事に言葉を失う。だが、この場でそれは致命的だと言わざるをえない。本音と簪は若干顔を赤くし、どこか気まずそうに彼から視線を外し、鈴音は顔を真っ赤にしながら何をやってるんだと怒鳴る。この行動で妄想は現実と相成った。もはや言い逃れは出来ない、そんな空気がテーブルに立ち込める。

「何だお前、ああいうのが好みか」

「違うわ！ 俺はでかい胸が好きなんだよ！」

「うん、この場で言う否定の言葉としては割と最悪な部類よそれ」

次々と墓穴を掘っていく織斑一夏少年は、結局言い出した張本人である筈がこいつがそんなことをするはずがないという言葉を発するまで、ただひたすらにいじられ続けるのであった。

№032 「ヒョッコなのさ」

季節は進み、暦では夏と記される季節。IS学園では一年生は夏休み前に臨海学校という一大行事がある。滞在期間は三日、移動時間を合わせると四日という期間を使って行うそれは、生徒達にとってかなりの期待となっていた。遊びは勿論だが、向こうでの特別待遇も拍車を掛けている。

「あー、そういや臨海学校の間だけ学園のISを一機自分専用として使えるんだっけ？」

「そうそう。専用機を持っている織斑君達には分からないかもしれないけど、普通の生徒にとっては重要なんだよ」

「成程。通りで騒がしくなっているわけだ」

「そういうこと。だからみんな必死だったの」

へえ、と一夏は呑気な声を上げた。その隣では同じようにふむふむと箒が頷いている。そしてその説明をしたナギと癒子は少し呆れたような目で二人を見た。別にだからといって二人が必死じゃなかったと言うつもりはないけれど。そんなことを言いながら肩を竦める。

「期末で赤点取って補習って……」

「いや、私は怪我で入院していた所為もあるぞ」

「あ、そっか。ってことは」

「何だよその目は。俺が馬鹿みたいじゃないか」

「いや、馬鹿だろう」

「お前に言われたくねえよ！ 何だよ入院してたからって！ 更識さんのノート借りてただろうが！」

「一夏、お前はノートを写しただけで授業の内容を理解出来るのか？」

「出来たら補習なんて受けてないっつの」

「威張って言うことじゃありませんわ……」

「あ、セシリア」

どうぞ、と差し入れのジュースを四人に渡す。ありがとうとそれを受け取ったナギと癒子は蓋を開けそれを飲み、箒と一夏はとりあえずこれを解いてからと机に置いた。

監視、代わりますわ。そうセシリアが述べたので癒子とナギはありがとうと笑みを返す。じゃあ頑張つてね、と述べると、二人はそのまま教室から出て行った。一夏はそんな三人の会話を聞いて監視つてなんだよとぼやいている。

「お二人だけで補習だなんて、暴れると言っているようなものではないですか」

「どっただけだよ俺達」

「日頃の行いですわ」

「そうは言うが、セシリアも周りの評価はそう大して変わらないと思っただが」

箒の言葉にセシリアの動きが止まる。表情を苦いものに変えながら、確かにそうかもかもしれませんけれど、と絞り出すような声で呟いた。ぶんぶんと首を振って気持ちを切り替えたセシリアは、とにかく、と二人に向かって指を突き付ける。その補習課題をやらないことは、臨海学校の準備もままならない。彼女にそう言われるまでもなく分かっていることであるが、しかしだからといって気合を入れてやれるかといえば答えは否。

「大体、分かんないんだよこんなん」

「一夏さん……ちよつとその発言は高校生としてどうかと」

「優等生さんには分かんない悩みつてのが劣等生にはあんの！ この問題とか俺には難しいの！」

「ああ、確かにそこは私もよく分からん」

「どこですか？」

一夏の指差した箇所を覗いたセシリアは、ここはこうするといいたあつさり述べる。成程、と箒はその説明を受けて解き始め、一夏はもう少し詳しく教えてくれと頭を下げた。

分かりました、とセシリアは一夏の隣に座る。こうなったら付きっ切りで指導して差し上げます。そう言い切った彼女のオーラに若干気圧されながら、彼はよろしく、と微笑んだ。

そして監視役が向こうでマンツーマンになったことで取り残される少女が一人。

「これが、俗に言うイジメ……」

「何だよ」

「お、鈴ではないか」

確か今日は買い物に行つたのでは。そう箒が問い掛けると、鈴音はアンタ等を置いて行けるわけないでしょうがと肩を竦めた。その言葉聞いた箒は眉を下げ、それは済まなかつたと頭を下げる。彼女らしからぬ態度に思わず鈴音は素っ頓狂な声を上げ、やれやれ、と溜息を吐く。いいからさっさと補習を終わらせるわよ。そう言うとう箒の対面に座つた。

「では、鈴が私の課題を見てくれるのかな？」

「あたしに何の期待してんのよ。そういうのは優等生の仕事よ」

へいかまん、と鈴音は教室の扉に向かつて声を掛けた。その声と同時にやってきたのはいつもの面々とも言えるラウラ、本音、簪である。これだけいれば大丈夫でしょ、という彼女の言葉に、箒はうむと力強く頷いた。

「それで、鈴、お前は」

「冷やかし」

「私も」

多数の援軍は実質半分だつたらしい。そのことを理解した箒はよろしく、とラウラと簪に頭を下げた。

翌週。二人の補習も終わり、改めて臨海学校の準備をする為に、一行は駅前のショッピングセンターへとやってきていた。海に行くならば水着を新調する、というセシリア以外の要望によりやってきたのだ。ちなみにセシリアはオーダーメイドなので買い物は必要ないと言いつ切った。

「で、何でついて来てんのよお嬢様は」

「消耗品は買わなければ無いですし」

「最高級品じゃないと駄目、とかは？」

「そんな品の無い成り上がり貴族みたいなことを言うつもりはありま

せんわ」

オーダーメイドの水着は充分そういう発言だったよ、という言葉は全員が飲み込んだ。何だかんだで皆空気を読んだらしい。ともあれ、ここにいるのは箒、鈴音、セシリア、ラウラ、簪、本音。そして一夏とシャルルの八人である。ナギと癒子は流星にこの面々で買い物はちよつと、と断っていた。

ついでに言う和一夏とシャルルも最初は断っていた。姦しい女性陣に男性二人は色々についていけないと判断したのだ。が、結局押し切られて今に至る。

「だりい……」

「まあまあ、ここまで来たんだし、買い物を楽しもうよ」

げんなりしている一夏にシャルルがそう述べる。まあ確かにそうかもな、と伸びをした一夏は、それでまずは何を買いに行くんだ、と女性陣に問い掛けた。返ってきた答えは当然、水着。あ、用事思い出したと彼は即踵を返した。

「逃がさんぞ一夏。お前は女性水着売り場で立ち尽くすという気まぐさを体験するのだ」

「嫌だよ！ 何でわざわざそんなことしなきゃいけないんだ！ シャルル、お前から何か——」

「それで、僕らはみんなの水着選びを手伝うの？ ちよつと、恥ずかしいな」

「大丈夫大丈夫、でゅっちーイケメンだから」

「確かに……顔がいいと……許されてる、って……感じがする、ような」

「おいちよつと待てそれは俺だと駄目だってことかよ」

「別に問題無いと思いますわ。喋らなければ」

「限定されすぎだろおい」

「まあ、あたしは、い、一夏は、か、かつこいい、と思うわよ、うん」
「鈴、俺はお前の水着を全力で選ぶ！」

「往來でその台詞はただの変態だぞ織斑一夏」

「酷え!？」

道行く人々は男女八人の集団を何事かと目で追っている。が、それが騒いでいる高校生だと分かると、ああ成程、と苦笑しながら視線を戻した。それでもある程度は快く思わない者もいるようで、それに氣付いた一行は騒ぎを収めると目的地へと足を進めた。結局男性陣、ではなく一夏の意見は黙殺され水着売り場に向かうらしい。

じゃあ選ぶから感想を言え、と散っていった女性陣を見ながら、水着売り場入り口で男性陣二人はぼつんと立つことと相成った。

「ついでだし俺も水着買ってくるか。隣にあるし」

「あ、行つてらっしゃい」

「つて、シャルルはいいのか？」

そう尋ねてから、一夏はしまったと顔を顰めた。シャルルが転校してきた初日に打ち明けられたことを思い出したのだ。上半身にある大きな傷、それを見られたくないから同性の一夏にも肌を晒すことを良しとしない。そんな彼が水着など着るはずがないではないか。そう結論付け、悪いと一夏は頭を下げた。

「いいよ、そこまで気にしなくて」

「それでも、ごめん」

「前もそうだったけど、本当に真つ直ぐだね、一夏」

「そうか？ 箒や鈴には捻くれ者とか言われるが」

「あははっ」

何で笑うんだ、と一夏は苦い顔を浮かべたが、まあいいやと頭を掻きじゃあ向こうに行くからとシャルルから離れた。うん、と頷いた彼はすぐ近くのベンチで座つて暫しの間ぼうつとする。何も考えずに、どこを見るでもなく。

お待たせ、と一夏はシャルルに声を掛ける。早いね、という彼の言葉に、男の水着選びなんぞこんなもんだと返した。

それに合わせるように、ちよつと来い、という女性陣の声が届く。どうやらある程度水着を選んだようで、評価を男性陣に求めているらしい。若干げんなりした表情を浮かべながら、行くか、と一夏はシャルルに述べた。

「てか、結局最終的に何にしたかは秘密なのかよ」

「あつたりまえでしょ。当日の楽しみが無くなっちゃうじゃない」

そう言う鈴音に他の面々もうんうんと頷く。楽しみ、ということ
は、どうやら二人には選んだ水着を海で見せびらかす算段のよう
であった。元気だな、とシャルルが苦笑しながら呟き、まったく
一夏も同意した。

後は細かい消耗品を買わなくては。そう述べ別の場所に行こう
とした時である。ちよつとその、と一夏は呼び止められ振り向いた。

いかにも高慢そうな女性が、一夏に向かって水着を突き付けて
いる。これ片付けておいて、とそれだけを告げ、さっさと持てと言わ
んばかりに鼻を鳴らす。

「は？　え？　何で俺？」

若干の困惑を浮かべた一夏であったが、すぐに目の前の相手がどう
いう存在であるのかを理解し顔を顰めた。恐らく、IS適正を傘にし
て威張り散らしている一部の連中の一人なのだろう。そう判断した
彼の答えは、首を横に振ることであった。

それに対し、相手はそれだけの女性にペコペコしているくせに、と
悪態を吐く。言われた一夏は後ろを振り向き、ああ確かにその辺は弁
解しようがないと溜息を吐いた。だが、と彼は相手に言う。これは自
分の友人達であつて、見ず知らずの相手に従うのとは違う、少なく
もそちらにそんなことを言われる覚えはない、と。

「いい啖呵だねえ」

「どこがだ」

それに何かを言おうとした相手の言葉を遮るように、一夏にとって
聞き覚えのある声が二つ聞こえた。片方は呆れたように彼を見る
スーツの女性、そしてもう一人はニコニコと笑うウサミミにエプロン
ドレスというエキセントリックな格好をした女性であった。

突如現れた二人に、女性は何かを言おうと視線を向けたが、その顔
を見て動きを止めた。見間違いでないのならば、この二人は。

「で、その人はこの篠ノ之束の友人に何か御用かな？」

底冷えするほどの冷たい目。それを受けた女性は気圧されるように後退り、何でもないといい放つとその場から去っていった。まったく、何なんだろうねあれ、と束は隣の千冬に問い掛け、知るかと千冬は言い放つ。

それよりも、と彼女は自身の弟へ視線を向けた。

「何だ一夏、ハーレムか」

「何言ってるのこの人!？」

「あ、勿論箒ちゃんが正妻なんだよね?」

「何言ってるのこの人!？」

「一夏、ツツコミが同一だぞ」

気にするところはない、と隣の鈴音は思ったが、まあ箒だからと諦めた。それより、と気を取り直して二人に問い掛ける。そつちも面白い物ですか、と。

「ん? まあ、そうだ。臨海学校もあるし、水着を新調でもするかと」
「束さんもちーちゃんの付き添いで水着購入さー」

はっはっは、と笑う束を呆れたように見る千冬であったが、その表情は普段よりも幾分か和らいで見える。友人同士で面白い物、という状況で、教師としてよりも一個人としての部分が強く出ているのだろう。そんなことを思いつつ、一夏は邪魔しては悪いと二人から離れようとした。

が、そんな彼を束が掴む。知り合いなら色々融通聞くんだよね、という彼女の言葉を聞き、一夏はこれから何をされるのかを大体予想した。

「……悪い、みんなは面白い物しててくれ」

「さっきの威勢はどうした一夏」

「無茶言うな、相手は千冬姉と束さんだぞ。そこまで言うなら箒、お前が——」

「よし、行くか皆」

「手の平返すの早え!？」

がくりと肩を落とす一夏を尻目に、また後で、と一行は連れ立って消耗品を買いに別のフロアへと歩いて行く。これが友情か、と頭を垂

れる彼の肩に、どんまいと束が手を置いた。

「ま、でもほら、考えようによつては役得だよ。ちーちゃんと束さんの水着見放題!」

「……成程」

「え、ちよつと本気で食い付くの? ちーちゃん、このいつくん大丈夫なの?」

「とつくに手遅れだ」

ふう、と溜息を吐いた千冬は、水着売り場へと足を進める。待つてよ、と束もその後が続いた。そして再び取り残される一夏。さつきはシャルルがいたので二人であったが、今度は一人。気まずさは倍である。

とはいえ、そんなところに突つ立っていないでこつちに来い、と言われれば、それもそれで思春期男子としては酷なわけで。

「ねね、いつくんはワンピースとビキニだったらどっち派?」

「え? び、ビキニ、かな」

「よしじゃあこれはどうだ!」

そう言つて束が掲げたのはストライプのビキニ。水色と白の縞が、どこか別のものを連想させた。パレオをセットで用意してあるのも拍車を掛けている。

その水着を着た束を想像し、少し気まずくなつた一夏は視線を逸らしたが、それが逆に彼女に何かを感付かせることとなつた。じゃあこれにしておこう、と満面の笑みで述べる。

一方の千冬は、二つの水着を手に持ち一夏へと歩いてきた。白と黒、対照的な二種類は、どちらも彼女にはよく似合うだろうと思わせた。

「いつそ二つ買つて上白、下黒はどうかな?」

束のその意見を却下し、千冬は一夏に問う。左右に視線を動かしたが、まあこつちかな、と黒の水着を指差した。

じゃあそうするか、と千冬の水着も選び終わり、買い物は終了。これで一夏は自由の身となつたわけだが。

「ついでだし、お昼食だよ? 束さん奢つちやうからさ」

「そうだな。あいつらも呼んで、昼飯といこう」

あれよあれよと二人でセツティングされていくのを見ながら、一夏はまあ奢りならいいや、と色々諦めたように肩を竦めるのだった。

そして臨海学校当日。夜行バスにより午前中の早い内に目的地に辿り着いたIS学園一年生は、バスの窓から見える海に否応なしにテンションを上げていた。

だが、この行事の目的は海で泳ぐことだけではない。それが分かっているのか、バスで座っている生徒達も外の景色と自身の腕についているブレスレットへ視線を交互にやっている。

そろそろ到着するぞ、という千冬の声に返事をした一年一組はそれぞれのバスの席へと戻る。暫く後にバスは旅館の前で停車、八台の中から出てきた生徒はまず入り口で整列し、注意事項や従業員への挨拶を行った。ではそれぞれの部屋へ、と思い思いに案内される中で、一夏も同じように荷物を抱えて歩いていった。

ここです、と案内されたのは二人部屋。当然のことながら一夏とシャルルの部屋である。男性陣は彼等しかいないため、部屋割りなどというものは存在しないのだ。結局寮と変わらない相手に二人揃って苦笑を浮かべ、まあとりあえず荷物を整理するかと持っていた鞆を置いた。

初日は自由時間だという話ではあるが、その前に一度話があるとのこと、一年生は大広間へと集合する。それぞれのクラスの担任教師が前に立っているが、そこに二人ほど教員でないとと思われる人物を彼は見付けた。一人は金髪のサマースーツの女性、どこか見覚えのあるような気もしたが、少なくとも顔見知りではないだろうと一夏は結論付ける。

問題はもう一人だ。ウサミミにエプロンドレス、既に見慣れたそのエキセントリックな姿は、自分も教員ですと言わんばかりに堂々と立っている。思わず視線を前から箒に向けたが、まあ姉さんだし、と

いう表情が見えて一夏も納得することにした。

ある程度の注意事項を述べた千冬は、ではこれから自由時間だが、と前置きをした。

「この三日間、お前達全員が専用機持ちだ。遊ぶのも構わんが、この機会に好きなだけ専用機を使い倒すという選択肢もあることを忘れるなよ」

それと、と彼女は二人に視線を向ける。サマースーツの女性と、束に。

「臨海学校の特別講師として、『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』のパイロット、ナターシャ・ファイルス女史に来てもらっている。まあ、今のお前達では間違いなく為す術もなく倒されるだろうから、遠慮なく胸を借りておけ」

では解散、と千冬は告げる。が、生徒達はえ、と呆気に取られた顔で彼女を見た。もう一人紹介すべき人物がいるのではないかと。

その視線を受けた千冬は、やれやれ、と肩を竦めた。物好きだなお前達は、と言いながら、先程目を向けたもう一人についてを語り始めた。

「今年の一年生は特別機が多くてな。臨海学校のISの整備を一人で行える人物がいなかった。ので、学園は特別に『しののの』に依頼し、優秀な整備士を派遣してもらった」

以上だ、と述べる千冬は、もうこれ以上話すことはないというオーラが滲み出ている。その為、優秀な整備士ってレベルじゃない、というツツコミを入れられる人物は皆無であった。

では解散、という二度目の彼女の言葉で、一年生は大広間から去っていく。これからは自由時間、遊ぶのもよし、ISを使うのもよし。

ここで残って何か物申すのもよし、である。

「姉さん」

「いや、今回については、束さんとしては何の落ち度もないと思うんだけどね」

まあ確かに、と筈は思い直した。正式な依頼で派遣されてきたのなら、こちらとしても何も文句はない。何より、束がいるのなら『紅

椿』にある程度無茶をさせても修理が可能だ。むしろメリットが大きいことを考え、箒は納得することにした。

納得したところで、さてどうしようか。そんなことを思いながら大広間を見やると、自分以外にも生徒が残っていることに気が付いた。数名の女生徒が真耶へと声を掛けている。聞こえてくる会話を聞く限り、どうやら以前授業中に彼女に撃墜された者達のようなだった。

成程、リベンジか。そんなことを思いながら視線を動かすと、顔見知りが一人、千冬へと声を掛けているのが見えた。特徴的な金髪縦ロールは、この学園に来てから出来た親友の一人だ。

「セシリア、千冬姉に何かあんのだろうか」

隣にやってきた一夏がそんな声を上げる。そうだな、と箒は述べ、まあ行けば分かるだろうと続けた。そうだな、と先程の彼女の返事と同じ言葉を返した一夏は、セシリアと千冬の下へと歩いて行く。

何してんだ？ そう尋ねた一夏に向かい、セシリアは別に大したことではありませんわと答えた。

「いい機会ですから、リベンジを果たそうか、と」

開放されている砂浜とは別に、ISを使用する為の特設ビーチがこの場所にはある。学園のアリーナのようなところで、二体のISが対峙していた。片方は青、そして片方は薄い桜色。セシリアの『ブルー・ティアーズ』と千冬の『暮桜』。その二体がそれぞれの獲物を構えて立っていた。

周囲には一年生全員が観客として集まっており、見学スペースはごった返している。対して、一夏達は審判も兼ねて近い場所で二人を眺めていた。

「じゃあ二人共、準備はいいかしら？」

そう尋ねるのは、先程千冬が紹介した『銀の福音』のパイロット、ナターシャである。こくりとお互いが頷くのを確認すると、自身のISを部分展開したまま始め、と声を張り上げた。

『『ブルー・ティアーズ』！』

先手はセシリア。BT兵器を即座に展開、自身は無手で目の前の相手を見ながら逃走ルートを潰すために四機を操作、ロツクオンを行う。コンソールにそれぞれを捉えたのを確認すると、油断なく一挙一動を見逃さないようにしながら射撃を。

「甘い」

放たれたビームは全て千冬の斬撃により弾かれた。本人は一步も動かず、そして視線もセシリアを見詰めたまま。ハイパーセンサーがあるとはいえ、死角から飛んでくる攻撃を意にも介さず捌いてのけたのだ。

だが、セシリアにとってはその程度は予想の範囲。まだまだ、とBT兵器を動かしつつ、自身も円を描くように機動を行う。的を絞らせないその動きは、オールレンジ攻撃と合わさりそう簡単に対処出来るようなものではない。

にも拘わらず、千冬は何てこともないようにそれを受けきる。右手に持っている刀一本で、その全てをしのいでみせた。

「ならばっー」

武器を取り出す。近接戦用に詠えたバスターソード、それを腰に構え突進した。周りの生徒達にとって近距離を挑むセシリアはただの自殺行為だと思えなかつたが、対峙する千冬は別であつた。ほう、と少し感心するような声を上げ、その一撃を飛んで躲す。

今まで一步も動かず迎撃した千冬が、動いた。それを機にBT兵器を一斉掃射したセシリアは、最初に行った斬撃の勢いをそのまま次の一撃への力に変え、千冬が来るであろう場所へと叩き込む。

手応えはあつた。確かに当たつた感触はあつた。だが、しかし。

「……っ!？」

「いい一撃だ。射撃を主とするお前がここまでやれるようになるとは」

空いている左手でバスターソードを掴んで止めた千冬は、そう言つて笑う。笑いながら彼女は腕を引き、その勢いでバランスを崩したセシリアの鳩尾に刀の柄をねじ込んだ。肺から一気に空気が吐き出され、思わず視界が暗くなる。シールドエネルギーの減少は僅かであつ

だが、パイロット本人へのダメージはそれ以上であった。

バスターソードを手放し、素早く距離を取る。む、と千冬は掴んでいたバスターソードを放り投げ、次の彼女の一手を待ち構えた。

瞬間、千冬の眉間にビームが飛ぶ。目にも留まらぬ速さで射撃を行ったセシリアは、しかしまだだと姿勢を立て直した。持っていた武器を仕舞い、再び『クイックドロウ』の体勢に入る。

「オルコット、お前のその技術は素晴らしい。自身の腕のみでそこまで到達するものはほんの僅かだろう。だが」

まだ甘い。そう言うのと同時、千冬は『暮桜』のスラスターを吹かした。一瞬にして間合いをゼロにし、セシリアの眼前に現れる。

目を見開いた。だが、まだこのくらいは。そんなことを思いつつ『クイックドロウ』で射撃を行ったセシリアは、それを『暮桜』の刃で受け止められたことで舌打ちをした。ならばもう一撃、そう思い再び銃を構えた時には、既に目の前の相手は刃を振り切っていた。

自身の首に、斬撃の跡が走る。え、と声を発した時には、既に彼女の首は断たれていた。無論『絶対防御』は発動し、『ブルー・ティアーズ』のシールドエネルギーはゼロになる。敗北判定がコンソールに記され、彼女の機体はゆっくりと失速していった。

ふう、と千冬は『暮桜』を解除する。砂浜でへたり込んだセシリアに手を差し出すと、その手を取りながらも悔しそうな顔をしているのが目に入った。それが可笑しくて、思わず千冬は笑ってしまう。なんですか、というセシリアに、すまんすまんと彼女は述べた。

「……完敗ですわ。一夏さんのように勘で躲されるのではなく、明らかに『クイックドロウ』に反応されました」

あの時より速く撃ったはずなのに、と拳を震わせるセシリア。それを眺めながら、まああれだ、と千冬は告げた。

「まだまだヒョッコ」なのさ」

「むきいひひひ」

普段の彼女らしからぬその態度を見て、目の前の千冬も、見ていた一夏達も思わず笑みが溢れてしまった。それが余計にセシリアの機嫌を悪くさせ、拗ねせさせてしまう。

まあ分かっていたかもしれませんが。そんなことを言いながら頭を垂れる彼女に、一夏は心配するなど肩を叩く。俺も千冬姉に勝てたことないから。自慢気にそう述べたのを見て、セシリアの怒りは何処かに吹き飛んだ。

「……何だか、どうでもよくなってきましたわ」

「何故に!？」

臨海学校一日目。早くも騒動が巻き起こりながら、しかしのんびりと時間は過ぎていく。そこにあるのは笑顔。嵐も何も無い、晴れやかな空。

海は、とても平和だった。

NO33 「誰が情けないって!？」

空中で二つの影が舞う。片方は静かに、優雅に。片方は喧しく、無様に。

「今だろ!？」 換装出来なきや駄目だろ!？」 『白式・金鳥』！ 何でだよ！ 『金鳥』 うううう!」

情けない声を上げながら一夏は飛ぶ。それを見ながら彼と対峙している相手は不機嫌さを隠そうともせず腰にマウントした荷電粒子砲の引き金を引いた。

左右交互に弾丸が奔る。それを何とか躲しつつ、一夏はコンソールのメッセージを見ながら叫んだ。何で換装出来ないんだ、と。

「……嘗めて、るの?」

ウイングスラスターの片側を變形、自身の必殺装備を展開しながら一夏の相手は呟く。そんな体たらくなら、わざわざこの高揚した気分をぶつける相手に選ぶのではなかった。そんなことを思いながら、真っ直ぐに彼女は彼を睨む。

「穿て! 『山嵐』!」

前回のタッグトーナメント以降増設したマルチロツクオンのミスイルが、集中出来ていない一夏へと迫る。しまった、と彼が目を見開いた時には既に時は遅し。

「さ、さねゆ——のああああ!」

無数の爆発に蹂躪された一夏はあっさりと撃墜、砂浜へと落下していった。グシヤリ、と嫌な音を立てて倒れた一夏へと、対戦相手——更識簪はノシノシと歩く。その顔は普段の彼女らしからぬ表情で、一言で説明してしまえば怒ってますと言わんばかりであった。

「織斑君……」

「お、おう」

「馬鹿に……してるの?」

「い、いやそんなつもりは全くなかった。ただ」

ただ、何だ。視線だけで彼の次の言葉を促すと、自分の思う通りの換装をしたかったのに出来なかったから。段々と小さくなっていく

その声を聞いて、簪はやれやれと肩を竦めた。

あの時以来一夏は度々『白式・金鳥』に頼ろうとして失敗する傾向があった。全ての能力を兼ね備えた進化形態、そんな分類であるそれを使いたくなる心理は周りの面々も重々承知であったが、しかし。

その為に著しく勝率を落としている今の状態はどうかと思う。というのも彼女達の偽らざる意見であった。

「ねえ……織斑君」

「な、何だ？」

「強い力を、持つてる……って、だけじゃ……何も出来ない、よ」

「っ。いや、分かってる、分かってるけど」

一夏のその言葉に簪はゆっくりと首を横に振る。いや、お前は分かかっていないと、口には出さずに態度で述べる。

ふう、と溜息を吐くと彼女は踵を返す。ISの勝負もいいが、今は臨海学校、海で泳ぐのも悪くない。そんなことを思いながら、とりあえず終了と天然のアーリーナを後にした。

そんな彼女の背中を見ながら、一夏は悔しそうに奥歯を噛みしめるとガクリとうなだれるのであった。

空は青く、太陽も高い。一日は、まだまだ終わらない。

「あれ？ 一夏は？」

「落ち込んでる」

砂浜へとやってきた簪は、鈴音の言葉に短くそう答えた。それで大体察した彼女は、ま、ならしょうがないかと流してしまう。それでいいの、と簪が問い掛けると、まあ別にすぐに来るでしょ、と返された。

「だってアイツ馬鹿だし」

「誰が馬鹿だ！」

「ほら」

簪が振り向くと、そこには水着姿になった一夏が。女性と違い男性は着替えるのが簡単なこともあり、後からやってきた彼は彼女に追い

付いたようであった。

その顔には先程の焦りは見付からない。吹っ切ったのだろうか、と簪は首を傾げたが、それも違うだろうと頭を振る。多分、向こうにいるのと同じ状況だろうな。そんなことを思いながら視線を一夏から海へと向けた。

「ケツの穴に手エ突っ込んで味噌汁流し込んでやりますわ!」

「ちよつとセシリアに物騒な言葉教えたの誰!」

「いや、あれは日頃心の奥底に溜まっていた負の感情が噴出しているのだろう。先程千冬さ——織斑先生に負けた悔しさは一夏の間抜ける面を見て吹っ切ったようであったが、やはりまだ完全には落ち着けることなど出来なかったというわけか。というわけで、あの言葉を教えたのは決して私ではない」

「つまりお前か箒」

「む。何故分かったのだラウラ!」

ビーチバレーで人でも殺さん勢いでアタックを放つセシリアを視界に入れつつ、簪は鈴音に尋ねた。うんそう、と簡潔な答えが返ってきて、ああやはりと一人納得する。

まあこればかりは二人共に本人の問題であるし、自分に出来ることはない。そう結論付け、彼女は一夏と騒いでいる鈴音に一言述べると本音のいる場所まで歩いて行く。基本インドア派である簪ではあるが、こういう日くらいはアウトドアを満喫するのだ。翌日のことを脇に置いて。

で、と簪が見えなくなったのを確認した鈴音は一夏に問い掛けた。何やってんのよ、と呆れたように述べるその姿を見て、一夏も少し顔を顰める。

「別に、鈴には関係ねえだろ」

「まあね。一夏がへつぽこになつてもあたしには関係ない。——と、言いたいとこだけ」

てい、と彼の鼻を指で小突いた。急なその一撃で顔を押しさえている一夏に向かい、鈴音はそのまま指を突き付ける。残念ながら、関係有るのよ。そう言いながら突き付けた指を更に近付けた。

「アンタはあたしのヒーローの一人。だから……あんまり情けない姿、見せないでよ」

「……………はっ、誰が情けないって!？」

見てろよ、と拳を彼女へ伸ばす。しっかりと使いこなしてやるから、惚れるなよ。そんなことを言い放ち、一夏は砂浜へと駆け出した。彼に気付いた女生徒達はキャイキャイと黄色い声を上げるが、無駄に高いそのテンションを見てそつと距離を取っていた。

そんな彼を待ちなさい、と鈴音が追う。ある程度距離を詰めると跳躍し、一夏の背中を足場にしてそのまま肩へと飛び乗った。うご、という悲鳴が下から聞こえたが、彼女は気にしない。

「おい鈴」

「ん？」

「痛い、すつげえ痛い」

「重いつて言わなかったのは褒めたげるわ」

「いやお前軽いし」

よつこらせ、とジジ臭い声を出しながら肩車状態の鈴音を乗せて一夏は歩く。二人分の高さを誇るそれは砂浜の中でも一際目立った。監視塔みたいだな、という一夏の言葉に、それ建物じゃない、と鈴音は笑う。

そのまま監視塔状態の二人はビーチバレーを行っている面々の場所まで歩いて行き、俺達も混ぜてくれと声を掛けた。突如現れた怪人に一同まじまじとその姿を眺め、じゃあ審判ね、と癒子が代表して言葉を紡いだ。

『なんでやねん!』

「あ、ハモった」

「いや、どう見ても審判の座っている土台だろう、それは」

「俺それ扱い!？」

「審判とかめんどいじゃん。あたしもやりたい」

「む。では誰か審判役になるか」

「いや待て何で俺は土台役に決定してんだよ」

二人追加なのだから、普通に混ざれるだろう。そんな一夏の主張に

それもそうだと頷いたラウラと癒子は、改めてチーム分けをしようと皆を見渡す。監視塔に視線を向けて、よし、と呟いた。

「じゃあ織斑君はその状態で」

「おい」

「ブロックは完璧だな」

「この状態で左右に走れと!？」

「では箒、お前はそっちのチームだ」

「こんな木偶の坊が仲間で勝てるはずあるか!」

「おい、お前ついさっきの発言もつかい言ってみろ」

「その位置ならば、いい具合にスパイクの的になりそうですわね……

ふ、ふふふふ」

「はいあたしセシリアのチームがいいです! 一夏は顔面ブロック役ね」

「顔面限定!？」

ワイワイと騒いでいるものの、結局はその通りになったことを記しておく。一夏、箒、鈴音チームとセシリア、ラウラ、癒子チーム。収まる場所はこんな感じで。

一夏の顔面は、ビーチボールと幾度と無くキスをしたそう。

ふう、と一息付いた一夏は砂浜に腰を下ろす。全力でぶつけやがって、と痛む鼻をさすりながら、海の家で買ったペットボトルのジュースに口を付けた。ビーチバレーをしていた面々も今は休憩に入ったらしく、各々別の場所へと散っている。鈴音は遠泳、癒子は他の女子達の場所、セシリアとラウラはパラソルの下で寝転がっていた。

「焼けるぞ」

炎天下の日差しは中々にキツイ。そう判断した一夏は二人のいるパラソルへと足を進める。とはいえ、それでも完全に陽の光は防げないよう、日陰にいてもジリジリと熱は肌を焼いた。

一夏の言葉にラウラは別に気にしないと述べ、セシリアはだったらサンオイルでも塗ってくださいいなどボトルを彼に手渡した。渡され

た方はしばし固まり、そしてセシリアに視線を移す。

「あ、やっぱりラウラさんお願いしますわ」

「ああ、それがいい」

「どういう意味だ」

「いえ、ちよつと目付きが……」

苦笑しながらセシリアはうつ伏せに横たわり、ラウラがその背中にサンオイルを塗っていく。見ているだけの状態になった一夏は、俺の立ち位置何なんだよとぼやいた。

その眩きに、ラウラは決まっているだろう、と返す。まあそうですわね、とセシリアも続いた。

「具体的なことを言われてないけど何だか酷いことを言われた気がするぞ」

「では聞くぞ。織斑一夏、お前はサンオイルをどう塗ろうとしていた？」

「普通に塗るっつの。まさかいきなりセシリアの尻を揉むとも思ってたのかよ」

「え？ ……揉まないのですか？」

「俺って信用されてるなあ、マイナスの方向に」

所詮男子の扱いなどこんなもんか。そう結論付けた一夏は体育座りでドナドナを口ずさむ。彼の歌声をBGMにサンオイルを塗っていた二人も、ちよつとからかい過ぎたかもしれないと頬を掻いた。無論、一通りが済んでからである。

そんな三人に声が掛かる。ん、とドナドナのループが三周目に入っていた一夏が顔を上げると、先程一緒にビーチバレーをした後どこかに消えていた白ビキニの箒の姿が。そしてその後ろには、水色と白のストライプビキニを着たウサミミと、スポーティとセクシーを兼ね備えた黒のビキニを纏った彼の姉の姿が。

三者三様の格好ではあったが、ただ一つだけ、鈴音が見たら目が据わってしまうであろう共通点があった。思わずラウラも自分の胸元に視線を落として溜息を吐いてしまうほどである。

「どうした一夏、精肉店にでも出荷されるのか？」

「あー、まあ気分はそんな感じ」

「しかしお前は可愛くないからな」

「実の弟に向かって何て言い草!？」

「じゃあいつくんに質問。私達を見た感想をどうぞ」

「おっぱいがいっぱい」

「駄目だな」

うんうん、と後ろのセシリアとラウラも頷く。さつきはああ言っていたが、結局直球のスケベではないか。そんなことを追加で考え苦笑しつつ、セシリアは三人に何かこちらに用でもあるのかと問うた。

まあな、とその問いに千冬が答え、午後の予定は空いているかと二人に尋ねる。聞き方からして、予定が無ければ千冬の用事に付き合われるのだろう。そう判断した二人は、しかし断る理由も用事もなかったので首を縦に振った。

「そうか、風やデユノア、更識と布仏にも尋ねたが、皆予定は無いらしくてな。丁度いいから少しお前等にやってもらおうと思ったんだが」

「おい先生、俺聞かれてないんだけど」

「お前は強制参加だ」

「差別!？」

文句を言いつつ、しかし一夏は断る様子はない。そんな彼を見て、束はニヤリと口角を上げ、チシャ猫のように笑った。本当にブラコンだねいつくんは。そんな発言をしつつ、じゃあこっちも対抗だ、と箒に抱き付く。

「暑っ苦しいです姉さん」

「容赦無い!？」

そうは言いつつも、箒は束を引き剥がす様子はない。そんな彼女を見て、一夏はニヤリと口角を上げて三流悪役のように笑った。そっちだってシスコン姉妹じゃないか。そんな発言をしつつ同意を求めるように姉へと顔を向けた。

馬鹿者、とチョップを食らったのたうち回る一夏を見ながら、蚊帳の外で野次馬をしていたセシリアはどっちもどっちだと肩を竦めた。まったく、と隣のラウラに同意を求めるように顔を向け。

「……うらやましいんですね、ああやって織斑先生とベタベタ出来る一夏さんが」

「へ？ はっ!? いや、そ、そんなことはないぞ。本当だぞ！ 本気と書いてマジだぞ！」

鈴音か簪のどちらかが来ないとツツコミが追い付かない。そんなことを思いながらセシリアは大きく溜息を吐いた。

昼食も終わり、時刻は午後。千冬に集められた専用機一行は、朝も使っていた天然アリーナにやってきていた。一同の前には千冬と束、そして特別講師だと紹介されたナターシャの姿がある。

それで、一体何をやるのか。一夏がそう千冬に問い掛けると、簡単なことだと笑みを浮かべた。同時に視線を一夏達から隣に向ける。

「ナターシャのIS『銀の福音』は、お前達のスタンダードなレギュレーション機体とは構造が違うが、だからといって全く相手にならないわけではない」

まあ、そうでなければ特別講師などには呼ばんがな。そう言って笑うと、隣のナターシャも薄く笑う。

そんな会話を聞いた八人は、これから行うことの大凡の予想が出来た。つまり、自分達はあの機体と勝負をするのだ。全員の意見が一致したので、では誰から行くのだろうかとお互いに顔を見合わせる。本音が一人だと無理だよとぼやいていたが、まあ仕方ないと皆で慰めた。

「何を言っている？ 勝負は『銀の福音』と、お前達全員同時だ」

は、と皆が一斉に千冬へと視線を向けた。それは一体どういう冗談だ、そう一夏が千冬へと問うたが、その表情はふざけてなどおらず、冗談などではないときっぱり言い放つ。大体、と額を指でコツコツ叩きながら、彼女は少しだけ眉を下げた。

「お前達ヒョッコなんぞまとめて戦ってもボコボコにされるのだから、一対一で戦ったら瞬殺だ。それでは何の修行にもならん」

「……言ってくれますわね」

挑発染みだその言葉に反応したのはセシリア。先程千冬に完敗したこともあってか、その目はいつも以上に獰猛さを湛えている。それに続くように、吠え面かかせてやると一夏も一歩踏み出した。更には箒とラウラが表情を引き締め真っ直ぐ前を睨み付けている。

こうなると残りの面々も腹をくくるしか無い。まあ修行は望むところだと鈴音は笑い、簪は少しだけ不安そうに頬を掻いた。本音はそんな彼女を励まし。

そしてシャルルはなるべく感情を出さないようにその環の中へと入っていった。

「決まりだな。では、行くぞ」

「行くのは私だけけどね」

そう言うと、ナターシャは千冬より数歩下がる。同時にISを展開すると、高速で空へと舞い上がった。

その姿は、さながら銀の天使。全身装甲により覆われた仮面には彼女がどんな表情を浮かべているのかは分からない。だが、機体から流れてくる賛美歌のような声が、見えないそれを表しているように思えた。

専用機持ち八人が同時にその機体を展開する。白が、紅が、青が、赤が、橙が、黒が、水が、狐が。一斉に銀を取り囲み、相手を撃墜せんとそれぞれの獲物を構えた。

最初に動いたのは、白。ビームガンを連射しながら突っ込むいつもの一夏の戦い方は、少し体をずらすだけで悉くを躲されることで重大な隙を晒してしまった。『銀の福音』の頭部後ろに装備されている巨大な翼が展開され、お返しとばかりに銃弾の雨が降り注ぐ。

「うぉあ!?!」

雨、文字通りの雨である。線でも点でもなく、面。四方八方逃げる場所などありはしないその銃撃は、その膨大な量に一瞬気を取られた一夏には既に為す術が無く。

目の前に巨大な盾が現れる。一夏を覆うように展開されたそれは、『銀の福音』の銃弾を防ぎきって尚堂々と顕在していた。

「のほほんさんナイス！ 助かった！」
「うん、でも、実はイツパイイツパイ」

『葛の葉』を自身に戻しながら本音は苦笑する。全員を守る余裕はないから、なるべく自分で頑張つてね。そう述べると、とりあえずと自身のハンドガンを『銀の福音』に放った。その隙に一夏は一度離脱し、お次は私達だと言わんばかりに紅と赤が疾駆する。

『紅椿』の二刀と、『甲龍』の二刀。それらが同時に銀の機体へと叩き込まれ、しかし直前に受け流されたことでダメージを最小限に抑えられてしまう。瞬時に『銀の福音』は距離を離し、両の翼を重ね巨大な閃光を打ち込んだ。一瞬前まで箒と鈴音のいた場所を灼き、しかしまだだと二人は飛ぶ。

左右に別れた二体を再び面制圧せんと翼を展開した『銀の福音』であつたが、別方向からのアラートでその動きを中断した。急上昇と急降下を交互に行い、飛び交うミサイルの嵐を躲していく。

「まだ、まだ……っ！ 穿て！ 『山嵐』！」

『打鉄式』の両スラスターを全て変形・展開し、以前より五割増しになったそれが先程の向こうの攻撃のお株を奪うように面制圧を行う。

ちよつと、キツイかしら。そんなことを呟きながら、ナターシャは『銀の福音』の翼、『銀の鐘（シルバーベル）』を起動させた。彼女の声と機体の声。二つの歌声が重なり、アリーナに穏やかな音色が響き渡った。

その歌声とは裏腹に、翼から放たれた銃撃は先程よりも苛烈なもの。炸裂特性を持つているらしく、『山嵐』のミサイルとすれ違つると同時に爆発し、周囲のミサイルを巻き込んで次々と爆ぜていく。爆煙により周囲の視界が著しく低下、そのことで簪は焦つて周囲を見渡してしまう。

「La……」

「しまっ……っ！」

頭上を取られた。そう気付いた時にはもう遅い。相手は射撃体勢に入っている。対して、自分は動けない。

紫電が飛ぶ。同時に黒が空を駆けた。『シユヴァルツエア・レーゲン』のレールカノンで簪への攻撃をキャンセルし、同時に自身の間合いへと引き込む。『停止結界』を叩き込めば、いくら相手が高速機動に優れていてもどうにもなるまい。そう判断したラウラは。

「下！」

「ちい！」

『銀の福音』本体とは異なる意志があるかのように展開し砲門を広げた翼を見て瞬時に高度を下げた。銃撃の嵐は一区画に降り注ぎ、しかし尚もその暴風域を広げようとしているのを見てラウラは顔を顰めた。

「私達を」

「忘れてもらっちゃ困るのよ！」

再び飛び交う紅と赤の閃光。一直線に向かうそれは先程と同じで、芸の無いその攻撃はいとも容易く迎撃される。

その直前、真っ直ぐ高速で飛んでいた二つの流星は曲線軌道を描く。

「行くぞ鈴！ 人呼んで——」

「篠ノ之スペシャル！ ってか！」

背後を取った。箒の太刀と鈴音の『双天牙月』、二つの刃が『銀の福音』の翼をへし折らんと振り抜かれる。躲しようのない必殺の一撃、そう二人は確信したが、しかし。

ダンスを踊るように回転し、二人の刃を受け止めた。同時に翼を變形、近接ブレードのようにそれを振り被った。胴に大剣の一撃を叩き込まれ、そのまま二人は吹き飛んでいく。

「箒！ 鈴！ ちつくしよう！」

「ダメよ弟君。熱くなったら負けるわ」

勢いに任せて飛び出した一夏のビームブレードを先程と同じように受け止め、ナターシャは仮面の下で微笑む。そういう真っ直ぐな子は嫌いじゃないけどね。そんなことを呟きながら、同じように近接用に変形させた翼で一夏を切り裂かんと。

「させない」

両の手に持ったアサルトライフルを連射する。手を離し間合いを取った『銀の福音』と『白式』の間に割りこむように、『ラファール・リヴァイブ・カスタムⅡ』が舞う。次々に武器を変えながら、向こうに的を絞らせないように弾幕を形成していた。

そんな二人に意識が集中した、というタイミングで、再びラウラと簪がレールカノンと『春雷』を放つ。シャルルの弾幕とは違い一撃一撃の威力の高いそれはそう簡単には被弾出来ない。手数が少ない為に普通に放つては向こうの機動で簡単に躲かれてしまうそれを、闇討ち気味のタイミングで撃つ。

「これでも駄目か」

「速い……でも」

速さなら、この中の誰よりも優れた人がいる。相手が回避動作をしたその瞬間、真つ直ぐにビームが叩き込まれる。突然の銃撃に一瞬動きが止まったのを見逃さず、閃光は再び『銀の福音』へと吸い込まれるように放たれた。

何事、とハイパーセンサーで確認したナターシャは、その相手を見て思わず口笛を吹いた。先程千冬と戦った時に見せたあの技、誰よりも速く撃つ、その極み。

この一瞬の為だけに、己の集中力を全てつぎ込んだ『ブルー・テイアーズ』、セシリア・オルコットがそこにいた。バイタルを一定に保つ機能があるはずのISを纏って尚汗だくのその顔が、どれほど彼女が全身全霊を懸けていたかを物語っている。紛れも無くあの一撃は、己の限界を超えた『クイツクドロウ』であった。

だが、しかし。

「――届きませんか」

左腕。損傷しているのはその部分だ。眉間と心臓を狙ったはずの射撃は、完全に命中することは能わなかった。その射撃に全てを懸けていたセシリアは、『銀の福音』の返す刀の攻撃を躲す力など残っておらず。

危ない、と『葛の葉』を飛ばそうとしている本音を手で制した。その意図を察した彼女は不満げに頬を膨らませ、撃墜されるセシリアを

背に残っている面々に盾を飛ばす。

それを待つていたかのように、『銀の福音』は高速移動と広域殲滅を開始した。縦横無尽に飛び回り、周囲を埋め尽くすほどの弾幕を形成する。受け切ることも、躲すことも。その両方を不可能だと思わせるそれは、すなわち相手が勝負を決めに来ている証拠でもあり。

「今が、チャンスか」

「とは、言っても……」

一夏は『真雪』の装甲も合わせて弾幕に耐えているが、他の面々はそうはいかない。本音の『葛の葉』は確かに防御性能は随一だが、ここまでの広範囲だと一つの盾だけではカバーしきれず、かといって盾を誰かに集中させるといふことは他の誰かを見捨てるということに他ならず。

「仕方ないか……布仏本音！」

「うえ!？」

「私の盾を他に回せ。二枚ならば多少はどうにかなるはずだ」

「でもでもっ！ そしたらボーちゃんが！」

「私はどうとでもなる！ 後毎回言ってるが——」

それは鼻水垂らした幼稚園児みたいだからやめろ。そう言いながらラウラは『銀の福音』へとワイヤーブレードを投擲した。触れた部分が次々爆発し、その爆風によつて彼女へと向かう弾を掻き消していく。そのまま出来た空間へと突進、『停止結界』を『銀の福音』へと今度こそ叩き込まんと腕を振り上げる。

「……まあ、予測の範囲内か」

「ええ、そうね」

爆煙の先では『銀の鐘』をチャージしているナターシャが待ち構えていた。ラウラが『停止結界』を発動するよりも速く、向こうは彼女を撃ち抜くだろう。

だが、ラウラはそれでも笑みを絶やさない。自分が墜とされても、終わりではない。そう信賴しているからだ。

巨大な閃光に飲み込まれたラウラの影から飛び出してきたのは、橙。左手のシールドをパージし展開したそれを、全力で相手へと叩き

込む。

『盾——』

「Shit!」

「——殺し——!」

セシリアに撃ち抜かれて動かなくなっていた左手を無理やり前に突き出す。パイルバンカーが炸裂し、左手の装甲がまとめて弾け飛んだ。が、ナターシャ本体、『銀の福音』は未だ健在。あーあ、と苦い顔を浮かべたシャルルを吹き飛ばすと、残りの三人の姿を探す。

再び無数のロックオン。やってくれる、と笑みを浮かべたナターシャは、ボロボロの左腕を無理矢理組み直し、再び高速移動と広域殲滅を開始した。ミサイルと弾幕がぶつかり合い無数の爆発が起こる。その爆煙の中を飛びつつ、恐らく向こうが決めに来るなら今だ、と彼女は確信していた。

「うおおおお!」

「たああああ!」

大刀を構えた『白式・飛泉』、薙刀『夢現』を構えた『打鉄式』。本音の『葛の葉』で攻撃を防いでいるからこそ出来る強引な攻めで、『銀の福音』を切り裂かんと獲物を振り被る。狙うは首、そして、胴。一気に勝負を決めるのなら、そこしかない。二度目がない以上、他の部位では浅いのだ。

それが分かっているからこそ。

「うん、惜しかったわ」

『銀の鐘』を盾のように構え、それぞれの部分に展開する。二人の武器は開かれた砲門から形成された刃によって受け止められ、そして、ゼロ距離からチャージの済んでいる砲撃が放たれる。

吹き飛び倒れた二人を見て本音は降参。一対八の勝負は、千冬の予想以上に健闘したものの、結局『銀の福音』の勝利と相成るのであった。

「チフユ。ちよつと流石に次はキツイわ」

「そうかもしれないな。まさかこうも上手く行くとは」

そう言つて二人は笑う。彼女達の予想以上に、一行は戦闘中のレベルアップを果たしてくれた。それが千冬には楽しくて仕方ないようで、先程から彼女は終始笑顔である。

いつか自分を追い越してくれるかもしれない。そんな思いが湧き上がると同時に、決して抜かせはしないという対抗心が同時に湧いてくる。それが彼女にとってたまらなく楽しいのだ。

「後進を育てるのもいいけど。まずは目の前の相手よ、チフユ」

「分かつてるさ。お前と全力で戦うのがこの臨海学校の一番の楽しみだからな」

そんなことを言いながら、二人は顔を見合わせ笑った。

撃墜されている生徒をほったらかして、である。

「うへえ……これ結構時間掛かるよ」

「あ……ごめんなさい、姉さん」

「箒ちゃんが謝ることじゃないよ。勿論他のみんなもね。ま、それに」
明日には全機直つてるから大丈夫。そう言つてブイサインを向ける束を見て、箒はやはり自分の姉は頼もしいな、と思うのであった。

決して口には出さないが。

N034 「やめます」

夕日もそろそろ沈むかといった黄昏時の終わり。海の見える旅館の庭園にて、一人の少年が壁に背を預け佇んでいた。どうやら誰かと通信を行っているようであり、その表情はあまり芳しくない。

『それで、ちゃんと打ち込んだのか？』

「……左腕にしっかりと。セシリア・オルコットの射撃のお陰で苦もなくやれたよ」

『それはそれは』

呵呵、と通信の向こう側は笑う。どうやら杞憂だったようだ、と言述べると、じゃあ後はこちらに任せておけと続ける。

それを聞いて、特に反論することなく彼は頷いた。

「どのみち『僕』の機体は現在修理中、ということになっているからね。出しゃばろうにも出しゃばれない」

『ああそうだな。あっちの機体は修理中だよな』

「……流石に臨海学校の真っ最中に出撃は危険だと思っただけだね」

『そりやそうだ。はっ、まあ私も別にそこをお前に期待なんぞしちやいねえよ』

精々見学でもしてな、その言葉と共に通信は打ち切られた。ふう、と溜息を吐いた彼はほんの少しだけ空を仰ぎ、壁から離れると歩みを進める。確かそろそろ夕食の時間だ。

「さて、と。……臨海学校、楽しみますか」

今回の私はただの一生徒、シャルル・デュノアなのだから。そんな彼の呟きは、夏の空気に溶けて消えた。

「飯だ！」

おお、と何故かテンションを上げながら座布団の上に座るのは毎度お馴染み織斑一夏。その右隣にはやれやれと肩を竦めながら彼の幼馴染である篠ノ之箒がストンと座る。お前は小学生か、という彼女のツツコミに、今この場はそれでも構わんと彼は返した。

「だってほれ、これ見ろよ。刺身だぜ、カワハギだぜ!? 本わさだぜ!? 普通に食おうとしたらいくら掛かるんだっての!」

「成程。確かにそれは一理あるな。よし、では私もテンションを」「やめれ」

箸の隣、どつこらしよとどこかババ臭い動作で座った鈴音がそんな箸を制止する。そのさらに横では箸が同じようにテンションを上げようとしていた本音を咎めているところであった。

食事くらい静かに出来んのか、と一夏の左隣の一つ隣に座っているラウラが呆れたようにそう述べた。浴衣に正座で刺身を摘むその仕草は、日本人ではないその見た目のアンバランスさが伴いどこか可愛らしく見える。

「セシリアを見ろ。英国淑女らしく落ち着いた佇まいでだな——」
「……………あ」

視線を向けたその先、一夏の左隣に座っているその少女は明らかに大丈夫そうではない表情で食事の膳を睨んでいた。その手は全く動いておらず、半ば瞳孔の開きかけている目だけがギラギラと輝いている。

ラウラはそんなセシリアからそっと目を逸らした。コホン、と咳払いを一つすると、少し離れた場所に座っているシャルルを指差し、あれくらいの落ち着きを見せろと先程と同じような言葉を述べる。どうやら隣は見なかったことにしたらしい。

「あー、つと。セシリア?」

「……………はい?」

「正座、苦手なんだな」

ギロリと彼女は一夏を睨む。瞳孔の開いたその目が明らかに肯定だと述べていたが、しかしセシリアから出た言葉は否定であった。そんなはずないだろう、このセシリア・オルコットが正座程度に屈するはずはない。そう宣言し、油の切れたブリキロボのような動きで味噌汁の椀を手に取り、一口啜る。それをそっと膳に置くと、ほっとしたように息を吐いた。

「つと」

「うふおあああ!?!」

「今明らかにセシリアが発してはいけない叫びが出たな」

「というか、女性の素足を躊躇いなく突く一夏のアレっぷりを問題視しなさいよ」

「何しやがりますか一夏さん!」

「いや、大丈夫って言ったし?」

そういう問題じゃない、とセシリアは痺れて動かない下半身を残したまま器用に横を向くと一夏の胸ぐらを掴み上げた。その目は若干涙目であり、どうやら正座している足の裏を突かれたのが相当堪えられない。流石に一夏も悪いと思ったのか、そんな彼女に向かい素直に頭を下げた。

まったく、と正座を少しだけ崩しながら溜息を吐いたセシリアは、何事もなかったかのように食事を再開した。どうやら我慢しているのが馬鹿らしくなったらしい。

「まあ、確かに日本人以外では正座で食事というのは少々厳しいやもしれん」

「そうね」

「お前中国人だろ」

「そうかもしれないな」

「お前ドイツ人だろ!」

一夏の言葉を聞き流しながら、鈴音もラウラも食事を続ける。叫んでもしようがないと思っただのか、一夏も一瞬だけ眉を顰めると目の前の膳を攻略しに取り掛かった。

刺身を口に運び、滅多に味わえないそれに舌鼓を打つ。続いて腕に手を伸ばし、鍋の味に感心した。

それをしながら、ふと視線を教員の集まっている場所へと向けた。そこで談笑している彼の姉と、我関せずと食事をしているその親友を見やる。千冬はともかく、他の教員の雰囲気から束の扱いに少々困っているのが見て取れた。

「なあ箒」

「駄目だ」

「まだ何も言っていないぞ」

「姉さんをここに呼ぶと阿鼻叫喚になる」

「……それもそうか」

まあ後でゲームとかに誘おう。そう結論付けた一夏はそのまま食事に集中するのだった。

食事も済み、さてでは自由時間と相成った一日目の夜。貸し切りとなった旅館のロビーの一角でワイワイと騒いでいる男女の集団がいた。言わずもがな、一夏達である。傍らには多種多様な飲み物が置かれており、その中には未成年が飲んではいけないものも鎮座していた。

「へーい！ この天災に勝とうたあ二万飛んで三十五年早い！」
「むむむ……」

その未成年が飲んではいけない飲料をがぶ飲みしながら妹を叩きのめしているウサミミを付けた女性は、テーブルに五枚のカードを並べながら勝ち誇っている。そのカード、トランプに記されている絵柄は、見紛うことなくロイヤルストレートフラッシュであった。

「これで箒ちゃんは一日バニーで過ごすことにけつてーい！」
「ぐ、ぐぐ……」

トランプを潰さん勢いで握りしめ肩を震わせている箒を見ながら、まあそりゃそうなるだろと一夏は肩を竦めた。そもそもいきなり事件を持ちかけて賭けを始める時点で予想がつく。それに気付いた彼とその他の女性陣は早々と降り、結果として目の前の光景があるわけだ。

納得いかん、と箒は持っていたトランプを叩きつけながら叫んだ。今度はこれで勝負だと傍らに置いてあったダンボールから一つの箱を取り出すとテーブルに広げる。別にいいよ、と束は了承し、他の面々も参加するように声を掛ける。

「あ、これ人狼？」

「ワンナイト人狼だ。すぐさま勝負を決めるのには丁度いい」

そう述べ場にいる面々に適当にカードを渡す。今度こそ勝つ、と息巻いている籌を見ながら、一夏はやれやれと苦笑した。何だかんだで負けず嫌いですわね、というセシリアの言葉に、まあそりゃあな、と彼は返した。

参加している面々は一夏、籌、鈴音、セシリア、ラウラ、シャルル、そして束。簪はこの手のゲームは苦手だと判定役に回り、本音がそれに付随した。

「んじや、始めようか」

それぞれのカードを皆が見る。この中にいる仲間に見せ掛けた敵を見付け出すこと、それが勝利へ繋がるのだ。

何を持っているのかを相手に悟られないように、それぞれゆっくりとカードを伏せる。そんな中、一人の少年は少しだけ口角を上げた。彼の持っているカードは人狼、すなわち皆の中に紛れた敵。

こんなゲームにすら後ろ指差されるんだ。思わずそんなことを考え、しかしすぐに捨て去った。何を今更、元々自分は敵だった。ここにいる面々と仲良くする気など毛頭ない。

その、はずだ。

「あたし占い師だったのよ。で、一夏が人狼」

「はあ!? 占い師は俺だっつの。ラウラは村人だったぞ」

「確かに私は村人だ。ということとは」

「いえ、案外お二人共人狼で、こうすることで敢えて疑いの目を逸らしているのかも」

紛れ込んでいる敵はここにいるのに、疑いもしない。何とも呑気な連中だ。このままでは人狼に村が滅ぼされてしまうというのに、本物を見付け出す手掛かりすら掴めていない。

やれやれ、と表情には出さずに肩を竦めたシャルルは、何事もなかったかのように皆の会話に参加した。

「どちらにせよ片方が人狼なら問題がない。両吊りといこう」

「籌の鬼!」

「何とでも言え。私は姉さんに勝てればそれでいい」

「……同じチームなら、勝ち負け……ないんじや?」

「あ」

簪の言葉に箒ははっとしたような表情を浮かべる。それを見た束は自分は村人だとしてつもなく意地の悪い笑みを浮かべた。

「姉さんを処刑しましょう」

「束さんは箒ちゃんの味方だつて言ってるじゃん!」

「信用出来ません。なら、姉さんは一体誰が怪しいと?」

「ん? そうだね」

ぐるり、とその大きな瞳を動かすと、束は一人の少年へと視線を向けた。咄嗟の事で思わず体を硬直させてしまったシャルルを見てニコリと微笑むと、彼女は箒に視線を戻す。そして、この子この子と彼を指差した。

「デュノアが? そんな素振りは微塵も」

「うん。そういう素振りを皆に見せないっていうのは、やっぱり怪しいよね」

射竦められた気がした。その言葉はゲームのことを言っているのではなく、自分自身の本当を言い当てているように聞こえて、シャルルは思わず息を呑む。困ったように笑いながら、しかし内心では舌打ちをした。こんなことで厄介な相手に目を付けられるなんて、と。

「じゃあ——」

さてでは投票を、となった瞬間。旅館の中へ爆音が響き渡った。何だ、と音のした方向へ視線を向けると、海岸の方で何やら光が見える。昼間、一夏達も使用した天然のアーリーナ。その辺りから空に向かって何か飛び立つのが見えた。最初は高速で一つ、そしてそれを追い掛けるように真っ直ぐ突き進むものがもう一つ。

何だあれ、と一夏は呟く。他の面々も同じような状態の中、いち早く行動を起こしたのは束であった。すぐさま頭部のウサミミで千冬に連絡を取り、現状を尋ねる。その表情が真剣なものに変わったのを見て、その場にいた一同は只ならぬ空気を感じ取り体をこわばらせた。

「……箒ちゃん、いっくん。場所を移すよ」

名指しで二人を呼ぶ。それはつまり『しののの』の活動を意味し、残りの面々は関わるなどという意味表示でもあった。こちらに来るなどという拒絶の行動であった。

だから、その場にいた中の二人は、迷うことなく嘗めるなど一歩踏み出していた。

「東さん、あたしも行く！」

「篠ノ之博士、わたくしも参加いたしますわ」

凰鈴音とセシリア・オルコット。彼女達がそう述べたのを聞いた東はゆっくりと振り返り、まあ予想通りだと肩を竦めた。そして、駄目だと即答する。

「どうして!？」

「君達はいつくくんや箒ちゃんの友達だけど、『しののの』じゃない。それも、代表候補生なんて肩書付き。汚れ仕事をするには綺麗過ぎる」
淡々と、そして普段彼女達に向けない瞳で。東は二人にそう述べる。まあ今回は旅館の護衛でもしてよ、と話を終えると彼女は再び視線を前に向けた。

まあ仕方ない、と肩を竦めたのはラウラ。手助け出来ないのは歯痒いがと続けながら、行こうかと二人に声を掛けた。簪も、本音も、そしてシャルルも。そんなラウラに従うように少しだけ後ろに下がる。

そして勿論、鈴音とセシリアは尚も前に踏み出した。

「あたしゴーレムと戦ったし! もう巻き込まれたから大丈夫！」

「わたくしもあの事件の際に関係者になりましたわ。今更です」

絶対引かない、と言わんばかりに仁王立ちする二人の声を聞き、一夏と箒はどうしたものかと頬を掻く。そして東は再度振り向くことなく、あのね、とどこか諭すように言葉を紡いだ。

「世界は平等じゃないんだよ。光を目一杯浴びてる君達が、ちよつと影を見たからつてそこへ行けると思ったら大間違いだ」

分かったらさっさと向こうに行け。言外にそう述べながら東は足を踏み出す。もう話すことなどないと足を進める。少しだけ迷ったが、一夏と箒もそれに続こうと二人から視線を外した。

「なら」

短く、小さな声。しかしそれは三人の足を止めるに足る意思の籠もった言葉であった。

そんな三人を見ているのか見ていないのか。その言葉を発した人物は、凰鈴音は真っ直ぐに前を向き、はつきりと言いつつ放った。迷うことなく、言い切った。

「やめます。あたし、代表候補生なんかやめる」

束を除く全員が思わず彼女を見た。何を言っているのか、と鈴音を見た。だが、彼女はそのまま真っ直ぐに束を見詰め、その言葉に嘘偽りがないことをその身で示している。

誰も言葉を発しなくなつてどのくらい経つたであろうか。数分かもしれない、一瞬かもしれない。彼女の隣に立っていた少女は突如笑い出すと、流石は鈴さんですわと肩を叩いた。

「では、このセシリア・オルコットも代表候補生を辞退いたしましたしよろう」

笑いながら、しかし一切の冗談なく彼女は言い切った。立て続けのその言葉に面食らつた一同は事態についていけずにただただポカんとするばかり。胸を張っている二人を見ながら、何か言うことも出来ない。

それでも尚表情を崩さなかつた束は、ここでようやく振り向いた。どこか冷たい、品物を見定めるような目で、一つ質問をするよと彼女達に尋ねる。

「そこに至つた理由は？」

「あたしは一夏達の手助けをする為にISパイロットになつたんだから、それが出来ない肩書なんか要らない」

「友人の手助けの枷となる肩書など、オルコットの恥にしかありませんわ」

どうだと言わんばかりに言い切つた二人を見た束は、そこで表情を普段の飄々としたものに戻した。心底楽しそうに笑うと、じゃあ二人もついてきて、と手招きをする。

その言葉に表情を輝かせた鈴音とセシリアは、了解と駆け足で三人に追い付いた。

「じゃあ、眼鏡おっぱい先生にはこっちから知らせておくから、後よろしく」

半ば呆れたような表情を浮かべていたラウラを筆頭にした残りの面々にそう伝えると、彼女は四人の戦力を伴って廊下を歩く。

『しののの』のトップとして、道を歩く。

「じゃあ現状を説明するよ」

教員部屋の一つ、千冬と束にあてがわれたその場所で、彼女はそう言って簡易ディスプレイを起動させた。そこに映るのは、二つの光。片や彼等がよく知っている桜色のISで、片や彼等が少し前にコテンパンにのされた白銀の機体。

『暮桜』と『銀の福音』？　これがどうしたんだ？」

「今この二機はアリーナでも何でもない海上で戦闘中」

この意味が分かるな、と束は四人を見た。一夏も箒もセシリアも、一瞬理解が遅れた鈴音ですら、何かを尋ねることなく思わず息を呑む。あの二人がわざわざ条約違反になるような行動を自分から起こすとは考えられない。つまり。

「つい先程、『暮桜』と模擬戦中だった『銀の福音』が突如暴走。パイロットの応答はなし、現在被害を抑えるために『暮桜』が該当機体と交戦中」

「……原因は？」

「分かっていたら苦労しない、と言いたいところだけど。まあ束さんに掛かればすぐさ」

ディスプレイの表示が変わる。旅館周辺の地図が映しだされ、入江の洞窟らしき場所に点灯する光が表示されていた。

あれが今回の原因だ。そう述べると、つまりはそういうことだと彼女は笑みを浮かべた。お前達の仕事は、『暮桜』のサポートでもなければ『銀の福音』をどうにかすることでもなく。

「そこにある原因を排除、でいいのですわね？」

「そういうこと。物分かりのいい子は好きだよ」

セシリアの言葉にニヤリと笑った束は、じゃあ早速行ってもらおうと立ち上がる。勿論と四人は立ち上がり、しかしふと思いついたことがあり動きを止めた。

「そういえば、昼間破壊された機体の修理が終わってないのではないかと。」

「やれやれ。君達はこの束さんを何だと思っているのだね」

ほれ、と待機状態になっているISを投げて寄越す。身に付け状態の確認をすると、成程確かに万全の状態にチューニングされていた。

緊急事態だからさつきちやちやつとね。そんなことを言いながら笑う束は、時間がないから急いだ急いだと部屋から追い出しに掛かった。別段留まる理由のない四人はそのまま部屋の外に出て、そして急いで玄関まで駆け抜ける。

途中見回りの教師に走るなど咎められたが、そんなこと知ったことではないと彼等は外に飛び出した。そしてすぐさまISを展開すると、先程表示されたポイントに向かうためにスラスターを吹かす。

「それで、その原因って何なんだ？」

その途中で一夏は束にそう尋ねた。問われた彼女はまあ大したものじゃないけど、と前置きすると、残りにも聞こえるように通信を繋ぐ。

『ISを操るコンピューターウイルス。発生装置だけがそこにあるってことはないだろうから、きつとそういう能力を持った機体が相手だろうね』

それは十分大したことだ、と四人が四人共思ったが、まあ彼女だから仕方ないと諦めた。

ともあれ相手の能力が分かっているのならば、それを見越した戦略を立てれば何の問題もない。さしあたっては相手の能力の範囲や条件などを考察し、しかるのち奇襲等を用いて一気に殲滅する。そんな道筋を立てたセシリアは残りの面々に顔を向け。

「……しまった。脳筋しかいませんわ……」

「おいバカにされてるぞ箒、鈴」

「お前だ一夏」

「アンタよ一夏」

駄目かもしれない。ほんの少しだけセシリアはそう思った。

N035 「操り人形になるのは、誰？」

海上で二つの機体が舞う。白銀の天使はその羽根を広げ、目の前の相手を蹂躪せんと無数の弾丸を生み出した。それらは防ぐことも避けることもままならないほどの、そんな密度で。

対する相手はそんな弾幕を手にした刀で弾き飛ばした。数合で使え物にならなくなったそれを投げ捨てすぐさま新たな刃を取り出し、再び弾く。幾度と無く繰り返し、結局彼女はそこから動くことなく弾幕を受けきった。

ふん、と彼女は鼻を鳴らす。こんなことは当たり前だと白銀を睨む。どこかつまらなそうな表情を浮かべ、しかし次の瞬間には真剣な顔に戻し。

「とつとと正気に戻れナターシャ！」

瞬時に距離を詰めると、持っている刀ではなく、その拳で殴り飛ばした。その衝撃でグラリと体勢が後ろに傾く『銀の福音』の肩を掴むと、まだまだとそのまま投げ飛ばす。スラスターで姿勢制御をすることも能わず、福音はそのまま盛大な水飛沫を上げて海へと沈んでいった。

暫くその海面を見詰めていた千冬は、あくまで視線を外すことなく通信を行う。相手は彼女の親友にして、彼女の所属する組織の一応のトップ。能天気のようにいて真剣味を帯びているその声を聞いて、千冬は少しだけ表情を緩めた。

「束、状況はどうなっている？」

『現在』『しのの』のエージェント四人が原因をぶっ潰しに向かっくてるよ。それまでにそっちの対処が終わるならそれでもいいって感じかな』

「さてな。どうなるかは——」

そこで彼女は言葉を止めた。今こいつは何と言った。一夏と箒は合わせて二人にしかならない。にも拘らず四人と言ったのは、つまり。

「誰だ、こんな厄介事に首を突っ込んだ馬鹿者は」

『鈴ちゃん和金髪縦ロールちゃんの二人』

「分かった。後で説教だ」

『お手柔らかにね』

「お前もだ束」

『なして!?! 束さんはあの二人の覚悟を酌んでやっただけじゃん!?!』

そのままギャーギャーと通信で騒ぐ束に、千冬は少し黙れと返した。そのことで更に文句を言おうとした束は、休憩が終わったという彼女の言葉で口を噤む。

巨大な水柱を立て、水の滴る『銀の福音』が姿を現した。その機体には傷らしい物は見当たらず、フルフェイスでパイロットの表情が分からないままゆっくりと千冬に向き直る。翼を広げ、そこから再び砲門を展開し、先程と同じように無数の銃弾を降り注ぐ。

何も考えていないように。操り人形のように。

「そんなものでこの私がどうにかなると思っているのか?」

先程放り投げた刀が再び手に舞い戻る。弾き、投げ捨て、拾い、弾く。予定調和のように行われたそれは、目の前の銀色には何の動揺も起こさない。それが分かっているからこそ、千冬も動きはそのまま表情だけをどんとどんと苛ついたものに変えていく。

「……そうだな、お前も説教の対象だ」

言葉と同時に刀を投擲。弾幕を切り裂きながら飛来するそれを、『銀の福音』は躲さない。声も発さず、迎撃のために銃弾を撃ちこむだけだ。

その衝撃で明後日の方向に飛んで行く二振りを見向きもせず、その銀の仮面は真っ直ぐに目の前の相手を見据える。見据えようとする。が、既に相手の姿はそこにはなく。

「どこを見ている馬鹿者。ナターシヤならすぐに反応するぞ」

その弾き飛ばした刀を足場に立つ『暮桜』を視界に捉えた時には、千冬は既に白い日本刀型の近接ブレードを居合に構えているところであった。

四人の目の前にぼつかり空いているその洞窟は、まるで怪物の大口のようにも見えた。おそらく昼間ならば観光スポットとして親しまれているのだろう。夜は夜で肝試しに使われることもあるかもしれない。

だが、今この瞬間は、得体の知れない何かが潜む空間でしかなかった。普段のそれは、全て塗り潰されていた。

「うし、んじや行くか」

それでも尚一夏は軽い調子で述べる。傍らにいる箒はまあそうだなと軽く述べ、鈴音もそうねと頷く。唯一セシリアだけがその言葉に苦い表情を見せた。

一応相手の隠し球だと思われる能力はバレている。だが、それはあくまでそういう能力を搭載している機体がいるという程度でしかなく、それ以外の能力は未だ不明。束に尋ねても細かいところまでは面倒見きれないと返された。

『ごつちはごつちでちーちゃんのパオローしてるし。まあウイルスなんだから感染しないように気を付けてね』

肝心の感染経路が不明であるが、確かにそこには注意しなくてはいけない部分だ。四人はその言葉に頷くと、夜の闇に覆われたその洞窟へと侵入していった。

とはいえ、現状彼等はISを展開している。ハイパーセンサーによって暗闇であろうともどんな地形であるか、どのような生物がいるかなどを正確にコンソールに映し出した。

「で、束さん。相手はこの奥にいるってことで間違いないんだよね？」

『うん。そのまま——』

そのまま暗闇の洞窟を進んでいると、突如通信が途絶えた。ん、と少し首を傾げながら一夏は再び束に通信を送るが、先程とは違い何の反応も返ってこない。隣を見ると、同じことを試したのか箒も黙って首を横に振っていた。

ウイルス、ということであるが、直接作用せずとも通信障害などを起こすことも可能な代物なのかもしれない。そう判断したセシリア

は三人にそれを告げようと口を開き。

「これは!？」

「うお!? 何か視界が急に真っ暗になったぞ」

「一夏もか。私もそうだ」

「あたしも」

ハイパーセンサーによって映し出されていた周囲の状況が一瞬にして見えなくなった。コンソールの操作を行っても、出てくるのはエラーの文字のみ。四人が四人共にその行動を繰り返し、そして暗闇で誰かは分からないが舌打ちと悪態が聞こえた。

周囲を見渡す。が、通常の人間の視覚でしか状況を捉えられない今、そこに映るのは黒で塗り潰された空間のみ。視界の隅で流れているエラーログが目を開いているということを感じさせる唯一の証であった。

「束さんと連絡も取れない。で、ハイパーセンサーも潰されて動けない。これ、マズいぞ」

「八方塞がり、か……?」

「ある程度進んだところでこの状況を作り上げた向こうの作戦勝ちですわね。……これでは戻ることすらままなりません」

どうする、とセシリアは唇を噛む。こういう状況こそ冷静な判断力がものをいう筈だ。そして、少なくともこここの面々の中でその役目を担えるのは自分のみ。あれだけ啖呵を切って参加したのだ、ここで無様に立ち尽くす訳にはいかない。

『ブルー・ティアーズ!』

背部に装着されていたBT兵器を展開、自身の操作の及ぶ限界まで一気に遠距離へと飛ばした。一体何を、と恐らく彼女の方を見たであろう三人に静かにするよう述べ、彼女は飛ばした四基のビットの位置を探る。直線的に移動させながら、周囲の障害物の位置を探る。

現在いる場所は、どうやら細長い通路。反転した記憶はない事を考えて、道なりに進むことで今回の犯人の場所へと向かうことが出来る。そこまでを判断したセシリアは、周囲にいるであろう三人にそのデータを飛ばした。至近距離であれば通信は可能らしく、それを確認

した彼女はふうと安堵の息を漏らした。

そのデータを貰った一夏達はセシリアの先導で通路をゆつくりと進み、ある程度進んだ先で再び索敵、を繰り返す。数回繰り返したところで、周囲の反応が今まで違うものに変わった。

通路ではない、ある程度開けた空間である、と。

「……これ以上は、この方法では探り切れませんわね」

苦々しげにセシリアは呟く。分かるのは自分達が来た入り口とも言える通路の位置のみ。この暗黒の空間ではそれだけでもかなり有用ではあるが、生憎それだけでは現在の状況を打破する基準値に満たない。

「ここが一番奥、ってわけじゃないの？」

「それならば話は早いが……」

「せめて洞窟のマップがあればなあ」

それを貰い忘れているのは完全なる彼等の失態であった。行き当たりばったり、現状のデータで何とかする。そんな普段の行いが完全に裏目に出た形だ。

とはいえ、どちらにせよやることは一つであり、ここを進み目標を撃破するという一点のみだ。無論、やれるかどうかは考慮していない。

とりあえず前に進んでみよう。そんな鈴音の言葉にそうだなと頷いた箒は黒一色の視界の中ゆつくりとスラスターを前に吹かす。少し遅れて、音を頼りに鈴音も真っ直ぐに空間を進む。俺も俺も、と一夏が続き、最後に少し呆れ顔でセシリアが続いた。

景色が変わらず、本当に進んでいるのかも分からない。だがこれ以上勢いをつけてしまうと、場合によっては壁に激突、混乱のまま自身の平衡感覚さえ失いかねない。あくまでゆつくりと、何が起こるかを警戒しながら手探りで。

瞬間、一夏の背中に悪寒が走った。下に落ちろ、と大声で叫び、自身は正確な方角を確認できないまま嫌な予感がした方へと盾を向ける。

「一夏！」

「一夏さん!？」

「大丈夫なの!？」

盾に射撃が被弾した衝撃で火花が飛ぶ。一瞬だけ洞窟を照らし、そして再び暗闇に戻したそれは、彼等の警戒心を高めるのには充分であった。

周囲を見渡す。何かが見えるわけでもなく、相手の声も次の攻撃もない。それが却って不気味さを増し、四人の精神力をすり減らしている。

「……そういや、何かそんな拷問があつたつて聞いたことあるな」

実際体験してみるとよく分かる。これは、確実に危険だ。そんなことを思いながら、しかし一夏はどうか状況を打破しようと視線を巡らせる。どこを見ても真つ黒のそれを見て、何かないかと鍵を探す。

「あーもう！ 分かんねえよ！」

「まあ、そうだろう」

「一夏が何か見付けられるとは思ってないわよ」

「お前等も同じだろうが！」

確かにそうだと暗闇で見えないのをいいことにセシリアはうんうんと頷く。が、今現在は自分も同じような役立たずであることを思い出し項垂れた。先程思った不安が、再び彼女の頭をよぎり、その気持ちを沈めていく。

が、それをすぐに闘志へと変えたセシリアは、顔を上げると一夏に向かい声を張り上げた。何だ、という彼の返答を聞き、少し尋ねたいことがあると続ける。

「相手の射撃、予想出来ますか？」

「……直前になって、勘でもいいなら」

出来ないとは言わなかった。それだけで充分、とセシリアは笑う。ちやんと言葉で伝えてくださいねと述べると、大きく息を吸い、そして目を閉じた。暗闇から暗闇へ、何も変わらないように思えるその変化の中、彼女は自身の内に意識を集中させる。

見えないなりに何かを行っていると感じた筈と鈴音は、その邪魔にならないようにと少し後ろに下がった。それがきちんと果たせて

いるかどうかは分からないが、少なくともぼさつと突っ立っているよりはマシだ。そう二人は判断した。

真つ暗な空間で、反響する自然の音がやけに大きく響く。そんな中、一夏は何か反応した。来る、と感じた。

「左！」

正確な方向は分からない、ただ漠然とそちらの方だとしか言えない。そんな彼の叫びであったが、しかしセシリアはそれを聞いて口角を上げた。目を閉じたまま、言われた方向に意識を向ける。

刹那、閃光が走った。相手の放った射撃の寸分違わぬそこへ、セシリアは自身の射撃を放った。ビームの光が洞窟をわずかに照らし、そしてその向かう先に着弾したことで一際それは輝く。

放たれたビームによつて打ち抜かれたそれは、相手が持っていたと思われる射撃兵器はそれにより爆散した。続けざまに光が生まれ、見えていなかった洞窟内の構造がほんの僅かの間頭になる。

相手は見えない。流星に射撃の精度は落ちていたようで、本体には回避の余力を与えてしまっていたらしい。

だが、それがどうしたとセシリアは笑った。ここまでは、自分の予想通りだと微笑んだ。

「鈴さん！」

「へ？ あたし？」

「先程の洞窟で生まれた光、見ましたわね？」

「え？ あ、うん、見たけど」

「なら、その光で照らされたものも当然『視た』のですよね？」

「……っ！ うん！ 視た視た！」

そういうことかと鈴音は笑う。拳を打ち鳴らし、その両手に『双天牙月』を呼び出した。キョロキョロと真つ暗闇の空間を見渡し、よし、と一人頷く。そして、一夏、と声を張り上げた。

「相手、どの辺!？」

「無茶言うなよ!?! ……右側だ、多分」

「オツケー！」

叫び、スラスターを吹かした。何も見えない空間でそんなことをし

てしまえばどうなるか、それは今までの彼等の行動から充分に理解しているはずである。だというのに、彼女は普段通りに空を駆けた。

一気に距離を詰める鈴音に、相手は一瞬だけ息を呑んだ。が、すぐに馬鹿にしたように鼻を鳴らす。そのまま壁にぶつかるのがオチだ。そんなことを思いながら、自身ははつきりと認識しているその姿を目で追い。

「ちえ、すとおー！」

反転し壁を足場に自身に突っ込んでくる彼女を見て目を見開いた。馬鹿な、と思わず言葉が口に出る。何も見えていない状態で何故あんな芸当が。そんなことが頭を巡り、思わず回避が遅れてしまう。

「あたしってば目がいいらしいのよね。さつきセシリアに洞窟の構造『視せて』もらったから、うる覚えでもこの程度は出来るってわけよ！」

両の手に持つ『双天牙月』を振るう。敵もさるもので直撃こそ至らなかったものの、しかし決して少なくないダメージを与えることには成功した。

何故なら、視界が黒一色ではなくなっていたからだ。装置をたまたま破壊したのか、はたまたセンサーに異常を起こす余力を失ったのか。ともあれ、これで四人は小細工を勞せず周囲を認識することが出来る。

となれば後はやることは一つ。赤い閃光は瞬時に自分達ではないそれを認識すると、その首筋に刀を振るった。

「ち、躲されたか」

惜しくも外れたが、しかし次は外さん。そんなことを思いながら、箒は二刀を構えまっすぐに相手を見る。青と黄色に彩られたISを見る。

危ない危ない、とそのパイロットは少しおどけた様子で呟いた。ヘルムとバイザーで隠された頭部からはどんな表情をしているのかは読み取れないが、しかし。

「覚悟しろ。からくりのバレたお前では勝てん」

「見えてるんならこっちのもんよ」

箒と鈴音がそれぞれ自身の得物を真っ直ぐに突き付けた。センサーに映る敵影は一つ、どこかに潜んでいる様子もなし。そしてこちららはほぼ万全な状態の四人。確実に勝てるとまでは断言出来ずとも、少なくとも負けはないと思える状況であった。

その状況で尚、相手は笑った。確かにこのままでは勝てない、と二人の言葉を肯定しながら笑みを浮かべた。

「だから」

くい、と相手が右腕を動かす。それはまるで、人形劇のマリオネットを操るような動作にも見えて。その指先に、まるで糸が伸びているような錯覚さえした。

そして、その動きと同時に一人の少女が素っ頓狂な声を上げた。何で、どうして、と困惑しながらも、その少女はゆっくりと自身が持っているそれを隣に立っている仲間には振り下ろそうとする。

「鈴?! どうした!?!」

「あたしが聞きたいわ! ちょっと何これ!? 何で機体が勝手に動いてんのよ!」

次々と繰り出される『双天牙月』の斬撃を弾きながら、箒は短く舌打ちをした。失念していたのだ。通信とセンサーを狂わされたことで、それを解除したことで。

本来、相手の能力は他の機体を操るウイルスだということ。

「箒!」

「箒さん!」

「待て、二人共。近付くな」

一夏とセシリアを箒は手で制す。向こうが機体を操る条件が不明瞭な以上、うかつに近付けば思う壺だと判断したのだ。それが分かっていたセシリアはすぐに停止、相手に向かい射撃を放つ。が、それは『甲龍』によって防がれた。半ば予想していたとはいえ、その光景に彼女は顔を顰める。

「卑怯な……」

「あら、四対一は卑怯じゃないの? 今だってようやく三対二なのに!」
ぐ、と口を噤む。そんなセシリアを見て楽しそうに笑った相手は、

少しだけ距離を取るとその傍らに『甲龍』を従えた。自分の意思で動かせない四肢を何とかしようともがきつつ隣の敵を罵倒する鈴音をちらりと見ると、視線を残りの三人に移す。

「さあ、次にこの『ラブ・レイター』の操り人形になるのは、誰？」

N036 「決まっているではないですか」

夜空を見上げる。しかし、その瞳が見詰めているのはそこに浮かぶ星々でも月でもない。そこにはその煌めきを映してはいない。

「どうした？ デュノア」

「……ん、いや、なんでもないよ」

そんな彼の様子を不思議に思ったのか、ラウラはそう声を掛けた。が、当然のごとくの返答を受け、それならいいと引き下がる。勿論内心は納得などしていない。

そんなことはシャルルも分かっている。それでも踏み込んでこないのならばわざわざ指摘することはない。ふう、と小さく息を吐くと、もう一度ここではない遠くを見やった。

「奴らのことが心配か？」

再度の問い掛け。別にそんなことはない、とそちらを見ることなく返答をしたシャルルは、しかしここでふと違和感を覚えた。視界外ではあるが、そこに立っていたのは間違いなくラウラ・ボーデヴィツヒであったはずだ。だというのに、どうして人違いだと思ってしまったのか。

「その割には、何か上の空のように見えるがな」

「気のせいだよ」

そうだ、気の所為だ。ラウラではないと思ってしまったことも気の所為であるし、自分が一夏達の心配をしているというのも気の所為だ。

何せ自分は、今の状況を作り上げた張本人なのだから。もし心配するとしたら、作戦が失敗してしまうかもしれないということくらいだ。

「……気のせいだよ」

もう一度呟いた。あの連中は大嫌いだ。だから、作戦が失敗することを望んでいても不思議ではない。作戦が失敗するということはこちらが負けるということであり、それは取りも直さず一夏達が勝つということ。

「うん、気のせいだ」

もし心配するとしたら、作戦が失敗してしまうことだ。作戦が失敗してくれないか、と心配することだ。

じやり、と地面を踏みしめる音がした。意識を元に戻すと、シャルルは隣に立った人物を見る。ラウラの顔を見る。

「そんなに心配ならば——」

眼帯を取り外しているラウラを見る。違和感の正体はこれか、と自分の残っていた冷静な部分が頷くのを感じながら、彼女の顔を見る。様子を、見に行ったらどうだ？」

薄く笑いながらシャルルにそう述べる『ラウラ』の双眸は、金色。頭上に浮かぶ月の如く輝くそれを見た彼は、しかしその動揺を表に出すことなく肩を竦め視線を逸らした。冗談きついよ、とおどけるような返答をした。

「僕の機体は現在修理中。まあ、篠ノ之博士のことだからもう終わっているだろうけど……許可は出してもらえないよ」

「確かに、そうかもしれないな」

そう言つてシャルルの隣の彼女は笑う。それがどうしたのだとばかりに笑う。質問の答えになっていないではないか、と言外で述べているかのようなその笑みは、まるで彼の真実を見透かしているみたいで。

何が言いたいの。ほんの少しだけ棘のある声色で、思わずシャルルは問い掛けていた。

「私に、その答えを求めめるのか？」

「……言っている意味が分からないよ」

はあ、と溜息を吐いたシャルルは、彼女と目を合わせずに別の問い掛けを行う。意趣返しのようなそれは、そこまで言うのならばどうしてそちらは行かないのか、というもので。

それを聞いた『ラウラ』が笑い声を上げるのを聞き、シャルルの表情がまたほんの少しだけ曇った。

「ああ、悪い。別に馬鹿にしているわけじゃないんだ。そうだな、私が行かないのは不自然だな」

「僕なら行くのが自然だ、みたいな物言いに聞こえるけど」

「いや、『私』も本来ならば行くのが自然だ。お前に限ったことじゃない」

事情をよく知らない第三者がいたならばいまいち要領を得ない会話。しかしそのことを指摘する者はここにおらず、理解をしていない者もない。だから、会話はそのまま続いていく。『ラウラ』が行かない理由を面白そうに語っていく。

「簡単な話だ。『私』はこの間もうやったのさ。だから今回は一回休み」

シャルルは『ラウラ』に顔を向けない。そうなんだ、と返事をするだけで、何を言っているのか問い掛けることすらしない。

その代わりに、だから今回は自分の番なのか、と彼女に尋ねた。

「そう思うのならば、そうだろう」

「……何だよ、それ」

「私が決めてもしようがない。そういうのは自分自身で決めることだろう?」

先程飛び出した二人のように。そう言って『ラウラ』はまた笑った。

ああいうのは考えなしで言うんじゃないかな。そう言ってシャルルも笑った。

ただ、その顔は笑っておらず。何かを決め兼ねているように、あるいは決めた答えに抗うように無表情であった。

コンソールにエラーログはない。が、装着者である鈴音の意志とは無関係に『甲龍』は動いている。相手はそっちなじゃない、と彼女がいくら叫ぼうが、その四肢は武器を握りしめ目の前の相手に斬りかかるのだ。

背後ではクスクスとバイザーとヘルムで口元だけが見えている女性性が笑っている。この事態を引き起こした張本人のその笑みに、鈴音は更に苛立ちを募らせた。

そして同時に、勢い込んで首を突っ込んでくせにこのザマか、ということも頭を過ぎった。

「ごめん一夏、あたし、役立たずで……」

体は相も変わらず謝罪を述べた相手に攻撃を続けている。が、その相手である一夏はビームブレードで『双天牙月』を弾きながら気にするなど笑った。全然平気だとのたまった。

「大体、お前がいなけりやまずハイパーセンサーが復旧しなかったからな。そっちの方が詰んでたっての」

「ええ、その通りですわ」

同じく相手の攻撃を避けながらセシリアが続ける。自分達がここに来たのは決して間違いなんかではない。そう言っただけで彼女は鈴音へと笑いかけた。

「そうぞ鈴。お前が気に病むことなど何も無い」

「お前はちったあ悪びれろ！」

柔らかな笑みを見せる箒に向かって一夏が叫ぶ。彼女の『紅椿』は現在コントロールを奪われ一夏とセシリアに襲い掛かっている真っ最中であつた。振るわれた刀から放たれる斬撃を躲しつつ、彼はおいこら箒、と指を突き付ける。

「お前まさかわざとやってんじやないだろうな」

「馬鹿を言うな。私が何故このような場面で巫山戯なければいかんだ」

「いやそりやそうだが。でも見る限りふざけてるようにはしか見えないんだよなあ……」

「隙ありい！」

「お前マジふざけんな！」

「勝手に動く四肢に言葉を合わせただけだ」

「それをふざけてるつつーんだよ！」

ブンブンと振るわれる二刀を躲しながら一夏は叫ぶ。叫びながら自身のビームブレードで刀を受け流し体勢を崩すと、裂帛の気合を込めた文句と共に回し蹴りを放った。箒の鳩尾に叩き込まれたそれは彼女の体をくの字に曲げ、そのまま背後にいた女性——『ラブ・レイ

ター』のパイロットまで飛んで行く。ピクリと見えない部分で眉を跳ね上げさせた彼女は、スラストを吹かすと弾丸となった少女の飛来を横に避けた。

「鈴さん」

「……うん、あたしもう少し図太くなるわ」

ダメージはあまり無かつたらしい箒が抗議の声を上げているのを横目で見ながら、鈴音は開き直るように溜息を吐いた。そういうわけだから、遠慮なくぶつ倒していいわよ。そう言いながら好き勝手に動く『甲龍』に自身を合わせるように彼女も叫ぶ。

ではお言葉に甘えて、とセシリアはそんな彼女に優しく微笑みかけた。

「んなっ!？」

「何を驚いているのですか？ 恐らく学院で一番わたくしが貴女と拳を交えています。——そんな他人に動かされているような拙い攻撃が、通用するものですか！」

『双天牙月』を自身の近接武装『インターセプター』で受け止めたセシリアは、そのまま独楽のように体を回転。巻き込む形で『甲龍』の体勢を崩すと同時、勢いを乗せた長剣の一撃をその土手っ腹に叩き込んだ。うげ、と凡そ乙女らしからぬ叫び声を上げながら、鈴音も先程の箒と同じように『ラブ・レイター』に向かって飛んでいく。

今度こそ見えている口元を歪めると、短く舌打ちしながら先程よりも大きくそれを躲した。そうしながら、やってくれるわね、と静かに悪態をつく。

「普通はもう少し動揺するものじゃないかしら？」

「もちろんしましたわ。ただ、そのまま倒されるほど愚鈍ではない、というだけです」

成程、と女性は頷く。やれやれと肩を竦めると、何かを操るように左右の指を動かした。それに合わせるように吹き飛ばされていた『紅椿』と『甲龍』が彼女の左右に並び立つ。『ラブ・レイター』の非固定ユニットだと思わしき十字型の物体が二人の頭上に浮かんでおり、さながらマリオネットの糸繰りを思わせる状態になっていた。

「一夏さん」

「ん？」

仕切り直し、とばかりにセシリアも一夏へと近付き言葉を紡ぐ。向こうの操り人形状態である二人の対処をどうするのか、と問い掛ける。

それに対し、彼はどうするも何もと頭を掻いた。

「まとめてぶっ倒すしかないんじゃないか？」

「一番単純で、一番面倒な方法ですわね」

「じゃあセシリアならどうする？ あのと二人の上に浮かんでる装置をぶっ壊して解放されるか試してみるとかか？」

「よくお分かりで」

まあそれしかないよな、と一夏も溜息を吐いた。二人を倒し、その後『ラブ・レイター』を撃破する。言うだけならば簡単だが実行出来るかどうかはまた別の話。そんなことをするくらいならば不確実ではあるが別の可能性を試した方がいい。セシリアとも重なったその意見を採用することにした一夏は、じゃあそれで行くぜと武器を構え直した。

そんな彼の動きが終わる頃には、既にセシリアは射撃を放っていた。『クイックドロウ』による瞬間射撃の狙いは二人を操っているとされる『ラブ・レイター』の非固定ユニット。そして彼女が狙いを外すはずもなく。

「……!？」

「あら、残念」

そのはずの射撃はまるで見当違いの方向へと飛び霧散した。どういうことだと目を見開くセシリアを、『ラブ・レイター』のパイロットは楽しそうに眺めている。

「どうしたのかしら？ 遊んでいないで、早く破壊したらどう？」

「言われなくとも！」

ぎり、と歯噛みしたセシリアは通常の速射に切り替えたが、そのどれもが目標に着弾することなく逸れていく。そのことで彼女の表情はどんどんと険しいものになっていき、反対に相手は笑みを強めてい

く。

どうしたんだ、と一夏が問うた。そのことで射撃を止めたセシリアは、短く息を吐くと少しだけ頭を冷やす。隣の少年の名前を呼ぶと、先程までの自分の動きについての感想を求めた。

「へ？」

「それがそのまま一夏さんへの答えに繋がります」

「んー。つってもなあ、別に何も変わったことなかったぞ」

何もおかしい部分はなかった。そう彼が答えたことで、セシリアの中で予想が確信に変わっていく。つまりはそういうことなのだ、と納得していく。

センサーを改めて起動させた。周囲の状況が分からないということはない。だが、ディスプレイに表示される情報が正しいともいえなかった。

「……自力での修正は、不可能、ですね」

「それはそうよ。常に侵食しているのも、完全にパターンを読み切るのは無理」

クスクスと『ラブ・レイター』は笑う。言質を取ったことでほんの少しだけ表情を緩めたセシリアであったが、しかし状況は改善されないことを思い出し唇を尖らせた。打破の方法を出来ることならばすくさま見つけ出さなければいけないのに、と。

そんな彼女に向かい、三人から声が掛かる。操り人形状態で動けず手持ち無沙汰な箒と鈴音、そして状況についていけてないので動けない一夏だ。何がどうなっているのか、と彼女に説明を求めた。

「相手の能力はウイルス。コンピューターウイルスと同等だと考えていましたが、どうやら少し違ったようですわ」

「あら、もうそこまで辿り着いたの？」

「ええ。貴女が口を滑らせたおかげで」

ピクリと『ラブ・レイター』のヘルムで覆われた眉が動いたが、セシリアは気付かず、また気付いたとしても気にしない。ぐるりと周囲を目視で確認し、まあ見えるはずが無いのでしょうかと肩を竦めた。

「ウイルスの名の通り、ISのセンサーや起動系統、武装などを狂わせ

るものも散布しているようですね」

「……」名答。ま、知っていたからどうするの、って話だけれど」

セシリアが言った系統のもの他にも、対象に触れることで微量であるがコンピューターウイルスを打ち込むナノマシンも混じっている。それらの相乗効果で、数が少なければ非固定ユニットを使い敵機を制御下に置き、多ければその後同士討ちをさせるのが相手と遭遇した場合の『ラブ・レイター』の戦闘パターンであった。

現状そのパターンに相手が陥っている以上、こちらの有利は覆らない。そんなことを思い、彼女は口元に笑みを作る。だからどうした、とセシリアを嘲笑う。

「だったら直接攻撃でどうぞだ！」

スラスターを吹かした『白式・雷轟』が箒の頭上にある非固定ユニットを破壊するべく疾駆する。が、目標に向かって飛んでいたはずのその機体はまるで見当違いへと進んでいってしまった。

「どういうことだよ!? セシリアの隣に移動するとかその辺は問題なく出来ただろ!？」

「その辺りの巧妙さがまさにウイルスということでしょうね」

相手に気付かれないようにじつくりと蝕んでいき、分かった時にはもう手遅れ。恐らくそういう類の武装なのであろう。よくは知らないが、きつと操縦者も同じぐらいねちねちと嫌な性格をしているのだろうな。そんなことをセシリアは思う。

「それで、どうするの? 打つ手が無いと分かったそっちはまだ足掻く?。」

「はっ、嘗めんなよ! 打つ手なんざまだまだ」

「そういう根拠のない反論は向こうを調子付かせるだけですわ」

一夏の空元気をばつさりと切り捨てたセシリアは、しかしさてどうするかと思案する。ちらりと箒と鈴音に視線を向けるが、二人揃って首を横に振った。期待するな、ということであろう。

「私に思い付くのはもう『玉兎』で洞窟ごと吹き飛ばすくらいだ」

「そうよね。あたしも出てくるアイデアそれくらいよ」

「こちらで行うとしたら『白式』を『真雪』に換装しビームランチャー

を連射、B T兵器もおまけでつかうくらいだろうか。どちらにせよ成功するか分からない上に被害が甚大であるので却下である。

「いつそ適当に撃つか」

よし、とビームガンを構えた一夏は宣言通り狙いをつけずに連射する。当然のごとく目標には当たらず、別段相手が回避行動を取ることもなかった。かすりもしないその状況では、命中するのは宝くじで一等を取る程度の運が必要であろう。

そこはせめて勘を頼れ。そんな箒の呆れたような言葉を受けた一夏がガクリと肩を落とすのを横目で見ていたセシリアは、今の光景を眺めながら思考を巡らせていた。少なくともセンサー類が役に立たないのは間違いない。だが、目視も同様であるのかと言えば否。彼の射撃を見る限り、少なくとも視界は異常をきたしてはいない。あくまで機体が狂っているのだ。

「何か考えているようだけれど、無駄よ。機体も、武装も、周囲の空気も。その全てがそっちに不利なように動くのだから」

そう言つて何がおかしいのか肩を震わせる『ラブ・レイター』のパイロットを見ながら、見てはいても認識から外しながら。彼女は考える。この状況をどうにか出来る方法を。自分自身がどうなるかよりも、最終的に勝利を収める方法を。

だが、出来るか。そう彼女は自身に問いかける。あの時から考えていたことは、今ここで可能になるのかと自問自答する。一夏に負け、更なる力を得ようと、不屈を貫こうと考えたあの時。クロエに敗北し鈴音に情けない姿を見せてしまったと嘆いたあの瞬間。簪と引き分け、己の未熟さを実感したあの日。

全力で集中したのにも拘らず、成功せずに放てたのは全力を超えた『クイックドロウ』でしかなかった今日。

それらを思い返し、だからどうしたとセシリアは笑った。ならば今ここで成功すればいいだけだと答えを出した。

ふう、と溜息を吐く。箒を見、鈴音を見、そして一夏を見た。三人を見渡すと、彼女は安心したように柔らかく微笑む。

「箒さん、鈴さん、一夏さん」

「何だ？」

「どうしたのよ」

「お、おう」

「——今からわたくしの全力全開をお見せします」

その言葉を聞いていた『ラブ・レイター』は吹き出した。何を言い出すかと思えば、と笑いが堪えきれないといった様子でセシリアを見る。やる。

「まさか今まで全力でなかったとか言い出すつもり？ 子供特有の万能感はもう少し前に卒業してしかるべきよ」

「何とでもお言いなさい。わたくしに見下されるその瞬間まで」

言いながら『ブルー・ティアーズ』のセンサー類を軒並みカットした。コンソールに表示されていたものが次々と消滅していき、彼女の視界にはデータも何も無いまっさらな視界が映るのみとなる。

武装も収納した。これから行うのは手にしている銃を構え撃つという悠長なものでは到底なし得ないからだ。彼女の彼女たる所以、自身の誇りである早撃ちの延長線上だからだ。

尚も笑い続ける『ラブ・レイター』とは対照的に、残りの三人はセシリアの空気を感じ取り言葉を止めていた。何をするかは分からない。だが、それは間違いなく彼女が宣言した通り全力で全開だ。

恐らく、成功失敗に拘らず力尽きるであろうほどの。

「——ふう」

大きく息を吸い、吐いた。視界には何が映っているのか、それを自身にもう一度問い掛ける。狙いはそれだと言いつ聞かせる。

「そんな風に睨んでも無駄よ。貴女の攻撃は私には——」

言葉が途中で止まる。視界が一瞬黒く染まり、そして自身がぐらりと傾いているのを認識した『ラブ・レイター』は、一体何が起こったのかと視線を巡らせた。

頭上にはいつの間にか『スターライトmkⅢ』を手にしたセシリア

がいる。つまり『ブルー・ティアーズ』の射撃を食らい墜ちかけたのだ。そう判断すると同時に機体の状況を確認した。

背後に三発。狙いすましたかのように叩き込まれたそれはスラスターやウィルス散布にダメージを与えていた。今ばら撒かれている分は消えないが、これ以上増やすことも出来そうにないということを理解した彼女は、その表情を歪ませた。一体どういうことだと相手を見上げ、睨んだ。

それがセシリアの宣言した通りだということに気付き、更に歯噛みする。

「……わたくしが、貴女を撃った。それ以上の説明は、必要ないでしょう?」

「戯言を!」

汗だくで、顔色も優れず、肩で息をしながら。それでも毅然とした表情でそう述べたセシリアを、『ラブ・レイター』は睨みつける。

ふう、とセシリアは息を吐いた。仕方ありませんわね、と薄く笑った。

「偏向射撃（フレキシブル）」

「……は?」

放ったビームを曲げる射撃の高等技術だが、それがどうした。そんなことを思った『ラブ・レイター』は、しかし次の瞬間に答えに至り顔色を変えた。そんなまさか、とヘルムの下で目を見開きセシリアを見た。

「『クイックドロウ』で『偏向射撃』を行ったって!?! こんな、碌にセンサーも使えない状況で!?!」

「碌に、ではありませんわ。役に立たないので、使いませんでした」

「——イカれてる……っ!」

こちらで手にしている情報によれば、セシリア・オルコットの『クイックドロウ』は反射にまで高められた早撃ち。対する偏向射撃はセンサーの補助を持ってしても高等技術と呼ばれる演算の賜物。

その二つを同時に行うということは、反射と同じ速度で思考・演算をこなしたということだ。それも何の補助も無しで。

「普通の人間には不可能でしょ!? 脳が焼き切れるわよ!? いや、体全体が壊れてもおかしくない! 何なのよ! どうしてそこまでするのよ!」

分からない、理解出来ない。そんなことを喚きながら『ラブ・レイター』は後ずさる。何だこいつは、一体どんな思考回路をしていればそんなことを実行出来るのだ。こんなろくでもない場所で、表には決して出ないような場所で。どうしてあんな肩書を持った人間が。

「決まっているでしょう」

ぐらり、とセシリアの体が傾く。どこか満足そうに笑いながら、最早精根尽き果てたとばかりに体を一切動かすことなく。

「そう——友人の為に、決まっているではないですか」

笑いながら、ドシヤリと彼女は地面に落下しバウンドした。そのままピクリとも動かず、どうやら意識も飛んでしまったらしい。

その光景を皆がただただ見詰めていた。動けない箒も鈴音も、動ける一夏も、敵である『ラブ・レイター』も。

ぐ、と何かを握りしめる音が響いた。我に返った『ラブ・レイター』がその方向を見やった時には、既にその相手が行動に移っているところであった。太陽のような輝きを持った粒子を撒きながら、先程よりも強靱な翼を持った白い機体が。

「さんきゅ、セシリア」

手にした太刀を振り被る。ウィルスの影響など知らんとばかりのその動きに『ラブ・レイター』は反応が遅れ、追撃の一撃をまともに食らってしまった。吹き飛び洞窟の壁にぶつかると、肺に溜まっていた息が一気に押し出される。

「後は、任せろ!」

太刀とは逆、左手に持ったビームランチャーの標準が相手に合わせられ、そして放たれた。チカチカする視界の中、それでも必死で糸を手繰り寄せた『ラブ・レイター』は箒と鈴音を使い、その場から離脱する。

ゼーゼーと肩で息をしながら、彼女は眼前に佇む機体を見る。先程とは大きく様変わりした、織斑一夏の『白式』を見る。

「それ、は——」

「今の俺の全力全開。『白式・金鳥』！」

ケリを着けてやるぜ。そんなことを宣言しながら、一夏は一気にスラストーを吹かした。操り人形になった二人程度では防げないその一撃は、間違いなく相手に届いた。

その糸を、人形繰り器ごと断ち切った。

N037 「そうだね」

視界が戻る。エラーログと周囲の状況を照らし合わせ、自分が今どうなっているのかをざっと確認したナターシャは答え合わせも兼ねて目の前の相手に問い掛けた。ここはどこだ、と。

「お前はナターシャだ」

「別にJAPANの記憶喪失ゴツコをしたいわけじゃないの」

「こっちは余計な仕事を増やされストレスが溜まっている。それくらいの軽口を言っても許されると思うが?」

「……ええ、そうね。それで、最初の質問の答えは?」

ふん、と鼻を鳴らした千冬は、海上ど真ん中だとぞんざいな返答を行う。それに別段文句を言うことなく、ナターシャはそうと短く頷くに留まった。

四肢を動かす。先程までの何もかもを奪われていた状態が嘘のように軽快に動くそれを目の前の相手に見せつけるように行いながら、彼女は大きく溜息を吐いた。どうやら随分と盛大な居眠りをしていたようだ。そんなことを思わず呟く。

「ああ、随分と派手な夢遊病だった」

「……眠気覚ましにコーヒーでもあればいいんだけど」

「戻ったら缶コーヒーでもくれてやる」

ケチね、とナターシャは笑う。むしろこっちが奢って欲しいくらいだ、と千冬も笑う。

そうしてひとしきり笑いあった二人は、視線をお互いから海の向こう側へと向けた。戻ろう、そう口にしたわけではなかったが、分かっているとはかりにそちらへとスラスターを吹かした。

その途中、千冬は言い忘れていたとばかりに隣のナターシャへと声を掛ける。

「缶コーヒーでない上等なものが欲しいのなら」

「ん?」

「戻ったら続きだ。お前が勝ったら奢ってやる」

「あら、いいの? 夢遊病患者の世話で疲れているでしょうに」

「そのくらいでなければ、お前が缶コーヒーしか飲めなくなるからな」
言ってくれるわね、とナターシヤの目が細められる。その口元は笑み
が浮かべられていたが、纏う雰囲気は獰猛な獣のそれであった。そ
んな状態であっても、彼女の冷静な部分は千冬に感謝を述べている。
こちらが気に病まないようにその態度なのだろうな、と結論付けたか
らだ。勿論口には出さない。

千冬はそんな彼女の内心を気にしない。ぶっちゃけさっきの続き
が気持ちよく出来ればそれでいいとさえ思っていたりもする。だか
らナターシヤの感謝など受け取らない。

その途中、千冬はああそういえばと通信を繋いだ。報告が遅れた
な、と束に前置きすると、『銀の福音』はウイルスによる暴走状態が解
除されたことを報告する。顔の見えない彼女の親友は、はいはいの一
言でそれを流した。

「やはりもう把握していたのか」

『んー、別にそういうわけじゃないよ。ちーちゃんならまあそんなも
んでしょって思ってただけ』

「ふん。……ん？ 一夏達が向こうを始末したんじゃないのか？」

『びみよー』

なんだそれはと千冬は顔を顰める。こちらで戦闘不能にさせる前
に正気に戻ったためそう考えていたのだが、束の反応からすると違う
のだろうか。そんなことを考えつつ、とりあえずその続きの言葉を
待った。

『いや、多分ウイルスの発生源はいつくん達がどうにかしたと思うよ』
「なら何が問題だ？ 一体向こうはどうなっている？」

もったいぶるな。そんな意味合いを込めた千冬のその問い掛けに、
束はどう答えようか一瞬だけ迷った。どう答えても結局千冬は文句
を言う。ならば思うがままでいいじゃないか。その一瞬でそう結論
付け、彼女はどうなっているかと言われれば、と口角を上げた。

『盛り上がってきたんじゃないかな』

一夏と『ラブ・レイター』との間を遮るように乱入したその機体は、彼にとって随分と見慣れた相手であった。学園のアリーナで一回、電脳空間でもう一回。都合二回勝負をしたことがあり、そのどちらも勝負はつかなかったものだ。

そして同時に、今ここにいないもう一人の方も合わせてどこか憎めない奴だと思ってしまった相手だ。こちらは『しののの』、向こうは『亡国機業』、仲良くは出来ないはずなのに。

「……お前がいるってことは、やっぱりそこのは『亡国機業』か」「まさか違うと思ってたの?」

「んなわけあるか」

「というかそれ以外頭に浮かんでなかっただけよね、一夏は」

「お前に言われたかねえよ鈴」

「まったく、単純だな一夏は」

「お前にはもつと言われたくねえよ箒!」

いいから話続けるぞ、と一夏は目の前の相手を見る。はいはい、と苦笑しながら肩を竦めたデゼールは、それで何が聞きたいのと彼に尋ね返した。

その質問に、一夏は無言を貫いた。語ることなど何も無い、というわけでは決していない。ただ思い付かなかっただけである。

「……聞きたいこともないのなら、もう私達は帰るけど」

手をヒラヒラとさせたデゼールを見て我に返った一夏は、そういうわけにはいかないだろう下ろしていた太刀を再び構えた。お前達の目的も聞いてないからな。そう続けて不敵に笑った。

「どうしてさつきそれを聞かなかったの?」

「出てこなかったんだよ!」

「馬鹿だな」

「バカね」

「うるせえよ!」

それでどうなんだと強引に質問を続けた一夏に向かい、デゼールは大したことじゃないと苦笑する。『銀の福音』を暴走させ適当な街に

被害を出せればそれでよかつたと軽く語った。世間話のようにあまりにも軽いその物言いに、一夏も聞いていた箒や鈴音も一瞬だけ呆気に取られてしまう。

「……人が、死ぬぜ」

「そうだね。そういう作戦だからね」

「ISで……姉さんの翼で、無差別殺人、だと……？」

「そうだね。他人の夢を踏み躪るのが『亡国機業』だからね」

「何よアンタ……ゴレムの時は気に入らないって言ってたくせに、こっちは気に入ったっていうの？ 責任者同じ奴でしょ？」

「……そうだね。勿論嫌いだよ」

ヘルムとバイザーで覆われたその顔は、口元しか見えない。しかし、その口元が真一文字に結ばれるのを鈴音は確かに見た。箒と一夏もそれを目にし、ああ成程なと目を細める。

「じゃあもう一つ質問だ。そんなことを言いつつ、箒はデゼールに自由になった指を突き付けた。」

「今回の作戦は、失敗だな？」

「——そうだね。『銀の福音』、制御取り返されちゃったみたいだ」

そう言っただゼールは楽しそうに笑った。まるで作戦が失敗したのを喜んでいるかのよう。事実、一夏達にはそうとしか見えなかった。

『ラブ・レイター』は笑い事じゃないと彼女に叫ぶ。が、デゼールはそっちの失態だろうと軽く流すと二つのパックを投げ渡した。一つはエネルギーパック、もう一つは武装のリペアパック。これで応急処置をして撤退だ。そう続けると再度目の前の相手へと向き直る。

「そういうわけだから、どいてもらっていいかな？」

「しようがねえな、って言いたいところだが」

少なくともそっちはお縄についてもらう。切っ先を『ラブ・レイター』へ向けた一夏は、視線でデゼールに帰れと促す。その意図に気付かない彼女ではないが、当然のことながらそれは出来ないと言を横に振った。

自由になった箒や鈴音も戦闘態勢に入るのを見つつ、デゼールは左

手にマウントしてあるロングライフルを展開させた。右手にも射撃武装を取り出し、口にはしないが視線だけでそういうわけだと語る。

無理矢理押し通る。

「やれるもんならやってみろ！」

「そう？　なら、お言葉に甘えて」

左手のロングライフルを撃ち出した。杭打ちのような直線と貫通を伴ったそれは流れるように一夏へと叩き込まれ、しかし寸前で回避される。現在の一夏は『白式・金鳥』、三つのパッケージを一つに纏めて最適化したその装備はある意味二次移行に匹敵するため、普段ならば出来ない機動も可能となる。

そうだろうな、とデゼールは笑った。そうでなければ駄目だ、と笑みを浮かべた。

「ん？　何だ!？」

「しまった、そういう目的か!」

「え？　何がどうしたの?」

パラパラと砂粒が降り注ぐ。ミシミシと軋む音がする。それが何を意味するかは少し考えれば分かることで。

先程の砲撃で、洞窟のこの空間の壁に大穴が空いたのだ。今はまだ大丈夫のようだが、この調子ではもたもたしていると崩れる可能性だってある。

「さて、もう一度言うけど——どいてもらっていいかな?」

「この野郎……」

手段の選ばなさは流石『亡国機業』といったところか。そんなことを思いながら、一夏はやなこととスラストを吹かした。崩れる前にぶっ倒す。とりあえず彼の出した結論はこれである。

「はあ……まったく、一夏らしいや」

右手の射撃で牽制をしつつ、『高速切替』でブレードを取り出す。相手の斬撃に合わせてそれをかち当てると、こちらが押し負ける前にもう一発と左手のマウントライフルを構えた。

「させるかよ!」

太刀から手を離す。そのまま右手を広げると、翼を装甲展開させそ

ここに集中させた。至近距離で防がれた砲撃は双方を弾き飛ばし、お互いの体勢を大きく崩す。

二人が立て直すのは同時。そして射撃を打ち込むのも同時であった。一夏のビームランチャーとデゼールのマウントライフルがぶつかり合い、強烈な閃光を発する。

その隙を突いて、『ラブ・レイター』は機体を回復させ行動を起こしていた。先程まで操っていた二人、応急処置で回復したウィルスを使えば、再度操ることも可能なはずだ。そう判断し、素早く非固定ユニットを起動させる。

が、彼女の目の前にいたのは箒一人。どういことだ、と目を見開いた『ラブ・レイター』に向かい、貴様の考えなどお見通しだと箒は笑った。

「それでアンタが操られたら何にもならないでしょうが！」

「そうか？ お前が自由なら、どうとでもなるさ」

再度『ラブ・レイター』の武装となった箒が笑う。この状態で再度散布してもう一人操るのは機体の状態から厳しいだろう。首だけを動かすか、かきさくした箒を『ラブ・レイター』は睨み付けることで返答とし、まあいいと鈴音に向き直った。同士討ちで始末すれば何の問題もない。そう判断した。

「ははははっ。やってみろ『亡国機業』。私の昔馴染は手強いぞ」

ハードル上げるなあ、と苦笑しながら、しかしやる気は満々で、『紅椿』を操り攻撃を開始した『ラブ・レイター』を真っ直ぐに『視』ながら。

「いいわよ。やってやろうじゃない！」

その両手に『双天牙月』を構え、鈴音は一気にスラスターを吹かした。

「あの、馬鹿……撤退だって言ったのに」

「何だ、嫌われてんのか？」

一夏の軽口にデゼールは少しだけ苦い顔を浮かべる。まあね、と短く答えると、一気に肉薄しブレードを振りかぶった。勿論近距離は一夏の方が勝る。だというのにその行動を取ったということとは。

ピン、と何かを外す音がした。それがグレネードだと気付いた時には既にそれは炸裂している。閃光が洞窟の空間を包み、一瞬視界が奪われる。その隙を縫ってデゼールは『ラブ・レイター』と合流を。

「させるかよー！」

「さつきも聞いたよ」

やっぱり駄目か、と溜息を吐きながら彼女は一夏の追撃を横にステップすることで躲す。右手のアサルトライフルの銃弾をばらまきながら、さてどうしたものかと思いを巡らせた。

現在の状況では合流は難しい。加えて合流したところで向こうは撤退する気がほぼないと言っても過言ではない状態だ。出来ることならばそのまま見捨てて帰りたいほどである。

「どうした？ 帰る気にでもなったのか？」

「そうだね。大分なりかけているよ」

そう言いつつも銃口は一夏に向けたまま。それが意地から来ているのか、それとも別の理由かは分からない。どちらにせよ、彼女は戦意を失ってはいない。

一夏はちらりと向こう側を見た。操られている筈とそれを迎撃している鈴音。大丈夫だ、と至極あっさり結論付けた彼は、迷いなどないとばかりにデゼールへと突っ込んだ。

「そうだよね、そうなるよね……ああもう！」

飄々とした態度を出来るだけ崩さぬように努めていたデゼールが吠える。右手で斬撃を受け流すと、左手のロングライフルで一夏の顎をかち上げた。くるりとそれを回転させると、まるでトンファアのように使い追加の打撃を叩き込む。体勢を崩した相手に向かい、今度こそ必殺の貫通射撃を撃ち込んだ。

「これも避けるんだ、やっぱり」

「つぶねえー！」

考えた動きではない。ウイングスラスターをとにかく全力で吹か

していた、ただそれだけの行動である。だが、それで彼女の射撃をずらし直撃を避けることに成功したのだ。普通の相手ならばその突拍子もない動きで躲されたことが理解出来ない。何故そんなことが出来るのかと程度の差はあれど動揺する。

が、デゼールはそんなこと分かりきっていたとばかりに追撃に動いていた。急上昇で開いた距離を再度詰めながら、マウントされたロングライフルをポンプアクションできるようにスライドさせリロードする。

「珍しいな」

「……何が？」

「前回もその前も、お前そんなにその武器使ってなかっただろ？」

「私一人だからだよ。自分で相手に致命打を叩き込まないといけないからね」

分かったなら墜ちろ。言葉にせずにそう続けると、デゼールは更に貫通射撃をぶつ放す。焦りか、やる気か。どちらにせよそんな単調な攻めでは流石の一夏も対応が慣れてくる。翼を前面に装甲展開、エネルギーを纏わせ防御力を上げると、そのまま無理矢理射撃を防ぎ前進した。のほほんさんの真似、と身内しか分からないようなことを叫びながら、そのまま彼はデゼールへとぶつかっていく。

二人揃って壁に激突する音を耳にした箒は、向こうは随分と派手にやっているなど苦笑した。言いながら、まあこちらも負けていないかと目の前の相手を見る。真っ直ぐに自分を、否、その背後で糸を垂らしている敵を『視』ている鈴音を見る。

「な、何でよ……!?! どうしてよ?! さっきはあんなに一方的だったのに!?!」

『ラブ・レイター』の焦ったような声が聞こえてくる。先程より若干拘束は緩く首は自由に動かせるようで、箒がそちらに目を向けるとそこには糸練りをしながら少しずつ後退している相手の姿が。

「鈴」

「何よ」

「随分と驚かれているな」

「そうみたいね」

ふふん、と軽く笑いながら鈴音はスラスターにエネルギーを込める。爆発するかのように一気に間合いを詰めた彼女は、箒ではなく本体である『ラブ・レイター』にその刃を向けた。

来るな、とその間に箒を割り込ませ盾にする。操られるがままに動く箒の『紅椿』は、二刀を振り被ると鈴音に向かってそれを振り下ろした。

勿論そんなものが彼女に当たるわけがない。軽く弾くと、回し蹴りによりかなりの距離まで吹き飛ばした。盾を吹き飛ばされた『ラブ・レイター』は、驚愕の表情のまま逃げようとスラスターを吹かすが、遅い。

「二応、さっきの質問に答えてあげるわ」

『双天牙月』を連結させ、くると回転させる。そのまま袈裟斬りを叩き込むと、おまけとばかりに『龍咆』を撃ち込んだ。箒とは反対方向に吹き飛び壁に激突した『ラブ・レイター』は、本日二回目の壁のオブジェとなる。

「アンタの操り、中の人間の動きが出来てないのよ。機体のデータからそれっぽい動きをしているだけ」

まあつまり、と分割した『双天牙月』を両手に構え、そして切っ先を彼女に向けた。

「猿真似であたしを倒せると思ってるの？　ってやつよ」

「あーあ。言わんこっちゃない」

ぶつかった壁から脱出したデゼールは、その代わりに壁にめり込む。『ラブ・レイター』を見て溜息を吐いた。一夏達を甘く見るからそういうことになるのだ。そんなことを思いながら、さてどうするかと目の前の相手を見る。シールドエネルギーをガリガリと削られているにも拘らず、未だやる気満々で武器を構えている一夏を。

「今からでも帰るって言ったら、見逃してくれるかな？」

「置いてくのか？」

「こっちの忠告聞かないで再度やられるようなのは、流石に見捨てても文句は言われなと思うからね」

やれやれ、と肩を竦めた彼女はそれでどうだろうかと問い掛ける。一夏はそんな提案にほんの少しだけ迷う素振りを見せ、まあ仕方ないかと息を吐いた。

何より、目の前の相手には結果的に一度助けられている。受けた恩を仇で返すほど、彼は薄情ではないつもりなのだ。

「分かった。じゃあ——」

ふぎけるな、と言う叫びが聞こえた。壁から這い出した『ラブ・レイター』が、満身創痍の状態で今この場にいる全員を睨み付けていた。己の残っているエネルギーを注ぎ込み、一点集中でウィルスを流し込むと左手を思い切り引き寄せる。

「お前っ！」

「先に見捨てたのはそっちよ！」

狂気を感じるほどの笑いを浮かべながら、『ラブ・レイター』はデゼールの左手を操り、動かす。狙いを確に付けることもなく、ロングライフルをただただ撃ち続けた。貫通射撃が洞窟内の空間のいたるところに叩き込まれ、回避に専念していた一夏や箒、鈴音にもこちら起こる結末が用意に想像出来るようになっていく。

「あははははは！ 崩れる！ 全て潰れてしまえ！」

「くっ、この——」

右手で左手のロングライフルを掴むと、デゼールはそれを無理矢理折り畳んだ。同時に侵食していたと思われる装甲部分をブレードで削り取ると、そのままの勢いで『ラブ・レイター』に向かって投擲した。腹部に突き刺さったそれは彼女の『絶対防御』を発動させ、最低限の行動分を残し機能停止に陥らせる。ふらふらと落下していく『ラブ・レイター』を見ながら、とっとと消えろと吐き捨てた。

「悪いね。もう少し世間話でもしたかったけど、どうやら時間もないみたいだ」

「ああ、そうみたいだな。俺達もここからとっと——」

そう言いかけ、一夏は動きを止めた。崩落しかけているこの場所から、一刻も早く脱出しなければならない。それは間違いない。一夏も、箒も、鈴音も、それは同様である。

三人、である。ここに来たのは四人であるのに、だ。

「そうだ、セシリアー！」

「え？」

どこだ、と一夏は視線を動かし即座に周囲を確認する。ガラリ、と天井の一部が崩れた。もう時間はない、生き埋めになるか、押し潰されるか。ISがあつたとしても、万全ではない状態では役には立たないのだ。

全てを使い果たし倒れているのならば、尚更。

「あそこだー！」

「動いてない……まだ気絶してるの!？」

箒と鈴音の声の方へ顔を向ける。時間がない、今すぐにも彼女を回収しなければ。そんなことを思いながらスラスターを吹かした彼の目の前で、天井が更に崩れた。巨大な岩は、丁度気絶しているセシリアをミンチに出来るほどで。

『セシリアあー!』

全力で飛んだ。岩を砕くために、己の持っている太刀が展開しビームブレードとの複合武器になったことにも気付かず、必死でそれを振るった。巨大な岩は両断され、遅れてやってきた箒と鈴音により粉々になる。

そして、地面に横たわっていたセシリアを抱きかかえ離脱したのは。

「何でお前が」

「……助けちゃ、いけないの?」

デゼールは静かに問い掛ける。表情は口元しか分からないが、そこにふざけている様子は何もなく、真剣で本気であるのだということが見て取れた。

「いや。ありがとう、セシリアを助けてくれて」

「……気まぐれだよ。気にしないで」

それはまるで自分に言い聞かせるようであった。気まぐれだから、仕方ない。他に理由などない。そう思い込もうとしているようであった。

「そうだよ。気まぐれだ」

同じクラスで、専用機持ちだからと何かと接点のあるあの面々の一人だから。何だかんだで笑い合ってきた相手の一人だから。マドカ以外に出来るはずがないと思っていたものの一人だから。

シャルルの、否、『シャルロット』・デュノアの『友人』だから。

だから、助けた。全力で、死なせないようにした。

「違う」

未だ目を覚まさないセシリアを一夏に渡すと、デゼールは踵を返した。せつかく助けたのに、このままでは皆生き埋めだ。そんなことを彼らへ顔を向けずに言い放つと、そのまま振り返ることなく去っていった。

「……あいつ」

ひよつとして、俺の知っている相手なのか。そんなことが一夏の頭を過ぎった。

答えは出ないまま、一行は崩れる洞窟から脱出する。月明かりは皆をよく照らし、心の中のしこりとはまるで正反対であった。結果としては作戦成功、犯人は逃してしまったが、まあ問題はない。

そうやって笑える者は、今この場にはいなかった。

家に帰るまでが臨海学習だ。そんなお決まりのセリフをのたまうのはクラス担任織斑千冬である。バスに乗り込む前の集会にて見たその姿は随分とボロボロであった。にも拘らず満足そうな顔をしているのは、恐らくそういうわけなのだろうと一夏達は思う。少し離れたところで、同じようにボロボロのナターシャがコクリコクリと居眠りをしていた。

「やっぱあのバトルジャンキーを『しののの』宇宙に上げる人物第一号

にするのは駄目だと思うんだよな」

「ボロクソだな一夏」

「いやだって、あれ絶対知的生命体と出会ったらまず拳を交わすぜ？
宇宙戦争待ったなしじゃねえかよ」

「いくらなんでもそんな……」

「ない、と断言出来ない自分を誤魔化すように、鈴音はコホンと咳払いをした。まあそれはそれとして、と隣にいるセシリアに顔を向ける。」

冷えピタと包帯で頭や腕をカバーされている彼女は、大丈夫ですわと笑みを浮かべた。今のところ後遺症もなし、単純に体力が回復していないだけだろうと微笑んだ。

「どう見ても、大丈夫に見えない……」

むう、と唇を尖らせるのは簪である。心配したんだからと本音とともに抗議する彼女を、苦笑しながら申し訳ありませんと宥めた。が、その程度で引き下がるわけもなく。

何せセシリアが目覚めたのはついさっきである。あの後彼女は朝日が登るまで意識が戻らなかった。本来はセンサーの補助、それもB T兵器に類する最新式のビーム系統の武装を用いてようやく実践的になる発展途上の技術である『偏向射撃』を、通常のビームライフルでセンサーを用いずに、それも『クイックドロウ』でぶっ放したのだ。落石でミンチにならずともそのまま目覚めず脳が壊れていた可能性だって無きにしもあらず。友人が心配するのは至極当然であろう。

「確かに、皆さんに心配を掛けてしまいうのは駄目ですわね。……次は、きちんと成功させますわ」

「次をやったら駄目なのー！」

「おお、かんちゃんか怒鳴った……」

涙目である。流石のセシリアもそこで我を通すわけにもいかず。分かりました、と溜息混じりではあるが首を縦に振った。仕方ない、しばらく封印しておこう。そんな結論なのは目の前の相手に覺られないように努めた。

「……私も、次はついていかなきゃ、駄目だ」

「じゃあ、私も〜」

そのためにはどうすべきだろうか、と思考を巡らせ、まあこれが一番確実だろうと簪はスマホの通話アプリを起動させる。家族のカテゴリーに一応入れてあるその人物の画面まで移動させると、自身の要望を打ち込んだ。

「それ、おじようさまちようちよう心配すると思うんだけど」

「なら、本音も説得手伝って」

「ん〜。りようかい」

同じように通話アプリを起動させ、簪と件の人物との会話に乱入する。どこからか聞きつけたのか、そこに彼女の姉まで参加し。

その話し合いは、バスが学園に着くまで繰り返された。

「君は、混ざらないの?」

バスに乗り込むまでの暫しの自由時間。そこで一夏達を遠巻きに見ていたシャルルに、東はそんな声を掛けた。まさか彼女に話し掛けられると思っていなかった彼は、思わず姿勢を正しそちらを向く。

そんな緊張しなくていいよ。そう言って笑った東は、ちよつとだけ聞きたいことがあっただけだからと言葉を続けた。

「……何ですか?」

「だからそう身構えなくてもいいよ。私は君がどんな名前でも気にしないから」

「っ!」

目を見開く。それはそういう意味なのか。そんなことを一瞬だけ考え、目の前の女性は基本的に人の名前を覚えないらしいという彼女の妹からの情報を思い出し少しだけ安堵した。

いや、違う。そうシャルルは思い直す。目の前の相手が、篠ノ之東が分からないはずが。

「ねえ、君ってさ、今の世界は楽しい?」

「——え?」

東は笑みを浮かべたままだ。予想外のその質問を聞いて一瞬固

まっってしまったシャルルを見ながら、自身の質問の返答を待っている。

「今の世界、とは一体どういうことだ。世界情勢か、暮らしぶりか、それとももつと身近なことか。」

『亡国機業』のデゼールの世界のことか、それとも、シャルル・デュノアとしての学園生活のことか。

「それらが頭の中をぐるぐると周り、しかし表情に出すことなく。彼はゆっくりと息を吐くとそうですね、と返した。」

「多分……楽しいと思います」

「ふーん。そっか」

「そうかそうか。そんなことを言いながら笑顔で頷いた束は、ありがとうと述べると踵を返した。一体何だったのか、と怪訝な表情を浮かべるシャルルを見ることなく、彼女はそのまま去っていく。」

「その途中、ああそうだ、と立ち止まった。振り向くことなく、指を一本立てるとそれを空に向ける。」

「そう思うんなら、手放しちや駄目だよ。やりたくもないことより、楽しいことをやろう」

「——っ」

「はっはっは、と笑いながら去っていく束の背中を見ながら、シャルルはギリリと拳を握りしめた。そんなことは分かっているとはばかりに背中を睨み付けた。分かっているふりをし続けているのだと、大声で叫びたいのを必死で抑えた。」

「僕は——私は——」

「どうすれば、本当に楽しい世界に行ける？ その答えを出してくれる相手は、どこにもいない。」

N038 「やりたいなら、やればいい」

臨海学校も終わり、後は夏休みまで何ら問題もなく時は進む。本来ならばそうなるはずのIS学園の一年生達は、正確には一年の専用機持ち達は、その僅かな時間の中で色々と行動を起こしていた。

『はあ!? ちょっと、どういうこと!』

「いや、どういうことも何も。そのまんま」

あはは、と笑う鈴音の電話の相手は笑い事じゃないと怒鳴る。思わずスマホから耳を離れた鈴音であったが、まあでもしようがないと続けながら再度耳に近付けた。

「代表候補生なんて肩書は、あたしのやりたいことの障害でしかなかったんだもの。むしろ早いうちに分かってよかったわ」

『良くない! アタシどうなるのよ! おねえちゃんが代表候補生だからって頑張ったのに!』

「あー、うん。それは、ごめん」

でも、これは譲れない。そう鈴音が電話の相手に述べると、真剣さが伝わったのか小さく唸ると押し黙った。本当にずるい。呟くようなその言葉に、鈴音はもう一度ごめんと口にした。

『それで、おねえちゃんどうするの? 代表候補生辞めるってことは、機体も回収されちゃうんでしょ?』

「そう。乱に連絡したのはそのことなのよ」

はあ、とよく分かかっていない返事を電話の相手である乱音は零す。とりあえず続きを聞いてからと何も言わない彼女に向かい、ちよつとお願いがあるのよと鈴音は述べた。

「あたしの『甲龍』、乱が使ってくれない?」

『……え?』

「乱は代表候補生っていつてもまだ専用機ないでしょ? どうせなら、知ってる相手に渡したいなってね」

『いや、アタシ台湾の代表候補生んだけど』

「そこんところは多少融通利くから。……どう?」

受話器からは何も返事は聞こえてこない。何かを悩んでいるよう

な、小さな息遣いが耳に届くのみである。まあそりやそうか、と鈴音も小さく溜息を吐きながら暫し答えを待ち、そして時間が掛かりそうだと判断して口を開きかけた。まあ返事は後でもいいから。そう言いかけた。

『分かった。おねえちゃんの機体は、アタシが継ぐ』

「いいの？ 自分で言つといてなんだけど、そんなすぐに決めていいもんじゃないと思うわよ?」

『もたもたして他の誰かが使うことになったら絶対後悔するもん』

そっか、と鈴音は笑う。それじゃあお願いするわよ、と続け、任せとという力強い返事を聞いて顔を綻ばせた。

これで憂いもなくなった、と鈴音は伸びをする。綺麗さっぱり中国の代表候補生を辞められる、と電話口の向こうにいる乱音に語った。

『ところでおねえちゃん』

「ん?」

『代表候補生辞めても、学園いられるの？ 補助金とかその辺なくなっちゃうでしょ?』

「……………」

『鈴おねえちゃん?』

「そ、その為の『しのの』入りよ！ バイトも兼ねて、学費を払ったりとか、その辺ちよつと束さんに土下座してくるから」

『本当に猪だなあ…………』

こういうところは反面教師にしよう。毎度のことながら、と嵐乱音は溜息混じりで心に誓った。

「それで？ 御当主サマは納得したのかい?」

「してない、んじゃ…………ないかな?」

駄目じゃないか、と白衣の女性は笑う。笑い事じゃないと頬を膨らませた簪は、そんなことより篝火さんと彼女の名を呼んだ。

彼女——篝火ヒカルノの机の上には現在開発中の新機体のデータ

が表示されている。日本の代表候補生である更識簪が、『代表候補生として活動しない時のための』新機体のシステムプログラムだ。

「しっかし、無茶するねえ。なんだってまたわざわざ暗部になろうだなんて」

「そうしないと……友達が、無茶するから」

「だったらいつそ自分も無茶しようってか。あつはつは、若いね」

笑い事じゃないでしょうと作業をしていた所員がぼやいた。いやいや笑い事だよとそんな所員に返したヒカルノは、さてではと簪に目を向ける。

現在の場所は倉持技研の第二研究所ラボ。『打鉄式』の開発を担当した部署であり、その責任者であるヒカルノとは簪もある程度親しくしていた。だからこそ、今回の無茶振りをお願いしたのである。「ま、こちらとしてはそっちの持ってきた草案を形にするだけの簡単なお仕事だけどねえ」

いつそ代表候補生とか暗部とか辞めてこつち来ない？ そんな彼女のお誘いを丁重に断りながら、しかし何か手伝えることがあったら遠慮なく言ってくれと簪は述べた。

とりあえず今のところはないよ、とヒカルノも所員もそう返し、だから応援でもしてってくれとヒカルノが続ける。それはそれでどうなのだろうかと苦い顔を浮かべた簪は、じゃあ向こうで本音でも手伝ってこようと腰を上げた。

「お、本チャンのお手伝いにも行くのかにやー」

「その、つもり……ですけど」

「おーけおーけ。あつちもあつちで機体のパーツ調整してると思うから、応援してあげてよ」

簪が暗部に入るのならば、当然自分も。そう言っただけの本音は本音で、自分の機体をベースに完全なる専用機を開発中であつた。『葛の葉』は残し、それ以外はほぼ新規パーツで組み上げられたそれは、まさにワンオフ機。

「あれで案外……凝り性だよね」

ふふ、と移動しながら簪は笑う。そのおかげで自分の新機体も完成

が早まっているのだから、本音には感謝しなければ。そんなことを思いながら廊下を歩き。

「……何で、ついてきてる、んですか?」

「いやだって私も今暇なもの」

「所長ですよ、ね?」

「偉い人ってのは、大抵ふんぞり返ってるのが仕事なのさ」

絶対違うと思ったが、口に出すのは憚られた。言っても無駄だと悟ったからだ。

その代わり、といつてはなんだが。ふと思い出したことを言葉にするべく隣でケラケラ笑っているヒカルノへと向き直った。ちよつとした意趣返しのもりで、それを口にした。

「この間……『打鉄式』と、本音の『打鉄改』を篠ノ之博士に修理してもらったの、だけれど」

「……うん、そうらしいね。それで?」

ピクリとヒカルノの眉が上がる。何を考えているのか分からない人をからかうような態度が、一瞬にして鳴りを潜めた。それを知ってか知らずか、簪は話を続ける。機体を見て束が彼女に述べたことを、隣の女性に伝える。

「『案外いい仕事するねえ、同級生』……だって」

「……そうかい」

髪を掻き上げた状態のまま、頭痛を堪えるようにヒカルノは俯く。その表情は隣の簪からは窺えない。笑っているのか、怒っているのか。それすらも分からない。

突如彼女が顔を上げた。やる気なさげであったその瞳は細められ、変人に変態であった篝火ヒカルノから、倉持技研第二研究所所長篝火ヒカルノへと変わっていく。

「簪ちゃん」

「はい」

「君の新機体と、本チャンの『九尾ノ魂』、急ピッチで仕上げてやろうじゃないか」

「はい。……手伝います」

「ごき使うよ？」

「望むところですよ」

ふう、とラウラはベッドに寝転がる。年頃の娘のようなその行動に、随分と腑抜けてしまったなと彼女はひとりごちた。

だが、それも悪くない。そんなことを思いながら彼女はゆつくりと目を閉じる。

「どうした？ 随分とお疲れのようだが」

「……ん」

気付くと隣に同じ顔が座っていた。その顔を見て現実空間ではないことを確認したラウラは、寝転がったまままあ少しなと返す。

「臨海学校の事件で協力出来なかったのが少し歯痒くてな。ある程度行動の許可を取ろうとしたのだが」

はあ、と寝転がったままラウラは溜息を吐く。そんな彼女を見ながら、ああそれは済まなかったと少し切り揃えた前髪と金の双眸が違いである同じ顔の少女は頬を掻いた。

「私が原因だな。どうせ大人しく封じられていればよかったのにかぼやいていたのだろう、あのハゲ」

「お前がいた時より発言力は小さくなってはいるぞ。とはいえ、まあ多少は影響もあるからな」

クラリツサがぼやいていた、とラウラは苦笑する。旧ラウラ、現クローエを更生させた千冬達の協力をするのは彼女達にとって至極当たり前のことなのだ。が、そんな心情だけではどうにもならないことややはり存在しているわけで。

体を起こした。どちらにせよ気に病むことはないというラウラは笑う。元々自分が異物で、ある意味我儘を言って主人格になっているだけなのだ。本来の主であるクローエを邪魔に思うようなことがあるはずがない。

「もうすぐ夏休みだ。一度祖国に帰り直接交渉をしましょう」

「大丈夫か？」

「心配いらん。私を誰だと思ってる」

ラウラ・ボーデヴィツヒ、クロエ・クロニクルの親友だ。そう言っ
て笑うラウラを見て、クロエも笑う。それなら確かに大丈夫だなと声
を上げて笑う。

そうして二人顔を合わせて笑い合うと、さてではそろそろ起きるか
とラウラは再度寝転がった。

「疲れは取れたか？」

「ああ、わざわざこっちで話をしてくれてありがとう」

「気にするな、私は気にしない」

「そうか」

ふふ、とラウラは笑う。ではもう一頑張りするとしようと彼女は
ゆっくりと目を閉じ。

ああそうだ、と目を開けることなく隣に座っているであろうクロエ
に声を掛けた。

「クラリツサがな、せっかくの二重人格キャラなのに口調とか被って
るとキャラが薄くなるのかなんとか騒いでいてな」

「は？」

「今度会った時に色々の特訓をするとかなんとか」

「おいちよつと待てラウラ」

「せっかくだからクロエを丁寧口調にしてやろうと張り切っていた
ぞ」

「張り切るな！」

まあ頑張れ、と親友宣言をした少女に投げやりなエールを掛けなが
ら、ラウラは夢の世界から旅立っていくのであった。

色々と情勢が変わったことで、ここIS学園のある街にはちよつと
した射撃場がある。主にISパイロットが生身の特訓に使うように
と建てられたものであったが、結局は新たなレジャー・スポーツス

ポットして機能しているのが現実であった。

そんな場所でペイント弾をストレス解消にぶつ放している男性客は、やってきた新たな客を見て思わず固まった。

いかにもお嬢様といった風貌の、英国人だと思われる少女。そんな人物がスカートを翻しながらゆっくりと定められた射撃場のスペースに立つ。リボルバーを軽く回し、弾が込められているのを確認すると、銃から一番遠い的へと視線を動かした。

ちよつとした好奇心で来たのだろう、と男性客達は思う。あんな少女がこんな場所に来るのはそれ以外にまず考えられない。まさかあの見た目で射撃が趣味ですというわけでもあるまい。

そう結論付けていた客達は、だから少女がクルクルと銃を回すと目の前のカウンターの上に置いたのを見て、ほらやっぱりと苦笑した。大方やっぱり怖気づいたか、あるいは思ったより重かったり難しそうだったりしたので諦めるかどうか迷っているのだろうと推測した。

だから、次の瞬間カウンターの上の銃が消え去り、そして猛烈な勢いで銃声が聞こえたのを耳にして客は皆目を見開いた。銃は少女の右手に握られており、左手が撃鉄に覆い被さっていることからシングルアクションの連射を行ったのだろう。そうは思っても、理解が追いつかない。あんな少女がそんなことを出来るはずがない。誰もがそう考えていた。

「……やはり、命中に難ありますか」

ううむと少女は唸る。くるりと銃を回すと、今度は別の銃を手にとった。そして同じように目の前に置くと、ふう、と息を吐く。

瞬間、銃声と共にリボルバーは少女の手に握られていた。今度聞こえたのは一発。ふむ、と的を眺めているところからすると、ある程度思った通りの結果が出たようであった。

「鈍っていますわね」

やれやれ、と少女は肩を竦めた。その言葉に客達は先程の射撃の結果に視線を向ける。

最初の連射は位置こそバラバラだが全弾命中。二回目の射撃は中心を僅かに外していた。これで鈍っているのならば、本調子ならばど

うなるというのか。

そんな客の驚愕を余所に、少女は——セシリア・オルコットはまあ気晴らしに來ただけですしと再度銃を構える。今度は『クイックドロウ』なしで、普通に撃つらしい。

「このところISは使えない運動も碌に出来ないと拘束されっぱなしでしたもの。今日くらいはつちやけても罰は当たりませんわ、つと！」

連射したそれは的の赤い部分に寸分の狂いなく撃ち込まれる。打ち切った薬莖を殻入れに叩き込むと、素早く装填し再度連射した。瞬く間に一番遠的がペイント弾で真っ赤に染まっていく。

それを何度か繰り返していたセシリアは、ある程度満足したのか伸びをすると銃を返却、悠々と射撃場を後にする。

『拳銃姫』と後々噂されるようになることなど露知らず。

「さて、次は——」

言いかけて言葉を止めた。自身のスマホが震えているのに気付き、取り出し画面を確認する。その表情がわからさまに苦いものに変わった彼女は、しかし出ないわけにもいかないと通話にスライドさせた。

「どうしました?」

電話口の向こう側から聞こえてくるのは呆れたような声。どうしたもこうしたもないだろうと前置きしたその相手は、この間の事件のことを再度蒸し返す。それは以前も話したではないですか。そう伝えるが、相手はそういう問題ではないと繰り返すのみだ。

「では、何が問題なのですか? わたくしとしては、そのまま失効してくださいっても一向に構わないのですが」

そういうわけにもいかないのだと相手は述べる。それを聞いたセシリアはげんなりした表情で溜息を吐いた。何で鈴さんはあつさり所属変更出来たのに自分は出来ないのか。そんなことが頭をもたげ、それは違うと頭を振った。自分はオルコット、代表候補生以前に、そこを違えるわけにはいかない。

「分かりました。では、この件は再度オルコットとして答えを出しま

すわ。それでよろしいでしょうか」

どのみち今の自分はまともパイロットとして動くことが出来ない。最低でも夏休みまでは安静にしていなくてはならないのだ。相手もそれは分かっているらしく、渋々といった様子ではあるが納得をしたらしい。一言二言述べ、そこで通話は終わった。

やれやれ、とセシリアは暗くなったスマホの画面を暫し見詰めると、次の気晴らしに向かおうとそれをカバンに仕舞おうとする。

「げ」

そのタイミングで再度震え、着信を知らせるように画面が明るくなる。表示されている名前は。

「……… 凶ったようなこのタイミングが、本っ当にムカつきますわ」

そうは言いながらも口角を上げているセシリアは、その相手と通話すべく先程と同じように指を画面上でスライドさせた。

表示されていた名前は、彼女の父親である。

壁にもたれかかり、空を見た。晴れ渡っているそれは自身の気持ちを嘲笑うかのようで。

「………」

口を結び、ただただ空を見る。あんな風に晴れ渡るには一体どうすればいい。自問自答しても答えなど出てこない。

否、違う。とうに答えなど出ているのだ。それを認めるのが嫌なだけ。

「マドカなら、なんて言うかな」

好きにすればいい、だろうか。そんな甘言に騙されるな、かもしれない。別に聞くことはすぐに出来るので、実行に移せばいいだけなのだ、どうにも彼女はそれをする気にならなかった。

頭に浮かんだように自分に向き合ってくれるならばいい。だが、もしも、裏切り者だとこちらを見たら、『亡国機業』のエムとして、裏切り者デゼールを始末すると武器を向けてきたら。

きっと立ち直れない。デゼールは、シャルロット・デユノアは抵抗することなく消えるだろう。実際に殺されずとも、その行動だけで十分だ。

「……何で。私は、マドカを信頼出来ないの……」

違う、とデゼールは叫ぶ。信頼出来ないのは皆一緒だ。一夏達だつてそれ以上に信頼することが出来ない。デゼールの姿で、素顔を見せて。それで何だお前だったのかと、それでも友人だと言ってくるなどという希望は、微塵も持ち合わせていない。

なんて寂しく、浅ましい。自嘲するようにあははと笑い、もうどうでもいいとばかりに地面にへたり込む。

ふと、そんな彼女に影が差した。何だとゆつくり顔を上げると、そこには先程信頼出来ないなどと口にしてしまった親友の姿が。

「……何で、ここに？」

「お前の様子がおかしかった。だから来た」

「それ、って」

「シャル、お前が心配だったんだ」

正体がバレるかもしれないという危険を冒してまでも、直接会いに来た。そう言い放ったマドカを見て、デゼールは——シャルロットの表情がくしゃりと歪んだ。笑いながら、その目尻に涙が溜まっていた。

そんな彼女の前に屈んだマドカは、ゆつくりとその体を抱きしめた。心配するな、と頭を撫でた。

「私はお前の親友だぞ。どんな答えを出しても、それは変わらない」

「……ほんとうに？」

「ああ、今まで私が嘘を吐いたことがあったか？」

「しよっちゆう」

「ははは、よく覚えてるじゃないか」

だが、今の言葉に嘘はない。そう言い切ったマドカがどんな表情をしているかは、シャルロットには分からない。だが、その体から伝わってくるぬくもりで十分だった。親友だから、信頼出来る。そう思わせてくれるのに十分だった。

「ねえ、マドカ」

「何だ？」

「私、『亡国機業』やりたくない」

「そうか」

「家が嫌い、親が嫌い、同僚が嫌い」

「ああ」

「あんな連中と一緒にいるより、友達と笑っていたい」

「ああ」

そこで一度言葉を止めた。もうあらかた言ってしまったているが、それでももう一度だけ覚悟を決めるために、息を吸い、吐いた。

「私、一夏達に、全部話そうと思う」

「……そうか」

「怒らないの？」

「怒ってどうする。シャルがやりたいなら、やればいい」

ただ、とマドカは続ける。向こうが受け入れてくれるかどうかは知らんぞ。そう言っただけ彼女から少しだけ離れると意地悪そうに笑みを浮かべた。その笑みの意味は、つまりそういうことである。

自分ならばお前を受け入れる。

「うん、ありがとうマドカ」

「それで、いつやるつもりだ？」

「終業式の日。そこで決着を付けて、夏休みと同時にフランスに帰るよ」

勝とうが負けようが、もう『亡国機業』になど所属しない。そう決意した彼女の目を見て、マドカは仕方ないなと苦笑する。それまで何か妨害がないように、自分が護衛をしてやろう。そう言っただけ立ち上がり腕組みをした。

「いつそのまま、私と新しい組織立ち上げない？」

「それもいいかもしれんな。……まあ、私の場合はお前以上に呪縛がある。それを解くのはそう簡単じゃないが」

「そっか……うん、ごめんね、我儘言っただけ」

「気にするな、親友だからな」

そう言つて笑うマドカを見て、シャルロットも笑顔を見せる。よし、と立ち上がったシャルロットは、じゃあとりあえずとマドカに手を差し出した。

「スツキリしたらお腹空いちやつた。どこか食べに行こう？」

「割り勘だぞ」

「分かつてるよ」

ぎゅ、とシャルロットの手を握る。彼女と同じように、マドカもまた、このぬくもりに安心を覚えていた。決して失いたくないものだと、そう思っていた。

だから織斑一夏が、『しののの』が彼女を排除しようとするならば全力を持って抵抗するつもりでいる。逆に、受け入れてくれるのならば。

「……私も、大概馬鹿だな」

「どうしたの？」

「なんでもないさ」

親友のために、自分勝手に行動するだけなのだから。そんなマドカの眩きは、言葉になることなく呑み込まれた。

N039 「改めて、自己紹介をしようか」

「デゼール、裏切っちゃったかー」

あーあ、と二人のセンサー範囲外からそれを眺めるのはIS学園三年生の制服を纏った少女。はてさてどーすつか、となどと軽口を叩きながら端末を操作しどこかと通信を繋ぐ。

向こうの返事を待たずして、彼女は先程一人で呟いた感想をそのまま相手に報告した。

「で、どうする？ 始末する？」

正直面倒だからやりたくないんだけど。そう続けた少女は、通信の相手が溜息を吐くのを聞いて苦笑した。冗談、と訂正するが、それが本気だと向こうも分かっているのだろう。はいはいと軽く流してしまふ。

『どちらにせよ、こちらから手を出すことはないわ』

「それは、どうして？」

『あれはデユノアの管轄よ。こちらで勝手に処罰したら、それを機に向こうが凶に乗るわ』

「めんどくせえ」

そうね、と通信の相手は笑う。始末するのも面倒だから丁度いいでしょ、と続けられ、少女は違いないと笑みを浮かべた。

そのまま暫しの沈黙。その後、それにね、と通信の相手は溜息混じりに言葉を紡いだ。

『エムが護衛についているわ。襲撃したら確実にあの娘が向かってくる。……全力でね』

「そいつはまた」

『そして、エムが全力で彼女を護るために戦えるということ——』あの人』が容認しているということ』

げ、と少女の表情が歪む。それじゃ絶対手出し出来ないじゃないか、そう返すと、ええその通りねという返事が来た。

『どのみち、このことが知られた時点でデユノアが勝手に動くわ。私達は静観していればいい』

「了解」

じゃあ監視も取りやめるから、と少女が述べると、別に構わないという答えが来る。センサーの監視と通信を同時に終了させながら、少女はやれやれと肩を竦めた。もうすぐ夏休みだっていうのに、色々面倒なことが起きるな。そんなことをついでにぼやいた。

「せんぱーい、って、あれ？　どうかしたツスカ？」

「んー？　いや、夏休み前ってのはなんでこう憂鬱なのかってな」

「普通逆じゃないツスカ？」

「アホ、私は三年だぞ。夏休みは忙しいんだ」

「今めっちゃダラケてましたよね？」

そう言ってお下げの少女はジト目で目の前の彼女を見る。それに對し、今丁度面倒な仕事が終わって一息ついていたと彼女は返した。

絶対ウソだな、と少女は思ったが口にはしない。しないが、どうやらお見通しだったらしくこめかみをグリグリといじられた。あぎやー、と凡そ見目麗しい少女らしくらぬ悲鳴を上げたまま、暫しの間床に蹲る。

そんな少女を見ながら、彼女はなあフォルテ、と声を掛けた。

「なんスカダリル先輩」

「同僚がいきなり仕事辞めて別の会社行くってなったらお前どうする？」

「滅茶苦茶唐突な質問ツスね。え、それは正式な手続きですか？」

「……多分正式に手続きすると絶対辞められないだろうから、バックレだな」

「そんなブラック企業は先輩もちやっちゃと辞めるべきツスね」

「いや私の待遇は割といいぞ。身内が上役だからな」

「これが格差社会……！」

ふざけたような会話。だが、ダリルのそれは、口調以上に本気であった。ああ言ったものの、どうにも気になって仲のいい後輩にそれとなく聞いたのだ。

まあ、そうだよな。そんなことを思わず呟く。自分のように、ただただ学生をやりながら『亡国機業』で暴れるようなものとは違う。雁

字擲めで、自分が出せなくて。そんな中でも、絆を作った。唯一ともいえる『亡国機業』での親友に、友達だと言つてのける程度には深く、固い絆を。

「ま、そりゃ辞めるわな」

「先輩？」

「こつちの話だ」

手出しはしないが、助けもしないぞ。心の中で聞こえないであろう相手にそう述べると、気晴らしに何処かに行くかとダリルはフォルテに声を掛けた。

「ちなみにフォルテ、同僚の辞めた穴を埋めるためにどうだ？」

「嫌ですよそんなブラック企業!？」

「私と毎日一緒に仕事出来るぞ」

「嫌ですよそんな仕事！」

「何でさつきより力強く否定すんだよお前は！」

明日から夏休み、と生徒達ははしゃいでいる。夏期休暇の予定をどうするか悩むのもまた楽しい。そんな表情で各々が学院から寮に戻り、帰省するかここで夏を満喫するかと騒ぎながら思いを馳せるのだ。

そんな生徒達とは少し趣の違う一行がとあるアリーナにいた。アリーナ自体は夏季休暇の特別解放がされているためそこに生徒がいようと何ら問題がない。問題なのは、その生徒達の纏う雰囲気と、そして。

「ご丁寧にも人払いしてるんだな」

「それはそうだよ」

一夏の言葉に目の前の相手は苦笑する。これからやることは他の人に見られるわけにはいかないからね。そう言いながら視線を動かした。

一夏の後ろには思い思いの表情をした少女達がいる。いつもの

面々、と言つても差し支えない、一年生の専用機持ち達だ。他の生徒から『織斑組』などと呼ばれる彼女達は、何も言うことなくそこに立っている相手を見ている。

「それにしても、まさか皆来てくれるとは思わなかったよ」

「呼び出されたのだ、来ないわけにはいくまい」

彼等と対峙している相手、デゼールの言葉に筈はそう返す。そんなものかな、と頬を掻く彼女であったが、他の面々が同じように頷いているのを見て肩を竦めた。本当に感化されているね。そんなことを思わず呟く。

「呼び出しの文面を見たのならば、内容もちやんと分かってきているんだよね？」

「当然よ。……最後の戦いつてのがわけ分かんないけど」

「そのままの意味だよ。私にとつての、最後だ」

鈴音が怪訝な表情を浮かべるのを気にすることなく、まあそういうわけだからと既にISを纏っていたデゼールは武器を構えた。勝負をしてもらおう、そう言つて真つ直ぐに一夏を見た。

「勝負は、一対一つてことでもいいのか？」

「受けてくれるの？」

「ここに来たつてことは、それ以外ないだろ？」

『白式』を展開、『雷轟』の装備を取り出し構える。何度も戦つている割に、きちんと決着もついていないから丁度いい。そんなことをついでに考えた。

デゼールはそんな彼を見て満足そうに笑う。それでこそ一夏だと笑みを浮かべる。そしてその後ろにいる彼女達も、そこに異議を唱えることなく邪魔にならないように移動する。それを見て更に笑みを強めた。

「どちらにせよわたくしは療養中。戦いたくとも出来ませんわ」

『甲龍』返却したから機体ないし」

「……まだ、開発中」

「もう少しで出来るけどね」

セシリア、鈴音、簪、本音は言い訳のようなそんな理由を述べなが

ら、だから任せたと観客となる。戦いたくない、というわけではないのだろう。何か理由があるのだ、と察しているのだ。

でなければ、わざわざ『亡国機業』のメンバーが果たし状を出して真つ向勝負を挑んでくるはずもない。介添人まで連れて、だ。

「無論、そちらの介添人は手出し無用だな？」

箒は視線をデゼールからエムへと向ける。サングラスで顔を隠している彼女は、ふんと鼻を鳴らすと当たり前だと言いつつ放った。あのクソ野郎共と一緒にするな、とついでに言い捨てた。

「あの、オータムとかいう奴か」

「……知っているのか？」

「クロエが出会っていたらしい。お前にもな」

ラウラのその言葉にエムは、マドカは舌打ちする。あの時の電脳空間の記憶をどうやらある程度はつきり持ち合わせているらしい。そう判断した彼女はジロリとラウラを睨むと、しかし何かを言うことなく一歩下がった。今から何かを言ったところで何も変わらないと判断したのだ。どのみち、デゼールはここで正体を明かすつもりなのだから。

「さて、始めようか」

「ああ、いつでもいいぜ」

ちらりとマドカを見る。ほんの少しだけ目を閉じたマドカは、二人を真つ直ぐに見詰めると邪魔にならない距離まで下がった。そうした後に、合図だと右手にブレードを喚び出す。

天に向けられ投げられたそれがヒュンヒュンと回転し、突き刺さる。そのタイミングで双方は一気に飛び出した。構えている武器は共に銃、狙いはどちらも頭。

「そこっ」

「ちい」

が、当然のように射撃戦ではデゼールが勝る。一夏のビームガンは狙いを逸れ、彼女のアサルトライフルはしっかりと目標を捉えている。それでも彼は勘だけを頼りにその銃撃を躲しきった。お返しだ、とばかりに間合いを詰めた一夏は、銃を放り投げるとブレードを取り

出し振りかぶる。

デゼールのその動きは勘ではない。半ば確信めいた予測である。一夏ならそうする、というある意味信頼の賜物である。

「読まれた!?!」

「……違うよ。分かったのさ」

タッグトーナメントでパートナーだって努めた。勘と野生全開で動くのでなければ、彼の動きの癖くらいは分かって当然だ。左手のロングライフルでブレードを受け止め、展開することで弾いて一夏の体勢を崩したデゼールは、そのまま銃口を彼の土手っ腹に向け。

「……撃たないよ」

「だろうな」

『真雪』に換装していた一夏がビームランチャーを構えているのを見てそれを下ろした。そこで踏み止まれるのもまた、分かっていたからである。知っている、のではない。分かっているのだ。

「ねえ、一夏」

「何だよ」

ふう、と息を吐いたデゼールは、少しだけ距離を取ると指を一本立てた。ちよっとした賭けでもしようよ。そう言いながらヘルムとバイザーで隠されていない口角を上げる。

「賭け?」

「そう。この勝負、こちらが勝ったら皆で私の野望に協力してもらおう」
『亡国機業』に入れたってことか? そりゃ絶対に負けられ——」

「違うよ」

ゆっくりと首を横に振る。言うのか、とサングラスの下で目を細めたマドカをチラリと見たデゼールは、後もう少しと視線で返した。お互いに目元は見えていないはずなのに分かるのは、付き合いの長さ故か、あるいは深い信頼か。

ともあれ、デゼールは一夏の言葉を訂正した。『亡国機業』は関係ないと言いつつ放った。

「何せ、私はあんなどころもう辞めようと思っっているからね」

「……は?」

何言ってるんだこいつ、という目でデゼールを見る。が、当の本人は涼しい顔で言葉通りだと続けた。最後の戦いというのもそういうことだと観客席を見た。

「そういうわけだから、私は『亡国機業』を叩き潰したい。そのための戦力になってもらおうと思ったんだ」

「それを信じてるのか？」

「……どちらでもいいよ。私のやることは変わらない」

言葉を止めると、下ろしていた武器を構えた。賭けの内容は伝えただけで、後はそれに乗るかどうか。こちらが武器を構えれば、同意したとみなす。大体そんな意味合いを持った行動なのだろう、と一夏は思った。だからすぐさま武器を構えず、暫し真っ直ぐに相手を見る。

ヘルムとバイザーでどんな表情をしているかは分からない。唯一見える口元は真一文字に結ばれている。

だが、それでも。一夏は何故か、目の前の彼女が震えているように見えた。拒絶されるのを怖がっているように見えた。

「なあ」

「……何？」

「賭け、俺が勝ったらって部分が抜けてるよな？」

「自分が負ける予想は立てないからね。何か要望があるのかな？」

「あるぜ。俺が勝ったら」

友達になれ。いつぞやに聞いたようなセリフをのたまいながら、一夏は笑って拳を突き出した。これで賭けは成立だと言わんばかりに武器を構えた。

そんな彼をデゼールはぼかんとした表情で見やる、そして我慢出来ないといった様子で笑い出した。腹を抱えて、大声で笑った。見ると介添人であるマドカが呆れたように額に手を当て頭を振っている。それでも口角が上がっている辺り、大体自身と同じ感想を持ったのだろう。

「ねえ一夏」

「何だよ」

「本当に馬鹿だね」

「何でだよ！」

「クロエにも同じこと言われたじゃない」

「へ？ いやまあ確かに状況はあの時と似てるか……ん？」

引っかかりを覚える。まるで見ていたかのように、当事者のように語る目の前の相手に、違和感を覚えた。何かを見落としていたように感じた。

「まあ、いいか。……確かに、『全力で喧嘩して、その後お互い笑い合っ
て。そんな状況だぜ、楽しいじゃねえか』って感じかもね」

「お前、何を言ってる」

まさか、と言う声が観客席から聞こえた。セシリアと簪が目を見開き、お互いに顔を見合わせ頷く。他に分かっているような面々は、と視線を動かすと、全く動じていないラウラが目に入った。

「ラウラさん……貴女まさか」

「ああ、いや。これでも驚いているぞ。というか今、クロエから聞いた」

顔に出ていないだけだ、とラウラは目を細める。そしてその口にした言葉を耳にしたセシリアと簪は自身の予想に確信を持つことになる。

そのタイミングで、一夏も目の前の相手が見知った相手であると感じ付いた。ただ、彼の記憶と目の前の少女は合致しない。いやまさか、でもしかし、と混乱している様子である。

「……そろそろいいかな？ ねえ一夏」

変声機を停止したのだろう。目の前の相手が発する声が明らかに聞き覚えのあるもの変わった。手に持っていた武器を収納すると、その両手でヘルムとバイザーの装着を解除していく。隠されていた顔が顔になり、その瞳が真っ直ぐに一夏を見詰めている。

「改めて、自己紹介をしようか。『僕』はデゼール、IS学園での生徒としての名は——」

間違いない。その声も、その顔も。一夏にとっては、否、この場に
いる全員が見慣れている相手。一年生の専用機持ちの一人であり、こ
このメンバーに加わることもある一人であり。

一緒に馬鹿をやっていたはずの、大切な友達の一人である。

「——シャルル・デュノアだ」

「シャルル……!?!」

「随分と驚いているね。そんなに意外だったかな?」

「当たり前だろ!」

思わず叫ぶ。転校してきてから今日まで、共に過ごし、色々な出来事を共に経験した相手。それが目の前の、『亡国機業』の一員であったなどと言われて冷静でいられるはずがない。そんなことを思いつつ、一夏は一体いつからこんなことに、と絞り出すように言葉を続けた。

「最初からだよ」

「……最初、から?」

「そう。『僕』は元々君達の一員として潜り込んで『亡国機業』の活動をサポートする役目だったんだ」

ははは、とシャルルは笑う。だからそのための工作も色々やったよ。そんなことを言いながらちらりと視線を観客席に移す。

「まずは一夏に信頼されるために、ゴーレムとの戦闘のピンチに駆け付けた」

「あの時のあれから……」

「そう。そして皆の一員になったところで活動開始さ。ラウラの中のクロエを目覚めさせる手助けをしたり、一夏の白式を換装出来なくさせたりね」

シャルルの笑みは変わらない。まるで貼り付けたかのようにその表情を保っている。他の表情など出来ないと言わんばかりに、ただそれだけを浮かべている。

『銀の福音』が感染したウイルスも、『僕』の攻撃で傷付いた箇所を媒介にしたんだよ」

「全部、お前が」

「そうだよ」

俯いてしまった一夏の表情は分からない。眼の前にいるシャルルにも、観客席にいる箒達にもだ。だが、少なくともこちらの方が冷静だろうとセシリアと簪は視線を動かした。自分達二人とクロエが中にいるラウラ、何だかんだで動じないように見える本音。そして。

「……箒」

「どうした？ 鈴」

「こんな時、どういう反応をすればいいんだろう。何だか感情が色々ぐちゃぐちゃに混ざって、自分でわけわかんなくなってる」

「そうか。ちなみに私は、呆れているぞ」

「呆れる？」

「ああ。自分の馬鹿さ加減と、一夏の馬鹿っぷりと、デユノアの勘違いの酷さにな」

「……わけわかんない」

なんだそれ、と溜息を吐く鈴音に笑みを返した箒は、視線をアリーナ中央の二人に戻した。あの馬鹿者は、何と言うだろうか。そんなことを呟いた。

「……そう、だから全部嘘っぱちなんだ。一夏達との友情ごっこも、全部」

「シャルル」

「それも嘘っぱちさ。シャルル・デユノアなんて人間は、本来存在しない」

二人目の男性パイロットは、虚構でしかなかった。己の女である体を見せつけるようにくると回転したシャルルは、だから全部が全部嘘だったのだともう一度述べた。

そうして話は終わりだと武器を再度構える。後は勝負を続けるだけだとその銃口を彼に向ける。

「そうかよ」

ポツリと呟いた。顔を上げた一夏は、真っ直ぐに目の前の相手を見詰めると同じように武器を構えた。勝負の続きだとスラストーにエネルギーを込めた。

爆発するかのような加速で一気に距離を詰める。目と鼻の先まで

きた一夏は、その状態で振りかぶっていたビームソードを袈裟斬りに
難いだ。咄嗟のことではあったが、それに反応をしたシャルルは自身
の近接武装で受け止め、弾く。

その瞬間には既に一夏は『飛泉』に換装を終えていた。手を離れた
ビームソードの代わりに取り出した太刀を真っ直ぐに突き出す。

「なっ!？」

驚愕と舌打ちをしながら体をずらしそれを躲したシャルルは、右足
に何か違和感を覚える。ガシヤリ、とチエーンアンカーが絡みついて
いるのがセンサーで確認出来た。繋がっている先は、『白式・飛泉』の
腰部。そして視界の先には飛来してくるブーメラン。

「がっ」

肩を削られた。だがまだその程度だ。そんなことを考えつつアサ
ルトライフルで弾幕を作ると、低防御の『飛泉』を『真雪』に換装し
逃げられる。その切り替えの速さと思いい切りの良さは、考えて出来る
ことではない。

「ただの勘、か」

「ああ、ただの勘だ!」

そう一夏が叫んだ時には、既に『白式』は『雷轟』であった。シャ
ルルがブーストを吹かし距離を取ろうとしているタイミングで、であ
る。左手の実体盾を振りかぶり、叩きつけるように突き出す。それが
躲されると、今度は右手のビームブレードを逆手に持って振り抜く。

「な、めるなあ!」

シャルルの、デゼールの機体の左腕にマウントされていたロングラ
イフルを展開、受け止め体勢を崩す。先程の攻防で成功したそれを再
度、と行った行動は、しかし重大な抜けがあった。

勘と野生全開でなければ。先程自分がそう思っていたことを失念
していたのだ。

「——言っとくがな」

ブレードのビーム部分が消失する。エネルギーを瞬時にカットし
たことで弾かれるはずであった刀身を無くした一夏は、そのまま投げ
るように右手から左手に柄を移動させた。体のひねりを逆に回転さ

せ、今度は左手で突きを放つ。

「嘗めるな、はこつちのセリフだ！」

「こつちで合ってるさ！」

それでも、シャルルは反応した。振り切っている左手を無理矢理捻り、肘打ちの要領で振り下ろす。機体の関節部と自身の肩が嫌な音を立てたが、知った事かと彼女は叫ぶ。同時に右手に取り出したナイフで一夏のこめかみを狙った。

ぐるん、と一夏の首が回転する。ナイフの一撃を首を回すことではなした彼は、しかし視線を外すことなく相手を睨み続けた。双方共に攻撃の隙を晒している、どちらが先に動いても、その一撃はカウンターとなるはずだ。

息を吐き、ステップで距離を取った。元来ISは搭乗者のバイタルをある程度の水準で保たせる機能が搭載されている。勿論万能ではないが、それでも宇宙で活動することを当初の想定としていた以上、その基準値は低くはない。

にも拘らず、一夏もシャルルも肩で息をしていた。機能をカットしてでも相手を打ち倒すエネルギーを用意したのか、それとも二人の集中が基準値を超えたのか。

「息が上がってんでシャルル」

「一夏こそ」

そう軽口を叩きながら口角を上げる。裏切った、裏切られた。そんな関係のはずの二人が、お互いに笑いあっているのだ。

観客席にいる面々も、そんな二人を見てほんの少しだけ表情を安堵したものに変わった。まあつまりそういうことなのだ、と現在敵である彼女を見やった。

「……結局、シャルルさんはシャルルさん、というわけですか」

「多分……」

セシリアと簪は考察した結論といった風に言葉を述べる。そんなものかな、と本音は返し、そんなものだろうとラウラは返した。

そしてセシリアの言葉に一番反応したのは鈴音だ。ぐちゃぐちゃであった思考を少しずつ解し、一本にしていく。そうして作り上げた

答えを彼女が口にした言葉と照らし合わせ、一人納得したように頷く。

そこまでして、鈴音はようやく箒が言っていた意味に気が付いた。

「ねえ、箒」

「何だ？」

「さっきのやつだけど」

「デュノアの勘違いの酷さか？」

「うん。それってつまり、そういうこと？」

言葉にせずに頷くに留める。そうしながら、同様に一夏の馬鹿っぷりと己の馬鹿さ加減もだと続けた。ちなみに鈴音はそちらについては分かっている。ああうん、と曖昧な返事をするのみである。

「これは分かかってない返事ですわね」

「そういうのは、言ってあげない方が……情け、かなって」

「口にしてる時点でアンタ等同列じゃない！」

があ、と鈴音が吠える。どうどう、と本音とラウラに宥められてぶうたれながらも定位置に戻った。向こうの戦いの様子はいいのか、とツツコミを入れるものは生憎誰もいない。

「自分の馬鹿さ加減は、単純に奴の変装を見破れなかったことについてだ」

「……確かに箒さんならば出来そうな気がしますわね」

「駄目、だったの？」

「思い返せば、奴はこちらに肌を見せることが殆どなかった。ISスーツも極力露出の少ないものを着ていたからな」

「用意周到、というわけか」

体の傷云々もそれに信憑性を持たせる偽造だったのだろう。そんなことを呟きながらラウラがうんうんと頷く。軍人さんのそれでもいいの、という本音の言葉は聞かなかったことにした。それだけシャルルの、『亡国機業』のデュノア社の技術が勝っていたということなのだ。

「それで、一夏のバカっぷりってのは？」

最後のひとつと鈴音が尋ねる。が、それを聞いた箒は何だ分からない

のかと笑みを浮かべるだけであつた。そうしながら、見れば分かると言わんばかりに視線をアリーナの中心部に向ける。

何やらプログラムを書いていたシャルルが、一息吐き行くぞと一夏を睨んでいるところであつた。望むところだと一夏も自身の機体プログラムからお目当てのものを見付け、ロック解除されているのを確認する。

先に動いたのはシャルル。主にダメージを受けていた箇所のパーツが消失し、その代わりに彼等に見覚えのあるパーツが装着されている。デゼールの機体ではなく、シャルルの機体。『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』の機体パーツがミキシングされていた。パッチワークミキシングにより通常時と同等かそれ以上の性能を引き出した機体は、追加された二機分のスラストターで一気に間合いを詰める。右手側に組み替えられたパイルバンカーと左手側の大口径ロングライフルで、目の前の相手を文字通り貫かんと振り上げた。

が、一夏もその時には動いている。『白式・金鳥』となつた機体は三機分の力を詰め込んだ特殊形態。機動、攻撃、防御。そのどれもに長けたそれは、パイロットの技術と気合次第で如何様にも化ける。

「そこっ！」

「つとおー！」

牽制も兼ねた射撃はバレルロールで躲された。そんなことは分かっている和本命のパイルバンカーを顔面に叩き込む。当たればシールドエネルギーを根こそぎ持っていくであろうし、追撃を加えれば頭が吹き飛ぶ。

勿論当たらない。翼を装甲展開した一夏はパイルバンカーとかち合つた時点で後ろに下がった。一瞬早ければ向こうが踏み込みカウンターになり、一瞬遅ければ装甲ごと貫かれる。そのギリギリのタイミングを成功させたのはすなわち。

「勘が、鋭過ぎる！」

「知らねえよー。自分で狙ってやってんじやないんだからな！」

一夏の返しに更なる文句を言いつつも、シャルルは左手のロングライフルの照準を合わせた。次はこれだ、と胴にそれを撃ち込んだが、

丁度その位置に構えられていた太刀により軌道を逸らされた。

へし折れた太刀を投げつけながら、一夏はこちらの番だと腕を振り上げる。させるか、と肩のブーメラン、左手のビームランチャーに射撃を叩き込み向こうの攻撃手段を潰した。

一夏は止まらない。それがどうしたと何も持っていない右手を振りかぶる。武器がなければ殴ればいいとばかりに右手をシャルルに打ち込もうとする。

そんなもの、とシャルルも右手を突き出した。パイルバンカー『盾殺し』、右手ごと砕いてやるとそれを起動させた。

激突音が響く。パーツが吹き飛ぶ音と共に、アリーナにそれらが降り注ぐ。それでも中央の二人は健在。最大級の一撃に砕かれた一夏など、いない。

いるのは。

「……何だよ、それ」

「金鳥専用、必殺技だ」

広げられた右手は異形なものとなっていた。吹き飛ばされた装甲は一部のみで、肝心の右手はシャルルの『盾殺し』を握りしめている。翼の装甲が右腕に纏われ、まるで新たな腕が生み出されたような、巨大な爪を持ったものがそこに発生していた。

金鳥、とは太陽に住まう三本足の鳥のことである。機動・攻撃・防御の三つの足を持つ、という意味合いが込められているのだ。そんなようなことを以前束に説明されたのだが、『白式・金鳥』の時はまた意味合いが違う。そう彼女は笑っていた。

「いざという時の、三本目の爪。今回は一纏めで、威力も倍だ！」

頭の悪い発言をしながら、一夏はシャルルの『盾殺し』を握りつぶす。右腕を失ったシャルルがよろけるのを逃さず、彼はもう一発とそれを振り上げた。

「……あーあ、負けちゃったか」

「ああ、俺の勝ちだ。だから——約束守れよ！」

巨大化した拳でシャルルを殴り飛ばし、満足そうに笑いながら吹き飛ばす彼女を見ながら、一夏はそう言って笑みを見せた。

No40 「さようなら、デゼール」

ISが解除されたシャルルは、やれやれと首を鳴らしながらその場に座り込んだ。今ここで捕縛されるならばもう何も出来ない。そんなことを言いながら、降参だとはかりに両手を上げる。

そんな彼女を、マドカは何を言っているのだという目で見た。そんなことはさせないとシャルルと一夏の間割って入った。

「ちよつと待つてくれよ」

「何だ？」

「俺は別にそんなことするつもりはないって」

「……本当か？」

そう尋ねてはいるが、彼女は一向に退く気配がない。恐らくどのような返事をしようとも納得しないのだろう。そう判断した一夏はさでどうするかと首を捻る。

そんな彼の下に、観客をしていた箒達がやってきた。戦闘も終わったからもういいだろうと判断したらしい。ついでに、一夏の先程の言葉を援護するようにマドカに一言二言述べている。

「私は、元々お前達を信用していない」

「そうだろうな」

マドカの言葉に箒はウンウンと頷く。いやそこで納得するんじゃない、と鈴音が彼女にツツコミを入れた。が、そう言いつつも、彼女自身表情は凡そ箒と同意見であることが覗えた。残りの面々も大体同じである。

「だが、それでもこちらとしては信用してもらおうしかない」

「そうですね。わたくし達に出来ることはそれだけですもの」

「証拠を見せろつつかって無理なものね」

ふん、とマドカは鼻を鳴らす。そんなことは分かっているとばかりに目を細めると、視線を一夏達から後ろに向けた。シャル、と座り込んでいる彼女に声を掛け、どうするのかと問い掛ける。これで退散すると言ったのならば全力で彼女を抱えて逃げる。そう考えているのがはつきりと分かった。

「マドカ」

「何だ」

「私は負けたよ」

「だから向こうのされるがままになる。と、そう言いたいのか？」

「戻る場所はもうないもの。機体の補給も修理も出来ない状態で逃げても、待っているのは破滅だけだ」

マドカはそれに答えない。ただじつと彼女を見詰め、そして静かに溜息を吐くのみである。好きにしろ、と呟くと、マドカはほんの少しだけ横にずれた。どうやらそれが彼女の中の妥協点らしい。

「さて、『しののの』の皆さん。負けた私をどうするの？」

シャルルの表情は変わらない。悲しむでもなく、悔しがるでもなく。苦笑するような笑みを浮かべて、あるがままを受け入れようとしているような、諦めているようなそんな顔のままである。

一方の一夏はその言葉を聞いて何を言っただと眉を顰めた。そもそも『しののの』なんか関係がないと言い放った。

「俺は言っただぞ。俺が勝ったら——」

「待て一夏」

びしりと指を突きつけて宣言しようとした一夏を、箒が止める。結果としてとてもマヌケな格好になってしまった彼であったが、別段そのことを誰も指摘せず、ただただ彼女の次の言葉を待つばかりの状況となっている。傍から見ると一夏はとてつもなく恥ずかしかった。

「何だよ箒。俺今から」

「それだ一夏。お前は、盛大な勘違いをしている」

「勘違い？」

何かあったか、と彼は首を傾げた。別段間違えているものは何も無いはずなのだが。少なくとも彼の中ではそう確信を持っていたが、しかし向こうも自信満々。ならば聞いてやろうではないかと一夏は彼女に続きを促した。

うむ、と頷いた箒はシャルルに視線を向け、そして小さく笑うと再度その目を一夏に戻す。

「お前とデュノアは、今から友人になるのか？」
「へ？」

言っている意味がよく分からない、と一夏は首を傾げた。そして彼女の横ではセシリアと簪、ラウラが言葉の意味を理解し思わず吹き出す。そういうことかと苦笑する。

「分からないのならばもう一度問うぞ一夏。お前は先程の宣言通りならば、これから友人になろうとしているな？」

「ん？ あ、ああ、そうだな」

「それを踏まえて考えろ。お前は、デュノアと、今から、友人になるのか？」

「そりやそうだろ。俺が勝ったらシャルルと友達に——ん？ いやちよつと待て」

そこまですを口にして、一夏も何かが引つかかったらしい。怪訝な表情を浮かべ、何かを考えるように視線を彷徨わせる。

そうした行動を暫し続け、ああそういうことかと手を叩いた。

「シャルル！」

「……何？」

「俺、お前ととつくに友達じゃねえか！」

「は？ ……へ？」

「成程そういうことか。確かにもう友達なのに勝ったから友達になれはおかしいよな」

「いやちよつと一夏。一人で納得してないで。というかぼ、私が一夏と友達だったのは作戦上の——」

「俺は」

シャルルの言葉を途中で止める。どこか間抜けな空気を醸し出していた先程までとは違い、彼の表情にふざけたものは見当たらなかった。

「俺は、お前と友達だ。お前がどう思っているように、俺は、友達だと思ってる」

「——だから、何？」

「決まってるんだろ」

そう言いながら一夏は笑った。ISを解除したその姿で、右手を彼女の目の前に差し出して、笑った。それが当たり前だと、当然だと言わんばかりに笑った。

勝負も終わったんだから。そんなことを続け、彼は彼女の手を取った。

「遊ぼうぜ」

男女混合総勢九名。内訳は、一夏、箒、鈴音、セシリア、簪、本音、ラウラ、そしてシャルルと。

「……何で私がお前達の遊びに付き合わんといかん！」

「別にいいじゃねえか。シャルルもいるし」

護衛するんだろ、と一夏に言われては彼女——マドカも黙らざるを得ない。結果として、どうせ一緒に行動するなら遊ぼうぜ、という言葉にまんまと乗せられてしまったのだ。

そんなわけで一行は色々遊べるからと言う理由で駅前のデパートへ向かう。女性陣の羨しい買い物、一夏は甘んじて受け入れる態勢を見せた。

最初は服でも買おう、という話であった。が、マドカが乗り気ではないこととシャルルが男装を解いていない為に流れた。

「まあ、私もそこまで乗り気ではないしな」

「じゃあ何で提案した」

一夏の言葉に箒は知らんと返す。まあいつものことだと流した他の面々は、ではどうしようかと案内板を眺めた。服以外の買い物ではどうだ。そんな誰かの言葉でとりあえずウインドウショッピングに移行する。何か気に入ったものでもあれば、と騒がしい一行は広い建物内を歩いて回った。

そうして見付けたのはちょっとした小物屋。どうせならばお揃いでも買おうか、という本音の提案で、一夏とシャルル、マドカを除いた面々がああでもないこうでもないという店内を見て回る。

「で、これか」

「そ。これなら一夏がつけててもいいんじゃない？」

ふふん、と笑う鈴音の左手にはブレスレットがついている。革と布で出来たそれは、シックな色合いで男でも特に違和感はないであろうことが覗えた。

ふうん、と一夏はそれを左手につける。そうしながら、どこか難しい顔をしている二人に目を向けた。

「つけないのか？」

「……いいの、かな」

「逆に何で駄目だと思ったんだよ」

そう言って笑う一夏の表情に裏は全くない。それを見たシャルルはどこか諦めたように苦笑し、しかし手に持ったまま動きを止めていた。

そんな彼女を見て、マドカはその頬を突く。何するんだよ、と膨れるシャルルを横目に、マドカはなんてことのないようにそのブレスレットを右手につけた。

「この連中のことを一々にしてはキリがない」

「いやまあ、そうなんだけど……マドカは、いいの？」

「奴らと同じ方にはつけん」

せめてもの抵抗らしい。そんな彼女を見たシャルルは吹き出し、それなら自分も、と右手にそれをはめる。二人でお揃いだね、と笑うシャルルを見て、マドカはそうだなと薄く笑った。

さてでは次だ、と一夏の勢い良く宣言したノープランにより、最終的にゲームセンターに辿り着いた。とりあえずやれるゲームを片っ端から始めていく彼と、それに対抗する筈。そしてそんな二人を追い掛ける形となった他の面々。

そんな構図を見ながら、シャルルはまったくもうと口角を上げた。

「みんな、楽しそうだね」

「……そうだな」

マドカはそう言って彼女を見る。自身の隠し事を話したはずなのに、何故かこれまでと同じ距離を保とうとしている。そんなシャルル

を見て、マドカは少しだけ不安になった。このまま彼女は、自分の隣でもなく、奴らの輪の中でもない何処かに行ってしまうのではないかと思ってしまうのだ。

「シャル」

「何？」

「お前は——」

そこから、何を言おうというのだ。紡ぐはずの言葉が出てこず、マドカは苛立たしげに顔を顰めた。何でもないと吐き捨てるように言う、視線を彼女から騒いでいるであろう連中に移動させる。

「ん？」

「どうしたの？……一夏達、何か女の人と話してるね」

喧嘩や事件では無さそうだというのは雰囲気に分かる。が、談笑しているわけではないのも一目瞭然であった。女性は何やらぐいぐいと一行に迫っているし、一夏達は頬をかきつつ逃げる素振りを見せていない。

仕方ない、とシャルルはそこへと足を動かした。マドカもそれに続き、一体どうしたと声を掛ける。

そんな二人を見て女性は顔を輝かせた。自分で交渉してください、と箒はそんな女性を一刀両断する。交渉、というキーワードを耳にしたシャルルは、ああまた何かやらかすのかと苦笑した。そんな『分かっている』親友の態度を見て、先程の不安は杞憂だったのかもしれないとマドカは少しだけ安堵する。

「それで、私達と何を交渉する気だ？」

「ん？ ああ、まあ詳しいことはこっちの人から聞いてくれればいいけど。早い話が」

アルバイトだな。そう言って一夏は笑い、残りの面々は肩を竦めた。

「何だよ」

「貴様は、遊ぼうと誘ったはずだな」

「そうだな」

「……なぜ、こんな場所で働かなければいかん」

「お前さつき何で遊ばないといけないんだとか文句言つてたじゃねえか」

「労働ならいいという意味じゃない！」

「……というかこちらを向け。そんなことを言いながら、マドカは一夏の首を掴んでこちらへと動かした。グキ、とあまり洒落にならない音が聞こえた気がしたが、当の本人が痛えと騒ぐだけで別段何も無さそうなので問題ないらしい。」

さて、そうして彼女の方へと顔を向けさせられた一夏はというと。

「……ぷ、くくくく、ははははは！」

「ぶち殺すぞ」

「いや違うんだって！ 似合ってるし可愛いんだけどさ……千冬姉に似てるせいで千冬姉のメイド服姿想像して——ははははははっ！」

「ぶち殺されるぞ」

何だこいつ、という目でマドカは一夏を見る。自分はこんな奴を憎んでいたのか、と無性に馬鹿らしい気持ちになった。そうしながら視線をもう一人へと移す。

メイド服の胸元がパツパツになっている箒がそこにいた。サイズ合っていないぞ、と苦々しい顔を浮かべているのは普段の彼女らしからぬものであったが、流石に今の姿は恥ずかしいらしい。

「まあ、あれはあれでいいんじゃないかな」

「……シャルはシャルで……それでいいのか？」

「何が？」

執事服である。確かに男装していたのだから間違つてはいないのだが、正体を明かしたにも拘らずそれでいいのだろうかとかマドカは思ったのだ。とりあえず本人は問題無さそうなのでよしとしようと思息を吐いた。

「……ねえ、箒」

「どうした鈴?」

「一発殴っていい?」

「何故だ?」

「世の中の! 不公平を! 代弁して!」

「鈴と箒じゃストーンとボボーンだからな」

「死ね一夏あ!」

臨時アルバイト最後の一人である鈴音の一撃で一夏は地面と平行に飛んだ。被害の少ない壁にぶち当たったのは彼女なりの理性の賜物だろう。

はあ、とマドカは溜息を吐く。何故自分はこんな連中とこんなことをやっているのかと自問自答する。『亡国機業』の一員である自分が、『しののの』の一員であるこいつらと仲良くしているのはどうしてなのかと問い掛ける。

知れたことだ。ここにシャルロットがいるからに他ならない。そうでなければ、こんな連中と。

「マドカ」

「ん?」

「良かった。安心したよ」

「どうしたいきなり」

「何だかんだで私が一人で楽しんでると思ってたけど、マドカも案外楽しんでたんだなって」

「私が?」

「うん。今完全にオフの時の顔してたから」

思わず自分の顔を触る。鏡を覗き込み、思った以上に緩んでいる頬を見て顔を引き攣らせた。いや違う、これはシャルが楽しそうだからそれにつられただけだ。そんなことを眩き、自分に言い聞かせた。

「さて、じゃあちよつとだけ働きましょうか」

「……ああ、仕方なくな」

向こうでは既に一夏達三人が行動を始めている。慣れているのか、鈴音は手際よく注文をさばき、一夏と箒がそれを参考にそれっぽい動きをしながら誤魔化しているのが見えた。

負けてられないね、とシャルルは笑う。対抗するな、とマドカは苦笑した。

突発的な人手不足と本社の視察が重なったというこの店の危機は、こうしてたまたま目を付けた男女により、乗り切ることが出来たのである。店長は自分の目に狂いはなかったとご満悦であった。いつそこのままここで働かないか、ずずいと食い気味にそんな提案までした。

それも悪くないか、とシャルルは一瞬だけ考えた。どうせもう『亡国機業』とはおさらばする身だ。デュノア社に戻ることもないだろう。ならばいつそ、名前でも変えてひっそりと暮らすのも。

「——っ!？」

銃声が響いた。何だ、と視線を向けると、随分と古風な格好の強盗が店に押し入るところであった。何だあれば、とマドカもその強盗を見て呆れたように肩を竦めている。

「シャルル」

「どうしたの、一夏」

「……いや、どうしようかと思って」

あれ、と強盗を指差す。古風な格好をした三人組は一応銃で武装している。店内にいる一般人の客は間違いないと怯えることしか出来ないだろう。店員であつてもそれは同様である。となれば、一般人ではない者が対処をするしかない。

「……そうだね。ぼ、私なら何ら問題なく始末できるけど」

「いや、殺しは駄目だろ」

「そう？ あんなのの一人や二人、いなくなったところで」

そこまで述べて、シャルルは一度言葉を止めた。はあ、と大きく溜息を吐くと、ああこれは駄目だと頭を振る。

隣のマドカを見た。甘つちよろいなとぼやいている彼女を見て、ほんの少しだけ安心した。

「やっぱり、喫茶店の店員はきついかな」

「ん？」

「こつちの話だよ。それで、どうするの?」

「ああ、そうそう。それなんだけどき」

ちらりと視線を強盗の方に向けた。ん、とシャルルも視線をそちらに向け。

「よく、つと」

「ほ、本音……殺しちや、駄目だよ？」

「大丈夫、両足の関節外しただけだから」

かんちゃんの手首を邪魔した奴は死ぬべきなのだ。そんなことを言いながら客となっていた本音とおまけの簪が強盗を一人始末していた。足がラグドールのようになっているが、一応死んではないらしい。

「随分と安物の銃ですわね。照準の調整も碌に出来ていない。こんなものでよく人を撃とうと思ったものですわ」

「撃つてるがな、お前は」

その拍子に落とした銃を拾ったセシリアが残りの強盗の銃を撃ち落としていた。少々呆れ気味に倒れた強盗を捕縛しているラウラが相対的に一番普通に見える。

あつという間にリーダー格一人になった強盗は、こうなったらと腹に抱えていた爆弾を披露したが、その時には既に間合いに踏み込んでいた箒のモップによって一刀のもとに切り捨てられた。

「俺達の出番は、なきそうだな」

「……そうだね」

真面目に考えるのが馬鹿らしくなるな。そんなことを思ったシャルルは、しかしそれで己の心が随分と軽くなっていたことに気付いた。まあつまりそういうことなのだと結論付けた。

マドカ、と隣の親友に声を掛ける。どうした、と彼女はなんてことないように返事をした。

「私、好きに生きるよ」

「今更だな」

「あはははっ、うん、そうだね。今更だ」

口ではそう言っていたけれど、はつきりと決めたのは今この場だ。そんな言葉は、声にせず心に留めた。どうせこの親友は分かっている

るだろうから。

好きに生きる、と決めた。ならば、切り捨てなければならぬものがある。準備を済ませ、一夏達と別れ、マドカと共に空港まで向かった。彼女は最後までついてこようとしたが、そういうわけにもいかないだらうとシャルルはその申し出を断った。

「だが、シャル」

「大丈夫だよ。それに、マドカもこれ以上無理するとマズいでしょう」
ぐ、とマドカの表情が歪む。確かにこれ以上の『わがまま』を行うと彼女にとつてまずいことになる。首を一撫でし、苦々しい顔を浮かべたまま、仕方なくといった風にマドカは頷いた。

ありがとう、とそんなマドカにシャルルはお礼を述べる。マドカが親友でよかった、と微笑む。この瞬間がかけがえのないものだど噛み締めるように、ゆっくりと。

「シャル」

「大丈夫だよ」

そう言つてシャルルは笑った。チケットをひらひらとさせながら、ちよつとクソ親父に絶縁状を叩き付けてくるだけだからと軽い調子でそう述べた。

「ちやんと、戻ってくるよ」

「……約束だぞ」

「うん、約束だ」

小指を立てる。マドカはそれに自身の小指を絡め、子供がやるように約束のわらべ唄を口にする。嘘吐いたら針千本飲ます、と。

それじゃあ行つてくるよとシャルルは空港の奥へと消えていった。それを見送っていたマドカは、その姿が見えなくなるとどこか泣きそうな顔で踵を返した。通信端末を取り出すと、どこかと連絡を繋ぐ。用事は一旦終わったので、戻ります。そう相手へと言葉を紡ぐ。

『そうかい。じゃあ、休暇は終わりかな?』

「……今のところは、と言ったら怒りますか?」

『怒るわけないだろう? 娘のちよつとした我儘くらい、父親は笑って受け流すものだよ』

「なら——」

『でも、デュノアに向かうのは許可しない』

ミシリ、と思わず端末を握る力が強くなる。叫びたくなるのを抑えながら、どうしてですかと静かに問い掛けた。

『僕は《亡国機業》の中でも下っ端だからね。デュノアのご機嫌を伺わなければならぬのだよ』

「……」

嘘を吐くな、と激昂しかけたが、何とか思い留まった。無言のまま、相手の話を続きを、あるいは折れて本当の理由を述べるのを待つ。

そんな彼女の態度が伝わったのか、向こうもちよつと冗談が過ぎたかなと苦笑したようであった。

『この際だ、デュノアの発言力を落としてやろうと思うのさ』

「それと、私が向かえないのに何の関係が」

『理由が欲しい』

デュノアに攻め込める理由が。そう言って向こうは笑った。その意味が分かるだろうと相手は笑った。

きっと向こうは離脱者を使って何かしらやるだろう。それを暴いて、失敗させる。出来ることならば、『しののの』辺りがやってくれば万々歳。

『まあ、向こうは精々死体の脳をプログラムに組み込むくらいしか出来ないだろうから、その程度なら問題なく処理出来るよね?』

「ふ、ぎ——っ!」

『マドカ、返事は?』

言葉が途中で止まった。頭はこれ以上ないほど沸騰している。親友がこれから死ぬこと前提の任務で、それもとどめを刺せと言われたのだ。そうならないほうがおかしい。

それでも、マドカはそれに否定を返せない。まだ、今のままでは相手に憎悪をぶつけることが出来ない。

「——は、い」

『うん、ありがとう。流石は僕の自慢の娘だ。反抗期真っ最中の千冬や一夏とは違うね』

それじゃあよろしく。その言葉とともに通信を終えた端末を、マドカは力の限り床に叩きつけた。

フランス。己の故郷に戻ってきたシャルルは、タクシーを使いデュノア社まで向かうところであった。メンテナンスをしてもらった己の機体の待機状態を撫でながら、彼女はこれからを考え、表情を固くする。

そんなシャルルに、タクシーの運転手は声を掛けた。随分と緊張していますね、と。

「……まあ、これから少し、父親と話し合いをするので」
苦笑しながら誤魔化すようにそう述べた。一応間違っではないから別にいいだろうとそんなことをついでに思った。

が、それを聞いた運転手は笑い出す。それはそれは、と何がおかしいのか肩を震わせる。

一体何がおかしいのか。そんなことを思い怪訝な表情を浮かべたシャルルは、しかし運転手が帽子とともに顔を剥がすのを見て目を見開いた。そこから出てきたのは、女性の顔。それも見覚えのある相手の、顔。

臨海学校で支援した相手。『ラブ・レイター』のパイロットの女性であった。

「なっ——」

「随分と腑抜けているのね、デゼール。社長がのんびりと貴女を待つわけないじゃない」

話し合いなど、もともと出来ない。そうやって彼女は笑った。それが何を意味するのか、そんなことは分かりきっているだろうと微笑んだ。

「社長は、裏切り者にもきちんと役割を与えてくれたわ。『二人目の男性操縦者は、帰郷の途中事故にあつて死亡。父であるデユノア氏は深い悲しみにおそわれた』。そういう筋書きの、メインを飾るの」

いつの間にか車は勝手に動いている。おあつらえ向きのように、目の前には迫りくる大型トラックが。

シャルルは舌打ちした。ああ、やはりあの父親はそういうことをやってくるのか。そんなことを思いながら、己のISを展開せんと手を動かした。この程度の衝撃ならば、シールドバリアで十分軽減が可能なはずだ。そう思い、機体を展開しようとした。

「——え？」

「忘れたの？ 私の機体は『ラブ・レイター』、ISの制御を奪うことなんて朝飯前よ」

動かない。機体の展開は出来ず、目の前の『ラブ・レイター』は機体を展開させ、タクシーと恐らくトラックのAI制御も乗っ取られ回避も出来ない。それどころか、車内から飛び出すことすらさせてくれない。

トラックはもう間もなくこの車に激突するであろう。生身である車体とぶつかればどうなるか、そんなことは火を見るよりも明らかだ。

「本当に腑抜け過ぎよ。あんな連中と関わったからこうなるの。もし次があるのなら、肝に銘じておきなさい」

「——がう。違う、後悔なんかしない。一夏達と、マドカと、もう一度会うんだ！ 私はこのまま、ここを、切り抜けるんだ！」

「勢いは認めてあげる。でも、無理よ」

ほら、と視界いっぱい広がるトラックを指差しながら、『ラブ・レイター』はクスクスと笑った。グシヤリとボンネットが潰れていくのを見ながら、口角を上げた。

「それじゃあ、さようなら、デゼール」

道路のど真ん中で起きた盛大な激突音と盛大な爆発は、近隣の住民が思わず外に飛び出すほどであったらしい。